

# 北海道続縄文文化の研究

鈴木 信



# 目 次

I 章 「続縄文」の視点 .....	1
1 節 「続縄文」の範囲 .....	1
1. 欧州新石器と縄文	
2. 「森林性新石器文化」の内容	
3. 北海道にとっての「森林性新石器文化」	
4. 北海道にとっての「縄文」	
2 節 本書の前提と内容 .....	4
1. 時間の区分	
2. 空間の区分	
3. 文化負荷の主体者	
4. 「続縄文」という呼称	
5. 本書「続縄文」研究の方向	
II 章 研究史と問題点 .....	7
1 節 「続縄文」の位置取り .....	7
1. 研究書における扱い	
2. 研究団体などの動向における扱い	
3. 研究領域における位置取り	
2 節 続縄文研究略史と問題点 .....	8
1. 山内清男にとっての「続縄文」	
2. 北海道に在住する研究者にとっての「続縄文」	
3. 近年の「続縄文」研究	
3 節 抽出された課題と加えられるべき視点 .....	12
1. 課題の枠組み	
2. 続縄文の「統一」について抽出された課題	
3. 続縄文の「一縄文」について加えられるべき視点－I 章より	
4. 加えられるべき視点－III 章より	
5. もう一つの視点－気候変動と中川モデル	
6. 分析される課題	
III 章 気候変動と続縄文 .....	17
1 節 気候変動 .....	17

1. 気候変動について	
2. 気候変動の代替指標	
3. 代替指標からみた変動傾向	
4. 各代替指標の関係	
<b>2節 北海道における気候変動と環境変化</b> .....	25
1. 気候変動の内容	
2. 北海道における海水準変動	
3. 珪藻・アルケノンからみた環境変化	
<b>3節 遺跡出土の遺存体からみた環境変化</b> .....	30
1. 遺存体の内容	
2. 貝化石	
3. 出土魚骨	
4. 樹木花粉化石	
5. 気候変動と環境指標との関係	
<b>IV章 分析の手法</b> .....	37
<b>1節 考古学的実体群の構造</b> .....	37
1. 考古学的実体とは	
2. 本論における考古学的実体	
3. 本論における属性	
<b>2節 型式の分類と同定</b> .....	40
1. 型式とその裏付け	
2. 検証的証拠	
3. 論理的証拠	
4. 分類と同定	
5. 型式分類—単相と複相	
6. 型式分類と機能・用途	
7. 型式組列と用途	
8. 型式同定—個体との関係	
<b>3節 考古学的実体群の系統論</b> .....	46
1. 系統と分類の関係	
2. 系統論	
3. 形の系統	
4. 人工物の系統とは	

<b>V章 時間軸の設定</b> .....	49
<b>1節 分析方法</b> .....	49
1. 対象範囲	
2. 分析項目	
3. 型式の命名について	
<b>2節 検証的証拠の好例—江別市対雁2遺跡</b> .....	50
1. 遺跡の形成	
2. 地層の堆積	
3. 放射性炭素年代による遺構の時期	
4. 遺構	
5. 遺物	
<b>3節 晩期後葉の編年</b> .....	59
1. 研究史抄と課題	
2. 対雁2遺跡基準資料の再検討	
3. 他遺跡との比較	
4. 各地域の並行関係と晩期後葉の型式設定	
<b>4節 続縄文前葉の編年</b> .....	65
1. 研究史抄と課題	
2. 「H37 丘珠式」基準資料の再検討	
3. 「H317 式」基準資料の再検討	
4. 「H37 栄町式」基準資料の再検討	
5. 多様な当該期の縄文原体・押捺方法	
6. 各型式の編年主要属性	
<b>5節 続縄文中葉の編年</b> .....	73
1. 研究史抄	
2. 江別太遺跡と K39 遺跡における基準資料の再検討	
3. 「江別太式」についての細分名の統合	
4. 後北 A 式・B 式について	
5. 後北 C <sub>1</sub> 式について	
6. 後北 A・B・C <sub>1</sub> 式と他型式の並行関係について	
7. 各型式の編年主要属性	
<b>6節 続縄文後葉の編年</b> .....	87
1. 後北 C <sub>2</sub> ・D 式についての研究史抄と課題	
2. 所謂北大式(円形・刺突文土器)についての研究史抄と課題	
3. 所謂北大式(円形・刺突文土器)とオホーツク式との属性交換	
4. 後北 C <sub>2</sub> ・D 式、円形・刺突文土器群の編年主要属性と消長	

VI章 基本的実体の変質・変形 .....	109
1節 属性変化 .....	109
1. 属性の構造	
2. 情報再生における属性の授受	
3. 表VI-2・3・5~7の表現・体裁について	
2節 遺物の属性変化 .....	110
1. 土器    a: 文様要素    b: 底部成形    c: 疑口縁の傾き・接合面	
d: 文様割付    e: 縄文原体の押捺方法    f: 最終器面調整	
g: 各要素の傾向    h: 3属性と複合・単位属性と土器型式の関係	
2. 石器    a: 石鏃の形態    b: 石槍または石銛の形態	
c: 基部両面調整ナイフ状石器の形態    d: 小型円形搔器の形態	
e: 魚形石器    f: 剥片石器の石質    g: 各要素の傾向	
3節 遺構の属性変化 .....	121
1. 住居    a: 住居平面形    b: 舌状張出し    c: 柱組構造    d: 炉の形態	
e: 規模・長軸長と短軸長    f: 各要素の傾向	
2. 墓制    a: 柱穴様土坑    b: 積石    c: 主体部の構造・木槨痕跡    d: 埋甕葬	
e: 埋葬姿勢    f: 坑底平面形    g: 袋状土坑    h: 置き礫	
i: 各要素の傾向	
4節 属性変化の傾向 .....	144
1. 属性転移・属性合成からみた3属性の構造	
2. 属性変容のかたち	
3. 基本的実体における変容の原因	
5節 基本的実体からみた文化変容 .....	147
1. 属性変異の内容	
a: 属性転移・合成①    b: 属性転移②    c: 属性転移・合成③	
d: 属性転移④    e: 属性転移⑤	
2. 基本的実体と“文化”変容の関係	
3. “文化”変容の様相	
4. “文化”の系統問題について	
VII章 “文化”変容の背景 .....	151
1節 考古学における環境と生業 .....	151
1. 自然環境とは	
2. 生業の内容	
2節 晩期後葉のサケ・マス漁 .....	152
1. 対雁2遺跡における土器集中と焼土の動物遺存体	

2.	対雁2遺跡における遺存体から見た漁労	
3.	可食処理・調理の規模	
4.	同位体分析からみたサケ・マス類の利用	
5.	晩期後葉～続縄文前葉における石狩低地帯のサケ・マス漁	
6.	サケ・マス利用の評価にみられる相違	
<b>3節</b>	<b>続縄文の生業</b> .....	158
1.	狩猟・漁撈・飼育	
2.	植物遺存体・採集・栽培	
3.	食物摂取から見た生業における北海道と東北地方の相違	
4.	生業組織の単位からみた特化	
5.	生業の系統、「中川モデル」との関係	
6.	生業に関わる行動様式とその空間	
<b>Ⅷ章</b>	<b>交換と“文化”変容</b> .....	169
<b>1節</b>	<b>考古学における交換とは</b> .....	169
1.	交換の3方式	
2.	域内交易・渡海交易の構造・機能	
<b>2節</b>	<b>域内交易・渡海交易の様相</b> .....	170
1.	遺物に現れた広域交換財	
2.	ガラス小玉に関する新見解	
3.	渡海交易の内容	
4.	渡海交易と文化変容	
<b>3節</b>	<b>鉄器化の過程</b> .....	176
1.	石器から鉄器へ	
	a: 鉄器組成・石器組成の変化    b: 石器の廃用と石材供給の変化	
2.	石器自体の変化からみた廃用の過程	
	a: 砥石    b: 石斧・鉄斧    c: まとめ	
3.	土器穿孔の変化からみた石器廃用の過程	
	a: 穿孔研究の前提    b: 穿孔の分類・計測    c: 遺跡間比較	
4.	石器と鉄利器の関係	
<b>4節</b>	<b>鉄器の入手手段と道央部の優位性</b> .....	185
1.	交換関係からみた道央部の優位性とは	
2.	交換手段としての準構造船	
	a: 出土資料    b: アイヌ絵に描かれた板綴船	
	c: 近世・近代文献史料に現れた板綴船	
	d: 船体構造と積載量の復元    e: 海路について	

<b>IX章</b>	<b>“文化”変容としての墓制</b> .....	<b>195</b>
<b>1節</b>	<b>墓制の属性分析</b> .....	<b>195</b>
	1. 分析対象	
	2. 分析手法	
	3. 対象資料の条件	
<b>2節</b>	<b>分析結果</b> .....	<b>204</b>
	1. 遺構について	
	2. 副葬品について	
	3. 交換財としての副葬品	
<b>3節</b>	<b>階層諸説の再検討</b> .....	<b>216</b>
	1. 「多副葬墓」について	
	2. 財と「商品」について	
	3. 階層差と富について	
	4. 多頭的階層は存在するか	
	5. 合葬・追葬・改葬からみた階層の持続性	
	a : 合葬・追葬・改葬とは    b : 合葬例の検討	
	c : 追葬例の検討    d : 改葬例の検討、	
	e : 階層の持続性と“文化”変容の速度	
<b>X章</b>	<b>終章</b> .....	<b>223</b>
<b>1節</b>	<b>本論の総括</b> .....	<b>223</b>
	1. 各章の総括	
	2. 総括	
<b>2節</b>	<b>今後の展開</b> .....	<b>229</b>
	1. 生じた課題	
	2. 続縄文以降に係わる課題	
	a : 擦文文化の系統    b : 「仔熊飼育型熊送り」の系統	



# I 章

「続縄文」の視点



# I 章 「続縄文」の視点

## 1 節 「続縄文」の範囲

「続縄文文化という考え方は受け身な考え方である。(後略)」(藤本 1988)、「続縄文文化の(傍点部分筆者補)概念の空洞性・暫定性は今なお解消されていない。」(高瀬 2010)。縄文の一部であり・地域史であり、一時代史として扱われない現状の指摘である。現状の背景には山内清男の言説があり、それは V.Childe が唱えた欧州新石器との比較から導かれていた(Ⅲ章 2 節参照)。そもそも「続縄文」は、接頭辞の「続」と語根の「縄文」の合成語である。語根である「縄文」の概念・位置付けを再確認することが端緒である。

### 1 欧州新石器と縄文

J.Lubbock が提唱した当初の「新石器時代(原文では Neolithic period、Neolithic stone age、Later stone age、Polished stone age)」(Lubbock 1865)とは現生動物の存在・磨製石器の出現によって区分された古生物学的・技術史的段階区分であった。その後、V.Childe が「The Dawn of European Civilization」(Childe 1925)と「Man makes himself」(G. チャイルド 1951/原典は 1936)において、「新石器革命(原文では First revolution、Neolithic revolution):穀物栽培・牧畜による食糧生産とその余剰物の蓄積により経済・社会に与えた急激な変革」を提唱した。Childe により、新石器は技術史的段階区分から社会経済史的段階区分に大きく変容した。

いっぽうで、G.Daniel は Childe を「限定的伝播論者(原文では modified diffusionist、hyper diffusionists)従来からの超伝播論者に対置」と名付け、新大陸では「革命」が孤立的に起こることから近東からの一元的伝播について修正の必要を説いた(Daniel 1963、G. ダニエル・C. レンフリーュー 2001)。また、C. Renfrew は <sup>14</sup>C 年代測定に基づいて伝播論的文化編年体系と伝播論的解釈に替わり自発的発展を提唱し(C. レンフリーュー 1979/原典は 1973)、J. G. D. Clark は生態学的視点に基づく中石器研究によって「(旧石器と新石器の)断絶」や「(新石器の)革命」はないことを指摘した(J. G. D. クラーク 1989/原典は 1980)。R.Dennll は中石器を「初期の食糧生産:ハシバミの管理、牛・豚の家畜化」と定義し、8 千年前以降に小麦類の栽培・家畜種羊の飼育という「新資源」が「波状吸収」されて拡散したと考え、クラークと同様に旧石器と新石器の区別しすぎは有害であると述べる(R. デネル 1995/原典は 1983)。

現在では、農耕・牧畜の西方拡散・それによる欧州大陸の変化は以下と提唱されている。中石器文化伝統のもとに自発的・選択的・継続的に行われたという「文化変容」説(R. デネル 1995、J. ダイヤモンド 2000/原典は 1997)、Childe と同じく移民による「伝播」説(P. ベルウッド 2008/原典は 2005)、農耕民の短距離移動が繰り返されることにより農耕が拡散したという「波動」説(C. レンフリーュー 1993/原典は 1987)。

負荷者と技術の関係でまとめると、「文化変容」説は現地民の技術受容、「伝播」説は移住民の技術随伴、「波動」説は逐次的現地民化する移住民の技術随伴で「伝播」説の改良型といえる。大まかにいうと、現代欧州における農耕・牧畜の西方拡散について研究の方向は、自発説や波動説を含む改良型伝播説においても、Childe の伝播論的「革命」、つまりは段階的発展過程「未開→文明」、斉一的発展の克服である。

日本においては山内が、縄文には農業がないこと、弥生には農業があつて青銅器・鉄器もあること、から、両者は欧州新石器とは異なって変則的であり、縄文→弥生への移行は、獲得経済→それに生産経済(水稻栽培)が加わると考えた(山内 1932a)。そして、縄文を「大陸との交渉が著明でなく、農業の痕跡のない期間」、弥生を「大陸との著明な交渉をもち、農業の一般化した期間」「農業と共に狩猟、採集なども行われた」とも考えた(山内 1932b)。山内は、縄文の始まりについて「土器を持った移住者」を仮想し(1932a)、弥生の始まりについて「朝鮮半島を経た新しい移住者」と述べている(山内 1964a)。山内は移民による「伝播」説をとっている。

1934 年刊「新石器時代序説」の脚注によると山内は「The Dawn of European Civilization」(Childe1925)を読んでおり(山内 1969)、角田文衛によると山内は昭和 3(1928)年にはこの書を手に入っていた(角田 1974)。くわえて、山内は E.Hahn の農工具が示す文化の発展段階(Hahn1909)を援用して、縄文を「sammeln wirtschaft:採集経済」、弥生を「hackbau:耨耕」の経済形態(山内 1932b)、のちに縄文の負荷者を「höhere jäger:高級狩猟民」、弥生の負荷者を「hackbauer:耨耕民」と推定した(山内 1937)。山内の縄文・弥生には Childe の社会経済史的段階区分としての新石器が基底にあった。

山内以後には発展史観への異議も唱えられた(小林達雄 1985、西田正規 1986)。また、前述した J.G.D. クラークは『中石器時代』の「日本語版への序」において、縄文が新石器として欧州に紹介されているが、中石器として紹介されていれば誤解も少なかったであろうと述べ、欧州の呼称を当てはめる必要はなく縄文と言う個性的な名称が使われ続けられることを願っていた(J.G.D. クラーク 1989)。

近年、今村啓爾は以下に提言した。縄文は「日本列島の中でほぼ孤立的、自立的に変化した」文化で、従来の世界先史文化の「旧石器時代」「新石器時代」という枠組みを揺るがし、「狩猟採集」「農耕牧畜」といった概念にも再検討を迫るもので、その経済は「(前略)狩猟採集や農耕牧畜という世界史の大区分を考え直し、人類の発展の経路を複線的にとらえることを要求している(後略)」(今村 2014)。そして、森林環境に適応した食料生産を行う縄文を「森林性新石器文化」と呼び、西アジアの「草原性新石器文化」と区別した(今村 1999)。

中石器であるか新石器であるかの区別は食料生産形態の違いではなく、食糧生産の結果によると考えられる。「草原性新石器文化」の場合は、「新資源」の効果により人口増加・社会の複雑化(重階層化、専門の出現)が生み出される。ここが中石器との違いである。「森林性新石器文化」は木本による食糧生産であることに力点を置いた視点で、今村の他には次節で紹介する「狩猟・栽培民」「初期農耕段階」もこの食料生産形態を重視した意見である。これらは、「森林性資源」は「草原性新石器文化」の「新資源」のような変化を引き起こさないが、縄文が中石器的であるとは言い難い複相的な状態に対する言説である。

## 2 「森林性新石器文化」の内容

今村が掲げた森林性新石器文化を構成する基本的要素には以下がある。釣針・銚・網を用いる漁労、弓矢・陥穴を用いる狩猟、犬・猪の飼育、アサ・エゴマ・ウルシ・マメ類・堅果類の管理と栽培(特に、クリ・トチ)と貯蔵、土器の使用、貝塚・竪穴式住居による定住的集落、土偶・石棒・盛土・周堤墓・環状列石などの宗教具・宗教構造物、である。これらは縄文早期には既にそろっており、草創期に出現したものもある。今村の言う狩猟採集・栽培の複合が縄文の当初から備わるので、その「複相性」は縄文の基本的性格と考えられる。

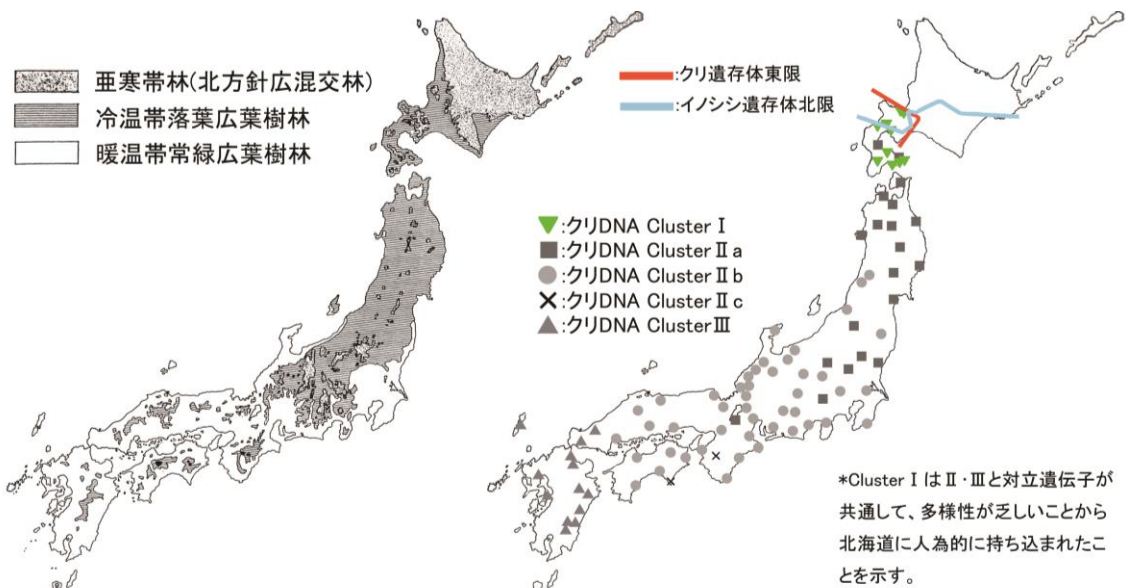


図 I-1 森林植生帯(左) 山中 1979、クリ遺伝子の地域群(右)鈴木 2016 引用加筆・イノシシ分布(右) 鈴木 2007 引用加筆

食糧生産の「複相性」について以下の提言もある。小畑弘己は多様で高度の植物管理・栽培を重視して「狩猟・栽培民」と再定義している(小畑 2016)。また、縄文中期以降の植物管理・栽培について園耕という初期農耕段階に位置づける見解がある(中山誠二 2017)。定住化に関しても以下の提言がある。中緯度では温帯森林環境の拡大により食料資源の季節変動が顕著になり、遊動から定住へという生計戦略「定住革命」が採用された(西田 1986)。ただし、集落の持続性・定住度・定住形態・その要因には様々あり、単線的变化とは言えない状況も想定されている(西田 1989、渡辺仁 1990、羽生淳子 2009、雨宮瑞生 2009)。

### 3 北海道にとっての「森林性新石器文化」

今村は「森林性新石器文化」を温帯森林に対する、西田も「定住化」を中緯度温帯森林に対する適応と考えた(今村 2014、西田 1986)。その形成は晩氷期の温暖期(15,000～13,000calBP; 工藤雄一郎の LG Warm)以降である(工藤 2012)。現在の北海道は、十勝平野を除く日高山脈以東が亜寒帯林、十勝平野と石狩低地帯以西が冷温帯林、に属するので(図 I-1 左)、後者が両者説の範囲に合致する。

北海道における晩氷期～後氷期の樹木花粉組成の変化をみると、石狩低地帯では10,000yrBP以降にカバノキ属・クルミ属、8,000yrBP以降にコナラ属コナラ亜属が高率に出現する。富良野盆地・剣淵

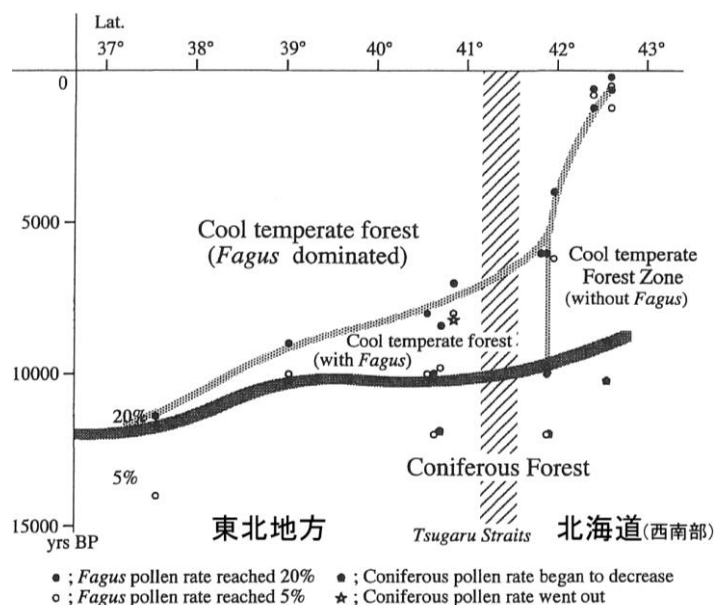


図 I-2 北海道西南部の植生変遷 滝谷ほか 1997 引用加筆

盆地ではコナラ属コナラ亜属がやや先出し、クルミ属が後発する(小野・五十嵐 1991)。渡島半島では 10,000yrBP を境にして冷温帯林に移行する: 図 I-2(滝谷・萩原 1997)。

以上のことから北海道における「森林性新石器文化」は、後氷期の温暖期(約 11,500～8,400calBP/約 10,000～7,500<sup>14</sup>CBP:工藤の PG Warm-1)以降に形成されたと考えられる。

今村のほとんどの基本的要素と西田の定住化は、十勝平野を除いた日高山脈より東側にも及んでいるが、植物の栽培・動物の飼育についてはいくつかの例外がある。

クリ種実出土例は、石狩低地帯よりも南西側では前期後葉(円筒下層 c 式期)以降にあり、石狩低地帯では後期中葉(鮎澗式期)以降に少数でてくる(山田・柴内 1997)。トチ種実出土例は石狩低地帯よりも南西側では中期中葉(見晴町～中の平<sup>なかたい</sup>2 式)以降にあり、石狩低地帯で確認されるのは後期中葉(手稲式期)以降に少数ある(矢野 1989)。そして、ウルシ栽培は全道で確認されていない。

また、イノシシ遺存体の出土例は後期前葉(涌元式期)以降に多数確認され、北海道の南半分の太平洋側地域に偏る(鈴木 2007、福井 2010)(図 I-1 右)。いっぽうで、海獣猟はほぼ全域で盛んである。

#### 4 北海道にとっての「縄文」

本州の縄文と北海道の縄文が異なる点は以下である。北海道全域では「森林性新石器文化」の自然環境が整う時期が本州に比べて 5,000～3,000 年遅くなり、石狩低地帯よりも南西側の渡島半島を中心とする地域ではトチ管理利用には遅滞はないものの、クリ栽培・イノシシ養育は遅れ出現する。石狩低地帯ではクリ栽培・イノシシ養育はさらに遅れて出現する。日高山脈以東ではトチ管理利用・クリ栽培はなく、イノシシ養育は太平洋側の一部に石狩低地帯とほぼ同じところにみられる。

本州の縄文は欧州新石器文化とは異なる特異な「森林性新石器文化」であった。そして、北海道の縄文は本州の縄文とはまた異なって要素の欠落があり、本州の縄文要素を受容した場合には遅滞がみられ少例となる。「続縄文」の語根となる「縄文」において、北海道のそれは本州の縄文と異質である。今村の言説を当てはめれば、石狩低地帯以西については「変則的森林性新石器文化」、日高山脈以東については「逸脱的森林性新石器文化」ということになる。あるいは全く新たな用語に置き換えが必要かもしれない。

## 2 節 本書の前提と内容

### 1 時間の区分

北海道の時代区分は、縄文式以降の縄文が付く土器のある時期は「続縄文時代」、刷毛目が付く土器のある時期は「擦文時代」といわれる。土器の種類によって区分された土器製作技法・組成の変化は細かい時間の推移を表す。だが、時代変化のどの仕組みに依拠しているのかは未解明であり、両者が 1:1 対応の因果関係であるかも不明である。従って、前掲区分は用いず、「○○式期・○○土器群期」を時間区分として使用する。

また、続縄文式を弥生時代に並行する「前半:後北 C<sub>1</sub>式まで」、古墳時代に並行する「後半:後北 C<sub>2</sub>・D 式以降」に二分する案がある。「時代」の並行を根拠に土器型式を区分するのは倒錯である。続縄文期は、道南部・道中部・道東北部に固有の型式が並立する時期を「前

表 I-1 時期区分

東北北部		道南	道央	道東・道北	西暦(C)	
弥生	前期	砂沢式	尾白内Ⅱ群	H37丘珠式	フシコタン下層式 栄浦一・二群	前5c前葉 ～前4c中葉
	中期	二枚橋式	青苗B(古)、兜野式	H317式	興津式 元町2式	(前4c後葉) ～前2c前葉
		宇鉄Ⅱ式	青苗B(新)、下添山式 西桔梗B <sub>2</sub>	(アヨロ1式) アヨロ2a式	H37栄町式 (帯縄文を含む群) (中ノ島第3群)	前2c中～後葉
	後期	田舎館2・3	南川Ⅲ	アヨロ2b式	江別太1式 江別太2式	前1c前葉
		念仏間式	南川Ⅳ	アヨロ3ab式	後北A式 後北B式	(前1c中葉 ～1c前葉)
飛鳥	家ノ前式(九艘泊) (小牧野・烏間) 赤穴式	聖山KⅡ群	後北C <sub>1</sub> 式	下田ノ沢Ⅱ1式 下田ノ沢Ⅱ2式	宇津内ⅡbⅡ式 (2c前葉～後葉)	
古墳	前期	赤穴式/塩釜式	後北C <sub>2</sub> ・D式(古・中)		3c前葉～4c前葉	
	中期	塩釜式	後北C <sub>2</sub> ・D式(新)/円形・刺突文土器群Ⅰ / オホーツク式(十和田式期)		4c中葉～後葉	
		南小泉式	円形・刺突文土器群Ⅱ～Ⅲ		5c前葉	
	後期	引田式	円形・刺突文土器群Ⅳ～Ⅴ		5c中葉～後葉	
		住社式	円形・刺突文土器群Ⅵ～Ⅷ		6c前葉～後葉	
飛鳥	栗園式	円形・刺突文土器群Ⅸ～Ⅹ		7c前葉～中葉		
			円形・刺突文土器群Ⅺ		7c後葉	

\* 東北北部は青森県(2005)・石川日出志(2006)、道東北は熊本俊朗ほか「北海道における縄文～アイヌ文化期の歴年代の検討」『北海道における古代～近世遺跡の歴年代』(2006)を参考

葉」、三地域に顕著な属性交換が見られる時期を「中葉」、三地域に共通な型式が見られる時期を「後葉」に分ける(表V-1)(鈴木2009・2011)。

縄文研究の習わしでは上記3細分を「縄文時代前期」「-中期」「-後期」と呼称するのが通常であるが、時間軸としての呼称として「縄文時代」を用いないこと(I章2節4項参照)、縄文研究において、「縄文」「弥生」と同位の区分であるか疑義が示されていること(II章参照)から、「-葉」とした。なお、文中「○○式期・○○土器群期」の表記は「○○期」と略称されることがある。また、後葉の後北C<sub>2</sub>・D式に続く土器型式名については以下とする。学会の習わしにより本論では「北大式」を円刺群Ⅰ～Ⅺ期の総称として暫定併用するが、V章6節2項で述べる理由から、細分名は略称「円刺群○期」を用いる。

## 2 空間の区分

北海道は千島列島を除いて、渡島半島を主要部とする「道南部」、石狩川中下流域を主要部とする「道央部」、宗谷岬から石狩川上流域を主要部とする「道北部」、日高山脈以東の太平洋側とオホーツク海側である「道東」に区分した(図V-1)。

そしてその下位区分は、「道南部」は現在の渡島・檜山・胆振西部・後志西部、「道央部」は胆振東部・日高・石狩・空知・後志東部、「道東部」は十勝・釧路・根室・網走、「道北部」は宗谷・留萌・上川にあたる。

「北海道」は北海道本島と属島の総称、「東北北部」は現在の青森・岩手・秋田県域、「北日本」は東北6県と新潟県、「本州」は北海道・四国・九州と属島を除く総称である。「北海道島」「本州島」は以下の理由か



図 I-3 地域区分



図 I-4 関係地名

ら使用しない。それらは日本列島の下位分類であり、すでに「島」として自明である。また、必ずさらに同語での下位分類が生じるので属島を含むか否かの理由表明も必要となる。理由表明がない使用は厳密さの意味をなさない。

### 3 文化負荷の主体者

史料における民族名は形質的・風俗的・地理的差異に基づく過去の支配者・外国人の定義であり、文献史学もこれを使用する。例えば、東北北部以北の人々は「蝦夷」・「渡島蝦夷」と呼ばれた。

初出は「斉明四(658)年四月条」『日本書紀』(国立歴史民俗博物館 2000、VIII章 1 節 p70 の 3 件引用史料も同出典)で、「寛平五(893)年閏五月十五日条」『日本紀略』(国立歴史民俗博物館 2000)以降に見えなくなる。これは自称ではない。文化人類学においては現時点の風俗的差異に基づく現時点での定義である。考古学においては過去の物質文化の差異における現時点での定義である。形質人類学においては骨格形態・遺伝子的差異における現時点での定義であり、文化的帰属・主体者名に直接帰着しない。本論においては物質文化における主体者として「物質文化名+人」:例えば「続縄文人」を使用する。

### 4 「続縄文」という呼称

「続縄文」とは続縄文式期・続縄文文化について両用する呼称。

### 5 本書「続縄文」研究の方向

北海道の「縄文」はそもそも「縄文」か、という新たな問題が提起されたが、語根である「縄文」の概念について一定の理解ができた。そして、「変則的/逸脱的森林性新石器文化」は本州以南とは異なる自然環境にあることにより生まれたものであるから、「続縄文は、変則的/逸脱的森林性新石器文化の後継か?」という設問が発生する。

「続縄文」の「続」については既にいくつかの問題提起がなされているが、これについては学史としてII章で言及する。環境の背後にある気候変動とそれに支配されている個々の自然環境について、最新の気候変動研究とそれに関わる動植物の変化を検討することが重要な課題でありIII章を設けて検討する。IV章では続縄文研究に対する筆者の基本的な方法を提示するが、なかでも人工物の使用・改変・製作に関わる情報伝達の分析に「内在的属性」「中間的属性」「表出的属性」を用いる意義をD.Clarkeの属性定義を踏まえて示す。V章ではそのための時間軸の設定=土器編年を行う。VI章では遺物・遺構について「内在的属性」「中間的属性」「表出的属性」を視点として、諸属性の転移の系統・広がり検討する。VII章では文化変容の背景である自然環境と生業の応答関係について検討する。VIII章では生業の一部でありながら社会的環境を前提とする交換について特に鉄器の需給が文化変容にもたらす影響を述べる。IX章では文化変容の背景である社会的環境(階層)を墓制からみて検討する。



## II 章

### 研究史と問題点



## Ⅱ章 研究史と問題点

「続縄文」はどのような研究対象と認識されてきたのだろうか、考古学の研究書における扱いの経緯と傾向をみってみる。そのため、歴史学の通史書、考古学の辞書・概説書、を除いて検討する。

### 1 節 「続縄文」の位置取り

#### 1 研究書における扱い

縄文時代の一部として扱われる場合が以下である。『世界考古学体系 1 先縄文・縄文時代』は、章:「北辺の先史文化」、節:「縄文文化以後の諸問題」、項:「続縄文文化」が設けられている(大場 1959)。『日本考古学講座 3 縄文文化』は、章:「各地の縄文式土器」、節:「北海道」(大場 1961)はあるが項はなく、続縄文土器について数行の記載があるほかは編年表に「続縄文期」とある。いっぽう、『縄文文化の研究 6』は、章:「続縄文文化」を設けて巻の半分に及ぶ分量を割き、遺物・遺構などを網羅的に取り上げた(藤本 1982)。

並行期である弥生時代・古墳時代の巻で扱われる場合が以下である。『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』が最初で、「周辺地域の情勢」という章、「北海道」という節、「続縄文文化の形成と弥生文化」・「続縄文文化の発展と衰退」・「続縄文文化の墓制」という 3 項が設けられている(大場・千代 1966)。近年では、『弥生時代の考古学 1』が、章:「日本列島の他文化との比較」、節:「続縄文文化と弥生文化」(鈴木 2009a)。『講座日本の考古学 5 弥生時代・上』が、章:「隣接地域の諸相と交流」、節:「続縄文文化と弥生文化」(青野 2011)。『講座日本の考古学 7 古墳時代・上』が、章:「古墳文化と南北の文化」、節:「古墳時代併行期の北方文化・北海道」(鈴木 2011) 近年では節を設けて詳述されている。

また、地域史として扱われる場合もある。『考古学ゼミナール』では、部:「日本の考古学」、章:「北辺と南島」、節:「北辺」、項:「続縄文文化」が設けられている(吉崎 1979)。『岩波講座日本考古学 5 文化と地域性』もほぼ同様で、章:「北海道における地域性」、節:「初期農耕の痕跡」、項:「稲作文化の圏外」が設けられている(吉崎 1984)。また異例として、『日本考古学論集 9 北方文化と南島文化』、章:「続縄文文化と擦文文化」、節:「続縄文文化」に 1967 年に書かれた土器編年についての論文が再掲載されている(森田 1987)。

つぎに北海道の研究者に向けて発行されたものと考えてよいものとして以下がある。『北海道考古学講座』は、章:「続縄文文化」(大沼 1980)。『北海道の研究 1 考古篇 I』は、章:「北海道南部の続縄文文化」(石本 1984)・「北海道中央部の続縄文時代」(高橋 1984)。『北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』は、章:「北からの文化・南からの文化」、節:「恵山文化と交易」(青野・大島 2003)・「江別文化の成立と発展」(高橋 2003)・「道東北部の続縄文文化」(熊木 2003)。これらは章・節を設けて続縄文が独立的に詳述されている。

なお、縄文土器の一部として扱う遺物研究書には以下がある。『縄文土器大成 5 続縄文』章:「続縄文と隣接地域の土器」、節:「北海道の続縄文土器」(澤 1982)・「恵山式土器」(菊池 1982)・「道東の続縄文土器」(宇田川 1982)・「後北式土器」(大沼 1982)。『縄文土器大観 4 後

期・晩期・続縄文』章：「様式解説・変遷図・遺跡分布図」、節：「続縄文式土器様式」(大沼 1989)。

『考古資料大観 11 続縄文・オホーツク・擦文文化』章：「土器 土製品」・節：「続縄文文化の土器」(工藤研治 2004)、章：「石器 石製品、木・繊維製品」・節：「石器 石製品 - 道南・道央」「石器 石製品 - 道東・道北」(石川朗 2004)「木・繊維製品」(三浦 2004)、章：「骨角器、装身具、金属製品」・節：「骨角器」(種市 2004)「装身具」(大島 2004)「金属製品」(三浦 2004)。章で取り上げられる。これはある意味では地域史としての扱いに含めてよいだろう。

## 2 研究団体などの動向における扱い

日本考古学協会が編纂する「日本考古学年報：以下、年報」は昭和 26(1951)年に発行され現在に及ぶ。続縄文は、「年報 7」(1958)の「昭和 29 年度考古学関係文献目録「甲 著述・編纂」「C 縄文文化」の項目中と「年報 10」(1968)の「昭和 32 年度考古学関係文献目録「乙 研究論文」「C 縄文時代」の項目中にあり、同様の扱いは「昭和 42 年度年報 20」(1972)まで続く。「1968 年度年報 21」(1981)から「1977 年度年報 30」(1979)までは「続縄文時代以降」、「年報 31」(1980)から「年報 37」(1986)までは「縄文・続縄文時代」、「年報 38」(1987)以降は「続縄文時代」が設けられる。

ニューサイエンス社の「考古学ジャーナル：以下、ジャーナル」の動向においては、「ジャーナルNo.81 1972 年の考古学会の動向」(1973)に「縄文・続縄文」が初出し、「ジャーナルNo.9 1973 年の考古学会の動向」(1974)以後は「続縄文時代」として独立した項目が編まれる。なお、北海道考古学会においては 1984 年の『北海道考古 20 輯』に初出し、それ以降 10 年ごとの研究動向においては「続縄文時代」の項目がある。

行政においては北海道教育委員会が 1973 年に使用開始した「埋蔵文化財包蔵地調査カード」に「続縄文時代」とあるので、そのころには行政用語となっていた(西脇 2010)。

## 3 研究領域における位置取り

研究書における続縄文の取り上げられ方は、縄文時代の一部として、のちに独立した巻が編纂される。60 年代から「章立ての最下部の項で、少量」→80 年代初頭以降は「章・節で、やや多量」という変遷がみられる。掲載の最小量は単行書の一部で、最大量は叢書のうちの一巻を占める。研究動向においては当初は縄文時代で扱われ、70 年代後半には独立した項目となる。なお、続縄文全般に言及する単行書は僅かに 2 冊『続縄文文化』『続縄文時代の生活様式』がある(千代 1984)。

続縄文の扱いは、80 年代初頭に刊行された『縄文文化の研究 6』・『縄文土器大成 5』が転機となり掲載量の増加がみられる。ただしそれは、縄文の一部に端を発する後続分野としての扱いである。その背景には山内が考えた「縄紋式期のあとに続く高度の漁撈狩猟民文化」という概念の存在があった。また、縄文・弥生・古墳並行期における周辺の・付帯的テーマとして扱われることは、編集上の都合でもあろうが、本州における歴史展開が及ぶ一端としての地域という視点がある。

## 2 節 続縄文研究略史と問題点

### 1 山内清男にとっての「続縄紋」

山内清男は、「続縄紋式」を「(前略)縄紋式の後にも、縄紋を持った土器型式が相当続いて

居る。」と述べ(山内 1936b)、「続縄紋式文化」については「(前略)高度の漁撈狩猟民としての生活がみられるのである。」とのべる(山内 1969)。

大沼忠春によれば、「続縄文」は、山内が当時ヨーロッパで用いられていた考古学的文化区分名を援用して作った用語で、Jomon に epi- を接頭した合成語であった(大沼 1977)。なお、佐原によれば、1932～33年に山内が北欧圏に倣ってこの文化を設定したようである(佐原 1984)。時間の前後について「あと」を表す接頭辞には epi- と post- があり、epi- は接続を含意し、post- は断絶を含意する。epi- の選択は、山内は東北北部～北海道における「続縄文」を縄文土器・縄文文化の後継と考えていた証左である。

「続縄紋式」という言葉の初出は 1936 年である(山内清男 1936a)。その内容は「(前略)縄紋式の後にも、縄紋を持った土器型式が相当続いて居る。(中略)うちに二つ以上の細別を認めうるようです」(山内 1936b)。伊東信雄は東北北部～北海道にある土器について、山内の「続縄紋式」を了解しつつも「弥生式的なもの」と考えた(伊東 1950・1955)。

「続縄紋式文化」という言葉の初出は 1959 年『図解 考古学辞典』(水野清一・小林行雄 1959)であるが、山内自身は「(前略)内地が弥生文化に変化する頃になると、全道は、わたくしが『続縄文式文化』とよんだ(後略)」と述べ、1937 年当時には既に「続縄紋式文化」という用語を使っていたと語っている(山内 1969)。その内容については「現在の原始民族の経済階級のうちの高級狩猟民」(山内 1937)、「(前略)生活状態は、縄紋式と同様、狩猟漁撈採集であった。」(山内 1964b)、のちには「(前略)内地は稲が作られ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁撈狩猟民としての生活がみられるのである。」とのべる(山内 1969)。その後は、鳥畑壽夫・江坂輝弥らが山内の概念に基づいた使用しており、「続縄文式文化」は 1950 年にみられ(江坂 1950)、「続縄文文化」の初出は 1956 年(千代肇 1956)で、つづいて 1957 年(鳥畑 1957、江坂輝弥 1957)がある。

## 2 北海道に在住する研究者にとっての「続縄文」

戦前における北海道では東京の状況とは連携せず、道具の材質に着目した技術史的区分を念頭に置いて、独自の研究が展開していた。河野広道は「続縄文式」に当該する土器を「前期北海道式薄手縄文土器」「後期北海道式薄手縄文土器」(河野 1933)、「続縄時代」に当該する時期を「金石併用時代～金属期時代」と命名した(河野 1935)。名取武光も河野の概念に準拠した(河野・名取 1938)。

しかし戦後になると、山内の概念が導入された。1953 年に「続縄文期」(大場利夫・扇谷昌康 1953)、1954 年に「続縄文時代」(千代肇 1954)、1956 年に「続縄文文化」(千代肇 1956)が初出する。いっぽうで、1961 年にはまだ「続縄文期(=初期鉄器文化渡来期)」という河野 1952 に基づく区分が併記されて『日本考古学講座』に載っていた(大場 1961)。

## 3 近年の「続縄文」研究

山内の土器型式の分類は階層性を持つ。「縄紋式」の下位に「早期～晩期」、その下位に「細別(型式)」である。「続縄紋式」とは、「縄紋式」に続く土器群の名称であり、具体的には「縄紋式晩期」の次にあり「縄紋式」「弥生式」と同等の分類位にあるものである。よって、山内の「続縄文式文化」とは、「縄紋式文化」「弥生式文化」と同等の分類位にあり、「続縄文式」によって時期区分された東北北部から北海道にかけて拡がりを持つ高度の漁撈狩猟採集文化と解される。なお、前述したように 1961 年以降の概説書には河野の概念は見られなくなることから山内の概念が標準となった。今日的課題が明確に示された 5 人の言説をつぎに示す。



北海道の南部と中央部(図Ⅱ-1の西南部)には「続縄紋前半/後半」を設け、北東部(図Ⅱ-1の東北部)には南部と中央部にみられる段階は設定されない。南部には弥生系技術・弥生系文物の要素が時折みられ、中央部と北東部にはそれが僅かにあるということである。「北海道型(?)続縄紋」の開始時期は土器型式期に換言すると、中央部ではタンネトウル式期、北東部では幣舞<sup>ぬさまい</sup>～緑ヶ岡式期、縄文晩期後葉にあたる。

縄文晩期中葉と縄文晩期後葉との間に「縄紋」と「北海道型(?)続縄紋」の段階差があることになる。要素は明示されていない。ただし、林は晩期後葉土器型式について「この段階になってはじめて、石狩低地帯をはさんだ道東・道南の地域差を確実にとらえることが可能となる。渡島半島を本拠とする日ノ浜式(大洞系)と、道東を本拠とするヌサマイ式(非大洞系)の対照が顕著となり、類大洞系土器はこの段階では影が薄くなる」と述べた(林 1981)。大洞系の日ノ浜式(図Ⅱ-1の「日ノ浜 8」)が「北海道型(?)続縄紋」に含まれるので「北海道型(?)続縄紋」は単に土器型式の相違を述べたものではない。弥生系技術・弥生系文物の要素が僅かにある「北海道型(?)続縄紋」はほとんど「縄紋」であるともいえる。

以下は高瀬克範の言説である。先史時代研究は文明・非文明＝優劣の評価軸を内蔵するので、非文明研究には一國史的枠組みと文明に誘導された理論に対して批判的態度が必要で、研究手法としては物質文化の定性定量的評価や機能用途論的分析が必須である。続縄文の北海道は非文明に属し「アイヌの成立につながる」独自性はあるが、それは社会の質的差異の評価(=前掲の定性定量的評価や機能用途論的分析)により顕在させ得る(高瀬 2004b)。

また、続縄文の概念は縄文に対して空洞性・暫定性があるため、埋葬行為・資源利用の検討を通じて縄文から相対化される必要があり、その視点は階層化である(高瀬 2010)。

2014年には、縄文・弥生文化が、D.Clarkeの「technocomplex:環境・経済・技術の共通要素に対する反応が広域かつ連動して共有されている文化群の集合」以上の文化区分で、続縄文文化はその一段下位の「culture group:多相配合を共有する assemblage」によって特徴づけられる文化群以上の文化区分であるとする。縄文と続縄文の区分や「道央の優位性」という続縄文的特徴の解明には「経済のデータ」について具体的に検証することが不可欠であり、具体的には「資源構造の拡張的開発」という視点からみた「資源利用・土地利用」を評価することである、と述べる(高瀬 2014)。

そして、「経済のデータ」について検証を行った。動物資源利用については以下である。動物遺存体を「魚類」「爬虫類・両性類・哺乳類」「貝類」「鳥類」に集計して、石狩低地帯北部(恵庭市を含む)とそれ以外に分け、その重量百分率を比較して、3割以上をある場合を漁労の重要性が高い事例とした。石狩低地帯北部では続縄文期初頭にサケ科資源の重要性が高まり、それ以外の地域では続縄文期前葉にサケ科以外の魚類資源の重要性が高まり、漁労への傾斜がみられる。また、渡島半島ではヒラメ、東部太平洋ではメカジキとヒラメなど特定の大型魚への執着がみられる。このような「それまでほとんど利用されていなかった特定の種の、しかも大型の個体に固執した資源利用が一気に確立する」資源利用は縄文文化との連絡性が乏しいので、漁労への「特化」と呼ばず、「資源構造の拡張的開発」とよぶ。

物資交換方法については以下である。続縄文前半期には黒曜石・緑色泥岩と外来系物資が交換され、続縄文後半期にはサケ科資源を含む動物資源と外来系物資とが交換(食料資源が交換資源へ流用)される。石狩低地帯北部では続縄文前半期から外来系物資入手力が高

く、これとサケ科の利用を基軸した経済が縄文後半期に「道央部の優位性」を導く。外来系物資の入手先は東北北部のB地域(稲作以外の生業と非平野部の土地利用が特徴)である。

「道央部の優位性」については以下である。石狩低地帯の集団は食料資源・物資交換について季節的運用をした。秋季に大きな集団により特定の場所でサケ漁・加工を行い、晩秋～夏季にかけて小さな集団により沿岸部・少雪地帯で漁労狩猟を、冬季には物資交換を行っていた。

縄文後半期における物資交換は「移動性の高い」集団が関与する。「高移動性」の根拠として、縄文中葉以降竪穴住居の激減(屋外炉=簡易なテントの痕跡の増加)、2種類(中央部型・東部型)の後北C<sub>2</sub>・D式の広域分布があげている。

以下は藤尾慎一郎の言説である。藤本強の空間区分と林謙作の段階区分を援用して、空間的両属性・段階的両属性を「横のボカシ:文明の中心から周辺へと離れるにつれ、当初の要素が1つずつ欠落してゆく」「縦のボカシ:縄文から弥生への転換期」と名付けた。縄文並行期における空間区分については経済(水田稲作)・社会(環濠集落)・祭祀(青銅器祭祀)という指標を用い、段階区分には生業構造における水田稲作の在り方(網羅的生業:縄文→特化した生業・網羅的生業+後戻りする水田稲作:エピ縄紋→選択的生業+後戻りしない水田稲作:弥生)を指標とした(藤尾 2013)。

縄文文化については、「北の文化」:特化した生業、「北のボカシの文化」:網羅的生業+後戻りする水田稲作、と考定している(藤尾 2013)。

藤尾は林の空間区分を継承するが北海道についての細分は設けない。よって、林の「北海道型(?)縄文」は藤尾の「北の文化」にあたる。時期区分に関してはエピ縄紋という段階区分は使用せず「縄文」をあてはめる。

以下は鈴木 信の言説である。縄文文化とは縄文時代以来の生業に特化という修整を加え、その後葉に鉄器の広域交換が生業の基盤となった文化で、その要点は「威信の漁労の盛行→対価獲得への特化」「第二の道具(玉類)の広域交換→第一の道具(鉄器)の広域交換」である。縄文の区分は、前葉が形成期、中葉が完成期、後葉が変質期、空間区分は「縄文文化」の北海道、「類縄文文化」の東北北部がある、とした(鈴木 2009a)。

また、当該期の遺物・遺構の属性を内在的属性・表出的属性・中間的属性にわけ、諸属性の転移が、前葉には主に道東から道央へ、中葉以降には道央から道南・道東へと行われたことを示し、それに基づいて文化接触と物資交換についても考察した(鈴木 2009b)。

2010年には、墓制と交易という視点で階層差を考え、墓制について定量的評価を行った。階層は経済的側面・威信の側面を持ち、前者が後者を浸食してゆく過程が階層化で、かつ階層化は生業における分業と係わり、地域間分業=交易の性格変化に多く影響を受ける。(鈴木 2010)。

2015年には、縄文の生業を行動様式に基づいて「季節的狭域移動」「季節的広域移動」「季節的超広域移動」に分類し、後葉以降に渡海交易の変化により道央低地帯を経由する経路が頻用されて所謂「道央の優位性」がもたらされたと述べた(鈴木 2015)。

### 3 節 抽出された課題と加えられるべき視点



## 1 課題の枠組み

山内・林・藤尾は、縄文・続縄文・弥生を同位の文化区分ととらえているが、高瀬は、縄文・弥生文化は最上位の文化区分、続縄文文化は最上位～一段下位の文化区分を考えている。また、林・藤尾は、ムラ・クニという新規の社会システムが内蔵されていることから、弥生-続縄文は中心一周縁の位置にあるとみている。

続縄文の内容については以下に挙げる二つの要素がある。第一には要素の系統である。「ほとんどない(僅かにある)」弥生系要素の探求であり、いっぽうで「ほとんど」縄紋要素=「北海道型(?)続縄紋」についての探求である。第二には経済における要素の新規性である。藤尾・鈴木は生業について縄文型の網羅的生業を維持し漁労・交易に特化した経済であると考へた。これは「ほとんど縄紋」的続縄文経済概念にあたるのか否か。いっぽう高瀬は、続縄文前～中葉にみられる「資源構造の拡張的開発」、続縄文後葉にみられる「高移動性集団による物資交換」、という概念を考へた。

## 2 続縄文の「続-」について抽出された課題

続縄文の「続」が epi-なのか post-なのか、続縄文が、後継の文化であったとして何が連続的なのか、その存在程度はどれくらいか。または、新生の文化であったとして、新規の要素には何があるのか。

第一に、文化的要素の系統については、以前に道南・道央・道東における属性の時系における関係について論じた(鈴木 2009b)、そこでは弥生系・縄紋系という分類は言表していない。よって、道内にある要素の連携から導かれるであろう「北海道型(?)続縄紋」の系統についても言表していない。要素の系統について言及する前段に土器など各考古遺物・遺構の編年など基礎的な問題について、データを今日的にして、再び述べる必要がある。

第二に、生業要素の新規性については、資源利用・物資交換について変遷を既述した(鈴木 2009ab)。「生業の特化: 威信的漁労→対価獲得猟」・「広域交換の生業基盤化: 第二の道具(玉類)の交換→第一の道具(鉄器)の交換」、後葉以降における広域交換により「道央の優位性」がもたらされた(鈴木 2015)。「特化した経済」は「ほとんど縄文 technocomplex」あるいは「ほとんど森林性新石器文化 technocomplex」、「資源構造の拡張的開発」と「高移動性集団による物資交換」は、新出的経済概念といえるので「続縄文 technocomplex」と考えられる。生業変化が「資源構造の拡張的開発」にあたるのか、「高移動性集団による物資交換」が行われていたのか、「資源構造の拡張的開発」により「道央の優位性」が生じたのか、検討が必要である。

第三に、社会の問題がある。その構造(ひとつに階層差)を推定するため墓制を検討した(鈴木 2010)。また、墓制と交易という視点で、墓制について定量的評価を行った。これは、高瀬が提示した経済的概念の検討とも関係する。その検討を踏まえて、データを今日的にして、再び述べる必要がある。

	縄紋系文物	弥生系文物
	*網掛けは続縄紋の配合 土土石香注雲工 形字 偶版剣炉口文文	イ水石管紡木中壺甕 庖 錘工形用用 ネ田丁玉車具壺蓋蓋
柵形 冢	.....	.....
山王 III	.....	.....
大洞A 新	.....	.....
大洞A 古	.....	.....
大洞 A	.....	.....
山王 VI	.....	.....
大洞 C <sub>2</sub>	.....	.....
大洞 C <sub>1</sub>	.....	.....

図 II-2 縄紋系文物/弥生系文物の消長 林 1987 引用加筆



図 II-3 三つの側面から見た日本列島 藤尾 2013 引用加筆

から、これら地域は「culture group」的状況にあるといえ、続縄文後葉の東北北部・北海道はそれが解消される方向があることより「technocomplex」的状況がみられたと考えてよい。

### 3 続縄文の「-縄文」について加えられるべき視点-I章より

山内は続縄文=縄文∧続縄文≠弥生と考えた。つまり、続縄文とは弥生・古墳と並行する縄文の後継であり、それらの要素が除かれた文化である。

この考えは「続縄紋」の登場までは共通見解であり、今日でもそう考える研究者は多いであろう。「続縄紋」は段階名称である。これは縄文と弥生とに両属する段階があることを表わした言葉であり、北海道については弥生化の程度によって、「続縄紋」と「北海道型(?)続縄紋」に分けられている。

この区分は、I章で述べた「変則的森林性/逸脱的森林性新石器文化」の生態学的区分ともほぼ一致する。続縄文が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継であるのか否か。後継である場合、変則的の後継が「続縄紋」、逸脱的の後継が「北海道型(?)続縄紋」となるのか?。合成語である続縄文は語根の内容が替わればその内容も大きく変わる。「語根=基本的要素=縄文的要素」において、変則的/逸脱的部分の析出が必要となった。

ところで、欧州新石文化の「新資源」が、中欧の線帯文土器文化圏からブリテン島へ到達する速度は、経度方向で約 0.4 km/y r と見積もられている(R. デネル 1995)。いっぽう、弥生における「新資源」の受容は佐賀県菜畑遺跡(山ノ寺式:2700<sup>14</sup>C BP頃)に最古例があり青森県砂沢遺跡(砂沢式:2300<sup>14</sup>C BP頃)に到達する。2遺跡の間隔は緯度差にして7° 16′・直線距離にして約 1228.4 kmであり、拡散速度は緯度方向約 3.07 km/yr と見積もることができる。欧州新石文化の農耕に関わる「新資源」とはコムギ類栽培であり草原性草本といえ、弥生は水稻栽培で湿地性草本(ただし、水田という施設、それに関わる技術が伴う)であり、ともに穀類である。また、到達点にはともに異なる生業が既存する。

農耕の拡散の速度は同一時期において、大まかに2つの条件がある。第一は自然条件で気温(≒緯度)・降雨の季節性、経路(海上・陸上)がある(R. デネル 1995、J. ダイヤモンド

ところで図 II-2 は東北における「続縄紋」の状況である。林が要素と呼ぶものは D. Clarke の「type(遺物型式)」(Clarke 1968)、ひとつの土器型式の行は「assemblage」、網掛けの範囲は「culture」である。この表より「続縄紋」は、縄文系・弥生系のハードウェア・システムが複相的に配列されて、共有もされることから「technocomplex」に当たると考えられる。

そして図 II-3 によれば、続縄文前～中葉の東北中南部(「中の文化」)・東北北部(「北のボカシ地域」)・北海道(「北の文化」あるいは「北海道型(?)続縄紋」)においては環境・経済・技術の共通要素に対する反応に相違があることから

2000)。第二は狩猟採集などの異なる生業が既存しているか否か(R. デネル 1995)。

弥生の「新資源」受容は緯度方向にもかかわらず、R. デネルのいう「拡散地帯」の速度に近く、ブリテン島(R. デネルのいう「摩擦地帯」にあたる)への到達に比べてかなり速い。「拡散地帯」は文化の交替が起こる地域で、「摩擦地帯」は異なる生業が並存し文化の網状進化(IV章3節4項参照)が起こる地域である。弥生の場合は「摩擦地帯」といえる状況であることから、「新資源」を扱う文化負荷者と受容する文化負荷者との関係(=網状進化の進み方)がブリテン島とは異なると考えられる。東北部における「新資源」受容の仕方は、稲作の北上停止を含めて「縄文」<sup>エビ</sup>「北海道型(?)縄文」にも関連する。

#### 4 加えられるべき視点-III章より

III章で述べる環境変化は気候変動に由来していることが理解できた。植生・地形に依拠する生業にも影響を及ぼしていると考えられる。前節で言及した「新資源」受容の仕方の背

景には、資源の性質・生業形態・自然環境の差異もあろう。樹木花粉の優占樹種の増減と暖流系魚貝遺存体の消長にみられた変動を経ても「続」的な内容なのか、それはepi-なのかpost-なのか。

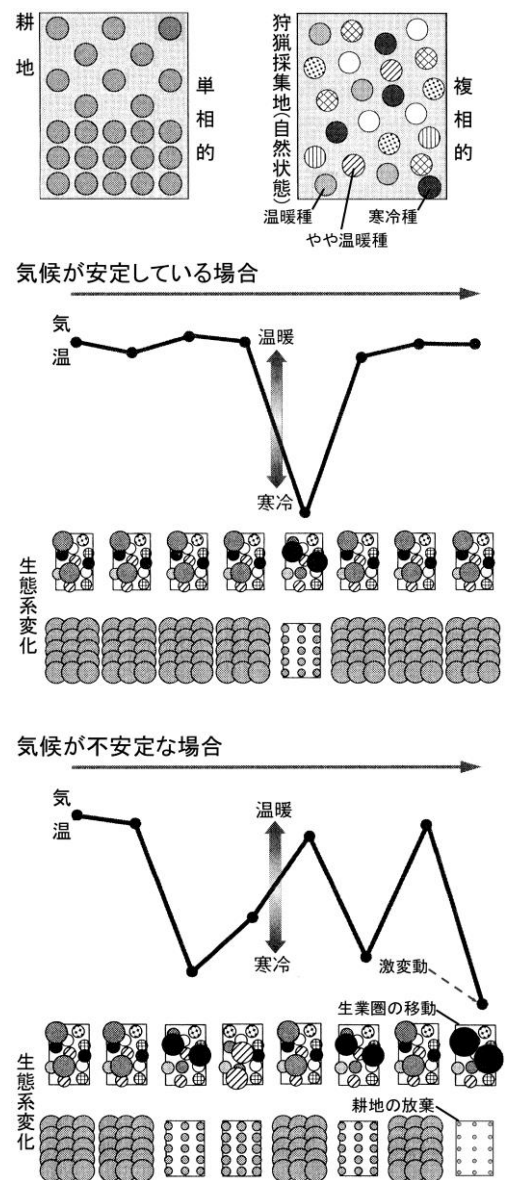
気候変動による環境変化は次章以降で考察される問題点に加えられるべき視点となる。その際に「変則的/逸脱的森林性新石器文化」から「縄文」<sup>エビ</sup>「北海道型(?)縄文」への移行状況を検討すること、縄文前葉が形成期であったこと(鈴木 2009a)にも係わるので、縄文晩期後葉=図III-1「波C」の直前を本論考の始点とする。

#### 5 もう一つの視点-気候変動と中川モデル

気候変動は生業にどのような影響を与えていたのだろうか。中川毅は、農地と自然状態の生態系を比較して前者が単相(≡人為的)・後者が複相(≡自然的)であることを示し、後氷期以後と晩氷期以前の環境がこれにあたることも言及している。その上で、農耕と狩猟採集は生態系変動から受ける影響に対して全くことなる応答を見せることをモデルで示した(図II-4)。

そのモデルは、気候が安定したモード・気候が不安定なモード×農耕の単相的生態系・狩猟採集の複相的生態系の4通りの要素を持つ。そして、安定的気候の場合と変動的気候の場合で以下のように比較している(中川 2017)。

気候が安定している場合：農耕は高い食料生産性(少種多量)により余剰が発生し、人口増・社会構造の複雑化・食料備蓄の増が進む。これにより、回復が後続する1回の異常気象では備



図II-4 中川モデル 中川 2013 引用加筆

蓄・食糧交換により危機回避が可能である。狩猟採集は農耕よりも低い生産性(多種少量)により少ない人口が維持される。回復が後継する1回の異常気象では多様な資源を活用し危機回避できる。農耕と狩猟採集の双方とも食料事情の逼迫はない。

気候が不安定な場合：農耕は連続する異常気象では、備蓄が払底し食糧交換の原資もなくなり、危機回避は不可能である。狩猟採集は多様な資源を活用し危機回避できる。農耕は危機的状況になるが狩猟採集はそうならない。気候が不安定な場合に激変動がある場合は双方とも危機回避はできない。

人口が少なく生態系が複相である狩猟採集は気候変動に対する危機回避力が高く、人口の増加・社会の複雑化に至る農耕は気候変動に対する危機回避力が低い。また、中川は農耕が後氷期以前に始まらなかった理由として「気温の低さ・人口の少なさ・知性の発展途上」は当たっておらず、「気候がまだ安定していなかった時代なに農業を始めることに積極的な魅力を見いだす人がいなかった」と考えた(中川 2017)。

気候が安定か不安定かは変動振幅・変動期間の長短をどう見積もるかである。中川によれば、マヤ文明は、810年以降9年間に6回の干ばつ→42年間穏やか→3年間少雨→47年間穏やか→910年以降6年間に3回の干ばつ→文明崩壊、の経緯をたどる。ほぼ100年間に起こった農耕文明の崩壊である。アルケノン推定気温(図Ⅲ-3-3)は弥生～擦文にかけての1500年間程を100年以下の単位に打点されている。マヤ文明の崩壊は100年間の出来事なので、アルケノン推定気温における1線分間にはほぼ相当する。よって、この推定は十分に文化変化に関わる気候変動を説明できる。そして、推定気温の線分の傾きが不安定を表現できると見做してよいだろうし、激変動とはそれが著しく急であることをいうであろう。

以上より、食用植物の管理・栽培の依存度により気候変動に対する危機回避力に差異が生じるはずであり、以下が導かれる。「森林性新石器文化」は完全な狩猟採集よりもその分脆弱である。「続縄紋」は移行段階であるから脆弱性が増す可能性がある。「北海道型(?)続縄紋」は「続縄紋」より危機回避力が高く、中でも「逸脱的森林性新石器文化」が最も高い。

複相性を持つ環境変動という外的要因に対して危機回避力が高ければ文化変容は起こりにくいのか、続縄文の「続」が epi-なのか post-なのかについて考える際に気候変動を生業とのかかわりで述べる中川モデルの提言は重要である。

## 6 分析される課題

第一に、続縄文が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継である場合、「変則的-」の後継が「続縄紋」、「逸脱的-」の後継が「北海道型(?)続縄紋」となるか。続縄文の「基本的要素」と「変則的/逸脱的部分」と「弥生における新資源」の関わりどのようなものか。

第二に、生業要素の新規性については、それが「特化した経済」であるか「資源構造の拡張的開発」にあたるのか、そして、「道央の優位性」が「資源構造の拡張的開発」によって生じたのか。交易については高瀬が提示した経済的概念の検討も必要になった。

第三に、社会の問題については、墓制という視点から階層差などについて定量的評価を行う際に最新のデータを収集して、再び述べる必要がある。

第四に、第一～三の背景には気候変動による環境変化があった。狩猟採集や「森林性新石器文化」に対するその影響は、農耕ほどではないが、それへの対応(=生業変化・交易、社会変化)を迫られたであろう。その場合の対応は「変則的-」「逸脱的-」ごとに異なるであろうか。それが「続縄紋」「北海道型(?)続縄紋」へどのように後継しているのか。

# III章

## 気候変動と続縄文



### Ⅲ章 気候変動と縄文

辻誠一は地形変化に着目し、4,500<sup>14</sup>CBP 頃を境に、「海進の時代」と「海退の時代」にわけ(辻 2009)、工藤は植生変化に着目し、約 5,200<sup>14</sup>CBP/5,900cal BP を境に、後氷期の温暖期;PG Warm-1・2 と後氷期の寒冷期;PG Cold1~3 に分ける(工藤 2012)。両者の境界時期は異なるものの、縄文を一つの気候単位とみなさず前期以前の温暖傾向・中期以降の寒冷傾向に区分する。続縄文は縄文中期以降の寒冷傾向に区分される時期である。「森林性新石器文化」は生態学的視点を加味した枠組みであった。そして、この文化は単調な気候の中にあったわけではない。気候変動という視点は文化変容を考察する際に必須である。

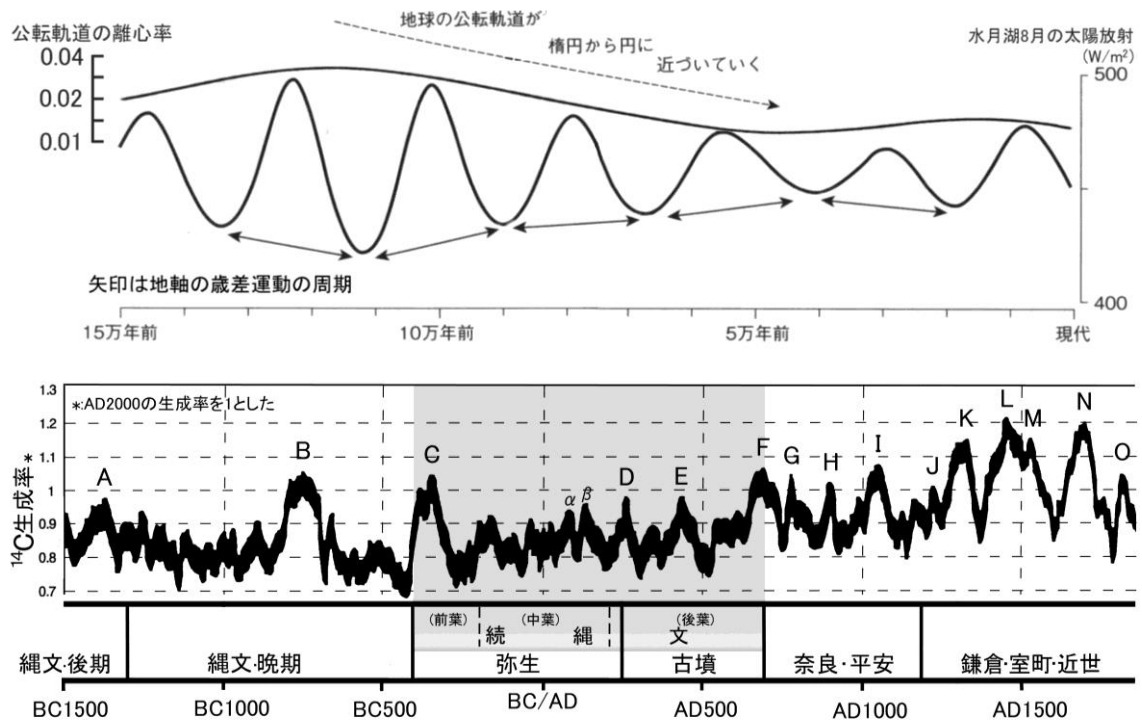
#### 1 節 気候変動

##### 1 気候変動について

気候は太陽エネルギーの授受によって長周期的に短周期的に、温暖傾向・寒冷傾向を繰り返している。

エネルギーの「受」は地球と太陽の位置変動である。地球と太陽の距離は離心率により変化し、受熱量の増(離心率大→軌道の楕円化)、受熱量の減(離心率小→軌道の正円化)がある。歳差によっても地点が太陽に近くなったり離れたりするため、その受熱量が変化する。

**図Ⅲ-1 上**は福井県水月湖(北緯 35° 付近)における公転軌道の離心率と太陽放射の強弱を示している。太陽放射は離心率増減によりその振幅が増減している。また、離心率が大きい



図Ⅲ-1 歳差運動周期と太陽放射(上)、大気における<sup>14</sup>C生成変動(下) 中川 2017・今村ほか 2009 引用加筆

いと(0.024以上)太陽放射の振幅も大きくなりモンスーンの強弱もそれに追従する。ただし、離心率変動は10万年周期、歳差変動は1.9~2.3万年周期であり、長期的である(中川2017、中川ほか2009)。

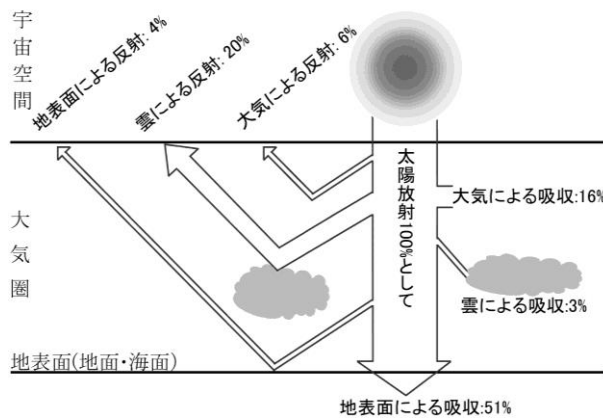
いっぽう、エネルギーの「授」は太陽自身を原発とする。太陽活動の活発化(黒点数増)・静穏化(黒点数減)は宇宙線量の減増であり、宇宙線量の減増が大気中の雲量の増減を支配し、太陽放射量の減増を招いて寒冷・乾燥(夏モンスーンの弱化)傾向⇔温暖・湿潤(夏モンスーンの強化)傾向をもたらす。宇宙線量の減増は<sup>14</sup>C濃度の低下・上昇を起こすので、樹木年輪に含まれた<sup>14</sup>C生成率は太陽活動の代替指標となる。太陽活動の変動は9~14年周期(宇宙線の変動;22年周期)であり短期的である(M.Stuiver and Quay1981、M.Stuiver and others1998、明石2005、今村・藤尾2009、宮原2009)。

図Ⅱ-1下は<sup>14</sup>C生成率を表している(今村・藤尾2009)。図は所謂「古墳寒冷期」のDを下限としアルファベット名を付け、それ以下となる弥生後期の波頂にα・βを付した。<sup>14</sup>C生成率の急激増が弥生~古墳にかけて4回ある。縄文晩期末~弥生前期初:C、弥生後期後半~古墳時代前期初:D、古墳時代中期前半:E、古墳時代終末期後半:Fの時期である。なお図示していないが、縄文中期以降ではCに相当する顕著な太陽活動低下が4回(中期前葉・中葉、後期後葉、晩期中葉)ある。いっぽう、小刻みな変動が続くものの安定した時期もあり、弥生ではC-α間、弥生直前においては晩期後葉のB-C間(大洞A~A'式)があり、後期末~晩期中葉のA-B間(十腰内6~大洞C2式)にある。

## 2 気候変動の代替指標

上で述べたように、宇宙線量の減増が大気中の雲量の増減を支配し、雲は太陽放射量の23%を反射・吸収することから、地表面に到達する太陽放射の減増を招く(図Ⅲ-2)。その結果として気温・海水温・降水量の変動が起こる。

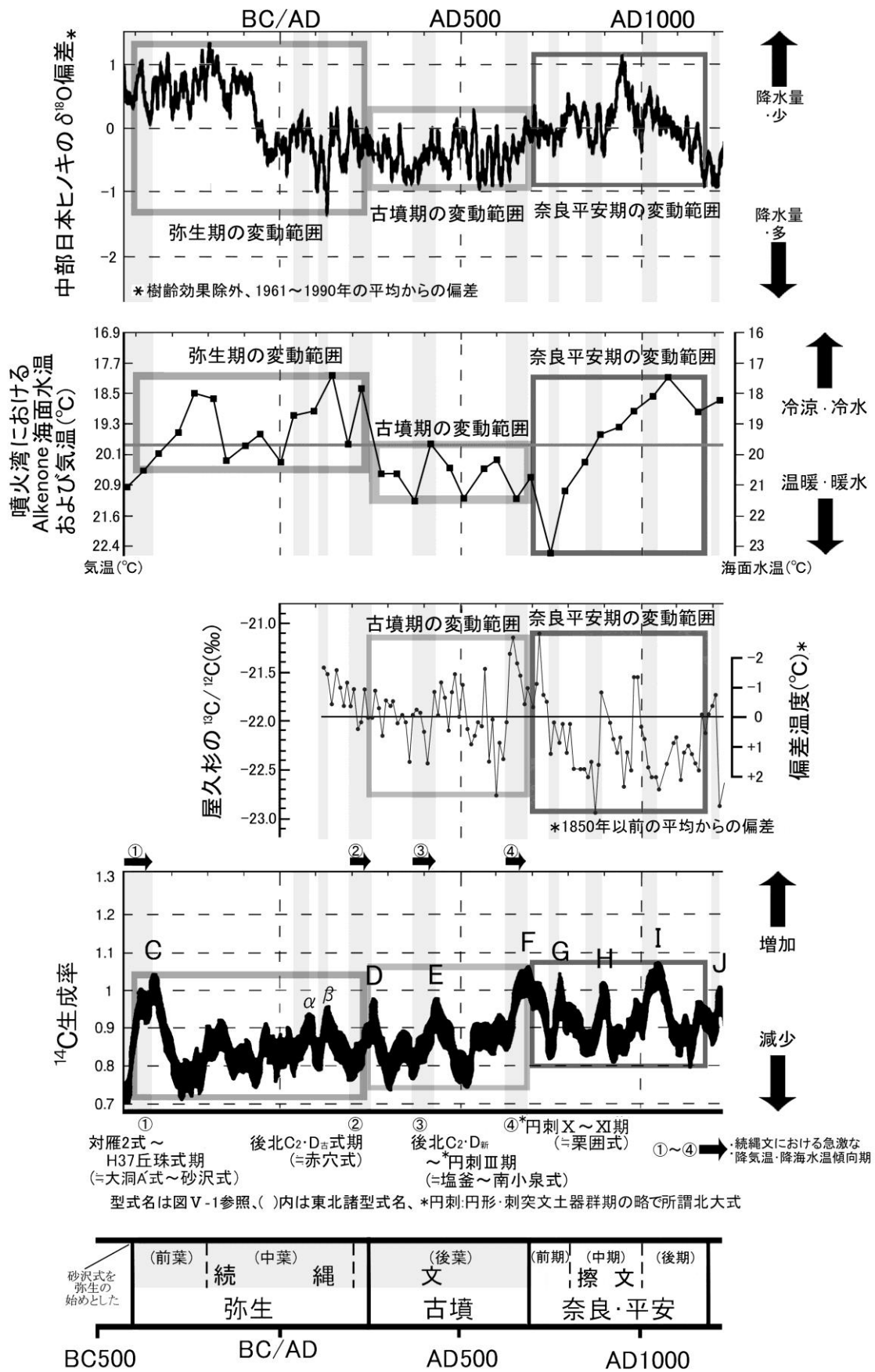
弥生期においては気候変動に関わる地形・植生の変化が指摘されている。関東平野では弥生前期の浅谷の形成(寒冷化-海退)と弥生中期の浅谷の埋



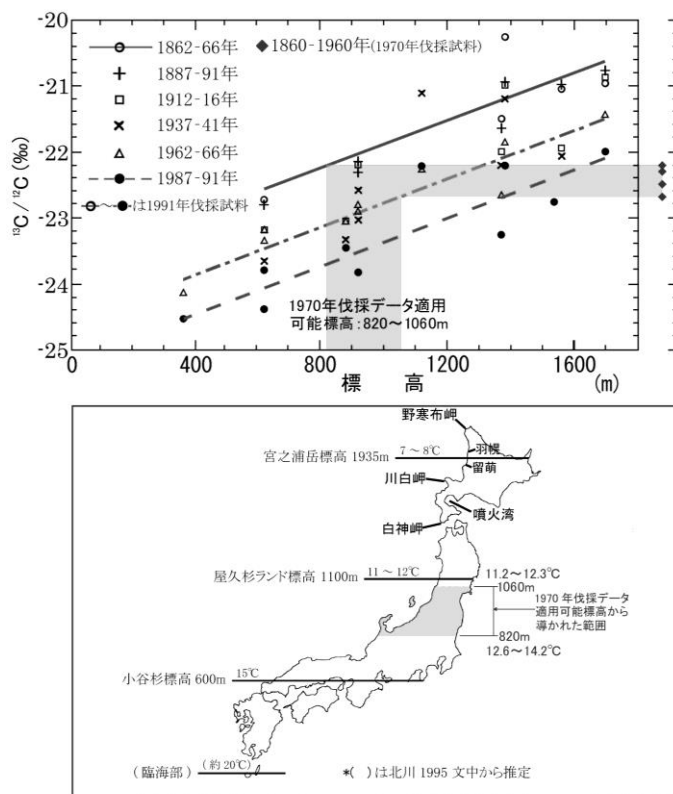
図Ⅲ-2 大気圏と地表のエネルギー収支 木村2017引用加筆 積(温暖化-海進)がみられ、濃尾平野でも同様の傾向がある。そして、花粉分析でもその傾向が追認される。関東平野・河内平野では弥生中期には照葉樹が増加する温暖化傾向、弥生前期・後期には温帯性針葉樹(スギなど)が増加する寒冷化傾向、である(辻2009)。古墳期については花粉分析から「古墳寒冷期:246~390年・390~732年」が提唱されている(坂口豊1995)。

近年、炭素や酸素の安定同位体比を用いて、過去の気候を復元する研究が進展している。最下段の図Ⅲ-3-1は図Ⅲ-1下の抜粋、その上の図Ⅲ-3-2は屋久島のスギ年輪の<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比から推定された気温(北川1995)、その上の図Ⅲ-3-3は噴火湾におけるアルケノン海水温・気温(川畑2018)、最上段の図Ⅲ-3-4には中部日本のヒノキ年輪のδ<sup>18</sup>Oから推定された降水量(中塚2017)を示した。各グラフに架かかる網掛けは<sup>14</sup>C生成率の急増傾向の始点とそれに続く波頂C~Iの期間幅を移して、網掛け枠は各時代の最大変動域を示す。





図Ⅲ-3-1~4 同位体から見た気候変動 中塚 2017・川幡 2018・北川 1995・今村ほか 2009 引用加筆



図Ⅲ-3-2 は以下から導かれる。植物中の安定炭素同位体は、高標高=低気温の環境下では質量差により  $^{13}\text{C}$  が優先的に年輪ごとのセルローズに取込まれる。屋久島における気温減率:  $-6^\circ\text{C}/+1000\text{m}$  と1970年に伐採された屋久スギについて、高度変化による  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比傾向より、 $-0.3\text{‰}/^\circ\text{C}$  が導かれた。グラフは10年毎に打点されており、温度は1850年以前の平均からの偏差である(北川 1995)。 $-6^\circ\text{C}/+1000\text{m}$  を導いた1970年伐採試料の  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比は、1991年に伐採された資料のうち●を除けばほぼ同じ時期のデータと解される(図Ⅲ-4上)。これより1970年伐採木の標高は820~1060mと推定され、これを地図に表すと820m=富山県富山市一茨城県高萩市( $36^\circ 42'$ )、1060m=山形県鶴岡市一岩手県南三陸町( $38^\circ 43'$ )、とに挟まれた範囲に該当する(図Ⅲ-4下)。つまり、図Ⅲ-3-2は北陸~東北南部に相当する気温変動を推定していると考えられる。なお、琵琶湖南岸のヒノキでは  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比と初夏の日照・降水量・降水日数とに高い相関があるらしい(庄ほか 2001)。

図Ⅲ-3-3は以下から導かれる。ある種の円石藻は有機化合物アルケノンを生産する。その不飽和度は円石藻の育成水温により変化するので、不飽和度は水温と高い正の相関があり  $U^k_{37}$ (不飽和度) =  $0.034 T (^\circ\text{C}) + 0.039$  あるいは  $U^k_{37}$ (不飽和度) =  $0.033 T (^\circ\text{C}) + 0.044$  が導かれる。北緯  $40\sim 45^\circ$  の水深  $0\sim 100\text{m}$  の表層において、アルケノンは夏季~秋季(7~9月)に生産され、特に表層混合層の直下にある季節躍層(表層混合層の厚さ=水深  $10\sim 20\text{m}$ )が発達する当季では海水面温度が反映され(大川内 2003)、海域が内湾・近海の場合には夏季気温と海水面温度とは高い相関がある(川幡 2016)。

サンプルコア採取地点である噴火湾(以下、地名は図Ⅲ-4下参照)ではアルケノンが生成される海水は、「夏季噴火湾表層水」と呼ばれる親潮系水が希釈・加熱されたものである。そして、噴火湾は、外洋水である暖水(津軽暖流水、10~1月が支配的期間)と冷水(親潮系水、3~8月が支配的期間)の水塊交替が起こる海域であり(大谷 1981)、北海道においては両属的海況といえる。2017年気象庁公表の7~9月・上旬~下旬によれば、噴火湾の海水面温度は、太平洋側の苫小牧沖以西(7・8月)、日本海側の川白岬~白神岬(7月)、留萌沖~野寒布岬(8月)、<sup>かわしら</sup>羽幌町沖~<sup>しらかみ</sup>野寒布岬(9月)にほぼ等しい。寒冷期・温暖期(=津軽暖流と親潮の強弱)においては対応する範囲が移動するであろうが、おおよそ、噴火湾の海水面温度は、夏秋季における北海道の太平洋側西部と沿岸、日本海側中北部と沿岸、の気温変動が推定可能と考えられる。

図Ⅲ-3-4は以下から導かれる。植物中の安定酸素同位体は質量差により、乾燥傾向では<sup>18</sup>Oが優先的に年輪ごとのセルロースに残る。<sup>18</sup>O/<sup>16</sup>O比は、雨量効果(=降水量が多いほど水蒸気に凝縮する<sup>18</sup>Oの割合が増し降水の同位体比が低くなる)により夏季降水量と負の相関が、相対湿度とも負の相関がある。グラフ折れ線は11年移動平均を示し、偏差は1961～1990年の平均からで、図は中部地方における夏季の降水量変動を推定する(中塚2017)。

なお、降水<sup>18</sup>O/<sup>16</sup>O比の規定要因は雨量効果の他に複数あるため、雨量効果が主要定要因である地域において、かつ過去にも同様であったことが降水量の代替指標になる条件となる(関2011)。そして、年輪セルロース<sup>18</sup>O/<sup>16</sup>O比は夏季降水量の違いを反映するため、標準変動曲線の確立にはできるだけ狭い範囲での確立が必要となり、中部以西の西日本、東日本・北日本の日本海側、東日本・北日本の日本海側、の3区分が実用的である(中塚2015)。

### 3 代替指標からみた変動傾向

地球規模の気候変動原理は、<sup>14</sup>C生成率の変動①と<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C気温②・アルケノン気温③・δ<sup>18</sup>O降水量④(以下、文中では代替指標を①～④であらわす)の変動と因果関係があり、後3者は相関的であろう。そうであれば、個々の波長・波高に類似が、波頂・裾に同調が、認められるだろう。

①～④の折れ線を見るとそれぞれに固有の変化がみられ、特に③は他とはかなり異なって見える。弥生期前半や奈良平安期がそうである。また、折れ線グラフは折れ点の数によって印象が変わる場合もある。例えば、奈良平安期における③のグラフの折れ点数は10個、②のそれは45個あり、④はそれ以上ある。折れ点数が少ない場合にはその間の状況が読み取れない。観測地点の相違という前提があり、くわえて見た目の印象も異なることにより、因果関係や相関的關係が捉えにくくなるのではないだろうか。

①～④の折れ線を比較するにあたり、どこに着目すればよいか。気候変動は大きく寒冷化傾向と温暖化傾向があり、それらは対であることが多くみられる。そして、人間活動に大きく影響を及ぼすのは、寒冷化に至る激変動であろう。

よって、波頂とその前駆期である波の左片側(左側裾～波頂までの期間:急冷期と呼ぶ)は、変動の規模・激しさ、変動の発生過程を代表する。これらより、代替指標の見方として以下が考えられる。

まず、時期別の「変動の大きさ」「変動の激しさ」、これにより各時代の最大変動域の比較が可能となる(表Ⅲ-1)。第二に、急冷期～波頂における寒冷化に関わる「変動の大きさ」「変動の激しさ」、これにより急冷期～波頂の個別比較が可能となる(表Ⅲ-2)。第三に、代替指標が示す各急激期の寒冷化傾向、これにより急冷期～波頂ごとの性

表Ⅲ-1 時期別変動評価

時代名		最大値(範囲枠の高さ)				時代の長さ (hr)				
		①生成率	②偏差 気温(°C)	③気温 (°C)	④降水量 偏差					
続縄文	弥生	0.34	<b>1</b>	2.40	<b>2</b>	2.70	<b>1</b>	6.4	<b>1</b>	
	古墳	0.34	<b>1</b>	5.30	1.40	<b>3</b>	1.30	<b>3</b>	4.6	<b>3</b>
擦文	奈良平安	0.29	<b>2</b>	6.00	4.50	<b>1</b>	2.05	<b>2</b>	5.0	<b>2</b>
		変動の規模=最大値×hr								
続縄文	弥生	2.18	<b>1</b>	15.36	<b>2</b>	17.28	<b>1</b>			
	古墳	1.56	<b>2</b>	24.38	6.44	<b>3</b>	5.98	<b>3</b>		
擦文	奈良平安	1.45	<b>3</b>	30.00	22.50	<b>1</b>	10.25	<b>2</b>		
		変動の急峻性=最大値/hr								
続縄文	弥生	0.05	<b>3</b>	0.38	<b>2</b>	0.42	<b>1</b>			
	古墳	0.07	<b>1</b>	1.15	0.30	<b>3</b>	0.28	<b>3</b>		
擦文	奈良平安	0.06	<b>2</b>	1.20	0.90	<b>1</b>	0.41	<b>2</b>		
		変動の急峻性=(最大値/hr)×補正值				補正值				
続縄文	弥生	0.01	<b>2</b>	0.05	<b>3</b>	0.05	<b>3</b>	0.83		
	古墳	0.02	<b>1</b>	0.09	0.08	<b>2</b>	0.07	<b>2</b>	1.15	
擦文	奈良平安	0.01	<b>2</b>	0.25	0.19	<b>1</b>	0.09	<b>1</b>	1.06	

質と程度が把握可能となる(表Ⅲ-3)。また、代替指標間における寒冷化に関わるピークについて時差の有無、これにより代替指標間における因果的・相関的関係の有無が推定できる(表Ⅲ-4)。

表Ⅲ-1は、①～④について、「変動の急激性」=単位時間(hyr=100年)当たりの各代替指標の最大値、「変動の規模」=各代替指標の最大値×期間、を示した。これは図Ⅲ-3-1～4に示した網掛け枠(最大変動域)のかたち・大きさの比較である。補正值:5.3hyrとは各時代の平均である。太字数字は同一代替指標における大きさの順位を示す(屋久杉<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cは弥生のデータに欠があるので順位付けをしなかった)。

「変動の規模」:①の弥生・奈良平安では最大値と時代の長さ、古墳では時代の長さが規模を形成する主因である。③の弥生・奈良平安では最大値、古墳では時代の長さ、が規模を形成する主因である。④は3時代とも最大値と時代の長さが規模を形成する要因である。

「変動の急激性」:①の弥生・奈良平安では最大値と時代の長さが急激性を形成する要因である。古墳では最大値が急激性を形成する主因である。③の弥生・奈良平安では最大値、古墳では最大値・時代の長さが急激性を形成する要因である。④は3時代とも最大値と時代の長さが急激性を形成する要因である。各代替指標において「時代の長さ」が規模形成の主因なので、時代の長さを均等に補正して、3時代の「変動の急激性」を順位比較する。もっとも変動が激しい時期は奈良平安であり、次いで古墳、次いで弥生、となる。

表Ⅲ-2は、C～Iの急冷期(これを波形とも呼ぶ)について、波の「高さ①」「急冷期長②」から「変動の規模③」「変動の急激性④」を導いた。①・②を乗除することにより③④が導かれ、③の数值増加は規模の増大、④の数值増加は急激性が増す、ことを示す。

平均の上標準偏差:+1SD、平均の下標準偏差:-1SDの内を「中程」と呼ぶと以下に言い表せる。①の場合、+1SD<:高い・-1SD>:低い。②の場合、+1SD<:長い・-1SD>:短い。③の場合、+1SD<:大きい・-1SD>:小さい。④の場合、+1SD<:激しい・-1SD>:緩やか。

表Ⅲ-2 急冷期の規模・急激性

		①生成率:				②偏差気温				③気温				④降水量偏差				
		高さ①	急冷期長②	規模③	急激性④	高さ①	急冷期長②	規模③	急激性④	高さ①	急冷期長②	規模③	急激性④	高さ①	急冷期長②	規模③	急激性④	
				①×②	①/②			①×②	①/②			①×②	①/②			①×②	①/②	
(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)	(°C)	(hyr)		
続縄文	弥生	C	3.70	0.80	2.96	4.63					0.45	0.90	0.41	0.50	1.00	0.70	0.70	1.43
		α	1.80	0.40	0.72	4.50					0.10	0.60	0.06	0.17	0.50	0.50	0.25	1.00
		β	1.90	0.30	0.57	6.33					0.90	0.50	0.45	1.80	1.30	0.20	0.26	6.50
続縄文	古墳	D	2.40	0.70	1.68	3.43	0.50	0.70	0.35	0.71	1.50	0.40	0.60	3.75	0.90	0.70	0.63	1.29
		E	2.30	0.30	0.69	7.67	2.30	0.70	1.61	3.29	1.50	0.50	0.75	3.00	0.90	0.60	0.54	1.50
		F	2.40	0.70	1.68	3.43	2.40	0.70	1.68	3.43	0.50	0.40	0.20	1.25	1.25	0.70	0.88	1.79
擦文	奈良平安	G	2.50	0.30	0.75	8.33	0.40	0.30	0.12	1.33	1.60	0.70	1.12	2.29	0.40	0.30	0.12	1.33
		H	2.10	0.50	1.05	4.20	2.70	0.40	1.08	6.75	0.70	0.40	0.28	1.75	0.90	0.50	0.45	1.80
		I	2.20	0.50	1.10	4.40	3.70	0.60	2.22	6.17	0.45	0.40	0.18	1.13	0.50	0.50	0.25	1.00
	総平均値	2.37	0.50	1.24	5.21	2.00	0.57	1.18	3.61	0.86	0.53	0.45	1.74	0.85	0.52	0.45	1.96	
	標準偏差	0.52	0.18	0.72	1.70	1.19	0.16	0.75	2.24	0.52	0.16	0.31	1.08	0.31	0.17	0.24	1.63	
	+1SD～ -1SD	2.89 1.85	0.68 0.32	1.96 0.52	6.91 3.51	3.19 0.81	0.73 0.41	1.93 0.43	5.85 1.37	1.38 0.34	0.69 0.37	0.76 0.14	2.82 0.66	1.16 0.54	0.69 0.35	0.69 0.21	3.59 0.33	

①において、Cは高く・長い、大きいけれど長いため緩和された中程の波。αは低く・中程で、中程で中程の波。βは中程・短い、小さいけれど短いため激化した中程の波。Dは中程・長い、中程であるが長いため穏やかな波。Eは中程・短い、中程であるが短いため激しい波。Fは中程・長い、中程であるが長いため穏やかな波。Gは中程・短い、中程であるが短いため激しい波。Hは中程・中程、中程で中程の波。Iは中程・中程、中程で中程の波。

③において、Cは中程・長い、中程であるが長いため穏やかな波。αは低く・中程、小さく穏やかな波。βは中程・中程、中程で中程の波。Dは高く・短い、中程であるが高く短いため激しい波。Eは高く・中程、中程であるが高いため激しい波。Fは中程・短い、中程で中程の波。Gは高く・長い、大きいけれど長いため緩和された中程の波。Hは中程・短い、中程で中程の波。Iは中程・短い、中程で中程の波。

④において、Cは中程・長い、大きいけれど長いため中程の波。αは低く・中程、中程であるが低くいため穏やかな波。βは高く・短い、中程であるが高く・短いため激しい波。Dは中程・長い、中程で中程の波。Eは中程・中程、中程で中程の波。Fは高く・長い、大きいけれど長いため中程の波。Gは低く・短い、低く・短いため小さいが中程の波。Hは中程・中程、中程で中程の波。Iは低く・中程、中程であるが低くいため穏やかな波。

①のD・F、E・G、H・Iは極めて類似する波形で、α・βはやや類似する波形である。いっぽうCは類似する波形はなく個性的である。③のD・E、F・H・Iは極めて類似する波形で、Cは類似する波形はなく孤立的である。これら以外はやや個性的である。④のC・D、E・H、α・Iは極めて類似する波形で、βは類似する波形はなく個性的である。これら以外はやや個性的である。

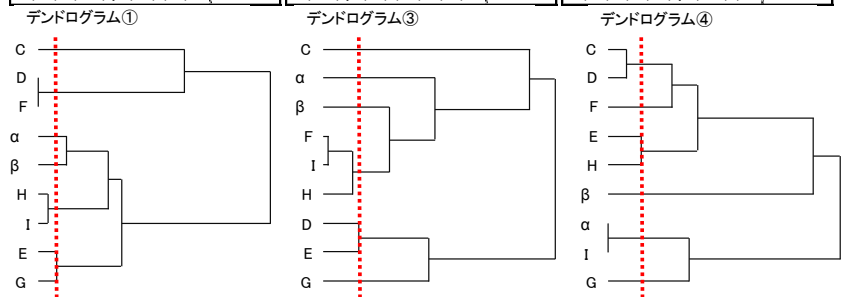
①・③は②・④を導くので①・③を変数としたクラスター分析により群の関係をみる。距離計算はユークリッド距離、統合後の距離計算はウォード法を用いた。表Ⅲ-3がその結果で、

図Ⅲ-5はその樹形図である。「極めて類似する」(図Ⅲ-5における破線で区切った左側の結合)

はいずれも短い距離で結合している。①では0.384以下、③では0.612以下、④では0.593以下であった。くわえて、①では「やや類似する」α・βは破線のすぐ近く0.580で結合するので妥当な群名称である。①におけるC(2.952)、③におけるC(3.484)、④におけるβ(3.617)は結合距離が極めて長いので「個性的」といえる。

表Ⅲ-3 クラスター結合過程

①結合過程		③結合過程		④結合過程	
結合個体	結合距離	結合個体	結合距離	結合個体	結合距離
D,F	0.001	F,I	0.096	α,I	0.001
H,I	0.192	F,I,H	0.499	C,D	0.327
E,G	0.384	D,E	0.612	E,H	0.593
α,β	0.580	β,F,I,H	1.114	C,D,F	1.134
α,β,H,I	1.419	D,E,G	1.782	α,I,G	1.422
α,β,H,I,E,G	1.680	α,β,F,I,H	1.883	C,D,F,E,H	1.575
C,D,F	2.952	C,α,β,F,I,H	3.484	C,D,F,E,H,β	3.617
C,D,F,α,β,H,I,E,G	4.683	C,α,β,F,I,H,D,E,G	3.908	C,D,F,E,H,β,α,I,G	4.084



図Ⅲ-5 波形の類似群 末吉ほか 2014 add in soft を使用

表Ⅲ-4 波形の性質

		①生成率	②偏差気温	③気温	④降水量偏差	
		0.70 ≤ 低率 ≤ 0.82 0.82 < 中率 ≤ 0.94 0.94 < 高率 ≤ 1.07	-3.2 ≤ 冷涼 ≤ -1.1 -1.1 < 中立 ≤ +1.0 +1.0 < 温暖 ≤ +3.2	18.1 ≤ 冷涼 ≤ 19.6 19.6 < 中立 ≤ 21.1 21.1 < 温暖 ≤ 22.6	-1.4 ≤ 湿潤 ≤ -0.5 -0.5 < 中立 ≤ +0.4 +0.4 < 乾燥 ≤ +1.3	
		遷移、傾向	遷移、傾向	遷移、傾向	遷移、傾向	
統 縄 文	弥 生	C	低率→高率、増		中立における降温 乾燥→中立、増	
		α	低率→中率、増		冷涼における降温 中立における増	
		β	低率→高率、増		冷涼における降温 中立→湿潤、増	
	古 墳	D	低率→高率、増	中立における降温	中立→冷涼、降温	中立→湿潤、増
		E	低率→高率、増	温暖→中立、降温	中立→冷涼、降温	湿潤→中立、減
		F	低率→高率、増	温暖→冷涼、降温	中立→冷涼、降温	湿潤→中立、減
捺 平 安	奈 良 平 安	G	中率→高率、増	温暖→中立、降温	温暖→中立、降温	中立における増
		H	中率→高率、増	温暖→中立、降温	中立における降温	中立における増
		I	低率→高率、増	冷涼→温暖、昇温	冷涼における降温	中立における減

表Ⅲ-2では波形には類似があつて、その類似は代替指標ごとに異なつた群を形成することが理解できた。表Ⅲ-4ではそれぞれの波形にどのような性質があるかをみる。

①～④における①の最大値・最小値の差を3つに分級した。

差分を分級に割り

当てた項目を「遷移」、

①～④の率・温度・降水量偏差の増減を「傾向」と呼ぶ。「遷移」の列にある「→」は異なる分級帯への移行を示し、「〇〇における」は同一分級帯であることを示す。分級帯を跨ぐ遷移は激しい、隣接分級帯への遷移は中程度、同一分級帯内の遷移は緩やか、と区分した。傾向については、①は増・減、②は降温・昇温、③は降温・昇温、④は増・減、という。

①において、「低率→高率」の激しい遷移はC・β・D・E・F・I、「中率→高率」の中程度の遷移はG・H、「低率→中率」の中程度の遷移はα、全て「増」傾向である。

③において、「温暖→中立」の中程度の遷移はG、「中立→冷涼」の中程度の遷移はD・E・F、「中立における」の緩やかな遷移はC・H、「冷涼における」の緩やかな遷移はα・β・I、全て「降温」傾向である。

④において、「増」と「減」傾向がある。「増」に関しては、「乾燥→中立」の中程度の遷移はC、「中立→湿潤」の中程度の遷移はβ・D、「中立における」の緩やかな遷移はα・G・H。「減」に関しては、「湿潤→中立」の中程度の遷移はE・F、「中立における」の緩やかな遷移はI。

表Ⅲ-5 波頂のずれ

			①C～Iを±0			②C～Iを±0			③C～Iを±0
			②C～Iとのズレ(yr)	③C～Iとのズレ(yr)	④C～Iとのズレ(yr)	③C～Iとのズレ(yr)	④C～Iとのズレ(yr)	④C～Iとのズレ(yr)	④C～Iとのズレ(yr)
統 縄 文	前 葉	弥 生	C	—	0	-20	—	—	+20
			α	—	0	+20	—	—	-20
			β	-15	0	-15	+15	+10	+15
	後 葉	古 墳	D	0	-25	0	-25	0	-25
			E	0	0	0	0	0	0
			F	-40	0	+10	+40	+50	-10
捺 平 安	奈 良 平 安	G	-60	0	+20	+60	+80	+20	
		H	0	0	0	0	0	0	
		I	-50	+30	-20	+80	+30	+50	
ズレ絶対値の合計			(165)	55	105	(220)	(170)	160	
ズレ絶対値の平均			(23.6)	6.1	11.7	(31.4)	(24.8)	17.8	
0の個数			(3～5)	7	3	(2～4)	(3～5)	2	

\*年数(yr)につくーは遡ったピーク、+は下ったピーク、網掛けは30yr以上のズレ

#### 4 各代替指標の関係

代替指標間にはどのような関係があるのだろうか。表Ⅲ-5は、代替指標間における波頂の時差=ズレについて示したもので、ズレに基づいて代替指標間の因果的・相関的關係を推定してみる。地球規模の気候変動原理により、①は先駆し②・③・④に関与するので、①から見てどれくらいのズレがあるかを主として示した。ただし、F以降の波頂は30yr以上(≒1世代とみなせる時間量)の大きなズレが多

くあり、Iは特にそうである。F以降の波頂はズレによる代替指標の関係評価は難しい。

①と③は、③が①に対して「+」「-」あり、ズレ絶対値の合計は55yr(55 yr /1600 yr →3.4 yr /100 yr、1600 yr は弥生～平安の合計値)、30yr以上のズレはIにみられる。①と④は、④が①に対して「+」「-」あり、ズレ絶対値の合計は105yr(105 yr /1600 yr→6.6 yr /100 yr)、30yr以上の大きなズレはない。③と④は、④が③に対して「+」「-」あり、ズレ絶対値の合計は160yr(160 yr /1600 yr→10.0yr /100 yr)で、30yr以上のズレはIにみられる。

もし①に対して「+」になれば因果的關係が示唆される。②においては「-」、③④においては「+」「-」の両方がみられるので確かな因果的關係を認めることは難しい。

①と③、①と④のズレ絶対値の合計が弥生～平安に対して100年あたり10年以下のズレであり、かつ、それらのズレ絶対値の平均はほかよりも少ないので、相関的關係がうかがえ、「0=時差無」の個数が多いので①と③はそれがより強い。③と④については平均値がやや大きい、30yr以上の大きなズレがIのみであることから、前2組に比べてやや弱い相関的關係がうかがえる。

なお、②に関しては $C \cdot \alpha$ の値がないので一応除外した。②が①に対して全て「-」であり連鎖的關係はみられない。ズレ絶対値の大きさ(165～220yr /1100yr→14.9～19.9yr /100 yr、165～220±0～X?yrなので14.9～19.9yr±X? /100 yr、1100yrはβ左裾～平安の合計値)・30yr以上のズレの多さ(F・G・I)、から③④との相関的關係は期待できない。

**表Ⅲ-5**の結果は以下からも支持される。**表Ⅲ-1**では③と④は補正された激しさの順位において同じ順番であることから、両者には相関的關係が示唆される。

**表Ⅲ-2・3**では波形ごとに特徴を抽出すると、代替指標に同じ内容がみられる。Cでは①・④、αでは③・④、βでは①・③、Eでは①・③、Fでは③・④、Gでは③・④、Hでは①・③・④、Iでは①・③、である。①・③が3つの波形に、③・④が3つの波形にあり、①・③・④をそれぞれに振り分けると各4例となる。①・③、③・④に相関的關係を示唆させる。また、①は全て「増」傾向で、③全て「降温」傾向であり同調する。

②③④は異なる対象地域(②:北陸～東北南部地方における夏季気温変動=冷温帯落葉広葉樹林、③:北海道の太平洋側西部・日本海側中北部における夏季気温変動=亜寒帯林、④:中部地方における夏季降水量変動=暖温帯常緑広葉樹林)にもかかわらず、②～④は①に対して「+」ズレが生じにくく、「0」ズレ無し個数が多い。これは時差が生じる連鎖的因果ではなく、即時に連動する因果關係といえる。

**表Ⅲ-2～4**より①・③、①・④には即応的因果關係があり、関係には強弱がある(①・③>①・④)。①・③は、太陽活動の静穏化(黒点数減)=宇宙線量の増= $^{14}C$ 生成率の増、この結果といえる北海道の太平洋側西部・日本海側中北部における夏季気温の降温である。両者に強い同調があるということである。

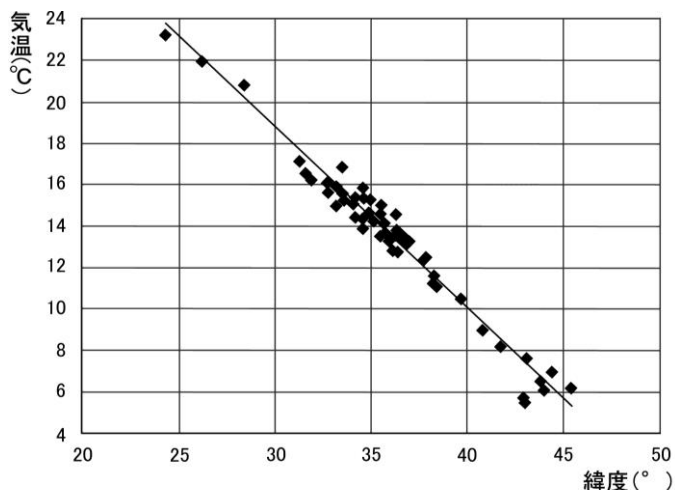
## 2 節 北海道における気候変動と環境変化

### 1 気候変動の内容

**表Ⅲ-4**によれば、弥生は中立～冷涼までの変動があり、緩やかな遷移が生じ、湿潤傾向である。古墳は中立～冷涼までの変動があり、中程度の遷移が生じ、湿潤傾向と乾燥傾向

がある。奈良平安は温暖～冷涼までの変動があり、広範な中で遷移が生じ、やや湿潤傾向がある。分級の幅を②は2℃、③は1.5℃、とし、それらを超える変動について「激しい」「中程度」と区分した。自然環境変化が現れる激変動とはどのようなものなのか。

気温変化は、地表面における気温変化の大部分は太陽放射に支配されており、球面である地表面は緯度によって太陽との角度が変化し、それは照射面積の増減となる。緯度が高くなるほど照射面積が大きくなり(日射エネルギーの分散)気温が低下する。対流圏における日射エネルギーの偏在は全球的には鉛直方向において顕在している(木村 2017)。



図Ⅲ-6 年平均気温の緯度分布 近藤 2008 引用加筆

図Ⅲ-6 は 1915～1940 年の年平均気温の緯度分布である。気温は観測地点の標高による差を対流圏における気温減率 $\approx 0.65^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ (ICAO の定義では  $0.649^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ ) によって標高補正した平均である。

緯度と気温の相関により以下の単回帰式が導かれる(近藤 2008)。

$$y = -0.8739x + 45.002$$

$0.87^{\circ}\text{C}/^{\circ}$  より  $2.0^{\circ}\text{C}$  の変化は緯度換算すると  $2^{\circ} 18'$ 、 $1.5^{\circ}\text{C}$  の変化は緯度換算すると  $1^{\circ} 42'$  に

あたる。 $2^{\circ} 18'$  を経線上の距離に換算すると 255.2km、 $1^{\circ} 42'$  を経線上の距離に換算すると 188.6km になる ( $1^{\circ} \approx 110.94297\text{km}$ 、回転楕円体の表面である地表は、緯度が高くなるほど子午線の長さが長くなるためおおよその値)。

③のサンプル採取地点は長万部町国縫沖(以下、地名は図Ⅲ-7 上参照)8km で(川幡ほか 2016)、その地点の AD2000 年における推定気温は  $21.3^{\circ}\text{C}$  で、緯度は北緯  $42^{\circ} 26'$  である。

表Ⅲ-6 気温変動と緯度の関係

*AD2000推定 =21.3℃	変動幅気温 (℃)		最低値-平均値				最高値-平均値			
			温度 差	上記差の 地理的換算		温度 差	上記差の 地理的換算			
	最低値	最高値		緯度	子午線 距離		緯度	子午線 距離		
時代名										
続縄文	弥生	18.1	20.5	-3.2	-3° 40'	-406.8	-0.8	-0° 55'	-101.7	
	古墳	19.9	21.3	-1.4	-1° 36'	-177.5	0.0	0° 00'	0.0	
擦文	奈良平安	18.0	22.7	-3.3	-3° 40'	-406.8	1.4	1° 29'	164.6	

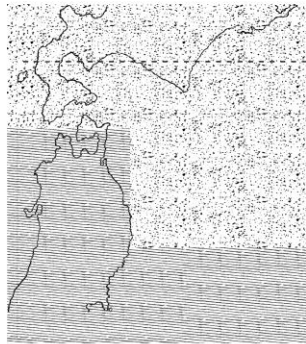
\*マイナス値はサンプル採取地点を基点に北方向を表す

表Ⅲ-6 は採取地点を基点とし、各時代の推定された気温変動の最大・最小値を緯度・子午線距離に換算して、採取地点の移動を仮想した。地点の北上=寒冷、地点の南下=温暖により変動の程度が現在の地理的位置とし

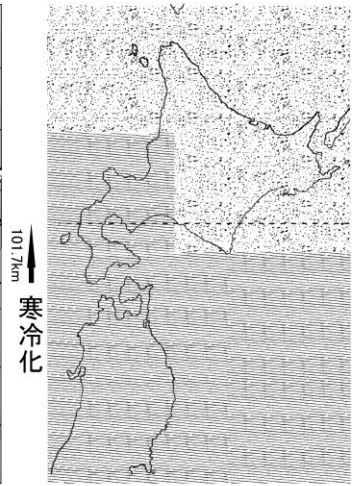
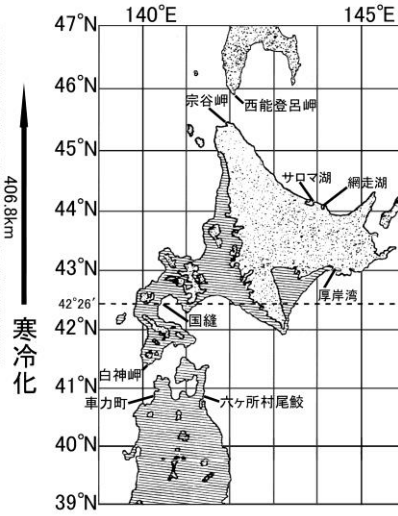
て推定できる(図Ⅲ-7)。弥生は「北へ  $3^{\circ} 40'$  ～  $0^{\circ} 55'$ 」、古墳は「北へ  $1^{\circ} 36'$  ～  $0^{\circ} 00'$ 」、奈良平安は「北へ  $3^{\circ} 40'$ 、南へ  $1^{\circ} 29'$ 」、である。国縫の緯度は  $42^{\circ} 26'$  であるから、弥生には「 $46^{\circ} 06'$ 、 $43^{\circ} 31'$ 」、古墳には「 $44^{\circ} 02'$ 」、奈良平安には「 $46^{\circ} 06'$ 、 $40^{\circ} 57'$ 」、へ基点が移動したことに相当する。なお、子午線方向の距離では弥生「北へ 406.8km～101.7km」、古墳「北へ 177.5km」、奈良平安「北へ 406.8km、南へ 164.6km」である。北海道の最北端・宗谷岬  $45^{\circ} 31'$ 、最南端・白神岬  $41^{\circ} 23'$  で、弥生・北海道の最北端・宗谷岬  $45^{\circ} 31'$ 、最南端・白神岬  $41^{\circ} 23'$  であり、国縫の  $42^{\circ} 26'$  線が北海道の最北端・最南端の線を



弥生

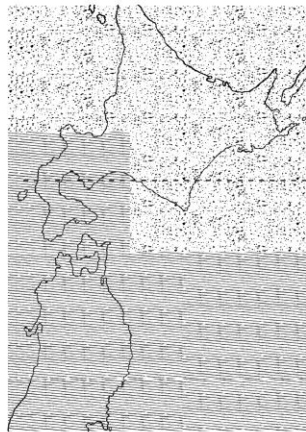


β 頂部の時期にあたる

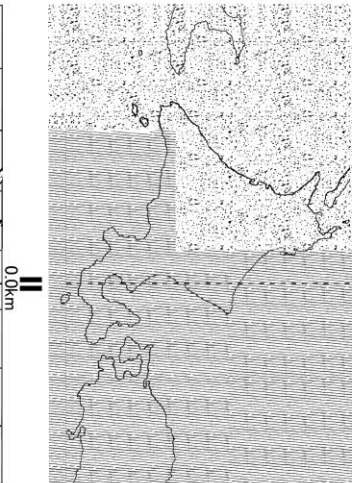
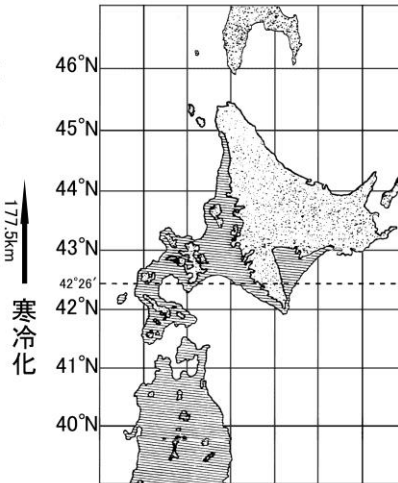


○ 左裾部の時期にほぼあたる

古墳

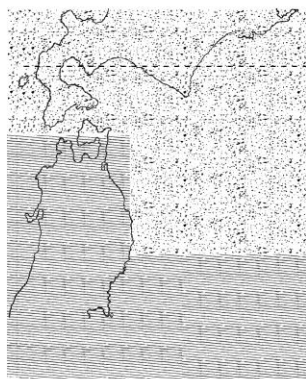


E 頂部の時期にあたる

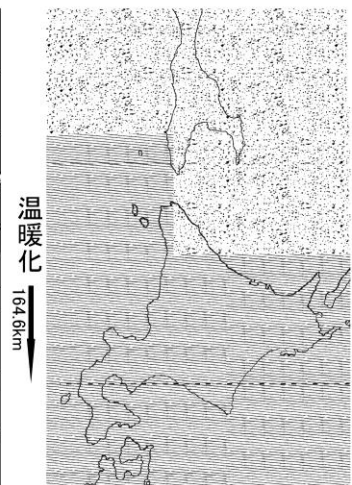
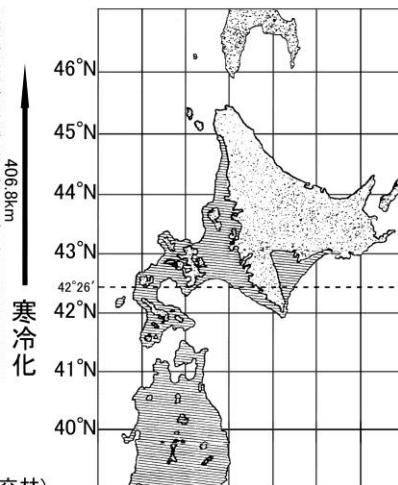


E・F 左裾部の時期にあたる



奈良平安



I 頂部の時期に近い



G 左裾部の時期にあたる

 亜寒帯林(北方針広混交林)  
 冷温帯落葉広葉樹林

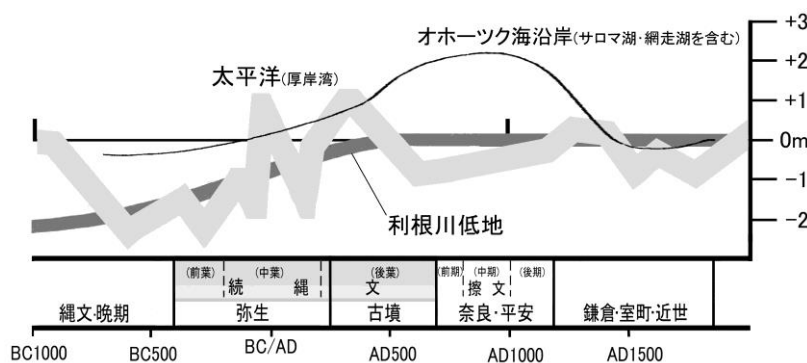
図Ⅲ-7 気温変動と森林帯の移動

超えるのは、弥生・奈良平安の最寒冷傾向;46° 06′ (樺太・西能登呂岬から北へ 24km)、奈良平安の最温暖傾向;40° 57′ (日本海側:青森県つがる市車力町、太平洋側:青森県六ヶ所村尾駈)である。変動角より弥生は寒冷傾向、古墳はやや寒冷傾向、奈良平安は両傾向といえる。

## 2 北海道における海水準変動

前節で推定した気候変動は具体的にどのような環境変化として現れているのだろうか。地形で見ると海進・海退(ユースタティックな海水量変動)があったであろうこと、植物種・魚貝種・海獣種・陸獣種の消長、が予想される。

弥生期以降には「弥生の小海退」、「平安海進」が知られている。地殻変動の影響が少ないと考えられる利根川低地(田辺ほか 2016)・オホーツク沿岸(平井 1985)と地殻変動が見込まれる太平洋沿岸(重野 2013)の例を比較した(図Ⅱ-8、図Ⅱ-8の地名については図Ⅱ-7上段参照)。



図Ⅱ-8 海水準変動 平井 1985・重野 2013・田辺ほか 2016 引用加筆

利根川低地では BC1900 から降下が始まり、BC1550 頃(縄文後期中葉頃)に海水準 0m 以下に、BC1000(縄文晩期前葉)に -2m の底で、BC600~AD400 にかけて上昇し、AD400 以降 0m 続く。厚岸

湾では BC1000 から降下が始まり、BC600 で -2m の底で、BC600~AD400 にかけて上昇し、AD400 から下降して AD650 が底となり AD1400 まで上昇する。小刻みな沈降・上昇がみられる。未校正であるオホーツク沿岸の曲線を Intcal09 の校正曲線(P.J.Reimer et al. 2009)に当てはめて配置すると、BC600 から AD900 にかけて 0m から上昇し、AD900 から下降して AD1600 が底となりその後上昇する。小刻みな沈降・上昇がみられない。

3 地域に共通するのは BC600~AD400 にかけての上昇傾向で、この傾向は全国的であることを示す。この時期は 3~2kyrBP といわれる「弥生の小海退」のうち海水準回復期にあたる。相違点は AD400 以降にあり地殻変動が係わった可能性がある。AD400 から AD1400 までのオホーツク沿岸と厚岸湾の相反、AD1400 以降のオホーツク沿岸と厚岸湾の類似、である。

「平安海進」については利根川低地・厚岸湾では見られない。地殻変動の影響が少ないと考えられる東京低地・中川低地(田辺ほか 2013)においては利根川低地と同様に AD500 以降はほぼ 0m で推移している。いっぽう、地殻変動は考慮されない例においては、富山平野~金沢平野の 1250~1000yrBP 頃に 3.0m の上昇が推定され(藤 2002)、中海・宍道湖の 1500~1100yrBP 頃に 0.4m の上昇が推定されている(中村 2006)。東京低地・中川低地の <sup>14</sup>C 年代値は暦年代較正がされており、富山湾周辺、富山平野~金沢平野、中海・宍道湖の値は未校正である。Intcal09 の校正曲線(P.J.Reimer et al. 2009)に当てはめると、富山平野~金沢平野 1250yrBP→AD750 は波 G の左裾、富山平野~金沢平野 AD1000yrBP→AD1025 は波 I 頂部にあたる。中海・宍道湖 1500yrBP→AD550 は波 E-F の間、中海・宍道湖 1100yrBP→AD900 は波 H 頂部にあたる。

2 地域の上昇開始は温暖傾向期にあたり、ピークはいずれも寒冷期にあたる。富山平野～金沢平野と中海・宍道湖の海水準変動は「平安海進」と言い切れない。いずれにしても両件については地殻変動の有無を検討する必要がある。

### 3 珪藻・アルケノンからみた環境変化

アルケノン気温(以下 A. SST と略称)変動と海水準変動は、時代ごとの比較において、弥生の寒冷と海退、古墳のやや温暖とやや海進、は整合する。しかし、奈良平安の AD700 以降は寒冷で海進と整合しない。地殻変動を考慮する必要がなく、アルケノンとほぼ同じ棲息環境である珪藻・貝類の変動と比較してみよう。

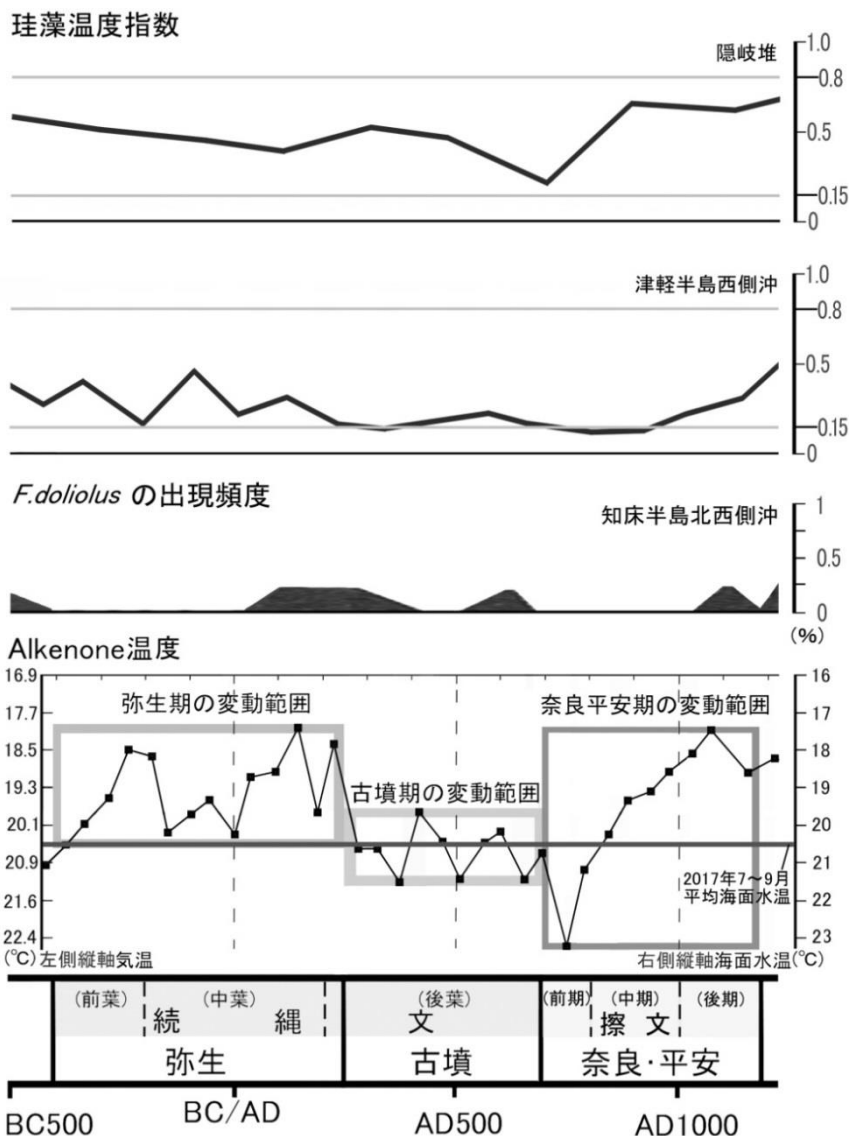
**図Ⅲ-9** 上段 2 つは日本海における柱状堆積物試料の珪藻温度指数(Td 値、以下 Td と略称)を示す。Td は 14 種の暖流系種頻度と 11 種の寒流系種頻度の和に対する暖流系種頻度の比である(小泉 1987)。現在では指標種の追加・浅海種と沿岸種の除外をした Td' とともに Td も有効であるとされる(谷村 2014)。

Td 変動は海水面温度・海水準変動と千年単位で対応するが、3500 年以降は海水準変動との同調は不詳であると結論し、そのうえで

3000 年付近の Td ピークは弥生温暖期、2000 年付近の Td ボトムは古墳寒冷期、1000 年付近の Td ピークは奈良平安鎌倉温暖期、と推定した(小泉 1987)。その後、1500 年付近の Td

(0.25 位: 谷村 1981 の図 6 より推定) ボトムは「古墳寒冷期」、1000 年付近の Td (0.70 位: 谷村 1981 の図 6 より推定) ピークは「中世温暖期」、と気候との対応を推定した(小泉 1995)。

現在の日本海は、Td=0.8< : 暖流域、Td=0.8~0.15 : 混合水域、Td=0.15> : 寒流域、に区分され(柳沢 1993)、沿岸の暖流域は青森県深浦町



図Ⅲ-9 珪藻とアルケノン温度 嶋田ほか 2000・川幡 2018 引用加筆

須郷崎:北緯 40° 25' 以南、混合水域は須郷崎～樺太・西能登呂岬西側: 46° 位まで、寒流域は北緯 40° 以北の大陸側に拡がり日本沿岸にはない(谷村 1981)。この水温領域をあてはめると、隠岐堆では BC500～AD1200 は混合水域で現在より冷水傾向であり、津軽半島沖では BC500～AD250・AD400～700・AD950 以降が混合水域、AD250～400・AD700～950 が寒流域で現在より一部で冷水傾向である。

隠岐堆と津軽半島沖の折れ線は前述した水温領域の幅においては大まかに対応する。その期間において、隠岐堆 Td : 0.5 は混合水域の中位値、津軽半島 Td : 0.15 は混合水域の低位値であるから、津軽半島は隠岐堆に比べて寒流域の影響が顕著に Td に反映したと考えられる。対応しない期間: AD250～400・AD700～950 についても以下が考えられる。隠岐堆と津軽半島沖は逆相である。これは混合水域を挟んで暖流域と寒流域にみられる傾向といわれる(柳沢 1993)。隠岐堆と津軽半島沖はともに対馬暖流中の混合水域であるから、津軽半島沖では暖流系種を上回って寒流系種が増加したと考えられる。

3 つ目は知床半島沖における柱状堆積物試料の暖流系種 *Fragilariopsis doliolus* (別名 *Pseudoeunotia doliolus*:小泉 1987 があげた暖流系種の 1 つ)の出現頻度である(嶋田ほか 2000)。知床半島沖において *F. doliolus* は AD500～700 と AD1050 以降に出現する。そして、*F. doliolus* 出現頻度(*F. d*頻度と略称)は津軽半島沖 Td と対応し、それをより先鋭・断続化した様相である。対応しない期間は *F. doliolus* が未検出であるから、オホーツク沿岸には対馬暖流の一部である宗谷暖流が流れるものの流末になるため海水温が低くなり生息しなかったと考えられる。海面下深度 400 cm (出現頻度最高値 0.9%) における *F. doliolus* と海水指標種・寒流系種の *F. d*頻度は 0.02 (嶋田ほか 2000 の図 3 より算定)で、最高値においても微弱な出現であり、知床半島沖は寒流域に含まれるといえ、東樺太海流(寒流)の強弱に影響を受けていると考えられる。

AD350 以降においては、これら Td と *F. d*頻度は利根川低地の一定的な海水準変動と対応せず、<sup>あつけし</sup>厚岸湾と富山平野～金沢平野と中海・宍道湖の海面変動とは AD 700～950 を除いてほぼ対応する。Td と *F. d*頻度は「寒冷と海面低下、温暖と海面上昇」を説明する可能性が残された。ただし、所謂「平安海進」という長期の変動ではなく、AD500～700 と中断を含んで AD950 以降に「温暖と海面上昇」があったといえる。

A. SST と *F. d*頻度は、BC/AD150～AD200、AD400～500、AD700～750、AD1030～1060 を除いて対応がよい。大まかには弥生前半の寒冷傾向・古墳期の温暖傾向・奈良平安後半の寒冷傾向と対応する。

対応しない期間では両者は逆相である。噴火湾とオホーツク沿岸はともに対馬暖流の影響を受けるものの、おおきな相違点はことなる寒流が各々の海域を流れていることである。噴火湾では津軽暖流と親潮系水の水塊交替が起こることから A. SST が変動するだろうし、オホーツク沿岸では宗谷暖流と東樺太海流の強弱により *F. d*頻度が変動する。4 つの時期の不对応は異なる寒流における強弱に起因すると考えられる。

### 3 節 遺跡出土の遺存体からみた環境変化

#### 1 遺存体の内容

続縄文期における貝塚出土の動物遺存体は高橋(1991)によってまとめられている。表Ⅲ-7は高橋の表から暖流種を抽出し、以下の理由から加筆したものである。

カキ類は温暖種ではないが、ウネナシトマヤガイがカキ礁に付着して生息すること(近藤 2009)、産卵水温がハマグリ・ウネナシトマヤガイにほぼ等しいことから掲載した。マガキ属マガキは全道に、オハグロガキ属ケガキは北海道南部に生息している(波部 1977)。

暖流系回遊魚類については以下をあげた。マグロ類のうちクロマグロは日本海側が宗谷岬、太平洋側が襟裳岬まで回遊し(長澤ほか 1991)、カジキ類のうちメカジキは噴火湾・太平洋側まで回遊する(中込 1958)。クロマグロは太平洋東部における漁獲期最適水温、メカジキの漁獲期最適水温を示した(新田ほか 1980)。ブリは主に日本海側～知床岬、太平洋側

表Ⅲ-7 海水温と動物遺存体 高橋 1991 引用加筆

7～9月 各海域の 海面水温 2017年	海域	遺跡名	時期	土器型式 表Ⅴ-1参照	産卵水温			漁獲 適水温	生息 水温	漁獲期 最適水温		生存 限界水温		
					20～27	23～24	23～24	14～18	18～24	18～22	14～18	7～30	9～28	
					ハマグリ	ウネナシ トマヤガイ	カキ 類	ブリ	スズキ	カジキ 類	マグロ 類	タイ 類	フグ 類	
19.5～23.0	津軽 海峡	久根別	晩期中葉	大洞C2	◎									
		茂別		恵山(アヨロ2ab)			+				+			
		恵山貝塚(崖下)	続縄中葉	恵山(アヨロ2ab)					+					
		恵山貝塚		恵山(アヨロ2ab・3)			+	+	+	+	+	+		
17.8～23.3	日本海 南部	三ツ谷貝塚	晩期前葉	大洞B										
		栄磯岩陰		大洞BC					+					
		栄磯岩陰		恵山(アヨロ1・3)					+					
	日本海 中部	フゴッペ洞窟	続縄中葉	後北C?			+							
		(内陸)江別太		江別太1～後北A					○					
		(内陸)ウサクマイN	続縄後葉・擦文	北大(円刺群Ⅱ～Ⅷ)						+				
	17.8～23.3	日本海 北部	オシヨナイ2	続縄中葉	南川IV・宇津内Ⅱb									+
			香深井A 魚骨層IV		十和田後半				+					
			亦稚貝塚		十和田・刻文							+		+
			浜中2		刻文			+						
			利尻富士役場		刻文									+
			富磯貝塚		刻文			+						
オンコロマナイ貝塚			オホーツク	刻文・沈線文			+				+		+	
香深井A 魚骨層1など				沈線文				+			+			
香深井6				沈線文									+	
浜中2				沈線文			+						+	
浜中2				貼付文(藤本d)									+	
香深井5				元地式				+					+	
浜中2		元地式			+					+				
香深井6	擦文	後期前半										+		
14.5～17.5	オホー ツク海 東部	オシャマップ川	続縄中葉	宇津内Ⅱb I				+						
		トロロチャシ		貼付文(藤本d)					+					
		トロロチャシ		貼付文(藤本d)				+			+			
		最寄貝塚	オホーツク	貼付文(藤本d)		+	+	+			+	+		
	オタフク岩		貼付文(藤本e)			+								
	根室 海峡	弁天島		刻文							+			
オンネモト			貼付文(藤本e)			+								
14.5～17.5	太平洋 東部	幣舞	晩期後葉	ヌサマイ	+		+	+	+	+	+	+	+	
		緑ヶ岡		緑ヶ岡				+	+					
		天寧1		緑ヶ岡			+		+		+			
		興津	続縄前葉	興津							+			
		三津浦	続縄中葉	下田ノ沢Ⅰ・Ⅱ	+						◎			
下田ノ沢		下田ノ沢Ⅰ・Ⅱ	◎						+					
19.5～21.5	噴火湾	有珠善光寺2	晩期前葉	大洞B	+		○							
		尾白内貝塚		恵山(アヨロ2ab)			+		+		+			
		小幌洞窟B		恵山(アヨロ1・3)							+			
		有珠モンリ	続縄中葉	恵山(アヨロ1・2ab?)	+	+	+				+			
		有珠砂丘		恵山(アヨロ2b・3)						+		+		
		南有珠6		恵山(アヨロ1・2ab)					+	+				
		小幌洞窟A	擦文	前期前半							+			
南有珠7		中期後半							+					
17.5～19.8	太平洋 西部	春立貝塚	擦文?	?						+				

が襟裳岬まで回遊し、少数それ以東にも来遊する(星野 2017)、漁獲適水温(新田ほか 1980、星野 2017)を示した。

スズキは北海道南部の沿岸魚類とされる(全国豊かな海づくり推進協会 2006)。しかし、2017年2~3月の道南日本海側の海水温はスズキの生息水温7~30℃(新田ほか 1980)を下回るので夏季に津軽海峡以南から来遊してくるものと考えられる。道南日本海側の夏季水温は18~24℃を参考値として示した。

暖流系沿岸魚類については以下をあげた。タイ類は、マダイが全域に生息し、チダイ・クロダイが日本海側・太平洋側に、ヘダイが日本海側に生息する(長澤ほか 1991)。マダイの生存限界水温を代表とした。最低値は7℃である(新田ほか 1980)。フグ類は、トラフグ・マフグが全域に生息する(長澤ほか 1991)。トラフグの生存限界水温を代表とした。最低値は9℃である(新田ほか 1980)。

## 2 貝化石

貝には温暖種・寒冷種(松島 1984)があり、その交替・消長は暖流・寒流強弱に支配される。北海道周辺海域では温暖種が間歇的に産出する(紀籐 1998)。縄文晩期以降における温暖種の産出は以下のとおりである(松島 2010)。渡島半島南部ではハマグリ・シオフキガイが2400~2300yrBPに、オホーツク沿岸ではウネナシトマヤガイが2500~2300yrBP・1000~900yrBP、そのほか、渡島半島南部では大洞C2式期の北斗市久根別遺跡貝層からハマグリ、噴火湾では大洞B式期の有珠善光寺2遺跡貝層からハマグリ、恵山式期の有珠モシリ遺跡貝層からハマグリ・ウネナシトマヤガイ、が出土している(高橋 1991)。

松島(2010)の2500~2300yrBP・1000~900yrBPは、Intcal109の校正曲線(P.J.Reimer et al. 2009)に当てはめると、2700~2340calBP(=BC750~390:晩期後葉)・925~900calBP(=AD1025~1050:平安)にあたり、*A. SST*と*F. d*頻度は対応がよく温暖傾向を示していた。大洞B式期(晩期前葉前半)は<sup>14</sup>C生成率における波頂A-波頂B間、大洞C2式期(晩期中葉後半)は波頂B-波頂C間にあたり、<sup>14</sup>C生成率の減=太陽活動の活発化期なので温暖傾向であったと推定される。モシリ遺跡の恵山式期は弥生中期であり*A. SST*の温暖期と対応は良いが*F. d*頻度との対応はなかった。

以上より晩期後葉以降において、温暖種の消長と*A. SST*・*F. d*頻度の同期がみられた。しかしここでも、所謂「平安海進」ではなく、AD1025~1050以降に「温暖」があった。

## 3 出土魚骨

貝化石の温暖種には海水温度に相応した消長がみられた。*A. SST*と噴火湾の魚介種の対応を見てみると、弥生中期(続縄文中葉:アヨロ1~3式)、8世紀前半(擦文前期前半)とは相応し、カキ類・スズキ・カジキ類・マグロ類が出土する。とくにアヨロ1~2a式期有珠モシリ遺跡ではハマグリが出土し産卵最低水温20℃を上回る*A. SST*が推定されていることもよく符合している。10世紀中葉~後葉(擦文中期後半)南有珠7遺跡のカジキ類も*A. SST*が18℃を上回るので矛盾はない。

*A. SST*とオホーツク海の魚介種の対応を見てみると、奈良~平安前期前半(オホーツク期:藤本d貼付文期)のトコロチャシ・最寄貝塚ではウネナシトマヤガイ・ブリ・スズキが出土し相応する。古墳後期(オホーツク・刻文期)・平安前期後半(オホーツク刻文期・オホーツク藤本e貼付文期)においてもカキ類・マグロ類が出土する。また、*F. d*頻度と温暖系魚介種の対応はどうであろうか。弥生中期(続縄文中葉:宇津内IIbI式期の後半期)、古墳後

期(オホーツク・刻文期)に対応がみられるが、平安前期(オホーツク・藤本 d~e 貼付文期)には対応しない。藤本 d~e 貼付文期:8 世紀中葉~9 世紀前葉(熊木俊朗 2018)は産卵水温 23℃以上のウネナシトマヤガイ・カキ類が出土しており、日本海北部ではフグ類も出土していることから温暖傾向といえるので、*F. dolioolus* はフグ類が出現した水温よりも高い場合に出現するのだろう。

A. SST と太平洋側東部の魚介種の対応を見てみると、大洞 A~A' 式(縄文晩期後葉:幣舞~緑ヶ岡式)、弥生中期(続縄文中葉:下田ノ沢 I・II 式)には相応し、ハマグリ・カキ類・ブリ・スズキ・カジキ類が出土する。

晩期後葉・古墳中期~平安前期(続縄文中葉・十和田式~藤本 e 貼付文期)には海域を越えて A. SST と温暖系魚介種の対応がよい。なお、元地式期については 10 世紀前葉~11 世紀前葉(熊木 2018)と時期が長いがその前半期であればやや相応している。

#### 4 樹木花粉化石

A. SST と温暖系魚介種の対応がよいことが確認できた。このような海況は陸上ではどのように現れているのだろうか。

現生の亜寒帯林は主にモミ属・トウヒ属・カラマツ属・カバノキ属などで構成され、トウヒ属・モミ属は代表的属である。冷温帯落葉広葉樹林は主にコナラ亜属・クルミ属・ブナ属・カエデ属などで構成され、コナラ亜属・ブナ属は代表的属である。

完新世以降にカラマツ属の絶滅、コナラ亜属の急増・優勢、ブナ属の北上(黒松内低地帯まで)とその地域におけるコナラ亜属の減少、などのように優勢樹種の交代があり(小野ほか 1991)、その交代から見た古気候への言及が幾つかある。ただし、花粉による森林植生史では数百~千年が単位となる花粉帯の変遷を扱う。それより短い期間の変動については、<sup>14</sup>C 年代が測定された層準の樹木花粉を取り出してみなければならない。

石狩低地帯では 2290yBP/2350calBP (calBP は Intcal109 の校正曲線当てはめた年代)頃にマツ属の急減とコナラ亜属・カバノキ属の増があり温暖傾向(小野ほか 1991)。網走地方サロマ湖畔では 1700±60yBP/1610calBP 頃にモミ属の急減とカバノキ属の増があり温暖傾向(澤田ほか 1999)。日高地方沿岸では 1540±80yBP/1410calBP 頃にトウヒ属の急減とコナラ亜属の急増があり温暖傾向(柳井ほか 1990)。大雪山系では 1260±100yBP/1260 calBP 頃にトウヒ属の減とコナラ亜属の増があり温暖傾向(五十嵐ほか 1985)。そして、樺太南部においてはトウヒ属とコナラ亜属の増減より以下の傾向がみられる(五十嵐ほか 1998)。2240±85yBP/2320calBP 頃と 2740±90yBP/2860calBP 頃に温暖傾向、1780±85yBP/1710calBP 頃と 2580±85yBP/2750calBP 頃に寒冷傾向がある。また、2680±90yBP/2780calBP 頃にカラマツ属の微増とカバノキ属の減があり、やや寒冷傾向である。

A. SST は噴火湾での推定であるが、北海道の太平洋側西部・日本海側中北部にも当てはまることは前述した。石狩低地帯・日高地方沿岸はこれらに当てはまる地域であり、大雪山系も標高が異なるものの対応がみられる。また、サンプル採取地点と離れた樺太南部においても、A. SST は樹木花粉による推定気候と良く対応している。

大雪山系・南樺太は亜寒帯林に属し、亜寒帯林は日高山脈以東の北緯 43° 以北×東経 142° 30' 以東に広がる(図 III-7 中央列)。石狩低地帯・日高地方沿岸は冷温帯落葉広葉樹林帯に属する。北海道の冷温帯落葉広葉樹は、ブナ属がある渡島半島(黒松内低地帯)以南とブナ属を欠く石狩低地帯以西に細分される。そして、冷温帯落葉広葉樹は、日本海側の北

部平地は対馬暖流により 45° 付近まで、太平洋側の平地では 43° 付近を北限として、本州の平地では 38° 付近が南限となる(図Ⅲ-7 中央列)。

気候変動を森林帯の南北方向の水平移動(=緯度)に置き換えると、弥生の最低値=「北へ 406.8km」は渡島半島南端部を除いて亜寒帯林(図Ⅲ-7 上段左)に、最高値=「北へ 101.7km」はほぼ石狩低地以東が帯亜寒帯林(図Ⅲ-7 上段右)に相当する。古墳の最低値=「北へ 177.5km」は石狩低地以東が帯亜寒帯林(図Ⅲ-7 中段左)に、最高値は現在と同じ(図Ⅲ-7 中段右)に相当する。奈良平安の最低値=「北へ 406.8km」は渡島半島南端部を除いて亜寒帯林(図Ⅲ-7 下段左)に、最高値=「南へ 164.6km」はほぼ冷温帯落葉広葉樹林(図Ⅲ-7 下段右)に相当する。

表Ⅲ-8 木本の移動速度 棟居ほか2000 引用加筆

属名	代表的種名	移動量		
		速度(km/hr)	緯経度(° /hr)	温度(°C/hr)
モミ	トドマツ	4~30	2' ~ 16'	0.03 ~ 0.23
トウヒ	エゾマツ	8~50	4' ~ 27'	0.06 ~ 0.39
マツ	ハイマツ	150	1° 21'	1.17
クルミ	オニグルミ	40	22'	0.32
ハンノキ	ハンノキ	50~200	27' ~ 1° 48'	0.39 ~ 1.57
コナラ	ミズナラ	7.5~50	4' ~ 27'	0.06 ~ 0.39
ブナ*	ブナ	20~30	11' ~ 16'	0.16 ~ 0.23
クリ	クリ	20~30	11' ~ 16'	0.16 ~ 0.23
ニレ	ハルニレ	10~100	5' ~ 54'	0.07 ~ 0.78

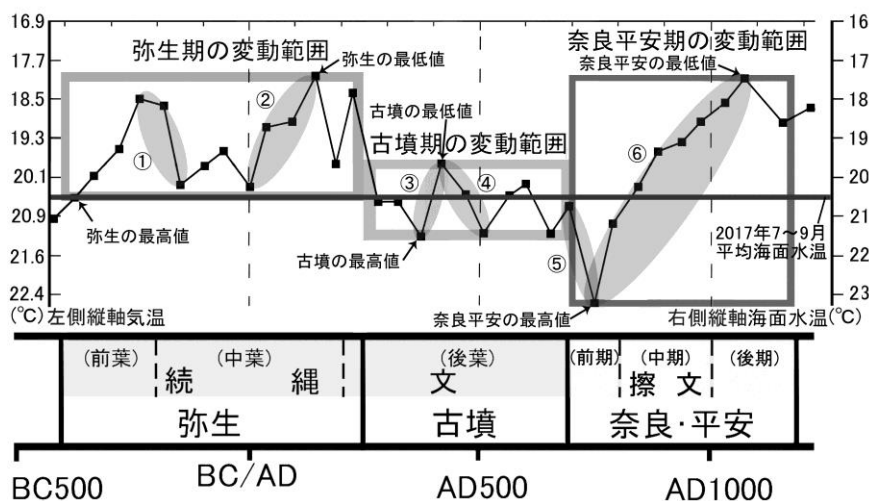
\*渡島半島1.1km/hr、本州12km/hr(滝本ほか1997)

北海道における晩氷期～後氷期の樹木花粉組成の変化は、10,000 yrBP を境にカラマツ属の急減とカバノキ属・クルミ属の急増が、8,000yrBP にコナラ属コナラ亜属の急増があって、日高山脈以東では森林ツンドラ帯→亜寒帯林、石狩低地帯以西では亜寒帯林→冷温帯林に移行する(小野・五十嵐 1991)。8,000yrBP 以降には樹種の出現頻度に増減はあるものの、森林帯の交代は起こっていない。

植物には固有の移動量(表Ⅲ-8)があるため(棟居ほか2000)、気温変動の速度が植物の移動量を上回り、気温変動の期間が長期(=一定傾向の継続)である場合に森林帯の交代が起こる。これは垂直方向(標高)の移動においても同様であろう。

晩氷期から後氷期へ(12900~11500yrBP)の気温上昇は 12~13°Cであるから(藤井 1998)、上昇百年率は 0.68~0.93°C/hr と算出される。北海道における晩氷期～後氷期の森林帯の交代に 20hr 掛っていることから、変動年率:0.68~0.93°C/hr、変動期間:14hr を交替の条件とみなしてよいと考えられる。

図Ⅲ-10 より、弥生の最高気温→最低気温は 500 年間で-2.4°Cの低下(-0.48°C/hr、61.2



図Ⅲ-10 アルケノン温度 川幡 2018 引用加筆

km)、最大変動は  
①:90 年間で  
1.8°Cの上昇  
(1.86°C/hr、  
206.6 km)、  
②:130 年間で  
-2.3°Cの降下  
(-1.75°C/hr、  
224.4 km)。古墳  
の最高気温→最  
低気温は 50 年  
間で-1.4°Cの低  
下(-2.8°C/hr、



357.1km)、最大変動は③:50年間で $-1.4^{\circ}\text{C}$ の降下( $-2.8^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、357.1km)、④:90年間で $1.3^{\circ}\text{C}$ の上昇( $1.17^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、149.2km)。奈良平安の最高気温→最低気温は310年間で $-4.7^{\circ}\text{C}$ の降下( $-1.52^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、168.2km)、最大変動は⑤:60年間で $2.0^{\circ}\text{C}$ の上昇( $1.20^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、153.0km)、⑥:310年間で $-4.7^{\circ}\text{C}$ の降下( $-1.52^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、168.2km)。

弥生は最高気温と最低気温の間に3回の下降と2回の上昇があり、さらに最低気温のあとに急激な上昇がある(①はその直前に同様規模の寒冷、②はその直後にほぼ同様規模の温暖がある)。

古墳は最低気温(③は最低気温の直前の寒冷)のあとに90年間で最高気温とほぼ同じくらいになる急激な上昇(④)がある。

奈良平安は前段にある $22.7^{\circ}\text{C}$ という高温期(⑤)を差し引くと、249年間で $-2.6^{\circ}\text{C}$ となる寒冷傾向である( $-1.04^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、 $1^{\circ}03'$ 、115.8km)で、⑥は連続する寒冷であるがその中程に寒冷化が緩やかになる部分がある。

以上を踏まえると、変動が一定傾向的に継続していないことが読み取れる。変動百年率については、弥生の最高気温→最低気温: $-0.48^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ のみが $0.68\sim 0.93^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ を下回る。いっぽう、変動期間は全てが14hyrを下回る。変動期間が十分条件といえる。

弥生～奈良平安においては変動期間が短いため森林帯の交代は起こっていない。ただし、その期間の中では最大変動が上昇: $1.17\sim 1.86^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ 、降下: $-2.8\sim -1.52^{\circ}\text{C}/\text{hyr}$ があり、優占樹種の増減がみられる。そして、樹木花粉による気候推定はA. SSTの変動と良く対応している。

## 5 気候変動と環境指標との関係

地形(海進・海退)変化や暖流系珪藻・暖流系魚貝遺存体・樹木花粉の消長は、A. SSTと対応があった。暖流系魚貝遺存体は貝塚出土であり、人為による選択の結果が残されたものである。厳密には自然環境の指標とは言えないものの、生業活動の背景には気候変動とそれによる自然環境の変化がある。このことは狩猟採集であろうが農耕であろうが同様であり、等しく影響を被る。よって、貝塚出土遺存体を自然環境の指標と考えて大過がないと考える。

暖流系魚貝遺存体と樹木花粉はともに変動の激しさと良い対応を示す。ただし、森林帯の交替については変動の定方向の期間長が変動の激しさよりも影響が大きいことを示していた。魚貝の移動速度と樹木の移動速度には大差があるからであった。いっぽうで、樹木花粉における優占樹種の増減と暖流系魚貝遺存体の消長とは、自然環境変化について述べるときに等位的に用いることが可能であると理解できた。

この章の後半において、北海道における気候変動による環境変化とそれを示す指標について検討した結果、一地域において各環境指標は異なる様相を示す個別的なものがあつた。一元的自然環境というものはどうも存在せず、特に一地域においても海域環境と陸域環境の変化は「異なる挙動」が想定される。

このような複相性を持つ環境変動という外的要因が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」について論じる際には重要になる。くわえて、II章4節5項で紹介した「中川モデル」は、多様な自然環境とその変動に対する生業モデルと仮想実験であり、特に狩猟採集が環境に柔軟に応答する生業であることを示している。これらより、視野を拡大すると、“文化”変容(VI章5節参照)と環境変動が複相的關係にあることが導かれる。

II章では研究史について検討したが、近年の研究には生態学的視点が含まれている論考もあった。この章で析出された環境変動の内容は以降の章において確認される現象・推定の背景的要素なり、VII章・VIII章では直接連動している。

# IV章

## 分析の手法



## IV章 分析の手法

遺物・遺構について記述・分析する基礎的作業は、それらの特徴について行う。その際、特徴の基底にあるのが諸属性である。前章までで挙げた文化の系統・生業の新規性・社会の問題(階層)・気候変動は複合的な内容で、一つの遺物・遺構の変化から直接・個別に導かれたものではなく、遺物・遺構の変化より上位にある。課題検討の前段に、考古学における諸要素の内容とその包含関係について考えたい。

### 1 節 考古学的実体群の構造

#### 1 考古学的実体とは

以下に紹介する英国プロセス学派の事例では、諸要素は下位から上位までの階層的関係として語られる。D.Clarke は、考古学的事象を含む広範な研究対象(時空的に連続する一体的な概念群と考えられる)を考古学的実体(archaeological entitie)と呼び、階層的定義を行った(Clarke 1978)。近年の入門書においても Clarke の分類が引用され(ギャンブル, C 2004)、影響もうかがえる(レンフルー, C・バーン, P 2007)。

##### 【Clarke の定義】の要約

- ・属性(attribute):論理的に分解不可能な特徴で、それは複数の状態をもつ。特定の遺物構造のうちにおいて独立変数としてふるまう。
- ・人工物(artefact):人為により負荷された属性の組み合わせにより変質変形された全ての物体。
- ・型式(artefact - type):属性の複相的組成の範囲内で反復する状態を共有する人工物の均質な群。\*複相的は2節で説明
- ・型式組成群(ensemble):同時並存する関連する人工物諸型式の組み合わせ。
- ・文化(culture):一定の地理的範囲内において、恒常的に反復される特定の・包括的な人工物型式の複相的な組み合わせ。その範囲は推定半径 32~322 km。
- ・文化群(culture group):変容する文化の上位群。ある範囲を共有する複相的な型式組成群により特徴づけられる。ただし可変性がある特定の人工物型式において各々異なる状態を持ちながら並存する文化の集合。その範囲は推定半径 200~750 km。
- ・技術複合体(technocomplex):文化群の集合であるが、環境・経済・技術における共通した要素が広く拡散しながら、相互に関連するものとして共有される。共通の安定した環境戦略における文化的収斂の物質的現われ。その範囲は推定半径 750~3000 km

##### 【レンフルーらの定義】用語解説 (レンフルー・バーン/池田 裕ほか訳 2007)の要約

- ・属性(attribute):細分化することのできない遺物の最小の特徴
- ・人工物(artifact):人間が使用・改変・製作したもののうち、持ち運びできるもの
- ・型式(type):属性の明確な組み合わせによって定義される遺物の種類

- ・型式組成群\*(*assemblage*):ある特定の時期や場所において繰り返し供伴する型式の  
\*用語解説では和訳なし 集合で、人間活動全体を代表するもの
- ・考古学的文化(*archaeological culture*):繰り返し認められる遺物の型式群の集合で、ある特定の時期や場所における、特定の間活動の総体を示しているもの
- ・文化的集団(*culture group*):ある特定の集団への帰属意識を形成するような、常に供伴して見られる遺物や遺構の組み合わせの複合

ギャンブルは下位の *attribute* ~ *assemblage* を基本的実体とし、上位の *culture* ~ *technocomplex* は空間要素を持つ型式論的操作を超える抽象的な概念と考える。いっぽう、レンフルーらは *attribute* ~ *culture group* について定義を行っており、*archaeological culture* より上位には抽象的な内容が含まれる。*Clarke* とレンフルーらを基本的実体である *attribute* ~ *assemblage* について比較すると、*attribute* については「分解不可能な最少単位」が一致し、*Clarke* の「独立変数」が固有である。*artefact/artifact* については「人為によって変質変形された物体」が一致し、レンフルーらの「持ち運び可能」が固有である。*artefact - type /type* については「一定的な属性の組み合わせが一致する遺物の集合」が一致し、*Clarke* の「複性的組成である属性」が固有である。*assemblage* については「供伴する遺物諸型式の集合」が一致し、レンフルーらの「人間活動全体を代表する」が固有である。いっぽう、*culture* ~ *technocomplex* のうち、*culture* では一部「特定の時空における型式の集合」が一致し、*culture group* では両者に一致はみられず、*technocomplex* は *Clarke* 固有の概念である。

*Clarke* とレンフルーらの定義はチャイルドの階層的定義 (V.G.チャイルド/近藤義郎 訳 1981) を経由している。いっぽう *Clarke* の下位の定義には生物数量分類学・統計学的用語が多用され(例えば、下記要約の下線部分)、概念も影響があり、上位は抽象的で仮想的になり、*culture* ~ *technocomplex* は空間概念でもある。*Clarke* は、属性の数量的操作、特に演算可能性について意識的である。属性の性質について統計学的知見から、その選択はある程度任意であり、基本統計量や標準偏差などの算出をおこなう予備解析を通じて(不適切な属性を除去したうえで)、それが「非本質的」か「本質的」かについて判別し、詳細な解析を経たのちに「鍵になる=主要な」が明らかになると考え、次のように言表した(D.*Clarke* 1978)。

【*Clarke* の属性の性質について定義】の要約

- ・非本質的属性:研究目的外にあり、関連する構造内に存在しない変数群。全体にわたって一定であるもの。
- ・本質的属性:関連する構造の部分となる変数群。変数は変化する構造の部分として値・状態が変化する。
- ・鍵になる属性:構造内にあって関連する変数群、変数は連続値をもち、他属性の連続値と特定関係にあって共変しあう。

## 2 本論における考古学的実体

*Clarke* の基本的実体についての定義と要素の階層配列は、多少の同異はあっても、現在でもほぼ支持されている。それらを踏まえて基本的実体と遺跡を定義すると、

- ・属性(*attribute*):分解不可能な最少単位で、各属性は独立し、状態差を内包する。
- ・型式(*artefact - type*):複性的組成をなす属性の一定的な組み合わせが一致する人工物の集合。

- ・型式組成群 (assemblage) : 関連する人工物の諸型式の集合。
- ・人工物 (artefact) : 人為によって変質変形された人工物。遺物 (artefact) : 持ち運び可能、遺構 (feature) : 持ち運び不可能
- ・自然遺物 (ecofact\*) : 人為と係わる非人工物 (動植物遺存体・土壌など)。

\*(Lewis Binford 1964)

- ・遺跡 (site) : 人為の結果残された人工物・自然遺物・遺構が集中する場所。

上記のように定義したが、属性については外延的定義となる。なぜならば、属性はほかの上位要素とは異なる性格を持っている。属性は、遺跡・遺構・遺物(人工・自然)に無限に含まれているため、内包的定義では共通項を表しきれないという性質を持つ。

属性を記述・分析に用いる場合は具体的に選んだ項を表す必要があるので外延的定義が成立する。例えば石器を記述・分析する場合、形態についてあれば長さ・幅・重さなどがあり、剥離技術についてであれば、石質・主要剥離面の形状・剥離痕の形状・その剥離角などがある。これらを組み合わせること、効果的な属性を新たに考出すること、も考え得る。

### 3 本論における属性

属性操作に論理的背景(操作性の根拠)を表す必要を説いた Clarke の言説は極めて有意義である。これから基礎論を展開させてゆくにあたって、無条件な、あるいは先験的な属性は存在しない、ということである。私は以下に示す論理的背景により、「分解不可能な独立した最少単位」:属性には3種類あるという以下の前提に立つ。

林は土器製作において2つの code があると説く。それは、「overt elements: じかに見える要素(紋様など)」=「自由な判断に任せられる要素」と「covert element: じかに見えない要素(素地調整)」=「制限されている要素」である(林 1990c)。また、自由・制限の他に情報伝習の浮動差に基づく code もある。それは、情報の深層を表す「内在的属性」、情報の表層を表す「表集的属性」、両属的な第三の「中間的属性」であり、内容は以下である(鈴木 2003)。

- ・内在的属性: 完成事象からは窺い知れず、属性転移には時間・場面の共有が必要。
- ・表出的属性: 部分的完成事象からでも理解でき、属性転移には時間・場面の共有を必要としない。
- ・中間的属性: 場面によって、内在的または表出的に移行する。

具体的な例を挙げて外延的な定義をすると以下になる。

内在的属性に当たるもの: 土器であれば胎土選択・成形・乾燥・焼成など。石器であれば素材形態・石核形態など。墓制であれば墓坑底平面形・主体部構造・内部施設・埋葬姿勢など。堅穴住居であれば柱組構造・柱穴先端形・竈構造など。

表出的属性に当たるもの: 土器であれば文様要素・文様意匠など。石器であれば器種形態など。墓制であれば外部施設など。堅穴住居であれば堅穴平面形・支柱配置・炉や竈の設置位置など。

中間的属性に当たるもの: 土器であれば器形・施文方法(文様割り付け・描順・原体)・調整があり、複雑な器形を造る場合は内在的属性へ移行し、単純な器形を造る場合は表出的属性へ移行する。施文・調整は見て真似できるが、その意味・効果は内在的である。石器であれば石材があげられる。墓制であれば、個人の特異的な意図を含む副葬品は内在的属性へ移行し、集団の意図を表す意図がある副葬品は表出的属性へ移行する。堅穴住居であれば規模・周堤帯の有無・炉の規模と形態があげられる。ただし、上述した定義は関わる専門集団

の存在がない場合である。存在がある場合、例えば、葬制は葬制執行の専門集団によって取り扱われる場合は極めて表出的属性となる。

## 2 節 型式の分類と同定

### 1 型式とその裏付け

型式は離散的に時の順序を示す共有属性(6項参照)が十分条件としてある場合に成立する。よって、型式は離散的群(編年枠を作る、編年枠に入れる)であるから、遺物の変化が連続的に見えても漸移的属性・漸移的型式は設定しえない。そして、型式は遺物(個体)が不完全な複性組成の属性群を持つため不完全な複相群(6項参照)である。

ところで、林は山内「型式網」の背景には「外的(層序・供伴という層位学的)な証拠」と「内的(文様帯の系統的)な証拠」があり、外的な証拠を「事実に基づく説明」、内的な証拠を「論理的な説明」と定義した(林 1990a)。「外的な」層位学的事実は観察者の解釈も付加されている。「内的な」文様帯系統論は前章で述べたように型式論の一部であるので分類の理論的説明である。本論ではそれらを「検証的根拠」・「論理的根拠」と言う。

### 2 検証的根拠

層位学的事実とは単に観察された遺物の上下・水平位置について用いる言葉ではなく、「混入=無関係:aggregate」が排除され「関連する状況:in a context」(V.G. チャイルド 1981)が見極められたものであり、それが検証的証拠という理由である。「関連する状況」とは、遺構の構築行為に同時的かつ一意的に関わる出土状態(密閉空間の同層準、接合関係など)であって、遺物自体の編年属性に直接関連しない。遺物の物理的近接は、それが遺構に対して同時的かつ一意的関連を示す場合に限って遺物の型式同異の判断根拠となる。

「型式の期間≠型式の使用期間」かつ「型式の期間<型式の使用期間」より、廃棄・埋納時の空間的近接は同型式・併行型式の共存以外に、使用期間における前型式の終末状態と後型式の共存があり得る。したがって、廃棄・埋納時の空間的近接と型式は同意ではなく後者は前者に包含される。「関連する状況」の検証を経て供伴関係(包含層内の一括、遺構の一括)が認定され、それにより時空の差異が示される。

なお、大井晴男の型式論にいう「資料の歪み」(大井 2004)とは、墓域の場合には墓制に篩い分けられた特定の条件であり「歪み」ではない。いっぽう、包含層資料は不特定性によって「資料的歪み」の有無さえ不明であるため、意図の総体(=資料的歪がない)をあらわすか検証不能である。包含層資料の「歪み」の有無は、遺構出土遺物の比較を通じて始めて明らかにされる。遺構の遺物は廃棄・埋納の意図が特定される可能性が高い遺物であり、包含層遺物は自然の営為や不特定意図による結果である(鈴木 2004)。

### 3 論理的根拠

遺物の属性には、ひとつの系統内において、自律的变化と異系統との交叉による変化が内蔵される。また、型式論的同一とは「製作行為」についての同一であり、製作時の「時」に関して、旧(過去)と新(当時)が内在されているので、ひとつの型式は、同系・異系×旧・新を内包する。また、論理的証拠には情報伝達の浮動性の差があり、重層的に共存するので、「内在的・中間的・表出的属性」に分類される。系統の検証では、内在的属性はほかの2属性



に比べると時間・場面の共有を必要とするため、行為の同系・異系を判別しやすい。

例えば土器の成形は、底部から始発し、口縁部で終息する。器体下半は構造支持(成形の基礎)という制約を受けるので、形態の自由度は小さく、器体上部に行くにつれてそれは大きくなる。器高に相応して自由度が増加するため口縁部では小変異が起りやすくなる。主に器体上半の形態小変化に拠れば画期の設定は細密になるが、成形における「小変」に拠っていることになる。よって、「異なった形を同じ作り方で作ったとき」より「似た形を異なる作り方で作ったとき」のほうが「大変」と判断でき、その下位に細別器種が量的変化(程度の問題)としてある(鈴木ほか 2007)。そして、「大変」の根拠である成形は、IV章1節4項で述べたように内在的属性である。

#### 4 分類と同定

考古学上の課題は先行研究(既成した結論・概念)の検討によって導かれる。新たに生じたものが課題であり、既知から新出された未知である。

未知について既分析で対応可能な場合は問題ない。しかし、既分析に不足があると、新たな分析が必要となり、既分析の修正・新分析の設定をしなければならぬ。次に、修正・新設が追認されたのちにそれらは固定されて学史に残る。そして再び、学史上の既知を用いて未知を分析する、学史上の既知を再び更新して未知の分析をする、が繰り返される。

この循環的過程は、私たちが考古事象に対して行う同定(既存の類にあてはめる)や分類(新設・修正の類を設定する)という基本行為であると考えられる。以下で同定と分類を精査してみよう。

#### 5 型式分類—単相と複相

林は型式分類・型式同定について、鈴木公雄の「セット論」を題材に Clarke を引用しつつ論じている(林 1990a)。その際に、生物分類学の用語である「polythetic group or system」「monothetic group or system」(R.R. Sokal, P.H.A. Sneath 1963)の「polythetic-」「monothetic-」を借用し、鈴木の「セット論」について従来の型式内容が決定的な指標(=鑑定の目印)によって区別される均質な「Monothetic Set: 単相組成」として受け止められていたのに対して、型式の属性内容が不均質である「Polythetic Set: 多相組成」と考えた。なお、Clarke は「-group or set」(D. Clarke 1978)を引用して分類について述べている。

まずは、引用の過程についてみる。図IV-1 上段は Sokal ら(1963)の分割表である。古代ギリシャ語由来の「poly-」「mono-」「thetic」を以下のように英訳している。

*poly:many      mono:one      thetic:arrangement*

		Individuals						Entities												個体																
		1	2	3	4	5	6													1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
Characters	A			A	A															a	○															
	B		B	B																b	○	○	○	○	○											
	C		C		C															c	○	○	○		○	○	○									
			D	D	D															d	○	○			○	○										
						F	F													e		○														
						G	G													f																
						H	H													g																
																				h																
																				i																
																				j																

Sokal ら 1963 引用加筆

Clarke 1978 引用加

林 1990a 引用加筆

図IV-1 属性×個体分割表

しかし、Sokal らは複数種類の形質がある場合でも monothetic であると考えているので (図IV-1 上段の右斜め下参照)、単相の「単」は mono・di・tri・tetra という加算的概念における mono ではなく不可算概念であり、poly も対となるので加算的概念ではない。mono の意は one の他に single もあり不加算的意味を含み、poly の意は many の他に much もあり不加算的意味を含む。また、thetic は英語・形容詞で、古代ギリシャ語 thtos 由来であり placed・arranged が相応しい。monothetic を「単型」「単性的」、polythetic を「多型」「複性的」という訳が生物分類学にある (西田 1994、三中 2009)。

「mono」・「poly」は形質個数の多少ではないので、「monothetic group: 単性配合群」「polythetic group: 複性配合群」が直訳で、後述する属性と遺物の関係からは「単相群」「複相群」が考古学的には適訳であり、「Monothetic Set: 単相組成」「Polythetic Set: 複相組成」と訳されよう。

したがって、形質個数の「多」「少」は、「複」の部分集合であるから、「複」を「多」と同意に使用することは誤りである。

Sokal らの表は、分類群の性質を表わす分割表である。Characters (形質) を A~H、後には属性を +: あり・ -: なし、で表現する (P.H.A. Sneath, R.R. Sokal 1973)。Individuals (生物学では個体、哲学あるいは歴史では個物、以下では両用する): 1~6 が設定され、Character に「決定的な指標 (鍵になる属性)」はない。

Fully polythetic group (完全な複相群: group は class と同意に使われているので、類・階層的集合の意味である) は、個体 1~4 で構成され、全個体において共有される「均質な形質」はなく、一部の個体において共有形質がある。つまり、分類群における十分条件の形質がなく、必要条件の形質が一部にある状態。Fully monothetic group (完全な単相群) は、個体 5・6 で構成され、形質 F・G・H がある。全個体において均質に形質が共有される。つまり、分類群において全ての形質が必要十分条件である状態。

図IV-1 中段は Clarke の表 (1978) で、分類群の性質を表わす分割表である。属性を X: あり・ -: なし、で表し、attributes or artefacts に「決定的な指標 (鍵になる属性)」はない。monothetic group と polythetic group のくくりは、行方向/attributes or artefacts に対して図示されているようみえるが、原挿図表題の解説には、それらは entities の個体群を表していると言っているので、くくり表現は entities/列方向であり、図IV-1 上段 Sokal・Sneath の図と同じく個体群の集合における「単相」「複相」について述べている。

Sokal・Sneath (1963) を引用しているので、Monothetic group・Polythetic group は Sokal らの Fully monothetic group、Fully polythetic group と同意であるとみてよい (文中では fully polythetic も用いている)。また、Clarke は文中で partially polythetic groups を使用しており、Fully polythetic group とは別に不完全な複相群を認めて、型式 (個体群) もまた不完全な複相群となる、と述べている。

Characters→attributes or artefacts (形質→属性あるいは人工物)、Individuals→ entities (個体→実体) と言い替えもある。Individuals→entities としたのは、attribute と artefact に階層的関係があり、それに対応して階層の上昇が生じるから or なのであろう。Attribute が Character の場合は entitie が artefact となり、artefact が Character である場合は entitie が type に対応する。型式 (type) について述べる場合は、表行方向が属性 (attribute) ではなく、それより階層が上位である遺物 (artefact) となる。

**図IV-1 下段**は林の表で(1990a)、分類群の性質を表わす分割表である。属性を○:ありで表しており、特徴に「決定的な指標(鍵になる属性)」はない。表は**図IV-1 上段・中段**に合わせるため、行と列を組み替えて示した。この表は**図IV-1 上段**とほぼ同じ内容である。ただし、特徴 a・b・c・d・e が複相、特徴 f・g が単相である「不完全な」複相配合が加えられている。また、行列の「特徴」と「個体」は Sokal・Sneath (1963) の Characters・Individuals の訳と思われるが、文章中では「個体」を型式にも相応させていると考えられる。

林の「均等ではなくとも均質に分布する」は、文様要素・文様・器形を形質、文様・器形の出現量の多寡=属性(形質)の状態差、と考えたことによる。つまり、均等ではない→属性(形質)の状態に差がある、均質に分布する→属性(形質)組成が単相、と言っており、編年のための型式は、属性(形質)が不均等で不均質である不完全な複相組成により成り立つ、と考えた。また、型式の複相組成は複数の機種を組み合わせ・複数の機種と複数の文様の組み合わせである、とも考えた。

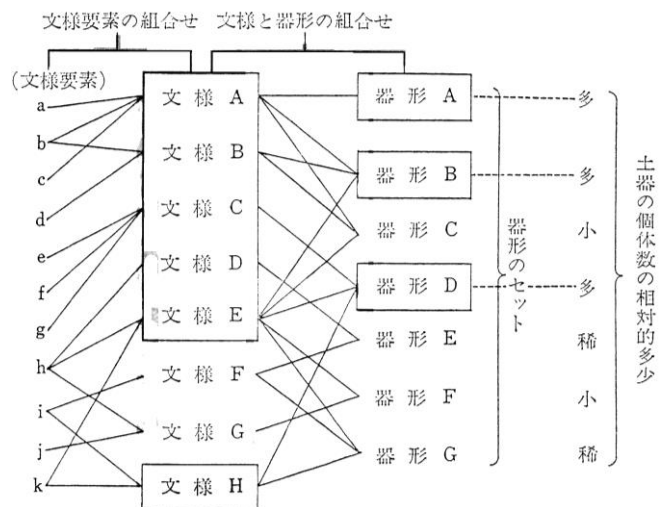
編年のための型式分類における属性とは「時空の差異を示す」である。いっぽう、Clarkeの属性に対する定義は目的を限定していない。要約すると「個々に独立した最小単位」である。これは Sokal ら(生物学における数量分類学)の形質についての定義に類似する。この定義は、データを数値化して統計操作(主にクラスター分析)により分類群をつくるための変数(三中 1997)としての必須の性質である。

**図IV-2** は鈴木「セット論」(鈴木 1964)を説明した図で、ひとつの型式内における属性の関係を表わし、出現量の多寡も加え、文様要素と文様とが階層的に配置されている。つまり、器形のセットは Sokal らや Clarke の属性とは異なり「個々に独立した最小単位」ではない。そして、「器形(例えば、ふかばち・つぼ)」は器の種類を指し示す言葉であるが、器の形は口径・器高・底径などの複数の連続量的属性の違いに拠るので「器形」も同様に Clarke の属性の上位概念といえる。最小単位の属性を「単位属性」、それらを合成したものを「複合属性:同じ性質(例えば同じ計量単位)を合わせた(例えば四則演算可能)」と呼ぶ。

例えば「**文様 A-器形 B**:多数個体、**文様 B-器形 C**:小数個体、**文様 F-器形 G**:稀個体」という関係は、「**文様 A-器形 B**」が一連の集合(林の特徴 a~g を組合わせた状態)である。この一連を「統合属性:同じ性質ではなくとも組合わせたもの、そのため恣意性を帯びる」と呼ぶ(**図IV-3** の  $\alpha \sim \varepsilon$  にあたる)。

よって、各種類の属性に状態差がありつつ全てが連係して、かつ出現個体数に多寡がある、ことを示している。

これを分割表で表すと**図IV-3** となる。統合属性  $\alpha \times$  個体 1~3 では単相群となり、各々  $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ 、 $\varepsilon \times 4 \sim 5$ 、 $7 \cdot 8$ 、 $9 \sim 11$ 、 $12$  でも同様となる。統合属性  $\alpha \sim \varepsilon \times$  型式レベルでは完全な複相群になる。ちなみ共有形質がない場合は複相群にもならない。なお、 $\alpha \sim \varepsilon$  は属性というより Clarke の遺物(artefact)にあたる。



**図IV-2 セットの構造** 鈴木 1964 引用

		型 式											
		個 体											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
$\alpha =$	特 徴 鈴木 の セツト	a-文様A-器形A	●	●	●								
$\beta =$		b-文様A-器形B				●	●	●					
$\gamma =$		d-文様B-器形C							●	●			
$\delta =$		e-文様C-器形D									●	●	●
$\epsilon =$		i-文様F-器形G											●
		多			多			少		多			稀

図IV-3 統合属性と個体の分割表

鈴木の様式(属性が不均等で不均質である不完全な複相組成)が成立する場合は、以下の二通りである。①:林の言う外的証拠:層序・供伴など層位学的事実(林 1990a)によって、5群に別れた個体群を一型式とみなす。②:文様要素・文様・器形を個別の独立した

最下位の属性(林の特徴 a~g と同じ)として、1~12を一型式とみなす。

個体群が単相であることは特殊であり、ほとんど存在しないことは容易に理解できる。また、個体群が完全な複相であるか否かは、すべての遺物(個体)における、すべての属性(形質)が既知の場合に限られる。しかしそのようなこともほとんど起こりえない。遺物(個体)は不完全な複相組成を持っており、分類は遺物の集合についてなされるため、個体群も不完全な複相群となるのが実態である。だからこそ新たな分類案が生じる。

個体群の成立要件は、遺物個々において共有属性(共有形質)=単性部分が十分条件としてある、である。そして、各属性が等値な場合には、共有属性の数が多いほど遺物は単相傾向を示す。いっぽう、各属性が不等値な場合は共有属性の数よりも、「状態差」が顕著な属性や他の属性と高い相関性を持つ属性の内容によって遺物は単相傾向を示す。

型式の複相的性質は、「個々の独立した最小単位」=属性の共有の程度によるが、最小単位の中にも1節4項で示した3属性という階層がある。しやがって、型式の複相的性質は3属性の階層構造を組み入れて初めて明らかにされるだろう。これについてはV・VI章で検討する。

## 6 型式分類と機能・用途

形が具現する背景には機能の意識以外に範型(小林 1983)の意識があり、両者は可変するため専用化や汎用化が起こる。「可変する機能の意識+可変する範型の意識:形式→型式」といえる。いっぽう、「機能はかたちの決定に参与する」のだが不定形剥片の使用にみられるように該当しないものもあり、具現した型式(製作当初に意図とした機能)を認識した事後に機能を制限・変更(転用・複用)させる場合が用途(使われた時点での機能)である。

くわえて、同一器種=形において用途が著しく異なることが容易に予想される。例えば被熱痕・炭化物付着からみて、北海道の縄文晩期後葉の道央の土器は以下である。鉢・浅鉢では規格の「大~中」は煮沸、「小の一部~袖珍」は供膳である。また、同一規格の「中」浅鉢と台付浅鉢では、浅鉢という形態に台が付加され、形態と名称では細別の関係にあるが用途は全く異なる。「同じ形で異なる用途」と「異なる形で同じ用途」がある。

仮に、形の差を細別概念とする場合は細分された機能を仮想しなければ整合が取れないので、細分された階層的機能とは、互いに関連しながらやや異なる目的を想定することである。しかし、器種は機能のみを具現したものではないので形と機能の一对一的相応がみられない。形態差が目的別用途の違いであることが証明できない場合、形態と機能と用途を直結させた階層的分類、細分形式は留保すべき仮説といえる(鈴木 2004)。

## 7 型式組列と用途

用途数と器種数が相応しない対応関係とは単に出土比を示し、対応する場合は出土比＝組列＝機能のセットが想定される。しかし、一般に出土土器の器種数に多寡があり、器種間出土量の多寡がある。機能数と器種数に整然とした対応関係を見ることは稀である。

それは、ひとつの器種が多機能であるか、複数の器種あるいは細別器種が同じ機能を持っているか、を表す。そして、出土量の少ない器種は、使用頻度の低い機能を有しているか、その機能を別な器種あるいは細別器種に補われているか、を表す。このことは前項で述べた器種と機能の重複に整合する。

器種が細別された場合は「機能数 $\leq$ 器種数」となることが多い。しかし、最小限の機能を基にすると「機能数 $\leq$ 器種数」の差が小さくなることは自明であるから、細別しない器種(最小限の機能)の出土比のほうが細別器種の出土比に較べて用途時の組成を反映している可能性が高くなる。

細別器種数の増減は必ずしも当時の用途の増減を示してはいないことになる。細別器種分類の目的が、形の細別であれば出土比＝組成の意味は問われない。個別的や集団的人間行動の復元を細別器種分類の目的とすると、一括性の解釈を型式学的属性の機能の面に言及せざるを得ない。同じ形は同じ機能を持つことが前提になり、出土比＝組成＝機能＝用途のセットの妥当性を問われる(鈴木ほか 2007)。

## 8 型式同定－個体との関係

林は、出土個体の型式同定は限られた「決定的指標」を用いておこなわれるのが効率的であるが、このことは型式を単相配合として扱うことになるので、複相組成が実態である型式の側面から注意を反らす、と考えた。Clarke(1978)も D.H.Thomas(1970)を引用して林と同様の内容を述べている。また林は、型式同定において決定的な指標が見当たらない場合には新型式と判断されてしまう、と考えた。

たとえば、有文土器と縄文のみの土器が一つの型式にある場合、判別属性としての文様は有文土器のみに適合し、器形は両者に適合する。「決定的指標」の有効性には偏差がある。また、完形か破片かでも属性数が異なる。例として、遺物分類が階層構造を成している続縄文土器－後北式(型式群)－後北 A 式・後北 B 式・後北 C<sub>1</sub> 式・後北 C<sub>2</sub>・D 式(型式)を例にしてみよう。各型式の根拠がそろえば「後北 A 式～後北 C<sub>2</sub>・D 式」と記述され、擬縄貼付文や帯縄文があるのは「後北式」と記述される。「決定的指標」が乏しくなると上位の分類群に当てはめる。

「決定的指標」が下位の属性(林の特徴 a～g)である場合は林の懸念は妥当である。しかし、後北式の例のように階層的分類が用意されていれば、上位の分類群(型式群)に同定されるので必ずしも新型式の設定に至らない。また、明確な時期を示す出土状況が伴う出土個体は容易に新型式の設定に至らない。

個体は「個々に独立した最小単位」の不完全な複相組成により構成される。よって、個体は時空において固有であり、時系で変化する歴史の実体(分割できない個物)である。型式同定は、この設定が不明瞭(離散的ではない)である場合、集合への帰属の判別が困難になってしまう。型式分類と型式同定とは、共有属性(共有形質)=単相部分により、前者は個物群を作り、後者は個物群を探索する、逆の観点からなされた同類の作業で相互のその確からしさを担保する。ただし、個物群の生成には検証的証拠と論理的証拠を必要とするが、個物群の探索には検証的証拠をほとんど必要としない。この章の 2 節 2・3 項で言及した。

### 3 節 考古学的実体群の系統

#### 1 系統と分類の関係

分類と同定の目的は、歴史の実体の類型群を作ること・当てはめること、であるが、特に編年のための分類は「時空の差異を示す」切断面で分離する行為である。ただし、時あるいは前後という順序の切り分けは、層位学的知見や  $^{14}\text{C}$  年代値などの個体に内在しない属性によって行われる。例えば、A・B・C という集合を型式論的手法によって作り、出土層位・出土状況によって集合 A→集合 B・C という順序を配列する。

いっぽう、系統論は時の経過により変容した歴史の実体(同一ではないが同類)の関係について、群と群の間に共通する祖形を見つけることにより系を見出す行為である。個体に内在する属性のみよって行われることも可能である。例えば、A・B・C という集合について、集合 B と集合 C に共通属性を見出し、集合 B・C に対して異なる属性を集合 A に見出す。集合 A(=遠縁な関係)→集合 B・集合 C(=近縁な関係)という関係を配置する。

分類・同定と系統論はともに「似ている」について論じるが、分類と同定は「似ている」群の形成・編入、系統論は「似ている」群の連りの推定、という全く異なる行為である。

#### 2 系統論

山内は、文様帯(器形の特定位置における文様についての変化が相同の関係である)によって、「型式網」を系統づけようとした(今村 1983、林 1990、西脇対名夫 1995)。山内はそれを「縄文土器全般に通じる型式学的系統または紐帯あるいは筋金」(山内 1964c)と呼んで型式の上位にある概念とした。I(口頸部)文様帯は早期～中期に発生継続し、II(体部)文様帯は中期後半に発生し、II a が後期中葉に分枝する、である。

文様帯系統論については以下の指摘がある。その系統は相同(「縦の系統関係」)・相似(「横の影響関係」)によって変化し、必ずしも系統発生しない(今村 1983)。そして、山内の「極めて立ち上がった判断」(西脇 1995)は、土器の系統について突然の発生・消滅、新生・交代、を否定する(西脇 1995・2008)。くわえて、山内の「型式網」はIII文様帯の撤回にみられるように分枝を極力抑制している(西脇 1995)。また、大塚達朗は山内の相同には変化する部分があったことを指摘している(大塚 2017)。

山内の「型式網」の列方向は離散的関係の時間配置の表現である。行方向は離散的関係の空間配置の表現である。「型式網」は「時空の差異を示す」方格枠の集合体である。そして、山内は同類型を時空の枠に配置してそののち系統論を考按して意味づけている。下述する異系統との融合を想定する網状系統樹ではない。

#### 3 形の系統

文様・文様帯は器形を超越して施されことが多い。この現象は生物学で云う「同一種・亜種における交叉」に近く、同時性の証明でもあり、これを「論理的証拠」による斉一性の証明とも呼べる。「検証的証拠」である器形の消長によって示されることを要点に加える様式論の斉一性とは根本的に異なる。

様式の場合、異なる様式において型式間に系統的連続(型式組列)があるから、一つの様式というものは、各型式が独立して併行する単位である。よって、形式は異なる様式にお

いて系統（相同）として存在するという位置付けとなる。系統的連続性を示す形式には本質性（祖先-子孫関係において変化しない属性）が備わることが前提となる。

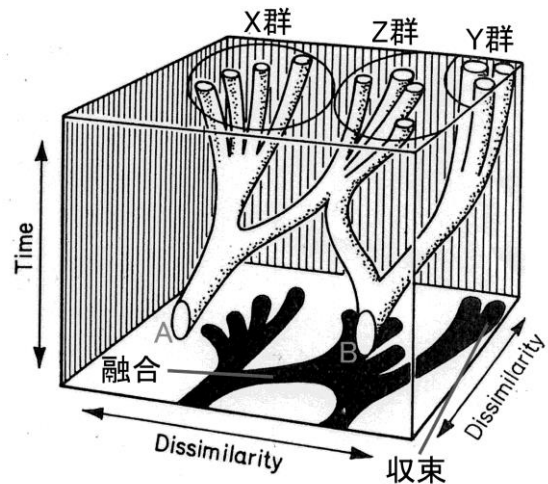
2節6項で述べたように「ふかばち・つぼ・かめ」は器形を指し示す日本語であり、これ自体は現代日本においてほぼ不変の概念である（ただし、器形を指し示す言葉が過去において現代と同一でない場合もある）。これが前提と成っている。しかし、そのそれぞれの実体は口径・器高・底径などの複数の連続量的属性の違いに拠っているため不断に変化している。ある形に対して特定の名付けをする行為が不変であっても、名付けたことを根拠として本質性が備わるわけではない。細分型式についても同様である。

そして、形式は実在しないので、形式と器種・細別器種が極めて等しいという理解のもと、器種・細別器種（型式組列）を通じて形式の実在が想定される。よって、器種・細別器種も同じく祖先-子孫関係において変化しない属性を保持していなければならない。しかし、型式組列は分枝・消長するので、その都度、器種・細別器種≒形式の本質性に揺らぎが生じていることになる（鈴木ほか 2007・2018b）。型式組列は系統ではないことが理解できる。

編年表の中に、細分された型式組列に横に伸びた線を見ることがある。これは細分器種の分枝を説明する。また、それが消滅した時には縦線の途絶えも見ることがある。これらの中には必ずしも機能・用途の系統があるとは言えない。

#### 4 人工物の系統とは

Clarke の三次元文化系統樹は網状系統樹として表されている（図IV-4）。底面の影は Dissimilarity（非類似性）を投影したもので、上面にある切断面は相（phase）あるいは同一時期における分布と考えてよいだろう。先祖 A と B は、それぞれ別系統でありながら、途中でそれぞれが分枝して融合して子孫 Z 群を形成する（複雑な相同）。また、底面の投影図をみると Y 群においては収束（相似）がみてとれる。Clarke は、変化する考古学的現象には分枝・融合が伴い、Time=時系を導入することで網状系統が理解でき



図IV-4 三次元文化系統樹 Clarke1978 引用加筆

て融合・収束がわかると考える。これは考古学的現象が「縦の系統関係」・「横の影響関係」の共同によって変化するという前述の今村の指摘と重なる部分がある（今村 1983）。

いっぽうで、人工物と生物は変化を被り系譜をつなげるという点で類似があり、文化現象ほど頻繁ではないが生物においても融合（遺伝子の水平伝播・種や亜種での交雑）が生じる。先祖-子孫関係のある歴史的变化は非生物であっても系統学の対象となり、文化について系統樹思考を用いる分野を文化系統学という（中尾 2012、三中 2012）。これは人工物と生物との対象の違いを超えた思考である。

しかし、大塚は反対の見解を示す（大塚 2017）。山内が人工物の変化を生物学に類比可能とみなしたことにより、変化の機構が遺物に内在する（→時の経過＝遺物の変化の原因）という結論を導いたが、大塚は内在しないと述べ、これが何らかの歴史的事実を言い当てている可能性は低い、と述べる。

私は人工物と生物に以下の相違点があると考える。人工物は、自然環境・社会的環境の影響下にある人為(技術・意図)によって変質変形された物質であり、その内部に自律的変容の仕組みを内蔵しない。生物は自然環境の影響下にあり、その内部に自律的変容の仕組み(突然変異)を内蔵する。人が変える人工物と自らを変える生物は根本的に異なった原理をもつ。そして、生物における最小単位は時空を超越した性質を持つ核酸で、時空に束縛されない普遍性を持つ4要素である。人工物における「個々に独立した最小単位」は属性といい、それは時空に縛られ、上位である統合属性と属性が併用されて記述・分析される場合もある。人工物における属性は生物学における最小単位とは異なる性質を持つ。

生物において、核遺伝子は4要素の組み合わせで全て記述・分析可能であり、表現形質は on/off の二数値関係であるため核遺伝子との対応は一義的である。いっぽう人工物は、時空に束縛された個別性を持つ多様で多数の要素からなる。例えば土器の場合、器高数値のみにより土器全てを記述分析することは不可能であり、数値データである口径数値・底径数値、質的データである色調・文様のデータを加えて記述分析するが多い。

そもそも人工物を記述・分析するにあたって先述したように先験的な属性はない。そして、生物とは最小単位の性質が異なるので階層構造が異なる。これら2点を条件として、人工物の系統復元には融合・収束を示す属性を選択することが必要である。融合・収束を人工物の変質変形と考えれば、その原因となるのが人工物の使用・改変・製作に関わる情報伝達であり、それに関わる属性の選択が必要である。

内在的・中間的・表出的属性は、内在的属性<中間的属性<表出的属性の順で情報の再現性が高くなり、内在的属性<中間的属性<表出的属性の順で模倣の難易が低くなる。例えば、表出的属性である文様・器形は模倣が容易であり再現性が高い属性である。いっぽう、土器成形時における粘土紐積み上げの接合面の傾きは再現性が低い属性で、施文方法のうち特殊な原体製作・押捺法方、例えば続縄文恵山式における特殊(回転)縄文の東漸もそうである(鈴木 2019)。また、北海道・東北北部の7~8世紀代の土器の系統について以下のように分析した(鈴木ほか 2007)。形態(表出的属性)による分類では甕形土器であるが、粘土紐積み上げの休止痕(内在的属性)から見ると深鉢形土器の系譜を継いでいる。

再現性の高低と模倣の難易は相関的關係にあり、その変化の程度にも現れる。人工物の系統復元に内在的・中間的・表出的属性の区分を用いることが有効である。

V章・VI章の考察においては、上記3属性を視点として、人工物の使用・改変・製作に関わる情報伝達の分析を行う。



# V 章

## 時間軸の設定



## V章 時間軸の設定

II章でまとめられた課題にあたって時間軸が必要であり、本章では土器編年を立ち上げる。その際に、順序としての型式と時間量としての<sup>14</sup>C年代値を検討しなければならない。

### 1 節 分析方法

#### 1 対象範囲

晩期後葉～前葉の編年については大洞A式の退潮以降に非大洞(林1981)の系統を持つ土器型式が多数設定された。その設定の妥当性に関しては、V章3節で述べるように未解決の部分が多くある。中葉については道南の恵山式、道東の下田ノ沢式・宇津内式の編年に一定の了解がみられ、道東と道央の並行関係も整備された(熊木2018)が、道央の編年整備とそれに伴い道東の並行関係の再調整が生じる。後葉については道央始発の型式である後北C<sub>2</sub>・D式が北海道全域に拡散する。その中には道央以西と道東における地域差が確認されている(熊木2001、鈴木2003a)。このため所謂北大式(本論で言う「円形・刺突文土器群」)においてもその小変がある可能性が残される。また、円形・刺突文土器群についてはオホーツク式との並行関係が課題となっている。これらから編年作業の対象地域は道央とする。地域の内訳は道央:胆振東部・日高・石狩・後志・空知である。

対象とする時期については以下の理由により晩期後葉から始める。道央前葉の土器群における属性の系譜は晩期後葉から継続し、かつ道東のそれとも共有すること、編年順序の検証・生業の復元に有効な遺跡である対雁2遺跡は、縄文晩期後葉から続縄文前葉まで堆積が連続すること。

対象とする遺構は、土器が出土した住居・墓(埋甕を除く)・土器集中である。墓資料は一括性が高いが、規格の小さい個体が多い。住居資料はその遺構の形態・性質(床面資料でも多様な埋没過程がある)により墓資料に比べて一括性はやや低くなる。包含層は一括性が低いものの、規格が大きい。墓で得られた時系をもとに、包含層資料については属性の同一をもって時間的同一と見なした。極少数出土や破片資料の多い遺跡は対象としない。

対象とする土器は、袖珍土器・浅鉢・鉢・片口付き・注口付きには文様の省略が多々見られるので、有文の小～大型の深鉢とする。

なお、記述・分析のため形態については以下とする。規格は、深鉢・甕・壺については器高、鉢・浅鉢・皿については口径で区分した。深鉢・甕・壺の「大」:器高 $\geq 35$ cm、「中」: $35 >$ 器高 $\geq 25$  cm、「小」: $25 >$ 器高 $\geq 15$ cm、「袖珍」: $15$ cm $>$ 器高。鉢・浅鉢・皿の「大」:口径 $\geq 30$ cm、「中」: $30 >$ 口径 $\geq 20$ cm、「小」: $20 >$ 口径 $\geq 10$ cm、「袖珍」: $10$ cm $>$ 口径。「袖珍」と呼ぶが非実用を意味しない。器種は、口径(口縁部の外縁周の直径)と器高(外底から最高喫水)の比によって区分した。倒円錐台形の形態は、深鉢・甕:口径/器高 $< 1.25$ 、鉢: $1.25 \leq$ 口径/器高 $\leq 1.50$ 、浅鉢: $1.51 <$ 口径/器高 $\leq 3.00$ 、皿: $3.00 <$ 口径/器高と呼称する。胴部最大径よりも著しく窄まる頸部を有する形態を壺と呼称し、口径と器高の比によって分類しない。器形は、耳がつく器形は「耳付+器種名;耳付深鉢など」、高台が付く器形は「台

付+器種名；台付浅鉢など」、片口が付く器形は「片口+器種名；片口深鉢など」、注口が付く器形は「注口+器種名；注口皿など」、把手がつく器形を「把手付+器種名；把手付鉢など」、上面観が舟形の器形を「舟形+器種名；舟形鉢など」と呼称する。舟形は最小口径（船幅）と器高（外底から最高喫水）の比で分類する。

## 2 分析項目

型式論的操作は、「同系・異系×旧・新」についての「検証的根拠」・「論理的根拠」の循環的検証であり、編年にとって必要な共有属性(目的的属性)は「時空の差異」・「系統の同異」を示す要素である。系統復元に有効である内在的・中間的・表出的属性については、成形(粘土紐接合面の傾き・縄文の転写方法)：内在的、文様要素・文様意匠・文様帯：表出的、施文方法(描順や原体)・形態・調整：中間的、ついで項目とする。

## 3 型式の命名について

既存の型式の扱いであるが以下と考える。過去の研究は今日に比べて資料が乏しい。また、考古学資料は母集団が既知でない。これらより、研究は常に仮説であり更新が不可避となる。よって、型式の定義もまた仮説である。仮説に対する真偽決定は無意味であるから、真偽決定による型式名の旧排新造は学史の忘却・分断を昂じさせる。命名当時の意図(仮説の構造と同一「系」の証明)再検討し、その型式成立要件が妥当であれば、名称(分類上位から順に下位へ)を継承すべきである。長寿の型式命はそれがなされている。本論においてもこの考え方で型式について記述を進める。

## 2 節 検証的証拠の好例－江別市対雁2遺跡

### 1 遺跡の形成

遺跡は江別市<sup>えべつ</sup>に所在する。石狩河川の改修に伴い、平成 11～19 年・24 年に調査された(北海道埋蔵文化財センター2000～2008・2013)。登載面積のうち 49.7%を調査した。

遺跡の時期は縄文時代晩期中葉から続縄文時代前葉にかけて続き、主要な時期は縄文時代晩期後葉である。遺構は焼土(屋外炉跡)が主であり全遺構の 83.9%を占める。

遺跡は豊平川<sup>とよひら</sup>右岸に面しているが、19 世紀初めの地震により豊平川(当時の河川名はサッポロ川)がツイシカリ川に接合したことによる。

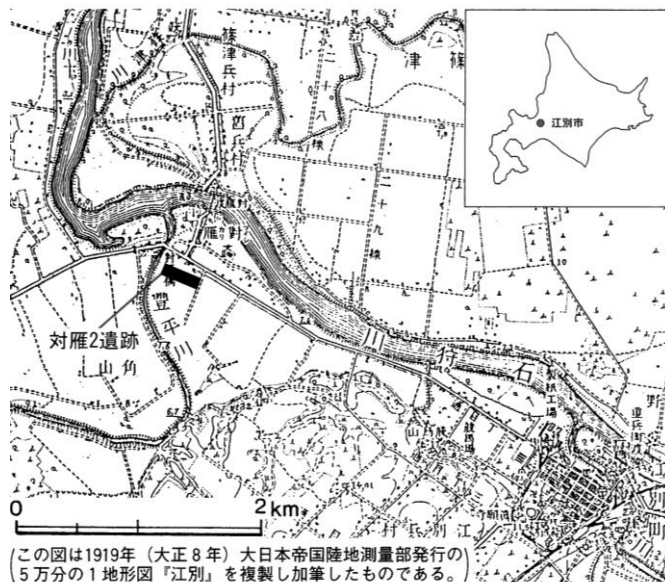
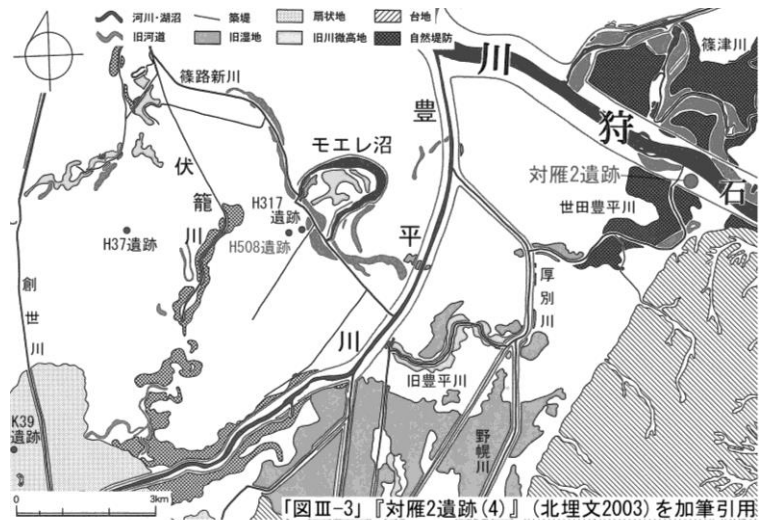


図 V-1 遺跡位置

それ以前はツイシカリ川(厚別川か)の右岸に位置する遺跡であった。遺跡は9m前後の自然堤防の上に立地する。自然堤防は、互層堆積であること、地層の走行が現在の石狩川と90度異なることから、ツイシカリ川の河道狭窄により形成されたと推定されている。

私は以下と推定する。この自然堤防は、ツイシカリ川が形成したにしては大きすぎることに、互層堆積物中に転摩した石炭が含まれること(石狩川堆積物には含まれる:北海道立総合研究機構地質研究所 川上源太郎氏ご教示による)、遺跡形成期の豊平川は旧伏籠川筋以西を流れていたこと(大丸裕武1989)、モエレ沼は古い石狩川であったこと(札幌市教育委員会2016)から、古い石狩川の堆積物である(図V-2)。



図V-2 遺跡周辺の地形分類

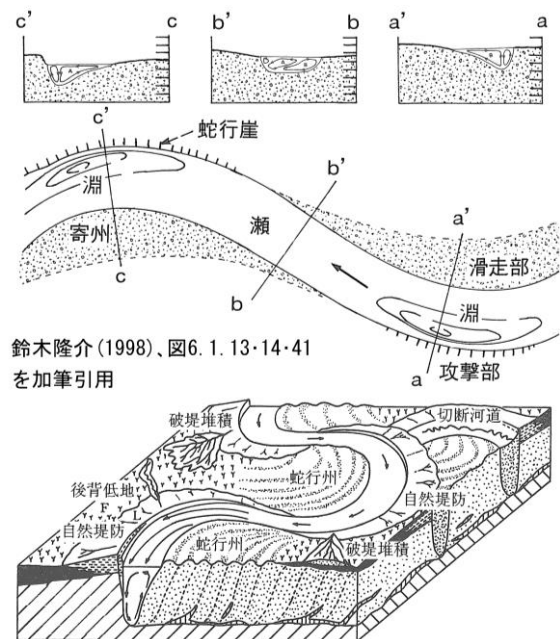
では、古い石狩川はどのような地形を作ったのか。報告書所見では上中部の堆積休止面は自然堤防、上中部の浸食面は流路、下部は中洲あるいは寄洲とされる。

私は以下と考える。標高 8.2 m 以上(最上部)では層界不明のシルト風成堆積、標高 8.2 ~ 6.0 m(上部)では緩やかな堆積休止面と急な浸食面が重層する、6.0 ~ 4.0 m(中部)では浸食面の傾斜が次第に緩くなる、4.0 m 以下(下部)ではそれがほぼ水平になる(図V-4)。これは連鎖的な堆積構造の遷移を示し、上中部の浸食面と堆積休止面は掃流力の増減が繰り返し起こったことを示す。

浸食面が蛇行崖(=自然堤防側面)とすれば側方浸食(攻撃部)が後退したことになり不可解である。そして、堆積休止面が自然堤防上面であれば蛇行崖側が高く次第に低くなる傾斜面となるはずであるがほぼ水平である。いっぽう、蛇行洲とすれば側方堆積(滑走部)にあたり、その進行と是認できる。くわえて、堆積休止面がスクロールバー(蛇行洲先端の弧状の微高地)であれば浸食面と堆積休止面の接合部の休止面側の僅かな高まりが堆積方向に向かって並列していることと符合する。そして、流路の彎曲により螺旋流が生じ、寄洲(蛇行洲)では螺旋流は寄り洲に向かう上昇流となり堆積物を運搬する。

よって、上中部は蛇行洲の蛇行洲堆積物、下部は中洲あるいは寄洲の堆積物(流路残留堆積物)と考えられる(図V-3)。

ただし、近代の豊平川河口付近における石狩川汀線標高は 1.1 m であり増水位時の水面高は 5 m 前後で、最高水位も 8 m を超えることはない。現状からは標高 8 m 以上が河成堆積現象によるものであると説明するの



鈴木隆介(1998)、図6.1.13-14-41  
を加筆引用

図V-3 曲流の堆積構造

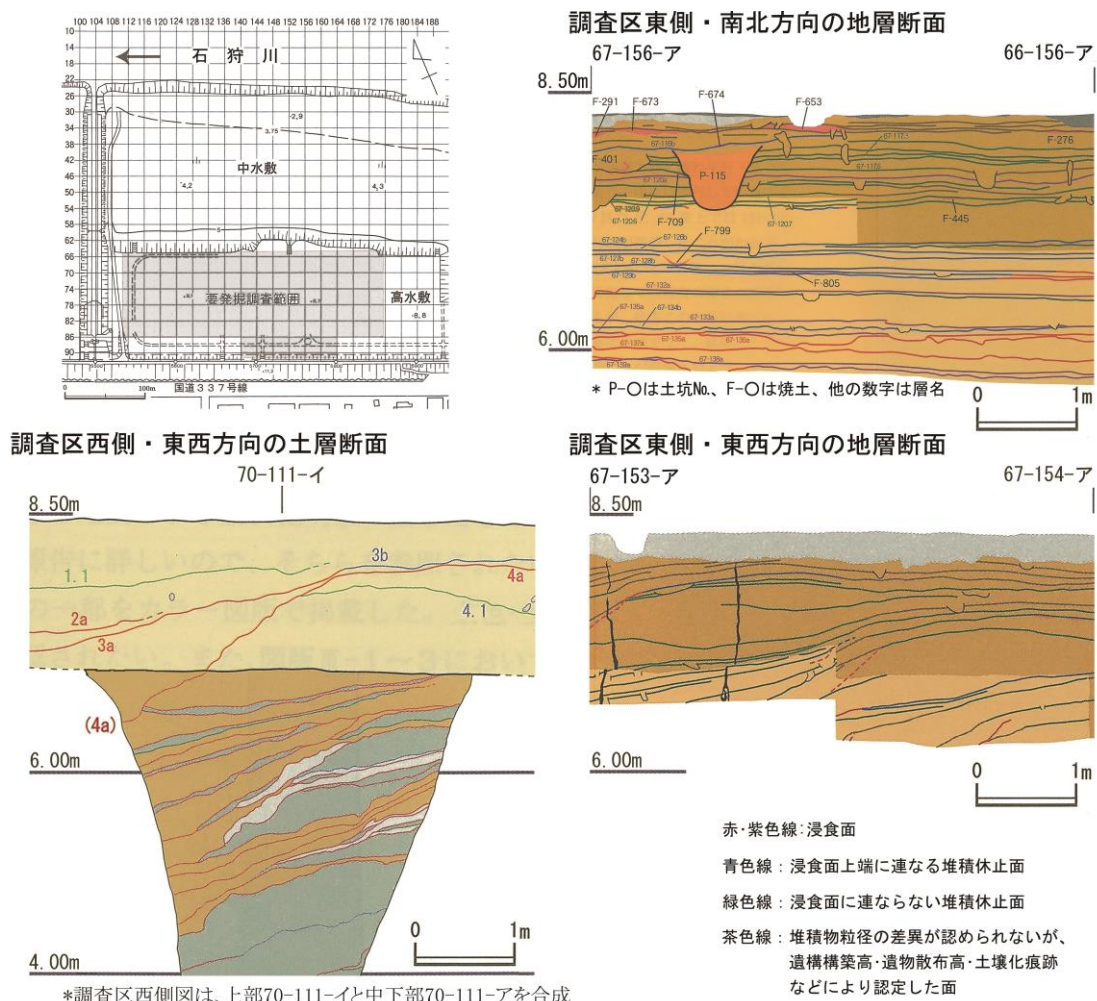
は難しい。くわえて、標高4m以下にある下部は寄洲の堆積物(=河道堆積物)であり、かつて(2830±40y. BP~3000±40y. BP)の汀線標高を示している。水面標高における現汀線標高と古標高の差+3mについて、石狩川とツイシカリ川の合流部において増水時の一時的に生じる水位上昇、あるいは基盤隆起、を考える必要がある。

## 2 地層の堆積

基本層序は、最上部がシルト風成堆積、上中部が河川氾濫による粘土～細粒砂の互層堆積(浸食と休止の不整合を繰り返す)、下部が粗粒砂～細礫の堆積である。

上中部の堆積休止面と浸食面は、東西方向断面(図V-4上段)では西側下がり(図の右→左=旧→新)、南北方向断面(図V-4下段)では水平に堆積し、小規模で明瞭なトラフ状の浸食面が準整合の浸食面(上図の紫線)・堆積休止面の接続してみられる。

平坦面における走行(堆積休止面と浸食面の交線)は略北北西であるから堆積は東北東→西南西に向かって進行した(図V-5の赤線参照)。この走行は調査区の西辺から東辺にみられ、その間隔は不等であり、南北125線を境に西側に行くほどの間隔があく(図V-4上段右)。上中部において浸食面の間隔が空き、層厚もやや増すので蛇行洲の発達が生じた経過とともに進行し、最上部においてはそれが停止したと考えられる。



図V-4 土層断面 北埋文 2003・2005 引用加

遺跡形成期において、古い石狩川の蛇行洲は、東北東→西南西に向かって発達し、ついに蛇行流路の短絡が起こったことを示唆する。また、堆積休止面と浸食面の組み合わせの繰り返しは、掃流力の周期的増減(初期の浸食=掃流力の増、中期の堆積=掃流力の減、終期の堆積休止=掃流力の停止)、水位の周期的上下動、を示す。また、それと直交方向に小規模の明瞭なトラフ状浸食面は位下降に関わる流路側へ戻る流れを示す。なお、考えられる水位上下動の原因は春季融雪とその解消によるものと考えられる。

### 3 放射性炭素年代による遺跡の時期

上中部における堆積・浸食は、西側に傾く傾斜をもち、東北東→西南西に堆積が進行しているため、東側下部が最も古く、西側上部が最も新しくなる。

遺構遺物が多く存在する層準において一定標高の年代測定値を東西に直線状に抽出することで遺跡形成の期間を知ることができる。当遺跡では119件の<sup>14</sup>C年代測定を行っており、試料採取地点は標高約3.5～8.5mの東西65～89線×南北111～175線(以下では、東西・南北・線を略す)である。そのうち上部では遺構・遺物が多く、それに伴い試料採取の大半は標高7.0～8.5mの範囲でなされている。そこで、北側について67～74×111～174・標高8.2～7.8mにおける資料を抽出した(表V-1)。最西のTK2-66の補正年代値は1665±25y. BP、最東のTK2-96の補正年代値は2480±40y. BP、中ほどのTK2-4の補正年代値は2340±60y. BPである。ただし、TK2-96の値はそれよりも西に位置するTK2-92に比べて新しすぎる。同一標高の試料がないので現時点でTK2-92:2580±50y. BPを最古と暫定する。

図V-5中の赤色実線は、100年単位で区分した範囲である。73×132～164間の標高7.90m以上では浸食面が形成されていないことから、同一標高でかつ同一東西方向線上の<sup>14</sup>C年代測定値の数値差は常に新旧が確定できる値となる。測定値の新旧が連続的である2100～2500 yrBPについて、72線を基線にその南北10m以内かつ標高8.0mを基準に8.07～7.98mにおける年代測定地点2点の年代数値差と測定地点間距離の比により推定した。実線のグリットラインに対する傾きは走行軸である。

⑧=1900yrBPはTK2-76・TK2-74間の直線上(距離:37m・年代差:290yr)のTK2-72から東へ55yr=7.0mの地点にある。⑦=2000yrBPはTK2-76・TK2-74間の直線上(距離:37m・年代

表V-1 <sup>14</sup>C年代測定試料と値

試料名	試料番号	試料種類	標高(m)	補正年代(yr.BP)	δ 13(‰)	掲載報告書
北側の測定試料			測定法は全てAMS			
TK2-66	PLD-3360	炭化材片	8.05	1665±25	-26.0	対雁2遺跡(6)
TK2-69	PLD-3363	炭化クルミ	7.95～7.99	1720±25	-23.8	対雁2遺跡(6)
TK2-68	PLD-3362	炭化クルミ	8.00	1745±25	-23.7	対雁2遺跡(6)
TK2-70	PLD-3364	炭化材片	8.00	1140±25	-25.5	対雁2遺跡(6)
TK2-72	PLD-3366	炭化材片	8.05	1845±25	-25.5	対雁2遺跡(6)
TK2-63	Beta-186240	炭化クルミ	7.89	2100±40	-25.6	対雁2遺跡(5)
TK2-73	PLD-3367	炭化材片	8.05	1030±25	-24.0	対雁2遺跡(6)
TK2-74	PLD-3368	炭化材片	8.07	2135±25	-25.5	対雁2遺跡(6)
TK2-75	PLD-3369	炭化材片	8.17	2205±25	-25.0	対雁2遺跡(6)
TK2-4	Beta-138137	炭化クルミ	7.91	2340±60	-25.5	対雁2遺跡(1)
TK2-76	PLD-3370	炭化クルミ	7.99	2330±25	-26.9	対雁2遺跡(6)
TK2-102	PLD-6627	炭化クルミ	8.14～8.18	2490±20	-22.70±0.19	対雁2遺跡(9)
TK2-78	PLD-3372	炭化クルミ	7.99～8.08	2415±25	-25.0	対雁2遺跡(6)
TK2-105	PLD-6630	炭化クルミ	7.95～7.98	2473±21	-23.74±0.22	対雁2遺跡(9)
TK2-101	PLD-6626	炭化クルミ	8.08～8.18	2490±20	-22.70±0.19	対雁2遺跡(9)
TK2-86	IAAA-51600	炭化材片	7.80	2490±40	-26.84±0.88	対雁2遺跡(7)
TK2-100	PLD-6625	炭化クルミ	8.16～8.19	2550±20	-26.16±0.20	対雁2遺跡(9)
TK2-107	PLD-6632	炭化クルミ	8.15～8.18	2500±20	-21.63±0.24	対雁2遺跡(9)
TK2-80	PLD-3374	炭化クルミ	8.04～8.05	2410±25	-22.3	対雁2遺跡(6)
TK2-20	Beta-138153	木炭	7.99	2520±40	-23.7	対雁2遺跡(1)
TK2-92	IAAA-51606	炭化材片	8.02	2580±30	-24.35±0.83	対雁2遺跡(7)
TK2-94	IAAA-51608	炭化材片	8.02	2190±40	-25.99±0.98	対雁2遺跡(7)
TK2-96	IAAA-51610	炭化材片	7.82	2480±40	-22.15±1.02	対雁2遺跡(7)
南側の測定試料			測定法は全てAMS			
TK2-112	IAAA-112172	木炭	8.0～8.1	2190±20	-23.51±0.53	対雁2遺跡(11)
TK2-113	IAAA-112173	炭化物	8.10	2430±20	-22.2±0.41	対雁2遺跡(11)
TK2-115	IAAA-112175	木炭	7.9～8.0	2440±20	-27.85±0.44	対雁2遺跡(11)

\*網掛けはδ13(‰)が高い測定値

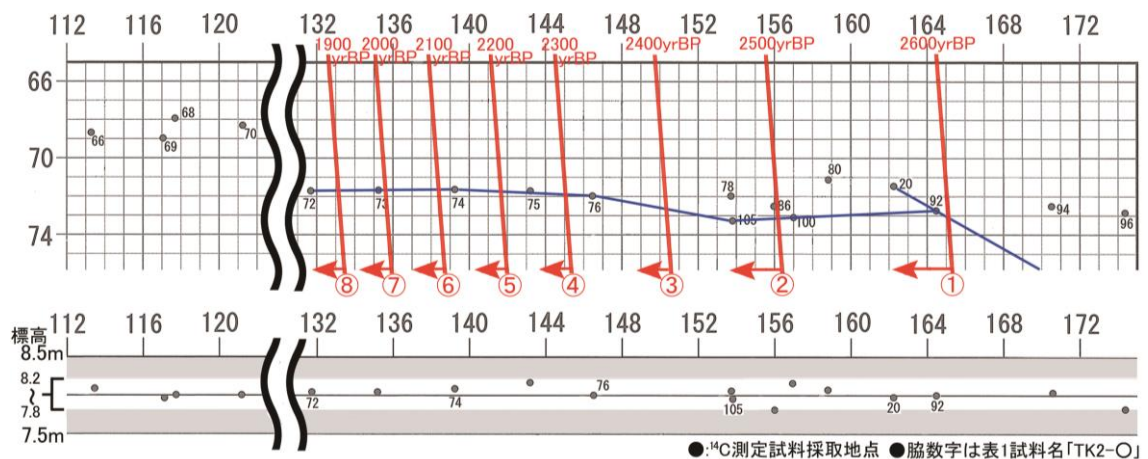


図 V-5 試料採取位置と年代線

差:290yr) の TK2-72 から東へ 155yr=19.8m の地点にある。⑥=2100yrBP は TK2-76・TK2-74 間の直線上(距離:37m・年代差:290yr) の TK2-72 から東へ 255yr=32.5m の地点にある。⑤=2200yrBP は TK2-74・TK2-76 間の直線上(距離:36m・年代差:195yr) の TK2-74 から東へ 65yr=12.0m の地点にある。④=2300yrBP は、TK2-74 と TK2-76(距離:36m・年代差:195yr) から TK2-76・TK2-74 間の直線上の TK2-76 から東へ 165yr=30.5m の地点にある。

③=2400yrBP は TK2-76 と TK2-105(距離:37m・年代差:145yr) から TK2-76 からほぼ東へ 70yr=17.7m の地点にあり、②=2500yrBP は TK2-105 と TK2-92(距離:52m・年代差:105yr) から TK2-105 から東へ 25yr=12.4m の地点にある。①は、⑧～②と異なり暫定の最古値であることから、TK2-20 と TK2-92 を結んだ直線の延長上の南東側に求められる。TK2-20 と TK2-92(距離:13m・年代差:60yr) から TK2-76 から南東へ 20yr=4.3m の地点にある。

③については、TK2-76 から TK2-105 か TK2-78 へ繋がる直線が考えられ、TK2-105 よりも 72 線に沿った TK2-78 経由が妥当であるが、TK2-78 経由では、③が東側に寄り過ぎ(年代値が古い)になること、遺物の時期との齟齬が大きくなること、から TK2-105 へ繋げた。くわえて、TK2-105 から②へは TK2-20 か TK2-92 を経由する 2 通りが考えられたが、TK2-20 経由では、②が東側に寄り過ぎ(年代値が古い)になること、遺物の時期との齟齬も大きくなること、より東西方向線上に載っていること、から TK2-92 へ繋げた。

遺跡の形成期は  $1665 \pm 25 \sim 2580 \pm 50$ yrBP の最大 990 年間の期間があったことになる。ただし、この期間一様に遺跡が継続していたわけではなく、焼土の分布に基づく、北側では 139～147 線と 151～160 線に密集しているの(図 V-6 右側)。標高 8.0m で当てはめると遺跡の盛期はおおよそ以下に示される。139～147 線は⑥:2100～④:2300 前葉 yrBP であり、151～160 線は③:2400～②:2500 中葉 yrBP である。

なお、72 線上の各年代線の間隔と水平方向 1m に堆積する推定所要時間は以下である。⑧-⑦の間隔:12m・8.3 yr/m、⑦-⑥の間隔:14m・7.1 yr/m、⑥-⑤の間隔:16m・6.3 yr/m、⑤-④の間隔:17m・5.9 yr/m、④-③の間隔:21m・4.8yr/m、③-②の間隔:29m・3.5 yr/m、②-①の間隔:45m・2.2yr/m。各 100 年単位の間隔は②-①側が広く⑧-⑦が狭い傾向にあり、堆積の速度は鈍化するものの、一定率の減少を示していないので堆積の速度には遅速の変動がある。堆積所要時間はその逆の値をとる。

#### 4 遺構

【土坑】土坑の特徴は以下である。土坑平面は円形次いで楕円形が多く、検出面上端径は



0.5～1.0mが多い。1.0m以上の大型土坑は北側 a・b 群と南側 a 群、1.0m～0.5m の中型土坑は北側 c 群と南側 a 群、0.5m 以下の小型土坑は 70 以北の北側 c 群に多い。また、北側 c 群・南側 a には切合いがみられ、切合いの多寡から見ると南側において空間使用の頻度が増すように見える。覆土は埋戻しではなく周囲からの流れ込みであり、土坑内遺物も埋没過程で流れ込んだものである。ただし、特異な例としてオニグルミを燃焼させた中型土坑が北側 c 群に 1 例ある。

分布はおおまかに、北側 a 群:65～69×146～148、北側 b 群:71～74×146～148、北側 c 群:65～74×155～158、南側 a 群:85～89×147～150、南側 b 群:85～89×158～159 であり、走行軸に沿って帯状に集中する。帯状の端を南北に延長すると、北側 a・b 群と南側 a 群、北側 c 群と南側 b 群が同じ走行の区間に並ぶ(図 V-6 の中段・下段)。

【焼土】 焼土の特徴は以下である。平面形は殆どが不整形で厚さは 1～4cm ある。ほとんどが地焼炉であり、なかには土器埋置用の小ピットが付帯するものが少数(総数の 2.5%) 北側 2・3 群にある。石を敷いた「集石炉」が北側 2 群に 1 例・南側 1 群に 1 例ある。現地性焼土は炭化物が伴う場合が多く、その外縁に炭化物の密集する・密集しない、がある。廃棄焼土は炭化物が伴わない場合が多々ある。焼土は焼骨片(総数の 17.7%)・炭化クルミ(総数の 21.4%)・両方(総数の 19.2%)を内包する。なお、北側では 3→1 へ行くほど減数・散在してゆくが、南側では 2→1 へ行くほどやや増数・密集してゆくので、焼土は時期が新しくなっても使用空間が南側に移りつつ堆積方向に移っていき、増数・集中したと考えられる。

分布はおおまかに、北側 1 群:65～72×112～118 に散漫な集中、北側 2 群(濃淡より東西 2 群に細分か):64～75×139～147 により濃い集中、北側 3 群(濃淡より東西 2 群に細分

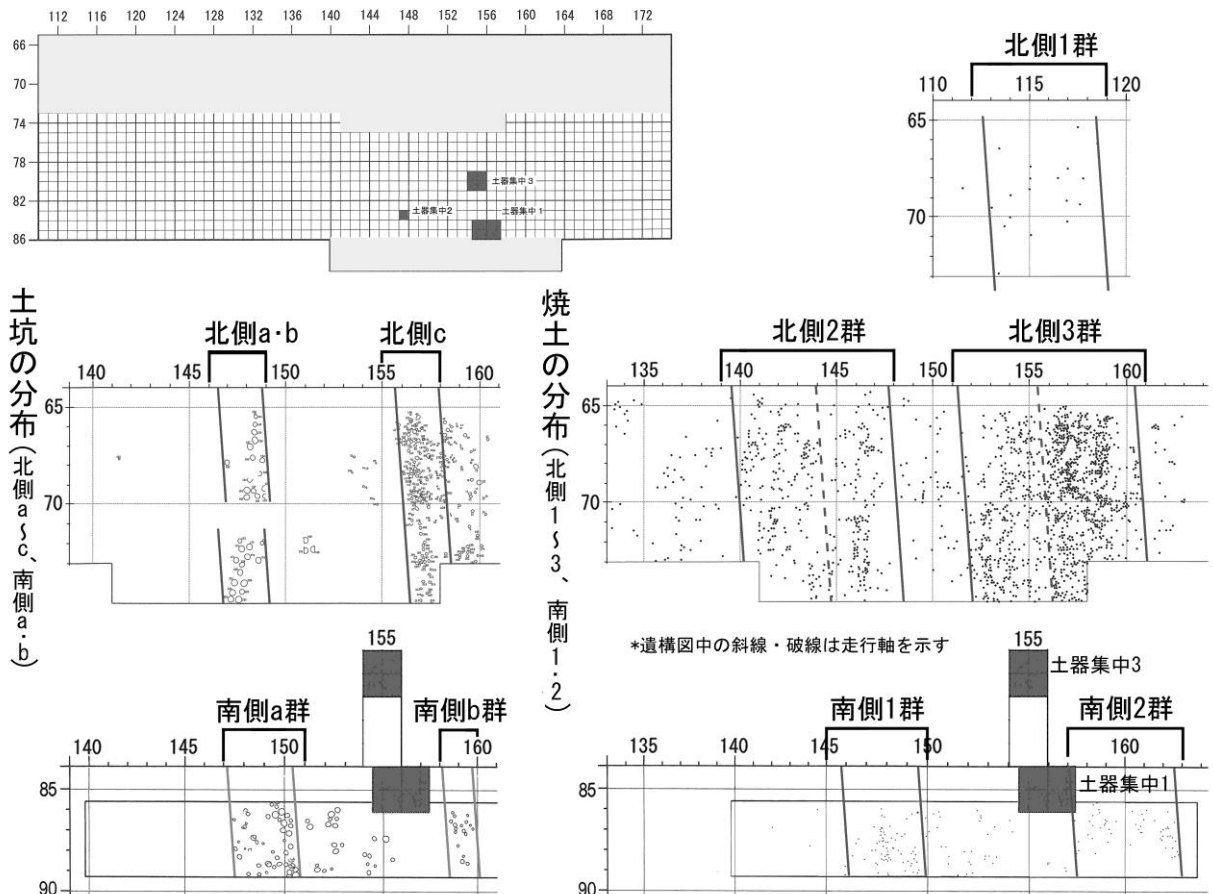


図 V-6 遺構群の位置 北埋 2008 引用加筆

か):65~75×151~160 にさらに濃い密集(鉛直方向も同様)、南側1群:145~149×86~89 にやや濃い集中、南側2群:65~74×157~162 にやや薄い集中がある。走行軸に沿って帯状に集中する。帯状の端を南北に延長すると、北側2群の東半と南側1群、北側3群の東半と南側2群が同じ走行の区間に並ぶ(図V-6 右の上~下段)。

【遺構のまとめ】遺構は標高8.5~7.0mの休止面・浸食面の両方に作られるが、層面傾斜が緩い部分に多く、そこでは垂直・水平方向に重複してみられる。遺構は走行軸に沿って帯状に密集し、土坑の密集は顕著で限られた時期に形成されている。帯状の密集は走行方向と相応するので南北に離れた地点においてもほぼ同時期に埋没したと推定される。土坑と焼土はある程度相関的(焼土が多いと土坑も多い)配置であるが、両者は異なる占地がなされていた。同期するが別目的で設置された遺構であると考えられる。

## 5 遺物

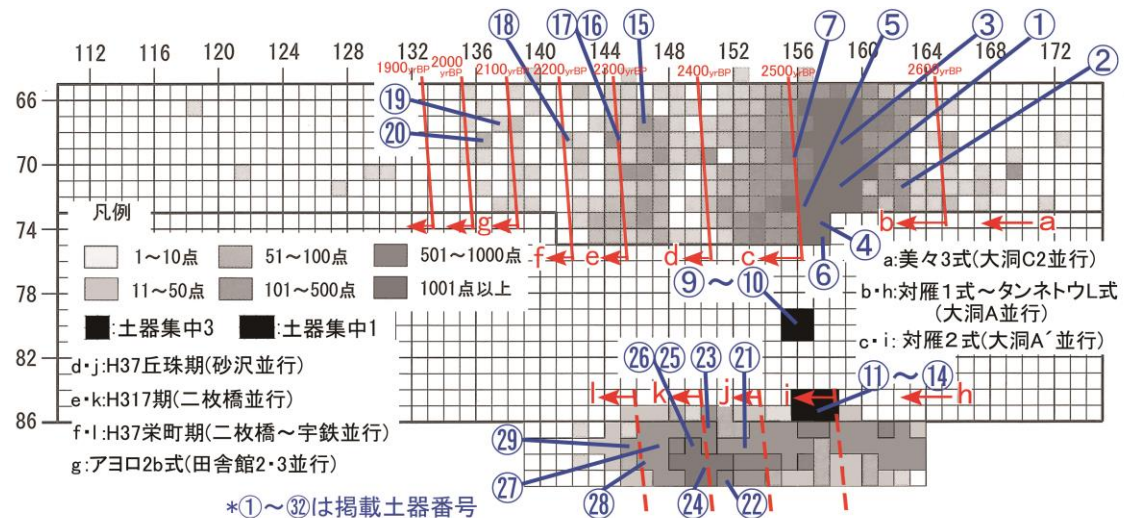
【土器】分布は、上部における北側で66~75×156~159、南側で86~89×147~151の2ヶ所に密集する。ほぼ遺構の分布に重複し、焼土の分布に相応している。

図V-7の北側・赤色実線は標高8.0mにおける年代数値線である。南側・赤色破線については年代数値線が使えないので土器型式の分布により区分した。赤色実線・破線のグリット線に対する傾きは走行である。

北側①~⑦については以下である。①は標高7.6mの堆積休止面上にあり、この面は東へ3.5グリット(=38.5yr、括弧内は時間換算)で標高8.0mに達する。③は標高7.7mの堆積休止面上にあり、この面は東へ1.5グリット(=16.5yr)で標高8.0mに達する。他は標高8.0m付近出土である。②・④~⑦は標高8.0mにある。

北側⑧~⑭は土器集中出土個体である。土器集中3は79~80×155~156に、土器集中1は84~85×155~158にあり、縞状の堆積が不明瞭な標高8.5~7.7mの最上部~上部上半に形成されている。なお、86線の土層断面では156~157で標高7.3m以下に堆積休止面が観察できる。この遺構では西側に傾く層面は観察されていない。よって、図示した位置からのずれはない。

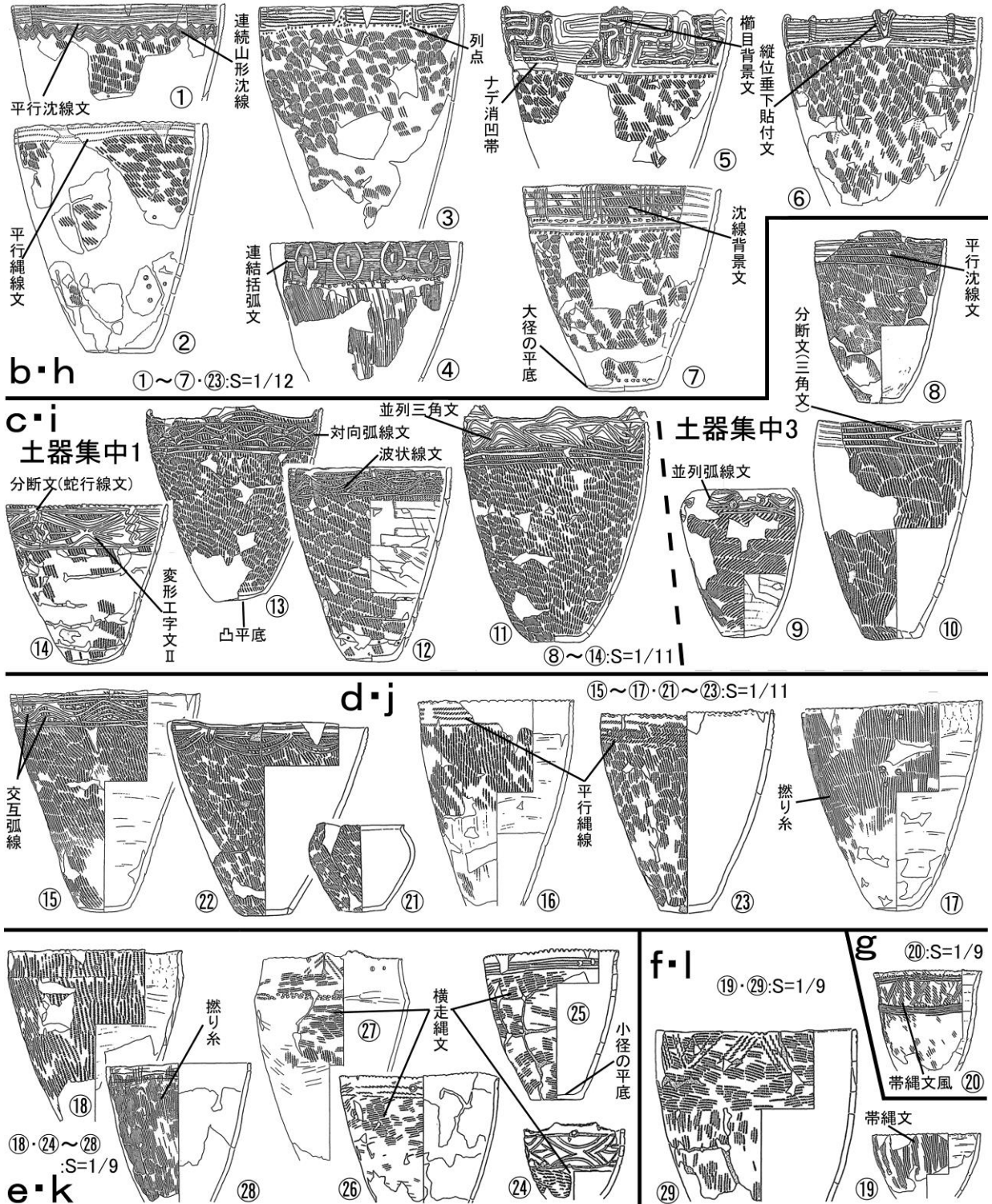
北側⑮~⑳については以下である。⑮は標高7.4m浸食面間にあり、この面は東へ2グリット(=48.0yr)で標高8.0mに達する。⑯⑰は標高7.9mで堆積休止面上にあり、この面は東側へ



図V-7 年代線と掲載土器の位置 北埋 2008 引用加筆

1グリット(=24.0yr)で標高8.0mに達する。⑮は標高7.2m浸食面間にあり、この面は東側へ1グリット(=29.5yr)で標高8.0mに達する。⑲は標高7.9m堆積休止面?にあり、この面は東側へ0.5グリット(=17.5yr)で標高8.0mに達する。⑳<sup>ついで</sup>は標高7.6m堆積休止面上にあり、この面は東側へ1グリット(=35.5yr)で標高8.0mに達する。

上部における型式の凡その分布は以下である。晩期後葉の対雁1式~タンネットウL式は



図V-8 晩期後葉~続縄文中葉の出土器

2600yrBP 線以西で、晩期中葉の美々3 式はそれより以東で出土する。続縄文前葉<sup>おくだま</sup> H37 丘珠式 (5 節参照) は 2400yrBP 線以西で、H317 式 (5 節参照) は 2300yrBP 線以西で、H37 栄町式 (5 節参照) は 2200yrBP 線以西で、アヨロ 2b 式は 2100yrBP 線以西で出土する。典型的な例を **図 V-8** に示した。

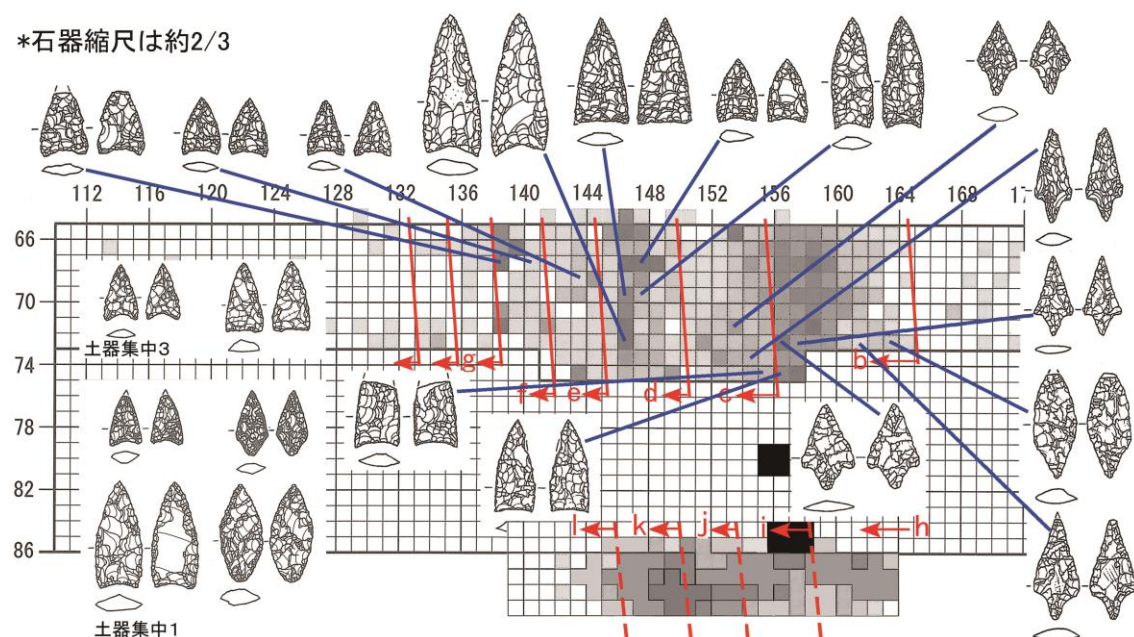
土器集中 1・3 においては大洞 A 式後半～A' 式 (2500～2400yrBP 線間) 並行のタンネットウ L 式～対雁 2 式、土器集中 1 には H37 丘珠式に及ぶものも見られる。この遺構が最上部から上部半にわたって形成されていたことを示す層位的状況に相応している。

なお、最上部では、後北 C<sub>2</sub>・D 式注口付深鉢 1 点 (81-118 区)、江別太 2 式深鉢 1 点 (78-136 区)、アヨロ 2b 深鉢 1 点 (72-162 区)、が出土している。

【石器】分布は土器ほどの密集はないが、北側:67～73×156～158 と 65～72×145、南側:87～89×149 の 3ヶ所に密集する。ほぼ遺構の分布に重複し、焼土の分布に相応する。

黒曜石の石材については、<sup>かみしほろ</sup>上土幌産・<sup>おけと</sup>置戸産黒曜石は少なく、<sup>しらたき</sup>白滝産・赤井川産黒曜石が多く、それらの多寡には偏りがある。上部における 153 線以東では白滝産・上土幌産、153～147 線では白滝産:赤井川産=ほぼ 1:1、147 線以西ではその他:白滝産:赤井川産=ほぼ 1:1:2、であり次第に赤井川産が卓越するようになる (北海道埋蔵文化財センター 2007)。下記に述べる有茎石鏃の石材は白滝産・上土幌産、無茎石鏃の石材は赤井川産・白滝産で占められる。

石器は標高値がないので 8.0m に置き換えることはできないが年代線を重ねて出土傾向を検討した。上部における石鏃の形態ごとの分布は 153 線以東では有茎鏃、159～147 線では大型の無茎鏃、147～138 線以西では小型の無茎鏃、が出土する (北海道埋蔵文化財センター 2004)。これらの時期は、有茎鏃が大洞 A' 並行の対雁 2 式より以前、大型の無茎鏃が大洞 A' 並行の対雁 2 式～H37 丘珠式にかけて、小型の無茎鏃が H37 丘珠式～H37 栄町式にかけてである。なお、土器集中においては有茎鏃と大型無茎鏃と小型無茎鏃とが混在しており、この遺構が最上部から上部上半にわたって形成されていたことを示す層位的状況に相応している。典型的な例を **図 V-9** に示した。



**図 V-9 晩期後葉～続縄文前葉の出土石器位置**

### 3 節 晩期後葉の編年

#### 1 研究史抄と課題

道央部晩期後葉の編年はタンネトウL式(野村・愛下 1962)の設定に始まる。吉崎は大洞A式と道南の日ノ浜式・道央のタンネトウL式・道東のヌサマイ式が並行と考え(吉崎 1965)、林はタンネトウL式とヌサマイ式は同一型式であると考えた(林 1981)。

千歳市ママチ遺跡の調査(北海道埋蔵文化財センター 1983・1987、以下、北埋文と呼ぶ)によってタンネトウL式を遡る・降る時期についても細分がなされた(1983年ではⅡ～Ⅴ群、1987年では2～4類、以下両者をママチ細分という)。また、大沼は樽前<sup>c</sup>降下火山灰(樽前<sup>c</sup>降下火山灰、以下Ta-cと略記する)下位を駒里下層式、上位をタンネトウL式とし、駒里下層式は日ノ浜式・ヌサマイ式と並行関係にあるとした(大沼 1986)。非大洞系(林 1981)の編年はタンネトウL式の設定以降、大洞式や類大洞(渡島半島に分布の中心をもつ聖山Ⅰ・Ⅱ式)との並行関係の追求、鍵層Ta-cと型式変化の照合が主題でもあった。

その後、非大洞系の型式設定に関しては、江別市対雁2遺跡の調査における連続的堆積に包含された資料や大量の一括資料により層位的・型式論的検証が行われた。具体的には、後葉の開始時期、ママチ細分の問題点、土器の属性の変遷についてであり、新たな細分が示された(北埋文 2002・2003・2004・2007)。

また、大洞式や類大洞との並行関係については2007年に福田正宏が言及し(福田 2007a)、近年では道南において大洞A式からA<sup>+</sup>式期にかけての類大洞の調査事例が充実し(北埋文 2016a・2017)、道央との並行関係も言及されている(土肥 2018)。

対雁2遺跡では生活面の層位的検討より次のようなまとまりと並びがある(北埋文 2003)。西脇細分類の旧→新:13-1・2類→13-3類→13-4～7類→13-8類、これに型式論検討が加わり13-4～7類は13-4類→13-5～7類に分離される。芝田細分類は西脇細分類に土器集中1・3の細分類を加えたもので、一部に違いはあるものの相応する。

13-1・2類は、横位並行縄線・沈線が施され、底部が大径の平底。13-1類の胴部下半は縦走LR、13-2類は縦走RLが施される。13-2類は13-1と13-1類の中間群。

13-3類は横位並行縄線・沈線に断続山形文(「ハ」字形が横に連なる)・同心円文・同心半円文がくわり、胴部下半は縦走RLが施される。13-2類と13-4類の中間群。

13-4類は横位並行縄線・沈線と断続山形文に縦位短沈線とボタン状貼付文・縦位垂下貼付文が加わり、文様の重描きが行われ背景文には櫛・縄・沈線が用いられる。底部が大径の平底に凸底が加わり、胴部下半は縦走RLが施される。13-3類と13-5類の中間群。

13-5～7類は13-4類の文様に括弧文・連結括弧文・縦位連結括弧文が加わり、その下部にナデ消し凹帯が施され、貼付文はI字・V字の縦位垂下貼付文のみとなる。底部が大径の平底と凸底があり、胴部下半は斜走RLと縦走RLが縦位の羽状に施されるものがある。

13-8類は直描きの横位並行沈線、縦位垂下貼付文・ナデ消し凹帯は施されない。底部が凸底と凸平底があり、胴部下半は縦走RLが施される。そして、13-8類以降は芝田細分のIX類・X類があり、IX類は鈴木Ⅳ、X類は鈴木Ⅴ・Ⅵに対応する。

表V-2は2006年に提示した属性変遷表(表VI-3)から編年に関わる要素を抽出し、西脇

対名夫・芝田直人の細分(北埋文 2003・2007a)を加えて修正したものである。

西脇・芝田・鈴木の細分案をまとめると次のようになる。横位並行縄線・沈線主体の西脇 13-1~3 類=芝田 I・II 類、文様の重描きが行われ括弧文主体の西脇 13-4~7 類=芝田 III~VII 類、直描きの横位並行沈線主体の西脇 13-8 類=芝田 VIII 類、直描きの弧線・三角文・変形工字文 I・II とそれらを分断する分断文がある芝田 IX 類・X 類=鈴木 IV~VI とする。

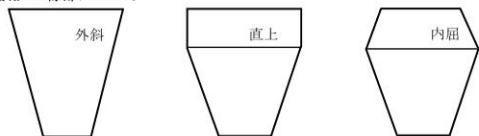
表 V-2 編年に関わる属性の消長

属性		I-1		I-2		I-3		II		III		IV		V		VI
鈴木2006の改		古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	古	新	
接合面の傾き	内傾															
	外傾															
底部形	大径の平底															
	凸底															
	凸平底															
	小径の平底															
口縁部貼付文	I字・V字の縦位垂下															
口縁部主文様	平行縄線文															
	平行沈線文															
	断続山形文															
	括弧文・連結括弧文															
	縦位連繫括弧文															
	波状線文															
	交互弧線文・並列弧線文															
交互三角文・並列三角文																
*変形工字文 II																
区画文	ナデ消し凹帯 (ナデ消し凹帯の上方貫入)															
	連続山形文															
分断文	列点															
	蛇行線文															
描法・原体など	重描き文	背景文		罫目、縄線		罫目、沈線		縄線、沈線		沈線						
	直描き文	縄線、沈線														
	分断文	沈線														
胴部縄文	LR斜位縦走															
	LR横位斜走															
	RL横位斜走															
	RL斜位縦走															
	RL横位斜走+斜位縦走															
従来の分類	野村の設定(1977)															
	ママチ	種市案(1983)				II 群		III 群		IV 群		IV 群・V 群		V 群		
	細分	中田案(1987)				2 類		2 類・3 類		3 類・4 類		4 類				
	西脇案(2003)	13-1・2 類		13-3 類		13-4 類		13-5・6 類		13-7 類		13-8 類				
芝田案(2007)	I・II 類		III 類		IV~VI 類		VII 類		VIII 類		IX 類		X 類			

\*「変形工字文 II」: 対向・背反弧線文、対向・背反三角文、並列菱形文、紡錘形文の総称

\* 主な上記属性について図 V-9 に例示した

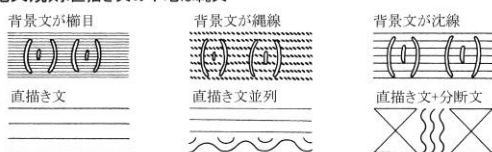
器形:口縁部について



底部形



施文規則:直描き文の下地は縄文



口縁部主文様:連続山形文は区画文としても、蛇行線文は分断文としても用いられる

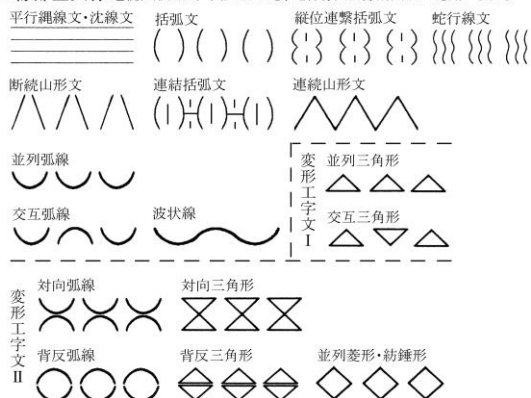


図 V-10 属性要素

鍵層 Ta-c と型式変化の照合については以下である。鍵層 Ta-c のうち、Ta-c1・Ta-c2 が広域にみられ、Ta-c3 が樽前山麓で確認されている(古川ほか 2006)。本文では火山灰間の腐植土について、Ta-c3 上位: I B2、Ta-c3 下位: I B1、Ta-c2 と Ta-c1 の間:c2-c1、Ta-c1 下位: II B と略記する(図 V-11)。Ta-c3 が確認された例は、恵庭市柏木川 4 遺跡・恵庭市西島松 2、千歳市祝梅川小野・千歳市根志越 5 遺跡の 4 例である(北埋文 2010a・2010b・2014a・2018a)。

以前より、II B 層と I B 層にまたがって晩期後葉の土器の出土が知られており、梅川 4 遺跡においては c2-c1 から石斧などの礫石器集中が 2ヶ所検出されている。鍵層の推定年代はまだ有効な例数が少ないものの、表 V-3 より I B2 層最下部:2400

±20 yrBP 以降、I B1 層:2300±30~2500±30 yrBP、c2-c1 層:2490±70~2550±50yrBP、II B 層上面:2550±50~2570±30yrBP と推定できる。

そして、柏木川 4 遺跡の Ta-c に覆われる II B 層の土坑覆土下部からは鈴木 I-3 期が出土し、西島松 2 遺跡では Ta-c3・II b 層(Ta-c3 の下位にある暗褐色土層の遺跡内呼称)が覆土中位~上位にある土坑からは鈴木 III 期が主体に出土しており、祝梅川小野遺跡では I B1・2 層中の土坑からは鈴木 II 期の例がある。また梅川 4 遺跡では I B2・1 層中の土坑からは鈴木 II・III 期の例がある。

対雁 2 遺跡では鍵層火山灰は検出されていないが、連続した堆積と <sup>14</sup>C 年代測定値のより 100 年単位の時系区分を与えることができた。表 V-3 より推定された鍵層火山灰間にある遺物包含層の時期と対雁 2 遺跡の時系分布を対比させると、I B2 層最下部は対雁 2 遺跡の d=2400yrBP 以降、I B1 層は対雁 2 遺跡の e-c=2300~2500yrBP、c2-c1 層は対雁 2 遺跡 c-b=2500~2600yrBP の前半、II B 層上面は対雁 2 遺跡 c-b=2500~2600yrBP の前半となる。上にあげた I B 層の遺構からは続縄文前葉「H37 丘珠期」以降の土器が出土していないので、I B 2 層最下部・I B1 層は 2400yrBP より前と推定される。

よって、I B2 層下部は d=2400yrBP:続縄文前葉「H37 丘珠期」以降、I B1 層は対雁 2 遺跡の d-c=2400~2500yrBP:大洞 A 式並行の型式未設定期、c2-c1 層は c-b=2500~2600yrBP の後半:大洞 A 式後半並行「タンネトウ L 式期」となる。

表 V-3 鍵層の年代値

(単位:yrBP)	*キウス4 遺跡	苫小牧市 高丘	柏木川4	梅川4 遺跡	祝梅川 小野遺跡	祝梅川 小野遺跡	*根志越5 遺跡
I B2						2270±30・ 2300±30	2400±20
Ta-c3				2455±25	2403±34		
I B1		1020±100				2300±30・ 2360±30	2500±30
Ta-c2							
c2-c1	2550±50	2490±70					
Ta-c1							
II B		3030±100	2570±30	2730±25			
備考	c2-c1 中位	全て上面	土坑下部	I B:最小値 II B:上面最小値	土坑下部	I B2:最下部 I B1:上面	I B2:最下部 I B1:上面
典拠	道埋文 1999	古川ほか 2006	道埋文 2007	道埋文 2008	道埋文 2013	道埋文 2014	道埋文 2018

\*低湿性遺跡の泥炭試料

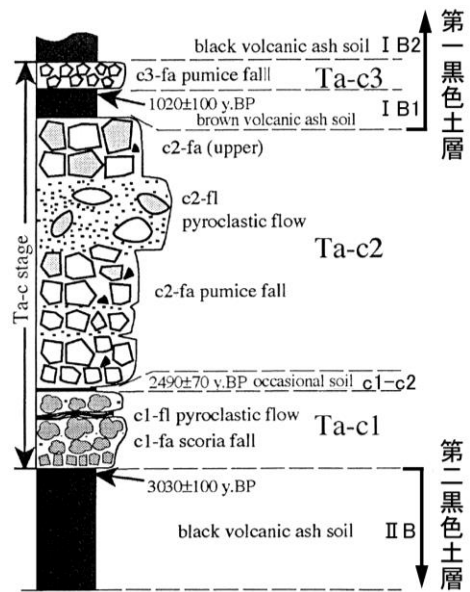


図 V-11 土層模式 古川ほか 2006 引用加筆

タンネットウL式と大洞式との並行関係、鍵層 Ta-c と型式変化の照合について現状を述べてきた。タンネットウL式以降、型式未設定期の西脇 13-8 類以降=芝田細分IX類・X類=鈴木IV~VIについて検討が残った。対雁 2 遺跡の土器集中 1・3 は出土量が多く、一括性も高い資料である。これ以外には、道央の基準資料として石狩市志美第 3 遺跡・新冠町氷川遺跡があり、また道東の例としては太平洋側の音更町相生遺跡、白糠町上茶路遺跡、根室市天寧 2 遺跡がある。以下ではこれらについて比較検討して行く。

## 2 対雁 2 遺跡基準資料の再検討

【対雁 2 遺跡、土器集中 3・1】土器集中 1・3 は遺跡の最上部から上部上半にわたり継続して形成され、RL 斜位縦走「下地縄文」に直描きされる沈線文の個体が出土している。

土器集中 3 下層の主文様は平行沈線文が殆どで上層でも平行沈線文が多い。他には並列弧線文・交互三角文があり、これらは上層からやや多く出土する。平行沈線文+分断三角文は上層と下層の接合資料である。土器集中 1 下層の主文様は平行沈線・平行線+分断蛇行線(分断文様の蛇行線の略称)が主で、上層は横位平行線・三角形(端部が完結・連結)・紡錘形・菱形(端部が完結・連結)、波状+弧線、波状+三角形、波状+紡錘形、これらに分断蛇行線が加わる。変形工字文系の文様が土器集中 3 では少なく、土器集中 1 では多くみられる。

変形工字文系は、変形工字文の模倣文様(変形工字文の構成をほぼ踏襲する)、近似文様(変形工字文の構成は模倣せず、主要素・副要素・粘土粒の一部分を取り入れる)が含まれる。変形工字の名称を工藤竹久(1987)、砂沢式の構成名を根岸 洋(2003)に倣い、型式を東北地方の北部太平洋側の区分を木村 高(2018)に従うと、**図 V-12** となる。

土器集中 1 の模倣文様には変形工字文 C 浅鉢と匹字文壺がある。土器集中 1 の近似文様には、交互・並列する弧線・三角文の一段構成:「変形工字沈線文 I」と、背反・対向(頂部が逆向き)する弧線・三角文の二段構成(**図-10** 直描文様並列ではなく、同一主文様の上下反復)の「変形工字沈線文 II」がある。また、一段構成を複段以上に重畳させるものもある。例えば変形工字 D<sup>〃</sup> が半単位ずれて多段化する壺(2~4 段)や舟形(上部無文帯に 2~3 段・下部無文帯に 1~2 段)がある。

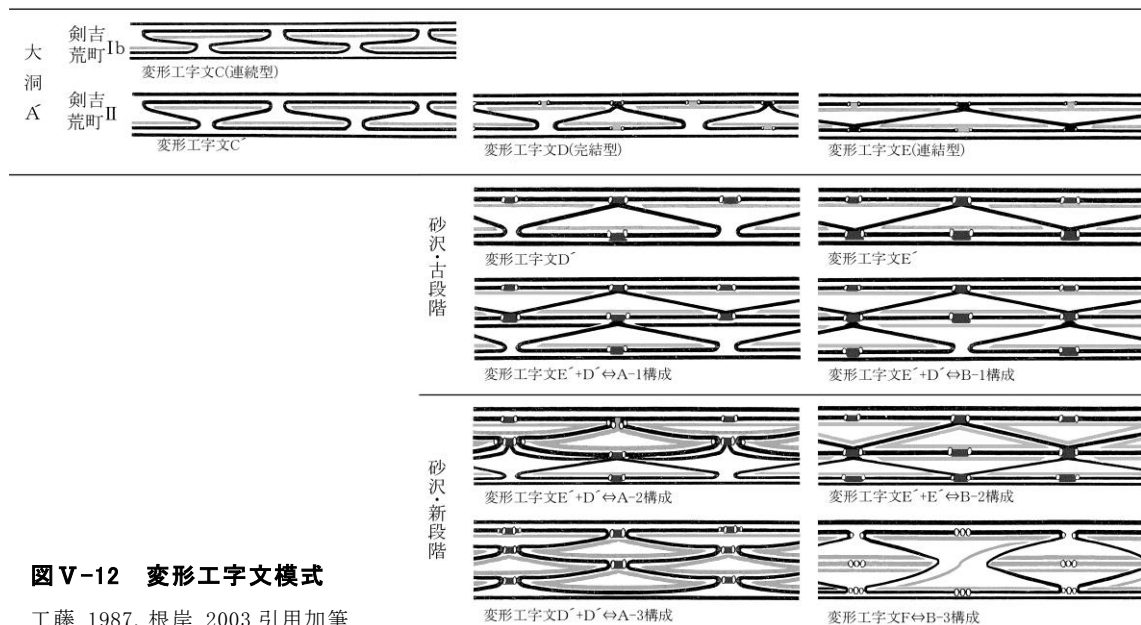


図 V-12 変形工字文模式

工藤 1987、根岸 2003 引用加筆



一段構成の完結型・連結型並列三角形文は変形工字文 D・E に近似する。一段構成の交互三角形文は変形工字文 C または C' に近似する。背反・対向する弧線・三角文は二段構成のうち根岸の B 構成にあたるが、上段連結+下段完結はなく、どちらかの構成をとる。対向三角文・弧線は上段完結型+下段完結、背反三角文・弧線・菱形は上段連結型+下段連結型であり、これら変形工字沈線文 II に分断蛇行線が加わったものは段完結型+下段完結の端部の間に分断蛇行線が入った文様といえる。波状文は交互三角文・交互弧線や菱形・紡錘形と組み合わせで副文様的に加わることが多い。

ところで、砂沢式に併行する H37 丘珠期の深鉢が出土したと報告した(北埋文 2004)。この土器には弧線文の下位に刺突文が施されており、沈線間に刺突文を充填する意匠は砂沢式においては新しい傾向であるという(根岸 2003)。土器集中 1 上層にはそのような意匠はないので H37 丘珠期(古)以前に当てはまる。そして、「変形工字沈線文 I」・「変形工字沈線文 II」の混在、つまり「一段構成」と「二段構成」の混在は主に上層で起こる。根岸によれば「一段構成」と「二段構成」の混在は砂沢式古に見られる状況である。また、福田の考察によれば、並列弧線文に近似する文様は大洞 A<sub>1</sub> 式新期(福田の聖山 II b 期)に入組文 B 系統の主要素として発生し、並列三角文は大洞 A<sub>2</sub> 式期(福田の湯の里 V c 期)に入組文 B 系統の主要素より派生する。交互三角は入組文 B 系統の主要素として、山形状の波状文は入組文 C 系統の主要素として大洞 A' 式期に発生する(福田 2007a)。道央においては弧線文・三角文はともに IV 期から認められる。

以上より、土器集中 3 には並列弧線文と交互三角・平行沈線+分断三角文があるので、下層は大洞 A<sub>2</sub> 式並行期、上層は A' 式並行期、よって下層・上層は IV・V 期にほぼあたる。土器集中 1 上層は、並列と交互の三角形文・弧線文、背反と対向の弧線文・三角文、並列菱形・紡錘形があり、分断蛇行線があることから A' 式～砂沢式古段階並行期、下層は土器集中 3 の構成に近いので大洞 A<sub>2</sub>～A' 式並行期、よって下層・上層は V・VI 期にほぼあたる。

土器集中 3 の <sup>14</sup>C 年代値は 2430±40～2500±40yrBP、土器集中 1 は 2430±40～2530±40yrBP で、年代線の大洞 A' の範囲に、±の+値を見込むと大洞 A、±の-値を見込むと砂沢式並行にもかかる(図 V-5 参照)。

### 3 他遺跡との比較

【志美第 3 遺跡住居跡(石狩町教委 1979、教委は教育委員会の略称)】では RL 斜位縦走、「下地縄文」、横位平行線・交互三角形・交互弧線・交互三角形・交互弧線+波状文が描かれる個体出土している。住居群は IV・V 期=大洞 A<sub>2</sub>～A' 式並行にあたる。

【新冠町氷川遺跡包含層(新冠町教委 1975)】では RL または LR 横位斜走、「下地縄文」・「下地ナデ」、横位平行線・矢羽・波状線・交互弧線・対向弧線・紡錘形が描かれる個体、沈線文+充填刺突文・横位平行縄線文が描かれる個体(第 4 群土器)、大洞 A' 式浅鉢、砂沢式鉢・浅鉢(砂沢式古段階)が出土している。第 4 群土器全てを大洞 A' 式並行の道央在地系土器として氷川式を仮称する(乾 1987、大沼 2008)が、第 4 群土器のうち「下地縄文」、平行沈線・波状+交互弧線が描かれる個体が大洞 A' 式に並行する。

【音更町相生遺跡包含層(音更町教委 1986)】LR 横位斜走、「下地縄文」・「下地ナデ」、平行沈線・波状・交互弧線・対向弧線・紡錘形を含む沈線文、沈線文+充填刺突文・平行縄線文が描かれる個体と報文で大洞 A' 式とされた浅鉢(砂沢式古段階)が出土する。「下地ナデ」、紡錘形沈線文・沈線文+充填刺突文は新しい属性である。包含層出土土器のうち LR 横位斜走、

「下地縄文」、横位平行線・波状・交互弧線が描かれる個体が大洞 A<sup>1</sup> 式に並行する緑ヶ岡式。

【白糠町上茶路遺跡包含層(北埋文 2007b)】LR 横位斜走+綾絡文、「下地縄文」、平行縄線・交互弧線・貝殻復縁条痕。Ta-c 上位の焼土の <sup>14</sup>C 年代値:2440±15~2495±15yrBP。交互弧線が描かれる個体と <sup>14</sup>C 年代値より大洞 A<sup>1</sup> 式に並行する緑ヶ岡式。

【根室市天寧 2 遺跡魚骨層(北埋文 2011)】LR 横位斜走+綾絡文、「下地縄文」、平行沈線・平行沈線+縦位沈線・対向弧線・並列紡錘形・貝殻復縁条痕、「下地ナデ」で縄線文による対向弧線。魚骨層直下の黒色腐植土中に Ta-c があり、魚骨層の <sup>14</sup>C 年代値:2460±30~2370±30yrBP。平行沈線+縦位沈線・対向弧線・並列紡錘形が描かれる個体と <sup>14</sup>C 年代値より大洞 A<sup>1</sup> ~砂沢式に並行する緑ヶ岡式~フシココタン下層式。なお、報文では大洞 A 式の出土よりこの時期に並行する緑ヶ岡式・古と判断している。

#### 4 各地域の並行関係と晩期後葉の型式設定

これまでの考察から以下が導かれる。対雁 2 遺跡における IV・V 期はそれぞれ大洞 A<sub>2</sub> 式・大洞 A<sup>1</sup> 式に並行し、道南における大平 II・大平 III 期(土肥 2018)と並行する。そして、VI 期は砂沢式と並行する。道東との並行関係は IV・V 期が緑ヶ岡式、VI 期はフシココタン下層式に並行する。対雁の I・II・III 期は大洞 A<sub>1</sub> 式と並行し、タンネトウ L 式は II・III 期にあたることから、タンネトウ L 式以前・以後は型式が未設定である。I 期を対雁 1 式、IV・V を対雁 2 式と呼ぶ。VI 期は既設の H37 丘珠期である。

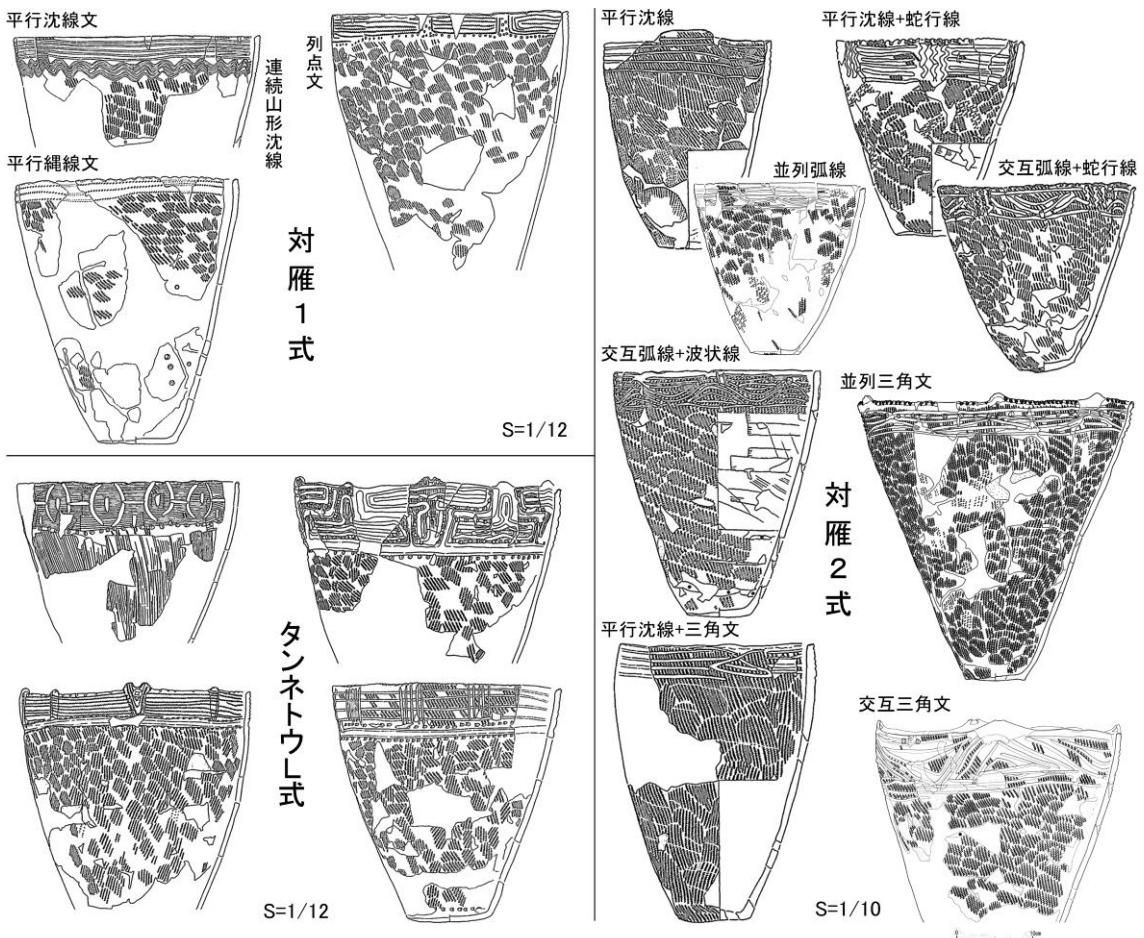


図 V-13 対雁 1 式・タンネトウ L 式・対雁 2 式 北埋 2007a 引用加筆

## 4 節 続縄文前葉の編年

### 1 研究史抄と課題

道央部の続縄文前葉は「H37 丘珠」から「H37 栄町(古)」期にあたる(表 I-1 参照)。近年、道央在地系土器の編年は札幌市 H317 遺跡における属性分析・編年によって深化し(仙庭 1995)、札幌市 H37 遺跡丘珠空港地点(札幌市教委 1996)と札幌市 H37 遺跡栄町地点(札幌市教委 1998)に引き継がれた。これらを受けて編年は 3 時期区分に収斂する。高瀬・福田は「H37 丘珠空港内:砂沢式並行」「H37 栄町地点/N156:二枚橋式古並行」「H317:二枚橋式新並行」に細分した(高瀬・福田 2001)。鈴木は「H37 丘珠:砂沢式並行」「H317:二枚橋式古並行」「H37 栄町:二枚橋式新~宇鉄式並行」とし、くわえて口頸部の施文方法・文様と底部形態から、「H37 丘珠」を古中新に、「H317」を古新に、「H37 栄町」を古新に細分した(鈴木 2003a)。福田は「道央第 I 段階(丘珠空港内):砂沢式並行」「道央第 II 段階(H317・N156・N30 遺跡など):二枚橋式古並行」「道央第 III 段階(H37 栄町地点・N30 遺跡など):二枚橋式新~宇鉄/大石平並行」に細分した(福田 2004)。佐藤 剛は「1 期(H37 遺跡丘珠空港内):砂沢式並行」「2 期(H317 遺跡 II 群土器):砂沢~二枚橋」「3 期(N30 遺跡 2 号堅穴住居):二枚橋」に細分した(佐藤 2011)。なお、鈴木は「H37 丘珠:砂沢式並行」「H317:二枚橋古並行」「H37 栄町(古):二枚橋新」「H37 栄町(新):宇鉄式並行」に改めている(鈴木 2009ab)。

ただし、3 時期を細分することについて、福田は明確な供伴状況(遺構単位での型式抽出)が検出されていないことから保留するべきとの提唱がある(福田 2007b)。未だ明確な供伴状況を示す資料は現れていない。前出の対雁 2 遺跡の出土状況・口頸部施文の種類(沈線文・縄線文)や、胴部原体の撚り・原体の押捺方法とその配置を新しく加えて(鈴木 2019)、既存の基準資料に型式論的操作を行い、私見細分の再整理を行う。

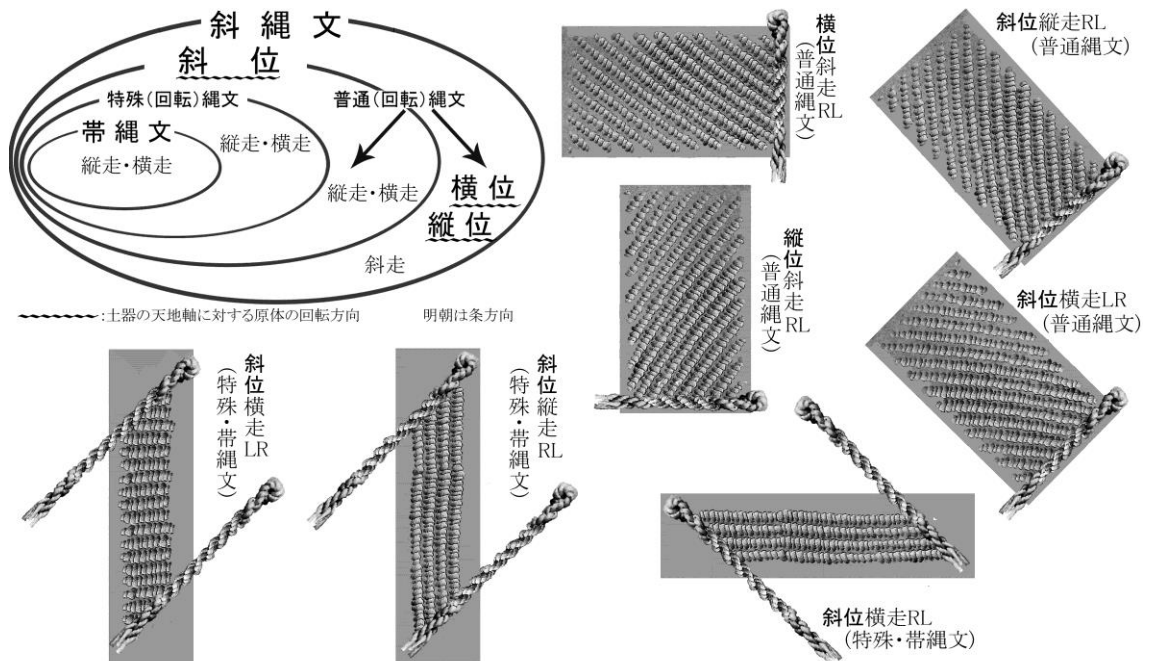


図 V-14 原体回転方向・押捺方法 鈴木 2019 加筆引用

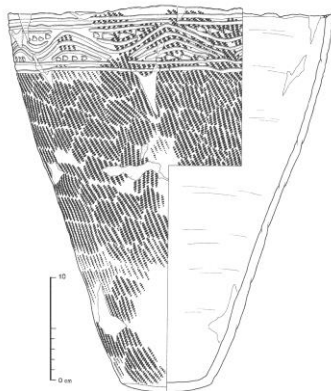


図 V-15 刺突文充填の深鉢

北埋文 2004 引用

を刺突文が充填する。これは砂沢式において新しい傾向である(根岸 2003)。この個体を報文では H37 丘珠期「古」と報告したが、H37 丘珠期における新しい傾向である口頸部施文「下地ナデ」・凹底ではなく H37 丘珠期「新」より古い属性を持つ。「中」に位置付けなおす。ただし、やや下層の焼土の  $^{14}\text{C}$  年代値が  $2450 \pm 40\text{yrBP}$  と古く出ていることが懸念される。いっぽう土器集中 1 上層にはそのような意匠の土器はない。以上より、土器集中 1 上層は H37 丘珠期「古」となり、型式論的には上層のうち VI 期が砂沢式古段階並行にあたとみられる。

【②札幌市 H37 遺跡丘珠地点第 2 号住居状】LR 斜位縦走「下地縄文」に並列三角文を 2 段に重畳+斜線が描かれる個体が出土する。深鉢口頸部の形態は直上。

【③札幌市 H37 遺跡丘珠地点第 1 号竪穴床面】RL 斜位縦走「下地縄文」に平行沈線、対向弧線、矢羽状を 2 段に重畳させる個体。深鉢口頸部の形態は外傾・内彎。

【④札幌市 H37 遺跡丘珠地点遺物集中 D】RL 斜位縦走「下地縄文」に単体ずらした 2 段並列紡錘形(変形工字文 A-3 構成に近い≒砂沢式新段階)+刺突文充填で口頸部が直上する個体と、砂沢式新段階の浅鉢も出土する。

【⑤余市町大川遺跡 JH-4 床面(余市町教委 2000a)】RL 斜位縦走「下地縄文」に平行沈線、交互弧線+波状文、並列三角文、変形工字文 A-3 構成=砂沢式新段階を含む個体と RL 斜位縦走「下地ナデ」の矢羽状が描かれる破片、が出土する。深鉢口頸部の形態は外傾・直上。

【⑥えりも町油駒遺跡包含層 IV 群(えりも町教委 2000)】IV 群は H37 丘珠~H37 栄町期古を含む群である。そのうち、RL 斜位縦走「下地ナデ」の平行沈線、平行沈線+平行縄線文、並列三角の縄線文を口頸部文様を持つ個体、波状工字文+刺突文充填で外屈する口縁を持つ砂沢式新段階、が出土する。深鉢口頸部の形態は外傾・内彎・外屈。

【⑦札幌市 H37 遺跡丘珠地点第 1 号住居状】RL 斜位縦走「下地縄文」に平行沈線、並列紡錘形を含む沈線文が描かれる個体と RL 斜位縦走「下地ナデ」平行沈線、並行縄線、が施される個体、が出土する。深鉢口頸部の形態は外傾・内彎・外屈。

【⑧札幌市 H317 遺跡 7 層南群】RL 斜位縦走「下地縄文」に交互弧線、並行縄線+並列三角の沈線文の個体が出土する。深鉢口頸部の形態は直上。なお、以前(鈴木 2014a・2016)に R 縦走撚糸が H37 丘珠期新に出現すると述べた。しかし、この破片は破片が孤立的(南群より 5m 離れ、5m 四方から撚糸の出土がなく、撚糸の分布の重心は中央 3 群以北にある)に出土していること、梅川 4 遺跡の RL 斜位縦走沈線文と撚糸の分布に重複がみられないことから前言を撤回し H317 期古から出現すると訂正する。

## 2 「H37 丘珠」基準資料の再検討

【①対雁 2 遺跡、土器集中 1 上層】RL 斜位縦走、口頸部文様は「下地縄文」で以下の主文様がみられる。横位平行線・「変形工字沈線文 I (並列・交互の弧線・三角文)」・「変形工字沈線文 II (背反・対向する弧線・三角文の二段構成=B 構成、並列の菱形・紡錘形)」これらに分断蛇行線が加わり、波状文は副文様的に加わることが多い。一段構成を複段以上に重畳させるものもある。「変形工字沈線文 I・II」の混在は「一段・二段構成」の混在は砂沢式古段階に見られる。

この遺跡では、RL 斜位縦走、口頸部が「下地縄文」で交互弧線+波状文の深鉢が出土した(北埋文 2004)。主文様の間

①は砂沢式古段階並行で、④～⑥は砂沢式新段階並行である。刺突文充填は「中」以降にあるので④～⑥は「中～新」、そのうち「下地ナデ」が混じる⑤⑥は「新」。⑥～⑧に縄線文があり⑥は「新」であることから縄線文は「新」と仮定でき、⑧のR縦走撚糸は次期のH317にも続いてみられるのでこの仮定は妥当である。

①は「古」、⑤～⑧は「新」、やや新しい②～④「中」の類例で、従来の「H37 丘珠期」を「H37 丘珠式」とする。

### 3 「H317」基準資料の再検討

【①札幌市 H317 遺跡の遺物集中群】縦走縄文が各集中の主体を占める。南群では縦走縄文+沈線文主体に撚糸、北群では縦走縄文主体に撚糸・横走縄文・帯縄文、中央1群では縦走縄文主体、中央3群では縦走縄文+縄線文主体に横走縄文・撚糸、中央2群では横走縄文主体に撚糸、である。各遺物集中群には撚糸が伴ういっぽうで縄線文・横走の有無が認められる。遺物集中群の形成は大まかに「南群・北群の一部(沈線文): H37 丘珠式→中央1群→中央3群(横走が多)→中央2群(横走が殆ど)→北群(帯縄文あり)」という過程を示す。

【②恵庭市ユカンボシE7遺跡Ⅲ層土器集中(恵庭市教委 1995)】二枚橋古段階並行期とアヨロ1式(H37 栄町期古)を含む集中で、横走縄文が両集中の主体を占める。南側集中では斜位横走+縄線文が多数で、斜位縦走縄文、横位斜走縄文+縄線文、帯縄文風(普通縄文で帯縄文を模倣する)縦位斜走で口縁が外反する深鉢、器壁が磨かれ口縁横走縄文+胴部縦走縄文が組み合わさる二枚橋系短頸壺(二枚橋古段階)が1点ずつ、出土する。北側集中では斜位横走+縄線文が多数で、口縁横位斜走縄文+頸胴部斜位縦走縄文、上半帯縄文風斜位横走縄文+下半斜位縦走縄文の浅鉢、恵山系甕(アヨロ1式)が1点ずつ、出土する。両集中には帯縄文風が伴い、かつ斜位縦走縄文・口縁横走縄文+胴部縦走縄文の有無が認められる。土器集中の形成は、H317 期新の内でおおよそ「南群→北群」という過程を示す。

【余市町大川遺跡 FP-14(余市町教委 2002)】斜位縦走縄文深鉢と変形工字文(B構成・古段階)+斜位縦走縄文深鉢と二枚橋系甕(波状工字文・古段階)。

【苫小牧市タプコブ遺跡大場1号墳(苫小牧市教委 1984)】斜位横走縄文深鉢と二枚橋系甕・壺(古段階)。

【苫小牧市静川22遺跡4号土坑墓(苫小牧市教委 2002)】斜位横走縄文+縄線文深鉢と二枚橋系台付浅鉢(古段階)。

①では縦走縄文が主体で撚糸が伴い、②では横走縄文が主体で撚糸・帯縄文風が伴う。前者が古相、後者が新相を呈することから、①の中央3群・中央2群を「古」、②の南側集中を最「新」の類例とし、従来の「H317 期」を「H317 式」とする。

### 4 「H37 栄町」基準資料の再検討

【①札幌市 H37 遺跡栄町地点第1号竪穴覆土】横位斜走縄文+斜位縦走縄文、横位斜走縄文+斜位横走縄文+縄線文、斜位縦走縄文+横位斜走縄文+縄線文、縦走特殊縄文(鈴木 2019)の浅鉢片、恵山系甕(アヨロ1式)が出土している。

【②札幌市 H37 栄町遺跡包含層】口縁部2条の横走帯縄文+胴部縦走帯縄文、口～胴上半部横走特殊縄文+胴下半部斜位縦走縄文、口頸斜位縦走縄文+胴部斜位横走縄文、口縁斜位横走縄文+頸胴部横位斜走帯縄文風の甕形、胴部縦走特殊縄文で頸部に縄線文が付く恵山系甕(アヨロ1式)が出土している。

【③苫小牧市タプコブ遺跡 GP-30】では口縁斜位横走縄文+頸胴部縦走帯縄文深鉢と恵山

式浅鉢・壺(アヨロ1式)が出土している。

【④江別市江別太6文化層(江別市教委1979)】斜位縦走縄文+縄線文、口頸部横走帯縄文+胴部縦走帯縄文、口縁内面に恵山式を模倣した稜を設ける口頸部横走帯縄文、恵山式甕(アヨロ2a式)が出土している。

【⑤苫小牧市静川22遺跡15号土坑墓】上半斜位横走帯縄文深鉢、口頸部斜位横走帯縄文+胴部縦走帯縄文深鉢、恵山式甕・壺(アヨロ2a式)。

アヨロ1式に並行する個体は縦走特殊縄文、縦走特殊縄文+帯縄文風が多く(鈴木2019)、普通縄文(鈴木2019)にある横と縦の組み合わせはこの期にしか見られない。アヨロ2a式に並行する個体は縦走特殊縄文+横走特殊縄文、縦走帯縄文+横走帯縄文が多い(鈴木2019)。また口縁部に1~2条の横走帯縄文が付く器形は深鉢形に多く、口~頸部を複数条で覆う横走帯縄文が付く器形は甕型が多いことから、前者が古層、後者の甕型と帯縄文の普及が新相である。①~③を「古」、④⑤を「新」の類例とし、従来の「H37 栄町期」を「H37 栄町式」とする。

### 5 多様な当該期の縄文原体と押捺方法

LR短条横走縄文はH317式「古」~「新」に盛行し、LR短条横走特殊縄文はH317式「古」~「新」にある(鈴木2019)。LR条を水平に転写するには2つの方法がある(図V-14)。一つは原体の押捺点を移動せず転写するので土器の左天から右地へ45°方向に条が流れる(横走普通縄文:図V-14右中段)、もう一つは原体の押捺点を移動させて転写するので条方向と転写方向は直角する(横走特殊・帯縄文:図V-14左端、図V-16)。後者は「垂直に天地」・「右天から左地へ」として現れることが多く前者に混じって現れて見極めが難しい。表V-4は2019年



図V-16 LR横走普通縄文+横走特殊縄文の深鉢

北埋文 2014c 引用

表V-4 LR横走特殊縄文の例 鈴木2019引用加筆

所在地	遺跡名	刊行年	遺構名など	掲載図名	時期	LR		施文順・施文部位 丸は多用を表し、三角は丸に次ぐ頻度、記号脇の数字は施文順をあらわす
						普通	特殊	
札幌市	N30	1998	7a+b+c層	第91図112	H317・古	Δ2	○1	口頸(○1→縦縄線)、○1・Δ2口~胴
札幌市	N30	1998	7c層	第88図85	H317・古		○	口頸(ナデー横縄線)、○胴
札幌市	N30	1998	7a+b層	第85図66	H317・古	○1	Δ2	口頸(ナデー横縄線)、○胴~底
札幌市	N30	1998	7c+a層	第91図110	H317・古		○	口頸(ナデー横縄線)、○胴
千歳市	梅川4	2002	土器集中28	Fig49-5	H317・古新		○	○口~底
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-12-33	H317・古新	○1	Δ2	底部
恵庭市	ユカンボシE7	1995	土坑北側	図14-40	H317・古新	○	Δ	△口頸のみ、○胴~底
札幌市	H317	1995	中央3群・新	第104図55	H317・新	○	Δ	斜め気味△口頸のみ、○口~胴
恵庭市	ユカンボシE7	1995	土坑南側	図10-12	H317・新		○	口頸(ナデー横縄線・半截管刺突)、○胴
恵庭市	ユカンボシE7	1995	土坑南側	図11-14	H317・新		○	口頸(ナデー変形工字=山形縄線)、突起下卸状付文、○胴~底
恵庭市	ユカンボシE7	1995	土坑南側	図9-11	H317・新		○	口頸(ナデー変形工字=山・馬蹄形縄線・半截管刺突・円形刺突)、○胴~底
千歳市	梅川4	2002	土器集中22	Fig49-1	H317・新		○	○口~底
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-9-21	H317・新	○1	Δ2	△底のみ、○口~胴
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-23	H317・新	○1	Δ2	△胴の一部
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-25	H317・新	○1	Δ2	△胴の一部
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-29	H317・新	○1	Δ2	△胴下半
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-30	H317・新	○1	Δ2	△胴下半~底部
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-31	H317・新	○1	Δ2	△胴下半
千歳市	梅川4	2014	Ⅲ層	図V-2-10-33	H317・新	○1	Δ2	底部

RL 帯縄文は H37 栄町式「古」に道央西縁で特殊縄文から派生し、H37 栄町式「新」に盛行する(鈴木 2019)。

撚糸文は、H37 丘珠式「新」に縦走撚糸が現れ、H37 栄町式「古」に縦走+横走撚糸があり、H37 栄町式「新」以降には見られない。千歳市梅川 4 遺跡(北埋文 2014c)では H317 式「新」に横走撚糸が 1 例あるので、撚糸文条方向・組合せは縦走→縦走・横走→縦走+横走と変遷するのだろう。

ニシン椎骨側面回転文は、大沼によって続縄文前葉に位置づけられ(大沼 1985)、稚内市声問大曲遺跡(稚内市教委 1992)から多数出土し、これを含む声問大曲遺跡ⅢB 群は宇津内ⅡaⅠ式に並行(熊木 2003)し、H37 栄町式に並行する(図 V-17 下段)。梅川 4 遺跡では「ニシン椎骨側面横位回転文+LR 短条横位斜走縄文+LR 短条横走帯縄文との組み合わせ」という組み合わせであることと整合する。

自縄自巻は、梅川 4 遺跡で確認され、胴部・縦走→口縁部・横走、胴部・縦走→口縁部原体押捺があり、胴部施文→口縁部の順で施文される。撚糸と異なる特徴は条に縞れがある(図 V-17 上段)。前者は撚糸施文の順と同じく、後者は帯縄文施文順(H37 栄町式以降)と同じである。条の傾は縦走と縦走+横走がある。「縦位」「縦位と横位の組み合わせ」があるので H317 式~H37 栄町式「新」にあると考えられる。

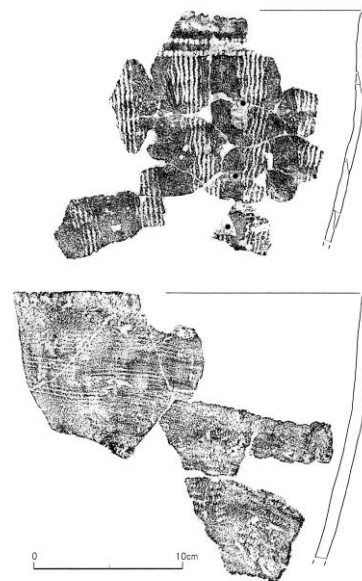


図 V-17 自縄自巻と鯨椎骨圧痕文

表 V-5 編年に関わる属性の消長

北埋文 2014c 引用

属性		H37丘珠式			H317式		H37栄町式	
		古	中	新	古	新	古	新
接合面の傾き	外傾							
	内傾							
底部形	凸平底							
	小径の平底							
	外底縁が張り出す凹底							
	外底縁が張り出す平底							
口縁部主文様	平行沈線文							
	平行縄線文							
	矢羽状線文							
	波状線文							
	交互弧線文・並列弧線文							
	変形工字文 I							
	変形工字文 II							
分断文	横帯縄文							
	蛇行線文							
口縁部描法	直描き文							
	文様下地							
胴部縄文	普通縄文	RL	斜位	縦走				
		LR	斜位	横走				
	撚り糸	RまたはL	斜位	縦走				
		RまたはL	斜位	横走				
		RまたはL	斜位	縦走+横走				
	特殊縄文 または 帯縄文	LR	斜位	横走				
		RL	斜位	縦走または横走				
		RL	斜位	縦走+横走				

器形:口頭部について



底部形

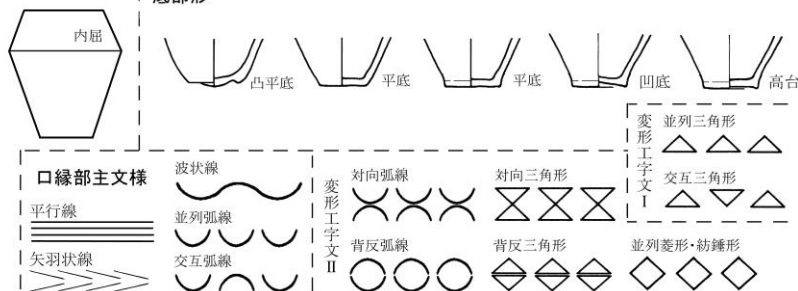


図 V-18 主な属性要素

## 5 各型式の編年主要属性

### 【H37 丘珠式の属性】

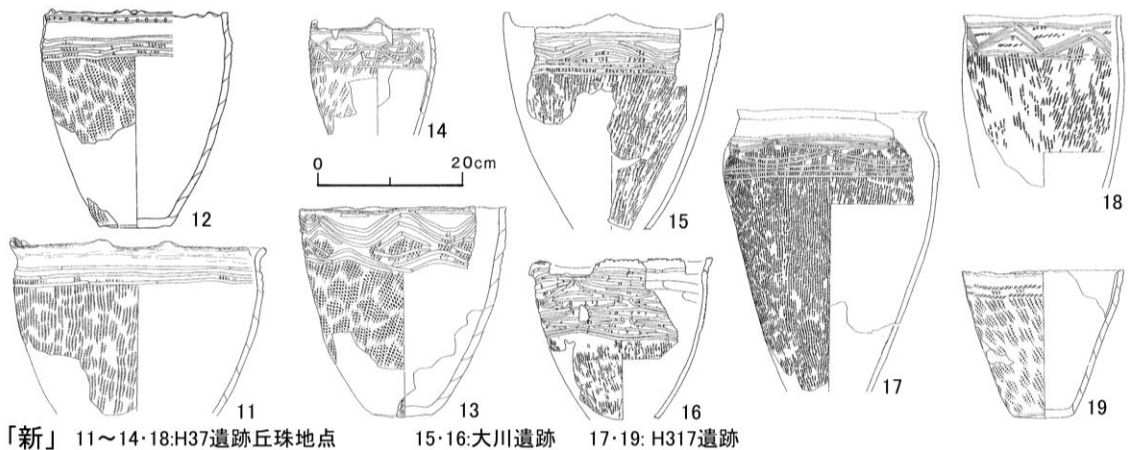
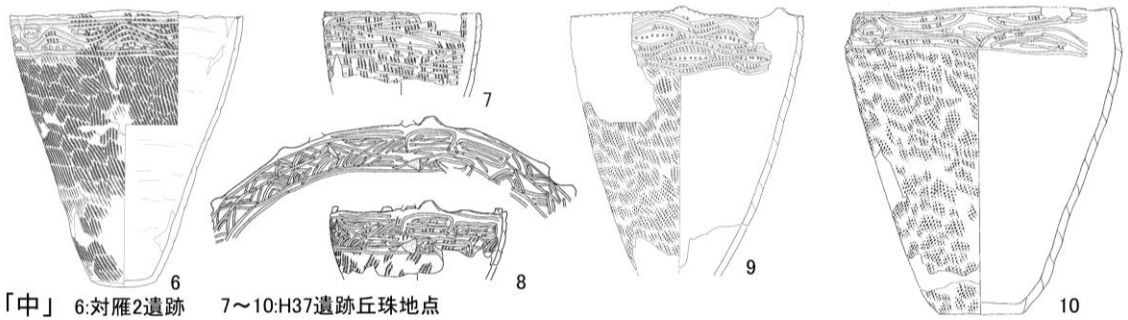
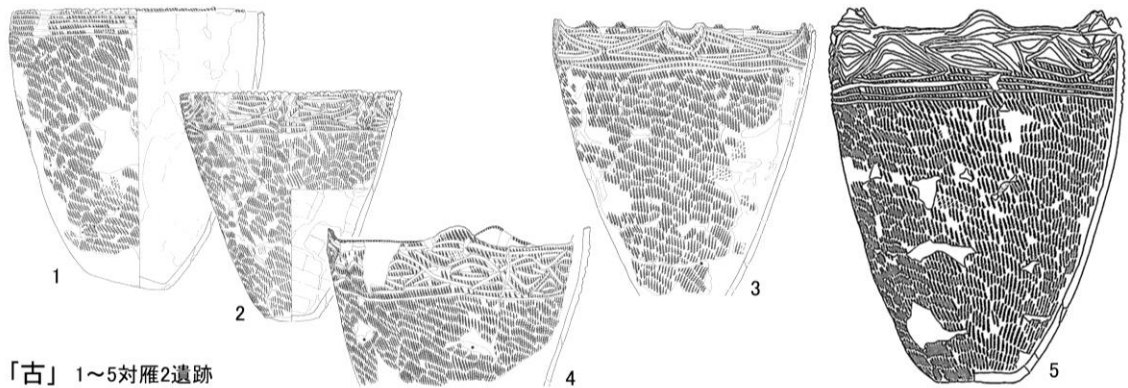
〈成形〉ほとんど外傾接合。

〈器形〉深鉢口頸部の形態は外傾・内屈・直上のうち、「古」「中」は内屈・直上が主で、外屈する口縁部は「新」に加わる。底部は「古新」通じて凸平底・小径の平底(凸平底で成形して後に凸部分を外底面側から平らにする)。

〈胴部 縄文〉「古」～「新」を通じてRL斜位縦走が主である。

〈描順規則〉「古」は「下地縄文」が主で、「新」には「下地ナデ」が加わる。

〈口頸部文様〉「古」「中」は沈線文が主で、「新」には縄線文が加わり、主文様には変形工字・弧線(交互・並列)・三角形(交互・並列)・矢羽状・菱形・紡錘形、横位平行線がある。沈線・縄線の交点には粘土粒が付けられるものがある。



図V-19 H37 丘珠式 北埋 2003a 引用加筆



【H317 式の属性】

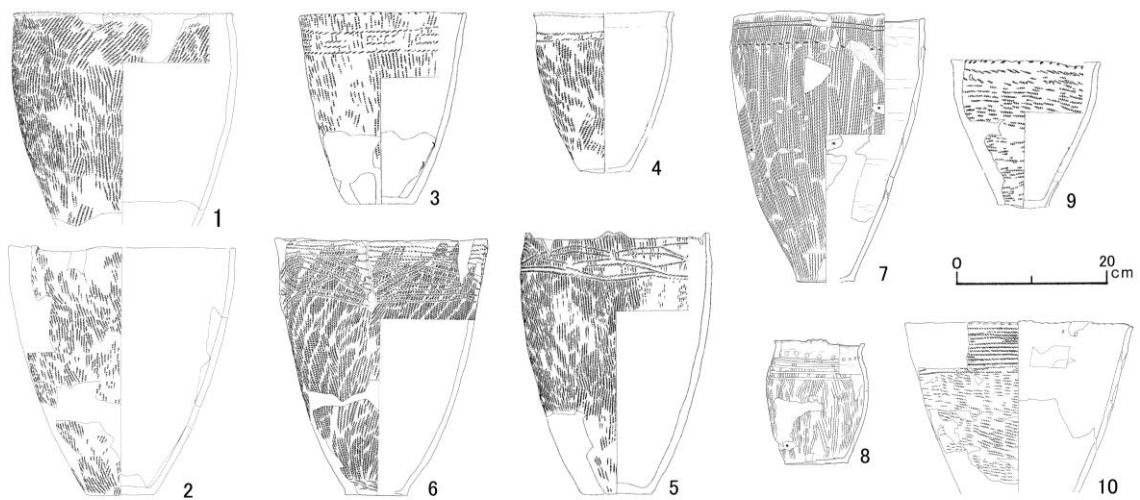
<成形>「古」ほとんど外傾接合、「新」の甕形には恵山式の影響で内傾接合が現れる。

<器形>深鉢口頸部の形態は、「古」「新」を通じて内屈・直上が主で、外屈する口縁は「古」までである。底部は凸平底・小径の平底は「古」、外底縁が張り出す平底・外底縁が張り出す台状の凹底は「新」。

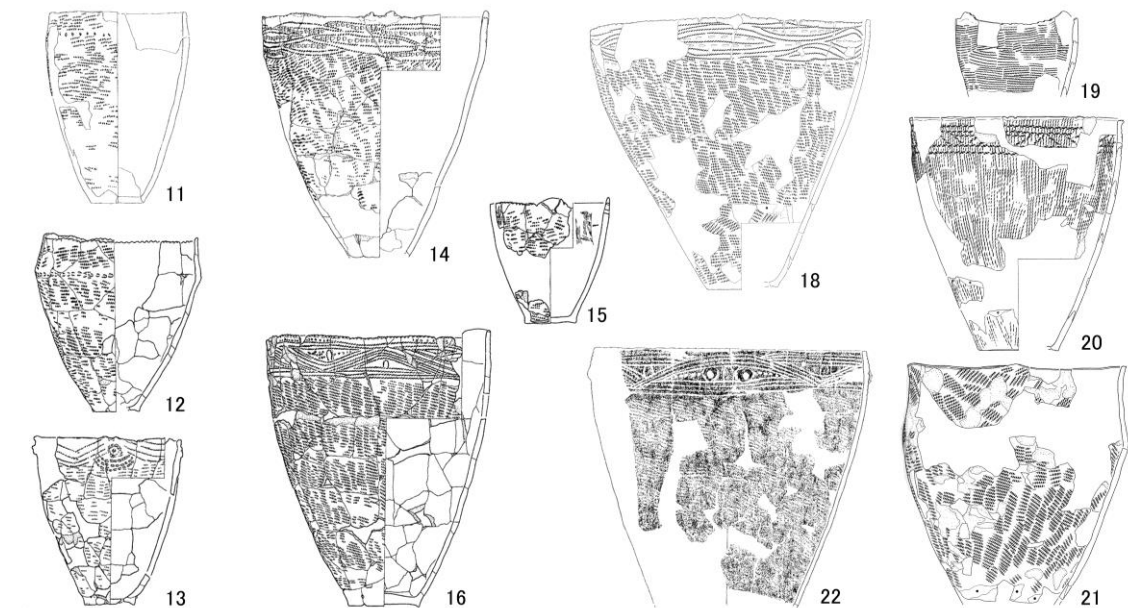
<胴部縄文>「古」はR L斜位縦走が主で、「新」にはL R斜位横走縄文が主となる。

<描順規則>「古」「新」を通じて「下地ナデ」が主である。

<口頸部文様>「古」「新」を通じて縄線文が主である。主文様には変形工字・波状工字、弧線(交互・並列)・三角形(交互・並列)・菱形・紡錘形、横位平行線がある。「新」には道東地方の影響によりボタン状貼付文も現れる。



「古」 1~5・9:H317遺跡 6:滝里安井遺跡 7・8:梅川4遺跡 10:N30遺跡



「新」 11:H317遺跡 12~16:ユカンボシE7遺跡 18~21:梅川4遺跡 22:梅川4遺跡(市教委調査)

図V-20 H317 式 北埋 2003a 引用加筆

【H37 栄町式】

〈成形〉「古」はほとんど外傾接合で甕形の一部に内傾接合があり、「新」には深鉢形にも内傾接合が現れる。

〈器形〉「古」を通じて直上が主で、搬入・模倣系には甕形(肩部の創出)もある。「新」には口縁内面に稜を設けるものが現れ、甕型が主になり、道東地方の影響により耳付も現れる。底部は、外底縁が斜め下に張り出す台状の凹底は「古」。外底縁と胴部の接点がくびれ高台になるのは「新」。

〈胴部縄文〉「古」は胴部にRL斜位縦走が主で、「新」にはRL縦走帯縄文が主となる。

〈描順規則〉「古」は「下地ナデ」・「縦位特殊縄文」下地が主で、「新」には「横位帯縄文」下地が主となる。

〈口頸部文様〉「古」は沈線文・横位帯縄文・縄線文、「新」は沈線文・横位帯縄文が増える。文様は変形工字・波状工字・並列三角・紡錘形がある。突瘤文は、大川遺跡 P-182B ではアヨロ 2a 式にあるので「新」まで残る。

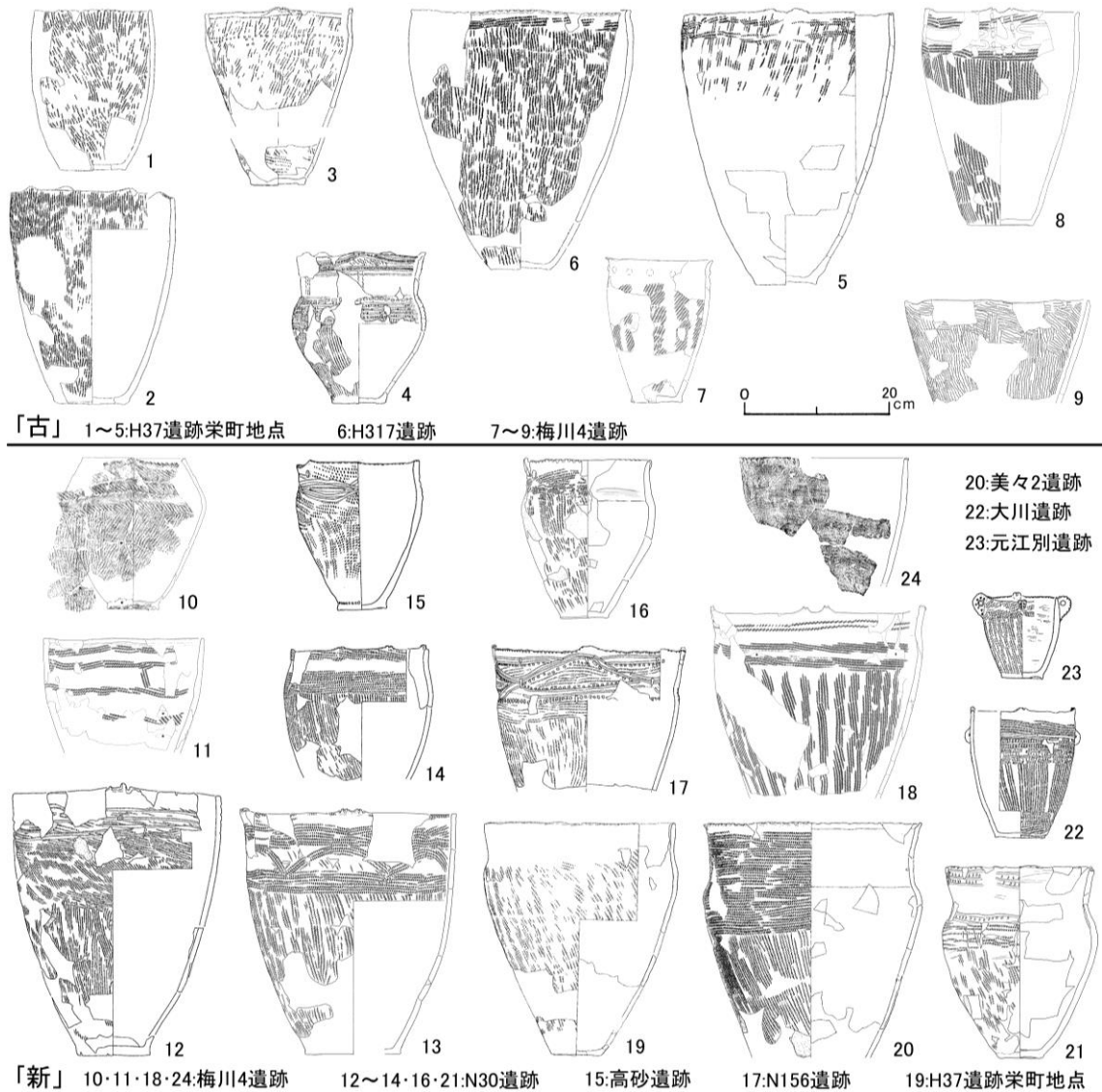


図 V-21 H37 栄町式 北埋 2003a 引用加筆

## 5 節 続縄文中葉の編年

### 1 研究史抄

道央部続縄文中葉は H37 栄町式「新」～後北 C<sub>1</sub> 式にあたる(表 I-1)。なお栄町式「新」は記述の都合により前節に含めた。前節では H317～H37 栄町式が、下北地方二枚橋式の影響と道南恵山式の影響を受けて次第に変容する過程を辿った。例えば、舟形の消滅、特殊縄文から派生した装飾的な帯縄文の発生、甕形の模倣による頸部の発達、成形における内傾接合への転換などである。中葉は恵山系の影響を受けた道央在地系が、今度は道東宇津内 II a 式の影響を取り入れ消化してゆく過程である。影響とは粘土紐に刻みを付けて縄に似せたもの(擬縄貼付文)の貼付である。細分はその有無、貼付位置、意匠によりなされてきた。

後北式は、河野広道が擬縄貼付文の有無により前北式と後北式とに分け、擬縄貼付文・その後裔である微隆起線文が付された土器を後北式と呼んだ(河野 1933)。いっぽうで、しばらくの間その実体が不明であったことから、「坊主山 II・III a・III b 式」(森田知忠 1967)、「江別 I・II・III-a 式」(石附喜三男 1973)などが提唱された。

1979 年に江別市江別太遺跡の報告書が刊行され(江別市教委 1979)、江別太式～後北 A 式についての検討材料が加わり、札幌市 K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点(以下、K39 遺跡という)の報告書が刊行され良好な資料が加わった(北海道大学 2004・2005)。江別太遺跡の報告書刊行以降の問題点は、型式論的操作によって「突起下垂下沈線文→突起下垂下擬縄貼付文→横環擬縄貼付文」という時系順序が導けるか、であった。

筆者は、突起を基点とする縦位文様に系統と時系が備わると考えて江別太式・後北 A～C<sub>1</sub> 式の編年を行い(鈴木 2003a)、それによる縦方向分割数と横分割数の組み合わせの変化が後北 A～C<sub>1</sub> 式の編年指標になることを道南においても示した(鈴木 2011a)。また、江別太遺跡文化層については以下に解析した。文化層は雪解けによる周期的増水により堆積した。土器は、増水後半期末の掃流力の弱い溢流による蛇行洲堆積物末端が埋積する谷部分(滞水状態)にあり、いっぽう焼土などの人為痕跡は増水休止期に形成され遺物を伴わない。蛇行洲堆積物の末端中に広く散布する土器は人為による分布ではなく、1m<sup>2</sup>以下の分布についても同様の堆積状態から人為であるとは確定できない。以上により、文化層中の土器について型式論的操作が必要となった。そして沈線文・擬縄貼付文に系統と時系が備わることが証明できた(鈴木 2018c)。次項以下において鈴木 2018 の要部を説く。

### 2 江別太遺跡と K39 遺跡における基準資料の再検討

【江別太遺跡】分布の狭い掲載例(散布範囲 $\leq 1$  m<sup>2</sup>の二文化層 3 例・四文化層 3 例・五文化層 1 例)、堆積状況が判明する分布のやや広い掲載例(蛇行洲堆積起源例と谷部分の堆積物例=蛇行洲堆積物の末端:  $1$  m<sup>2</sup> < 散布範囲 $\leq 16$  m<sup>2</sup>の一文化層 1 例・三文化層 4 例・四文化層 3 例・五文化層 1 例)について検討した結果、表 V-6 は属性 16 項目(文様意匠は図 V-22 参照)について検討した結果である。13 項目に消長があり、13 例のうち 4 例は不連続に出現する(破線の矢印)。五文化層で途絶える属性は 0 項目、四文化層から初出する属性は 7 項目(うち 3 例は破線)、五文化層と四文化層を跨ぐ属性は 3 項目(うち 1 例は破線)、三文化層から初出する属性は 1 項目、二文化層から初出する属性は 2 項目であった。

表 V-6 江別太遺跡の掲載土器の属性消長 鈴木 2018 引用

層名	図No.	突起下の装飾										口頸部の装飾					頸部の区画文			備考				
		なし	沈線文	垂下沈線文 下線は 沈線間刺突	垂下貼付文 下線は刺突	垂下 +横線 貼付文 下線は刺突	沈線間 刺突文	DまたはC 形刺突	山形 沈線	連続 山形 貼付文	短斜 沈線	沈線文	横走 帯縄文	無文 帯	DまたはC 形刺突	押しき 刺突	沈線							
一文化層	第6図6																							
二文化層	第6図2																							蛇行線状山形沈線
	第6図3																							口縁内面に縄文
	第6図5																							
三文化層	第7図6																							
	第7図13																							
	第7図14																							
	第8図18																							アヨロ3a
四文化層	第8図20																							
	第8図21																							
	第8図22																							
	第9図24																							口縁内面に縄文
	第9図27																							
	第9図30																							底部のみ残存
五文化層	第10図34																							
	第10図38																							アヨロ2b

\*斜字体は散布範囲≤1㎡、1㎡<散布範囲≤16㎡のうち、図No.二重下線は蛇行洲堆積物起源の個体、図No.下線は蛇行洲末端堆積物起源の個体。

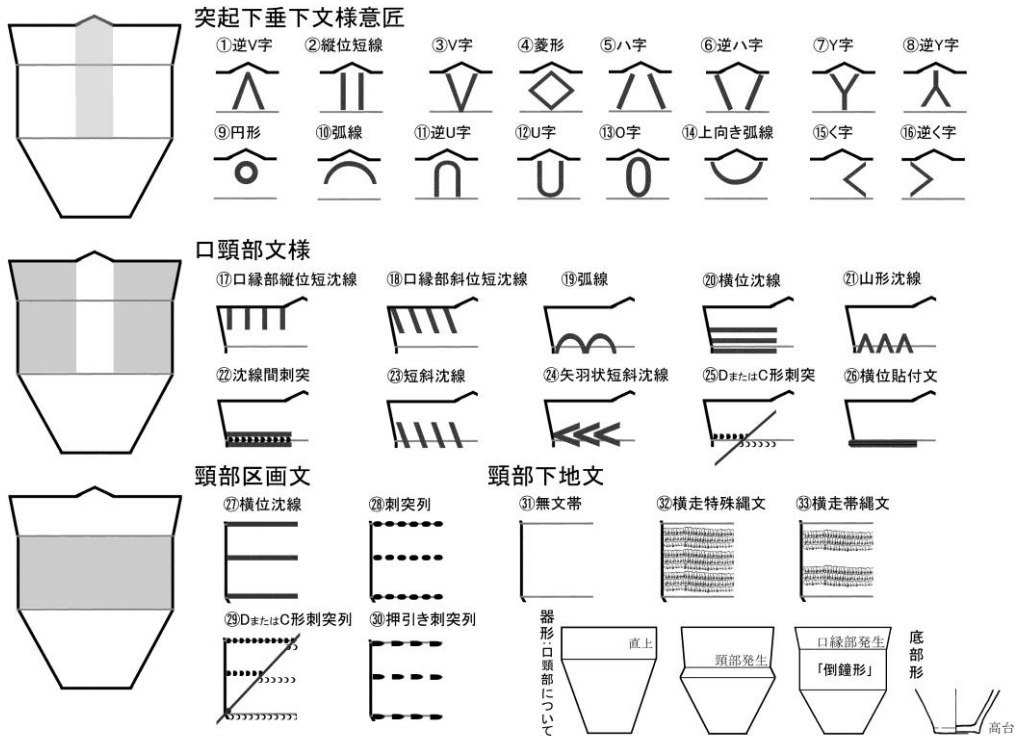


図 V-22 主な属性要素

【K39 遺跡】表 V-7 は属性 16 項目について検討した結果 11 項目に消長があり、うち 1 例は不連続に出現する。「垂下沈線文」「沈線間刺突」「短斜沈線」「D または C 形刺突(区画)」「沈線文(区画)」を持つ：A<sub>1</sub> 群、「頸部・無文帯」を持つ：C 群、A 群の属性をもたず C 群の属性を持つ：B<sub>1</sub> 群、B 群の属性を持つが A 群と共存状態にある：A<sub>2</sub> 群、C 群の属性を持つが B 群と共存状態にある：B<sub>2</sub> 群、があり A 群属性:5 項目、A-B 群属性:1 項目、A ~C 群属性:3 項目、B-C 群属性:2 項目ある。A 群のみが半数近くで、それ以外は B 群との組み合わせ、A 群と B・C 群との間には不連続がみられるので、A 群属性は B-C 群属性に比べて「不連続属性

表V-7 K39 遺跡の掲載土器の属性消長 鈴木 2018 引用

遺構名	土器所属層名	図番号	突起下の装飾				口頸部の装飾						頸部の扶む区画文				
			なし	沈線文	垂下沈線文 下線は 沈線間刺突	垂下 貼付文	垂下 +横環 貼付文	沈線間 刺突文	DまたはC 形刺突	山形 沈線	連続 山形 貼付文	短斜 沈線	沈線文	横走 帯縄文	無文帯	DまたはC 形刺突	押しき 刺突
A <sub>1</sub>	K39・12c層	図88-17			○縦位									○縦走			
A <sub>1</sub>	K39・12c層	図90-32			○弧線	突起と一部非対応	○					○		○		○	○
A <sub>1</sub>	K39・HP-7	覆土II層 図48-5			○V-逆V字									○横沈			○
A <sub>2</sub>	K39・HP-7	覆土II層 図48-2	○											○横沈	○斜走		
A <sub>2</sub>	K39・HP-7	覆土II層 図48-6	○											○横沈+弧沈	○		
B <sub>1</sub>	K39・HP-9	覆土IV層 図57-4	○											○縦走帯			
B <sub>1</sub>	K39・12c層	図88-18	○											○横沈	○縦走帯		
B <sub>1</sub>	K39・HP-1	覆土VIIa・VIb層 図35-7		○弧線										○横沈+波状	○縦走帯		
B <sub>1</sub>	K39・HP-1	覆土VIIa・VIa層 図35-3	○											○横沈	○縦走		
B <sub>1</sub>	K39・HP-1	覆土VIab層 図35-6	○											○横沈	○斜走		
B <sub>2</sub>	K39・HP-1	覆土VIIa・VIab層 図35-4	○											○横沈		○	
C	K39・HP-11	床 図62-22		○弧線										○横沈		○	
C	K39・HP-11	覆土III層 図62-23	○											○横沈		○	
C	K39・HP-11	覆土VI層 図62-24	○											○横沈		○	
C	K39・HP-7	床、覆土VIII・VIb・II 図49-7	○											○横沈		○	
C	K39・12c層	図89-21	○											○横沈		○	

A群	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑
B群	↑	↑															
C群	↑	↑															

≒新出的」といえる。なお、「山形沈線」はA～C群(=五-四文化層を跨ぐ)属性であり、「垂下擬縄貼付文」「押しき刺突(区画)」は未出属性で江別太遺跡では四文化層初出属性である。A群は四文化層初出属性に、A-B群・A～C群・C-B群は五-四文化層を跨ぐ属性に対応する。

江別太遺跡と K39 遺跡を検討した結果、貼付文の有無・貼付文要素・区画文の種類には新旧が備わっていた。以下では、ほかの遺跡における突起下に展開する垂下沈線文・垂下擬縄貼付文・横環擬縄貼付文の系統と区画文変遷について、検討する。

【ほかの遺跡】についての基準資料の再検討

表V-8の集計対象は編年によく用いられる道央部の遺跡のうち2004年まで刊行で、遺構がある千歳市ウサクマイC遺跡の3個体を最低例数とし、比較のため瀬棚町南川遺跡も集計した。掲載図・写真により、器高15cm以上の完形と器高15cm以上で底部が欠失していても属性が観察類推できた深鉢・甕を抽出した。表V-9は表V-8のうち前後・共存関係がわかる資料について表V-6・7の「突起下・口頸部の装飾」「頸部の区画文」における該当項目を「口頸部文様要素」として記入した。なお、比較のため編年の論点となった条件に満たない道央以外の遺跡も加えた。

垂下沈線なし・垂下貼付文なし=A～C群属性:「垂下擬縄貼付文」「横環擬縄貼付文」とは排反的關係にある。区画文の短斜沈線・沈線=A<sub>1</sub>群属性が備わる。無文帯・縦走帯縄文=B<sub>1</sub>-C群

表V-8 対象遺跡の時期別例数 次頁へ続く 鈴木 2018 引用

	突起下文様の有無						突起下文様の有無					
	沈線文・貼付文なし		沈線文あり		貼付文あり		沈線文・貼付文なし		沈線文あり		貼付文あり	
	江別太 1	アヨロ 2b	江別太 1	アヨロ 2b	江別太 2	後北 A	江別太 1	アヨロ 2b	江別太 1	アヨロ 2b	江別太 2	後北 A
瀬棚町・南川 南川遺跡調査(1976)、瀬棚町教育委員会(1983)												
住居・床		8		2				2	1			3
住居・覆土	1	9		4				1				
土坑・坑底		10		1				2				
土坑・坑口		1						1				
土坑・覆土		6		6				1				
包含層	1	8		2				1				3
余市町・大川 余市町教育委員会:刊行年は次頁右下												
住居・床		2						1				2
住居・覆土	2	1						3				3
土坑・坑底	3	26	2	1	1	2		1		1	1	1
土坑・覆土下部	2							1		1		1
土坑・覆土		2						1				1
土坑・覆土追葬		2						1		3		
土器集中		1						2		1		1
包含層	1	9	1		1			2	1	5	1	1
江別市・江別太 江別市教育委員会(1979)												
住居・床		2						1				3
住居・床付近		1		1				1				
住居・覆土最下部								2				
住居・覆土下部								1				
住居・覆土上部		1						1				
住居・覆土			1					3			2	16
住居・層不詳		1						1				3
土坑・坑底		1		4				4			1	2
土坑・覆土下部								3			2	3
土坑・覆土上部								1		1	1	1
土坑・覆土								1		1		1
土坑・周辺								1				1
包含層		2	1	5				1		1		1
江別市・江別太 江別市教育委員会(1979)												
包含層	1	3	5		1			1		8		5

	突起下文様の有無					
	沈線文・貼付文なし		沈線文あり		貼付文あり	
	江別太1	アヨロ2b	江別太1	アヨロ2b	江別太2	後北A
石狩市・紅葉山33号 木村英明(1975)、石狩町教育委員会(1984)						
土坑・坑底	2	7		1		
小柱穴群						1
包含層	2	4			1	
札幌市・N30 札幌市教育委員会(2004)						
住居・覆土	1	6		2		
土坑・覆土		1				
包含層		1				
札幌市・K39 北海道大学(2004)						
住居・床		9	1	2		
包含層		2	2			
札幌市・N156 札幌市教育委員会(1999)						
住居・覆土	1	3				
包含層	1	1	1			
札幌市・N295 札幌市教育委員会(1987)						
住居・床面	1					
住居・覆土		2				
土坑・坑底		2	1		1	
包含層	3	11	2	1	1	2
江別市・元江別1 江別市教育委員会(1981)						
土坑・坑底		8				
土坑・覆土上部		4				
土坑・流込み		1				
包含層		1		1		

	突起下文様の有無					
	沈線文・貼付文なし		沈線文あり		貼付文あり	
	江別太1	アヨロ2b	江別太1	アヨロ2b	江別太2	後北A
深川市・北広里3遺跡 深川市教育委員会(1994,2003)						
住居・床			2			2
土器の集中	1					2
炭化物集中						1
焼土・落込						1
包含層	1					7
千歳市・ウサクマイC 千歳市教育委員会(1979)						
住居・旧床		1				
住居・新床						1
住居・覆土		1				
苫小牧市・静川22 苫小牧市教育委員会(2002)						
住居覆土中下部	2	1	1			1
住居・覆土	1	2				
土坑・坑底	1	1				
包含層	1	1				2
白老町・アヨロ 白老町教育委員会(1980)						
土坑・坑底		3				
土坑・上部覆土		11		1		
土坑・覆土		3				

余市町教育委員会: I ~ III(2000)、IV(2001)  
 余市町教育委員会: 服部・道道・迂回路地点(2001)、道道・迂回路地点(2002)  
 余市町教育委員会: 道道・迂回路地点(2004)

属性「垂下沈線文なし」アヨロ 2b 式と共存し、アヨロ 3a 式とは前後関係にある。

**垂下沈線文あり=A<sub>1</sub>群属性:**「垂下擬縄貼付文」「横環擬縄貼付文」とは排反的關係にある。短斜沈線と区画文沈線: D または C 形刺突=A<sub>1</sub>群属性が備わる。縦走・横走帯縄文=A<sub>2</sub>-B<sub>1</sub>群属性「垂下沈線文なし」アヨロ 2b 式と共存する。無文帯+「垂下沈線文なし」アヨロ 2b 式との共存例が N30 遺跡に 1 例あるが、道央において「垂下沈線文なし」アヨロ 2b 式では無文帯が多く、「垂下沈線文あり」アヨロ 2b 式では減少する。無文帯は古い B<sub>2</sub>-C 群属性とみなされる。以上より「垂下沈線あり」は「垂下沈線なし・垂下貼付文なし」に後出シアヨロ 2b 式に並行する。

表 V-9 江別太式～後北 A 式(並存・前後関係)における突起下装飾・区画文の組合わせ 鈴木 2018 引用

遺跡名	遺構名など	型式	口頸部文様要素	
			垂下沈線文なし(江別太式)	垂下沈線文なし(恵山式)
大川	P-95、坑底	同型式	江別太1	横沈線:1、横沈線+連続山形沈線+刺突:1
			江別太1	横沈線:1、横沈線+連続弧線+刺突:1
		異型式	江別太1・アヨロ2b	沈線区画横帯縄文+刺突:1
			江別太1・アヨロ2b	横沈線:1
紅葉山33号	pit3		横沈線+縦帯縄文:1	
大川	P-59、覆土下部		無文帯+連続山形沈線:1	
旧豊平河畔	32号住居、床		横沈線+縦帯縄文+連続変形沈線:1	
大中山13	F7			
<b>垂下沈線文あり(江別太式)</b>				
<b>垂下沈線文なし(恵山式)</b>				
北広里3	1号住床+炭化物集中2+grid	同型式	江別太1	横沈線+矢羽沈線+山形沈線:1、刺突沈線区画短斜沈線:1
			江別太1・アヨロ2b	沈線区画横帯縄文:1
		異型式	江別太1・アヨロ2b	DorC形刺突区画短斜沈線:1
K39	12c層HP-7、覆土II		横沈線+縦帯縄文+連続山形沈線:1、横帯縄文+横沈線+連続弧線:1	
旧豊平河畔	1号住居、床付近		横沈線+崩れ連続山形沈線+横帯縄文+多重波状沈線:1	
<b>垂下沈線文あり(恵山式)</b>				
<b>垂下沈線文なし(恵山式)</b>				
N30	第11号堅穴住居、不詳	同型式	アヨロ2b	横沈線+無文帯+弧沈線:1、横沈線+弧沈線+帯縄文風:1
<b>垂下貼擬縄付文あり(江別太式)</b>				
<b>垂下沈線文なし(恵山式)</b>				
元江別1	墓19、墓坑上部	異型式	江別太2・アヨロ2b	横沈線+無文帯+山形沈線+刺突:1、横沈線+山形沈線:1、他に袖珍が4個
<b>垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文あり(後北式)</b>				
<b>垂下沈線文なし/口縁内屈しない(恵山式)</b>				
北広里3	焼土47+落込4 1号住居、床	同型式	後北A	横押し引き文:1、刺突区画横帯縄文:1
			後北A・宇津内IIb	横帯縄文+連続山形沈線:1
		異型式	アヨロ3a・宇津内IIb	沈線区画波状帯縄文+磨消(破片):1
			後北A・宇津内IIb	DorC形刺突区画横帯縄文+連続山形沈線:1
本幸	盛土配石遺構		沈線区画波状帯縄文+沈線区画横帯縄文:1	
アヨロ	墓201、墓上		刺突横環貼付文+沈線区画横帯縄文+DorC形刺突+連続山形沈線:1	
鷲ノ木	10号土器集中			
<b>垂下沈線文なし(江別太式)</b>				
<b>垂下沈線文なし/口縁内屈しない(恵山式)</b>				
大川	GP-916、坑底・坑底うき(追葬)	異型式	江別太1→アヨロ3a	DorC形刺突区画横帯縄文:1
<b>垂下沈線文あり(江別太式)</b>				
<b>垂下沈線文なし(恵山式)</b>				
旧豊平河畔	墓132、覆土下部・覆土下部土 墓174、坑底・覆土上部	同系型式	江別太1→江別太2	横沈線文+DorC形刺突:1、沈線間DorC形刺突:1
			江別太1→江別太2	横帯+DorC形刺突:1、DorC形刺突区画短斜沈線:1
<b>垂下貼擬縄付文あり(江別太式)</b>				
<b>垂下沈線文なし(恵山式)</b>				
ウサクマイC	BH-2、旧床・新床	異型式	アヨロ2b→江別太2	横帯縄文:1
<b>垂下擬縄貼付文あり(江別太式)</b>				
<b>垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文あり(後北式)</b>				
旧豊平河畔	20号住居、床・覆土	同系型式	江別太2→後北A	DorC形刺突区画短斜沈線+連続山形沈線:1

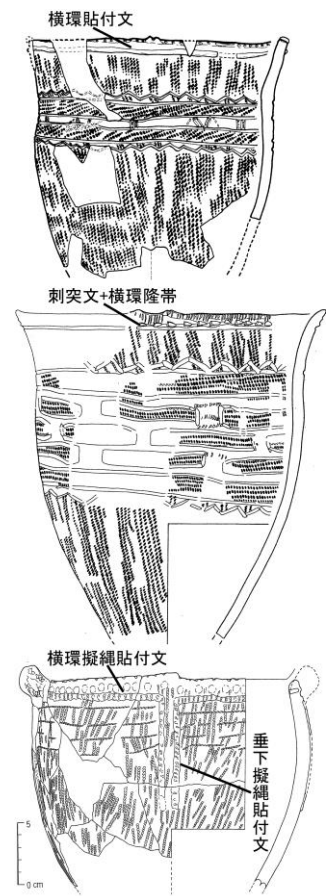
**垂下擬縄貼付文(表V-9 参照):**これはK39遺跡において未出属性でA群に後出する可能性が高い。豊平河畔遺跡20号住居では「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」よりも前出する。また、元江別1遺跡墓19墓坑上部例(RL縄線文が付く垂下0字状貼付文と異系統属性である釘状貼付文が付く)は墓上窪みにあり、坑底にはアヨロ2b式が副葬されている。図示8点中には無文帯がなく縦走帯縄文があるアヨロ2b式が3点含まれている。供伴関係を示す出土状況はないがアヨロ2b式期の蓋然性があると判断される。以上より、「垂下擬縄貼付文」は「垂下沈線あり」に後出し、元江別1遺跡墓19墓坑上部出土例より縦走帯縄文が備わるアヨロ2b式に並行すると考えられる。

**横環擬縄貼付文(表V-9 参照):**これもK39遺跡において未出属性でA群に後出する可能性が高い。横環擬縄貼付文は垂下擬縄貼付文との組み合わせがほとんどである。横環擬縄貼付文のみは、深川市北広里3遺跡炭化物集中21、その包含層、上富良野町本幸遺跡盛土配石(山崎博信1967)、の3例。突起下垂下沈線文(突起下から頸部、擬縄貼付文の下位に施文)+横環擬縄貼付文は北広里3遺跡住居2床の1例。「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」は、旧豊平河畔遺跡20号住居では「垂下擬縄貼付文あり」より後出する。本幸遺跡盛土配石では「横環擬縄貼付文」と宇津内IIb式が、北里広3遺跡1号住居床面では「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」と宇津内IIb式が、北広里3遺跡焼土6・7ではアヨロ3a式と宇津内IIb式が、鷲ノ木遺跡10号土器集中(森町教委2008b)では「V字状擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」と「口縁部が内屈しない・刺突が付く横環隆起線文」アヨロ3a式(図V-23中段)が、共存する。北広里3遺跡包含層からは「口縁部が内屈しない、横環貼付文」アヨロ3a式(図V-23上段)が出土する。

以上より「口縁部が内屈しない」アヨロ3a式//「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」//宇津内IIb式、が導かれる。垂下沈線文・擬縄貼付文は宇津内IIa式の意匠が及んだ結果(熊木俊朗2018)とされ、宇津内IIa式には横環擬縄貼付文例(図V-23下段)が少数(旧常呂町栄浦第一遺跡・岐阜第二遺跡・常呂河口遺跡に11例)あるので、宇津内IIaII式新の影響で後北A式が成立する、が導かれ、擬縄貼付文が垂下する宇津内IIaII式古//江別太1式、擬縄貼付文が横方向・斜方向に連結する一部の宇津内IIaII式新//江別太2式も導かれる。

### 3 「江別太式」についての細分名の統合

高橋正勝による突起下文様は、江別太1式:突起下貼付文の出現(掲載図には貼付文がない)、江別太2式:より大きくなる突起下貼付文(掲載図には横環擬縄貼付文も示す)、江別太3式:口辺部を1~2周する貼付文(掲載図に文章との矛盾なし)、である(高橋2003)。高橋の定義は掲載図と文章に一致しない部分があるが文章を有効とすると、高橋江別太3式と鈴木後北A式が異名同義で、それ以外はやや同名異義である。鈴木江別太1式は高橋江別太1式、鈴木江別太2式は横環擬縄貼付文を除いた高橋江別太2式の一部に対応する。



図V-23 横環施文の例

鈴木2018引用

「垂下沈線なし」(「江別太 1 式」の「古」)→「垂下沈線文あり」(「江別太 1 式」の「新」)→「垂下擬縄貼付文」(「江別太 2 式」)→「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」(「後北 A 式」)の順序を示すことができた。ただし、器高 15cm 以下の「袖珍」には擬縄貼付文の省略という例外がある。なお、同名異義的対応関係は名称「江別太 1 式」「江別太 2 式」を使用する。

### 3 後北 A 式・B 式について

前項においてアヨロ 3a 式 // 宇津内 II b 式に並行する「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」が後北 A 式の主要属性であることが示された。従来、後北 A・B 式は河野によって以下のように定義され(河野 1933・1958・1959)、図示された(河野 1959)。「(前略)諸型式について簡単な説明を記し、シノニム(同名遺物)を整理し、写真のあるものは代表的なものを選んで図示した。(後略)」と述べており、詳細な定義は 1933・1958 年で構成されている。

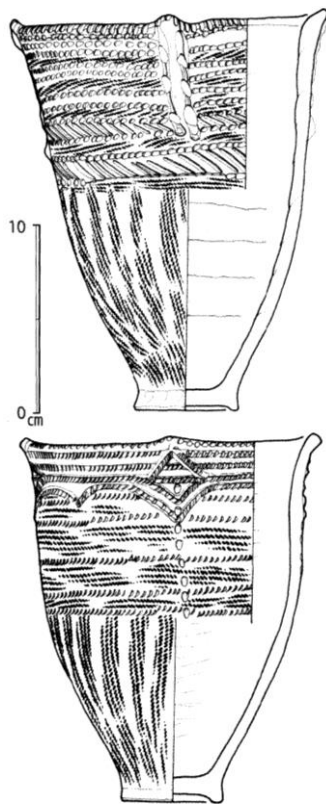


図 V-24 図示された後北

A・B 式 大坂 2013 引用

A 型(「後北式 A 式」1955 年に改称): 上半部には幾何学的沈文が多い、口縁部周辺に点線沈文(1958 年に付加)。貼付文は口縁部近くに在り、口縁の 2 ないし 4 か所に対称的に縄の輪・結び目を、口縁部に近く 1~2 本の縄状に周らし、上半部に網目を象って付ける。貼付文の太さ 1~3 分。

B 型(「後北式 B 式」1955 年に改称): 貼付文は上半または口縁部に近く、細かい刻み目の縄を象る。貼付文間には沈文・刻文があり、貼付文は A 型期に比べて多くなり、ダイヤモンド(1958 年では「連続ダイヤモンド形」という)と直線の組合わせが多く、上期には縄結びがあり、後期にはダイヤモンドの角がとれた連続弧線・小円。施文位置は初期が上方、下るに従い下方に及ぶ(1958 年に付加)。

1959 年の図示は『市立旭川郷土博物館所蔵目録』(市立旭川郷土博物館 1976)によれば、後北式 A 式は町村農場・X-K 出土個体 3 個体(市博受入番号 1016・1021・1060、以下 No.○と記す)のうち No.1016 を示した(図 V-24 上段)。3 個は全て突起下縦位擬縄貼付文+口縁横環擬縄貼付文である。後北式 B 式は町村農場・X-H 出土個体 2 個体(No.1031・1067)のうち No.1031 を示した(図 V-24 下段)。河野の定義に基づけば No.1016・10212 は河野の後北 A 式である。No.1060 は、その一部に横位に展開する連続ダイヤモンド形+直線、施文範囲の下方拡張がみられる(図 V-25)。これは河野の後北 B 式の定義にも当てはまる。

鈴木は河野の意匠・範囲に対し、擬縄貼付文による頸部の文様分割を主要属性として型式判別に用いた。鈴木の後北 A 式は文様分割:縦 4or8×横 0 である(鈴木 2003・2011a)。No. 1060 は横 1 分割にも見えるが、縦位擬縄貼付文に分断され、各々に高低がある横位擬縄貼付文が胴半ばにあるので、縦 4×横 0=鈴木の後北 A 式といえる。「ダイヤモンド形+直線、施文範囲の下方拡張」は河野後北 A 式に遡る属性となり、鈴木後北 A 式にある属性となる。以前に、後北 A 式(鈴木 2003a)を「古」「新」に細分した。菱形擬縄貼付文(=河野のダイヤモンド形)や開いた V 字形擬縄貼付文が、多条化した横環擬縄貼付に重複したり、下段に展開したりするものを「新」とした。



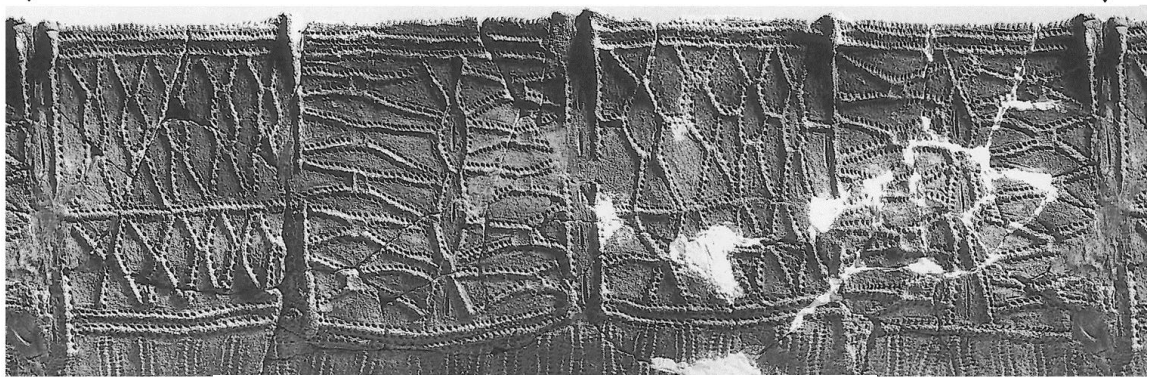


図 V-25 標式土器No.1060 の展開写真 大沼 1989a 引用加筆

鈴木後北 B 式の文様分割は、「古」:縦 4or8×横 1、「中」:縦 4or8×横 2~3、「新」:縦 8×横 4~5 (鈴木 2003・2011a)、No.1067:河野 A 式と No.1031:河野 B 式は同じ縦 4×横 0 は鈴木後北 A 式あたるとなる。No.1031 と同一遺構出土の No.1067 は縦 8×横 2 の壺である。

X-K・X-H とも内容不明の遺構であるため、3 個体が後北式 A 標式資料、2 個体が後北式 B 式標式資料として最適であるという確証に乏しい。こういった場合は、型式論的操作をひとまず優先させるが、そこで問題となるのが文様分割のうち横 0 分割が後北 A 式と後北 B 式を分別する主要基準となるのかである。

鷺ノ木遺跡(森町教委 2008a)において、擬縄貼付文による横 0 分割は後北 B 式(縦 4×横 0:1 個体、縦 8×横 0:3 個体)・C<sub>1</sub> 式(縦 4×横 0:1 個体、縦 8×横 0:1 個体)にもある(鈴木 2011a)。後北 B 式は、二本一組横位弧状擬縄貼付文による分割:1 個体、横位弧状擬縄貼付文による分割:3 個体、がみられ、無文部の体部下半と擬縄貼付文による装飾がある上半部とを分割している。直線の擬縄貼付文でなかったため横 0 分割としたが、横 1 分割に入れても擬縄貼付文による文様分割が型式判別の好適性に齟齬はない。

くわえて、類例は極めて少ないが恵山式との共存関係により後北 A・B 式の分別を考えてみる。並行期における恵山式は口縁部の形態が特徴である。「口縁部が内屈しない」恵山式はアヨロ 3a 式・南川 IV 群や大坂の「恵山 II a 式」(大坂拓 2007・2015)である。口縁部が上方に伸長し「口縁部が内屈する」恵山式はそれらに後続するもので、旧尻岸内町豊浦漁協前遺跡出土の一群(石本省三 1984)や大坂の「恵山 II b 式」「恵山 II c 式」(大坂 2007・2015)にあたる。「恵山 II c 式」は頸部が不明瞭になり深鉢形になる最終型式である。

鷺ノ木遺跡 10 号土器集中ではアヨロ 3a 式(図 V-23 中段)と「V 字状擬縄貼付文」の鈴木後北 A 式とが(森町教委 2008b)、余市町大川遺跡 GP-373 では恵山式壺と「V 字状擬縄貼付文」の鈴木後北 A 式とが共存する(余市町教委 2000b)。この恵山式壺は弧状の曲帯縄文(鈴木 2019)を半単位ずつずらして多段に重畳させた文様であり、瀬棚町南川遺跡 68 号墓壙では恵山 II b 式と土坑 28 では恵山 II a 式と共存する(南川遺跡調査団 1976)。

大川遺跡 P-93 からは恵山 II c 式深鉢と縦 4×横 1 後北 B 式が出土している(余市教委 2002)。余市町フゴッペ洞窟 V 層からは恵山 II c 式深鉢と後北 B 式破片が出土している(フゴッペ洞窟調査団 1970)。鷺ノ木遺跡 11 号土器集中では恵山 II a 式甕・DorC 形刺突文が付く恵山 II a 式甕・DorC 形刺突文が付く恵山式壺と縦 4×横 2 後北 B 式・縦 8×横 4 後北 B 式が下層と上層から出土している。報告者は土器が 3 群に分かれると述べているが詳細は不明

である(森町教委 2008b)。森町森川 3 遺跡 F(焼土)-13 周辺からは恵山Ⅱa 式甕・恵山Ⅱb 式甕・DorC 形刺突文が付く恵山式壺出土している(北埋文 2006a)。

以上より、後北 A 式は恵山Ⅱa 式と並行し、横 1 以上分割後北 B 式は恵山Ⅱb～Ⅱc 式と並行すると考えられる。

後北 A 式以降に「多帯型」「単帯型」という 2 系統が発生するという考えがある(大坂 2013)。これによれば、ともに「垂下擬縄貼付文+横環擬縄貼付文」である後北 A 式「単帯型」と後北 B 式「単帯型」は、横 0 分割のみによっては分別不可能となる。2 つの系統が存在するか検証した結果によれば(鈴木 2018)、「単帯型」はその時々「多帯型」から他律的・断続的に派生した個別であり系統ではない。後北 A 式が「単帯型」であり、後北 B 式の大多数が「多帯型」であることは上記性質の証左である。後北 A 式と少数の後北 B 式「単帯型」の判別は、貼付文の意匠・範囲、共存的出土状態を加えて判断される。ただし、1 節 3 項で概述したように共存的出土状態の吟味は慎重に行わねばならない、層位学的状況はあくまでも検証的証拠であるからで、論理的証拠と循環的検証を必要とする。以後、後北 B 式以降の後北式について特に注記のない限り「多帯型」を指す。

現時点では河野の貼付文の意匠・範囲と鈴木の様分割を併用することにより編年の精度は高まったと考えてよい。ただし、様分割を優先属性とした場合は河野の後北 B 式上期の一部は鈴木後北 A 式「新」であり、河野標式に基づいた場合は鈴木後北 A 式「新」は河野後北 B 式・上期にあたってしまう。

#### 4 後北 C<sub>1</sub> 式について

後北 C<sub>1</sub> 式は河野による命名である(河野 1933・1959)。後北 C<sub>1</sub> 式は縦走・横走の帯縄文が地文となり、擬縄貼付文の後裔である微隆起線によって文様が描かれる土器で、道南・道東にも分布を広げて各在地の型式と並存する。後北 B 式と後北 C<sub>1</sub> 式の前後関係は、余市町フゴッペ洞窟において V 層から恵山Ⅱc 式深鉢と後北 B 式破片が出土し、IV 層から後北 C<sub>1</sub> 式破片が出土した、ことにより確定された(フゴッペ洞窟調査団 1970)。河野後北 C<sub>1</sub> 式と下述する鈴木後北 C<sub>1</sub> 式に相違はないので、後北 C<sub>1</sub> 式と記述する。

当該期は一括資料に不足がある時期でもあった。墳墓例として余市町<sup>あまうちやま</sup>天内山遺跡 C 区 2・6 号(余市教委 1971、乾芳宏 2002)、苫小牧市<sup>うらほろ</sup>タプコブ遺跡 GP-18(苫小牧市教委 1984)、住居例として江別市大麻 22 遺跡 H-2(江別市教委 1994)があり、道東の墳墓例として浦幌町<sup>とちかちぶと</sup>十勝太若月遺跡(浦幌町教委 1975)に 16 例ある。

近年では、早来町<sup>はやきた</sup>大町遺跡の焼土・包含層から(北埋文 2006c)、鷲ノ木遺跡の土坑・焼土・包含層から(森町教委 2008a)、厚真町<sup>あつま</sup>オニキシベ 2 遺跡の遺物集中区・包含層から(厚真町教委 2011)、から多数出土した。道東では常呂河口遺跡において多数の墳墓例と少数の堅穴住居例(常呂町教委 1996・2002・2004・2005・2007)がある。

微隆起線文は擬縄貼付文の後裔にあたるので、後北 C<sub>1</sub> 式にも様分割を主要属性として型式判別に用いることが可能である。鷲ノ木遺跡においては後北 C<sub>1</sub> 式:縦 8×横 2~4 がみられた(鈴木 2011)。また、森町三次郎川右岸遺跡(北埋文 2006b)では縦 4×横 2 がみられ、これは十勝若月遺跡資料を用いて「新」とした様分割(鈴木 2003a)と同様である。これにより縦 4×横 2 が道東にみられる地域差ではないことが確認された。様分割を用いた型式論的操作により後北 C<sub>1</sub> 式に「古」「新」が確定した。層位論的知見から細分案を再考しなければならないが、現時点では型式論的操作は有効と考える。

なお、<sup>せいざん</sup>聖山KⅡ群の属性を含む後北B～C<sub>1</sub>式並行期の恵山式系統と定義された「鷺ノ木式」の提示がある(大坂 2011・2015)。また、後北式の道南へ方拡散時期に関しては、後北A式から(鈴木 2011a)、後北B式から(大坂 2011)説がある。これらを並行関係により検証する。

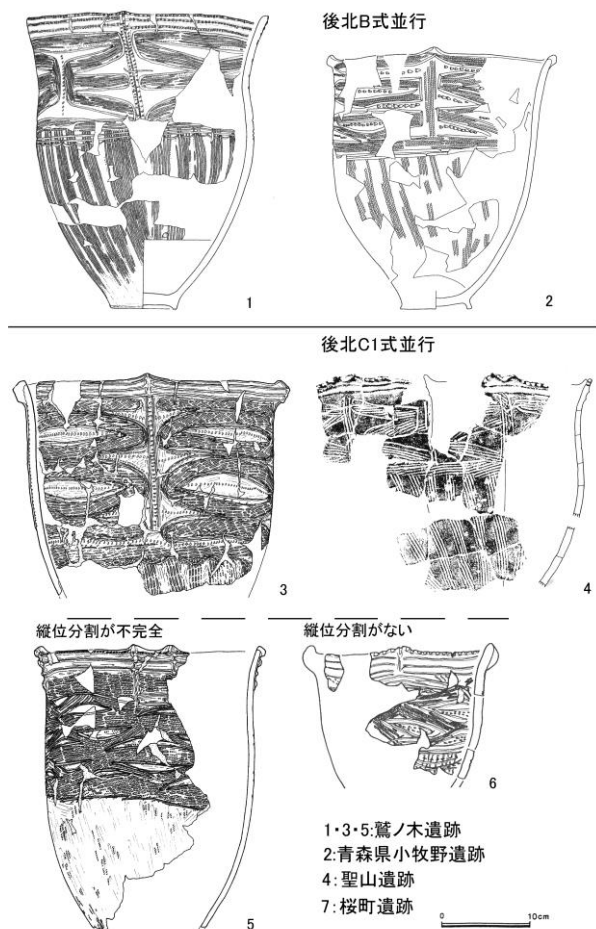
### 5 後北A・B・C<sub>1</sub>式と他型式の並行関係について

後北A式は恵山Ⅱa式と並行であり、宇津内ⅡbⅠ式と下田ノ沢ⅡⅠ式とも並行である(熊木 2007・2018)。後北B式は恵山Ⅱb～Ⅱc式と並行であり、宇津内ⅡbⅠ式・下田ノ沢ⅡⅠ式とも並行である(熊木 2018)。後北C<sub>1</sub>式は宇津内ⅡbⅡ式と並行である(熊木 2007・2018)で聖山KⅡ群とも並行する。ただし、聖山KⅡ群は後北C<sub>1</sub>式並行する、あるいは後北B～C<sub>1</sub>式並行する、という説がある。根拠となった土器が鷺ノ木遺跡UP-1(森町教委 2008a)から出土した。これについて型式論的・層位論的に再検証する。

UP-1土器(図V-26-1)は口縁部に横環擬縄貼付文、突起下に縦位分割の基線となる垂下擬縄貼付文がある。口縁部の横環擬縄貼付文は後北A・B式の特徴である。図V-26-2は口縁部に横走帯縄文があり恵山Ⅱb～Ⅱc式の特徴で、突起下に縦位分割の基線となる縦走帯縄文があり、器形はⅡc式の特徴を示す。図V-26-3は口縁部に横環微隆起線文、突起下に縦位分割の基線となる垂下擬縄貼付文がある。口縁部の横環擬縄貼付文は後北C<sub>1</sub>式の特徴である。図V-26-4は口縁部に横環微隆起線文、突起下に縦位分割の基線となる縦走帯縄文がある。口縁部の横環擬縄貼付文は後北C<sub>1</sub>式の特徴である。図V-26-5は口縁部に横環微隆起線文があり、突起下に縦位分割の基線とならない「日」字形の擬縄貼付文がある。図V-26-6には口縁部に横環微隆起線文があり、突起下に縦位分割の擬縄貼付文がない。図V-26の土器は口縁部・突起下に後北式の影響がみられ、口頸部文様は恵山式である。UP-1からは縦4×横1後北B式個体と縦4×横3後北B式破片が出土している。なお、この土坑は後北B～C<sub>1</sub>式が出土する焼土群(H群)中に位置する。墓坑であろうUP-1とそれとは別目的で設置された焼土が重複している。遺構の機能からみると両者には異なる意図による占地＝同期の必然がない配置と考えられることから、むしろ異なる時期である可能性が高い。前述の型式論的根拠・層位論的根拠からみてUP-1土器を後北C<sub>1</sub>式並行とする(大坂 2010)には弱い。以上よりUP-1土器(図V-26-1)は後北B式並行である。

なお、UP-1土器は「噴火湾西岸Ⅱ期」として(大坂 2011)で掲載されている。2015年提示図14の「鷺ノ木式土器」(大坂

2015)に掲載されている。2015年提示図14の「鷺ノ木式土器」(大坂



図V-26 聖山KⅡ群 鈴木 2011 引用

2015)には掲載されていないが、鷺ノ木式は噴火湾西岸Ⅱ・Ⅲ期にあたと定義されている。また、鷺ノ木式として例示された22例の土器には、UP-1土器類似が3例、後北B(鈴木A式を含む)～C<sub>1</sub>式が13例含まれている。恵山式系と定義された鷺ノ木式に後北式が含まれる根拠の説明はない。聖山遺跡の報告ではこれらの後北式は道南部の小変とみなされている。くわえて、個体単独・破片で出土した鷺ノ木式と後北式の同定分別は困難である。

聖山KⅡ群は後北C<sub>1</sub>式並行期にあり後北C<sub>1</sub>式に恵山式が融合吸収されてゆく過程の土器と定義された(石本 1984)。石本とは群の内容・後北式との並行関係に相違があるが、石本の聖山KⅡ群のうち後北B～C<sub>1</sub>式並行期にあり縦位分割や口縁部に横環貼付文を受け入れた恵山式系統の土器を石本の意を汲み「聖山KⅡ群」と呼び、2節2項で述べた視点から「鷺ノ木式」は使用せず、将来良好な出土状況や類例が増加した時点で「聖山KⅡ式」とよぶ。

大坂によれば、鈴木後北A式を後北B式に繰り入れるので、後北式の道南へ方拡散は後北B式以降となる(大坂 2013・2015)。鷺ノ木遺跡には少数の鈴木後北A式がある(森町教委 2008a・b)。後北A式の類例は以下である。道南では七飯町聖山遺跡(七飯町教育委員会 1979)・桜町遺跡がある(七飯町教委 2000)、道東では常呂河口遺跡P-327墓坑(常呂町教委 2002)や根室市温根沼2遺跡ⅢH-4住居覆土(北埋文 2019)に見られる。後北A式のこのよう出現状況は地点としての出現であり分布といえるほどではないにしろ全道に散見される。なお、道東においては後継の後北B式においても散点的傾向であり道南とはまた異なった出現状況である。土器編年の章では扱わず後述することになるが、江別太1式以降に帯縄文が道南へ展開し(鈴木 2019)、後北A式と並行期にあたる恵山Ⅱa式の南川遺跡においては道央以東にある堅穴住居舌状張り出し・黒曜石製凹基石鏃の出現がみられることから道南における後北A式の出現を否定する蓋然性は低い。

表V-10 編年に関わる属性の消長

属性		江別太1		江別太2		後北A		後北B			後北C <sub>1</sub>			
		古	新	古	新	古	新	古	中	新	古	中	新	
接合面の傾き	外傾													
	口縁部のみ外傾で、頸部以下は内傾				?									
	内傾													
底部形	高台													
文様分割	縦方向分割数					4または8		4または8		8		8	4または8	4
	横方向分割数					0		1	2または3	4または5		2~5		2
突起下装飾	垂下文なし													
	垂下沈線文													
	垂下擬縄貼付文													
	垂下微隆起線文													
口縁部装飾	横環擬縄貼付文なし													
	横環擬縄貼付文													
	横環微隆起線文													
口頸部主文様	平行沈線文													
	変形工字文Ⅱ													
	矢羽状短斜沈線文													
	山形沈線文													
	短斜沈線													
	横帯縄文													
	擬縄貼付文													
微隆起線文														
頸部区画文	横位沈線													
頸部下地文	D形orC形刺突													
	普通縄文													
胴部文様	特殊縄文													
	特殊縄文+帯縄文													
	帯縄文+帯縄文													
		R	L	斜位										

\*後北B「中」:縦4×横3、縦8×横2~3の組み合わせ \*後北C<sub>1</sub>「古」:縦8×横2~5の組み合わせ \*後北C<sub>1</sub>「中」:縦8×横3~4、縦4×横2~3の組み合わせ

## 6 各型式の編年主要属性

### 【江別太1式の属性】

〈成形〉深鉢は外傾接合が主で、甕形には内傾接合がある。

〈器形〉深鉢は倒鐘形が主で、甕形に近いものもある。底部は高台。

〈描順規則〉口頸部 RL 横位帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文が多く→直描き文。

〈頸胴部縄文〉横走帯縄文+縦走帯縄文が主で、横走帯縄文+縦走特殊縄文が次ぐ。

〈口頸部文様〉主文様は帯縄文・短斜沈線・山形沈線・弧線化した変形工字文があり、沈線・沈線間刺突文により区画される。

### 【江別太2式の属性】

〈成形〉深鉢・甕形はとも内傾接合である可能性がある。

〈器形〉深鉢は倒鐘形が主で、甕形に近いものもある。底部は高台。

〈描順規則〉口頸部 RL 横位帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文がほとんど→直描き文。

〈頸胴部縄文〉横走帯縄文+縦走帯縄文がほとんどとなる。

〈口頸部文様〉主文様は帯縄文・短斜沈線・山形沈線があり、DorC 形刺突による区画。道東の影響により突起下沈線文が現れる。

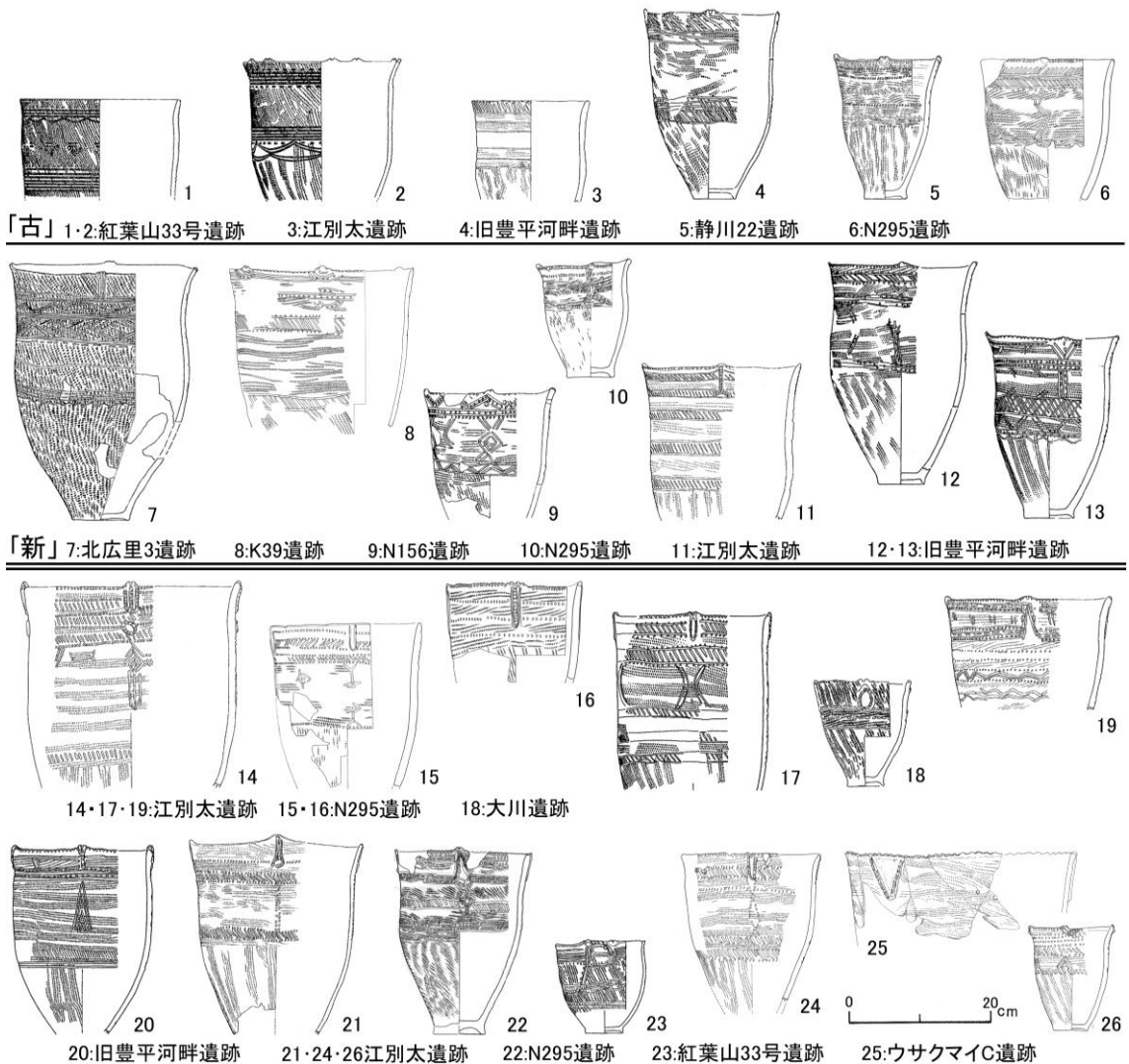


図 V-27 江別太1・2式 北埋 2003a 引用加筆

【後北 A 式の属性】

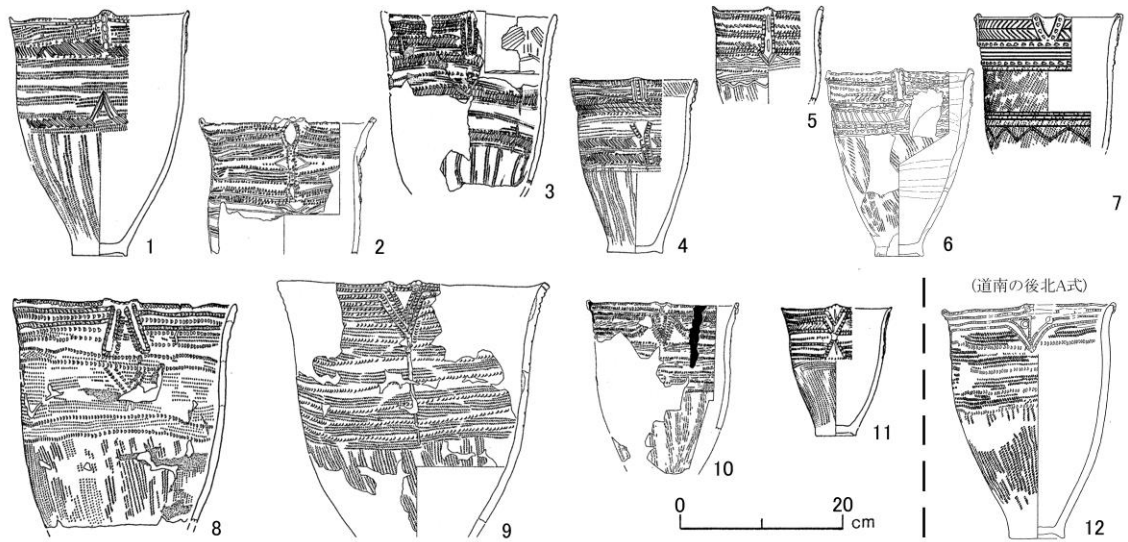
〈成形〉内傾接合である。

〈器形〉深鉢は倒鐘形が主である。底部は高台。

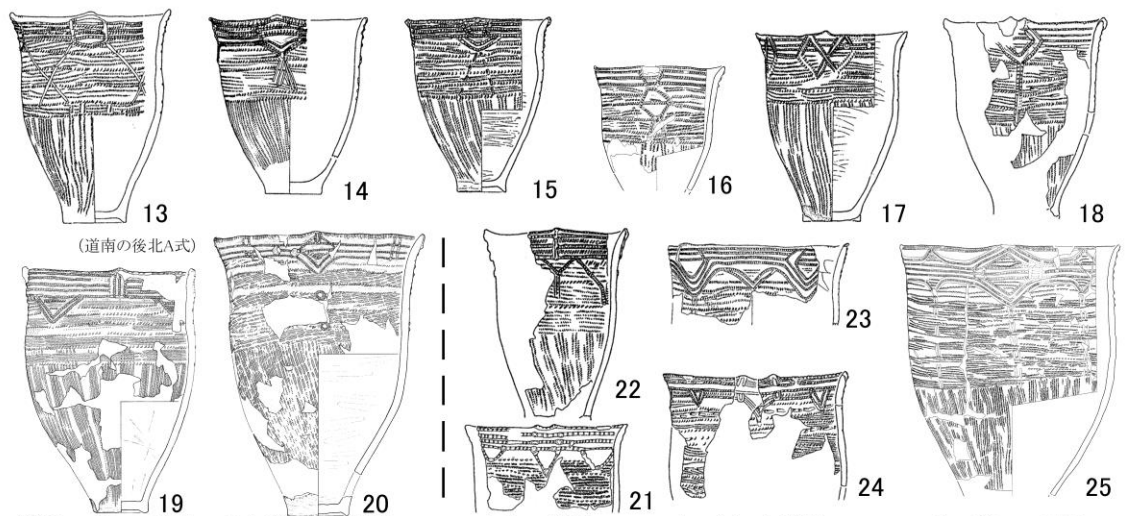
〈描順規則〉口頸部 RL 横位帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文がほとんど→直描き文。突起下縦位文様が文様割り付けの縦基線となり始める。文様分割は、「古」が縦 4 または 8×横 0 で、「新」には縦 8×横 0 が現れる。「新」には横還擬縄貼付文上に突起下縦位擬縄貼付文が重ね張りされる。

〈頸胴部縄文〉横走帯縄文+縦走帯縄文がほとんどとなる。

〈口頸部文様〉突起下には「縦位短沈線」・「V 字」・「逆ハ字」・「く字」・「逆く字」状の擬縄貼付文線文が多く、「新」縦 8 には「◇」形・「□」形やそれらの隅が丸い例もある。沈線文が少しある。DorC 形列点により区画される。



「古」1:町村農場2遺跡 2・10:大川遺跡 3・8:オサツ2遺跡 4・5・11:旧豊平河畔遺跡 6:シヨロマ3遺跡  
7:紅葉山33号遺跡 9:ユカンボシC15遺跡 12:鷺ノ木遺跡



「新」13:萩ヶ岡遺跡 14:旧豊平河畔遺跡 15・17:オサツ2遺跡 16・25:オニキシベ2遺跡 18・24:ユカンボシC15遺跡  
19・20:鷺ノ木遺跡 22:静川22遺跡 21:柏原5遺跡

図V-28 後北 A 式 北埋 2003a 引用加筆

【後北B式の属性】

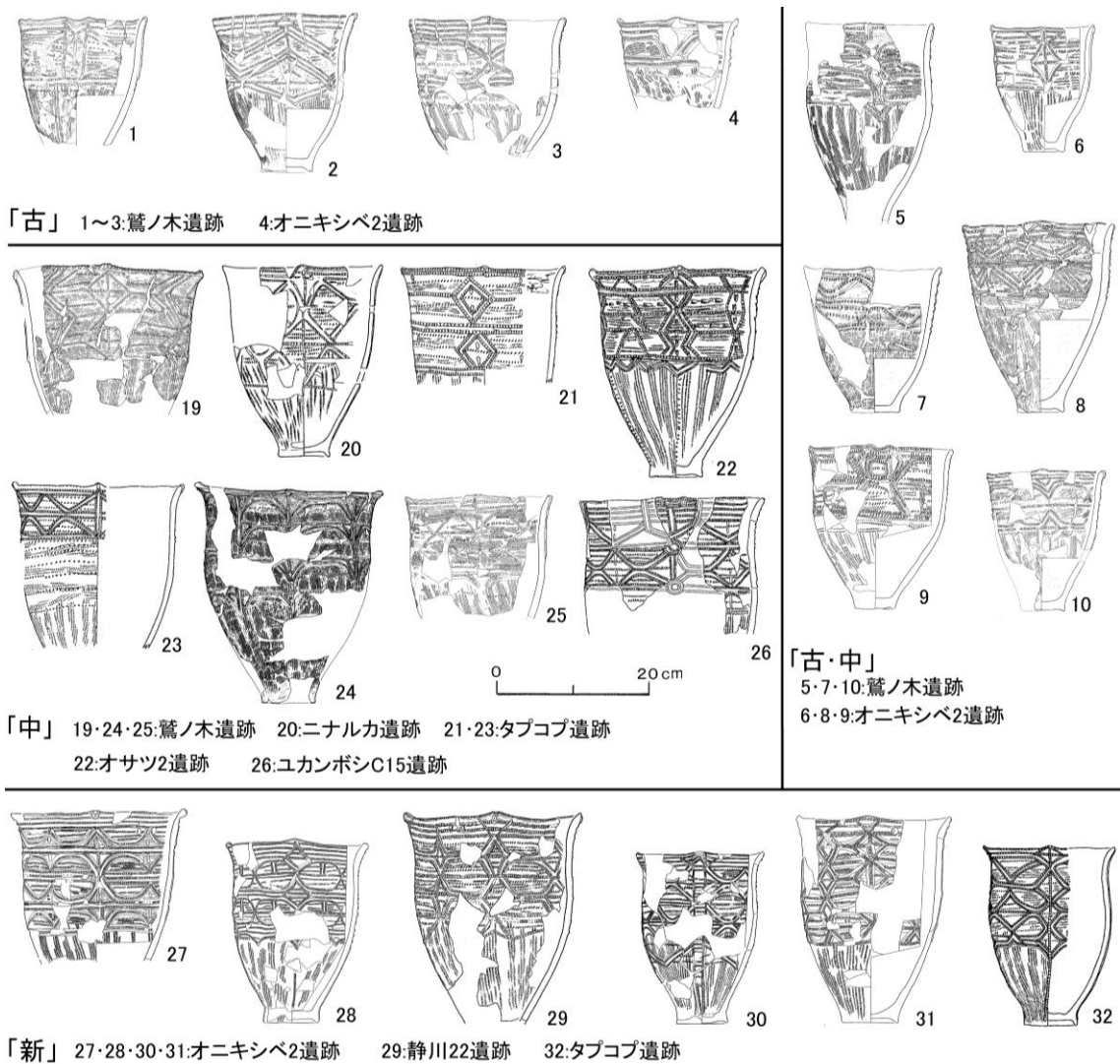
〈成形〉内傾接合である。ただし口縁最終積み上げが外傾の場合がある。

〈器形〉深鉢は倒鐘形が主である。底部は高台。

〈描順規則〉口頸部 RL 横位帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文がほとんど→直描き文。文様分割は、「古」は縦4または8×横1が多く、「中」は縦4×横3・縦8×横2~3が増加し、「新」は縦8×横4~5が多い。縦4×横2は「古~中」にみられる。縦位擬縄貼付文は、「古」では口頸部通して基線として添付されるが、「中」では寸断・一部添付が出現して充填文へと変容し、「新」では省略される傾向がみられる。縦位擬縄貼付文は横位のそれに比べて基線役割を早く喪失する。

〈頸胴部縄文〉横走帯縄文+縦走帯縄文である。

〈口頸部文様〉「古」の擬縄貼付文は直線が多く、隅丸の図形があり、「中」「新」では隅丸曲線が多くなる。DorC形列点による区画は「古」「中」にみられる。



「古」 1~3:鷲ノ木遺跡 4:オニキシベ2遺跡

「中」 19・24・25:鷲ノ木遺跡 20:ニナルカ遺跡 21・23:タブコブ遺跡  
22:オサツ2遺跡 26:ユカンボシC15遺跡

「古・中」  
5・7・10:鷲ノ木遺跡  
6・8・9:オニキシベ2遺跡

「新」 27・28・30・31:オニキシベ2遺跡 29:静川22遺跡 32:タブコブ遺跡

図V-29 後北B式 北埋 2003a 引用加筆

【後北 C<sub>1</sub> 式の属性】

〈成形〉内傾接合である。ただし口縁最終積み上げが外傾の場合がある。

〈器形〉深鉢は倒鐘形が主である。底部は高台。

〈描順規則〉口頸部 RL 横位帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文がほとんど→直描き文。文様分割は、「古」では縦 8×横 2~5 が多く、「中」では縦 8×横 3~4 が多いが縦 4×横 2~3 が現れ、「新」では縦 4×横 2 が多くなる。突起下縦位微隆起線は省略が著しい。横位微隆起線文は「古」では横還する基線だが、「中」「新」では他の文様のあとに充填されるものが多くなる。

〈頸胴部縄文〉横走帯縄文+縦走帯縄文である。

〈口頸部文様〉「古」には擬縄貼付文が混じる。微隆起線文は、「中」で弧線端部の融合が始まり、「新」ではそれが一つとなり双頂の曲線になる。また、「新」では弧線頂部が分断され「ハ」字状・逆「ハ」字状になる。微隆起線による円形文は、「古」では微隆起線文の基点としてあるが、「中」「新」では微隆起線文と重複して貼付されるものがある。

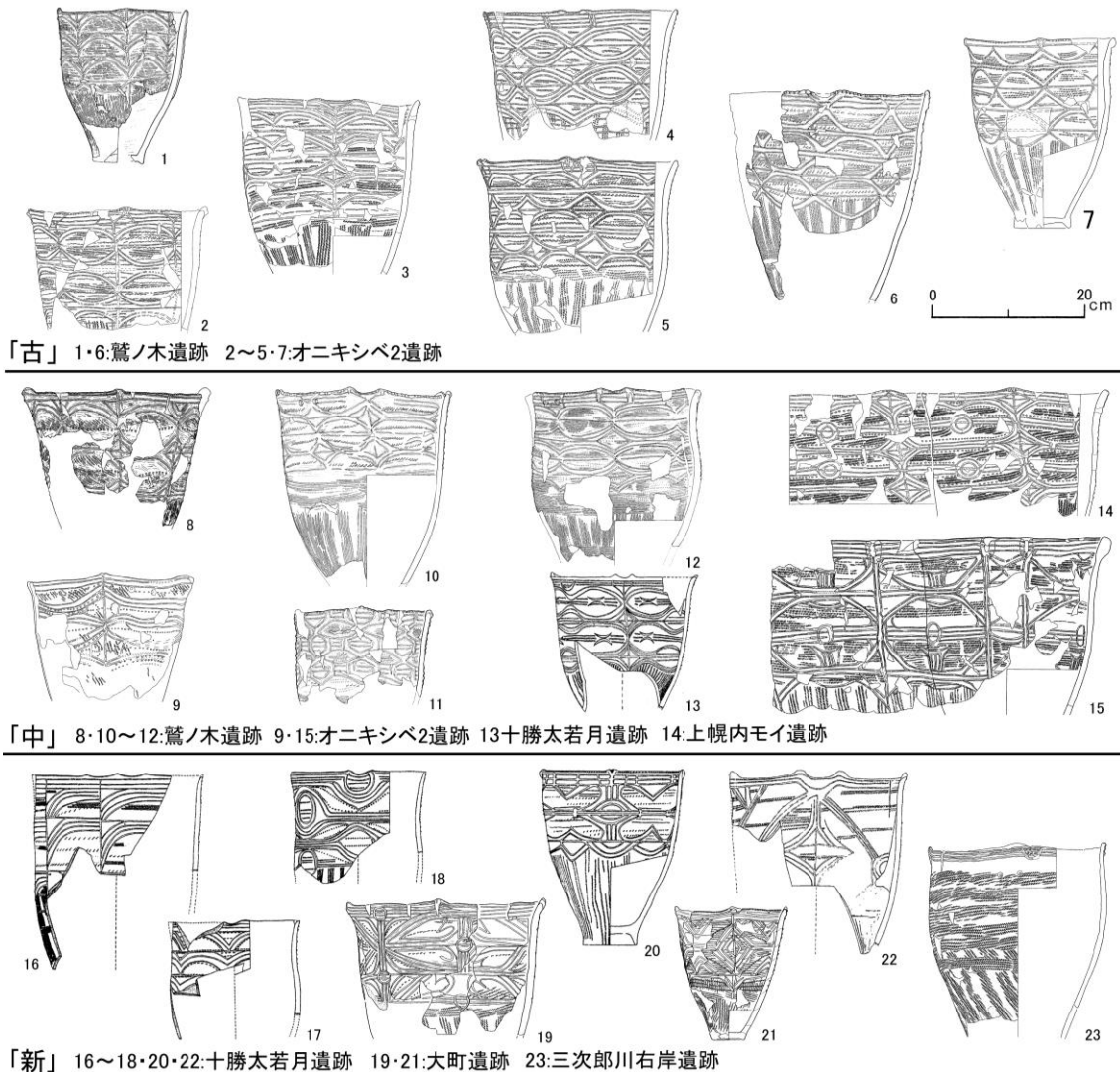


図 V-30 後北 C<sub>1</sub> 式 北埋 2003a 引用加筆



## 6 節 続縄文後葉の編年

### 1 後北 C<sub>2</sub>・D 式についての研究史抄と課題

後北 C<sub>2</sub>・D 式は河野広道による命名である(河野 1933・1959)。曲条・直条の帯縄文が主文様となる後北 D 式、それらに沿った微隆起線文が付く後北 C<sub>2</sub> である。道南～道央・道東に分かれた地域性を持ちながらも一円的分布をする。

後北 C<sub>1</sub> 式の前後関係、後北 D 式と後北 C<sub>2</sub> 式の並行関係は、余市町フゴッペ洞窟において IV 層から後北 C<sub>1</sub> 式破片が出土し、Ⅲ・Ⅱ層から後北 D 式と後北 C<sub>2</sub> 式後個体が出土したことにより確定された(フゴッペ洞窟調査団 1970)。その後道央においては、石狩町ワッカオイ D 遺跡(石狩町教委 1976・1977)、恵庭市柏木 B 遺跡(恵庭市教委 1981)、札幌市 K135 遺跡 4 丁目地点(札幌市教委 1987)、小樽市蘭島餅屋沢遺跡(小樽市教委 1991)において墳墓例と遺物の類例が増加した。道東では常呂河口遺跡において多数の墳墓例と竪穴住居例(常呂町教委 1996・2002・2004・2005・2007)がある。

近年における研究では、K135 遺跡 4 丁目地点において出土状況により新(VII2 群)・旧(VII1 群)に分けられたことが画期であった。型式論的操作に関しては、突起下にある文様、水平にめぐる文様、その間を充填する文様について着目し、施文の規則を把握する編年研究が続く(上野秀一 1987、林 1988、熊木 2001、鈴木 1998・2003)。筆者は文様の変化が文様帯の縮減と口縁部の平縁化に起因すると考え、深鉢については、口縁～胴部の形態・文様・文様割り付け(8種41項目)を細分属性に入れて(鈴木 1998)、円形刺突文の出現頻度の違いが道央と道東の差異であることを示した(鈴木 2003a)。小野裕子により、全道の 151 個体について鈴木・熊木編年の地域性に関して X<sup>2</sup> 検定とクラメール関連係数 V により文様帯・割り付けに関わる属性に関連性が推定され、鈴木の前段階以降に道央と道東の地域性が明瞭になってゆくなかで、鈴木の前段階文 IX・X が道東に少ないこと、区画帯 II-2(図 V-36 参照)が道東において急増すること、が特徴として挙げられている(小野 2011)。d 段階以降の地域差については同様の指摘がある(高瀬 2014)。

また、鈴木 d～f 段階=熊木Ⅲ期:道東 4a～5 式のうち、①:「口唇部下の貼付文」(図 V-36 参照)なしと②:「胴部下の縦走る帯縄文」なしを「北大 1 式古段階」にする案がある(榊田 2009・2016)。榊田の対象属性は、I)後北 C<sub>2</sub>・D 式に主体的にみられ北大式にふるわなくなるもの、II)後北 C<sub>2</sub>・D 式にふるわず北大式に主体的にみられるもの、に予め属性を振り分けて論を進めている。①なし・②なし、は振り分けられた属性 II)にあたる。熊木の編年対象は大型・中型の口径/器高=1.05 以下で、鈴木は口径/器高=1.25 以下を深鉢としており両者の対象はほぼ一致する。以下では熊木の分類基準を用い、「器高 16cm 以上」を中型、「器高 16cm 未満」小型、「口径/器高=1.05 以下」を深鉢、「口径/器高=1.05 超」を鉢、と呼ぶ。

榊田の対象とした後北 C<sub>2</sub>・D 式の個体(榊田 2016 の表 1)は破片 3 点を除いて 18 点(これは全て石狩町ワッカオイ遺跡 D 地区の資料)中 10 点が口径/器高=1.05 以上で、鈴木の前段階区分によっても 18 点中 8 が深鉢で、10 点が鉢である。榊田の対象個体の過半は鈴木・熊木編年の対象ではない。榊田が口径/器高=1.05 以上を含めて論を進めたことは、とくに榊田の②要素についての分析に問題を生じさせることになる。以下で検証する。

表 V-11 ②の有無と器形・規格

	中型		小型		②			②		
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	無文	あり	なし	無文
深鉢	5	3	5	2	1	4	1	0		
鉢	0	10	2	7	1	2	9	2		

\*深鉢小型:②あり1個、②なし1個、無文1個

神田 2016 の表 1 の後北 C<sub>2</sub>・D 式Ⅲ期の個体(神田 2016 の表 1) を集計すると表 V-11 となる。深鉢は中型に鉢は小型に偏り、深鉢は「②あり」に鉢は「②なし」に偏り、中型は「②あり」に小型は「②なし」に偏る。深鉢・鉢×中型・小型:㉞、深鉢・鉢×あり・なし:㉟、中型・小型×あり・なし:㊱、が有意の関係にあるか Fisher の正確確率検定を行った(青木繁信 2018)。㉞P 値=0.0065、㉟P 値=0.1262、㊱P 値=0.0073 であり、器形×大きさ:㉞<大きさ×②の有無:㉟<器形×②の有無:㉟の順に P 値が大きくなる。P 値=1×10<sup>-2</sup>未満の㉞㉟における行と列の要素の関連は極めて有意であるといえる。後北 C<sub>2</sub>・D 式Ⅲ期(あるいは、ワッカオイ遺跡 D 地区)の個体において、「胴部下半の縦走る帯縄文」の省略は大きさ(器高)によって生じている可能性が高い。

表 V-12 「②なし」の消長

		鈴木の段階区分											総数	
		0	0/a	a	a/b	b	b/c	c	c/d	d	d/e	e		f
道南	各段階の全数	3	1	3	1	2	1			1	2	1		15
	全数/総数%	20	7	20	7	13	7			7	13	7		
	②なしの数					1				1	2	1		
	②なし/総数%					6.7				6.7	13.3	6.7		
道央	各段階の全数	7	2	36	2	6	1	12	5	15	2	10	8	106
	全数/総数%	7	2	34	2	6	1	11	5	14	2	9	8	
	②なしの数			7		2		7		6		3	2	
	②なし/総数%			6.6		1.9		6.6		5.7		2.8	1.9	
道東	各段階の全数	2		2			1	5		1		11	7	29
	全数/総数%	7		7			3	17		3		38	24	
	②なしの数							1		1		11	7	
	②なし/総数%							3.4		3.4		37.9	24.1	

\*網掛けの段階は熊木Ⅲ期

減少する。道東では c 段階からあり e 段階に急増する。道南は b 段階からあり増減の変化はあまりないと思われる。「②なし」は榊田の結論とは反対に、道央ではすたれ、道東では所謂北大式を待たずに急増する。

熊木の編年考察では、①なしは道東 4b 式から②なしは道東 4a 式からであり、①+②なしは道東 4b 式に既に成立している。そして②についての集計はないが、熊木の分割表によれば、㉞:口唇刻みなし+口縁平端面あり+口唇部下貼付文なし、㉟:口唇刻みあり+口縁端尖る+口唇部下貼付文あり(刻みがあって 2 条以上)、頻度の高い組み合わせであり、㉞は道東 4b 式(トコロチャシ跡 4 群)の典型と言え、㉟は道東 3・4a 式(トコロチャシ跡 1・2 群)の典型と言え。榊田のいうⅡ)属性である「口唇刻みなし」「口縁平端面あり」も既に後北 C<sub>2</sub>・D 式にある属性である。小野は熊木と同じ属性項目:口唇刻みの有無、口唇部形態(小野:「口唇部形状」)、口唇部下貼付文(小野:「口唇下擬縄貼付文」)と榊田があげた②「胴部下半の縦走る帯縄文」無(小野:「胴部縄文」の無)のうち、「口唇下擬縄貼付文:0 本・1 本」(図 V-36 参照)と口唇刻みの有無(図 V-36 参照)、について関連性が確認されており、これら属性は既に組み合わせで出現しているといえる。

なお、ユカンボシ C15 遺跡 F-1 例(図 V-38「新」の 8)は「関連する状況」(IV 章 2 節 1 項で既述)を示したとしても型式の同一を保証しているわけではない。

そして、「②なし」

は小野の属性では「⑬:胴部縄文の 53 無:縄文を欠く」にあたる。小野の付表 6 をもとに鈴木の段階別で「②なし」を集計すると表 V-12 となる。「②なし」は道央では a 段階からあり d 段階以降

後北 C<sub>2</sub>・D 式に既に成立している属性を用いる榊田の手法は、むしろ「北大 1 式古段階」の一部が後北 C<sub>2</sub>・D 式に成立していることを導いてしまう。

後北 C<sub>2</sub>・D 式の最終期である鈴木 f 段階(道東 4b 式・5 式)の特徴として以下がある。鈴木・熊木があげるもの：口唇下擬縄貼付文「貼付文 2 条」の微隆起線化「口頸部の括れ」(道東:4b 式)、「円形刺突文」f 段階後半の出現(道東 5 式=田才 1983 の「モヨログループ」)。鈴木があげるもの：「口頸部の括れ」f 段階後半の出現。円形刺突文と口唇下擬縄貼付文・微隆起線の 2 条貼付文(以下両者を貼付文 2 条という)との関係は以下である。

後北 C<sub>2</sub>・D 式におけるその間隔は、口縁部横位帯縄文の幅によって決められ、円形刺突文は貼付文 2 条の下に付される場合があることから、その間隔は円形刺突文にと無関係に決められている。所謂北大式においても、円形刺突文が微隆起線の間隔を調整せず、むしろ円形刺突文は微隆起線間・線稜に沿って施される(鈴木 2003a)。小野は「口頸部の括れ」と「口縁部形状：山形・平縁」「口唇部傾き：内傾・外傾」「区画帯：区画帯 II-2 で縦位帯を欠く」「(刺突による)三角列点文：有・無」に関連性を見出している。このうち「口頸部の括れ」と「区画帯：区画帯 II-2 で縦位帯を欠く」はともに時系を示す組合せであり、組合わさる時期は f 段階後半である。

また、小野の付表 6 によれば区画帯下帯の消滅は道央のみで、c/d 段階：1 例、e 段階：1 例、f 段階：4 例であり、区画帯下帯の消滅は脱後北 C<sub>2</sub>・D 式傾向といえる。所謂北大式において底部付近まで施文される縦位・斜位帯縄文はこれに継起し、増加してゆく。

以上より、f 段階の微隆起線化、f 段階後半の「区画帯 II-2 で縦位帯を欠く」+「口頸部の括れ」+「円形刺突文」はおこるものの、微隆起線の多条化は後北 C<sub>2</sub>・D 式では起こらない。微隆起線の多条化をもって所謂北大式の成立と考えるのが妥当である。

筆者は道央後北 C<sub>2</sub>・D 式の編年を 2 度にわたり提示し(鈴木 1998・2003)、概要を示した(鈴木 2011b)。また、後北 C<sub>2</sub>・D 式の初期については道南の例を用いて再び言及した(鈴木 2011a)。小野の検証によってこれらは妥当であることが確認できた。内容にかわりはないが間違いや細部に変更があるので後述の VI 節 4 項で整合してゆく。

## 2 所謂北大式(円形・刺突文土器)についての研究史抄と課題

北大式は河野による命名で、「後北 E 式(北大式)」と記されている(河野 1958)。後北式と後北 C<sub>2</sub>・D 式と北大式の前後関係は、余市町フゴッペ洞窟において III・II 層から後北 C<sub>2</sub>・D 式個体が出土し、II・I 層から北大式個体が出土したことにより確定された(フゴッペ洞窟調査団 1970)。そののち北大式の名称が定着する。

北大 I 式：口縁部に多条の隆起線が施されるもの、北大 II 式：斜行縄文を下地として沈線文を施すものもの、北大 III 式：沈線文のみを施すもの、に細分され(森田 1976)、北大 III 式については十勝最寄式と改称され(大沼 1989a)たり、北大 II 式と狭義の北大 III 式(円形刺突文のみ)が並行することから北大 II-III 式、後続の広義の北大 III 式(有文でミガキ、有文で刷毛調整)は十勝<sup>もよろ</sup>最寄式に含む(上野 1994)が提唱された。2000 年刊行までにおける北大式に関わる定義などを表 V-13 に掲げた。この表は過去の分類名・型式名の内容に基づいて、現代に流布している型式名(後北 C<sub>2</sub> 式～北大 III 式)に当てはめたものである。

近年道央の調査においては以下がある。墳墓資料として江別市吉井の沢遺跡(北埋文 1982)、恵庭市カリンバ 2 遺跡(恵庭市教委 1987)、小樽市蘭島 D 遺跡(小樽市教委 1991)、恵庭市ユカンボシ E 7 遺跡(北埋文 1999)、江別市大麻 3 遺跡(江別市教委 2000)、恵庭市西

島松 5 遺跡(北埋文 2002)、長沼町幌内<sup>ほろない</sup>D 遺跡(北埋文 2014b)。土坑・包含層資料として千歳市ウサクマイ N(北埋文 2001)、K39 遺跡工学部地点(北海道大学 2011)。オホ-ツク式との並行関係も類推できる資料が出土した札幌市 C544 遺跡(札幌市教委 2012)、釧路市天寧 1 遺跡(北埋文 2011)。また、道南の例として八雲町オクツナイ 2 遺跡(八雲町教委 2004)がある。

表 V-13 北大式の分類名対照 鈴木ほか 2007 引用

人名	刊行年	後北C <sub>2</sub> 式	後北D式	北大I式	北大II式	北大III式	備考	
名取武光	1939	後北式土器					後北C型式:貼付文(貼付式浮文)・帯状の縄文、平底 後北D <sub>1</sub> 型式:貼付文・縄文は殆どない 後北D <sub>2</sub> 型式:口縁部が朝顔形・磨り消し、擦文土器群の中の擦文土器には突瘤がある	
河野広道	1955	後北式土器:後期北海道式薄手縄文土器の略称					後北C式:貼付文あり、末期は平底 後北D式:縄文・三角形点状文・刷毛目様の擦文・無文、平底 後北E式:擦文土器への移行形式、属性に言及なし	
		後北C式 初期・後期・末期	後北D式土器	後北E式土器				
河野広道	1958	後北C式 初期・後期・末期	後北D式	後北E式 (北大式)	擦文式系土器		後北E式:縄文・O1凹形突瘤文・線状隆起文・帯状貼付文(馬蹄形布圧痕) 擦文式系土器:突瘤文、縄文	
河野広道	1959	後北C式 C1・C2	後北D式	後北E式(北大式)		擦文式	後北E式:縄文、凹形突瘤文、線状隆起文、帯状貼付文 擦文式:突瘤文	
名取武光	1962	擦文式土器A型					擦文式土器A型:刷毛目+磨き+沈線+内瘤文(オホ-ツク式の影響)	
松下 亘	1963	一類			二類		一類:隆起線、縄文、つきこぶ文(O1) 二類:前者:普通縄文、磨消縄文、つきこぶ文(O1)、擦文式の器形 二類:後者:ほぼ無文、つきこぶ文(O1)、擦文式の器形	
沢 四郎	1963	II 群			III 群土器		VI 群:縄文、微隆起線 3~6 類=V 群:縄文、集合条線文、寛描沈線+磨消縄文、O1突瘤文 1・2 類=VII 群:無文、寛描沈線、突瘤文(O1)、無文+突瘤文なし	
		3 類	第VI群	第3~6類	第V群	第VII群		
竹田輝雄	1963	III 群土器					第1種:微隆起線、縄文の有無には言及せず 第2種:斜行縄文、平行沈線 第3~5種:無文、沈線文 *無文土器は第IV群土器に入れる(現在の北大と後北C <sub>2</sub> -Dにまたがる)	
千代 肇	1965	続縄文式中期			続縄文式後期		北大式:点列文がある 阿寒式:後北式に関係のあるグループ 発足式:擦文式の関係のあるグループ	
		江別III式	江別IV式	阿寒式		発足式		
松下 亘	1965	第11類					第2グループ:特殊縄文、浮線文 第1グループ:普通縄文、磨消縄文、沈線文、擦文式の器形 第3グループ:無文、沈線文、擦文式の器形	
森田知忠	1967	(館浜文化)			北大I式	北大II式	北大III式	北大I:貼付文、シュンクシタカラII群三類を標式 北大II:斜縄文、沈線文、シュンクシタカラIII群を標式 北大III:斜縄文・沈線文の頻度低い、発足・沙治・ウサクマイ遺跡が標式
斎藤 傑	1967				北大I	北大II	北大III	北大I:突瘤文+隆起線文+縄文+沈線文 北大II(シュンクシタカラ4類):突瘤文+縄文+沈線文、土師器第一型式(湯川町遺跡)と並行 北大III(発足4群、擦文式土器A型):突瘤文+沈線文、土師器第二型式(沙治・由良遺跡)と並行
大沼忠春	1968				(最古)	(古・中・新)		北大I相当:(最古)銅路村細岡、殉公碑公園VI群 北大II相当:(古)シュンクシタカラIII群6類、(中)殉公碑公園V群・シュンクシタカラIII群4・5類 (新)シュンクシタカラIII群3類
峰山 巖	1970	2類b・3類a・6類a	3類b・5類b・6類b	3類c・7類cd			北大I相当:2類c(文様型B3)、7類b(文様型H+B) 北大II相当:7類a(文様型H+L・I・M) 北大II~III相当:6類c(文様型E <sub>2</sub> )	
竹田輝雄	1971	II 群土器					1類:円形竹管文なし、底径大、底部薄い * II 群:土器擦文土器 2・3類:円形竹管文・底径小・底部厚い・刷毛目or 擦痕刷毛目	
佐藤達夫	1972				I 類	2・3・4ab 類	4c 類・5 類	1類:沢III群2類の一部 2・3・4ab類:沢V群・沢III群4類・沢III群56類 4c類・5類:沢III群3類の一部と発足III群5類・沢III群3類の一部と沢III群1類と発足III群3類
上野秀一	1974	A 型	B 型		C-D 型	E 型	B型:円形刺突文+平行細隆起線文 C-D型:円形刺突文+普通縄文と沈線文、円形刺突文+縄文や無文と集合条線文 E型:円形刺突文+無文や沈線文 F型:無文や沈線文 *A型:後北C <sub>2</sub> -D+円形刺突文	
田才雅彦	1983	I 類			II 類	III 類	IV 類	I 類(モヨログループ):後北C <sub>2</sub> -D II 類:北大A III a類(沈線区画された縄文):北大B、III b類(縄文が地文):北大C IV 類(天内山グループ):擦文文化期の土器
木村英明	1985	第I様式					第I様式 a 類:後北C <sub>2</sub> -D器形文様+突瘤 第I様式 b 類:平行微隆起線文・斜行縄文や帯縄文+突瘤 第II様式:沈線・縄文+突瘤、土師器の影響大(シュンクシタカラ、ノトロ)と影響小(ワッカオイ) 第III様式:沈線+突瘤、土師器と組み合わせ(カリンバ3)と組み合わせない(天内、アヨロ、発足)	
		a 類	b 類	第II様式		第III様式		
大沼忠春	1989b				北大I式	北大II式		第一段階:狭義の北大III、カリンバ2VI群1~4類 第二段階:天内山II群、萩ヶ岡305 第三段階:十勝最寄、中島松7-A地点1群2類 第四段階:上島松、中島松6-II区Iグループ 第五段階:蘭島遺跡B・41-6A焼土(1997秋田大会の十勝太式)
上野秀一	1994				北大I式	北大II-III式		北大II-III式:北大II+狭義の北大IIIは続縄文 十勝最寄第二~五段階は擦文早期
鈴木 信	1999	円形・刺突文土器群					円形・刺突文土器群期には後北C <sub>2</sub> -Dのモヨログループも含む	
佐藤 剛	2000				III-3-bc・IV-a			III-3-bc=大沼北大I初期=円形・刺突文I~III、IV-a=大沼北大I後葉=円形・刺突文IV・V

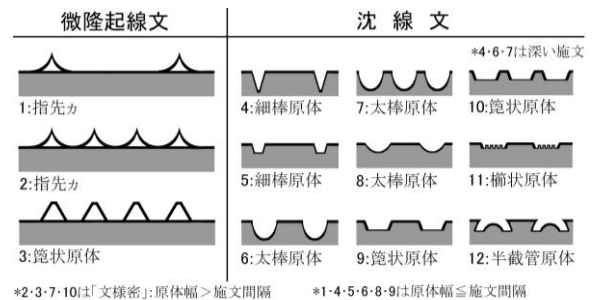
筆者は所謂北大式編年と概要を幾度か提示した(鈴木 1999・2003・2004a・2011b、鈴木ほか 2007)。北大Ⅱ式・北大Ⅲ式の供伴や有文土器・円形刺突文土器・無文土器の供伴より、所謂北大各式には一時期の並行が認められるので、「北大Ⅰ式」→「北大Ⅱ式」→「北大Ⅲ式」とならない。くわえて、微隆起線+普通縄文の北大Ⅰ式、北大Ⅲ式と同じ器形の北大Ⅱ式、微隆起線の北大Ⅰ式と同様の意匠・器形を持つ太い沈線の北大Ⅲ式(図Ⅴ-32)、があることは型式論的見地からは同時性の根拠となる。この矛盾を解消するため、後北C<sub>2</sub>・D式の「新」段階の一部(所謂モヨログループ)～北大式を「円形・刺突文土器群期、円刺群と略称」と呼び、所謂北大式を円刺群Ⅰ～Ⅺ期に細分し、擦文期(8世紀前葉)まで下る刺突文土器fを「円刺群期:Ⅻ」(鈴木 1999)とし、のちに9世紀前葉までを刺突文f'と拡張した(鈴木 2004a)。

「北大Ⅰ」「北大Ⅱ」は細分名として残して従来の定義を使用し、「広義の北大Ⅲ式=有文でミガキ・有文で刷毛調整」は「北大Ⅲ」。「狭義のⅢ式=円形刺突文のみ」を「円形刺突文土器」。「円形刺突文がなく有文のミガキ・刷毛調整土器:刺突文のみ、刺突文+沈線文、沈線文のみが含まれ、主文様モチーフは北大Ⅱ・Ⅲと同じものが多い」を「刺突文土器」。文様がないものを「無文土器」とした(鈴木 2003a)。深鉢・甕について口縁～底部の形態・文様・描順・器面の最終調整(29種55項目:1999年)を細分属性に入れている。

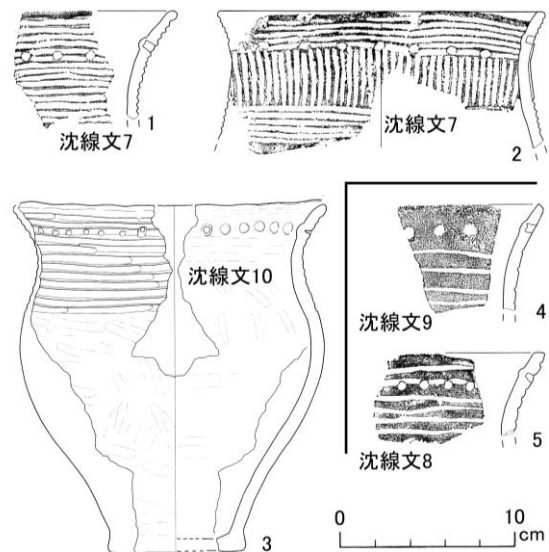
原体幅が施文間隔よりも大きい(=太い)沈線の北大Ⅲは微隆起線を模倣する技法(図Ⅴ-31の7・10)であり(鈴木 2014c)、微隆起線模倣の沈線文7・10は円刺群Ⅳ・Ⅴ期に微隆起線文と並存すること、沈線文5・6は円刺群Ⅳ～Ⅴ期にあることから、微隆起線文と沈線文5・6・7・10の並行期は円刺群Ⅳ～Ⅴ期である。よって、従来「北大Ⅲ・古」を円刺群Ⅴ期としていたが円刺群Ⅳ～Ⅴ期に変更した(鈴木 2016a)ので北大Ⅲの細分に変更を加える。なお、2007論考において「北大Ⅰ:多条の太い沈線で隆起線を表現する場合も含む」(鈴木 2007 ほか)は誤りで「…は含まない」である。

なお、図Ⅴ-32の4・5は図Ⅴ-31の1～3(沈線文7・10)と施文間隔が異なる微隆起線模倣ともいえる。

他に最近の研究では、塚本浩司(塚本 2007)や榎田朋広(榎田 2009・2016)がある。塚本は型式論的操作を優先せざる負えない状況を踏まえ、長胴甕の器形と文様により当該期の編年を行った。E期(6世紀後葉～7世紀前葉)に同一器形において普通縄文+沈線文(文様Ⅲ)と沈線文(文様Ⅳ)が共存することを述べている。この共存は筆者のⅥ～Ⅷ期(北大Ⅱと北大Ⅲの並行)に相当する。



図Ⅴ-31 所謂北大式の施文方法 鈴木 2014c 引用



図Ⅴ-32 所謂北大Ⅲの沈線文 鈴木 2014c 引用

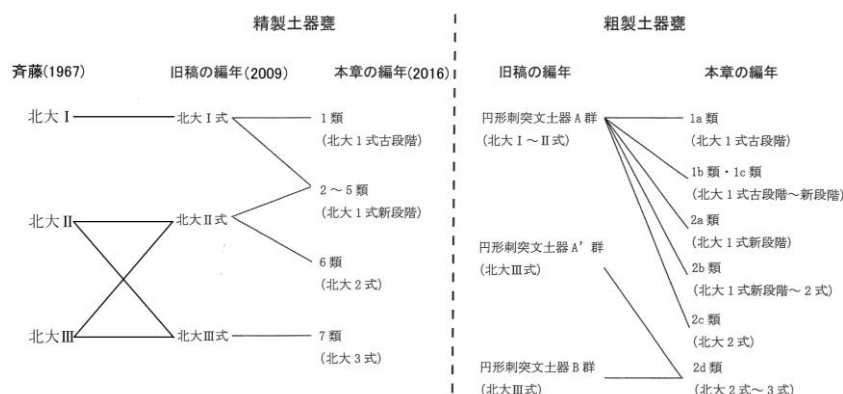


図 V-33 分類名対照 榊田 2016 加筆引用

榊田は 2009 年論考を訂正する形で 2016 年に「北大 1 式古段階」「北大 1 式新段階」「北大 2」「北大 3」を新設した(図 V-33)。2009 年論考についてはその誤認・問題点を指摘した(鈴木 2011b)。

2016 年について検証してゆく。まず、「その(筆者註：刷毛目調整のこと)有無を時期区分の根拠にするのは適切ではない。」(榊田 2016, pp. 43)とある。再三述べるが、刷毛目調整の有無を時期区分の根拠としていない。器面における最終段階の調整技法の変遷を編年したのである。後北 C<sub>2</sub>・D 式~所謂北大式の器面調整は一般的に以下である。(ケズリ→)ナデ→ハケ→(ヘラ)ナデ、(ケズリ→)ナデ→ハケ→ミガキ、(ケズリ→)ナデ→ハケ、括弧内は有無がある調整・下線は最終段階の調整。刷毛目調整の事例をあげても最終段階の調整技法が変遷することを否定したことになる。また、刷毛目調整は集合沈線文(榊田の櫛描文)との関連も想定できるので東北地方土師器からの系譜に限って考える根拠はない。東北地方からの刷毛調整の導入の有無は、それが調整痕であるという判断に基づいているならば、器壁の厚さを東北地方と比較するなど合理的な視点が必要である。くわえて、刷毛目の観察に誤認があるので再び指摘する。札幌市 C429 遺跡の後北 C<sub>2</sub>・D 式注口付浅鉢外面はケズリである。青森県田向冷水例は土師器群中にある異系(所謂北大式)土器であり、本州における当該期の主要属性=刷毛目調整が付くのは異系であっても当然であり、図示した破片の最終調整はナデである。その他にも重大な誤認があるので指摘する。図 17 の 1~3 は帯縄文ではなく普通縄文の带状押捺「帯縄文風」である。図 18 の 1~3 は段状沈線ではなく丸棒先端による沈線である(1 については鈴木 1999 年で誤認し、2003 年に取り下げ)。

榊田の細分属性(3 種 22 項目)は前回とほぼ変わらず、新たに「精製:口縁~胴部が有文」「粗製:頸部以下が無文」を設けている。「精製土器甕」は器形(口径胴径差 4 項目・頸部の有無 2 項目)・胴部文様帯の有無・口縁~胴部文様 14 項目(円形刺突文を除く:榊田の突瘤)、「粗製土器」は器形・口縁文様 2 項目(円形刺突文を含む:榊田の突瘤)と「精製土器甕」と重複する 1 項目、である。

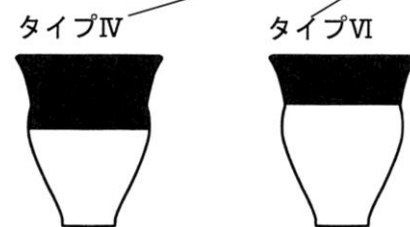
「精製」「粗製」の区別は山内清男によって初めてなされ「粗製」は無文土器を指していた(阿部芳郎 1990)、現在では装飾性に富む・特殊な器形・精巧な作り・複雑な文様がなくとも入念な仕上げがなされたもの(大洞式のみガキのある無文の壺などを指すのか:筆者註)が「精製」で、それと区別したものが「粗製」であり、西田は胎土の粗密も加えている(西田泰民 1984)。所謂北大式に数多くある器面調整のみの無文土器は榊田の「精製」「粗製」のどちらにもあてはまらず、口縁部文様は「精製」「粗製」に両属する。「精製土器甕 7 類」と「粗製土器甕 2a~d 類」は同じ器形である。「粗製土器甕 2c 類」は「精製土器甕 7 類」のうち普通縄文のみのも(榊田 2016、図 24 の 2)と同定判別ができない。榊田の分析では無文土器の編年は不可能である。

また、文様と器形の相関によって新旧を決定することにも問題がある。「ii) 胴部文様帯がない器形の大半は口径>胴径となる」と列方向の状況を述べる(図V-34)。口径>胴径(行方向)では57.1%(96/72+96)で、胴部文様帯があるは42.8%(72/72+96)であり、両者はあり:なし=約4:6で拮抗する。タイプIV・タイプVIは同時並行か前後があると判断される。前後がある場合は別の属性により証明されなければならない。

文様14項目には加えられるべき属性がある。「微隆起線文+沈線文」「棒状・筒状で描かれた微隆起線模倣の沈線文」、これら沈線文は微隆起線との同時並存を証明する重要な属性である。表V-14は、榊田の表3の集計に漏れた事例(+で表現)を加え、文様14項目を並べ替えたものである。榊田によれば、タイプはI・II→III・IV→V・VIという出現順序(以下a→b→cという)がある。であれば文様を時系との相関がわかるように表V-14の順に並べ替えるべきである。④と⑧⑨⑪はa~cまであるので漸移の時系を表す。aに属する③⑤、bに属するものはない、cに属する⑬⑭、abに属する①②⑥⑦、bcに属する⑩⑫、となる。これらより、A群:I×③⑤、B群:I~IV×②⑦⑥①、C群:III~VI×⑩⑫⑬、D群:VI×⑭が導ける。A群とD群が明瞭に時系を示し、ほかの群は漸移的である。B群では①②がIとIVに多出する。I・II、III・IV、の群をつくるのであれば①は除外しなければならないがIVには②がない。以上より、I~IV×②⑦⑥①には複数の群が混合していることを示す。C群ではIV⑩とVI⑫に多出が認められる一方でIV⑫とVI⑩が寡出するという漸移的傾向が認められる。以上より、C群は排他的≒時期差があるIV⑩とVI⑫の複合であり、VI⑫はその器形からVI⑭と並行する可能性を示す。口径>胴径であるタイプIV・VIは判別属性としては弱い。同様に口径>胴径はB・C・D群にあって継続する傾向を持つ。いっぽう胴径>口径はA・B群に限られ判別属性として有効である。

表V-15は、A~D群と精製土器甕分類・細分型式・その出土パターンと粗製土器甕分類の対応を示したもので、A~D群に対して㉞~㉡が個々に対応する。A~D群と㉞-㉠、A~D群と㉡、A~D群と㉢、の対応関係である。なお、㉡の5類は筆者の時系群にはない。㉠「北大1式古段階」と「北大1式新段階」に逆転が起こり、もっとも古い㉡の2類は新段階に包含されてしまう。出土パターンも同様である。くわえて「北大1式新段階」に固有の出土パターンがないのは提示した出土パターンが型式の根拠とならない。㉢1a~c・2a類も㉠「北大

		胴部文様帯	
		あり	なし
器形	頸部 胴径≥口径	33	
	なし 口径>胴径	24	
形	頸部 胴径≥口径	9	1
	あり 口径>胴径	72	96



図V-34 器形と施文範囲

榊田 2016 加筆引用

表V-14 タイプと文様 榊田 2016 加筆引用

タイプ	文様													
	③	⑤	②	⑦	⑥	①	⑧	⑨	④	⑪	⑩	⑫	⑬	⑭
	櫛描文+帯縄文	沈線文+帯縄文	微隆起線文+帯縄文(+列点文)	微隆起線文+普通縄文	微隆起線文+櫛描文	帯縄文(+列点文)	櫛描文	普通縄文(+刻線文・刺突文)	微隆起線文	横走沈線文(+櫛描文・刻線文・刺突文)	普通縄文+横走沈線文(+刻線文・刺突文)	刻線文・刺突文	縦走沈線文	段状沈線文(+刻線文)
I	1	1	18	2	7	3	1							
II			13	1	1	1	2		1	1				
III			1	1					2	3	2			+
IV					1	4	2	5		21	32	7		
V									+	1				
VI							2	2	+	32	1	47	1	11

93

表 V-15 筆者時系群と榊田分類の対応 榊田 2016 加筆引用

	㉞	㉟	㊱	㊲	
筆者の時系群	精製土器甕	精製の細分型式	精製の出土パターン	粗製土器甕	
B	1類	北大1式古段階	①	1a類	2b類
AB	2類	北大1式新段階	②	1bc・2a類	
B	3類		①	1a類	
B	4類		①	1a類	
	5類				
C	6類	北大2式	③	2c類	
CD	7類	北大3式	④⑤	2d類	

1式古段階」「北大1式新段階」と同様の状況が起こる。粗製土器甕と精製土器甕の供伴例の認識にも問題がある。第一に層位学的検証の内容である。幌内 D 遺跡 P-145 の 2 例(榊田の図 29-1・2)は墓坑埋戻し土中の遺物で 1 点はほかの土坑の埋戻し土とも接合関係がある。幌内 D 遺跡 P-145 の 2 例(榊田の図 29-3・4)は坑底と墓壇上面への流入土で、うち 1 例は大破片である。大きさは物理的近接に寄与する(移動しづらい)が、接合関係は埋戻し土に含まれて土器片が移動したことを示すので、遺構に「関連する状況」の根拠はない。K39 遺跡北大工学部地点の 2 例(榊田の図 29-5・6、11・12)は全て土坑流入土で 5・6・11 は包含層に接合関係が及ぶので、これらは全て遺構に「関連する状況」ではない。第二に粗製土器甕を精製土器甕(榊田の図 29-7・8)としているが、全て榊田が言う粗製土器甕であろう。第三に同じ出土状態であるにもかかわらず、製作時の同時と廃棄時の同時とを区別している。榊田の図 29-5・6 と榊田の図 29-11・12。

器面の最終調整・縄文原体・押捺方法を編年属性から除外した榊田の手法は今回も問題が大きいことを指摘した。

### 3 所謂北大式(円形・刺突文土器)とオホーツク式との属性交換

図 V-35-1 は上下 2 列の断続山形沈線文(図 V-31 の沈線文 4)で、1 つの施文具によって同時に 2 本線が連続して横位に施文されたものではなく、「ハ」字を重畳し、それを単位として横方向に並べた文様意匠である。これに近似する文様はオホーツク刻文土器にあり藤本の文様分類 13 にあたる(藤本 1966)。類似例の釧路市天寧 1 遺跡の図 V-35-4 は口縁部に僅かな肥厚帯、横位刻文・上下に重なる断続山形刻文と円形刺突文、外傾接合による成形であり、北大Ⅱ・古(円刺群Ⅳ～Ⅴ期)が付近から出土した。天寧 1 遺跡と同例が礼文町香深井 A 遺跡魚骨層Ⅳにある(円形刺突文は最下層のⅥ層以上、断続山形刻文は間層Ⅴ/Ⅵ以上、の上層にみられる)。魚骨層Ⅳは刻文が主体となり僅かな肥厚帯が新出する時期であり、その下位魚骨層Ⅴでは円形刺突文が主体となる(天野 1981)。魚骨層Ⅳには図 V-31 の「沈線文 6・10」の北大Ⅲ・「古(=円刺群Ⅳ～Ⅴ期)片、引田式土師器の坏・甕≒高橋分類のⅡ-1~3(高橋誠明 1999)も出土しており、東北地方南部ではこの土師器は TK208~TK47 型式(5 世紀中葉~5 世紀後葉)の須恵器が伴う。なお、魚骨層Ⅳの形成開始は円刺群Ⅳ～Ⅴ期と推定される。収束時期は、上層の魚骨層Ⅲより北大Ⅱ・「新<sub>1</sub>(=円刺群Ⅵ期)」片と北大Ⅲ・「新<sub>1,2</sub>(=円刺群Ⅸ～Ⅹ期)」片とが出土しているので円刺群Ⅵ期以前の可能性がある。

また、札幌市 C544 遺跡からは沈線による単列の鋸歯文(図 V-31 の沈線文 4)と円形刺突文が施された北大Ⅲ・古<sub>2</sub>が出土している(図 V-35-14)。

図 V-31-2 は連続山形文(図 V-31 の沈線文 4)の鋸歯頂部から浅い垂沈線が引かれる。類似例は、香深井 A 遺跡の間層Ⅴ/Ⅵ(鋸歯沈線+縦位刻文 1 片)と魚骨層Ⅳ(鋸歯沈線+縦位刻文 1 片)(東京大学 1981)、変則例として香深井 5 遺跡Ⅳ層(鋸歯沈線+縦位貼付帯 1 片)(礼文町教委 1997)などオホーツク式に少数あるが、それらは刻文または貼付帯である。魚骨層Ⅳ



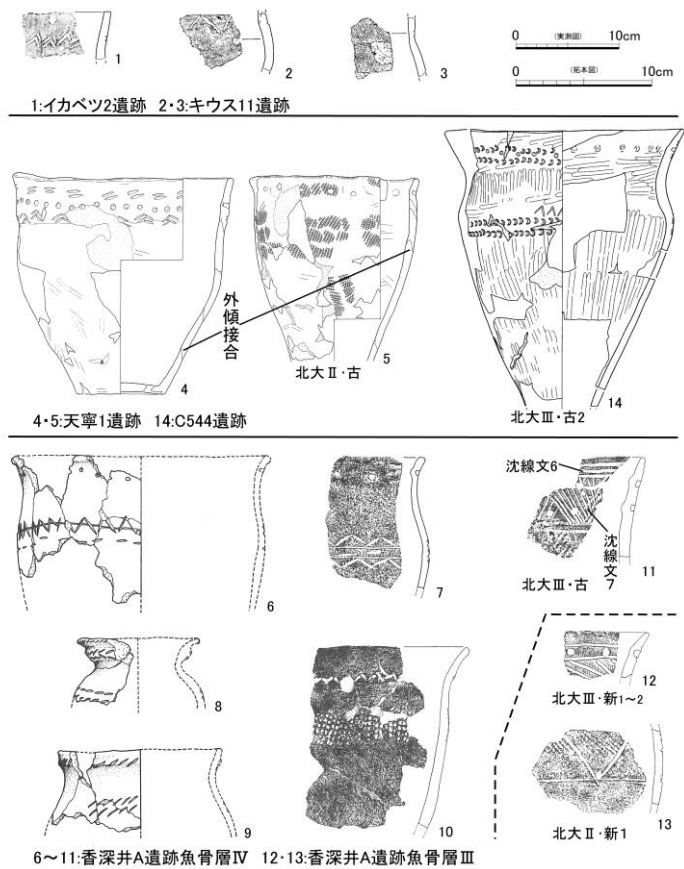
から北大Ⅲ・古(円刺群Ⅴ期)片が出土している。

図V-31-3は二本のほぼ平行沈線による鋸歯文(図V-31の沈線文4)である。類例は音別町ノトロ岬遺跡Ⅳ群6類にあり、5類にも近似する例がある(音別町教委1986)。ノトロ岬遺跡例は円刺群Ⅳ～Ⅵ期にあたる(鈴木2003aでは、土壌30資料をⅧ期としたが円形刺突文が複列あるので円刺群Ⅳ～Ⅴ期に、土壌61資料を円刺群Ⅵ期としたが刺突文が縦位複列あるので円刺群Ⅴ期以前に、訂正する)。包含層からはOI(Ⅵ章2節1項参照)円形刺突文の十和田式が出土している(音別町教委 同前)。

以上より、図V-35-1・4は円刺群Ⅳ～Ⅴ期、図V-35-2は円刺群Ⅴ期を遡るころ、図V-35-3は円刺群Ⅳ～Ⅵ期、図V-35-14は円刺群Ⅴ～Ⅵ期、の、オホーツク式刻文からの文様属性を受容した融合型の円形刺突文土器といえる。

また、時期が下るオホーツク式と円刺群や土師器との関係を示唆する例として以下がある。奥尻町青苗砂丘遺跡H-1住居跡床面(北海道立埋蔵文化財センター2002)では、OI(外面→内面への刺突方向の略号)円形刺突文のオホーツク式と「無文 c・d」円刺群Ⅵ～Ⅶ期。利尻町亦稚貝塚第1ブロック(利尻町教委1987年)では、多くの刻文・少ない円形刺突文(その殆どはOI)のオホーツク式と住社式模倣?の坏。札幌市C544遺跡4c層(札幌市教委2012)では土坑覆土から円刺群Ⅵ～Ⅶ期(1例のみⅤ期)の復元個体、包含層から刻文・型押文・爪形文・指圧式浮文や摩擦式浮文のオホーツク式破片と円刺群Ⅵ～Ⅷ期(1例のみⅤ期)と住社式後半～栗罎式前葉の高坏や住社式坏の復元個体。青苗砂丘遺跡例・亦稚貝塚例では刺突文系の中でOI刺突文が殆どで、香深井A遺跡においても魚骨層Ⅳ以上では同様であり、OI刺突文の増加は刺突文系において新しい傾向である。そしてC544遺跡例には円形刺突文がない。以上より、OI刺突文が卓越するオホーツク式は円刺群Ⅳ～Ⅴ期以前、刻文が卓越するオホーツク式は円刺群Ⅵ～Ⅷ期であり、摩擦式浮文は円刺群Ⅷ期以後であろう。

円刺群土器とオホーツク式は鈴木の後北C<sub>2</sub>・D式・新<sub>2</sub>(所謂モヨログループ)～円刺群Ⅷ期に一定的に属性交換をしている。すでにその指摘もある(天野・小野2011、熊木2018)。円刺群土器のミガキは東北北部の坏からの影響である(鈴木2007ほか)で、円刺群土器の帯縄文の消滅と並行する光沢のあるナデの盛行はオホーツク式からの影響と考えられる。



図V-35 オホーツク式と類似例 鈴木2018a引用加筆・

札幌市教委2012引用

#### 4 後北 C<sub>2</sub>・D 式、円形・刺突文土器群の編年主要属性と消長

##### 【後北 C<sub>2</sub>・D 式の属性】

- 〈成形〉内傾接合である。ただし「古」では口縁最終積み上げが外傾の場合がある。
- 〈器形〉口頸部形態は外傾・直上が主で、「新<sub>2</sub>」では口頸部にくびれがある。口縁部形態は、「古」では波状口縁、「中」では小突起+平縁が現れ、「新」では平縁口縁が殆どとなる。底部は大径の平底、ただし「古<sub>1</sub>」では凹底がある。
- 〈描順規則〉微隆起線→口頸部 RL 帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文(後北 C<sub>2</sub>)、口頸部 RL 帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文(後北 D)→直描き文。口頸部の帯縄文には直条と曲条がある(鈴木 2019)。文様分割は縦 4×横 2、縦 0×横 1 以上。
- 〈頸胴部縄文〉RL 帯縄文+胴部 RL 縦位帯縄文。縦位帯縄文+横位帯縄文の IX・横位帯縄文のみの X 類は出土量が少ない(例えば器高 16cm 以上の文様構成がわかる深鉢について、K135 遺跡では IX 類が 5%、X 類が 14%)、文様構成の単純な類は「古<sub>1</sub>」から断続的に出現する類と考えられる。

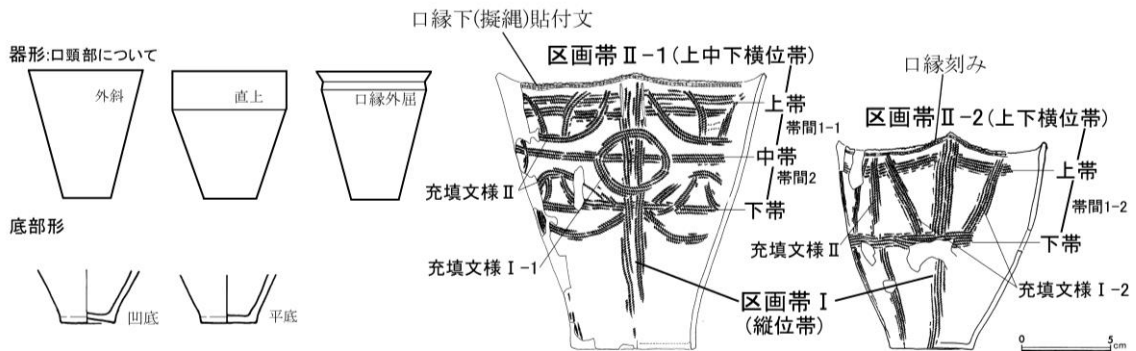
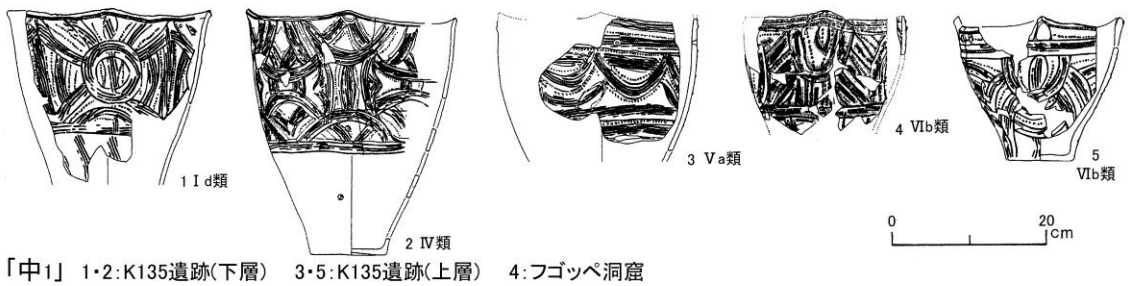
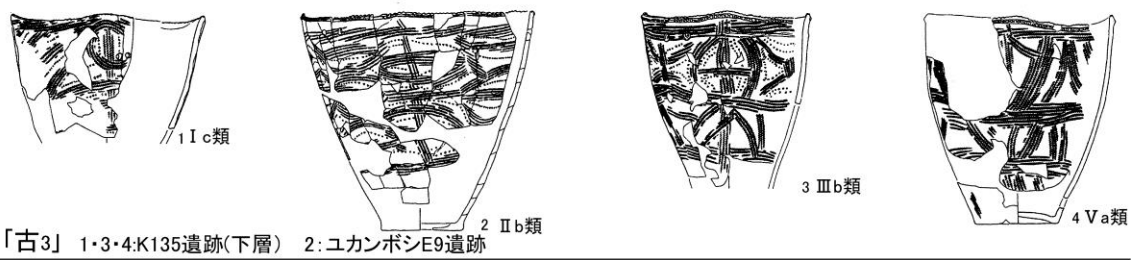
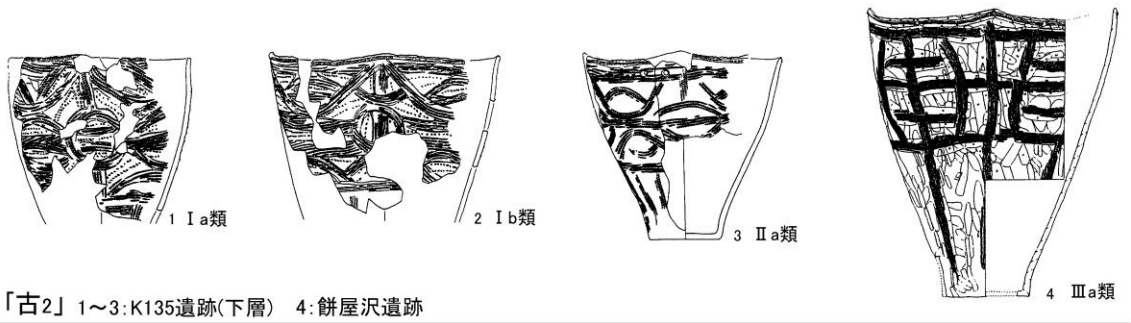
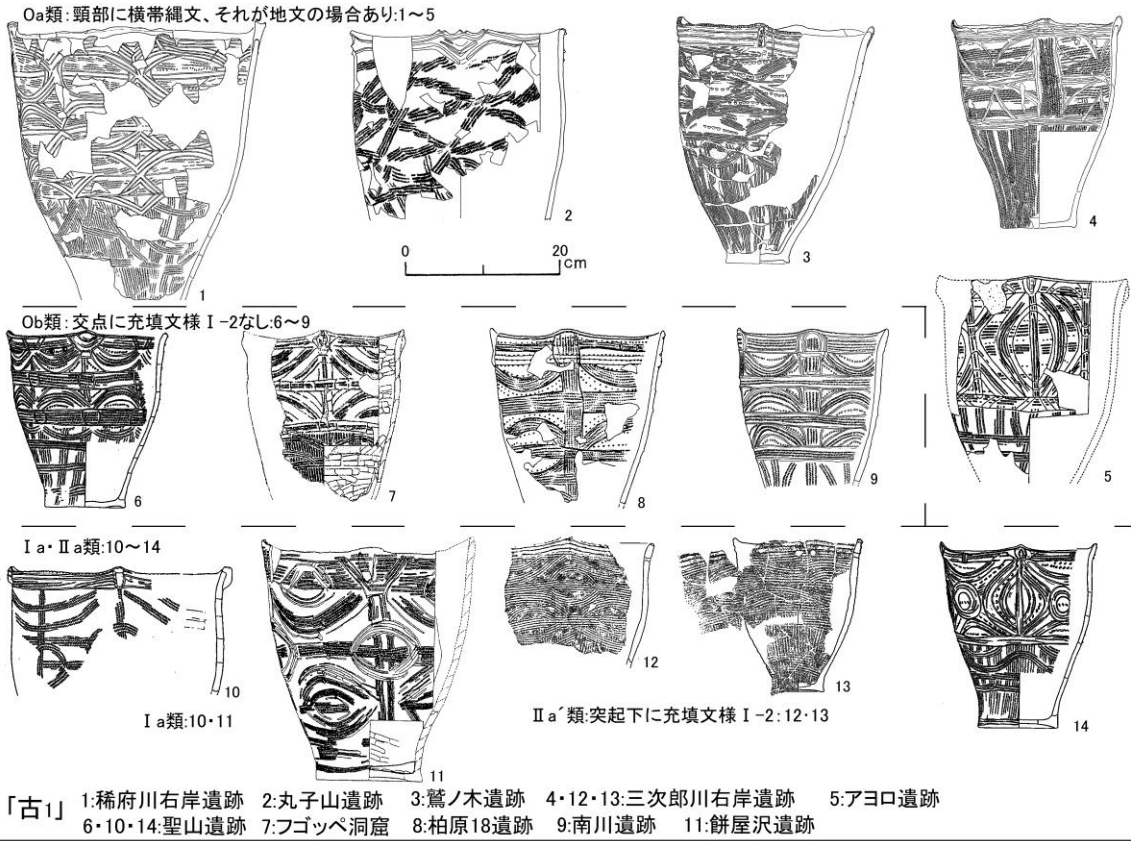


図 V-36 主な属性要素と文様配置 鈴木 1998 も引用

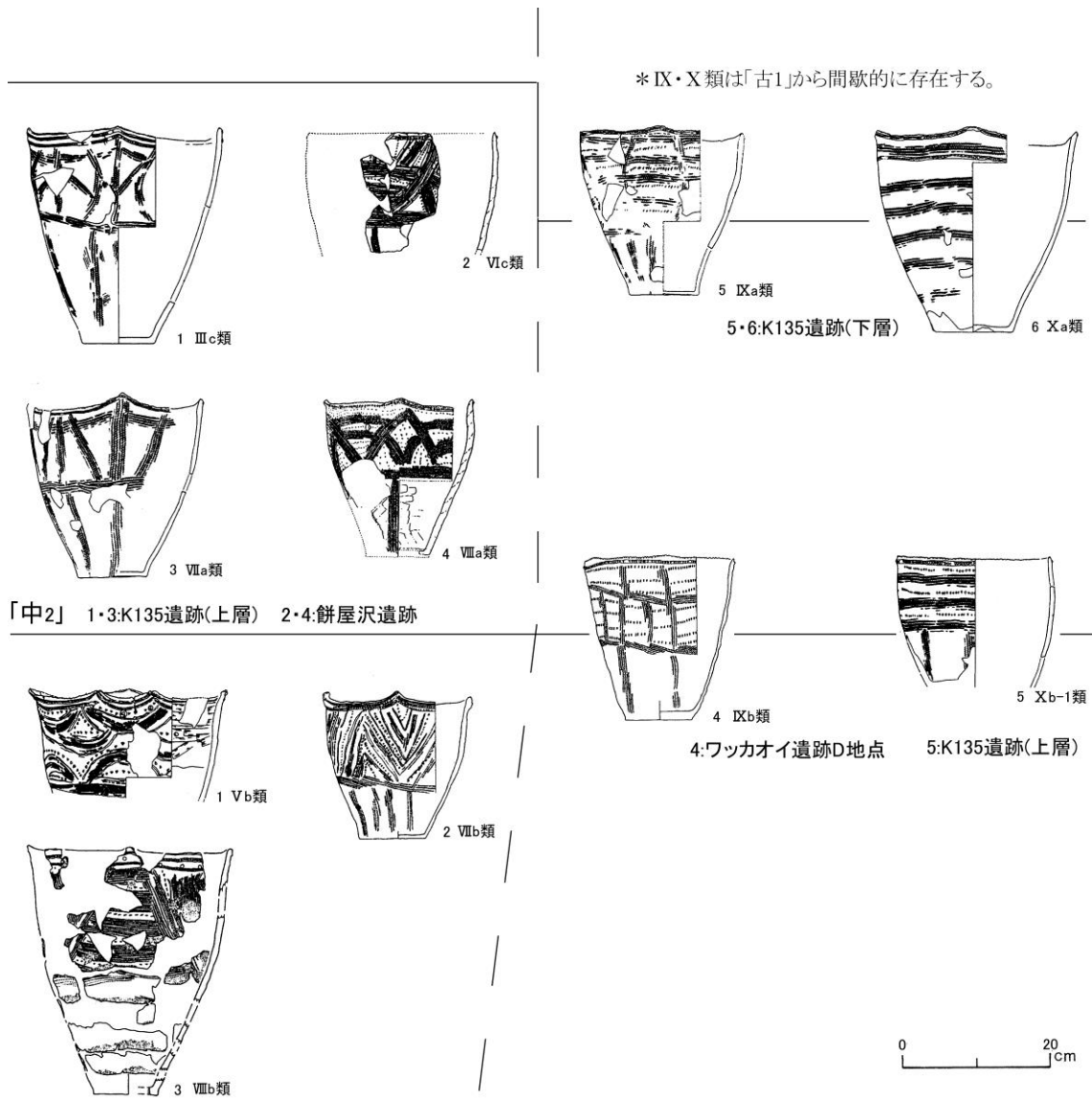
表 V-16 主文様・形態 鈴木 1998 加筆引用

分類名	主文様	文様配置	形態		
0	a b	弧形文・円形文	弧形文は曲条帯縄文のこと、円形文は下欄の内容	口縁部横位微隆起線の下に、口頸部微隆起線の下に 横位帯間に	
		充填文 I		充填文 I の文様配置とその他文様配置	形態
I	a b c d	円形文	3単位以上の短い曲条帯縄文(弧形文)を組み合わせた	縦位帯と中帯の交点に、その両側に紡錘形文を 縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形文を 縦位帯上の帯間1-1に 縦位帯上の帯間1-2に、他の文様を上下二段に	
II	a b	紡錘形文	2単位の曲条帯縄文を横位・縦位に組み合わせた	縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形文を 縦位帯上の帯間1-1と帯間1-2に、その両側に上下に開く横位弧形文を	
III	a b c	括弧文・逆括弧文	縦位弧形文2個の間に1つ以上の文様が入る。「( )」:括弧文「) (」:逆括弧文	縦位帯と中帯の交点に 縦位帯上の帯間1-1に 縦位帯上の帯間1-2に	
IV		菱形文・六角形文	た曲条帯縄文の縦横の重複	縦位帯上の帯間1-2の上下二段に	
V	a b	連弧文	同方向の頂点を持つ弧形文の横位連接	波頂下の帯間1-2の上下二段に 波頂下の帯間1-2に	
VI	a b c	U字形文	曲条帯縄文(弧形文)の組み合わせ、半分の円形文もある	縦位帯上の帯間1-1に 縦位帯上の帯間1-2の上下二段に 縦位帯上の帯間1-2に	
VII	a b	V字形文	直条帯縄文の斜めの組み合わせ	縦位帯上の帯間1-2に 波頂下の帯間1-2に	
VIII	a b c	山形文	V字形文が上下反転した	波頂下の帯間1-2に、口縁部に円形刺突文 波頂下の帯間1-2に、口縁部に円形刺突文	頸部に括れ、口縁端面水平
IX	a b c-1	縦位帯縄文+横位帯縄文	横遷する直条帯縄文と縦位直条帯縄文の組み合わせ	縦位帯上に縦位帯縄文、横位帯縄文が多い 縦位帯縄文と横位帯縄文柱が交差、横位帯縄文が少ない 縦位帯縄文が横位帯縄文柱を分断、横位帯縄文が少ない	
	c-2			縦位帯縄文が横位帯縄文柱を分断、横位帯縄文が少ない、口縁部に円形刺突文	頸部に括れ、口縁端面水平
X	a	横位帯縄文	横遷する直条帯縄文	横位帯縄文が多い	
	b-1 b-2			横位帯縄文が少ない 横位帯縄文が少ない	口縁端面水平
	b-3			横位帯縄文が少ない	頸部に括れ、口縁端面水平

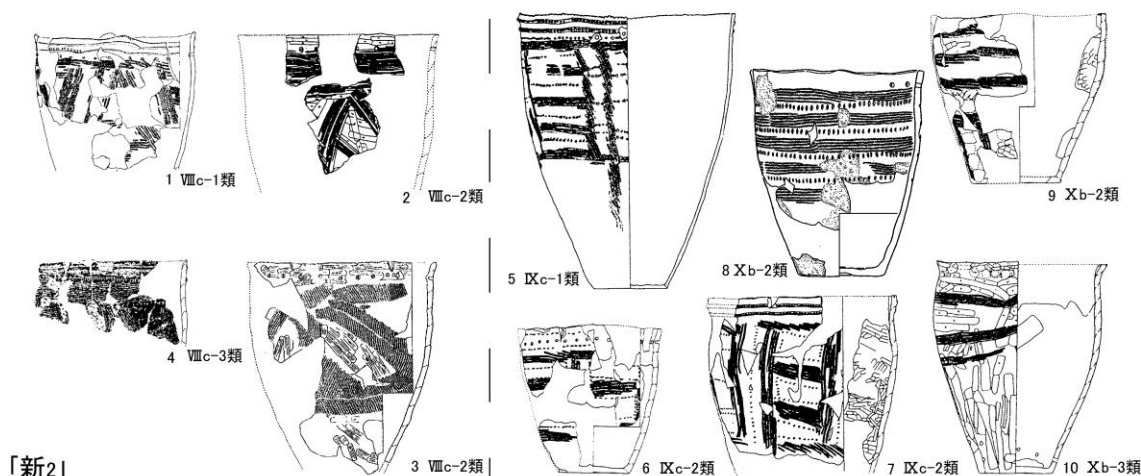




図V-37 後北 C<sub>2</sub>・D式「古<sub>1</sub>」~「中<sub>1</sub>」 鈴木 1998 加筆引用



「新1」 1:フゴッベ洞窟 2:ワッカオイ遺跡D地点 3:オサツ2遺跡



「新2」 1:祝梅川山田遺跡 2・6・9・10:餅屋沢遺跡 3:餅屋沢2遺跡 5:キウス5遺跡A2地区 7:フゴッベ洞窟 8:ユカンボシC15遺跡

図V-37 後北C<sub>2</sub>-D式「古<sub>2</sub>」~「新<sub>2</sub>」 鈴木1998 加筆引用

### 【円形・刺突文土器群の属性】

前述のように円形・刺突文土器群は、文様と最終調整を主要属性として、その相違により「北大Ⅰ」「北大Ⅱ」「北大Ⅲ」「刺突文(土器)」「円形刺突文(土器)」「無文(土器)」に細分類される。成形は各細分に共通する内容である。そして、文様と最終調整は時系にともない変化し、器形も同様である。以下では、成形を除いて細分ごとに属性の特徴をあげる。

〈成形〉成形は粘土紐輪積、粘土紐接合面は内傾である。深鉢は平底を始発として休止期を設けず胴部を倒円錐台形に成形する。甕は平底を始発として胴部を倒円錐台形に成形して、胴部と頸部との境に段(接合面=休止期の痕跡)を残す例、段の形態のみ模倣する例がある(鈴木ほか 2007)。

#### 〔北大Ⅰ〕

〈器形〉「古」に深鉢形(図 V-40 の器形 1~3)が多くみられ、胴部中位の曲率がきつく口頸部が明瞭な例(図 V-40 の器形 4)もある。「新」では長胴化・頸部の伸張(図 V-40 の器形 5・6)が顕著である。底部は、「古」に図 V-40 の底部 1・2、「新」では図 V-40 の底部 2・3 がある。

〈描順規則〉胴部に斜走・横走・縦走帯縄文→口頸部に横走帯縄文・微隆起線文→円形刺突文を施す。

〈頸胴部縄文〉「古」には胴部上半~下半に RL 帯縄文。「新<sub>2</sub>」では RL・LR 普通縄文を帯縄文風に施す例が出現する。

〈口頸部文様〉主文様には微隆起線文と円形刺突文があり、胴部上半には帯縄文(全て直条)とそれを区画する三角形刺突文が副文様としてある。微隆起線文の多条化・多段化は口頸部の伸張と相関的関係にある。口縁部文様帯が単段を「古」、口縁部文様帯の多段化を「新」、円形刺突文の複列化・普通縄文の出現「新<sub>2</sub>」である。

#### 〔北大Ⅱ〕

〈器形〉「古」には例外的に深鉢形があり図 V-40 の器形 5 が多くみられる。「新」では図 V-40 の器形 6 が多くみられ、「新<sub>3</sub>」では胴部と頸部の境に段がある例(図 V-40 の器形 7)が出現する。底部は、「古<sub>1</sub>」に図 V-40 の底部 2 が散見されるが、「古」「新」通じて図 V-40 の底部 3 がある。

〈描順規則〉「古」は、ナデ→口頸・胴部上半に横位・斜位普通縄文→縄文の端を撫で消し→沈線で縁取り区画→円形刺突文を施す。「新<sub>1,2</sub>」は、口頸部に横位普通縄文→縄文の端を撫で消し→沈線で縁取り区画→篋ミガキを加え→円形刺突文を施す。「新<sub>3</sub>」は、口頸部に地紋としての横位普通縄文→沈線文→体部下半に篋ミガキを加え→円形刺突文を施す。

〈頸胴部縄文〉胴以下に縄文がなくなる。「古<sub>1</sub>」には、口縁部に RL 帯縄文やそれを楔形刺突文で区画した例、RL 普通縄文の例がある。「古<sub>2</sub>」以降は LR 普通縄文が通有となる。

〈調整痕〉「古」は体部下半にナデ調整が施され、「新」は体部下半に篋ミガキ調整が施される段階である。

〈口頸部文様〉明瞭となった頸部に文様が収束する。頸部と施文範囲の相関はこれ以降にも継続する。主文様には縄文・沈線文・円形刺突文がある。

口縁部の円形刺突文は「新<sub>2</sub>」に単列化し、胴部上半に副文様としての円形刺突は「新<sub>3</sub>」にはみられない。2本一組沈線は北大Ⅱの「古」「新<sub>1</sub>」では口頸部文様として用いられるが、「新<sub>2</sub>」には区画文として、「新<sub>3</sub>」には独立した文様として用いられる。

〔北大Ⅲ〕

〈器形〉「古」には図V-40の器形6に加えて5があり、「中」以降は図V-40の器形6が多くみられ、「中<sub>2</sub>」以降は胴部と頸部の境に段がある例(図V-40の器形7)が継続する。

「新<sub>1</sub>」に内底面丸底が現れる。「古」～「新」通じて図V-40の底部3がある。

〈描順規則〉「古<sub>1,2</sub>」は、ナデ→沈線文→円形刺突文を施す。「中<sub>1</sub>」は、ナデ→沈線文→篋ミガキ→円形刺突文を施す。「中<sub>2</sub>」・「新<sub>1</sub>」は、刷毛目→篋ミガキ→沈線文・刺突文→円形刺突文を施す。「新<sub>2</sub>」は刷毛目の後に篋ミガキ行わない場合が多く、沈線文・刺突文→円形刺突文を施す。

〈調整痕〉ナデ調整が残る「古」。「中」はナデ下地に主文様「中<sub>1</sub>」、篋ミガキ下地に主文様「中<sub>2</sub>」に細分される。「新」は口頸部に刷毛目下地で体部下半に篋ミガキや刷毛目が残る段階。体部下半に篋ミガキが残る「新<sub>1</sub>」、体部下半に顕著に刷毛目が残る「新<sub>2</sub>」に細分される。

〈口頸部文様〉主文様には沈線文・微隆起線模倣の沈線・刺突文・円形刺突文がある。主文様が横位に接続する「古」、主文様が横位に断続する「中<sub>1</sub>」。主文様が横位に断続する「中<sub>2</sub>」に細分される。「新」は沈線文が刷毛目下地に施される

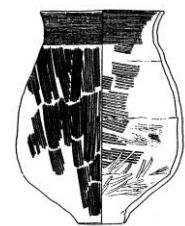
口縁部の円形刺突文は「中<sub>2</sub>」に単列となり、胴部上半の副文様の円形刺突は「中<sub>2</sub>」にはみられず、副文様としての刺突文が「中<sub>1</sub>」にある。2本一組沈線は独立した文様として「中<sub>1</sub>」に以降にある。横位沈線文は、「古」では主文様として多用されるが、「中」になると別な文様の下地になり、「新」では鋸歯文の充填文様となることもある。鋸歯文は北大Ⅰでは胴部文様、北大Ⅱでは口頸部文様、北大Ⅲ「中<sub>1</sub>」では頸部文様として「新<sub>2</sub>」に至る。斜格子文は擦文文化期まで続き「新<sub>1</sub>」に初出する。

〔刺突文〕

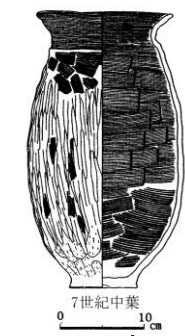
〈器形〉「古<sub>1</sub>」～「古<sub>2</sub>」・「中<sub>2</sub>」～「新<sub>2</sub>」に図V-40の器形6が、「古<sub>3</sub>」～「中<sub>1</sub>」に図V-40の器形7がある。図V-44の15は下膨れ気味の器形で宇部の東北北部型土師器甕B(図V-41)(宇部2002)に類似するが、並行期の甕B(図V-39下段)よりも口縁部が肥大する。「古」～「新」通じて図V-40の底部3がある。口縁部は、内屈しない「新<sub>1</sub>」、内屈する「新<sub>2</sub>」の細分がある。

〈調整痕〉「古」は、胴部にナデが残る「古<sub>1</sub>」、口頸部～胴部がタテ篋ミガキ下地「古<sub>2</sub>」、口頸部がナデ・ヨコ篋ミガキ下地「古<sub>3</sub>」に細分される。「中」は、胴部外面に篋ミガキがある「中<sub>1</sub>」、外面全面に刷毛目調整が残る「中<sub>2</sub>」「新」に細分される。

〈描順規則〉「古<sub>1</sub>」はナデ→刺突文。「古<sub>2</sub>」・「古<sub>3</sub>」はナデ→篋ミガキ→沈線文・刺突文。「中<sub>1</sub>」は刷毛目→篋ミガキ→沈線文・刺突



6世紀後半～7世紀前半葉



図V-39 甕B

宇部2002加筆引用

文。「中<sub>2</sub>」は刷毛目→沈線文・刺突文。「新<sub>1</sub>」・「新<sub>2</sub>」は刷毛目→ナデ→段状・段状沈線→沈線文・刺突文。

〈口頸部文様〉口頸部の主文様には沈線文、刺突文がある。「古<sub>1</sub>」～「新<sub>1</sub>」までは頸部全面に主文様が施されるが、「新<sub>2</sub>」には頸部下半に縮減する。

「古<sub>3</sub>」には横走沈線文が単独で施される初例がある。「中<sub>1</sub>」は単沈線により主文様を描き、その中を刺突・横位沈線で充填する。これは北大Ⅲの「新<sub>1</sub>」と同じである。また、2本一組沈線も用いられる。「中<sub>2</sub>」以降は、主文様には2本一組沈線が用いられず単沈線で描かれ、柁目板の先端による刺突文が多くなる。「新<sub>1</sub>」・「新<sub>2</sub>」の段状・段状沈線は、篋状原体の角を器壁に対して立て削ることで表現される。

[円形刺突文]

〈器形〉円形刺突文土器は同期の北大Ⅰ～刺突文土器と同じ器形である。

〈調整痕〉「古」は胴部にタテナデ、口頸部にヨコナデが施される。「中」は胴部が篋ミガキ調整の段階で、頸部～胴部にタテ篋ミガキがある「中<sub>1</sub>」、頸部段を境にタテ篋ミガキを分ける・口頸部と胴部とをヨコ・タテにミガキ分ける「中<sub>2</sub>」に細分される。「新」は口頸部から篋ミガキがなくなる段階で、口頸部にヨコナデ調整がある「新<sub>1</sub>」、口頸部が刷毛調整のままの「新<sub>2</sub>」に細分される。

〈描順規則〉器面調整の後に円形刺突文を施す。

〈口頸部文様〉「古<sub>2</sub>」には円形刺突文が単・複列あるがそれ以外は単列が殆どである。「中<sub>1</sub>」～「新<sub>1</sub>」には沈線で胴部と頸部の境を表現し、「中<sub>2</sub>」～「新<sub>2</sub>」には段がある。

[無文]

〈器形〉円形刺突文土器は同期の北大Ⅰ～刺突文土器と同じ器形である。

〈調整痕〉「古」は胴部にタテナデ、口頸部にヨコナデが施される。「中」は胴部が篋ミガキ調整の段階で、頸部～胴部にタテ篋ミガキがある「中<sub>1</sub>」、頸部段を境にタテ篋ミガキを分ける・口頸部と胴部とをヨコ・タテにミガキ分ける「中<sub>2</sub>」に細分される。「新」は口頸部から篋ミガキがなくなる段階で、口頸部にヨコナデ・タテハケ調整があり胴部にタテ篋ミガキがある「新<sub>1</sub>」、口頸部から胴部にヨコハケ調整がある「新<sub>2</sub>」に細分される。

〈口頸部文様〉「中<sub>2</sub>」前半には沈線で胴部と頸部の境を表現し、「中<sub>2</sub>」後半～「新<sub>2</sub>」には段がある。

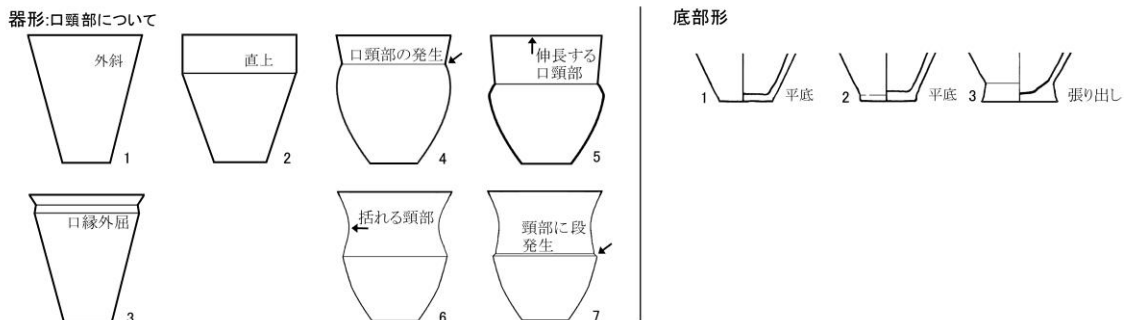


図 V-40 形態に関わる属性要素



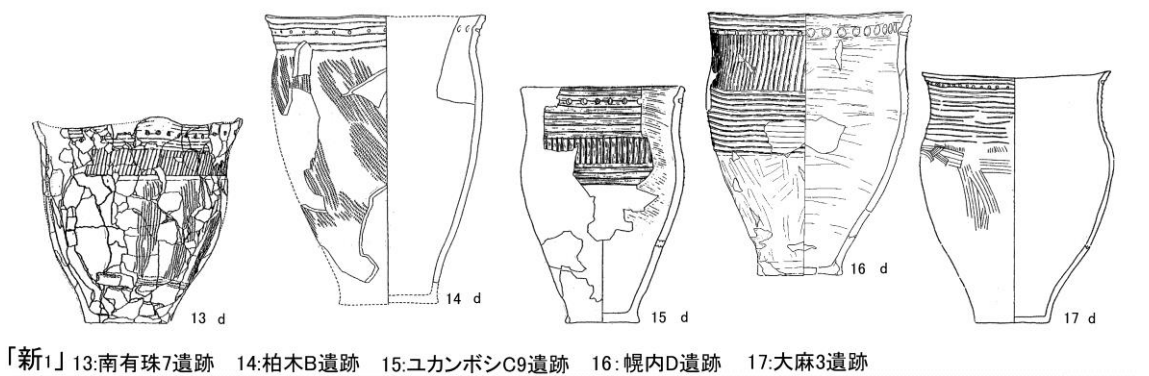
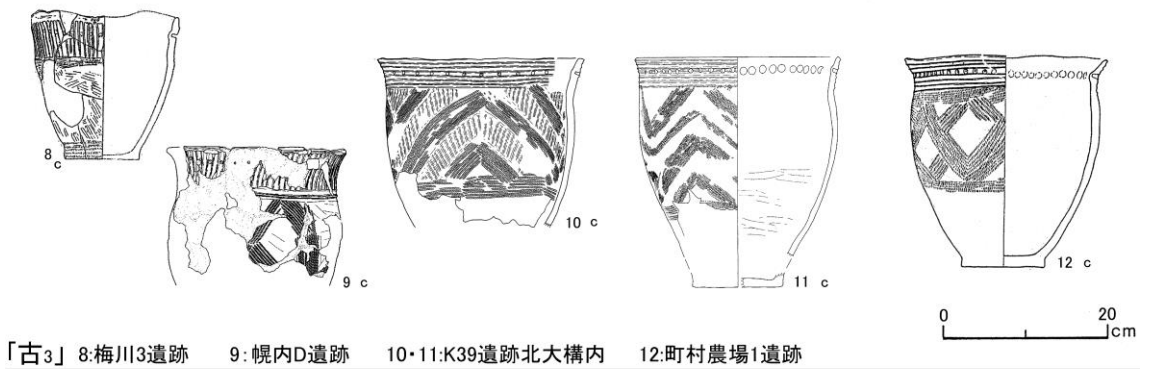
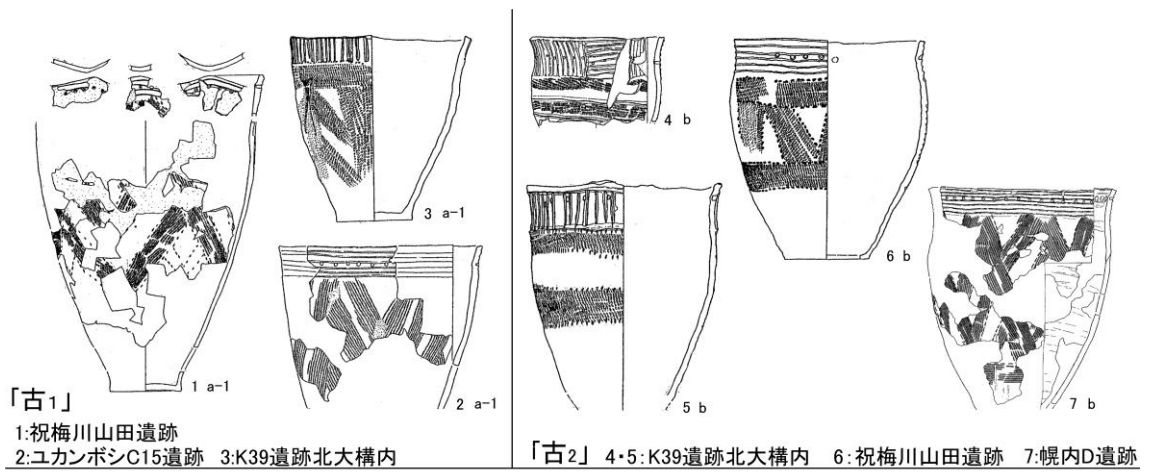
表 V-19 各細分の編年属性 鈴木ほか 2007 引用加筆

細分名	形態										施文												
	口縁部		口・頸部		頸部			底部			口縁部		頸部				胴部				胴部		
	口唇面形	傾き	最大径	頸部の括れ		頸部段	底面の厚み(胴部下半分の比)	張り出し	管状	口縁部	口縁部	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状	管状
				なし	あり																		
北大 I	a-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	a-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c	●	●	●	●	●	●	○	●														
	d	●	●	●	●	●	●	○	●														
	e	●	●	●	●	●	●	○	●														
北大 II	a-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	a-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c	●	●	●	●	●	●	○	●														
北大 III	a	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	d	●	●	●	●	●	●	○	●														
	e	●	●	●	●	●	●	○	●														
刺突文	a	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c	●	●	●	●	●	●	○	●														
	d	●	●	●	●	●	●	○	●														
	e	●	●	●	●	●	●	○	●														
	f	●	●	●	●	●	●	○	●														
	g	●	●	●	●	●	●	○	●														
	h	●	●	●	●	●	●	○	●														
	i	●	●	●	●	●	●	○	●														
凹形刺突文	a	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-1	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b-2	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c	●	●	●	●	●	●	○	●														
	d	●	●	●	●	●	●	○	●														
	e	●	●	●	●	●	●	○	●														
	f	●	●	●	●	●	●	○	●														
	g	●	●	●	●	●	●	○	●														
	h	●	●	●	●	●	●	○	●														
無文	a	●	●	●	●	●	●	○	●														
	b	●	●	●	●	●	●	○	●														
	c	●	●	●	●	●	●	○	●														
	d	●	●	●	●	●	●	○	●														
	e	●	●	●	●	●	●	○	●														
	f	●	●	●	●	●	●	○	●														
	g	●	●	●	●	●	●	○	●														
	h	●	●	●	●	●	●	○	●														
	i	●	●	●	●	●	●	○	●														

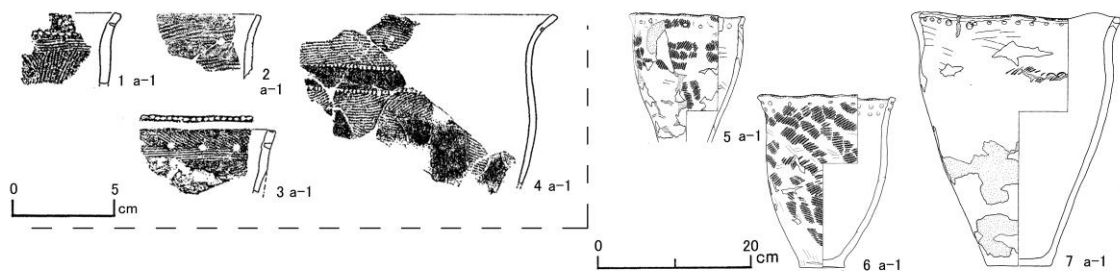
\*施文・口縁部・管状・凹形刺突の属・○刺突深度深い・○刺突深度浅い

表 V-20 各細分の消長 鈴木ほか 2007 引用加筆

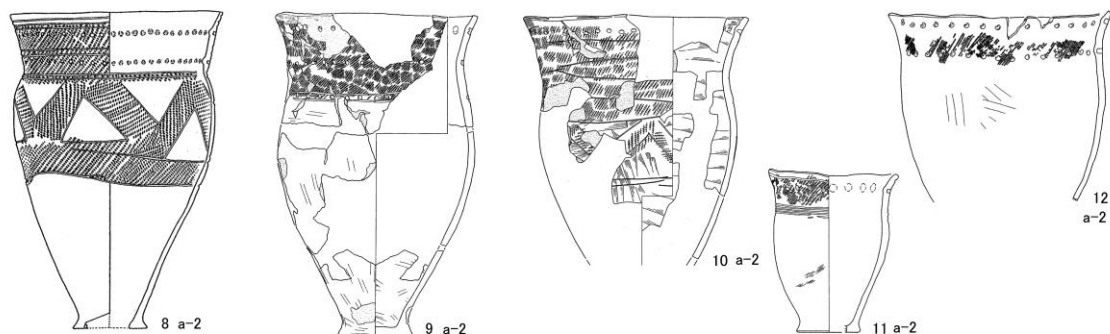
細分名	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII
北大 I	a-1	消										
	a-2	消										
	b	消										
	c	消										
	d	消										
	e	消										
北大 II	a-1			消								
	a-2			消								
	b-1			消								
	b-2			消								
	c			消								
北大 III	a			消								
	b			消								
	c-1			消								
	c-2			消								
	d			消								
	e			消								
刺突文	a			消								
	b-1			消								
	b-2			消								
	c			消								
	d			消								
	e			消								
	f			消								
	g			消								
	h			消								
	i			消								
凹形刺突文	a			消								
	b-1			消								
	b-2			消								
	c			消								
	d			消								
	e			消								
	f			消								
	g			消								
	h			消								
無文	a			消								
	b			消								
	c			消								
	d			消								
	e			消								
	f			消								
	g			消								
	h			消								
	i			消								



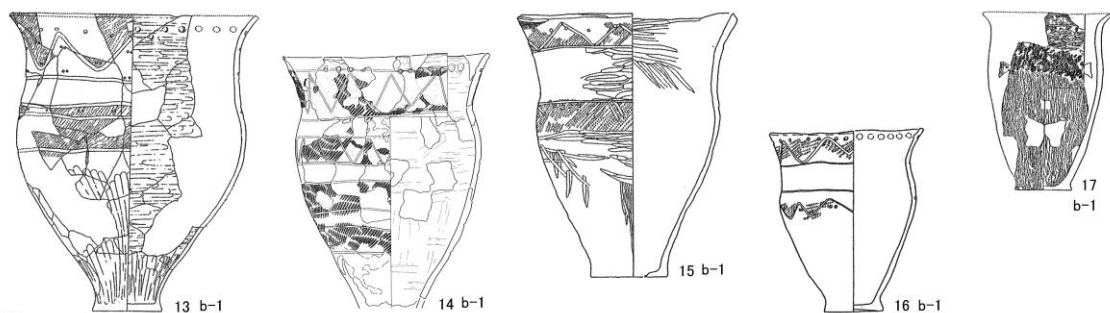
図V-41 北大I 北埋 2003a 引用加加筆



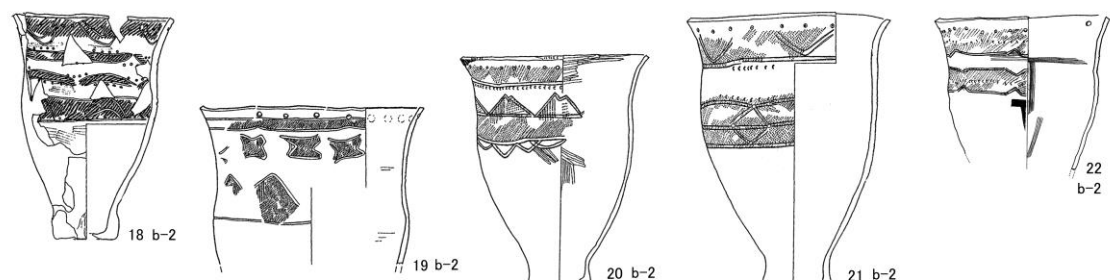
「古1」 1:キウス7遺跡 2:大麻3遺跡 3:柏木B遺跡 4:堀株神社遺跡 5~7:天寧1遺跡



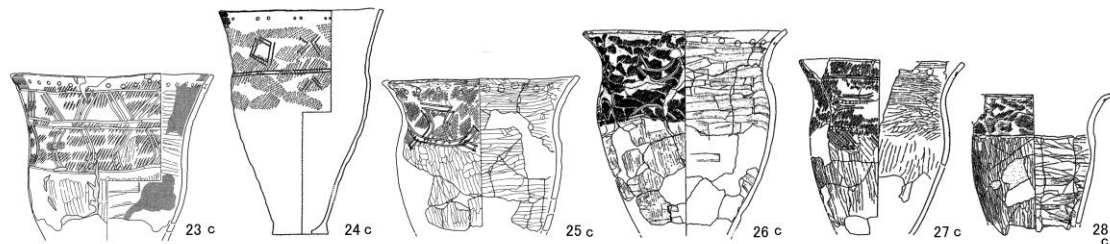
「古2」 8:N126遺跡 9:厚幌2遺跡 10:C544遺跡 11・12:K39遺跡北大構内



「新1」 13:孵化場1遺跡D地区 14:幌内D遺跡 15:ワッカオイ遺跡C地点 16:町村農場1遺跡 17:蘭島遺跡A地点



「新2」 18:ユカンボシE5遺跡 19:町村農場1遺跡 20~22:ワッカオイ遺跡C地点



「新3」 23:C544遺跡 24:ワッカオイ遺跡C地点 25~28:ユカンボシE7遺跡

図V-42 北大II 北埋 2003a 引用加筆



図V-43 北大Ⅲ 北埋 2003a 引用加筆

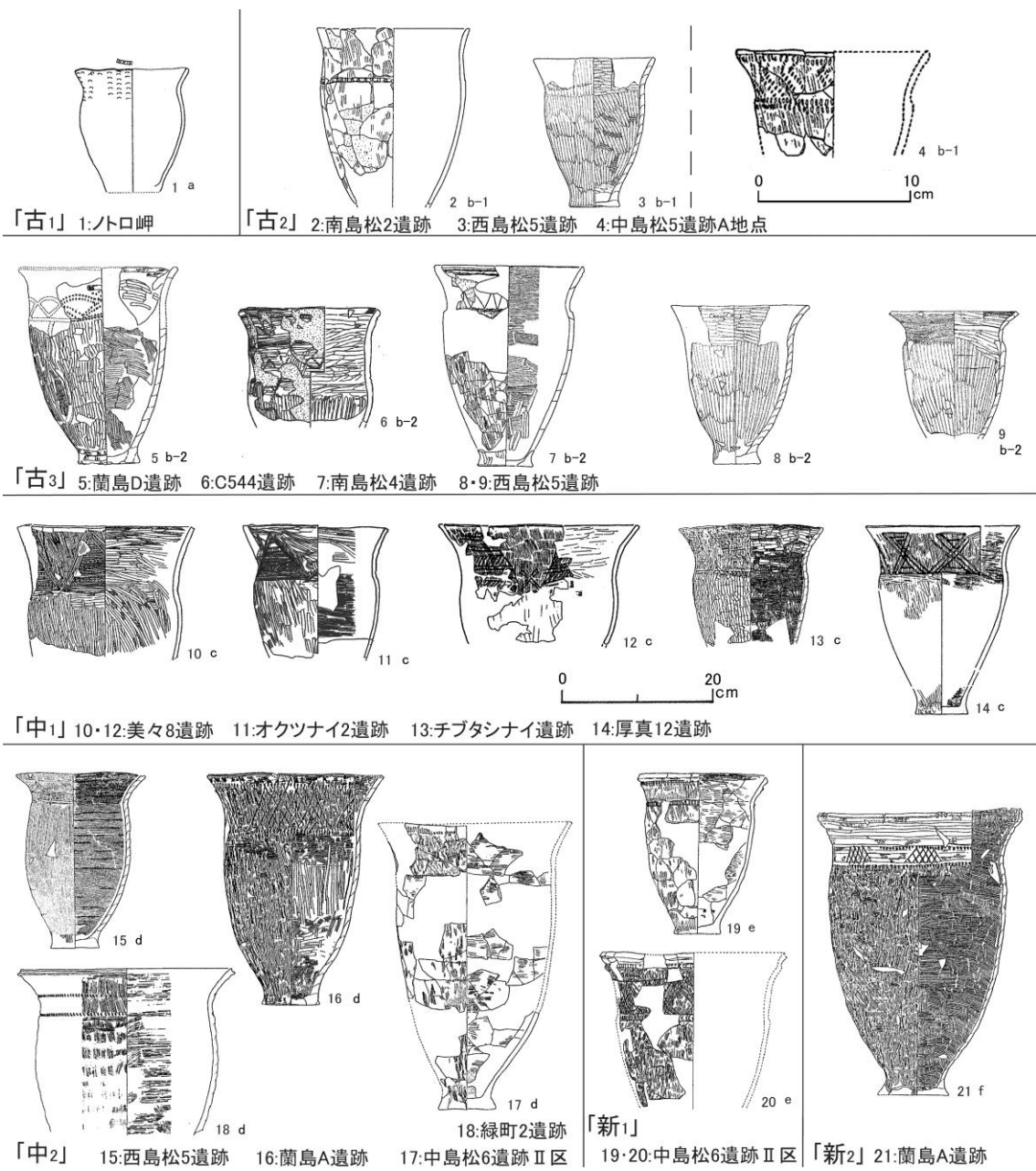


図 V-44 刺突文 北埋 2003a 引用加筆

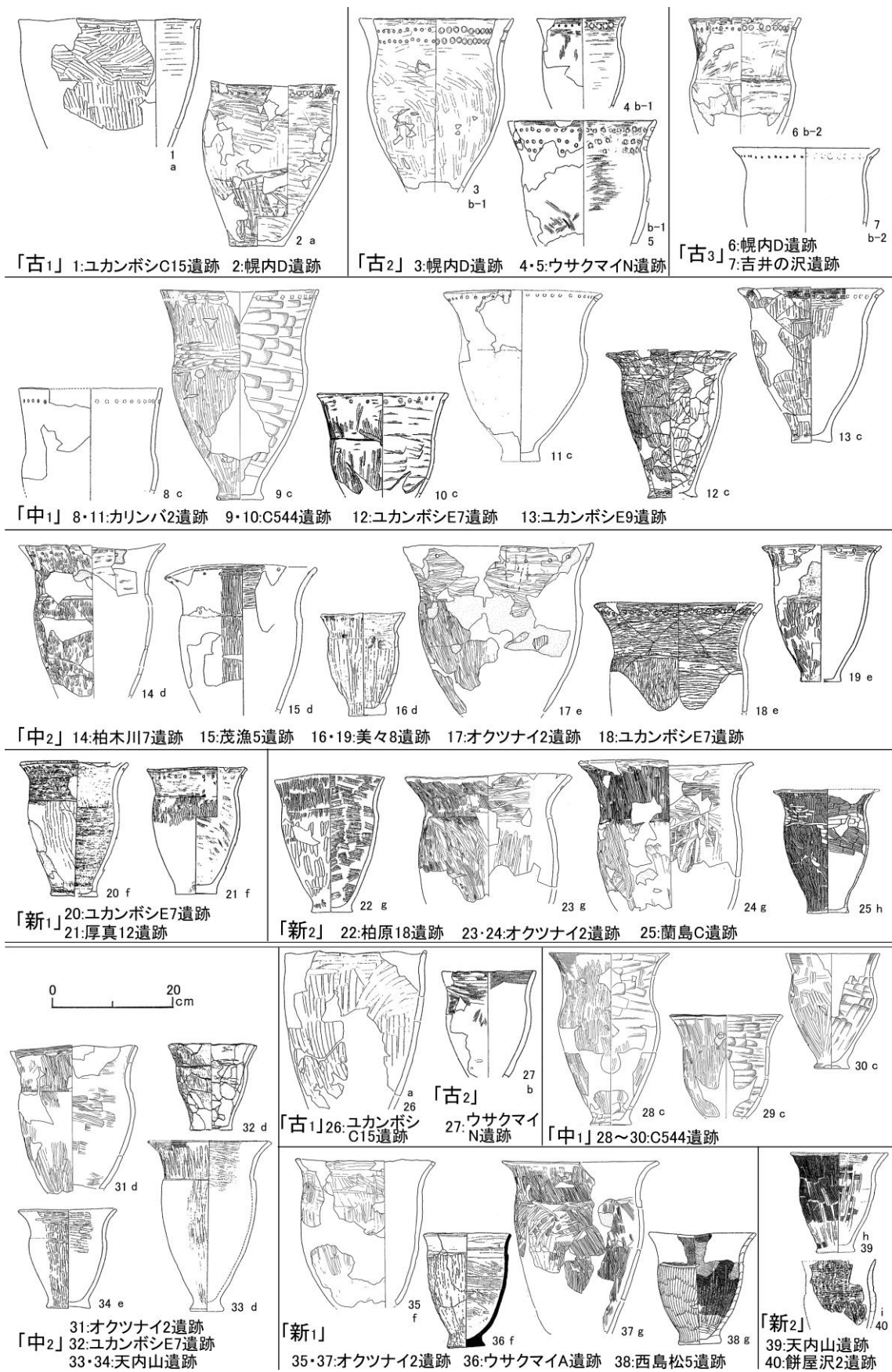


図 V-45 円形刺突文(二重線の上段)・無文(二重線の下段) 北埋 2003a 引用加筆

# VI章

## 基本的実体の変質・変形





## VI章 基本的実体の変質・変形

この章では基本的実体の変容を述べる。その際に、IV章で示した3属性を視点としV章で立ち上げた時間軸に沿って、論を展開してゆく。

また、II章であげた、続縄文が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継か否か。後継である場合、変則的の後継が「続縄紋」、逸脱的の後継が「北海道型(?)続縄紋」なのか、という考古学的文化の系統問題も基本的実体の変容を精査することで検討可能となる。これについては考古学的文化の定義と考察を経たのちに章末で述べる。

### 1 節 属性変化

#### 1 属性の構造

IV章1節で述べたように考古学的実体には階層構造があり、基本的実体は属性→型式→型式組成群にあたり、属性にも単位属性→複合属性・統合属性がある。くわえて、「単位属性」は属性内「状態差」を内蔵する。属性内の階層差は情報再生の程度に相関し、属性内「状態差」には個人の癖が反映され、「複合属性」は集団の系統性を示すことが予想される。

属性の階層差は属性変質・変形(以下変容という)の程度を導くのにも重要となる。そして、型式・型式組成群の変容は属性自体の変異やその組み合わせの変更に依拠している。従って、その変容は属性変容を分析することで把握できると考える。

なお、Clarkeの「本質的属性」は「単位属性」、「鍵になる属性」は「複合属性」にほぼあたると考えられる。「統合属性」はClarkeの「鍵になる属性」に当てはまることもあるが、統合の根拠に相関の明示が必要になる。

#### 2 情報再生における属性の授受

IV章3節4項で既述したように、3属性は、情報再生(≒伝習、受け手からすると伝える・教える、受け手からすると真似る・習う)における場の共有関係の濃淡について、観察者が確認可能な属性性質の区分が3属性であり、内在的属性と表出属性は共有関係の濃と淡、中間的属性は条件により他の2属性に区分変更される性格を有する。

3属性の区分は「場の共有度合い」についての分類であって、情報の流動性の区分ではない。したがって、内在的諸属性のうちにも、表出的諸属性のうちにも、情報再生の内容差や模倣の難易は存在し、3属性の内にも状態差として程度の強弱がある。

情報の再生は情報の授け手・受け手の相互作用である。これについて受け手の「意識」「意図」を強調した以下の指摘がある。小野は「(前略)情報の共有と忠実に再現しようとする意識の存在(後略)」が共同して再現側の選択が生じるとし(小野2011)、熊木は「(前略)“情報を受容する側の意志”を導入することにより解釈可能となる。(後略)」とした(熊木2018)。両氏が分析した後北C<sub>2</sub>・D式の場合には、波及元(授け手)

表VI-1 情報の授受と再生の程度

情報の授受における意識			
	授け手	受け手	再生の程度
①	積極	積極	大いに有り
②	積極	消極	有り、ただし②・③は授け・受けの意識が判別困難
③	消極	積極	
④	消極	消極	まったく無し

が道央で波及先(受け手)が道東で、情報の流れが一方的であることが既知であり、型式内の地域的変異を受け手の「意識」「意図」と結論できた。この場合は受け手の「意識」「意図」が表VI-1の②と推定できる。ただし、受け手の「意識」「意図」が策定できたとしてもその詳細について分析を行おうとすると以下の問題が生じる。②と③については授け手と受け手の意志の差異が再生の程度において、一方のみの「意識」「意図」が明確に抽出できないことが想定される。これは情報の再生が相互的である場合には一層複雑になる。そして、再生の程度の背景には好と嫌、興味と必要、自発と強要、得と損など複雑な「意識」「意図」が授け手と受け手の双方にある。よって、「意識」「意図」は上記の分析から導かれた結論としてあるべきであろう。

また、熊木は宇津内ⅡbⅡ式の視覚的属性の中に宇津内Ⅱbの属性と後北C<sub>1</sub>の属性が共存することを指摘し、伝わりやすい性質を持つであろう視覚的属性の内にも伝統的な属性を維持しようとする受け手の意図があるとみる(熊木2018)。この言説では「視覚的」とらえるのは観察者ではなく、当時の土器製作者であろうと思われる。再び述べるが、表出・内在・中間は情報再生における場の共有関係の濃淡について区分したものである。くわえて、内在的諸属性において情報の伝習の場では視覚は重要な感覚として用いられ、かつ、ほかの感覚も動員されていたことは容易に理解できる。よって、情報再生を左右するのは、土器製作者の五感の種類だけではなく、それらを使う状況にもよる。また、観察者にとっては分析対象の属性はほとんどが視覚的属性である。視覚的属性を含む五感による属性区分と「表出・内在・中間的属性」「統合属性・複合属性・単位属性」とは異種の区別である。

表VI-1における②と③の不分明の解明には、類似の属性・単一の属性を取り上げてもなかなか難しい。まず以下では各遺物・遺構の属性について、個々に吟味する。

### 3 表VI-2・3・5～7の表現・体裁について

遺物・遺構における属性転移と諸型式の変容について以前に述べた(鈴木2009b)。前回対象とした表出・内在・中間的属性の項目と提示方法は未だに有効であるが、今回は2019年までの情報に基づいて再検討する。くわえて、前回の間違い・説明不足も修正する。

表の遺物・遺構の属性は属性転移が地域性を示すものを選んだ。表の行方向の内容は、道南・道央・道東の3地域もしくは道東の細分(網走・釧路)ごとに、おもに「複合属性」や「単位属性」について示している。表上欄の行方向はV章において策定した土器型式(土器についての記載では〇〇式期の「式期」を略す)による時間軸(左:古→右:新)を示している。道南では在地系(尾白内→青苗B)・大洞-恵山系(大洞A'→砂沢-下添山→聖山KⅡ)・後北系(後北A→所謂北大)、3系統。道央では在地-後北系(対雁2→江別太1-江別太2→所謂北大)・恵山系(アヨロ1→アヨロ3ab)の2系統。道東の釧路・網走では在地・後北系の2系統。なお、「在地系」とは縄文晩期後葉まで遡る系統を仮称する。桃色の帯は地域において固有の属性で、水色の帯は地域において外来の属性で、薄紫色は固有と外来の合成を示す。

## 2 節 遺物の属性変化

### 1 土器

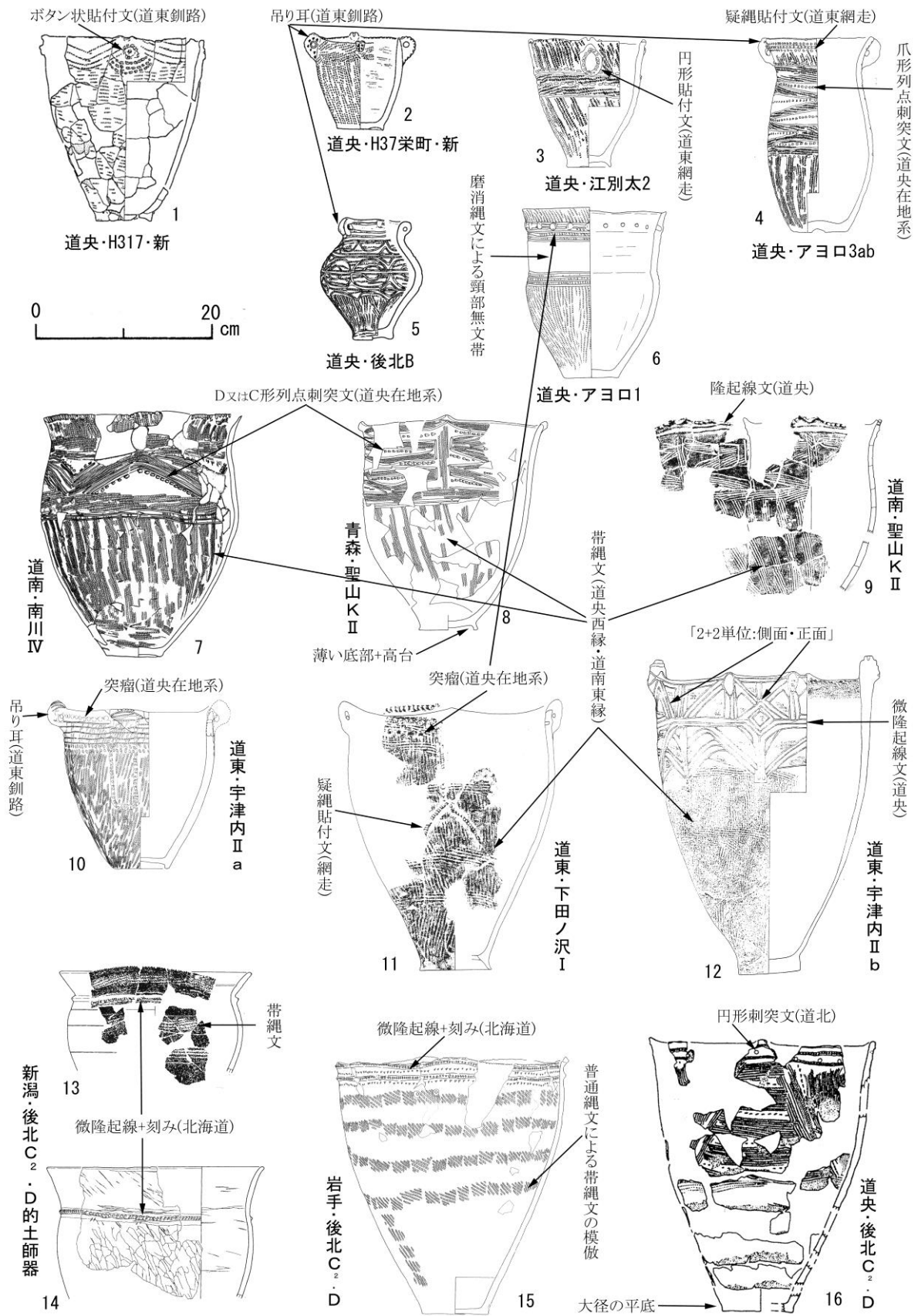
#### a 文様要素

〈道南部起源の要素〉「粘土粒」は大洞-砂沢系の要素で、道央・道東北にはない。特殊縄文を擦り消す「磨消縄文」は下北地方起源の要素であり道南で早くに表れ、道央では恵山系のアヨロ1~2bにみられ、道東北にはない。

〈道央部起源の要素〉「突瘤文(外面から内側への刺突:OI、逆方向の刺突:I0と表記)」のうち、OIは晩期後葉前半、I0は晩期後葉後半に道央で発生し(赤石慎三 2001)、H317には廃れる。道南ではI0・OIが尾白内II~青苗Bにみられ、道東釧路ではI0が下田ノ沢I、道東網走ではI0が元町2~宇津内IIa期にみられる。沈線で帯縄文を縁取る「沈線区画帯縄文」は道央江別太1に発生し、道南恵山系の南川IV~聖山KIIに採用され、道東北にはない。

表VI-2 地域間の属性移動:土器

		縄文										※( )が付く型式は当該地域において器種組成をなさない					
		前葉				中葉				後葉							
		尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)	西栝梗B2	南川III	南川IV (後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大					
文様要素	型式	大洞A <sup>?</sup>	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山													
	要素	粘土粒		下北地方起源の要素									道東起源で道央経由の要素				
道南	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古) (アヨロ1)	H37栄町(新) アヨロ2a	江別太1 アヨロ2b	江別太2	後北A (アヨロ3a)	後北B (アヨロ3b)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
	要素																
道央	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層	興津													
	要素																
道東釧路	型式	緑ヶ岡相当	柴浦一・二群														
	要素																
道東網走	型式	緑ヶ岡相当	柴浦一・二群														
	要素																
擬口縁の傾き・粘土紐接合面	型式	大洞A <sup>?</sup>	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山													
	要素																
道南	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古) (アヨロ1)	H37栄町(新) アヨロ2a	江別太1 アヨロ2b	江別太2	後北A (アヨロ3a)	後北B (アヨロ3b)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
	要素																
道央	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層	興津													
	要素																
道東釧路	型式	緑ヶ岡相当	柴浦一・二群														
	要素																
道東網走	型式	緑ヶ岡相当	柴浦一・二群														
	要素																



図VI-1 属性移動:土器 鈴木 2009b 引用加筆

「DまたはC形刺突文」は道央江別太1に発生し、道南では南川IV～聖山KIIに採用され、道東北にはない。「微隆起線文」は道央後北C<sub>1</sub>に発生し、道南の聖山KIIには口縁部に、道東網走では宇津内IIbの上半部に採用される。なお、所謂北大式の文様要素と東北北部の沈線文土師器の文様要素が類似し、沈線文土師器のそれは出現時期が所謂北大式よりも遅れるのでその影響と考えられている(宇部2007)。

〈道東起源の要素〉「ボタン状貼付文」は道東釧路・興津に発生し、道東網走では元町2～宇津内IIaにみられ、道央ではH317新～江別太1にみられ、道南にはみられない。口縁部波頂につく「吊り耳」は道東釧路・興津に発生し、道東網走では宇津内IIaI～IIbと後北C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>・Dにみられ、道央ではH37栄町新～後北C<sub>2</sub>・Dにみられ、道南では後北B～C<sub>2</sub>・Dの後北系のみみにみられる。「擬縄貼付文」は道東網走の宇津内IIaに発生し、道東釧路では下田ノ沢Iにみられ、道央では突起下の縦位擬縄貼付文として江別太2に初採され、後北C<sub>2</sub>・Dまでみられ、道南では後北B～C<sub>2</sub>・Dの後北系のみみにみられる。

〈道北起源の要素〉後北C<sub>2</sub>・D新に「O形刺突文」が、道東では齊一的に現れ、道央では選択的に現れ(熊木2018)、円刺群X期までみられる。道南・道央・道東では既に廃れている要素であることから、道北部のオホーツク式の十和田式の影響と考えられる。

#### b 底部成形

〈道南部起源の要素〉「薄底+小径+高台」は、道南では恵山系の下添山～聖山KII、道央では恵山系のアヨロ1～アヨロ3abにみられる。「厚底+小径+高台」が道央の江別太1～後北式C<sub>1</sub>にみられる。また、道南の後北A～式C<sub>1</sub>にも「厚底+小径+高台」がみられ後北系の成形備わる。道東網走・道東釧路では無高台の平底・凹底が通有であるが、高台は宇津内IIa・下田ノ沢Iで少数、宇津内IIb・下田ノ沢IIで多数みられが、底径が大きいことから道東固有の成形に、後北系の高台が付加されたと考えられる。

〈道央部起源の要素〉「大径の平底」が後北C<sub>2</sub>・Dに発生し、道南・道東ではC<sub>2</sub>・Dにみられる。

#### c 疑口縁の傾き・接合面(表VI-3)

〈道南部起源の要素〉「内傾」は大洞-砂沢系の要素で、下北地方起源で道南に派生し恵山系に受け継がれ、道南在地系の尾白内II・青苗Bは「外傾」(松田宏介ほか2003)である。道央では縄文晩期後葉後半に「外傾」が始まり、在地系ではH317新～江別太1に恵山系の器形である甕形に「内傾」にみられ、恵山系のアヨロ1～アヨロ3abに「内傾」がみられる。

〈道央部起源の要素〉道央では口縁部の最終の積み上げのみが「外傾」でそれ以下は「内傾」が後北B～C<sub>2</sub>・Dにみられ、道南では後北B～C<sub>2</sub>・Dの後北系に同様がみられる。この成形は、倒鐘形の器形で口縁部が肥厚するものについて多くみられることから、道央では「内傾」へと交替する江別太2以降に、道南では後北A、道東では後北C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>・Dに派生した可能性がある。後北C<sub>2</sub>・D古<sub>2</sub>以降には、後北B～C<sub>2</sub>・Dにみられた口縁端部の最終積み上げの「外傾」はなくなり、休止期を設けない倒円錐台形の器形が「内傾」で成形される。

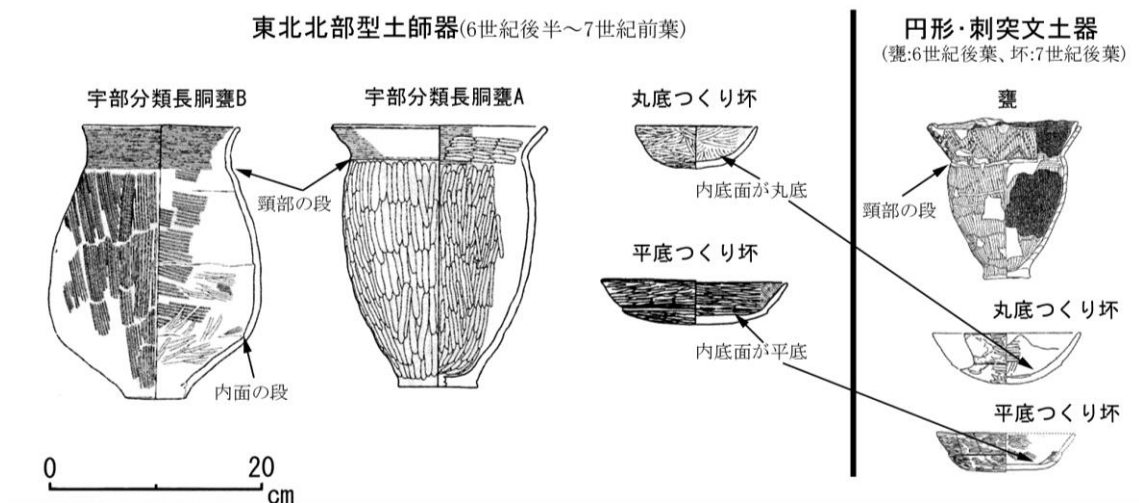
〈東北北部起源の要素〉円刺群VII期以降の深鉢の中には胴部と頸部の境に段を設ける成形が、円刺群XI期以降の坏成形には内底面が丸底の「丸底づくり」と内底面が平底の「平底づくり」の2種類の成形が、出現する(図VI-2)。

この頸部段は、東北南部の住社～栗囲式甕(胴部と頸部の境の段、胴部下半の接合面の段・ケズリ、これらは休止期や分割成形を伺わせる痕跡)に由来する。栗囲式期に東北北部では深鉢にこの技法が導入されて宇部分類の甕A(宇部2005)が発生した。その一方で、東

北北部には住社～栗圀式甕そのものである宇部分類甕Bもある。「丸底つくり：塊状粘土を始発とする」坏の成形は住社～栗圀式に備わる技法である。いっぽう、「平底つくり：円盤状粘土を始発とする」は東北北部で6世紀後半～7世紀前葉に出現し、住社～栗圀式の甕(東

表VI-2の続き

		縄文										*()が付く型式は当該地域において器種組成をなさない				
		前葉					中葉					後葉				
		尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)											
		大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西結梗B2	南川Ⅲ	南川Ⅳ	聖山KⅡ								
		(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大										
文様割り付け	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	口縁部横位分割		頸部無文帯			口頭部横位分割		道央の要素							
	要素	下北地方起源の要素		頸部無文帯			口頭部横位分割		*に同じ		道央の要素					
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	口縁部横位分割		頸部無文帯			口頭部横位分割		突起基点の口縁部縦位分割		*口頭部横位分割+突起基点の口頭部縦位分割		道東と道央恵山系の融合要素			
縄文原体の押捺方法	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	斜位・斜走or縦走-LR		斜位・斜走or縦走-RL			道南東縁～道央西縁起源の要素(鈴木2019)		道央起源の要素							
	要素	横位・斜走-LR		斜位・縦走-RL			斜位・縦走-特殊RL		斜位・縦走-帯RL		斜位・縦走-帯RL+斜位・縦走-帯RL		下北地方起源の要素			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	斜位・縦走-RL		斜位・横走-LR			斜位・縦走-特殊RL		斜位・縦走-帯RL		斜位・縦走-帯RL+斜位・縦走-帯RL		道南東縁～道央西縁起源の要素(鈴木2019)			
最終器面調整	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	ナデ(一縄文)		ナデ(一縄文)+浅鉢などは外面ミガキ			*頸部無文帯・胴部特殊縄文をミガキ(一縄文となる場合もある)		道央起源の要素		東北北部起源の要素					
	要素	下北地方起源の要素		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	ナデ(一縄文)		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
最終器面調整	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	ナデ(一縄文)		ナデ(一縄文)+浅鉢などは外面ミガキ			*頸部無文帯・胴部特殊縄文をミガキ(一縄文となる場合もある)		道央起源の要素		東北北部起源の要素					
	要素	下北地方起源の要素		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	ナデ(一縄文)		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
最終器面調整	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	ナデ(一縄文)		ナデ(一縄文)+浅鉢などは外面ミガキ			*頸部無文帯・胴部特殊縄文をミガキ(一縄文となる場合もある)		道央起源の要素		東北北部起源の要素					
	要素	下北地方起源の要素		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	ナデ(一縄文)		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
最終器面調整	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)									
	要素	ナデ(一縄文)		ナデ(一縄文)+浅鉢などは外面ミガキ			*頸部無文帯・胴部特殊縄文をミガキ(一縄文となる場合もある)		道央起源の要素		東北北部起源の要素					
	要素	下北地方起源の要素		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	ナデ(一縄文)		*に同じ			ナデ(一帯縄文)		オホーツク式起源の要素		先沢ナデ ミガキ					



図VI-2 東北-北海道における属性移動:土器 鈴木 2009b 引用

北北部では宇部分類甕 B)・坏や須恵器と内底面の形態に類似がないことから、古くからある深鉢の底部成形の系統にあると考えられる。北海道では甕 A・「丸底つくり」の坏・「平底つくり」の坏は円形・刺突文土器群の中にある異系統の成形技法であり、現在までのところ八戸地域に類似がみられ、ここからの系譜が求められる(鈴木 信ほか 2007)。

〈道東起源の要素〉道東釧路では内外面側に接合面を持つ「両傾」が緑ヶ岡～興津において主体を占め、道央日高にもみられる(松田宏介 2005・2006)。道東・宇津内-下田ノ沢に「内傾」・「外傾」が見られる。

道東の所謂北大式の中には「外傾」がみられる(北埋文 2011)。「外傾」はいったん途絶する技法なので、並行期のオホーツク式からの影響と推定できる。

#### d 文様割付(表V-2)

深鉢・鉢についての文様割付には、口縁部・頸部などの屈曲部を基線として器体を水平に区分する「横位分割」、口縁部突起を基線として口縁部や口頸部を垂直に区分する「縦位分割」がある。そして、熊木の言う「2+2単位」(図VI-1の12参照)とは対角の突起を一对として側面-正面を強調する分割である(熊木 2018)。

〈3地域に共通の要素〉文様帯が口縁部に偏る割付「横位分割」は口頸部文様帯を形成する。これは各地域とも縄文晩期後葉まで遡る。この割り付けは道東では遅く下田ノ沢Ⅱ・宇津内Ⅱbまで残る。

〈道南部起源の要素〉「口頸部文様帯」は文様帯を口縁・頸部・胴部に三分割し上2部位に施文する。そして、「頸部無文帯」は頸部を横位沈線で区切りそのうちを「磨消縄文」により無文とする。ともに下北半島起源の要素で、道南では恵山系の要素となる。道央ではアヨロ1～3abの恵山系にみられ、道東にはみられない。

〈道央部起源の要素〉「横位分割+縦位分割」は後北Aに発生し、道南では後北A～C<sub>2</sub>・Dの後北系と恵山系の聖山KⅡに、道東では後北C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>・Dの後北系にみられる。

〈道東起源の要素〉「縦位分割」は道東・興津-元町2で発生し、道央では在地系江別太1～後北C<sub>2</sub>・Dと比較的長期にわたって続くが、道東では道央以西に比べて早く廃れる。道南では後北系に伴って見られる。

そして、「2+2単位」の「縦位分割」は道東特有のもので、縄文晩期以来浅鉢・舟形といっ

た器形に用いられる。深鉢・鉢については、釧路では興津に、網走では元町2から存在し、道央では後北A～Bに僅かに認められ(熊木2018)、道南では後北系に伴って見られる。

#### e 縄文原体の押捺方法(表V-3、図V-16参照)

〈道南部起源の要素〉道南では、下北地方起源の要素として「普通回転押捺 LR・RL」と「特殊回転押捺 RL」が大洞-恵山系の大洞A'～南川Ⅲにみられる。道央では「特殊回転押捺 RL」が恵山系のアヨロ1～アヨロ2bにみられる。また、道南東縁～道央西縁の在り系には特殊回転押捺の装飾的運用である「帯縄文 RL」が青苗B新にみられる。

〈道央部起源の要素〉道南東縁～道央西縁ではH37 栄町古に特殊回転押捺から派生した「帯縄文 RL」がみられ、道東では興津・元町2にみられる。「帯縄文・横走 RL+縦走 RL」の装飾的組み合わせは、道央のH37 栄町新～円刺群Ⅳ期に盛行し、円刺群Ⅳ期には帯縄文のほかに普通回転 RL が加わり、円刺群Ⅴ期には普通回転 LR に変わる。道南では南川Ⅳ～聖山 KⅡの恵山系と後北 A～円刺群Ⅳ期の後北系にみられる。道東では後北 C<sub>1</sub>～円刺群Ⅳ期の後北系にみられる。

〈道東部起源の要素〉「撚糸」は、道東ではフシココタン下層～下田ノ沢Ⅱ、栄浦一・二群～宇津内Ⅱaにみられる。道央ではH317～H37 栄町古にみられ、道南にはみられない。

#### f 最終器面調整(表V-3)

〈3地域共通の要素〉下地としての最終器面調整は各地域とも「ナデ」である。

〈道南部起源の要素〉下北地方起源の要素として「ミガキ」があり、道南恵山系の下添山～南川Ⅳにみられる。道央恵山系のアヨロ1～2bにみられ、道東には見られない。

〈オホーツク式起源の要素〉やや光沢のある「ナデ」は、通常の「ナデ」とは異なり、乾燥がある程度進んでから(縄文押捺には不適な時期)の調整である。このような調整は並行期の土師器・続縄文土器には見当たらない技法であるので、円刺群Ⅰ～Ⅴ期に並行するオホーツク式を起源とすると考えられる。

〈道央部起源の要素〉いっぽうで、道央の後北式の拡散によって道南の聖山 KⅡでは器面の「ミガキ」が廃れる。

〈東北北部起源の要素〉施文単位幅が狭く光沢の強い「(棒状工具先端?による) 篋ミガキ」は円刺群Ⅵ期に出現する。刷毛目は篋ミガキの下地であり、円刺群Ⅸ期以降に篋ミガキが胴部以下に限られて頸部以上では下地の刷毛目が最終調整となり、円刺群Ⅹ期以降は全面に刷毛目調整がみられるようになる。円刺群Ⅺ期以降の擦文土器では再び篋ミガキが盛行する。なお、篋ミガキは東北では古墳時代以降に坏類に用いられる調整で、宇部分類甕 Aへの採用は円刺群Ⅵ期に少し遅れる。

#### g 各要素の傾向

〈表出的属性:文様要素・底部成形〉文様要素は道南から・道央から・道東から、と各地域からの属性移動がある。隣接地域へ・隔離地域への移動があり、隔離地域への移動は必ず隣接地域を経る。道南→道央は型式(恵山式)拡散、道央→道南と道央→道東も同様(後北式)である。道東→道央は属性転移(興津式・宇津内式からボタン状貼付文・吊耳・擬縄貼付文)である。ただし吊耳・擬縄貼付文は型式(後北式)拡散に伴って道央→道南に移る(道東→道央→道南の隔離地域への移動)。

底部成形は道南から・道央からの属性移動がある。いずれも隣接地域への移動で、隔離地域への移動はない。道南→道央には、型式(恵山式)拡散と属性転移(恵山式の高台形)が



あり、道央→道南は型式(後北式)拡散である。道央→道東には型式(後北式)拡散と属性転移(後北式の高台形)がある。

〈内在的属性:疑口縁の傾き・接合面(成形の休止)〉疑口縁の傾きは道南から・道央から・同一地域内(道東)での転移・東北北部からの属性移動がある。東北北部からの属性移動(全道へ拡散した所謂北大式に対しているので隣接地域への移動と考える。)は、いずれも隣接地域への移動で、隔離地域への移動はない。道南→道央には、型式(恵山式)拡散と属性転移(恵山系甕に伴う内傾)があり、道央→道南と道央→道東は型式(後北式)拡散である。同一地域内(道東)での属性転移(外傾)はオホーツク式→所謂北大式がある。

東北北部→道南～道東は属性転移(頸部の段=成形の休止、坯の底部成形)である。そして、道南と道央の属性合成(内傾+口縁部のみ外傾)が道央で起こる。

〈中間的属性:文様割り付け・縄文原体の押捺方法・最終器面調整)文様割り付けは道南から・道央から・道東から、と各地域からの属性移動がある。いずれも隣接地域へ移動で、隔離地域への移動はない。道南→道央は型式(恵山式)拡散、道央→道南と道央→道東も同様(後北式)である。道東→道央は型式拡散ではなく、属性転移(興津・元町2から突起基点の縦位分割)がある。そして、道央恵山系と道東の属性合成(口頸部横位分割+突起基点縦位分割)が道央で起こる。

原体押捺方法は、原体撚り・条の走向は表出的属性であるが、押捺方法は内在的属性であり、かつ、特殊縄文・帯縄文の原体撚りは押捺方法によって規制を受ける(鈴木 2019)ので、中間的属性といえる。道南から・道央から・道東から、と各地域からの属性移動がある。道南→道央は型式(恵山式)拡散で、道央→道南も同様(後北式)である。道央→道東には、型式(後北式)拡散と属性転移(帯縄文の一部採用)があり、道東→道央は属性転移(興津式・元町2式からの撚り糸)である。そして、道南と道央在地系の属性合成(帯縄文の誕生)が道南東縁と道央西縁で起こる。

「最終器面調整」は中間的属性であるが器表乾燥の時期選択は内在的である。道南から・道央からの属性移動がある。オホーツク式と東北北部からの属性移動は、全道へ拡散した道央型式(後北C<sub>2</sub>・D～所謂北大式)で生じるので隣接地域への移動と考える。道南→道央と道央→道南とオホーツク式・東北北部→道南～道東はいずれも型式拡散である。

### h 3 属性と複合・単位属性と土器型式の関係

「疑口縁の傾き・接合面」「文様割り付け」「縄文原体の押捺方法」には属性合成が生じており、これらは「複合属性」といえ、属性合成がみられない「文様要素」「最終器面調整」は「単位属性」といえる。そして、「複合属性」は「内在・中間的属性:以下、的属性を略す」にあり、「単位属性」は表出・中間にある。

「複合属性」については、後北式の「文様割り付け」が道南・道東の後北系において採用され、道南の恵山系聖山 KII では遅れて、道東の下田ノ沢・宇津内系には採用されない。後北式の「疑口縁の傾き・接合面」は道南の後北系においてのみ採用されている。道南東縁～道央西縁起源の「斜位・横走・帯縄文 RL」の押捺方法は道南・道央にあり、道東の興津・元町2系に採用される。これらが示すように必ずしも型式分類の「鍵になる属性」とならない。V章 5～7 節で既述したように型式は編年に用いられることが多いため、「経時変化をみる」という目的に偏向した属性の集合でもある。したがって、型式が示す地域差異や型式系統とは、「時の経過」とみなされた結果で、分枝・融合や情報再生や転移の要素が包含されて

表VI-3 属性転移

・合成のかたち

		型式随伴	道南と道央		道央と道東		オホーツクから		東北北部から	属性合成 → 道央で起こる
			道南→道央	道央→道南	道央→道東	道東→道央	→道東	→全道	→全道	
表出	文様要素	○	○	○						
	単独転移				●					
内在	底部成形	○	○		○					
	単独転移	●			●					
中間	擬口縁傾き	○	○		○					道南+道央
	単独転移	●				●		●		
例数	文様割付け	○	○		○					道南+道東
	単独転移			●						
	原体押捺方法	○	○	○						道南+道央*
	単独転移			●	●					
最終器面調整	型式随伴	○	○					○	○	
	単独転移									
		型式随伴	6	6	2	3		1	1	*: 道南東縁～道央西縁
		単独転移	2		2	3	1		1	

\*「型式随伴」「単独転移」についてはVI章4節2項参照

いるかを確認する必要がある。なお、型式の境目に関係しない「表出・内在・中間」や「複合属性・単位属性」は、型式分類に参与せず、系統・情報再生やその転移に関わると理解できた。

なお、宇津内ⅡbⅡ式の中に宇津内Ⅱbの「文様割り付け」と後北C<sub>1</sub>の「文様要素:微隆起線」「縄文原体の押捺方法:帯縄文RL」が共存するという

1節2項での指摘(熊木2018)は、伝統的な「文様割り付け」方法を「鍵になる属性」とした場合に宇津内ⅡbⅡ式という型式が成立するということである。

## 2 石器

続縄文の石器の器種・石材組成についてのまとまった考察は1982年に登場する(上野1982)。また、石鏃の形態に地域性・時系変化が見られることも指摘されていた(内山真澄1998)。近年では道央について(仙庭伸久1998、高倉純2006)や道東について(高倉2009)の考察があり、研究課題についてのまとめがある(高倉2006)。これらを踏まえて考察する。

初めに器種組成について異見があるので述べる。石匙(基部がノッチ)が続縄文にあるか否かであるが、遺構出土遺物をみる限りでは組成しない。道央ではタンネトーL(大洞A式の後半)、道東・釧路では幣舞、道北の例えば浜頓別町ブタウス遺跡(浜頓別町教委2018)は幣舞相当期、道央以東ではほぼ同時期に消滅している。いっぽう道南では類例が少なく確かではないが木古内町大平遺跡(北埋文2016)では大洞A～A'に僅かにみられる。道央以東では石匙のかわりに有柄のナイフ状石器が主要器種であることが縄文晩期後葉には成立していると考えられる。

### a 石鏃の形態

〈3 地域に共通の要素〉二等辺三角形有茎鏃は、道央では晩期後葉・対雁2期までみられ、道東では興津・元町2期までみられる。

〈道南部起源の要素〉道南では狭長の二等辺三角形有茎鏃は大洞-砂沢～恵山系にみられ、恵山系の南川IV期まで残る。道央では恵山系のアヨロ1～2b期と在地・後北系の江別太1～後北A期にみられる。道東にはない。

〈道央部起源の要素〉二等辺三角形平

表VI-4 石器組成の変遷

時期(道央の型式で代表した)		石槍/石銚	石鏃	ナイフ状石器	石錐	挿器	楔形石器	石斧
続縄文・前葉	H37丘珠～H37栄町古・アヨロ1	▲	▲	▲	▲	▲	▲	●
続縄文・中葉	H37栄町新～後北B式		▲	▲	▲	▲	▲	●
	後北C <sub>1</sub> 式		▲	▲	▲	▲	▲	●
続縄文・後葉	後北C <sub>2</sub> -D式		▲	▲	▲	▲	▲	●
	円形刺突文土器群期I～Ⅲ					▲	▲	
	円形刺突文土器群期Ⅳ・Ⅴ					▲	▲	
	円形刺突文土器群期Ⅵ～Ⅷ					▲	▲	
擦文・前期	8世紀代					▲	▲	
	9世紀以降					▲	▲	

基鏃は道央江別太 1 期に発生し、道南では南川Ⅳ～聖山 KⅡ と後北 A～C<sub>2</sub>・D 期にみられる。道東では下田ノ沢Ⅱ・宇津内Ⅱ b 期にみられる。道央における二等辺三角形平基鏃は後北 C<sub>1</sub> 期に長幅比 2:1 以上の狭長になり、後北 C<sub>2</sub>・D 新期には両側縁と基部が凸縁気味の滴形に変わる。後北 C<sub>2</sub>・D 古～中期までは丁寧な調整で素材面がほとんど残らないが、後北 C<sub>2</sub>・D 新期の道央以西では周縁調整が主で素材面が残る滴形が多く、道東では丁寧な調整で素材面が少ない狭長滴形が多い。粘板岩・片岩製の二等辺三角形平基鏃：粗製石鏃(松田 2007)は道央江別太 1 期に発生し、道南では後北 A～C<sub>2</sub>・D 期にみられ、道東ではみられない。

〈道東部起源の要素〉道東では二等辺三角形凹基鏃は縄文晩期後葉～後北 C<sub>1</sub> 期までみられ、道央では対雁 2 期に現れて後北 A 期まで残り、道南ではみられない。

### b 石槍または石鋸の形態

有茎で、その基部調整が後述のナイフ状石器と類似するが、器体軸と尖頭部が同軸に並び、刃部は両面調整で断面が表裏相対する薄い器厚のものである。

〈道南部起源の要素〉道南部では有茎が下添山～南川Ⅳ期にみられ、道央ではアヨロ 1～2 期にみられる。

〈道東部起源の要素〉道東では、凸基が興津/元町 2 期まで、凹基が晩期後葉～下田ノ沢Ⅱ/宇津内Ⅱ b 期にみられる。道央では対雁 2～H37 栄町期にみられる。

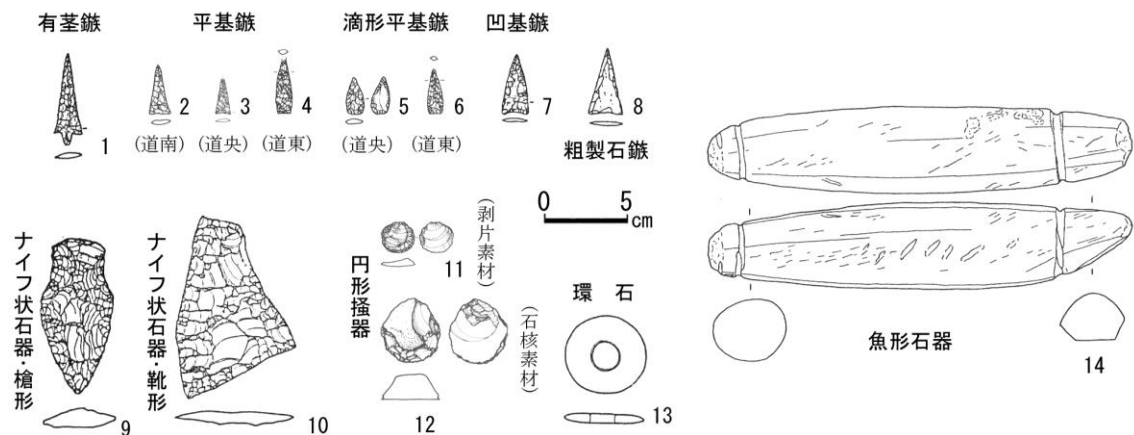
### c 基部両面調整ナイフ状石器の形態

〈道南部起源の要素〉道南では靴形が下添山～南川Ⅳ期までみられ、道央ではアヨロ 1～3a 期までみられ、道東では下田ノ沢Ⅰ・宇津内Ⅱ a 期に極少例ある。

〈道東部起源の要素〉道東では広身柳葉形の槍形は後北 C<sub>1</sub> 期までみられ、後北 C<sub>2</sub>・D 期には小型化・基部片面調整が少数ある。道央でもアヨロ 3a・後北 A 期まで残り、後北 C<sub>2</sub>・D 期には小型化・基部片面調整が少数ある。

### d 小型円形搔器の形態

〈道央起源の属性〉道央では後北 C<sub>2</sub>・D～所謂北大期にみられ、道南・道東でも後北 C<sub>2</sub>・D～所謂北大期にみられる。全道において、後北 C<sub>2</sub>・D 期までは剥片素材が多く石核素材が少量あり、器厚が薄いものが多い。円群刺Ⅰ期以降になると小転礫の石核素材が多く、そのためあって器厚が厚くなる。



図VI-3 言及した石器 鈴木 2009b 引用

表VI-5 地域間の属性移動: 石器

		縄 文										*				
		前葉					中葉					後葉				
		尾白内II	兎野式	青苗(古)	青苗(新)	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
石鏃形態	道南	型式	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	粘板岩・片岩製二等辺三角形平基「粗製石鏃」(松田2007)後北Aから: 道央部起源の要素										後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	二等辺三角形有茎		道東起源の要素					二等辺三角形平基			道央部起源の要素				
	型式	緑ヶ岡/緑ヶ岡	フシココタン下層/栄浦一・二群	興津/元町2	下田ノ沢I/宇津内IIa	下田ノ沢II/宇津内IIb	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大							
	要素	二等辺三角形有茎		道南部起源の要素					二等辺三角形平基			道央部起源の要素				
ナイフ状石器形態	道南	型式	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	靴形										道東起源の要素	道央部起源の要素			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	道東起源の要素		靴形					道南部起源の要素			靴形				
	型式	緑ヶ岡/緑ヶ岡	フシココタン下層/栄浦一・二群	興津/元町2	下田ノ沢I/宇津内IIa	下田ノ沢II/宇津内IIb	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大							
	要素	道南部起源の要素		靴形					道東起源の要素			靴形				
小型円形掻器形態	道南	型式	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	道央部起源の要素?										後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	道東起源の要素		靴形					道南部起源の要素			靴形				
	型式	緑ヶ岡/緑ヶ岡	フシココタン下層/栄浦一・二群	興津/元町2	下田ノ沢I/宇津内IIa	下田ノ沢II/宇津内IIb	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大							
	要素	道南部起源の要素		靴形					道東起源の要素			靴形				
魚形石器	道南	型式	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	道南・恵山系の要素										あり	あり			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	道央在地系土器に供伴する道南・恵山系の要素		あり					道央恵山系土器に供伴する道南・恵山系の要素			あり				
	型式	緑ヶ岡/緑ヶ岡	フシココタン下層/栄浦一・二群	興津/元町2	下田ノ沢I/宇津内IIa	下田ノ沢II/宇津内IIb	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大							
	要素	なし														
剥片石器の石質	道南	型式	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)	下添山	西桔梗B2	南川III	南川IV	聖山KII	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	頁岩多用										頁岩多用+黒曜石	黒曜石多用			
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
	要素	黒曜石多用+頁岩		黒曜石多用+頁岩増					黒曜石多用			黒曜石多用				
	型式	緑ヶ岡/緑ヶ岡	フシココタン下層/栄浦一・二群	興津/元町2	下田ノ沢I/宇津内IIa	下田ノ沢II/宇津内IIb	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大							
	要素	黒曜石多用														

また、東北地方において赤穴式・塩釜式期(後北 C<sub>2</sub>・D 期並行)以降に黒曜石製小型円形搔器が出現する。これは頁岩多用の伝統が途絶した後に当該地で起こった現象であり、北海道産黒曜石も使用されていることから、北海道から東北地方への内在～表出的属性の転移と考えられる(鈴木 2004b、山田晃弘 2008)。

**e 魚形石器**:大型回遊魚対象の疑似釣針軸

〈道南部起源の要素〉道南では下添山～南川IV期にみられ、道央ではアヨロ 1～2 b と H37 栄町～江別太 2 期にみられ、道東には見られない。

**f 剥片石器の石質**

道南では頁岩の多用が晩期後葉以降～南川IV期までつづき、後北 A～B 期では頁岩を多用するが黒曜石の比率が多くなり、後北 C<sub>1</sub> 期には黒曜石を多用する。道央では在地系土器を伴う時期は黒曜岩を多用するが頁石も一定的にあり、恵山系土器を伴うアヨロ 2a～3a 期では黒曜石を多用するものの頁岩の比率が前者よりも増す。双方とも後北 B 期以降は黒曜岩を多用する。道東では一貫して黒曜岩を多用する。

**g 各要素の傾向**

〈表出的属性：石器形態〉石鏃は道南から・道央から・道東からの移動があり、いずれも隣接地域へ移動する。道南→道央は恵山式の拡散と同期し、道央→道南も同様(後北式)である。道央→道東、道東→道央は土器型式拡散と同期しない。

基部両面調整のナイフ状石は道南から・道央から・道東からの移動がある。隣接地域へ移動と隔離地域への移動があり、隔離地域への移動は必ず隣接地域を経る。道南→道央は恵山式の拡散と同期し、道央→道南も同様(後北式)である。道央→道東、道東→道央は土器型式拡散と同期しない。

小型円形搔器は道央からの移動があり、隣接地域へ移動である。道央→道南と道央→道東はともに後北式の拡散と同期する。

魚形石器は道南からの移動があり、隣接地域へ移動である。道南→道央は恵山式の拡散と同期する。

〈内在的属性：素材形態・剥離操作〉道南・道央・道東において、晩期後葉～後北 C<sub>2</sub>・D にかけては剥片素材を主とし石核素材も用いられて、多様な剥離操作が見られるが、円刺群 I 期以降には小転礫の石核素材、両極剥離操作が多く用いられ、素材形態・剥離操作の斉一化が全域において並行的に生じる。

〈中間的属性：剥片石器素材組成〉道南から・道央から隣接地域へ転移する。道南→道央は恵山式の拡散と同期し、道央→道南は後北式の拡散と同期する。

### 3 節 遺構の属性変化

#### 1 住居

当該期における住居のまとまった研究の端緒は、集落の占地・住居平面形の変遷であった(宇田川洋 1982)。その後は 2005 年には道央部の集成とそれについての分析があり(高倉 2005)、2014 年には全道の集成と課題提起がある(松田 2014)。当該期に竪穴の他に浅いくぼみの住居型式が存在し、それが集団の行動様式と連動するという仮説(石井 淳 2005)に

高倉・松田両氏が検証の必要性を指摘している。住居の形と集団行動に因果があるかどうかの前に事例の総括的記述・傾向把握が必要である。

**表VI-6**は2019年までの事例のうち時期が判明しているものの一覧である。**表VI-7**は論考に必要な竪穴の諸要素を示している。

平面形は下端における形であり、幅/長 $\geq 0.8$ :円・隅丸方・方形、 $0.8 >$ 幅/長 $0.5 \geq$ :楕円・隅丸方・小判・方形、 $0.5 >$ 幅/長:長楕円・隅丸長方・小判・長方形とした。付属施設については、出入り口と推定されている「舌状張出し」について、その有無を「○」、その長さを示し、備考にも突起すべき特徴を述べた。柱については、支柱穴の配置について2種類の欄を設けた。炉については、その有無と設置数を「○:1ヶ所あり」「○2:2ヶ所あり」と示し、「○2石囲い:2ヶ所石囲い炉」であり、備考にも突起すべき特徴を述べた。住居内竪穴縁を巡る段状の構造を「ベンチ」状構造といい、その有無を「○」で示した。

**表VI-7**の平面形は、一型式の類例が6例より多い場合は第三位まで示し、5例以下の場合には第一位を丸括弧・緑字で示した。類例数の差が $\times 1.5$ 以上ある場合は不等号を、それ以下の場合には中黒点で繋いだ。「隅 or 方」は隅丸方形または方形を表す。付属施設の下線は当該例が一型式の類例の1/2を占める。「複数」は1住居に2ヶ所以上ある場合をいう。

#### a 住居平面形

道南では円形・楕円形が主体であり、南川Ⅲ期に1例隅丸方形がある。道央では縄文晩期後葉～後北 $C_2$ ・D期にかけて円形が主体で楕円形・隅丸方形があり、アヨロ2b期に円形が主体で、楕円形・隅丸方形が加わる。道東釧路ではフシココタン下層～下田の沢Ⅱ期にかけて、隅丸方形が主体であり、円形・楕円形が加わるが、興津期では主従が逆転し、後北 $C_2$ ・D期には円形・楕円形が主体となる。道東北では縄文晩期後葉～宇津内Ⅱbと後北 $C_2$ ・D期にかけて、方形(方形の増加は宇津内Ⅱaから)・隅丸方形が主体で円形・楕円形が加わるが、元町2期では主従が逆転する。

〈道東北部起源の要素〉平面形の系統を推定するのは難しいものの、方形・隅丸方形の出現は道東北で早く、道央ではほぼ同時、道南・道東釧路では遅れて現れ、晩期後葉～続縄文前葉における道北・道東網走・道東部釧路においては隅丸方形が主体である。以上より方形・隅丸方形は道東北部起源と考えられる。道南・道央の恵山式を組成する遺跡における隅丸方形の出現は道央の晩期以来の土器を組成する遺跡を経由しての現象と考えられる。

#### b 舌状張出し

〈道東部網走起源の要素〉舌状張出しは、道北～道東網走の晩期後葉に出現し宇津内Ⅱb期までと後北 $C_2$ ・D期にみられる。道東釧路ではやや遅れフシココタン下層～下田の沢Ⅱと後北 $C_2$ ・D期にみられる。道央では晩期後葉タンネトーL(千歳市キウス5遺跡・UH101)～後北 $C_2$ ・D期(ただし、札幌市K518遺跡・HP-01の1例)までみられ、アヨロ2b期にもみられる。道南では南川Ⅲ～南川Ⅳ期にみられる。

#### c 柱組構造

各地域とも晩期前葉以降は方格・多角組の上部構造を想定させる支柱穴を竪穴内床面に設けない。少数例外として床面住居壁際・竪穴中央の垂直柱穴がある。支柱穴がないので梁桁の構造ではなく、竪穴外に斜め柱を設ける「外柱構造」の円錐・角錐状の屋根組みであり、壁がない「伏屋」・極めて低い壁が斜立する「伏屋」と推定できる。

表VI-6 堅穴住居一覧

道南統縄文期の堅穴

21	瀬棚町	川尻	堅穴住居跡	南川Ⅲ	河野本道ほか 1962	北桧山町豊岡遺跡発掘調査報告書
22		南川	第1・2号堅穴住居跡	南川Ⅲ	瀬棚町教委 1976	瀬棚南川遺跡
23			第4・6・12～14・16・17号堅穴住居、7・9・15号堅穴/19・20・22号堅穴住居跡、3・10・18号堅穴	南川Ⅲ/南川Ⅳ	瀬棚町教委 1983	瀬棚南川
24	北斗市	茂別	H-3・4・9/2/1/5	西桔梗B2/南川Ⅲ/南川Ⅳ/西桔梗B2～南川Ⅳ	北埋文 1998	
25	函館市	恵山貝塚	遺構7号	西桔梗B2～南川Ⅲ	道埋文 2005	
26			HP-1	西桔梗B2～南川Ⅲ	尻岸内町教委 1984	
27	森町	森川3	F-16	南川Ⅳ	北埋文 2006	
28	室蘭市	エンルムボン	第1・2号住居址	西桔梗B2～南川Ⅳ	大場利夫ほか 1971	室蘭市絵巻遺跡発掘調査概報

道央統縄文期の堅穴

番号	地域名	遺跡名	遺構名	時期	編著者名	刊行年	備考・書名など
1	白老町	アヨロ	第1～3号住居址	F303a	白老町教委	1980	
2		静川22	1/2/4・7号住居 3・5 6	F302a/F302b/F302ab H37栄町 後北B	苫小牧市教委	2002	
3	千歳市	ウサクマイB	BH-1 BH-2・3	H37栄町 江別太2	千歳市教委	1979	
4		千歳神社	pit7	後北C <sub>2</sub> ・D	千歳市教委	1979	続千歳遺跡
62		末広	I H-95	後北C <sub>2</sub> ・D	千歳市教委	1985	末広遺跡(続)
5	恵庭市	南島松4	HP-1	後北A?	恵庭市教委	1991	
6	江別市	旧豊平河畔	1号堅穴住居跡 2号堅穴住居跡 3号堅穴住居跡	F302b 江別太2 後北A	江別市教委	1981	元江別遺跡群
7			5/6・7号堅穴住居跡	江別太1/江別太1～2	江別市教委	1983	豊平河畔Ⅱ
8			11・17/9・18・20号堅穴住居跡	江別太1/江別太2	江別市教委	1984	豊平河畔Ⅲ
9			8・10・13・19号堅穴住居跡	後北A			
9			26・36号堅穴住居跡	F302b	江別市教委	1985	豊平河畔Ⅳ
10			22・23・25・28・32・34/21・34・35・37/26・27号堅穴住居跡	江別太1/江別太2/江別太1～2	江別市教委		豊平河畔Ⅴ
10			29～31・33/39号堅穴住居跡	江別太1/江別太1～2	江別市教委		
10			41号堅穴住居跡	後北A			
11		大麻22	H-1・2	後北C <sub>1</sub>	江別市教委	1994	
12	札幌市	H37・丘珠空港内	第1号堅穴住居跡・第1～6号堅穴住居址	H37丘珠	札幌市教委	1996	
13		H37・栄町地点	第1号堅穴住居跡	H37栄町	札幌市教委	1998	
14		K39・北大人社棟	HP-1・3・7～9・11 HP-4～6・10・12/2	F302b H37栄町/江別太2	北海道大学		北海道大学人文社会教育研究棟→北大人社棟
15		K518	HP01	後北C <sub>2</sub> ・D	札幌市教委	2007	
16		N295	第2～5号堅穴住居跡	F302b	札幌市教委	1987	
17		N30・1次	第2/3号堅穴住居跡	H317/H37栄町	札幌市教委	1998	
18		N30・2次	第1・11～13号堅穴住居跡	F302b	札幌市教委	2004	
18			第5/4・6号堅穴住居跡	H317/H37栄町			
19	石狩市	紅葉山33	HP-1・2	F302ab	石狩市教委	1984	
20	深川市	北広里3	1号住居跡・住居2・3	後北A	深川市教委	1994	

道東統縄文期の堅穴

29	釧路市	幣舞	第12・15/10号住居址	フシココタン下層/興津	釧路市教委	1996	幣舞遺跡Ⅲ
30		興津	第2/3/4/1号住居址	フシココタン下層/興津/下田ノ沢Ⅰ/下田ノ沢Ⅱ	釧路市教委	1978	興津遺跡Ⅱ
31			第5・6・9・10・11/7号住居址	興津/下田ノ沢Ⅱ	釧路市教委	1979	興津遺跡Ⅲ
32		三津浦	第1・2/3号住居址	興津/下田ノ沢Ⅰ	釧路市教委	1976	
62		天寧1	H-4/1・3	フシココタン下層/興津	北埋文	2011	
33	根室市	温根沼2	ⅢH-16/1・2・10・11・12	下田ノ沢Ⅰ/下田ノ沢Ⅱ	北埋文	2019	
34		コタンケン	R3号堅穴	下田ノ沢Ⅰ～Ⅱ	岩崎卓也ほか	1980	北海道東部地区における考古学的調査
35		トーサムボロR1	1号堅穴	興津			
36	標津町	古道第6	20・24/6・10A・11・15・19・21・23・25/17・18号住居跡	フシココタン下層/興津/後北C <sub>2</sub> ・D	標津町教委	2013	
37		伊茶仁孵化場第1	第1号住居跡	興津	標津町教委	1979	標津の堅穴Ⅱ
38	羅臼町	幾田	1・6/2A・4・5・7号住居址 3号住居址	下田ノ沢Ⅰ/下田ノ沢Ⅱ 後北B	羅臼町教委	1989	幾田(2)
39		タツカリウス北岸1	第1号住居跡	興津	羅臼町教委	1986	
40	大空町	住吉	堅穴B・C	宇津内Ⅱa～b	大場利夫ほか	1960	女満別遺跡
41	常呂町	栄浦第一	4E/4B～H・K・4・5A・5B・7A・8・12/4J・4L号堅穴 4A・6E号堅穴	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱa～b 後北C <sub>2</sub> ・D	東京大学	1985	
42			21/14・24H	栄浦一・二/宇津内Ⅱa	常呂町教委	1977	
43		栄浦第二	13号堅穴イ 9号堅穴統縄文堅穴/12号堅穴	宇津内Ⅱa～b 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	東京大学	1972	常呂
44			50a/17・49・51H 16H	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>1</sub>	常呂町教委	1995	栄浦第二・一遺跡
45		岐阜第三	13・20/9・16B・22	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	東京大学	1977	
46		岐阜第二	10号堅穴口/15A・15B号堅穴	元町2/宇津内Ⅱa	東京大学	1972	常呂
47			W22	宇津内Ⅱb	常呂町教委	1977	
48			6・10A/4A・17A号堅穴	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	東京大学	1982	
49		TK67	10・11・13/4/9・12号堅穴	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb/宇津内Ⅱa～b	常呂町教委	1988	
50		常呂川河口	23a/12a・18・18a・21・21a・34・36a/17a・25・29a・31・42aH	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	常呂町教委	1996	常呂河口(1)
51			45aH	宇津内Ⅱb	常呂町教委	2000	常呂河口(2)
52			55・67・68・74/49・49a・52・53・61g・70・72d・74a・76a・79・80/47・47a・57b・58a・61a・61b・65・76H 58/57・69・70・72H	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	常呂町教委	2002	常呂河口(3)
53			94a・110/86・91・92・94～96・96a・106～108・109a・109b・114b・115/83c・99・100・109・114a・117H 83a/83H	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	常呂町教委	2004	常呂河口(4)
54			135/127a・128a・129c・130・132・133・133a/126・126a・127～129・129aH	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	常呂町教委	2005	常呂河口(5)
55			142・148e・155g/148c・149a・151a・155b・155d・166a・172a・173H 144・148a・149・155aH	栄浦一・二/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> ・D	常呂町教委	2006	常呂河口(6)
56			172e・172f/166a・172a・173H 167a/172/167bH	栄浦一・二/宇津内Ⅱb 後北A/後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	常呂町教委	2007	常呂河口(7)
57	斜里町	宇津内A地点 宇津内B地点	6・9・10/2・3・5号堅穴 1～3号堅穴	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 宇津内Ⅱa	斜里町教委	1973	
58		尾河台地	42/3・13・16・19・20・23・29・30・31・35・41/1・2・5～7・9・11・12・14・17・22・24・26～28号堅穴	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	斜里町教委	1983	
59		谷田	PIT120/81・109・111/89・119	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	斜里町教委	1988	
60		オシャマツ川	PIT1	宇津内Ⅱb	斜里町教委	1995	
61		ウトロ	PIT1・4・5・11・121/2・12・22・26・111・158	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	斜里町教委	2011	

表VI-7 堅穴住居諸元

番号	通称名	通称	主体部			外・内廊付真鍮			備考			備考	
			下床幅	短長幅	短長幅	床	壁	柱	梁	天井	床		壁
<b>前編</b>													
<b>西詰棟B2</b>													
24	反側	H-3	4.8	4.2	0.68	円						○石張り	既設の戸
24		H-4	—	5.1	—	円						○石張り	
24		H-9	8.6	—	—	円						○石張り	
<b>南川</b>													
21	川尻	堅穴住居跡	—	—	0.93	(円)						○石張り	
22	南川	第1号堅穴住居跡	7.6	—	—	円	○	2.6				○石張り	
22		第2号堅穴住居跡	9.0	8.4	0.93	円	○	2.5				○石張り	
22		第4号堅穴住居跡	10.1	9.2	0.91	円	○	4.2				○石張り	跡が若干残存
23		第6号堅穴住居跡	10.2	8.1	0.79	円	○	3.1				○石張り	
23		第13号堅穴住居跡	—	2.6	—	円	○	1.6				○石張り	石張りあり?
23		第14号堅穴住居跡	6.8	—	—	円	○	2.5				○石張り	
23		第16号堅穴住居跡	7.8	6.6	0.85	円	○	1.8				—	
23		第17号堅穴住居跡	—	—	—	円	○	—				○石張り	既設の戸
23		第7号堅穴	—	—	—	円	○	—				—	
23		第9号堅穴	5.8	4.6	0.79	圓丸方	○	2.3				—	
23		第15号堅穴	—	—	—	円	○	—				—	
24	西側	H-2	7.2	6.4	0.85	楕円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
<b>西詰棟B2～南川</b>													
25	堤山貝塚	遺構7号	—	—	—	円	○	—				—	
26		HP-1	—	—	—	楕円	○	—				—	
<b>南川IV</b>													
23	南川	第19号堅穴住居跡	6.8	5.5	0.81	楕円	○	2.8				○石張り	
23		第20号堅穴住居跡	8.0	—	—	楕円	○	—				—	
23		第22号堅穴住居跡	8.0	6.7	0.84	不整形	○	2.4				—	
23		第3号堅穴	7.6	—	—	楕円	○	2.3				—	
23		第10号堅穴	6.8	6.8	1.00	円	○	—				—	
24	茂原	H-1	2.4	2.3	0.96	円	○	—				—	
27	美川3	F-16	—	—	—	円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
<b>西詰棟B2～南川IV</b>													
24	茂原	H-5	—	—	—	楕円	○	—				—	
28	エンルムボン	第1号住居	—	—	—	円	○	—				—	
28		第2号住居	—	—	—	楕円	○	—				—	
<b>後編</b>													
<b>H37店庄</b>													
12	H37-丘味変内	第1号堅穴住居跡	5.7	5.2	0.91	方	○	2.6				○石張り	
12		第1号堅穴住居跡	—	4.6	—	楕円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
12		第2号堅穴住居跡	—	5.8	—	楕円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
12		第3号堅穴住居跡	—	5.6	—	楕円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
12		第4号堅穴住居跡	9.0	7.8	0.87	円	○	—				○石張り	明瞭な張り込みなし
12		第5号堅穴住居跡	—	—	—	円	○	—				—	明瞭な張り込みなし
12		第6号堅穴住居跡	8.2	6.6	0.80	円	○	—				○石張り	明瞭な張り込みなし
<b>H37</b>													
17	N30-1次	第3号堅穴住居跡	—	4.9	—	円	○	—				—	入口部跡あり
18	N30-2次	第5号堅穴住居跡	4.5	4.0	0.89	円	○	1.6				○石張り	
<b>H37栗町期</b>													
2	静川22	5号住居	4.4	3.0	0.68	楕円	○	0.7				—	機内の一隅が直線
2		3号住居	5.2	4.5	0.87	円	○	3.4				—	机内方に否状、否状側の一隅が直線
3	クワライB	HP-1	6.4	4.8	0.75	楕円	○	2.4				—	机内方に否状、否状側の一隅が直線
13	HP-1(室町遺跡)	第1号堅穴住居跡	4.4	3.8	0.82	(圓丸方)	○	2.4				—	明瞭な張り込みなし
14	K39-老大人社様	HP-5	—	3.5	—	円	○	—				—	
14		HP-6	—	—	—	円	○	—				—	
14		HP-10	4.3	3.2	0.74	楕円	○	2.5				—	機内方に否状
14		HP-12	—	—	—	円	○	—				—	
17	N30-1次	第2号堅穴住居跡	6.0	5.4	0.90	円	○	—				—	入口部跡あり、重層の跡
18	N30-2次	第4号堅穴住居跡	4.6	—	—	圓丸方	○	1.8				○石張り	機内半1、機内壁2
18		第6号堅穴住居跡	4.7	4.2	0.89	円	○	2.1				—	跡が若干残存
<b>江別1</b>													
7	旧豊平町	5号堅穴住居跡	3.2	2.8	0.88	円						—	
8		11号堅穴住居跡	2.7	2.3	0.85	円						—	
8		17号堅穴住居跡	4.0	3.8	0.95	円						—	
9		22号堅穴住居跡	3.8	3.4	0.89	円						—	中心本主柱
9		23号堅穴住居跡	4.4	4.0	0.91	円						—	中心本主柱
9		25号堅穴住居跡	5.6	4.8	0.96	円						—	
9		28号堅穴住居跡	6.8	5.9	0.97	円						—	否状1・21号9号区画
9		29号堅穴住居跡	4.8	—	—	円						—	跡が若干残存、否状側の一隅が直線
10		29号堅穴住居跡	3.9	3.2	0.82	円						—	否状側の一隅が直線
10		30号堅穴住居跡	2.8	2.7	0.96	円						—	一隅が機内に突出
10		31号堅穴住居跡	6.8	6.0	0.88	円						—	一隅が機内に突出、中心本主柱
10		33号堅穴住居跡	3.4	2.9	0.85	円						—	床面が6.6m幅になる
<b>江別2</b>													
3	クワライB	HP-2	—	—	—	円	○	—				—	
3		HP-3	—	—	—	円	○	—				—	
6	旧豊平町	2号堅穴住居跡	8.1	7.6	0.94	円						—	中心本主柱
6		9号堅穴住居跡	4.0	3.6	0.90	円						—	一隅が機内に突出
8		18号堅穴住居跡	3.9	—	—	円						—	
8		20号堅穴住居跡	9.9	8.2	0.83	円						—	否状1・21号平行にある
8		21号堅穴住居跡	3.3	3.2	0.97	円						—	一隅が機内に突出、中心本主柱
9		34号堅穴住居跡	6.5	5.1	0.78	楕円	○	5.2				—	机内方に長・短の否状が並行にある
9		35号堅穴住居跡	8.4	6.0	0.95	円						—	
9		37号堅穴住居跡	7.1	6.5	0.82	円						—	跡が若干残存
14	K39-老大人社様	HP-2	4.9	4.7	0.96	円						—	否状側の一隅が直線
<b>江別1～2</b>													
7	旧豊平町	6号堅穴住居跡	3.7	3.6	0.97	円						—	
7		7号堅穴住居跡	6.6	5.9	0.89	円						—	1.5m以上の否状
7		26号堅穴住居跡	3.4	3.4	1.00	円						—	中心本主柱
9		27号堅穴住居跡	3.7	3.3	0.89	円						—	中心本主柱
10	旧豊平町	39号堅穴住居跡	4.1	3.4	0.83	円						—	
<b>後北</b>													
5	旧豊平町	HP-1	3.9	3.6	0.92	円						—	ごく短い機内
6	旧豊平町	3号堅穴住居跡	—	—	—	圓丸方	○	2.9				—	
6		8号堅穴住居跡	3.8	3.6	0.95	円						—	
8		10号堅穴住居跡	4.0	3.8	0.95	円						—	
8		13号堅穴住居跡	4.0	3.8	0.95	円						—	
8		19号堅穴住居跡	—	—	—	不整形						—	明瞭な張り込みなし
10		11号堅穴住居跡	7.5	6.4	0.85	円						—	○石張り
11	北富33	HP-9	7.2	4.2	0.58	楕円	○	4.2				—	○石張り
11		住居跡2	2.4	2.1	0.88	円						—	機内方に否状
21		住居跡3	2.3	1.9	0.83	円						—	機内に近い
<b>後北B</b>													
2	静川22	6号住居	2.4	2.4	1.07	(圓丸方)						—	
<b>後北C</b>													
11	大塚22	H-2	4.0	3.2	0.80	円						—	機内に近い、中心本主柱
11		H-1	2.0	1.9	0.90	円						—	機内に近い、中心本主柱
<b>後北D</b>													
4	千歳神社	H117	—	—	—	方						—	機内の面取り
15	K518	HP01	—	4.4	—	圓丸方	○	3.6				—	
62	表北	H-95	3.4	2.9	—	圓丸方	○	—				—	
<b>アヨロ2a</b>													
2	静川22	1号住居	5.6	4.2	0.75	楕円						—	機内面の一隅が直線、長細い
<b>アヨロ2b</b>													
2	静川22	1号住居	7.7	7.2	0.94	圓丸方						—	
6	旧豊平町	1号堅穴住居跡	8.3	8.0	0.96	円						—	
6		24号堅穴住居跡	3.0	2.9	0.97	円						—	
9	旧豊平町	24号堅穴住居跡	6.9	5.7	0.84	円						—	中心本主柱
9		26号堅穴住居跡	6.8	6.3	0.93	円						—	跡が若干残存、長細い
14	K39-老大人社様	HP-1	6.8	6.3	0.93	円						—	○石張り
14		HP-3	—	—	—	円	○	—				—	1.5m以上の否状、否状側の一隅が直線
14		HP-7	4.6	4.4	0.96	円						—	
14		HP-8	2.7	2.6	0.96	円						—	
14		HP-9	4.9	3.9	0.87	楕円	○	6.5				—	機内方に否状
14		HP-11	—	—	—	円	○	—				—	○石張り
16	N295	第2号堅穴住居跡	7.2	5.5	0.76	楕円	○	—				—	○





表 VI-8 地域間の属性移動:住居

		続 縄 文										*( )が付く型式は当該地域において多種組成をなさない						
		前葉					中葉					後葉						
		縄文晩期後葉	尾白内II	兜野式	青苗(古)	青苗(新)	西栲楸B2	南川III	南川IV	聖山KII	(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
平面形	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗(古)	青苗(新)	西栲楸B2	南川III	南川IV	聖山KII	(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	?					(円)	円>橋円・隅or方	橋円・円	?								
	道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
	要素	橋円・隅or方	円・橋円・隅or方		(方)	円>橋円・隅or方	円	円>橋円	(隅or方)	(円)	(隅or方)	?						
	道東	型式	緑ヶ岡	フシコタン下層			興津		下田ノ沢I		下田ノ沢II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
	要素	?	隅or方>円・橋円		橋円>隅or方		隅or方>橋円		隅or方>橋円		隅or方>橋円		(小判)	?				
	道東北	型式	緑ヶ岡相当	栄浦一・二群		元町2		宇津内IIa		宇津内IIb		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	橋円・隅or方	隅or方>橋円・円		円>隅or方・橋円		隅or方>円・橋円		円・隅or方・橋円>小判		隅or方>円・橋円>小判		(小判)	?				
	付属施設	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗(古)	青苗(新)	西栲楸B2	南川III	南川IV	聖山KII	(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
		要素	?					(石囲炉)	舌状・石囲炉・ベンチ		?							
		道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
		要素	舌状	舌状・石囲炉		(舌状・石囲炉)	舌状・石囲炉	舌状	舌状	舌状	舌状	—		—		(舌状)	?	
道東		型式	緑ヶ岡	フシコタン下層			興津		下田ノ沢I		下田ノ沢II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
要素		?	舌状・石囲炉		舌状・石囲炉		舌状・石囲炉		舌状・石囲炉		舌状・石囲炉		(石囲)	?				
道東北		型式	緑ヶ岡相当	栄浦一・二群		元町2		宇津内IIa		宇津内IIb		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
要素		舌状	舌状・石囲炉		舌状・石囲炉・複数		舌状・石囲炉・複数		舌状・石囲炉・複数		舌状・石囲炉・複数		舌状・石囲炉・複数		?			
長軸長平均×短軸長平均(舌状強出しを除く)		道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗(古)	青苗(新)	西栲楸B2	南川III	南川IV	聖山KII	(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
		要素	?					(6.4×5.2)	8.2×7.3	6.6×5.3	?							
		道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大
		要素	?	7.6×6.9		(4.5×4.5)	4.7×3.9	4.4×3.8	6.0×5.6	4.4×3.7	(3.0×3.2)	(3.0×2.5)	(3.4×2.9)	(3.7×3.0)	?			
	道東	型式	緑ヶ岡	フシコタン下層			興津		下田ノ沢I		下田ノ沢II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大	
	要素	?	4.0×2.7		4.3×3.8		4.9×3.9		7.9×6.2		(5.2×4.4)	(4.7×4.1)	?					
	道東北	型式	緑ヶ岡相当	栄浦一・二群		元町2		宇津内IIa		宇津内IIb		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	5.8×4.1	5.3×4.9		4.8×4.4		5.0×4.3		5.5×4.6		(5.6×4.4)	5.8×4.4	?					

#### d 炉の形態

〈道南部起源の要素〉住居内竪穴縁を巡る段状の構造を「ベンチ」状構造といい、これは南川Ⅲ～Ⅳ期の南川遺跡以外ではほとんど見られない。

〈道東部釧路起源の要素〉小判形の長細い炉は興津期に初出することから釧路起源の要素と考えられる。他地域の例は、道東網走の旧常呂町栄浦第一遺跡 40 号竪穴(宇津内Ⅱa 期)の 1 例がある。また近似例は、同遺跡に 70H・83H・148aH・149H・167bH(後北 C<sub>2</sub>・D 期)の 5 例があるものの、これらはやや幅が広い帯状を呈する。

〈道東部網走起源の要素〉石囲い炉の出現は道東網走・道央ではやや早く、釧路でやや遅れ、道南は最も遅い。道央・道南では舌状と共に現れることから、網走起源の要素と考えられる。道南では地床炉の周囲に構造物を設ける例は少なく、道南では南川Ⅲ～Ⅳ期の瀬棚町南川遺跡・北斗市茂別遺跡に石囲い炉がみられる。道央では H37 丘珠～H37 栄町・アヨロ 2b 期に深川市広里 1 遺跡、札幌市 N295・N30・K39・T151 遺跡、余市町大川遺跡など、石狩川流域・日本海側に石組み炉が多くみられる。

複数設置の炉は元町 2 期に初出することから網走起源の要素と考えられる。いっぽう他地域の例は、道東釧路の羅臼町幾田遺跡 2A 号住居跡(下田ノ沢Ⅱ期)の 1 例がある。道央では後北 C<sub>2</sub>・D 期に到るまで住居長軸上に一ヶ所が殆どで、例外として深川市北広里 3 遺跡 1 号住居(江別太 2 期)の 1 例がある。

#### e 規模:長軸長と短軸長

道南の縄文晩期では長軸長平均 5m 以下であるが(宮本長二郎 1996)、南川Ⅲ～Ⅳ期には長軸長平均 6m 以上×短軸長平均 5m 以上で大型化する。道央の縄文晩期後葉では長軸長平均 5.2m×短軸長平均 4.1m あり(高倉 2005)、アヨロ 2a～2b 期では晩期後葉にほぼ近い規模であるが、H37 丘珠～江別太 2 のうち H37 丘珠・江別太 2 期を除くと、長軸長平均 5m 以下×短軸長平均 4m 以下で晩期後葉の規模を下回る。いっぽう。道東釧路では晩期は不詳である。フシココタン下層～下田ノ沢Ⅰ期では長軸長平均 5m 以下×短軸長平均 4m 以下で、下田ノ沢Ⅱ期に大型化する。道北のブタウス遺跡の縄文晩期後葉では長軸長平均 5.6m×短軸長平均 4.1m で、近隣の道東網走では栄浦第一・二群～宇津内Ⅱb 期では長軸長平均 5m 以上×短軸長平均 4m 以上と晩期と同じく大型で後北 C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>・D 期も引き続き大型である。

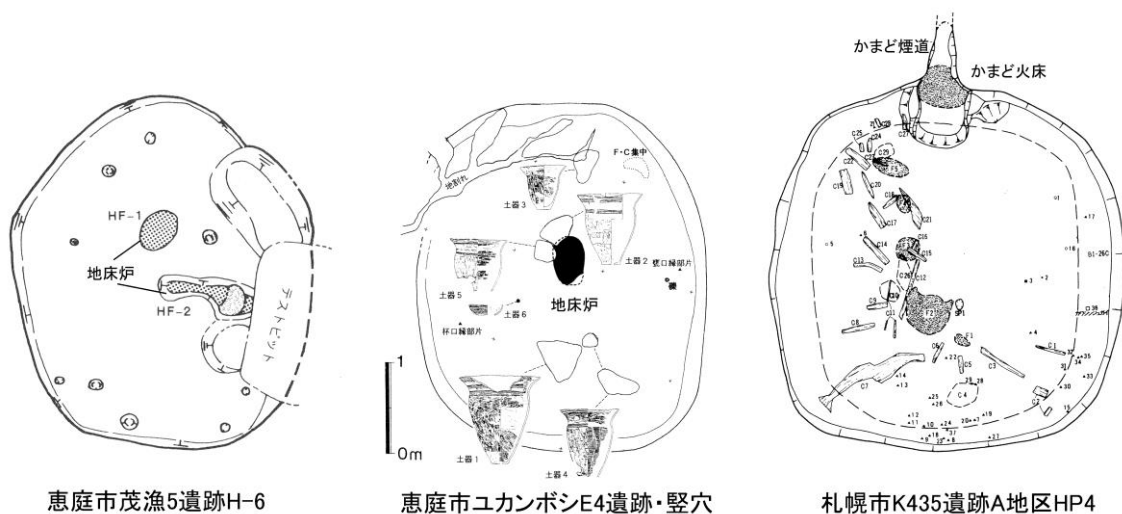
#### f 各要素の傾向

〈表出的属性:平面形〉隅丸方形が道東北部からの属性移動である。隣接地域へ・隔離地域への移動があり、隔離地域への移動は必ず隣接地を経る。道東北→道央、道東北→道東釧路・道央→道南は土器型式拡と同期しない。

なお、所謂北大期の類例は極めて少なく、恵庭市茂漁 5 遺跡 H-6(円刺群Ⅶ～Ⅸ期)楕円形 1 例(図Ⅵ-5 左)(恵庭市教委 1997)のみで、道南・道東における例はない。道央の 8 世紀代擦文期に楕円形の擦文式竪穴住居が少数ある(図Ⅵ-5、中央・右)。当該期の大多数の竪穴は方形・長方形であることから楕円形は所謂北大期の後継と考えられる。

〈表出的属性:舌状張出し〉舌状張出しは道東北からの属性移動である。隣接地域へ・隔離地域への移動があり、隔離地域への移動は必ず隣接地を経る。道東北→道央、道東北→道東釧路・道央→道南は土器型式拡散と同期しない。

〈内在的属性:柱組構造〉円錐・角錐の上屋を想定させる柱組構造は晩期以来、全道で見られる要素であり、これについての属性移動は推定し得ない。



図VI-5 続縄文・擦文の円い竪穴例

〈中間的屬性: 炉の形態〉道南の石囲い炉は、道東→道央で晩期の土器を組成する→道央で恵山式を組成する→道南という属性移動の単系統的なながれが推測されるものの、これは恵山系が発生する道央においては多系である可能性がある。長細い小判形の炉は道東釧路の固有要素、複数設置の炉は道東網走の固有要素で後北 C<sub>2</sub>・D にも引き継がれる。

〈中間的屬性: 規模〉規模の差異を属性移動、規模の一定的継続を属性の固定とみなすことは困難である。ただし、各地期には固有の変動がある。道南では晩期に比べて大型化する。道央では大型化と小型化を繰り返す。道東釧路は小型から大型へ。道北・道東網走は晩期とほぼ同じ。また、地域間比較では道北・道東網走が道央・道東釧路に比べて大きい。

## 2 墓制

当該期の墓制については 3 属性を分析項目としてたびたび述べた(鈴木 2004・2005・2009b・2010・2011)。2010 年では階層性について主に論じた。これについては副葬品を含めて IX 章で言及する。この章では遺構の属性移動についてのべる。

**表 VI-8** は 2019 年までのうち時期が判明している事例で、**表 VI-9・10** は論考に必要な墓の諸要素を示した。**表 VI-9** は主体部と遺体に関わる属性を、**表 VI-10** は付属施設に関わる属性を載せている。

**表 VI-9** は**表 VI-8** にある全事例についてである。平面形は下端における形であり、幅/長  $\geq 0.8$ : 円・隅丸方・方形、 $0.8 >$  幅/長  $0.5 \geq$ : 楕円・隅丸方・小判・方形、 $0.5 >$  幅/長: 長楕円・隅丸長方・小判・長方形とした。

遺体又は遺体痕跡がある場合「○」、判明した埋葬姿勢は全て屈葬・座葬であり、「…屈」は「…屈葬」と例えば「伏臥屈」は伏臥屈葬の略である。年齢・性別は人骨鑑定により明らかになったものを示した。

主体部の「構造」については、後北 C<sub>2</sub>・D 期までは備考欄に示し記載のない場合は「土坑」である。所謂北大期期については欄を設け「土坑」「(土坑で)木蓋」「木槨」の別を示した。ある。「木槨痕跡分類」(図 VI-6 下段参照)については、後北 C<sub>2</sub>・D 期までは備考欄に記載し、所謂北大期については欄を設け分類名を記載した。

**表 VI-10・11** は**表 VI-8** にある全事例のうち当該する属性を持った事例についてである。墓坑直上を覆う外部施設として「積石」があり、それがあがる場合「○」とした。

柱穴様土坑は上屋を支持すると推定される付属遺構で、「個数」はその数で、例えば「4+2」は「4個の組み合わせと2個の組み合わせ」が同一坑底面にある場合をいう。「墓坑における平面位置」は**図VI-6 上段**に示した。袋状土坑は墓坑壁面・底面に水平・斜めに設けられた供献用小坑で、墓坑長軸側や遺体頭側に設けられる。

「個数」はその数で、例えば「並列3」は水平方向に3基並んで、「上下2」は垂直方向に2基並んで、設置されていることを表す。

「垂直位置」は墓坑断面における袋状土坑の設置位置で「坑底」「底・壁の境:坑底と壁面の境」「壁面」に区分される。

「墓坑・柱穴に対する平面位置」は、下端平面形に長短軸が設定できる場合に記述可能である。長軸方向において袋状土坑が備わる面を正面としたときに「…軸」の左側・右側・軸上と呼ぶことができる。なお、円形における位置関係は長短軸がないので不明。

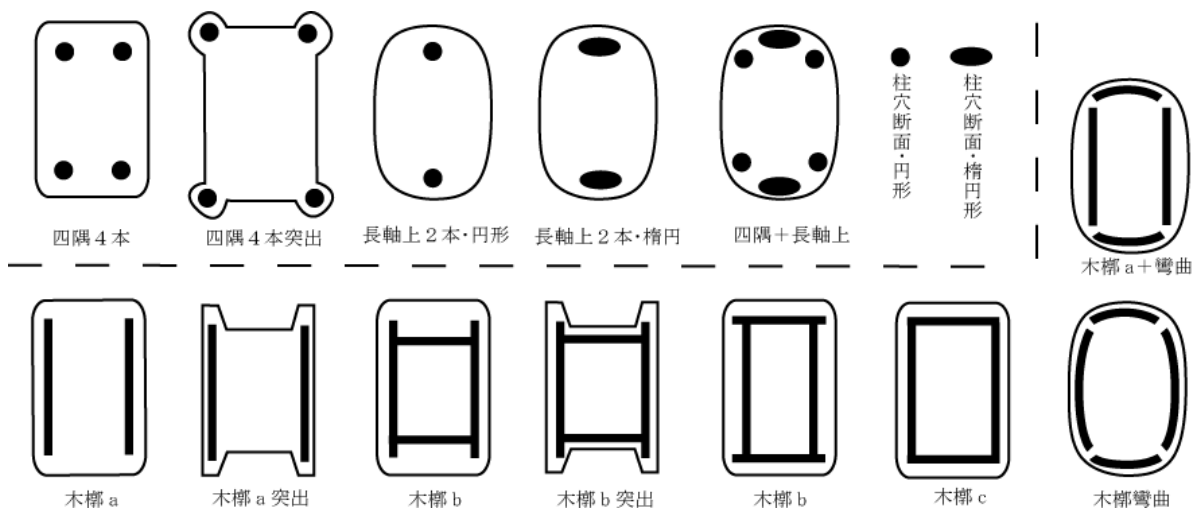
「遺体に対する平面位置」は、遺体と正対して俯瞰した時の位置であり、「頭上」は頭蓋-足軸上の頭側に位置する「坑底」「底・壁の境:坑底と壁面の境」「壁面」に設置されていることを示す。

「掘削方向」は墓坑断面における袋状土坑の掘削方向で「斜:斜め下方向」「横:水平方向」「下:垂直方向」である。

所謂北大期の「内容物」は土坑中に供献されたものを記載し、土器につく丸括弧はV章7節5項の円形・刺突文土器群の細分類名で、例えば「甕小1(III d)」とは北大III d類の小型甕1個、斜字体は袖珍土器である。後北C<sub>2</sub>-D期の「内容物」は備考に記載した。

礫は坑底に置かれる礫(**図VI-7 左側参照**)で、「S」は南川葬法(頭側に供献土器、足側に1個の礫を置く葬法)、「U」はウサクマイ葬法(頭側に袋状土坑、頭部両側に2個1対の礫を置く葬法)、後ろの数字は個数。

平面形は、一型式の類例が6例より多い場合は第三位まで示し、5例以下の場合は第一位を丸括弧でくくり緑字で示した。類例数の差が×1.5以上ある場合は不等号を付け、それ以下の場合には中黒点で繋いである。「隅 or 方」は隅丸方形または方形を表す。



図VI-6 柱穴様土坑(上段)・木樁(下段)分類 鈴木 2005b 引用

表VI-9 墓一覽

道南・初頭～後北式期

番号	地域名	遺跡名	遺構名	時期	編著者名	刊行 年	書名
73	室蘭市	絵新	A地区pit4・I地区pit8/I地区pit1・3・4・9/A地区pit6/A地区pit2・5/A地区pit1・7・12・I地区pit2・5・7	アヨロ2a/アヨロ2b/南川IV/アヨロ2～南川IV	室蘭市教委	1971	
74	伊達市	南有珠6	墓坑	アヨロ1～2	札幌医科大学	1983	
75		南有珠7	GP001・0011・0015・0021/005/002～4・6～10・12・16・23	アヨロ1a/アヨロ2a/アヨロ1a～2a	伊達市教委	1984	
76		有珠モシリ	4/7・10号墓	アヨロ2b/南川IV	伊達市教委	2003	
77	八雲町	栄浜1	P-20	後北B	北理文	2002	
78	森町	薙ノ木	UP2/1・18～23・30・34・121/35・36,USP1	後北A/後北B/後北C <sub>1</sub>	森町教委	2008	森町埋蔵文化財報告書14集
79			6～8号土坑	後北B	森町教委	2008	森町埋蔵文化財報告書15集
80	恵山町	恵山貝塚	遺構2(名取19号墳墓)/遺構4・6・12	アヨロ2a/アヨロ1～2	道理文	2004	恵山貝塚
81			5・8・18/2・7・9・19/3・12/1・4・10・11・13/6・14～17号墳墓	アヨロ1a/アヨロ2a/アヨロ2b/アヨロ1～2/アヨロ1～3	名取武光	1960	北方文化研究報告15
82	七飯町	桜町	61/23/74/35/1・2・10～12・14・19・20・24・27・31・33・34・40・41・44・46～49・54・62・63・67/6・7・9・16・21・29・36・51・52・60・68/55P	アヨロ3/聖山Ⅱ/後北B/後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D/後北C <sub>1</sub> ～C <sub>2</sub> ・D/赤穴式	七飯町教委	2000	
83		国立療養所裏	P2・4・7	後北C <sub>2</sub> ・D	七飯町教委	2000	
84	函館市	西橋楼E <sub>2</sub>	墓塚	後北C <sub>2</sub> ・D	函館開港事業団	1974	
85		石倉貝塚	P-2・4・15・18・19・21	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	1996	
86	上磯町	茂別	X-13/X-3・8・9・14・15・17・18・24・26,P-61・110・112/X-1・2・5・7・12・16・20・21・28,P-101/X-10・11・19・22・23・25・27,P-38・53・57・77,P-121	アヨロ1a/アヨロ2a/アヨロ2b/アヨロ2	北理文	1998	
			X-6	アヨロ3			
87	松前町	白坂第4地点	P-1・2・3・4	後北C <sub>2</sub> ・D	松前町教委	1983	白坂
88	乙部町	緑町2	14号土坑	後北C <sub>2</sub> ・D	乙部町教委	1989	
89	せたが町	南川	4/1～3・5・6・10・12～15・17～20/7～9・11・21 16号墓坑	南川Ⅲ/南川IV/アヨロ2b～南川IV	南川遺跡調査団	1976	瀬瀬南川遺跡
90			25・27/22～24・40・45・46・57・68・84～91・94～96・106～117・122・134/44・80・148号墓坑	南川Ⅲ/南川IV/南川Ⅲ～南川IV	瀬瀬町教委	1983	瀬瀬南川

道央・初頭～後北式期

番号	地域名	遺跡名	遺構名	時期	編著者名	刊行 年	書名
1	白老町	アヨロ	墓22・24・26・106・110・115・301・307/1・2a・3・15・16・30・109・111・201・204・304/4b・5・8・11・18・25・101・103・108・203・205/23・32・303・土坑33 墓105	アヨロ1/アヨロ2a/アヨロ2b/アヨロ3a 後北B	白老町教委	1980	
2	苫小牧市	タブコブ	大場1号墳/GP-17/27・29・30・36・38/31・39・40 GP-2/GP-18/GP-7・8・10・11・12・13・14・20・21・24・25・28・33,P-8・13	H37栄町/アヨロ1/アヨロ2a/アヨロ2b 後北B/後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	苫小牧市教委	1981	
3		静川22	G-4・13・16/5・15 G-9/12・21/14	アヨロ1/アヨロ2a H317/H37栄町/江別太2	苫小牧市教委	2002	
4	厚真町	ショロマ3	ⅢGP-01	後北A	厚真町教委	2014	ショロマ3遺跡
5	釧路町	汐見	1号墳墓第1～6墓穴/2号墳墓第1墓穴 *商溝・盛土あり	H37栄町/H37栄町?	北海道大学	1964	北方文化研究報告19
6	門別町	トニカ	1～3号pit	H317	門別町教委	1979	日高門別町の先史遺跡
7	新冠町	大狩部	1～7号ピット	H37丘陵	古代学協会	1961	古代学9巻3号
			8～10・12～14号ピット	H37丘陵	静内高校	1961	せいゆう 6
8	三石町	旭町1	SP-139・140・178・189・190・212	H37丘陵	北理文	1983	
9	浦河町	白泉	6・12・13/1～5号ピット 9/10号ピット	H317/H37栄町 後北A/後北B	浦河町教委	1969	浦河町の遺跡
10	千歳市	ウサクマイ	I P-25	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	2001	
11		ママチ	P-116	後北B	北理文	1983	
12		末広	I P-102	後北C <sub>2</sub> ・D	千歳市教委	1981	末広遺跡(上)
13			I P-31	後北C <sub>2</sub> ・D	千歳市教委	1982	末広遺跡(下)
14		トメト3	I P-17・39/46	後北C <sub>2</sub> ・D/赤穴	千歳市教委	2004	
15		オサツ2	GP-5・6・7・8/GP-1・2・3	後北A/後北B	北理文	1995	
16		キウス5	P419	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	2009	西島松5(6)
17		キウス7	UP-3・4・9・13・20・21・23・28・38・47・53	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	1996	
18	恵庭市	柏木B	第268/3・17・36・38・39・43・48・52・59・60・67・71・76・78・80・106・115・118・140・141・151・152・158・177・189・190・202・207・208・213・216・218・222・234・239・241・242・247・265・271・280・290・302・309・314・316・327・339・346・385・395・402・416・435号土坑墓	後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> ・D	恵庭市教委	1981	柏木B遺跡
19		柏木川13	P26	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	2004	柏木川13
20		西島松5	P-419	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	2009	
21		西島松2	P-46 P-129・314・492・806・1054・1207	H137 後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	2010	西島松2
22		カリンバ4	55・56・70・71号土坑	後北C <sub>2</sub> ・D	恵庭市教委	2001	カリンバ4遺跡Ⅲ
		茂漁6	P-1・9・15・16・22・26	後北C <sub>2</sub> ・D	恵庭市教委	2000	
23	江別市	西野横12	P-49・66・75	後北C <sub>2</sub> ・D	北理文	1989	
24		萩ヶ岡	墓109/112	後北A/後北B	江別市教委	1982	
25		町村農場1	P-44	H137	江別市教委	1994	町村農場1(3)
26		町村農場2	P-110・111 P-115・128・140/P-54・55・70 P-35	江別太2 後北A/後北C <sub>2</sub> ・D	江別市教委	1995	町村農場2(2)
27				江別太2	江別市教委	1994	町村農場2(4)
28		高砂	P-358	H317	江別市教委	1989	高砂(5)
29			P-478・482	H37丘陵	江別市教委	1990	高砂(6)
30			P-629・693/630	H37丘陵/H317	江別市教委	1991	高砂(8)
31			P-876・880	H317	江別市教委	1991	高砂(9)
32			P-914	H37丘陵	江別市教委	1992	高砂(10)
33			P-1195	H37栄町	江別市教委	1998	高砂(15)
34			P-1231/1290	H37丘陵/H37栄町	江別市教委	1999	高砂(16)
35				H37丘陵/H37栄町	江別市教委	1999	高砂(16)
36		元江別1	墓1・43・2・13・16・34・38・39・46・62・66・67・68・73/19・21・48・53・56・59・72/15 墓47/14・18・44・45・51・58・61・64 P-77	アヨロ1/アヨロ2a/アヨロ2b/アヨロ3a H317/H37栄町	江別市教委	1981	元江別遺跡群
37				江別太1	江別市教委	1988	元江別1
38		元江別10	P-33	後北C <sub>2</sub> ・D	江別市教委	1989	
39		旧豊平河畔	P-6・9 P-7	H37丘陵/江別太1 後北A	江別市教委	1981	元江別遺跡群
40			墓1・18/10・23・24 墓5・6	アヨロ2a/アヨロ2b 江別太1	江別市教委	1983	豊平河畔Ⅱ
41			土坑97/91 土坑126/85・102 土坑36	アヨロ2b/アヨロ3a H37栄町/江別太2 後北A	江別市教委	1984	豊平河畔Ⅲ
42			墓135・142・155/132・174・186 墓133・156・164・165・166・168・171・175・176・178・179・180・182・183・184・185・187・188/137	江別太1/江別太2 後北A/後北C <sub>2</sub> ・D	江別市教委	1985	豊平河畔Ⅳ
43			土坑8・126-7 土坑8・130-1	アヨロ2b 江別太1	江別市教委	1986	豊平河畔Ⅴ
44		七丁目沢4	P-49	H317	江別市教委	1989	七丁目沢4(2)
45		七丁目沢6	P-138・167 P-560	H37丘陵 H317	江別市教委	1998	七丁目沢6(5)
120					江別市教委	2007	七丁目沢6(11)

表VI-9の続き

道央・初頭～後北武期(続き)

番号	地域名	遺跡名	遺構名	時期	編著者名	刊行年	書名
46	江別市	大麻21	P-44	後北C <sub>2</sub> -D	江別市教委	1988	大麻21(2)
47		大麻3	P-76・122・129/128	H37丘陵/H37栄町	江別市教委	1998	大麻3(6)
48		大麻3	P-106/240	H317/H37栄町	江別市教委	1999	大麻3(7)
49	札幌市	S153	第91号ピット	7302b	札幌市教委	1976	
50		S354	第253/68・200・225・380・421・456・457・474・476・490・502・528・539・600・601・616・673・749・781号ピット 第4号ピット	後北A/後北C <sub>2</sub> -D			
51		T361	P701・27・34・36・47・48・54	後北C <sub>2</sub> -D	札幌市教委	2014	S354・3次
52		K135	第19・42・97・100・114号ピット	後北C <sub>2</sub> -D	札幌市教委	1987	
53		C551	3PT01-02	後北A	札幌市教委	2016	
54		K135	6PT01	後北C <sub>2</sub> -D	札幌市教委	2005	K135・4次
55		N199	第2・19号ピット	後北C <sub>2</sub> -D	札幌市教委	1977	
56		N295	第13・36号ピット 第1・25/27号ピット	7302b 江別太1/江別太2	札幌市教委	1987	
57	石狩市	紅葉山33	7号堅穴 3号堅穴 GP-62/1・51・52・54/3・5・22・26・27・37・38・43・50・53 GP-57・2・42・56・59・63/19/55・46	H317 江別太1 7301/7302a/7302b H317/H37栄町/江別太1/江別太2	石狩市教委	1975	
58		ワッカオイ・A	第2・3・5土坑墓	後北C <sub>2</sub> -D	石狩市教委	1975	
59		ワッカオイ・D	第1・2・3・9・11・14・15・16・17・20土坑墓・5号土坑	後北C <sub>2</sub> -D	石狩市教委	1976	
60			第21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・32・33土坑墓	後北C <sub>2</sub> -D	石狩市教委	1977	
61	芦別市	滝里4	P-5	H317	北埋文	1998	
62		滝里安井	P-45	H317	北埋文	1999	
63	小樽市	チフタシナイ	3-9A・B	後北C <sub>2</sub> -D	小樽市教委	1992	
64		餅屋沢	9・39A・39C・44B・45A・45F・45H・46B・47A・10・36C・37A・38A・38D・39B・40A・44A・44B・45B・47A・11・36C・36F・11・37A・37D・37J・38A・38D・39C・39E・39F・40A・41A・41B・43A・45C・46H・47C・48B・48L・49A・12・37C・37F・38A・38C・38E・G・39G・40F・41F・H・45A・45C・13・39A・42・39F・40A・40D・40E・40F	後北C <sub>2</sub> -D	小樽市教委	1991	大川Ⅰ
65	余市町	大川	GP-85・195/82・120/27・28・72・75・100・107・109・116・123・125・175・425/21・163・243・359・373・375・378・400・457・489・546・548・590/422 GP-218/390/179・518/88・200 GP-142/GP-7・110 GP-676・686・853/620・711・720・729・856・941/623・948 GP-944/945・916 GP-854・922 GP-87・91/20・42・78・79・89・105・131・133・348A/118・348B・372・448・454・593	7301/7302a/7302b/7303a/7303b H317/H37栄町/江別太1/江別太2 後北B/後北C <sub>2</sub> -D 7302a/7303a/7303b H37栄町/江別太1/江別太2 後北A 7302a/7302b/7303a	余市町教委	2000	大川Ⅱ
66			GP-68(迂回)/P-9(遺道) *以下、迂回・遺道と表記 P-126(遺道)/77(迂回)/83・84・98(遺道)/89(迂回)/76・91・104・122・128(遺道)/118(遺道) P-34(服部地点)/100(遺道)/P-95(迂回) P-63(遺道)/P-88・93(遺道)/P-94(遺道) P-135・153・155・166・182B・188・208/140・148・154・176・177・201・207(遺道)/P-112・116・117・120・129・131・134(迂回)/P-143・144・149・151・157・160・163・165・170・171・175・180・182A・183・184・187・192・196・199・203・204・205・206(遺道)/P-118(迂回) P-97・98・103・104・107・138(迂回)	7301/7302a/7302b/7303a H37栄町/江別太1 7301/7302a/7303a H37栄町/江別太1 7301/7302a/7302b/7303a H37丘陵/H37栄町/江別太1 後北A/後北B後/北C <sub>2</sub> -D 7301/7302a/7302b/7303a	余市町教委	2000	大川Ⅲ
67				後北A	余市町教委	2001	大川Ⅳ
68				7301/7302a/7303a	余市町教委	2001	大川
69				H37栄町/江別太1	余市町教委	2002	大川
70				7301/7302a/7302b/7303a H37丘陵/H37栄町/江別太1 後北A/後北B後/北C <sub>2</sub> -D 7301/7302a/7302b/7303a	余市町教委	2004	大川
71				後北C <sub>2</sub> -D			
72		天内山	8/2・6号墳墓	後北B/後北C <sub>2</sub>	余市町教委	1971	天内山

道東・初頭～後北武期

番号	地域名	遺跡名	遺構名	遺構の時期	編著者名	刊行年	書名など
91	浦幌町	十勝若月太	土坑57/44-61 土坑86/23・24・26・29・34~36・59・65・82・84・85・89・98・101	フシコタン下層/下田ノ沢Ⅰ 後北B/後北C <sub>2</sub>	浦幌町教委	1975	
92	池田町	池田3	P9-22・37・49	興津並行	池田町教委	1994	
93	銅路市	幣舞	第77・79・80・82・87・90/14・26・35・42・49・52・57・65・67・69・83・89/12・15・16・18・21・23・28・32・47・53・55・61・62・64・66・73・74・76・78・84・85・88号墓	フシコタン下層/興津/フシコタン下層～興津	銅路埋文	1994	
94	銅路市	幣舞	第97・100/第99号墓	フシコタン下層/フシコタン下層～興津	銅路埋文	1996	
95	銅路市	材木町5	53号土坑	下田ノ沢Ⅱ	銅路埋文	1989	
96	銅路市	興津	第19・22・51・54号ピット	興津	銅路埋文	1978	
97	銅路市	興津	第55・58・62・66・81・86号ピット	興津	銅路埋文	1979	
98	根室市	温根沼2	ⅢP-14	下田ノ沢Ⅰ・Ⅱ	北埋文	2019	
99	標津町	古道第6	P2-6~8・13・14・18・21・26・27・29・34/3	興津/下田ノ沢Ⅱ	標津町教委	2013	
100	浜頓別町	ブタウス	GP04-07・08・11	宇津内Ⅱa	浜頓別町教委	2014	ブタウス(Ⅱ)
101	常呂町	栄浦第一	ピット17・30/57c・58a・45/16a ピット2a	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> -D	東京大学	1985	
102	常呂町	栄浦第二	7堅穴ロ号/11号堅穴ピット3・12号堅穴ピット 7堅穴ハ号	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> -D	東京大学	1972	常呂
103	常呂町	岐阜第三	14号堅穴ピット3 16号堅穴ピット1・2	宇津内Ⅱa 後北C <sub>2</sub> -D	東京大学	1977	
104	常呂町	岐阜第二	2号堅穴南ピットA	後北C <sub>2</sub>	東京大学	1972	常呂
105	常呂町	岐阜第二	10号西ピット2・10号西ピット11・17号Bピット34 東斜面ピット28	宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub>	常呂町教委	1982	
106	常呂町	TK67	東側ピット32・39・44・79/西側ピット51	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	常呂町教委	1988	
107	常呂町	トロロチャシ南尾根	14号堅穴ピット2 14号堅穴ピット1	元町2? 後北C <sub>2</sub> -D	常呂町教委	1976	
108	常呂町	トロロチャシ	XVI-18ピットa・b・c、XIII-21ピット、XVI-17ピット	後北C <sub>2</sub> -D	東京大学	2001	
109	常呂町	常呂川河口	P-95・121/246a・252・260・261・262ab・263a・267・272/22a・24・44a・122a・132・133 P-20・22・23・25・31・32・34・37・38・46・117・130・143・157・300/105・253 P-306	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> /後北C <sub>2</sub> -D 後北B	常呂町教委	1996	常呂川河口(1)
110	常呂町	常呂川河口	P-328・328ab・329・338a・343/329a・370a・409a・411・470/370・371a・372・373・391・404・405・459・482・494 P-327/389	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北A/後北C <sub>2</sub>	常呂町教委	2000	常呂川河口(2)
111	常呂町	常呂川河口	P-646・654b・661a/541a・542d・577a・635・641/541b・545・608・634・649/601・636 P-610・665/590・595・596・598・599・700 P-788a/P-705・719・829/722・737・766・866 P-890/899/704・709・738a・772・808	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> /後北C <sub>2</sub> -D 後北B/後北C <sub>2</sub> /後北C <sub>2</sub> -D	常呂町教委	2004	常呂川河口(4)
112	常呂町	常呂川河口	P-937・1013・1023・1046a/941・1006b/1012 P-900・901・902・908a・920・930a・934・940c・954・971・975・984a・986・988・988a・990・994・997・1010・1025・1074	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> -D	常呂町教委	2005	常呂川河口(5)
113	常呂町	常呂川河口	P-1209・1210・1232・1233a・1418/1272・1281・1428/1276・1332・1405・1431/1219・1282a・1408 P-1350・1351・1353/1229・1233・1247・1278・1461	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> /後北C <sub>2</sub> -D	常呂町教委	2006	常呂川河口(6)
114	常呂町	常呂川河口		元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb 後北C <sub>2</sub> /後北C <sub>2</sub> -D	常呂町教委	2007	常呂川河口(7)
115	常呂町	常呂川河口		宇津内Ⅱb	斜里町教委	2001	
116	斜里町	トール沼1	PT8	宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	斜里町教委	1983	
117	斜里町	尾河台地	5・6・11・12・13/7・15号墓	宇津内Ⅱb	斜里町教委	1988	
118	斜里町	谷田	PT106	宇津内Ⅱb	斜里町教委	1988	
119	斜里町	ウトロ	PT174/21・38・68・176/164・173・185・187	元町2/宇津内Ⅱa/宇津内Ⅱb	斜里町教委	2011	

表 VI-9 の続き

円形・刺突文土器群(所謂北大式)期の墓

番号	地域名	遺跡名	遺構名	時期	著編者名	刊行年	書名
1	八雲町	オクツナイ2	1・4・6/2・5土坑	X/VII-X	八雲町教委	2004	
2	厚真町	朝日	P-14・17・18・20・25	I-V	北埋文	2015	
3	平取町	ユオイチャシ跡	III P-1・2	VII	北埋文	1986	
4	千歳市	ウサクマイB	第1号土坑墓	不明	千歳市教委	1974	
5		ウサクマイA	墓坑64・8/63・4/63・2/63・1・63・5・64・4	VI/VII-X/IX-X/X	ウサクマイ遺跡研究	1975	
6		ウサクマイN	P-31	VI	北埋文	2001	
7		末広	I P-27/42・44	V/不明	千歳市教委	1981	末広遺跡(下)
8		イヨマイ6	I P-9/5	VII/VIII	千歳市教委	1989	
9		ユカンボンC9	P-1	X	北埋文	1996	
10	恵庭市	ユカンボンE5	GP-1	VII	北埋文	1993	
11		ユカンボンE7	P-31/1・28・40/21・37・42・48/29・38・46・47/26・27/19/34/18・20・32・35・36・41・43	VI-VII/VIII-VII-VIII/VIII-VI/IX/IX-X/VII-X	北埋文	1999	
12		カリンバ2	第40・70/33/54/41・44/55/27・30・37・38・45・47・51・53・58・59・61・66-68号土坑墓	VI/VII/VIII-VII-VIII/VIII-VI-VII	恵庭市教委	1987	
13		カリンバ4	60号土坑	I-V	恵庭市教委	2001	
14		柏木B	第55・212/65・66・69号土坑墓	II/IV	恵庭市教委	1981	
15		茂瀬6	P-13・49/23・40	I-III/不明	恵庭市教委	2000	
16		茂瀬チャシ	第一・二号墳墓	VII-IX	後藤寿一(注)	1934	考古学雑誌24-2
17		西島松5	P-66/15・22・55・83・128・131/2・3・5・6・8・11・23・27・30・68・130・203/1・33・73・89・132・143/93・98・99・103・129・146/39/19・96・125/4・12・14・16・17・20・21・75・76・84・85・86・97・102・145/7・9・24・28・29・48・51・52・61・70・80・87・94・100・120・121・126・127・139・179・207/98	VII/VIII/IX/VII-VIII/VIII-IX/IX-X/X-XI/VII-X/VII-X I/VII-X	北埋文	2002	
18			P-514	VII-VIII	北埋文	2009	
47	長沼町	鏡内D	P-145・163・171・53・101/144/174・194/44・148・159/19・51・142・181/182/24・25/31・46・92・155・157/100・113・131・140・180/114/63	I/V/I-II/II-III/II-IV/IV-V/I-III/I-IV/I-V/II-V/V-VII/VII-VIII	北埋文	2014	
19	江別市	高砂	P-244・245	VI	江別市教委	1988	高砂(4)
20			P-360	V-VI	江別市教委	1989	高砂(5)
21			P-605	V	江別市教委	1991	高砂(8)
22			P-994	VI	江別市教委	1993	高砂(11)
23			P-1075/1074・1076・1077	V/不明	江別市教委	1994	高砂(12)
24		萩ヶ岡	墓305	X	江別市教委	1982	
25		町村農場1	P-8/9・3・12・16	III/VII/不明	江別市教委	1993	町村農場1
26			P-42	I-V	江別市教委	1994	町村農場1(5)
27			P-93	V	江別市教委	1997	町村農場1(7)
28		大麻3	P-35	VI-VII	江別市教委	1989	大麻3(3)
29			P-378・391・402-404・434/345・405・407・415・426/384・408/287/438	IV/V/III-V/VI-VII/I-V	江別市教委	2000	大麻3(9)
30		言井の沢	P-59/86・109・162・174・178・197/80・85/184・232/238/228/191・211/87・160・210・230・237/31・57・92・103・105	I-II/II/II-IV/II-V/III/III-IV/IV/V/I-V	北埋文	1982	
31		元江別10	P-53	VII-VIII	江別市教委	1998	
32	札幌市	S153	第383/111/185号ピット	IX/X/XI	札幌市教委	1976	
33		C507	7PT01	VI-VII	札幌市教委	2003	
34		C544	4PT12・14・25/16・34・36/07・13・23・24・30・31・33・35・37・38	VI/VI-VII/V-VII	札幌市教委	2012	
35		K39北大構内	2・3/6・7/1・4・5号墓	II/II-III/III	北海道大学	1987	洞ボラ並木東地区
36		N162	第8/1/4・2・3・6・7・22・25・27・39・40号ピット	V/VI/V-VI/VII/V-VII	札幌市教委	1974	
37	石狩市	ワッカオイ・C地点	第4/2・3/1号土坑墓	VI-VII/VII/VII	石狩市教委	1975	
38	小樽市	蘭島D	81-9A・9B, 81-11A, 86-11B/84-10B/81-10B/84-10A/81-10C・10D, 82-10A, 82-11A, 84-11B, 85-11A, 86-11A	VII/IX-X/X/X-XI/VII-VII	小樽市教委	1991	
39	余市町	フゴッペ洞窟D地点	第1号墳墓	IX-X	史跡フゴッペ洞窟発掘調査団	1972	フゴッペ洞窟発掘調査報告
40		大川	GP-96/30・50/128/41/137	IV/VI/VII-IX/IX-X/VII-IX	余市町教委	2000	大川II
41			GP-102/34	VI/VII	余市町教委	2001	大川IV
42			P-202	I	余市町教委	2004	
43		天内山	7/3/1/4・5・9・10号墳墓	VII-IX/IX/X/IX-X	余市町教委	1971	
44	浦幌町	十勝太若月	土坑32・68/67	VII/VII-VII	浦幌町教委	1975	
45	音別町	ノト岬	第35・59/30・40・41/61/21号土坑	IV/V/VI/IV-VII	浦幌町教委	1986	
46	釧路市	天聖1	P-5	V	北埋文	2011	天聖1(2)

a 柱穴様土坑

柱穴様土坑には平面が円形・断面が杭状、平面が楕円形・断面が土坑状の形態があり、その配置は、墓坑底長軸上の両端にある2本柱(以下、「長軸上2本配置」)、墓坑底四隅に4本柱(以下、「四隅4本配置」)があり、四隅4本配置には「四隅突出4本配置」や「楕円形土坑上柱穴+四隅4本配置」の類型がある(鈴木2005b)。これら以外には、1・3本などの柱穴様土坑がある。ただし、これらは上屋を支持する装置として想定する以外にも機能が備わっている可能性があるため墓坑上屋にかかる属性としていない。

〈道央部起源の要素〉道央では、在地系土器が副葬される墓(以下「在地系」、同様に、恵山系・後北系と称する)において、長軸上2本配置の初例が江別市七丁目沢6遺跡(縄文晩期後葉、対雁2期)にあり、後北C<sub>2</sub>・D期に多い。

〈道東部釧路起源の要素〉道東では、四隅4本配置の初例が釧路市幣舞遺跡・貝塚町1丁目遺跡(縄文晩期後葉、緑ヶ岡期)にあり、道東釧路ではフシココタン下層～興津期、道東網走では遅れて宇津内IIb期に極少数みられる。道央では、在地系ではH317期に、恵山系ではアヨロ2b期に出現し、所謂北大期に多い。道南における類例は、後北C<sub>2</sub>・D期の四隅4本配置が函館市桔梗E<sub>2</sub>遺跡に1例あるのみで、おそらくは道央後北系を介してこの配置が採用されたと思われる。



表 VI-10 基諸元①

番号	道筋名	道標名	主体部構造			道標 その他の要素	埋戻 姿勢	年齢	性別	備考	道南(横倉)													
			長軸長 cm	短軸長 cm	下鋪 平面形						2P	3P	4P	5P	6P	7P	8P	9P	10P	11P	12P			
<b>道南</b>																								
<b>ア301a</b>																								
75	南有林7	GP001	188	71	円	○	○	○	○		82	67P	58	69	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75		GP001	188	71	円	○	○	○	○		82	57P	58	69	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75		GP001	188	71	円	○	○	○	○		82	57P	60	51	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75		GP021	146	100	楕円	○	○	○	○	○	82	57P	53	51	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	恵山貝塚	—	—	—	円	○	○	○	○	○	82	41P	60	65	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	5号墳墓	—	—	—	円	○	○	○	○	○	82	48P	60	60	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	18号墳墓	—	—	—	円	○	○	○	○	○	82	46P	55	48	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	茂別	V-13	123	116	円	○	○	○	○	○	83	47P	59	48	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<b>ア302</b>																								
73	結核	1期K5aH	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
73		1期K5aH	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
75	赤坂野	2期K5aH	131	110	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	恵山貝塚	—	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	7号墳墓	—	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	9号墳墓	—	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	茂別	V-1	113	105	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-8	126	119	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-9	168	120	楕円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-14	95	75	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-15	48	36	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-17	121	95	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-18	105	80	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-26	106	82	楕円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-28	98	66	楕円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-29	140	120	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-30	128	107	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-31	125	105	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-32	103	80	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-33	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
<b>ア302b-南川里</b>																								
73	結核	1期K5aH	—	—	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
73		1期K5aH	—	—	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
73		1期K5aH	—	—	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
76	有珠七ツ	2期K5aH	—	—	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
76		4号墳墓	—	—	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	恵山貝塚	—	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
81	12号墳墓	—	—	—	円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	茂別	V-2	100	90	楕円	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-3	95	66	楕円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-4	140	120	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-5	98	66	楕円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	楕円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-6	140	120	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-7	120	105	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-16	126	110	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-20	128	107	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-21	125	105	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-22	103	80	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-23	103	80	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-31	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-32	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-33	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-34	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-35	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-36	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-37	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-38	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-39	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-40	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-41	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-42	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-43	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-44	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-45	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-46	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○	○	○	○	○	○	○	○
86	V-47	93	78	円	○	○	○	○	○	○	87	—	—	—	円	○	○							



表 VI-10 の続き

番号	進路名	進路名	主体系構造			埋設姿勢	年齢	性別	備考	道央(續)	
			長軸長 cm	短軸長 cm	下地形状					管径	管種
<b>道央(續)</b>											
65	大川	GP-272	183	82	円筒	?	?	?	?	?	
65	大川	GP-488	108	76	埋設	?	?	?	?	?	
66	大川	GP-484	138	82	(円)	?	?	?	?	?	
66	大川(電線局前)	GP-272	183	82	(円)	?	?	?	?	?	
66	大川(電線局前)	GP-484	138	82	(円)	?	?	?	?	?	
67	大川(国道側)	P-118	111	101	埋設	?	?	?	?	?	
67	大川(田代路側)	P-118	111	98	(円)	?	?	?	?	?	
<b>アサヒ</b>											
66	大川	GP-482	183	82	埋設	?	?	?	?	?	
67	大川	GP-483	108	102	(円)	?	?	?	?	?	
67	大川	GP-484	138	142	(円)	?	?	?	?	?	
<b>後北(下)</b>											
2	タブコブ	GP-7	65	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-8	118	108	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-10	65	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-11	68	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-12	72	72	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-13	65	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-14	113	114	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-20	64	72	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-21	65	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-22	113	114	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-23	65	52	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-24	113	114	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-25	117	132	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-26	117	132	(円)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-28	101	82	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	GP-33	112	102	埋設	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	P-8	184	184	(埋設)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	P-13	72	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	P-8	184	184	(埋設)	?	?	?	?	?	
2	タブコブ	P-13	72	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
10	アサヒ	GP-102	102	102	(埋設)	?	?	?	?	?	
12	東庄	I-P-102	104	104	(埋設)	?	?	?	?	?	
13	東庄	I-P-31	68	72	埋設	?	?	?	?	?	
14	ドーム3	I-P-11	108	108	(埋設)	?	?	?	?	?	
14	ドーム3	I-P-38	64	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
14	ドーム3	I-P-66	14	14	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-3	65	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-5	68	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-9	68	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-13	418	18	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-20	117	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-21	117	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-23	44	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-28	101	65	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-33	112	102	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-47	98	72	(埋設)	?	?	?	?	?	
17	クエスト	GP-50	111	95	(埋設)	?	?	?	?	?	
18	船木	35号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	36号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	37号土坑	121	63	小形	?	?	?	?	?	
18	船木	38号土坑	62	66	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	39号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	40号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	41号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	42号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	43号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	44号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	45号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	46号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	47号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	48号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	49号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	50号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	51号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	52号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	53号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	54号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	55号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	56号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	57号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	58号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	59号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	60号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	61号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	62号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	63号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	64号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	65号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	66号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	67号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	68号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	69号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	70号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	71号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	72号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	73号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	74号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	75号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	76号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	77号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	78号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	79号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	80号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	81号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	82号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	83号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	84号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	85号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	86号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	87号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	88号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	89号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	90号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	91号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	92号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	93号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	94号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	95号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	96号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	97号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	98号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	99号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	100号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	101号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	102号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	103号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	104号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	105号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	106号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	107号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	108号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	109号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	110号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	111号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	112号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	113号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	114号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	115号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	116号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	117号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	118号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	119号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	120号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	121号土坑	118	118	埋設	?	?	?	?	?	
18	船木	122号土坑	118	118	埋設	?					



表 VI-10 の続き

番号	遺跡名	遺構の時期	遺構名	下掘規模		主体部			遺構・その付属物	埋蔵品	年代	性別	備考	番号	遺跡名	遺構の時期	遺構名	下掘規模		主体部			遺構・その付属物	埋蔵品	年代	性別	備考
				長軸長 cm	短軸長 cm	下掘平面形状	構造	木部残存分										長軸長 cm	短軸長 cm	下掘平面形状	構造	木部残存分					
42	大川	I	P-282	—	—	楕円	土						42	カランダシ	III	33号土塼基	80	72	楕円	土							
43	観内D	I	P-145	30	91	四	土						43	町村農園1	III	P-9	89	68	四	土							
44	観内D	I	P-146	35	106	楕円	土						44	ワカクサイC	III	1号土塼基	86	66	楕円	土							
45	観内D	I	P-147	35	106	楕円	土						45	ワカクサイC	III	2号土塼基	86	66	楕円	土							
46	観内D	I	P-148	35	106	楕円	土						46	ワカクサイC	III	3号土塼基	86	66	楕円	土							
47	観内D	I	P-149	35	106	楕円	土						47	ワカクサイC	III	4号土塼基	86	66	楕円	土							
48	観内D	I	P-150	35	106	楕円	土						48	ワカクサイC	III	5号土塼基	86	66	楕円	土							
49	観内D	I	P-151	35	106	楕円	土						49	ワカクサイC	III	6号土塼基	86	66	楕円	土							
50	観内D	I	P-152	35	106	楕円	土						50	ワカクサイC	III	7号土塼基	86	66	楕円	土							
51	観内D	I	P-153	35	106	楕円	土						51	ワカクサイC	III	8号土塼基	86	66	楕円	土							
52	観内D	I	P-154	35	106	楕円	土						52	ワカクサイC	III	9号土塼基	86	66	楕円	土							
53	観内D	I	P-155	35	106	楕円	土						53	ワカクサイC	III	10号土塼基	86	66	楕円	土							
54	観内D	I	P-156	35	106	楕円	土						54	ワカクサイC	III	11号土塼基	86	66	楕円	土							
55	観内D	I	P-157	35	106	楕円	土						55	ワカクサイC	III	12号土塼基	86	66	楕円	土							
56	観内D	I	P-158	35	106	楕円	土						56	ワカクサイC	III	13号土塼基	86	66	楕円	土							
57	観内D	I	P-159	35	106	楕円	土						57	ワカクサイC	III	14号土塼基	86	66	楕円	土							
58	観内D	I	P-160	35	106	楕円	土						58	ワカクサイC	III	15号土塼基	86	66	楕円	土							
59	観内D	I	P-161	35	106	楕円	土						59	ワカクサイC	III	16号土塼基	86	66	楕円	土							
60	観内D	I	P-162	35	106	楕円	土						60	ワカクサイC	III	17号土塼基	86	66	楕円	土							
61	観内D	I	P-163	35	106	楕円	土						61	ワカクサイC	III	18号土塼基	86	66	楕円	土							
62	観内D	I	P-164	35	106	楕円	土						62	ワカクサイC	III	19号土塼基	86	66	楕円	土							
63	観内D	I	P-165	35	106	楕円	土						63	ワカクサイC	III	20号土塼基	86	66	楕円	土							
64	観内D	I	P-166	35	106	楕円	土						64	ワカクサイC	III	21号土塼基	86	66	楕円	土							
65	観内D	I	P-167	35	106	楕円	土						65	ワカクサイC	III	22号土塼基	86	66	楕円	土							
66	観内D	I	P-168	35	106	楕円	土						66	ワカクサイC	III	23号土塼基	86	66	楕円	土							
67	観内D	I	P-169	35	106	楕円	土						67	ワカクサイC	III	24号土塼基	86	66	楕円	土							
68	観内D	I	P-170	35	106	楕円	土						68	ワカクサイC	III	25号土塼基	86	66	楕円	土							
69	観内D	I	P-171	35	106	楕円	土						69	ワカクサイC	III	26号土塼基	86	66	楕円	土							
70	観内D	I	P-172	35	106	楕円	土						70	ワカクサイC	III	27号土塼基	86	66	楕円	土							
71	観内D	I	P-173	35	106	楕円	土						71	ワカクサイC	III	28号土塼基	86	66	楕円	土							
72	観内D	I	P-174	35	106	楕円	土						72	ワカクサイC	III	29号土塼基	86	66	楕円	土							
73	観内D	I	P-175	35	106	楕円	土						73	ワカクサイC	III	30号土塼基	86	66	楕円	土							
74	観内D	I	P-176	35	106	楕円	土						74	ワカクサイC	III	31号土塼基	86	66	楕円	土							
75	観内D	I	P-177	35	106	楕円	土						75	ワカクサイC	III	32号土塼基	86	66	楕円	土							
76	観内D	I	P-178	35	106	楕円	土						76	ワカクサイC	III	33号土塼基	86	66	楕円	土							
77	観内D	I	P-179	35	106	楕円	土						77	ワカクサイC	III	34号土塼基	86	66	楕円	土							
78	観内D	I	P-180	35	106	楕円	土						78	ワカクサイC	III	35号土塼基	86	66	楕円	土							
79	観内D	I	P-181	35	106	楕円	土						79	ワカクサイC	III	36号土塼基	86	66	楕円	土							
80	観内D	I	P-182	35	106	楕円	土						80	ワカクサイC	III	37号土塼基	86	66	楕円	土							
81	観内D	I	P-183	35	106	楕円	土						81	ワカクサイC	III	38号土塼基	86	66	楕円	土							
82	観内D	I	P-184	35	106	楕円	土						82	ワカクサイC	III	39号土塼基	86	66	楕円	土							
83	観内D	I	P-185	35	106	楕円	土						83	ワカクサイC	III	40号土塼基	86	66	楕円	土							
84	観内D	I	P-186	35	106	楕円	土						84	ワカクサイC	III	41号土塼基	86	66	楕円	土							
85	観内D	I	P-187	35	106	楕円	土						85	ワカクサイC	III	42号土塼基	86	66	楕円	土							
86	観内D	I	P-188	35	106	楕円	土						86	ワカクサイC	III	43号土塼基	86	66	楕円	土							
87	観内D	I	P-189	35	106	楕円	土						87	ワカクサイC	III	44号土塼基	86	66	楕円	土							
88	観内D	I	P-190	35	106	楕円	土						88	ワカクサイC	III	45号土塼基	86	66	楕円	土							
89	観内D	I	P-191	35	106	楕円	土						89	ワカクサイC	III	46号土塼基	86	66	楕円	土							
90	観内D	I	P-192	35	106	楕円	土						90	ワカクサイC	III	47号土塼基	86	66	楕円	土							
91	観内D	I	P-193	35	106	楕円	土						91	ワカクサイC	III	48号土塼基	86	66	楕円	土							
92	観内D	I	P-194	35	106	楕円	土						92	ワカクサイC	III	49号土塼基	86	66	楕円	土							
93	観内D	I	P-195	35	106	楕円	土						93	ワカクサイC	III	50号土塼基	86	66	楕円	土							
94	観内D	I	P-196	35	106	楕円	土						94	ワカクサイC	III	51号土塼基	86	66	楕円	土							
95	観内D	I	P-197	35	106	楕円	土						95	ワカクサイC	III	52号土塼基	86	66	楕円	土							
96	観内D	I	P-198	35	106	楕円	土						96	ワカクサイC	III	53号土塼基	86	66	楕円	土							
97	観内D	I	P-199	35	106	楕円	土						97	ワカクサイC	III	54号土塼基	86	66	楕円	土							
98	観内D	I	P-200	35	106	楕円	土						98	ワカクサイC	III	55号土塼基	86	66	楕円	土							
99	観内D	I	P-201	35	106	楕円	土						99	ワカクサイC	III	56号土塼基	86	66	楕円	土							
100	観内D	I	P-202	35	106	楕円	土						100	ワカクサイC	III	57号土塼基	86	66	楕円	土							
101	観内D	I	P-203	35	106	楕円	土						101	ワカクサイC	III	58号土塼基	86	66	楕円	土							
102	観内D	I	P-204	35	106	楕円	土						102	ワカクサイC	III	59号土塼基	86	66	楕円	土							
103	観内D	I	P-205	35	106	楕円	土						103	ワカクサイC	III	60号土塼基	86	66	楕円	土							
104	観内D	I	P-206	35	106	楕円	土						104	ワカクサイC	III	61号土塼基	86	66	楕円	土							
105	観内D	I	P-207	35	106	楕円	土						105	ワカクサイC	III	62号土塼基	86	66	楕円	土							
106	観内D	I	P-208	35	106	楕円	土						106	ワカクサイC	III	63号土塼基	86	66	楕円	土							
107	観内D	I	P-209	35	106	楕円	土						107	ワカクサイC	III	64号土塼基	86	66	楕円	土							
108	観内D	I	P-210	35	106	楕円	土						108	ワカクサイC	III	65号土塼基	86	66	楕円	土							
109	観内D	I	P-211	35	106	楕円	土						109	ワカクサイC	III	66号土塼基	86	66	楕円	土							
110	観内D	I	P-212	35																							

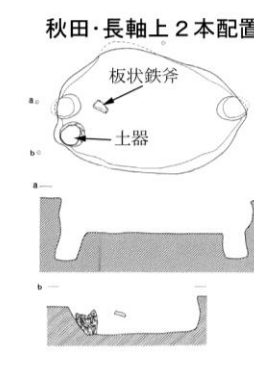
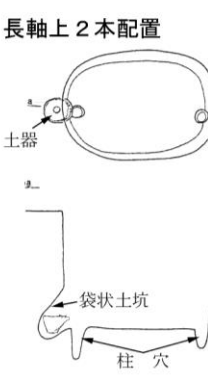
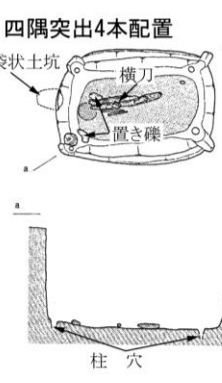
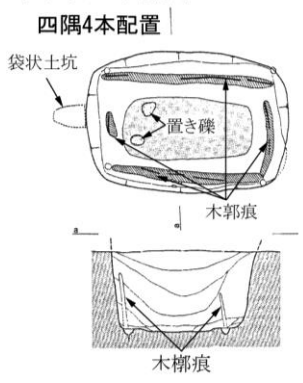




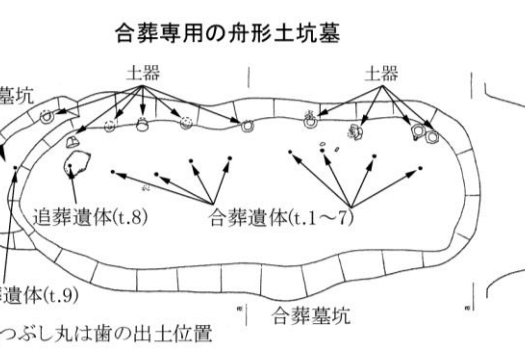
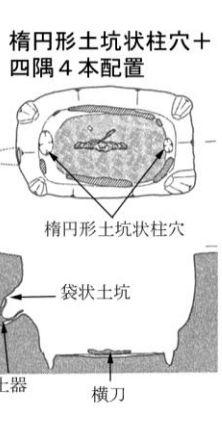
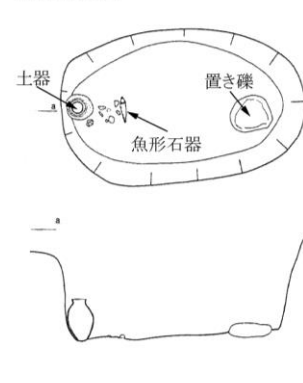
表VI-11の続き(円形・刺突文土器群期)

番号	遺跡名	遺構の時期	遺構名	外部付属施設		内部付属施設						備考	
				柱穴様土坑	破状土坑	破状土坑	破状土坑	破状土坑	破状土坑	破状土坑	破状土坑		破状土坑
30	吉井の沢	I~II	P-59										
14	箱木B	II	P-192										
30	吉井の沢	II	P-192										
30	吉井の沢	II	P-192										
35	ボゾア木	II	P-308										
30	吉井の沢	III	P-238										
17	横内D	II	P-38										
29	大塚3	IV	P-403										
29	大塚3	IV	P-404										
29	大塚3	IV	P-404										
47	横内D	I~V	P-33	4	四隅								
47	横内D	I~V	P-46	7	四隅								
47	横内D	I~V	P-185	7	四隅								
47	横内D	I~V	P-377	7	四隅								
47	横内D	IV~V	P-19	7	四隅								
7	東広	V	I-F-27	3	四隅								
29	大塚3	V	P-403	3	四隅								
29	大塚3	V	P-403	3	四隅								
30	吉井の沢	V	P-210	7	四隅								
30	N162	V	袋状土坑	7	四隅								
47	横内D	V	P-301	7	四隅								
45	N162	V~VI	4号土坑	7	四隅								
46	ウサクマイA	VI	遺構64-8	1	袋状土坑								
36	ウサクマイS	VI	P-245	1	袋状土坑								
6	ウサクマイS	VI	P-245	1	袋状土坑								
12	高野	VI	P-244	1	袋状土坑								
12	N162	VI	P-245	1	袋状土坑								
19	N162	VI	袋状土坑	1	袋状土坑								
23	大川	M	P-30	1	袋状土坑								
26	大川	VI	P-50	1	袋状土坑								
41	C544	VI	IT14	1	袋状土坑								
43	C544	VI	IT14	1	袋状土坑								
34	大塚3	VI	IT14	1	袋状土坑								
34	大塚3	VI	IT14	1	袋状土坑								
29	大塚3	VI	遺構P-T-01	1	袋状土坑								
37	ニカソシ野	VI	P-1	1	袋状土坑								
10	ニカソシ野	VI	P-70	1	袋状土坑								
11	横内D	VI	P-28	4	四隅								
11	横内D	VI	P-9	7	四隅								
37	西島松5	VI	P-37	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-37	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-33	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-73	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-89	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-152	4	四隅								
17	西島松5	VI	P-143	4	四隅								
11	ニカソシ野	VI	P-19	4	四隅								
11	ニカソシ野	VI	P-28	4	四隅								
11	ニカソシ野	VI	P-46	4	四隅								

ウサクマイ葬法



南川葬法



0 1m

図VI-7 墓の平面形・付属施設など 鈴木 2009b 引用



表VI-12 属性の地域間移動: 墓制

		縄文晩期 後葉		続縄文										*(*)が付く型式は当該地域において墓制組成をなさない					
		前葉				中葉						後葉							
柱穴様土坑	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)					南川IV	聖山K II						
	要素	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)				下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大					
	道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	長軸2本	柱穴あり、長軸2本?		長軸2本	長軸2本?		長軸2本	長軸2本?	長軸2本	長軸2本、四隅4本、長軸2本+四隅4本								
	道東	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層				興津	下田/沢 I		下田/沢 II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	四隅4本											?	柱穴あり	?				
道東	型式	(緑ヶ岡相当)	柴浦一・二群				元町2	宇津内II a		宇津内II b		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
要素	?	柱穴あり										四隅4本	柱穴あり	?					
埋葬姿勢 (全て屈葬)	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)					南川IV	聖山K II						
	要素	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)				下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大					
	道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	?	(屈葬)										側臥・仰臥	仰臥	側臥	側臥	側臥	側臥	側臥
	道東	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層				興津	下田/沢 I		下田/沢 II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	?	座葬・(屈葬)				側臥・座葬・(屈葬)	?											
道東	型式	(緑ヶ岡相当)	柴浦一・二群				元町2	宇津内II a		宇津内II b		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
要素	?	側臥・仰臥										仰臥・伏臥	側臥・(屈葬)	側臥・仰臥	?				
墓坑平面形	道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)					南川IV	聖山K II						
	要素	大洞A	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)				下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ	(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大					
	道央	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円	円・楕円		
	道東	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層				興津	下田/沢 I		下田/沢 II		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大		
	要素	円・楕円・隅方	隅丸方・円・楕円	円・楕円・隅方・小判	(楕円・隅長方)	(円)	(楕円)	小判・楕円・隅丸長	?	(楕円)	?	円・楕円							
道東	型式	(緑ヶ岡相当)	柴浦一・二群				元町2	宇津内II a		宇津内II b		(後北A)	(後北B)	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> -D	所謂北大			
要素	楕円・円	楕円・円	楕円・円・隅方	小判・楕円・円	楕円・円・小判	(楕円)	(円)	小判・隅方	楕円・小判・円	?									

表VI-12の続き

道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)				南川IV	聖山KII					
	要素	大洞A'	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)		下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ			(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> ・D	所謂北大		
袋状土坑	要素	なし														
	要素	なし?														
	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> ・D	所謂北大
	要素	なし							あり		あり?	あり		道央恵山系起源の要素		
道東	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層		興津		下田ノ沢I		下田ノ沢II							
	要素	なし														
	要素	なし?														
	型式	(緑ヶ岡相当)	栄浦一・二群		元町2		宇津内IIa		宇津内IIb							
置き礫	要素	なし														
	要素	なし?														
	要素	なし?														
	要素	あり														
道南	型式	?	尾白内II	兜野式	青苗B(古)	青苗B(新)				南川IV	聖山KII					
	要素	大洞A'	国立療養所裏XⅧ群(砂沢)		下添山	西桔梗B2	南川Ⅲ			(後北A)	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> ・D	所謂北大		
	要素	なし				あり南川		あり?	あり南川		あり		なし?			
	要素	なし				あり南川		あり?	あり南川		あり		なし?			
道東	型式	対雁2	H37丘珠(古)	H37丘珠(中)	H37丘珠(新)	H317(古)	H317(新)	H37栄町(古)	H37栄町(新)	江別太1	江別太2	後北A	後北B	後北C <sub>1</sub>	後北C <sub>2</sub> ・D	所謂北大
	要素	あり	あり		なし	あり		あり南川		あり?	あり南川		あり?	ありウサクマイ		
	要素	道南起源の要素							あり南川		なし?					
	要素	道南起源の要素							あり南川		なし?					
道東	型式	緑ヶ岡	フシココタン下層		興津		下田ノ沢I		下田ノ沢II							
	要素	なし														
	要素	なし														
	型式	(緑ヶ岡相当)	栄浦一・二群		元町2		宇津内IIa		宇津内IIb							
置き礫	要素	なし														
	要素	あり														
	要素	なし														
	要素	あり														

**b 積石**

前葉～後葉を通じて全道で見られ、道南・道央・道東ごとの特色はない。

**c 主体部の構造・木槨痕跡**

縄文における主体部構造は各地域とも主に土坑で、ほかには木槨痕跡や遺体梱包・敷物痕跡や埋甕が伴うが多くはない。木槨例が増えるのは円刺群VI期以降で、その構造には変異がある(図VI-6参照)。特異な構造として道東釧路では興津期に遺体頭部を収納のため壁面に横穴を掘りこみ、堅穴と組み合わせる縦断面がL字になる形態がみられる。

**d 埋甕葬**

埋甕葬は晩期後葉以降に道南・道央・道東の各地で少数例あり、地域ごとの変異はない。道南では南川IV期の南川遺跡、道央ではH37丘珠期の三石町旭町1遺跡、道東では元町2～宇津内IIa期の常呂河口遺跡にみられる。これらは1土坑に複数の埋甕を設置するのではなく、1土坑に1個の甕または壺を正立または倒立して埋める例がほとんどである。この葬法は新生児または胎児が埋葬されていたと推定されるので、再葬の二次葬の容器として用いたのではなく幼児の一次葬容器として用いられたと考えられ(鈴木2009)、北部九州にみられる合わせ口の甕棺墓が成人の葬法であることと異なる。

**e 埋葬姿勢**

続縄文を通じて主な埋葬姿勢は側臥屈葬で、地域ごとの変異はない。ただし、道東釧路では縄文晩期後葉～興津期にかけて座葬が見られる。

#### f 坑底平面形

平面形は地域ごとに異なる明確な属性転移はみられない。地域ごとの傾向を述べる。道南では縄文晩期後葉～兜野期にかけて不明で、恵山系の下添山～南川Ⅲ期には円・楕円形が多く、南川Ⅳ期には隅丸方形が増える。後北系の後北 A～C<sub>2</sub>・D 期も円形・楕円形が主要であるが、円刺群Ⅷ～Ⅹ期になると隅丸方形が現れる。

道央では、縄文晩期後葉～H37 栄町期を通じて円・楕円形が主体を占め、江別太 1 期に隅丸方形が出現し、円刺群Ⅵ期以降は主要な形態が円形・楕円形から隅丸方形に入れ替わる。また、後北 C<sub>2</sub>・D 期には合葬専用の長楕円形の所謂舟形土坑が現れる。恵山系ではアヨロ 1～2b 期を通じて円・楕円形が主体を占めるものの、隅丸方形もある。

道東釧路では縄文晩期後葉～興津期までは円・楕円形に小判・隅丸方形が加わる。後北系にも後北 C<sub>1</sub> 期に小判・隅丸長方形がみられる。道東網走では縄文晩期後葉～栄浦一・二群期までは楕円・円形が主体を占め、元町 2 期には隅丸方形が加わる。それ以降は小判・楕円形が主体となる。後北系においても同じ傾向がみられる。舟形土坑は後北 C<sub>1</sub> 期に道東釧路の十勝太若月遺跡に初出する。

#### g 袋状土坑

〈道央部起源の要素〉道央ではアヨロ 1 期(苫小牧市タプコブ遺跡 GP-17)に恵山系で発生しアヨロ 3b 期までみられる。在地系には江別太 1 期に伝わり、円刺群Ⅺ期までみられる。恵山系では壁面に横方向に掘削され、在地系では江別太 2 期以降になると長軸右側の壁面と坑底の境に下方に掘削される例が出現する。後者の掘削位置と方向は後北 C<sub>2</sub>・D 期に盛行し、円刺群Ⅴ期まで続く。円刺群Ⅵ期以降には墓坑長軸上の壁面を斜め下方に掘削する施工が主要となる。

また、道南に類例がなく(ただし、七飯町桜町遺跡 P211 はその可能性がある)、道東釧路にも今のところない。いっぽう、道東網走には道央と同じ掘削方法が後北 C<sub>2</sub>・D 期に出現し例数も多い(C<sub>2</sub>・D 期 49 例中 12 例)。道央後北系を介して採用されたと思われる。

#### h 置き礫

墓坑内におかれる礫は、南川葬法・ウサクマイ葬法に関わるもの以外に各地域においてもみられるが、個々の事例で個数のばらつきが認められることから、前 2 者のような葬法に関わるものと想定できなかつた。

〈道南部起源の要素〉南川葬法の置き礫は、道南では下添山にあらわれて後北 B 期まで残る。道央では、恵山系でアヨロ 1 期に発生しアヨロ 3a 期まで、道央在地系は恵山系に遅れて江別太 1 期に採用され後北 B 期まで残る。

〈道央部起源の要素〉ウサクマイ葬法の置き礫は、道央の円刺群Ⅵ期に発生し 8 世紀中葉まであり、道南・道東にない。

#### i 各要素の傾向

〈表出的属性〉積石については前葉～後葉を通じて地域ごとの特色はなく各地で発生したものと考えられる。

柱穴様土坑については、隣接地域への属性移動があり、道東→道央は土器型式拡と同期しない。道央→道東・道央→道南は後北式の拡散と同期する。長軸上 2 本配置は晩期後葉

の道央在地系に自発し、四隅4本配置は晩期後葉幣舞式期の道東釧路に自発する。長軸上2本+四隅4本配置は円刺群VII~VIII期に道央で属性合成を起こす。

〈内在的屬性〉主体部構造については属性移動がみられず、木槨の小変異は全て道央の西島松5遺跡にある。埋葬姿勢については属性移動がみられず、同一地域内・同一遺跡内においても相違がみられる。

坑底平面形については、円・楕円形が各時期・各地域を通じて主要な形態であるが、隅丸方形は道東に多く、道東釧路に初出する。隅丸方形の流行は道東釧路が起源の可能性があるとすると隣接地域への属性移動があり、それは道東→道央・道央→道南は土器型式拡散と同期しない。合葬専用の舟形土坑は隣接地域への属性移動(道東釧路→道央)があり、土器型式拡散と同期せず後北C<sub>2</sub>・D期に道央へ広まる。

袋状土坑については、隣接地域への属性移動があり、同一域内での転移(道央恵山系→道央在地系)もある。道央後北系→道東網走は土器型式拡散と同期して後北C<sub>2</sub>・D期に広まり、設置位置・掘削方向については道央と変わらない。道南には現在のところない。

南川葬法の置き礫については、隣接地域への属性移動があり、同一域内での転移(道央恵山系→道央在地系)もある。ウサクマイ葬法の置き礫については属性移動がない。

表VI-13 北海道-東北の後北-北大系墓制 鈴木 2016a

	北海道					東北			
	後北C <sub>2</sub> ・D期	所謂北大期				後北C <sub>2</sub> ・D期	所謂北大期		
		I~V	VI~VIII	IX~XI	時期?		I~V	VI~VIII	IX~XI
円形件数	105	37	24	7	34		15		
袋状土坑件数	16		4	3	2		1		
上屋柱穴件数	5			1					
楕円形件数	63	8	12	12	14	21	15	1	
袋状土坑件数	19		3	7	4	5	10	1	
上屋柱穴件数	2		1	2		9	4		
隅丸方形件数	16	4	21	22	15		4	6	
袋状土坑件数	2	1	17	18	12		3	5	
上屋柱穴件数	4		13	13	13			1	
小判形件数	7		6	9	18		6	1	
袋状土坑件数	5		1	5	11		6	1	
上屋柱穴件数	3			3	12				
隅丸長方形件数	6	1	1	7	9				
袋状土坑件数	3			3	12				
上屋柱穴件数				1					
方形件数			1	3	7			1(木槨)	
袋状土坑件数			1	2	7			1	
上屋柱穴件数				2	4				
時期別合計	200	50	65	60	97	21	40	8+1	
袋状土坑件数	45	1	26	38	41	5	20	7	
上屋柱穴件数	8/14		11/14	10/22	17/29	9/9	4/4	1/1	

\*下線は長軸両端配置の内数、二重下線は四隅4本配置の内数。I~V:4c後葉~5c後葉、VI~VII:6c前葉~後葉、IX~XI:7c前葉~後葉

\*東北の類例、後北C<sub>2</sub>・D式期:寒川II・長興寺I・永福寺・大石渡・仏沢III、I~V:森ヶ沢・市子林・仁沢瀬II・薬師脇、VI~VIII:田久保下・米泉館

なお東北地方には後北系の墓制が少数みられる。平面形の流行に違いがみられるものの、それらの表出的属性・内在的属性の一部は後北C<sub>2</sub>・D~円刺群VIII期を通じて北海道の墓制と共通する(表VI-13)。ただし、円刺群IX期にはみられなくなる。

その中で、内在的属性の一部:ウサクマイ葬法の置き礫は東北地方に転移していない。これは道央から道南・道東へも転移していないので、東北地方の後北-北大系墓制は道南を経由して属性転移したとしてよい。

## 4 節 属性変化の傾向

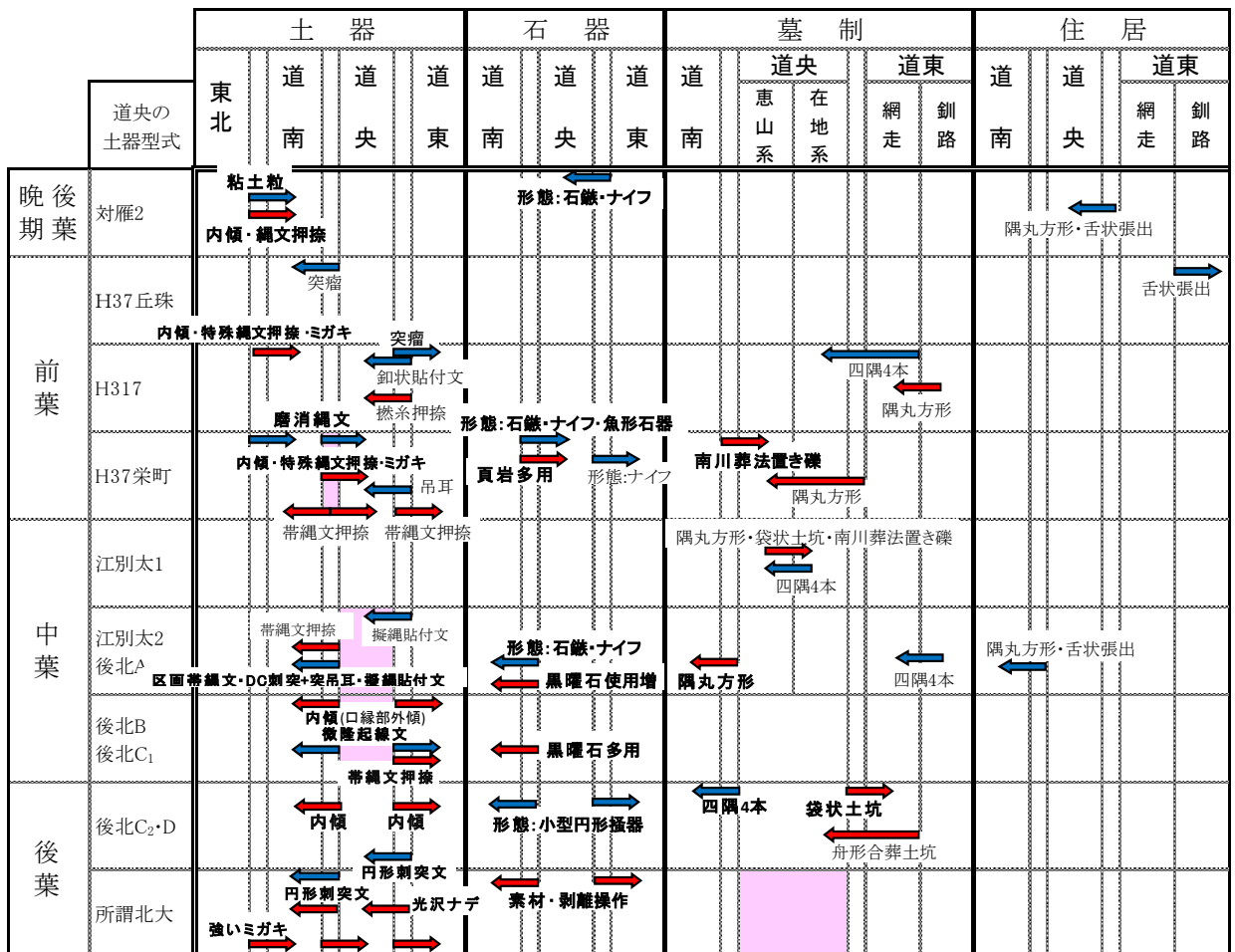
### 1 属性転移・属性合成からみた3属性の構造

属性転移は、東北北部・道南・道央・道央恵山系・道央在地系・道東釧路・道東網走・道北・道東北のオホーツク式分布域について、隣接地域へ・隔離地域へ、があり、隔離地域への転移は必ず隣接地を経ている。

〈表出的属性における属性転移〉縄文晩期には道央←道東がめだつ。H37 丘珠～H317 期には、前代以来の道央←道東があり、新たに道南←道央→道東が加わる。H37 栄町期には、東北→道南→道央←道東があり、道央→道東もある。江別太 1～江別太 2 期には道央←道東と道央恵山系←道央在地系がある。後北 A 期になると新たに道南←道央がめだつ。後北 C<sub>1</sub> 期以降は再び道南←道央→道東がめだつ。表出的属性の転移は、後北 A 期より前には多様な転移があり、それ以降はやや単純な転移になる。

〈内在的属性における属性転移〉縄文晩期～H317 期には東北→道南。H37 栄町期には道南→道央がめだち道央→道東が現れる。江別太 1～江別太 2 期には道央恵山系←道央在地系がある。後北 A 期になると道南←道央がめだつ。後北 B 期以降は再び道南←道央→道東がめだつ。内在的属性の属性転移は、H37 栄町期以降に「道央から」がみられ、後北 A～C<sub>2</sub>・D 期まで続く。所謂北大になると「東北・道東北のオホーツク式分布域から」という新しい方向が相次いでみられる。

属性合成は、表出的属性の「道央+道東：道央で」は円形・刺突文土器群期に、内在的属性の「道南+道央：道央で」は後北 B 期に、「道央恵山系+道東：道央で」江別太 2 期に、「道南+道央：道南東縁～道央西縁で」H37 栄町期に、あり、全てが道央起源とほかの地域起源との合成であり、ほとんどが道央で起こっていた。



\*太ゴシックは土器型式の拡散と伴・同期する属性      ■ : 合成      \*中間的属性は除く      → : 表出的      → : 内在的

図 VI-8 属性転移の時空分布

ところで、IV章において統合属性という言葉を出した。属性合成と統合属性の違いを説明する必要がある。統合属性とはあくまでも観察者が策定した単位属性の集合であり、相関の証明を経て成立する関係、属性合成は単位属性どうしに相関があり観察者側の策定に拠らない。剥片石器は、形態・石質が相関的な場合、形態・素材形態が相関的な場合があり、形態と石質・素材形態が非相関の場合もある。住居は平面形の一部と舌状張り出しが相関的な場合があり、墓制は、袋状土坑と南川葬法の置き礫が相関的な場合がある。これらは常に並存しないが、並存例がかなり多いので統合属性といえる。

表出的属性は、中間・内在的属性に比べて転移が頻繁に起こる。前中葉には相互方向が多く、後葉には道央から道南・道東へのおのおの1方向の傾向が強い。遺物においては1方向・相互方向があり、遺構においては1方向の傾向が強い。これらより、表出的属性は「変異性が強く、現地性が弱く、容易に転移し、伝達する際に欠落しにくい」が導かれる。

内在的属性は、表出・中間的属性に比べて転移は頻繁に起こらない。中葉には1方向で、後葉には道央から道南・道東へのおのおの1方向の傾向が強い。遺物・遺構においてはともに1方向の傾向が強い。

これらより、内在的属性は「変異性が弱く、現地性が強く、転移は容易でなく、伝達する際に欠落しやすい」が導かれる。

そして、内在的属性では、後葉にのみ遺構・遺物において属性が同時に転移する。いっぽう、表出的属性においては、遺構・遺物の属性が同時・同方向に転移する場合と遺物の属性が単独に転移する場合がある。

よって、不変性・現地性の強弱は「遺構の内在的属性 $\geq$ 遺物の内在的属性 $>$ 遺構の表出的属性 $>$ 遺物の表出的属性」が導かれる。

## 2 属性変容のかたち

属性転移は以下である。土器については型式拡散に伴い型式を構成する属性の複数が転移する場合、型式拡散に伴わず単独で転移する場合がある。土器以外の遺物・遺構については土器型式拡散と同期する場合、同期しない場合があり、土器型式の拡散に対して随伴・同期型の転移と単独・非同期型の転移があった。属性合成にも、土器が随伴型の合成、土器・墓制が単独・非同期型の合成があった。

「随伴型」は土器型式の参入あるいは交替である。「単独型」は土器型式下位における現象である。「同期型」は多種型式の転移であるから型式組成群の大きな変異で、「非同期型」はより小さい変異といえる。また、土器型式拡散による「随伴型」「同期型」は「時の経過」に関わり、土器型式拡散に関わらない「単独型」「非同期型」は「時の経過」以外に関わる。

「時の経過」以外に関わるものとは系統に関わるものである。そのうち、移転元型式からの属性転移はIV章3節で既述した「分枝」にあたり、移転先型式への属性転移(付加・交替)と属性合成はIV章3節で既述した「融合=新属性の創設」にあたり、それらには異系統が生じる。他系統にもまたがる変異は他律的といえる。「分枝」「融合」はなくて同系統を示す変容は自閉的といえる。

## 3 基本的実体における変容の原因

IV章3節2項において、人工物の変化の機構が自身に内在していない、と言う大塚の定見を紹介した。つまり、人工物をつくる・かえる機構はヒトに内蔵されているのである。よって、属性変容は情報再生という形を通じて人工物の変質・変形に還元される。そして、

考古学的実体の基本的実体部分は階層が上がるにつれた複雑さを増すものの、VI章 1 節 1 項で述べたように、型式・型式組成群の変容は属性変容により起こることから、基本的実体における情報再生の仕組みは一貫している。また、情報再生は、同一人・授け手-受け手、の 2 関係において生じる。授け手-受け手には、祖先 - 子孫関係:時系、同世代の他者:空間系がある。

情報再生においては属性が有する「3 属性」の性質と「2 関係」の伝習系統の組み合わせにより再生精度に差異が生じる。これが属性・型式・型式組成群が変容する原因と考えられる。

## 5 節 基本的実体からみた文化変容

基本的実体の上位には Clarke の場合には「文化」があり、これは地理的概念=空間的広がりを含み、その範囲はおおよそ 32~322 km と想定されている。さらに、「文化群」の範囲は推定半径 200~750 km。「技術複合体」の範囲は推定半径 750~3000 km である。

道南・道央・道東釧路・道東網走・道北の各地域はおおよそ半径 120 km 位で「文化」の中規模にあたり、最大値 322 km はほぼ北海道全域に相当する。北海道~東北中部・新潟県までの範囲は「文化群」の最大値・「技術複合体」の最小値にあたる。前節では道南~道北の各地域間における他律的な属性転移と属性合成について見てきたが、続縄文前葉~中葉にかけては中規模「文化」、続縄文葉では大規模「文化」の範囲での属性変容がみられた。また、続縄文葉における後述する属性転移④⑤は「文化群」の最大値・「技術複合体」の最小値での範囲での属性変容にあたる。少なくとも、続縄文の範囲が時期によって変化し、「文化」の範囲となり、一部は「文化群」または「技術複合体」にも当てはまる空間的広がりがあるので、Clarke の最上位の文化区分にあたる必要条件を既に持っている。III章 4 節において続縄文が「文化」~「技術複合体」のどれにあたるか見極めが必要であることを示した。それについては VII・VIII章:生業・交換、IX章:社会構成の検討をへて、弥生縄文の経済・技術の共通要素とは異なるそれらが広域的に連動していれば「技術複合体」に当てはまる。

ところで以前に「文化接触とは異文化間におけるヒト・モノを授受する相互関係で、それらに付帯するコト(情報)・付帯しないコト(情報)の授受もある。それは文化変容(文化同化・文化異化・文化交代)をつうじて顕在化する。授受の動機には自発的動機(興味・必要など)・強制的動機(強要)がある。」と言表した(鈴木 2009b)。

この言表の“文化”について定義をしていなかった。この“文化”は基本的実体に等しく、具体的数値で示した範囲を欠いた「文化」に近い。「文化」の範囲の定義内容を除くと、「文化」の変容も基本的実体の変容と連携する。この節では、基本的実体の変容=“文化”の変容について述べるが、「3 属性」・「2 関係:授け手-受け手」についてその組み合わせを検討することで属性の再生差異が明瞭となり、「文化」の変容に擦り合わせ可能と考える。くわえて、鈴木 2009b は現時点の成果により内容修正の必要もある。

### 1 属性変異の内容

#### a 属性転移・合成①:内在的属性の混在

具体例として、H37 栄町期に土器の成形(内傾)・縄文押捺(帯縄文)が道南→道央へ・道南東縁~道央西縁→道央へ転移して道央で合成、江別太 1 期における墓制(袋状土坑・南川葬

法の置き礫)が道央恵山系→道央在地系へ転移、後北 B 期における土器の成形(内傾+口縁部のみ外傾)道南+道央が道央で合成、後北 C<sub>2</sub>・D 式期に合葬墓の坑底平面形が道東釧路→道央へ転移、があげられる。これらに共通するのは、転移した属性が転移先の属性と交換されるのではなく混在する。転移先において変異性強・現地性弱である内在的属性が潜在した。この状況は弱い強制的動機に基づく属性の受容が起こったことを示していると考えられる。

#### **b 属性転移②：3 属性揃っての転移**

具体例として、後北 C<sub>1</sub> 期には道央の土器属性が道南・道東に転移し、続いて後北 C<sub>2</sub>・D 式期には道央の墓制・土器属性・石器形態・剥片石器石材選択が道東・道南に転移すること、があげられる。具体例に共通するのは、多量・継続的に属性が転移した場合には転移先の属性と交換される。3 属性揃っての転移は、移転制限がないといえるので、転移先には自発的動機に基づく属性の受容が起こったことを示していると考えられる。

#### **c 属性転移・合成③：表出・中間的属性の混在**

具体例として、土器ではボタン状貼付文・吊り耳・疑縄貼付文など一部の表出的属性、江別太 2 期における土器の文様割付(口頸部横位分割+突起基点縦位分割)の中間的属性、住居では舌状張出し・石囲い炉など一部の表出・中間的属性、があげられる。具体例に共通するのは、転移した属性が転移先の属性と混在する。変異性強・現地性弱である表出・中間的属性に対して移転制限しないので、転移先には弱い自発的動機によって属性の受容が起こったことを示していると考えられる。

#### **d 属性転移④：表出的属性の一部の混在**

具体例として、東北北部北半・新潟県において後北 C<sub>1</sub> 式の微隆起線を沈線で模倣する土器が極少量出土(青森市小牧野遺跡、東通村大平 4 遺跡、新潟県中条町兵衛遺跡)することが挙げられる(図 VI-1 の 8 など)。移転先では表出的属性の一部が転移先の属性と混在する。変異性強・現地性弱の属性に対して移転制限しないので、転移先には弱い自発的動機に基づく属性の受容が起こったことを示していると考えられる。

#### **e 属性転移⑤：3 属性揃って少量・継続的に混在**

具体例として、後北 C<sub>2</sub>・D 期の東北北部において北海道系墓制(柱穴様土坑・袋受土坑)を伴わない土坑墓群(岩手県滝沢村仏沢Ⅲ・大石渡・安倍館遺跡など)にも後北 C<sub>2</sub>・D 式が副葬される事例が少数あること、新潟県巻町南赤坂遺跡には後北 C<sub>2</sub>・D 式と伴に帯縄文が付く土師器甕があり、岩手県九戸町長興寺 I 遺跡には横位回転縄文を帯縄文に似せた深鉢があること(図 VI-1 の 13~15)、円・刺Ⅳ~Ⅴ期における縄文原体の変化(Ⅴ章 7 節 5 項、北大Ⅰに普通縄文あり・北大Ⅱに RL 遺存)が青森県(八戸市田向冷水遺跡、同市市子林遺跡)でも並行的に極少数確認できるので北海の道属性が東北北部の一部に導入されたこと、具体例に共通するのは、属性が少量・継続的に転移先の属性と混在する。3 属性転移に対して制限があることから、転移先には強い強制的動機によって属性の受容が起こると考えられる。

### **2 基本的実体と“文化”変容の関係**

属性の再生は以上の状況において生じていた。「2 関係：授け手-受け手」の間を往来するのが「ヒト」「モノ」「コト」である。「ヒト」は属性変異の機構を内蔵する主体。「モノ」は属性変異が還元される対象。「コト」がそれらに内蔵・付帯する場合は属性と言い換え可能である。

ヒトの授受とは長期にわたる広い意味では婚姻・奴隷を含むヒトの異動である。モノの授受とは物体自体≒交易品・贈答品の移動である。



ヒト・モノの授受によって生じる属性変異は、属性の組み合わせと属性数の多寡・持続期間の長短により“文化”変容に多様性をあたえる。そして、それには3種類あり、“文化”同化とは転移先において複数の“文化”が合一すること、“文化”異化とは転移先において複数の“文化”が並立すること、“文化”交代とは転移先の“文化”が交換されることである。

**属性転移・合成①**は、ヒトの授受により生じる属性転移の第一で、遺物・遺構の内在的属性のみが転移する。一部に“文化”異化が生じた。

**属性転移②**は、ヒトの授受により生じる属性転移の第二で、遺構・遺物の表出・内在・中間的属性すべてが転移する。転移先では“文化”交代が生じた。

**属性転移・合成③**は、表出的属性転移には「ヒトの授受（ヒトの授受には内在的属性の転移が伴うことから）」に付帯していない情報のみが転移したとみなされる。一部に“文化”異化が生じた。その場面は短期的滞留における遺物・遺構の実見や口伝が想定される。

**属性転移④**は、モノの授受により生じる属性転移の第一で、遺物の表出・中間的属性の一部が転移する。この場合は部分的に“文化”異化が生じた。

**属性転移⑤**は、モノの授受により生じる属性転移の第二で、表出・内在・中間的属性全てに制限がある場合は移転先では。この場合にはある程度全的に“文化”異化が生じた。

以上より、属性変容と“文化”変容の関係は次のように導かれる。内在的属性は親密な接触(深層的關係)でなければ伝わりにくいので、静的属性といえる。その転移には恒常的接触が必要となるので、遺物・遺構の変容における「大変」といえる。表出的属性は内在的属性よりは自由度があり、疎遠な接触においても(表層～深層的關係)成立するので、動的属性といえる。その転移には恒常的接触は必要ないので、表出的属性の転移は遺物・遺構の変容における「小変」といえる。

また、属性数が多く・継続すると異化が拡大する傾向にあり、属性数が少なく・一時的だと異化が収束する傾向にあるので、転移する属性数の多寡・持続期間が“文化”変容に関わる。

以上より、「“文化”同化<“文化”異化<“文化”交代」が導かれる。

### 3 “文化”変容の諸相

属性の情報再生における「2 関係」のうち「授け手-受け手かつ転移元-転移先」である場合に同世代の他者(空間系)において生じる“文化”変容には以下のような諸相がある。

- ・3 属性全ての授受をおこなわない場合は「転移元≠転移先」が維持され、互いに属性分布圏は分立する。“文化”変容は起こらない：変容 S1。
- ・内在的属性のみを授受する場合は「転移元≠転移先」が維持され、互いに属性分布圏は分立する。転移先では深層に“文化”異化を含む：変容 S2。
- ・表出・中間的属性のみを授受する場合は「転移元≡転移先」へと変化するが互いに属性分布圏は共立する。転移先では表層に“文化”異化が生じる：変容 S3。
- ・少量の3属性が揃って継続的に転移する場合は「転移元≡転移先」へと変化するが互いに属性分布圏は共立する。転移先では一部に“文化”異化が生じる：“変容 S4。
- ・多量の3属性が揃って継続的に転移する場合は「転移元=転移先」に変化し、属性分布圏は合一される。転移先では“文化”交代が生じる：変容 S5。

属性の情報再生における「2 関係」のうち「授け手-受け手かつ転移元-転移先」である場合、

祖先 - 子孫関係(時系)において生じる“文化”変容には以下のような諸相がある。

- ・ 3 属性全ての授受を行わない場合は「祖先≠子孫」となり、“文化”交代が生じる：変容 T1。
- ・ 内在的属性のみを授受する場合は「祖先≒子孫」が生じ、子孫の深層に“文化”異化が生じる：変容 T2。
- ・ 表出・中間的属性のみを授受する場合は「祖先≒子孫」が生じ、子孫の表層に“文化”異化が生じる：変容 T3。
- ・ 少量の 3 属性が揃って継続的に転移する場合は「祖先≒子孫」が生じ、子孫の一部に“文化”異化が生じる：変容 T4。
- ・ 多量の 3 属性が揃って継続的に転移する場合は「祖先=子孫」となり、“文化”変容が生じない：変容 T5。

#### 4 “文化”の系統

II 章であげた続縄文が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継か否かという考古学的文化の系統問題がある。後継である場合、変則的の後継が「続縄文」、逸脱的の後継が「北海道型(?)続縄文」なのか?。林は続縄文を階梯的区分としたので、縄文系技術・文物と弥生系技術・文物の存在量の程度を視点としていた(林 1987)。

林によると、道南・道央について、砂沢式並行期の国立療養所所裏 XVIII 群・H37 丘珠式期(図 II-1 では氷川神社と表記)に縄文系要素の中に弥生系要素がある「続縄文」の状態をとした。この一時的現象は、土器では表 VI-2 で示した下北地方起源の要素であり弥生の要素ではなく、石器・住居・墓制にも弥生系要素はない。搬入品としては、林が事例した弥生系文物(図 II-2 参照)のうち、管玉が二枚橋並行期の H37 栄町式期(図 III-1 では恵山(古)と表記)に現れ、蓋が後北 C<sub>2</sub>・D 式期に稀にある(函館市石倉貝塚 P-4)。なお、搬入品については VIII 章で言及する。

以上より道南・道央については、砂沢式並行期における一部の自製品にみられる下北地方起源の要素は弥生系要素ではないことから、この期の文化は「変則的森林性新石器文化」の後継で、かつ林の「縄文晩期」である。次に二枚橋式並行期になると一部の搬入品に弥生系要素がみられ「北海道型(?)続縄文」である。なお、図 II-1 によれば下北地方は「北海道型(?)続縄文」に区分されているので、弥生系文物の経由地といえる。

道東北については、土器・石器・住居・墓制に弥生系要素はない。砂沢式並行期から田舎館 2・3 式並行期の文化は「逸脱的森林性新石器文化」の後継で、かつ林の「縄文晩期」である。搬入品としては弥生後期前半の後北 B 式期になると管玉がみられ、「北海道型(?)続縄文」に移行した。

弥生系要素が搬入品として僅かにある状況＝「北海道型(?)続縄文」とは、ほとんど「変則的/逸脱的森林性新石器文化」といえることが確認できた。そして、その弥生系要素は弥生的(水田稲作)社会基盤を持たない地域を経由してもたらされていた。

縄文系技術・文物と弥生系技術・文物の存在量の違いは生業に関連し、自然環境に依拠している。生業と自然環境の関係を次章で検討する。

## VII章

“文化”変容の背景



## Ⅶ章 “文化” 変容の背景

前章では3属性について、「なに：“文化” 変容」は、「いつ：土器編年による時期区分」・「どこで：3地域ないしは5地域」・「だれ：2関係」・「どのように：“文化” 同化< “文化” 異化< “文化” 交代」、起こったかを述べてきた。

次の問いは「なぜ文化変容がおきるのか」である。これは「なぜ情報再生精度に差異が生じるのか」という問いでもある。ヒトに内蔵されていた情報が再生されて人工物に具現する場合、他者(授け手-受け手)を通じて、自身(同一人)という社会的環境がまずあり、人工物を具現させるために自然環境が必要となる。この章は自然環境との関わりを検討する。

### 1 節 考古学における環境と生業

#### 1 自然環境とは

私が思う自然環境とは、人間が存在可能な時空間で、人間が先天的・後天的に獲得した手段を通じて精神的・肉体的糧を得るために(=生業)消費する対象。社会的環境とは、精神的・肉体的活動を行ううえで条件となる信仰・生産・消費と分配(貯蔵)・階層などである。なお、両環境は、人間が関与する・関与させられたと認知できる範囲=心象世界でもあり、物理的空間としての「実在の環境」とは異なる。

問題提起のⅡ章においては自然環境に関わり以下の課題が示された。第一に、生業(資源利用・物資交換)の変化が、「特化した経済」であれば「ほとんど縄文 technocomplex」あるいは「ほとんど森林性新石器文化 technocomplex」、新出的経済である「資源構造の拡張的開発」と「高移動性集団による物資交換」であれば「続縄文 technocomplex」と考えられる。「特化した経済」であるか「資源構造の拡張的開発」にあたるのか、要点は生業変化の新規性の評価である。そしてⅧ章で言及する「道央の優位性」が「資源構造の拡張的開発」によって生じたのかの解明にもつながる。

第二に、「中川モデル」は自然環境とその変動に対して狩猟採集が農耕よりも柔軟に応答する生業であることを示している。柔軟性とは生業内容の多様性である。「変則的/逸脱的森林性新石器文化」や「北海道型(?)続縄文」にはそれどのようにあるのか。第一の問題提起にも係わる。

社会的環境と自然環境のうち、まず自然環境において第一・第二の生業問題点を検討して、章末では精神的・肉体的糧を得る(=生業)行動様式についても言及する。

#### 2 生業の内容

生業とは「ヒトの生命維持にとって欠くことのできない手段」で、経済における下位区分のひとつであり、自然環境が背景にあり、縄文の生業は約7,000~5,000年前の最暖期に確立し、多少の環境変化の影響を吸収してしまうほどのシステムであった、と考えた(林1990a)。そして、林は、生業には自然環境が係わること、そのシステムは柔軟である指摘ことをしている。また、林は北海道の生業について以下に述べた(林1993)。自然環境により寡種多量の資源と繁忙期の季節的偏在があることにより、協業・分業が発達したため、新

規の生業導入に制約が多かった。

私が思う生業とは林の言説に沿うもので以下である。自然環境のなかでも地質相・植物相・動物相について、その一部である資源相に働きかけること「採る・育てる・換える」が生業で、具体的には採集・狩猟・漁労・農耕・交易などの行為である。そして、個人の業・集団の業、家族の業・血縁の業・地縁の業、性分業・年齢分業の形態がある。くわえて、分配の機構・貯蔵の機構がある。以上三つの要素が組み合わされて生業が成立している。

食料資源は、環境条件により分布に種類・量の偏在があり、かつ季節的に増減がある。このことは、生業に繁忙期と閑散期(例えば秋季と越冬)の変動を生じさせる。従って、異なる食料生産戦略があり、各生業(他の経済基盤、交換などとも)は繁忙期における調和を調整の第一とし、調和のもとに食料生産の総体が安定することを指向する。よって、ひとつの生業が独自に作動することは考えられない。そして新しい生業の導入は既存の生業との調和の必要から寄生という形をとるはずであり、新しい生業を加算的に付加することは逆に食料生産の不安定を招くはずである。

食料生産戦略に変化が生じたときの調整方法としては、各生業の繁忙期をずらす、効率を増減させるなどが考えられる。移動のコストは共同体の維持に不安定をもたらすであろう。効率増減を等しく行うには均等な労働力の増減が必要となる。それは閑散期の不安定(消費)を増減させることと同じである。生業ごとに増減の軽重を設ければ労働力の増大を伴わないが、重点がおかれた生業が採集、狩猟、漁撈の場合は資源を枯渇させる。

## 2 節 晩期後葉のサケ・マス漁

環境変動が生業変化を誘発するとすれば、Ⅱ章で述べた図Ⅱ-1の「波C」の時期：縄文晩期後葉～H37 丘珠式期から言及し始めなければならない。また、高瀬の「資源構造の拡張的開発」とは、特定の魚種の、しかも大型の個体に固執した資源利用であり、縄文文化との連絡性が乏しく続縄文期に一気に確立する。具体的には、石狩低地帯北部では続縄文期初頭にサケ科資源の重要性が高まり、それ以外では続縄文期前葉にサケ科以外の魚類資源の重要性が高まる、である。Ⅴ章3節で言及した江別市対雁2遺跡は縄文晩期後葉～H37 栄町期にかけて、石狩低地帯北部でのサケ科資源利用の好例である。以下で当該期の「サケ科資源利用が縄文文化との連絡性が乏しく続縄文期に一気に確立する」を検討する。

### 1 対雁2遺跡における土器集中と焼土の動物遺存体

この遺跡では、晩期後葉～続縄文前葉(対雁1～H37 栄町式期)の焼土と晩期後葉後半～続縄文前葉の土器集中(タンネトウL～H37 丘珠式期)から浮遊選別・水篩選別によって回収された動物遺存体が同定されている。

表Ⅶ-1は、列方向が同定された動物名、行方向が遺構のある南北線名・群名で時期を示し、行方向上段はその例数を示し、焼土については下段に「補正例数」を掲げ、土器集中については有無を○で示す。南北線名・群名の時期は「138～146・北側2」がH37 丘珠(新)～H37 栄町(新)期、「152～156・北側3」が対雁2期、「157～159・北側3」がタンネトウL期、「146～153・南側1」がH37 丘珠(古)～H317(新)期、「160～162・南側2」がタンネトウL期、「土器集中1」が対雁2～H37 丘珠(古)期、「土器集中3」がタンネトウL～対雁2期、である。

通常動物遺存体の定量的評価は、点数又は重量百分率で行われる。遺跡土壌の pH などの遺存条件を別としても、種別に同定の難易が伴う・種別の同部位に壊れやすさに由来する点数差がある・種別の同部位に重量差がある、のでそれを百分率で評価しても問題がある。そこで、まず同じ遺構から出土したものは残存具合が同じであると仮定できることから「例数」を用いることにした。また、「補正例数」は縄文時代晩期後葉と続縄文前葉における同定した焼土の数に開きがあり、実数による単純比較では誤りを導いてしまうために用いた。その方法は最多同定例数がある「157～159・北側3」に属する焼土40基を基数として、各群の実数を40基にそろえた場合の同定例数を算出した。なお、表Ⅶ-2の同定例数の下段も同様に「補正例数」である。

「補正例数」で焼土を比較すると、魚類においては、タンネトウL～対雁2期には淡水棲を主として海棲が少数みられ、H37 丘珠(古)～H317(新)期には淡水棲が主となる。頻出する魚種はサケ科でついでウグイ属であり、この傾向はタンネトウL～H37 栄町(新)期まで続く。珍しい例ではチョウザメの鱗板・イトヨ背鰭棘が H37 丘珠(古)～H317(新)期に出土して

表Ⅶ-1 焼土・土器集中の動物遺存体

同定済み焼土が所在する北線名	群名	各群内において種同定した焼土数	各群内における同定例数	チョウザメ	ウグイ類				イトヨ			サケ・マス類		イトヨ		魚類		スズメ目		鳥類		ヒグマ		イノシシ		
				鱗板	体幹骨	頭部骨	体幹骨	不明	体幹骨	頭部骨	体幹骨	頭部骨	体幹骨	不明	四肢骨	不明	体幹骨	四肢骨	不明	頭部骨	四肢骨	頭部骨	四肢骨	不明		
138～146	北側2	6	例数									2	2				2									
			補正例数=上段×6.67																							
146～153	南側1	20	例数	1	1	1						8	12	1			6	1								1
			補正例数=上段×2.00	2	2	2																				
152～156	北側3	20	例数		1	1	8	1		3	7	9					11	1					2			
			補正例数=上段×2.00	2	2	16	2		6	14	18							22	2					4		
157～159	北側3	40	例数			11	23	4	11	33	23	1	1	1	17	15	1	1	1	1	10	1	1			
160～162	南側2	5	例数				3			5	5					4										
			補正例数=上段×8.00				24				40	40					32									
土器集中3	北側3と南側2の間																									
土器集中1	北側3と南側2の間																									

同定済み焼土が所在する北線名	群名	各群内において種同定した焼土数	各群内における同定例数	ニホンジカ				大型陸獣類		キツネ		中型陸獣類		小型陸獣類		陸獣類		アシカ類	海獣類	その他				
				鹿角	頭部骨	四肢骨	不明	体幹骨	四肢骨	不明	頭部骨	四肢骨	頭部骨	四肢骨	不明	体幹骨	頭部骨	四肢骨	不明	四肢骨	歯牙	不明		
138～146	北側2	6	例数																		2			
			補正例数=上段×6.67																			13		
146～153	南側1	20	例数															2	6		17			
			補正例数=上段×2.00																			34		
152～156	北側3	20	例数			1	1							2						5	19			
			補正例数=上段×2.00			2	2								4						10	38		
157～159	北側3	40	例数	1	1	3	1	1		3	4	1	3	2	4	5	1	1	1	21	1	40		
160～162	南側2	5	例数																			5		
			補正例数=上段×8.00																				40	
土器集中3	北側3と南側2の間																							
土器集中1	北側3と南側2の間																							

\*補正例数は157～159の北側3を基準とした、小数点以下四捨五入

\*魚類：頭部骨＝頭蓋骨＋内蔵骨＋肩帯＋咽頭骨、体幹骨＝椎骨＋肋骨＋棘

\*鳥類：頭部骨＝頭蓋骨＋歯、体幹骨＝椎骨＋肋骨＋寛骨、四肢骨＝(主要骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・手根骨・足根骨＝主要、末端骨；手骨・足骨・指骨＝末端)

いる。サケ科とウグイ属は縄文時代晩期後葉には共に出土するが、続縄文前葉期にはサケ科のみが出土する傾向がある。獣類においては被熱を受けた試料であることから種同定率は低い、陸獣類が縄文時代晩期後葉～続縄文前葉まで一定程度みられる。珍しい例では、ヒグマ・海獣が縄文時代晩期後葉にイノシシが続縄文前葉前半に出土している。

晩期後葉～続縄文前葉までの焼土は例数の減少を伴いながらもその内容は連続的である。土器集中は晩期後葉後半～続縄文初頭の遺構で土器を大量に遺棄し、その中に焼け骨・炭化物が混じっていた。焼土では魚類の出土が主であるが、土器集中では獣類の出土がほとんどであり廃棄の在り方が遺構で異なる。

いっぽう、浮遊選別・水篩選別によって回収された植物遺存体は焼土と土器集中で種類が変わるところはない。ヒエ属などの栽培種はみられず、ササ属などの野生草本食用種も見られない。いっぽうカロリー源になるオニグルミ：673kcal/100g・コナラ属（コナラ：424kcal/100g、ミズナラ：430kcal/100g）・ヒシ属：190kcal/100g など秋季に結実する野生種がみられた（嶋田他 2012、科学技術庁資源調査会 1996）。

## 2 対雁 2 遺跡における遺存体から見た漁労

魚類は一般に産卵期に集団を形成（遡上もその一過程）する。捕獲もまたこの時期が効率的である。チョウザメ・イトヨ・イトウは春季、ウグイ属は春夏季、イワシは夏季、サケ科は秋季である。出土量の多いウグイ属・サケ科は遡河性であることから現地捕獲の可能性が高いので、当遺跡においては主に春夏季と秋季に漁労を行っていたと考えられる。サケ科とウグイ属は、アイヌ民族例では「ウライ漁：魚を誘導する柵と釜の組み合わせ」の対象魚種（瀬川拓郎 2002）にあたり、縄文時代晩期後葉におけるサケ科とウグイ属の伴出は混獲を示しているとも考えられるので「ウライ漁」に似た漁法と考えられる。

続縄文前葉期後半にサケ・マス類のみが出土する傾向については、サケ・マス類を対象を絞っていたのか、混獲する時期にサケ・マス類を捕っていないなかったのか、海水温の低下があったのか、など漁法・漁期の変更・環境変化が考えられる。遺存体種数については「北側 2 群」：H37 丘珠（新）～H37 栄町（新）期に激減し、「サケ・マスのみは」（表Ⅶ-2）は「南側 1 群」：H37 丘珠（古）～H317（新）期に増加しており、「北側 2 群」は気候の急冷期～回復期、「南側 1 群」は急冷期にあたることから、環境変によるサケ・マス増加、漁法の変更の可能性が考えられる。

またⅤ章でも述べたが、この遺跡は石狩川本流の蛇行洲にある。従来サケ・マス漁は中小河川で行われていたと推測されていたが、晩期後葉には既に石狩川本流ないしは支流との合流部で漁労を展開していた。

サケ科とウグイ属はともに頭部骨・体幹骨が出土していることから、当遺跡において、可食処理は 1 尾について頭～尻尾と身を分離する方法が、両者に共通していたと考えられる。

調理方法には、干す・焼く・煮るが想定さ

表Ⅶ-2 ウグイ属・サケ科の同定例数

同定済み焼土が所在する南北線名	群名	各群内において種同定した焼土数	各群内における組み合わせ例数	ウグイのみ	サケ・マスのみ	
					ウグイ + サケ・マス	サケ・マス
138～146	北側2	6	例数		3	
			補正例数		20	
146～153	南側1	20	例数		13	1
			補正例数		26	2
152～156	北側3	20	例数	1	6	8
			補正例数	2	12	16
157～159	北側3	40	40	1	15	22
160～162	南側2	5	例数		2	3
			補正例数		16	24



れるが、「焼く」「煮る」については、焼土を用いることが考えられる。焼土の構造は、土器を埋ける「小ピットが付帯する焼土」が極少数あり、大多数はそのような付帯遺構はない。

「小ピットが付帯する焼土」の小ピットとは上端径は10cm、深さ5cm位で、焼土1基に付帯する個数は、1個が頻出し、8個が最多個数である。小ピットの設置位置は、焼土の中心・焼土の周縁・焼土の中心+焼土の周縁がある。設置位置と設置個数の関係、設置個所が多いほど焼土の周縁に設置する例が多い。小ピットの上端径10cm・深さ5cm位という大きさは、土器に見られる底部暗色帯(土器に直接火熱が及ばないために形成された土器表面の色調の違いで、深鉢大(容積13.5%以上)は40mm位、深鉢中(容積4.0%以上)は26mm位である)の径・高さに対応するので、土器が埋けられた跡と推定される。

焼土に埋けて使用する場合は深鉢大・中が多く、深鉢小(容積1.5%以上)・袖珍(容積1.5%未満)は焼土に置いて使用するが多かったと考えられる。また、土器埋け跡がない焼土が圧倒的に多い理由は、C字状の焼土平面形、容積4.0%未満の埋けない土器を中心・周縁に置く、調理時間と火力(弱火で長く・強火で短く)などの事象との関連であろうか。

「煮る」は土器を埋ける小ピットが付帯する焼土、付帯遺構のない焼土は「煮る」「焼く」が考えられる。なお、土器集中では獣類の出土がほとんどであるが、土器集中1の土器付着物の分析(VII章2節5項)では、土器が海棲動物のうちサケ科の煮炊きに使われていたと推定されている。このことから、獣類の調理には土器を頻繁に用いてない可能性がある。

当遺跡の堆積の更新は春季、休止は夏秋季であり、焼土の形成(=処理・調理)が容易なのは堆積休止期であろう。ウグイ属・サケ科の漁期は春夏季と秋季である。両者は夏季と秋季において整合することからH37丘珠(新)~H37栄町(新)期にはサケ科の漁期の秋季に焼土の形成が絞られる可能性もある。

ただし、前述したように晩期後葉においては包含層や土器集中の焼土は居住の継続性を示しており、漁期と処理・調理の時期と居住の時期が重複する。そして、H37丘珠(古)~H317(新)期までは土器集中1と「146~153・南側1」の獣骨の在り方から同様の傾向が続く。

### 3 可食処理・調理の規模

漁労と可食処理・調理がどのような規模で行われていたのだろうか。生活面とは、堆積物の違いで分けた面ではなく、遺構・遺物の広がりから導き出した面である。同一生活面における焼土の数が多ければ盛んに漁労と可食処理・調理が行われていたと推定できる。

表VII-3 各群における焼土の密度

所属 焼土群名	群ごとの最多焼土数を有する生活面				最多 焼土 個数	最多 焼土個数 /面積
	生活面の範囲		生活面の広さ			
	東西×南北線名	グリッド数	面積 m <sup>2</sup>			
北側3	67~70	155~158	16	400	33	0.08
南側1	86~89	145~150	24	600	16	0.03
北側2	73・74	153~157	5	250	18	0.07
南側2	86~88	161~163	9	225	20	0.09
北側1	67~69	116~118	9	225	4	0.02
全調査区				18046	2001	0.11

表VII-3の右下段は全調査区における群別の密度である。これは垂直方向の総和における密度であるから必ずしも同時期の事象をあらわしてはいないが全容を示している。0.11か所/m<sup>2</sup>という密度と各群における最多焼土数を持つ生活面と比較すると、縄文晩期後葉の「北側2」「北側3」「南側2」がいずれも0.11か所/m<sup>2</sup>をやや下回るものの近い数値であり、続縄前葉の「北側1」「南側1」がかなり下回る数値である。縄文晩期後葉においては100m<sup>2</sup>の広さに7~9基の焼土が同時(夏秋季)あり、続縄前葉においては100m<sup>2</sup>の広さに2~3基の焼土が同時(夏秋季)があった。また、晩期後葉に1m四方の焼土が中央値8基とすれば、

最も離れた焼土間隔は 4.24m である。続縄前葉に 1m 四方の焼土が 2 基とすれば、最も離れた焼土間隔は 11.31m である。今後の検討になるが、少なくとも晩期後葉には 1 シーズンにおいて続縄文前葉よりは盛んに漁労と可食処理・調理が行われていたといえる。遺存体種数が H37 丘珠(新)～H37 栄町(新)期に激減していることとも整合する。

#### 4 同位体分析からみたサケ・マス類の利用

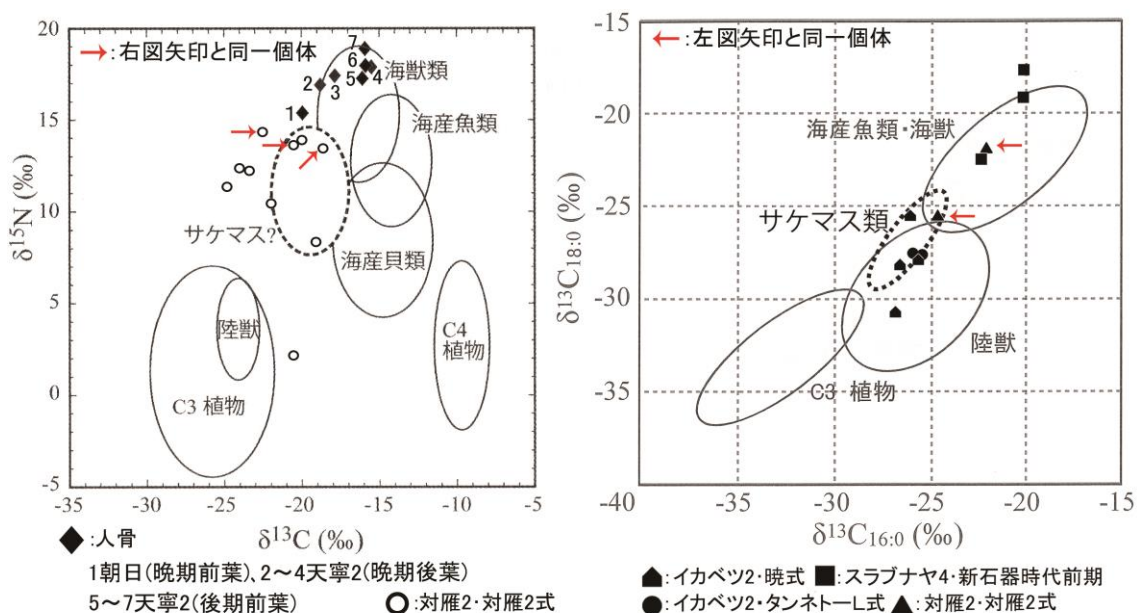
動物遺存体による分析以外にも次の方法によって当時の食性≒生業を知ることができ。δ<sup>15</sup>N・δ<sup>13</sup>C の比は食物のタンパク質組成が反映される。人骨であれば実際ヒトが摂取した食物のそれであり、土器内面付着物であれば煮炊きした食物のそれである。また、土器に吸着された脂肪酸の分子レベル δ<sup>13</sup>C<sub>18:0</sub>・δ<sup>13</sup>C<sub>16:0</sub> の組成を用いての分析もある。これらを用いて、サケ・マス類の利用の地域・時期を検討する。

図Ⅶ-1 左は人骨と土器内面付着物の δ<sup>15</sup>N・δ<sup>13</sup>C で、各食物領域・土器付着物データは北埋 2018b に、人骨データは北埋 2011・2015 による。

晩期後葉・土器集中 1 の土器付着物は 1 例を除いて、サケ・マス領域とその左側(δ<sup>13</sup>C: -25.0～-22.5‰)に分布する。対雁 2 遺跡土器集中 1 の土器はサケ・マスの調理と他の食物調理に用いられた。この遺跡は日本海から約 35km 遡った道央部内陸にある。

いっぽう、人骨は以下である。◆1(厚真町朝日遺跡 P-47 の人骨)はサケ・マス領域にはないもののその近傍にある。道央部の朝日遺跡(太平洋から約 15 km 遡上)では、焼土からは水篩選別によって回収された多くのウグイ属・シカ、極少数の海棲魚類・サケ科が出土している。◆2～4(天寧 1 遺跡魚骨層の遊離歯)はサケ・マス領域寄りの海獣類領域にある。道東部の天寧 1 遺跡(太平洋から約 5 km 遡上)では、魚骨層からは水篩選別によって回収された多くの海棲魚類、極少数のウグイ属・サケ科が出土している。◆5～7(天寧 1 遺跡の人骨)は高い δ<sup>15</sup>N 値を持つ海獣類領域にある。貝塚からは水篩選別によって回収された多くのキュウリウオなど海棲魚類・海獣類、極少数のサケ科が出土している。

図Ⅶ-1 右は土器に吸着された脂肪酸の分子レベルの δ<sup>13</sup>C<sub>18:0</sub>・δ<sup>13</sup>C<sub>16:0</sub> で、データは北埋 2018b による。



図Ⅶ-1 安定同位体組成 北埋文 2011・2015・2018b より引用加筆

千歳市イカベツ 2 遺跡(日本海から約 62 km 遡上)のタンネトーL 式(図中の●)はサケ・マス類領域にある。対雁 2 遺跡例(図中の▲)は、1 点はスラブナヤ 4 遺跡に類して海産魚類・海獣領域に偏り、もう 1 点はサケ・マス類領域側にある。図中の■はイカベツ 2 遺跡の早期前葉曉式で、サケ・マス類の領域と 1 例陸獣の領域にある。

図中の■は樺太南部スラブナヤ 4 遺跡の土器(新石器時代前期・スラブナヤ 4 段階、ホタテガイ背面圧痕が付く曉式 2 片を含む)で、分子レベル炭素同位体組成値は示されずグラフによる図示(スラブナヤ 4 段階は 3 点表示、グラフ中の■)のみであるが、グラフより読み取ったおおよその数値は、 $\delta^{13}\text{C}_{18:0}$  : -22.5~-17.5‰、 $\delta^{13}\text{C}_{16:0}$  : -22.5~-20.0‰である。それにより土器が海産資源(現生の海棲哺乳類や水棲魚食動物の脂肪に一致する、原典グラフでは Marine と表示)の調理に用いられたことを推定している(Kevin, Gibbs et al. 2017)。

この遺跡の  $\delta^{13}\text{C}\cdot\text{C}/\text{N}$  比分析では少し異なる傾向がある(国木田 2015b)。その試料はスラブナヤ 4 段階 9 片で、 $\text{C}/\text{N}$  : 6.8~10.8、 $\delta^{13}\text{C}$  : -23.8~-18.5‰、の 2 群を形成する。第 1 群(4 片、ホタテガイ背面圧痕が付く曉式 1 片を含む)は  $\text{C}/\text{N}$  : 6.8~10.8、 $\delta^{13}\text{C}$  : -24.0~-23.4‰であり  $\delta^{13}\text{C}$  に幅がなく、 $\text{C}_3$  植物・陸棲哺乳類由来である。第 2 群(5 片、ホタテガイ背面圧痕が付く曉式 1 片を含む)は  $\text{C}/\text{N}$  : 7.3~8.9、 $\delta^{13}\text{C}$  : -22.0~-18.5‰であり  $\text{C}/\text{N}$  に幅がなく、海棲哺乳類・海棲魚類由来に近隣する傾向を持つ。また、道東部の帯広市八千代 A 遺跡(太平洋から 29 km ほど遡上)の曉式 6 片の内面付着物についての  $\delta^{13}\text{C}\cdot\text{C}/\text{N}$  比分析によると、 $\text{C}/\text{N}$  : 8.1~13.1、 $\delta^{13}\text{C}$  : -25.2~-22.0、であり、スラブナヤ 4 遺跡と同様に第 1 群  $\text{C}_3$  植物・陸棲哺乳類由来の付着物という食性傾向がある(国木田 2015a)。

以上より、早期前葉曉式の土器調理において、複数食材の混用調理があったとしても、道央部の千歳と道東部の帯広の内陸では陸棲哺乳類への食性傾向が共通し、いっぽう樺太南部の海岸で海棲哺乳類・魚類への食性傾向がある。同じ土器型式を用いた集団でも離れた地域間では異なる食性傾向がある。そして、同一地点(千歳市)の早期前葉・晩期後葉において同じ食性傾向であることは、調理法・食性が遺跡の立地に依拠的であることを示唆する。くわえて、晩期後葉の対雁 2 遺跡とイカベツ 2 遺跡は同一水系の下流と上流にあり、類似した食性傾向の空間的広がりもみられる。

## 5 晩期後葉～続縄文前葉における石狩低地帯のサケ・マス漁

以前に以下の結論を導いた(鈴木 2015)。Floatation 選別を行った同一種の遺構があり通時的比較ができる石狩低地帯の遺跡においては、サケ・マス漁は機会があるごとに行われており、各時期を通じてコイ科あるいはウグイなど他の種が伴出する。

対雁 2 遺跡の動物遺存体から言えることは、サケ・マス漁は続縄文前期を待たずに隆盛していたが、続縄文前葉には環境の変化・漁法の変更があってサケ・マス漁に傾斜する。これは新出的経済である「資源構造の拡張的開発」とは言えず「特化した経済」に近い。また、同位体分析からみても新出的経済であるとは言えなかった。「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継は「ほとんど森林性新石器文化 technocomplex」的状况といえる。

ではなぜサケ・マス漁に特化したのかという問いが残された。沖積地末端部における変化は量的画期といえる。そして、この現象は札幌扇状地とそれに連なる自然堤防に顕著な現象である。Ⅲ章 1 節で既述したが、 $^{14}\text{C}$  生成率は全球における太陽放射量の増減を示し、アルケノン生成量は海水面温度昇降を示し、噴火湾データは夏秋季における北海道の太平洋側西部と沿岸、日本海側中北部と沿岸、の気温変動が推定され得る。それらによると、縄

文晩期後葉後半～続縄文前葉(H317 式期)までは冷涼化が進行し続けるようである。冷涼化によりサケ・マス遡上量の増加、湧水点の低標高への移動、扇状地末端の発達、が考えられる。自然環境の変化によりサケ・マス漁の機会・空間が増えたと考える。また、VIII章でのべるが続縄文中葉(後北C<sub>1</sub>式期)には冷涼化に別な要因が加わった。それは交易の強化が必要であり、これによってさらにサケ・マス漁に特化したと考えられる。

### 6 サケ・マス利用の評価にみられる相違

本論では動物遺存体・土器付着物と土器吸着物・人骨を評価の材料としてきた。それぞれの傾向が明確に対応してはいない部分がある。

朝日遺跡においてはサケ・マス類と同定された焼骨は極わずかであるが、人骨はサケ・マス領域の近傍にある。天寧1遺跡においては海棲魚類の遺存体が多いにもかかわらず人骨はサケ・マス領域寄りの海獣類領域にある。いっぽう、対雁2遺跡では、焼土はサケ・マス類とウグイ属が主であり、土器付着物と土器吸着物ではサケ・マス類が主である。動物種同定と土器付着物と土器吸着物分析の相性が良い一方で動物種同定と人骨分析の相性は良くない。

焼土に残る動物遺存体は、対雁2遺跡において、サケ・マス類は頭～尻尾と身を分離すると推定されることから煮炊きされたサケ・マス類には骨がないと考えられる。焼骨となり焼土中に埋もれるという状況は骨身未分離のサケ・マス類を焼く調理方法がとられたと考えられ、土器集中の獣類は焼く調理方法がとられたとも考えられる。焼土に残る動物遺存体は焼く調理方法の結果である。貝塚・魚骨層に残る動物遺存体は可食処理の結果である。土器付着物と土器吸着物は土器が壊れるまでの調理の累積である。人骨の成分は死亡する数年(1年半～3年くらい)までの食性である。分析結果の相違はこういった資料が持つ性質によるし、以下の状況にもよる。

サケ・マス類は土器で煮炊きされ、使用される場所は焼土であるから焼骨と土器付着物と土器吸着物の相性の良さが生じたと考えられる。いっぽう、人骨分析が示す領域は、ヒトが広範に移動していない場合には、土器に抛らない調理(サケ・マス類を直に焼くなど)や他地域から骨肉分離済み・調理済み(乾物など)を入手した、などの状況が考えられることから魚骨層・焼骨との相性があまり良くないと考えられる。各分析が表す傾向は、動物種同定<土器付着物と土器吸着物分析<人骨分析の順に食物情報の複相性が増す。

## 3 節 続縄文の生業

前節では続縄文前葉のサケ・マス漁は、晩期後葉のそれが「特化した経済」の一部であり、生業変化が冷涼化に由来することを述べた。続く続縄文中葉は冷涼から温暖化する時期であり後葉は再び冷涼化する。遺物遺構ではほとんど確認できなかった弥生系は生業においてはどうかであろう。気候変動に対応した「中川モデル」：狩猟採集における多様性の内容はどのようなものであるか。

以前に当該期の生業について、灌漑水稻耕作の導入を視点として、次の結論を導いた。生業分化が起こったのが弥生文化であり、生業分化(ただし、特化は生じる)しなかった文化が続縄文文化である(鈴木2009a)。鈴木2009aの生業部分に訂正・新情報を加えてゆく。

# 1 狩猟・漁撈・飼育

貝塚の形成は、道東部の太平洋沿岸・オホーツク沿岸では縄文中期を通して低調であり、噴火湾を除く道央以西においてもほぼ同様である(高橋 1991)。

動物遺存体は大まかに貝類・魚類・鳥・陸獣・海獣があり、知床半島・厚岸湾周辺・噴火湾周辺・礼文島周辺では海獣類、内陸河川でシカ・サケ科が主要である(西本 1984)。環境に相适应した縄文時代以来の種類構成を示すが、一部は縄文初頭以降に海獣類が増加する。

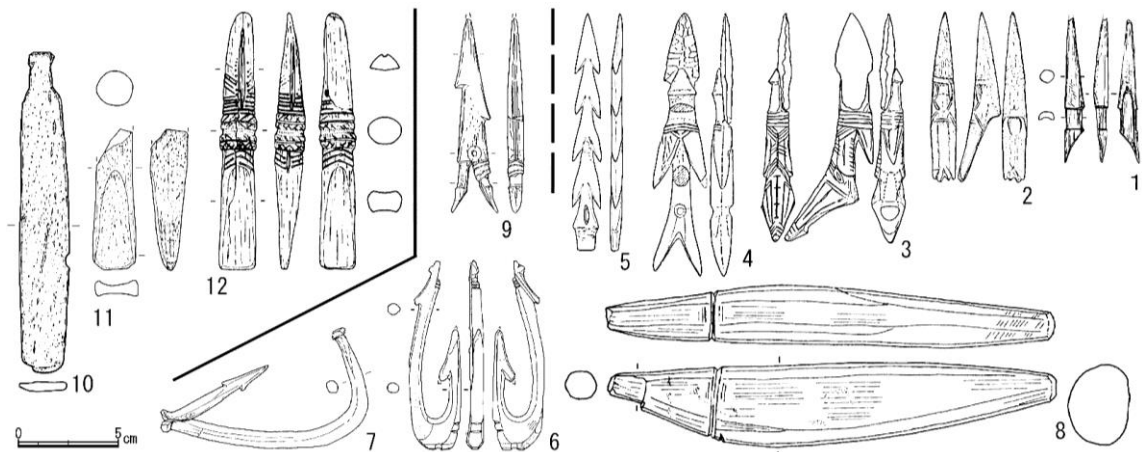
イノシシ焼骨は縄文後期後葉～縄文中葉まで道南・道央・道東の太平洋側に偏って分布し、幼・若獣の頭骨例が後期後葉～縄文初頭や、年累積降雪深 1.5m を越える多雪地帯にもある(表Ⅶ-4)。出土例数は少ないものの、幼獣例や頭部・胴部骨が出土していることから、イノシシは食料としてではなく、威信的行為が目的で移入し短期間飼育したと考えられる。また、この頃ヒグマ焼骨とイノシシ焼骨の供伴半ばありふれた事象となる(表Ⅶ-4)。ヒグマの飼育は齢不詳の事例が多いため確証はないが、幼獣例・焼骨供伴例があるので仔猪飼育と連係した仔熊飼育の可能性が残される(鈴木 2007b)。

縄文期の銚頭は無鏃・開窩・索溝・無鏃・単距または複距の雌形(図Ⅶ-2-1・2)が通有で、縄文期にはスプーン状の鏃装着部・閉窩・側面一索孔・有鏃・単距または複距の雌形(図Ⅶ-2-3、所謂「北海道型燕形銚頭」種市 2004)、無鏃・閉窩・背腹一索孔・有または無鏃・複距の雌形(図Ⅶ-2-4、所謂「恵山式銚頭」渡辺 1973)、背腹一索孔・有鏃の雄形(図Ⅶ-2-5)がある。北海道型燕形銚頭は縄文前葉後半(H317～H37 栄町式並行＝弥生前期後半)の道北部種屯内遺跡にある形態が東北地方の燕形銚頭と融合して道央部以西に分布したという説(種市 2004)と東北地方の燕形銚頭の直系という説(設楽 2005)がある。そして、恵山式銚頭は恵山文化自生説・東北地方の寺脇型銚頭の系譜説があったが、これに似る雄形が種屯

表Ⅶ-4 ヒグマとイノシシの遺跡共存例 鈴木 2007b 引用加筆

遺跡名	所在地	対象の時期	ヒグマ				イノシシ			
			幼獣	若獣	成獣	齢不明	幼獣	若獣	成獣	齢不明
虎杖浜2	白老郡白老町虎杖浜	縄文前期中葉(円筒下層a)				未端				主要・未端
入江貝塚	旧虻田郡虻田町入江	縄文後期前葉(入江)				○				○
稲倉石岩跡	松山郡厚沢部町峠下	縄文後期中葉(クサクマイC～・D)	頭・歯	主要・未端			頭	主要		主要
キウス跡跡L地区	千歳市中央	縄文後期中～後葉(・洞～三ツ谷)				未端				主要・未端
キウス4遺跡A・H・K地区		縄文後期中～後葉(・洞～三ツ谷)				未端				歯・未端
キウス4遺跡R地区		縄文後期中～後葉(・洞～三ツ谷)				頭・歯・主要・未端				頭・歯・主要・未端
三ツ谷貝塚	霧志郡乙卯町三ツ谷	縄文後期後葉(三ツ谷)				○				○
キウス5遺跡A地区	千歳市中央	縄文後期中～後葉/晩期後葉				未端				未端
	千歳市美々	縄文後期後葉(堂林～御殿山)				未端	頭・歯	頭・歯	頭・歯	歯・主要・未端
表々4		縄文後期後葉(堂林～御殿山)				未端				未端
		縄文後期後葉(堂林～御殿山)				未端		主要	歯・主要	頭・歯・主要・未端
西島松5	恵庭市西島松	縄文後期後葉(堂林～三ツ谷)				未端				未端
		縄文後期後葉～晩期初頭(堂林～東三川1)	未端			主要・未端	頭・歯・主要・未端	頭・歯・主要・未端		頭・歯・主要・未端
有珠善光寺2	伊達市有珠	縄文後期後葉～晩期初頭(堂林～東三川1)				○				○
		縄文後期後葉～晩期初頭(堂林～東三川1)				主要・未端		頭・歯	頭・歯	頭・歯・主要・未端
柏原5	苫小牧市柏原	縄文後期後葉～晩期前葉(堂林～B～BC併行)				頭・歯・主要・未端				頭・歯・主要・未端
西島松5	恵庭市西島松	縄文後期後葉～晩期前葉(堂林～B～BC併行)				未端				頭・歯・主要・未端
朝日	厚真町朝日	晩期前葉(B～BC併行)				未端				未端
社台1	白老郡白老町社台	縄文晩期中葉(C～C <sub>2</sub> 併行)				未端				未端
ママチ遺跡	千歳市真々地	縄文晩期後葉(A～A'併行)				未端				未端
		縄文晩期後葉(A～A'併行)				未端		主要		頭・歯・主要・未端
相木川7	恵庭市相木川	縄文晩期後葉(A～A'併行)				未端				未端
相木川4	恵庭市相木川	縄文晩期後葉(A～A'併行)				未端	頭・未端			頭・主要・未端
西島松2	恵庭市西島松	縄文晩期後葉(A～A'併行)				未端				頭・歯・主要・未端
頭無川	富良野市4417	縄文晩期後葉(A～A'併行)				○				○
好輝2	江別市上栄町	縄文晩期後葉～縄文初頭(A'～砂沢併行)	頭・歯・頭	主要・未端		頭・頭・主要・未端	頭・頭・主要・未端	頭・頭・主要・未端	頭・頭・主要・未端	頭・歯・主要・未端
油駒遺跡	様志町油駒	縄文晩期後葉～縄文初頭(A'～砂沢併行)				未端				頭・頭・主要・未端
舞舞遺跡	網走市舞舞	縄文晩期後葉～縄文前葉(A併行～興津)	頭・主要・未端							頭・頭・主要・未端
N30	札幌市西区	縄文前葉(H317)/縄文中葉(アヨロ2)				/未端				未端/
南有珠6	伊達市南有珠	縄文中葉(アヨロ3)				(主要)				主要
有珠モシロ(有珠10)	伊達市有珠	縄文中葉(アヨロ3)				○				○
鷹ノ木	茅渚郡森町鷹ノ木	縄文中葉(後北A～D)				未端				主要・未端
鷹ノ木4	茅渚郡森町鷹ノ木	縄文中葉(後北B～D)				未端				未端
オニキシベ2	厚真町鏡内	縄文中葉(後北B～D)				未端				未端
本輪西貝塚	室蘭市本輪西	縄文中葉(アヨロ3)/後葉(後北D)				頭・歯・頭・主要	○			頭・歯
桜町	亀田郡七飯町桜町	縄文中葉(アヨロ2・3)/(後北D'後葉(後北D))				未端/未端/未端				/未端/未端
宗磯岩跡	島牧郡島牧村宗磯	縄文中期・晩期				主要・未端				歯
西島松5	恵庭市西島松	縄文後葉～縄文? ?				未端				主要・未端

\*頭骨=頭、体幹骨(椎骨・肋骨)頭、四肢骨(主要骨・肩甲骨・上腕骨・桡骨・尺骨・大腸骨・脛骨・手根骨・足根骨)末端骨;手骨・足骨・指骨(末端) \*入江貝塚のクマはツキノワグマ



図VII-2 続縄文期の漁撈具 鈴木 2009a 引用

内遺跡などから出土しており、雌雄の違いはあるが、非回転系・背腹一索孔・多鋸であるから、道北にある技術と雌型が融合した型式とも考えられる。

釣針は道南で南川Ⅲ・Ⅳ期に内鋸単式釣針(図VII-2-6)、向合せ法による2部結合のL字軸結合式釣針(図VII-2-7)が登場し、L字軸結合式釣針から系譜を引く3部結合も登場する。これらの結合法は続縄文前葉には交叉法が用いられるが、続縄文中葉に入って向合せ法に変わり、後葉には再び交叉法が用いられる(福井 2003、種市 2004)。

魚形石器(図VII-2-8)は暖流系大型回游魚を対象とした曳き釣漁の疑似餌と考えられる(西脇 2001)もので、道央以西に分布し、道南部下添山期に初出し、やや遅れて道央・H37栄町期に出現する。道南では南川Ⅳ期まで、道央では後北A期までみられる。石材は粘板岩・泥岩・凝灰岩で、石斧素材である緑色片岩(千代 1988)はまれに用いられる。

宇津内Ⅱab期(弥生中期前半)道北部の浜中2遺跡の鯨骨製「へら」(図VII-2-10)が鮑起しという説(西本 2000)、ヤスと組み合わせて使用する鮑起しという説(種市 2004)もある。また、南川Ⅲ・Ⅳ期の道南部噴火湾岸には「槍先形製品」(図VII-2-12)と呼ばれる骨角器があり(伊達市教育委員会 2003)、これは先端が篋状・基部が着柄する形態である。なお、噴火湾東部では縄文晩期有珠善光寺2遺跡からは多くの遺存体、続縄文中葉南川Ⅲ期の有珠モシリからはアワビ製2部結合式釣針が出土している。へら・槍先形製品には着柄部が作出されているので、潜水漁でなくヤスと併用される船上からの鮑漁である可能性が高い。加えて、浜中2遺跡からも鯨骨製槍先形製品の先端部(図VII-2-11)が出土していることから、両遺跡では同様の漁撈が行われていた可能性を示す。鮑漁は暖流系の漁撈であり、本州以南の漁撈技術が続縄文期以降の道南部・道央部・道北部に存在したことを示す。

動物遺存体からみると、漁撈・狩猟・猪飼育は縄文時代晩期と同様の傾向を示すが、道東においては海獣が続縄文初頭以降に多くなる。漁撈具から見ると、道南部・道央部において南川Ⅳ期以前と以後では大きな変化が認められ、聖山KⅡ群・後北B期に北海道型燕形鋸頭、恵山式鋸頭、一索孔・有鋸の雄形鋸頭、向合せ法の結合式釣針、魚形石器が消滅する。いっぽう道東北部では変化が起こらず、縄文時代晩期以来の開窩・雌型鋸頭が主要な型式であり、これが用いられ続ける。

消滅する漁撈具を使用する獲得対象には諸説あるが、それを暖流系大型回游魚と想定した場合にこの石器と対象魚の消長≒海況変化、石器と対象魚の回游域が整合する(表VII-5

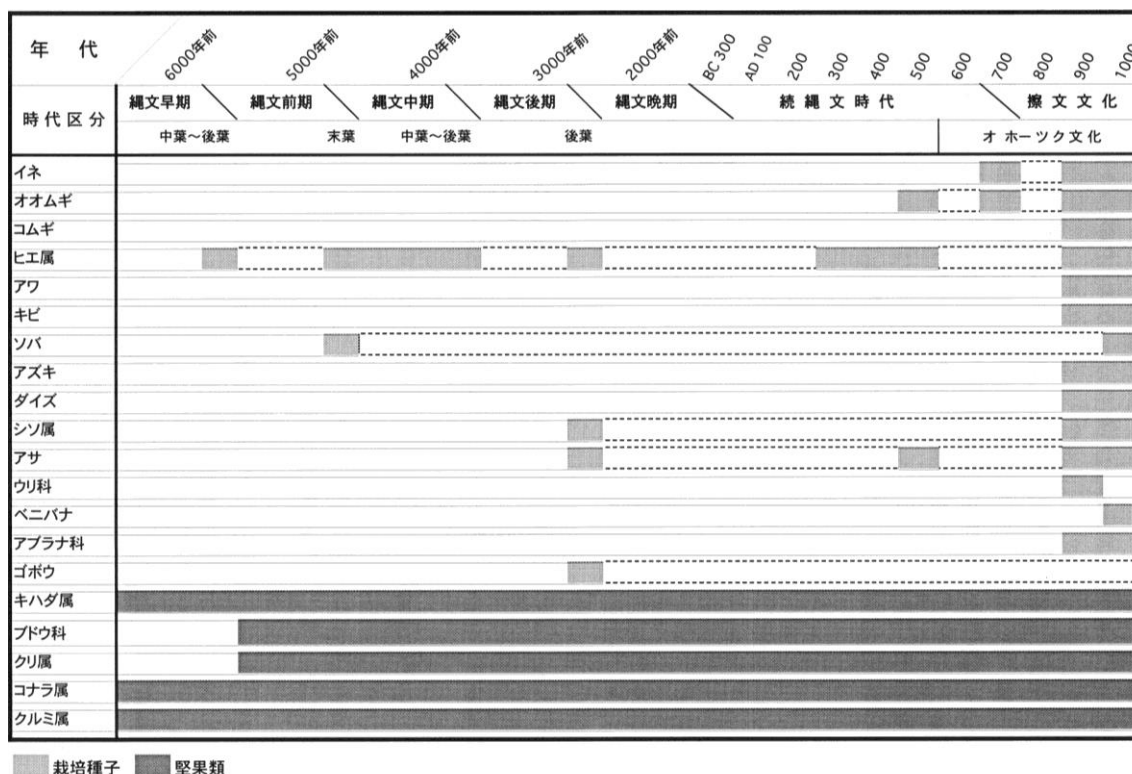
参照)。従来の魚形石器研究では、民俗例、機能推定から導かれた対象魚の大きさと、貝塚に遺存する遺存体の種・量から、捕獲対象は寒流底棲魚のタラ・オヒョウと推定する。貝塚の寒流底棲魚例は魚形石器の消長と相応せず、寒流底棲魚の生息域(全道)と魚形石器の分布(道南部・道央部)とは不一致が多い。魚形石器の出土量は実用具にしては極めて少なことから威信的漁労具であり、貝塚に残された捕獲対象の動物遺存体も極少ないはずである。動物遺存体量から直結に対象魚種を推定するのは無理がある。

海獣猟は威信的行為でもあり資源効率がよく(食糧以外に骨角器の素材・獣脂・獣毛皮が確保できる)、交易の対価となる。いっぽう、暖流系大型回遊魚漁は威信行為としての性格が強いものの(鈴木 1994)、資源効率が劣るため、海獣猟の盛行により衰退した。道東部の漁撈は縄文初頭以降も本来海獣猟が主体のためそのようなことが起こらなかった。貝塚形成の低調は貝類採集が生業から半ば脱落したことを示す。海獣猟への傾斜により資源効率の低い(低熱量・多い廃棄物)貝類採取は廃れたとも考えられる。

縄文初頭の道東における海獣猟への傾斜は、第二の道具・猪の対価獲得、後述するように道南部・道央部に比べて植物質食料依存が低い食性であったこと、気候変動により海獣が増えたことも想定される。いっぽう、下添山～南川IV期(弥生前期後葉～中期並行)の道南部・道央部・道北部では本州以南の影響により威信的漁撈の盛行がみられるものの、交易の対価獲得のため漁撈狩猟が道東に遅れて移行した。

## 2 植物遺存体・採集・栽培

植物遺存体については縄文時代以来の種類が検出される。道央の江別市江別太遺跡・札幌市K135遺跡・小樽市蘭島餅屋沢遺跡、道南の七飯町桜町遺跡からは、オニグルミ・クリ・コナラ亜属・トチノキ(現在の道央部には自生していない。ただし、縄文晩期千歳市美々<sup>び</sup>々<sup>び</sup>4



図VII-3 浮遊選別資料による有用植物の消長 椿坂 2013 引用加筆

遺跡に例があるのでその頃に道央に移植された可能性がある)・ヒシなどの堅果、ブドウ属・マタタビ属・キイチゴ属などの液果が検出されている。また、後北 B~C<sub>1</sub> 式期の札幌市 K514 遺跡からササ属(クマイザサ種子の C 安定同位体比は-25.1‰で C<sub>3</sub> 植物にあたる)が出土した。ヒエの穎果は 100g 当りの熱量が 311 k cal(鈴木 2009a)、ササ属穎果は 100g 当りの熱量が 350 k cal(山田吾郎 2013)で、ヒエとクマイザサが同等の熱量を有して炭水化物源となる。近世・松前地においても収量の多い救荒植物であり、アイヌ民族例(知里真志保 1976)においても粒食・粉食の例がある)が検出されており、これも縄文期からみられる。

続縄文初頭~中葉には栽培植物の花粉・遺存体が道央以西にみられる(山田・椿坂恭代 2006、高瀬 2006)。花粉はソバ属が続縄文初頭~南川 IV・後北 A 期に 7 例あり、続く後北 C<sub>2</sub>・D 期(古墳時代前期並行)にも検出される。遺存体は続縄文初頭~中葉(弥生前期~中期並行)にかけてヒエ属・アサなどがある。ヒエ属は「縄文ヒエ(イヌビエ型)・栽培型ヒエ」が続縄文初頭~後北 C<sub>1</sub> 期に 5 例・所謂北大期に 1 例あり、後北 C<sub>2</sub>・D 期にも検出されている(吉崎 1997、椿坂 2004、北埋 2014)。ほかにアサ・ゴボウが江別市江別太遺跡・北斗市茂別遺跡・K514 遺跡より出土し、千歳市キウス 3 遺跡からは H317 期のアサ種実圧痕 514 か所・X 線によるアサ種実潜在像 309 か所が付く土器が出土している(北埋 2016b)。また、刻文期前半:6 世紀後葉~7 世紀中葉(熊木 2018)の道北部オホーツク文化の網走市モヨロ貝塚からは裸性オオムギ・アワ・キビ・モロコシ・アサが確認されている(山田 2013)。

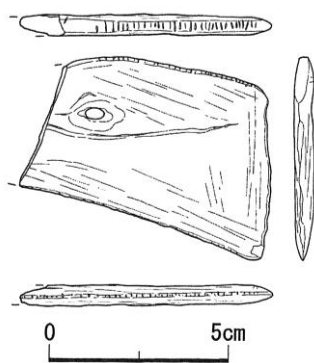
オオムギは、縄文時代後期後葉の恵庭市西島松 5 遺跡、縄文時代晩期後葉の小樽市塩谷 3 遺跡、後北 C<sub>2</sub>・D 期の札幌市 K135 遺跡・小樽市蘭島餅屋沢遺跡、円刺群 V~VII 期(古墳時代中後期)の札幌市 C544 遺跡の出土例がある。コメは後北 C<sub>2</sub>・D 期に蘭島餅屋沢遺跡の出土例がある。コムギは円刺群 V 期(古墳時代中期)の札幌市 C544 遺跡の出土例がある。アワは、縄文時代晩期後葉の塩谷 3 遺跡、円刺群 III 期(古墳時代前期)の札幌市 K39 遺跡北大工芸部地点の出土例がある。キビは円刺群 III~VII 期(古墳時代中後期)の K39 遺跡北大工芸部地点の出土例がある。下線が付された事例は混入又はその疑いが指摘されている(椿坂 2012)。

当該期において水田・畑などの遺構や耕作痕跡は検出されておらず、石製・木製具についても農耕具としての同定はなされていない。ただし、道南部鷲ノ木遺跡から石包丁?破片が 1 点出土し(森町教育委員会 2008b)、石包丁類似資料も数点あり(千葉英一 1990)、専用の収穫具の存在を示唆する。鷲ノ木例は包含層出土であるが遺跡は後北 A~C<sub>1</sub> 期であり後述斎野との矛盾はない。斎野分類によれば「III C2e:無挾有孔・有側・弱直背凹刃」の中型?にあ

たる可能性があり、それは弥生後期前半には東北南部に少数存在する(斎野 2002)。以上より、明瞭な耕作遺構・耕作痕を残さず、専用の農具をほとんど使用しない栽培方法が行われていたと考えられる。

植物採集は縄文時代以来変化がない。そして、道南部・道央部ではソバ・縄文ヒエ・栽培型ヒエを主要雑穀とする縄文時代以来の農耕が行われ、続縄文文化期に新たに加わった作物がなく、オホーツク文化から栽培種の受容もなかったと考えられる。

これらから、北海道において、植物採集・栽培は食物獲得効率の限界による技術移転・革新を必要としなかったといえる。



図VII-4 石包丁? 森町教委 2008b 引用加筆

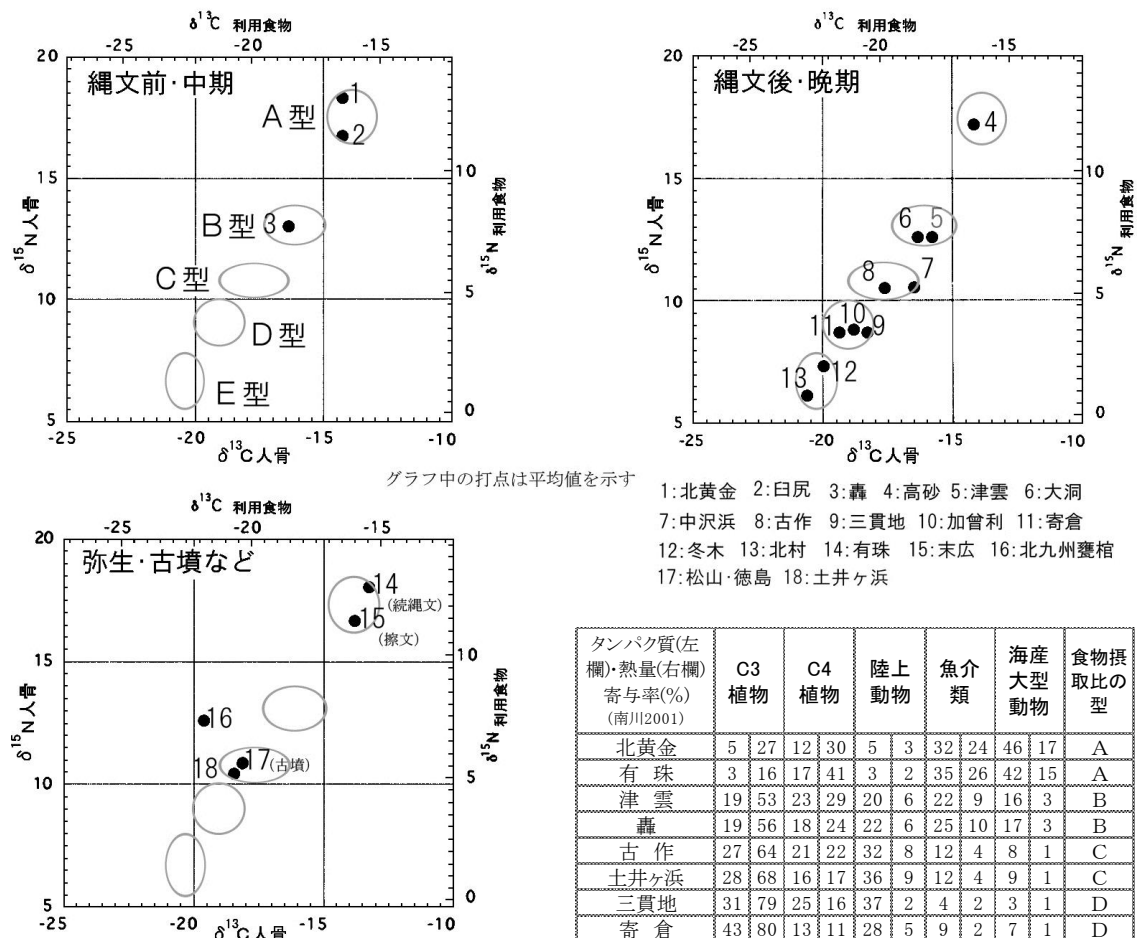


上述を支持する状況がある。後述するように縄文期中葉における道南沿岸部人骨(図VII-5の14:有珠)の食物摂取比は大型海産動物偏重型で熱量寄与比は動物質食料:植物質食料=4:6である(図VII-5下段右)。植物質食料のうちC3植物(コメ・ムギ・ササ属・ソバ・堅果など)は1/5以下と少なく、主にC4植物(アワ・ヒエ属など)が摂取されていたようである(南川 2001)。縄文前葉~中葉の状況からC4植物のうちアワは除かれるので、ヒエ属が4/5以上の熱量をまかなっていたことになる。道東においては栽培植物の検出例はなく、クリ・トチノキは自生していないので、ササ属・コナラ亜属が植物質食料の熱量まかなったか、動物質食料の比率が極めて多かった可能性がある。

### 3 食物摂取から見た生業における北海道と東北地方の相違

高瀬は狩猟に偏った熱生産であればあるほど採集・栽培の熱生産量の増加率が急激に増すことを示した(高瀬 2004a)。鈴木は動物質食料:植物質食料=1:2という熱量比と試算している(鈴木 1979)。林は動物質食料:植物質食料=約9:1、2~8:8~2、約1:9という食物摂取比を出している(林 1992a)。

筆者は林の食物摂取の型を南川のタンパク質寄与率(南川 2001)に基づいて細分しE型(植物偏重)=1:9、D型(陸産動物・植物均衡)=6:4、C型(魚介・陸産動物均衡)=8:2、B型(魚介偏重)=8:2、A型(海産大型動物偏重)=9:1に分けた。そして、食物摂取比のタイプ別の熱量寄与率(南川 2001)はD型=1:9、C型=2:8、B型=2:8、A型=5:5と試算され、植物質食料



図VII-5 食物摂取の類型1 鈴木 2009a 引用

表Ⅶ-5 食物摂取の類型 2 鈴木 2009a を引用

食物摂取比の型	食物摂取比		熱量寄与率比 (南川2001) (動物:植物)	採集・栽培 必要熱量 増産率 (高瀬2004)
	林分類 (動物:植物)	鈴木細分 (動物:植物)		
A 海産大型動物偏重	9 : 1	9 : 1	5 : 5	3.75倍
B 魚介偏重	8 : 2	8 : 2	2 : 8	2.38倍
C 魚介・陸産動物均衡	~	8 : 2	2 : 8	
D 陸産動物・植物均衡	2 : 8	6 : 4	1 : 9	1.69倍
E 植物偏重	1 : 9	1 : 9		1.31倍

$\delta^{15}\text{N}$ :10.6~13.9、 $\delta^{13}\text{C}$ :-25.9~-20.2 で図Ⅶ-1 左図のサケ・マス類の領域とほぼ重なる。測定対象の土器は円刺群Ⅲ~Ⅴ期である。また、伊達市有珠モシリ遺跡における人骨は(米田 2008)  $\delta^{15}\text{N}$ :約 20~約 14、 $\delta^{13}\text{C}$ :約-15~約-10.5 で図Ⅶ-5 の海獣類・海産魚類の領域=A型にほぼ重なる。遺跡はアヨロ 1a~アヨロ 3ab 期である。

植物遺存体に関して雑穀は両地域でほぼ同じものが検出されているが、東北地方ではそれにコメ加わる場合とコメ単独の場合があり北海道と異なる。東北地方は食物摂取比 B~D 型であり、人口が増加しても採集・栽培の熱生産量が飛躍的な増加率は生ぜず、従来の生業を激変することなく導入が可能で、灌漑水稻農耕の導入が容易におこなわれる。

ただし、雑穀・コメは栄養価が炭水化物に偏ること。その蛋白質の吸収には  $\text{Na}^+$ が必要であること。植物資源獲得への傾斜は骨角器の素材・獣脂・獣毛皮といった炭水化物以外の獲得を制限すること。が問題となり、熱量確保以外のため漁撈・狩猟の専門化が起こる。北海道では食物摂取比 A 型であり、コメと塩にかかわる生業の痕跡がなくて、漁撈・狩猟の特化が生じた。これらの要因は、食料生産の変更ではなく、威信の魚撈・対価獲得の狩猟の特化がおもに考えられる(鈴木 2009a)。

#### 4 生業組織の単位からみた特化

戦争が想定されない場合、竪穴住居面積の増減が生業変化に相応すると考えてもよい。なぜならば、床面積の増減=世帯規模の変化と推定されるからである。集落規模は大型化=大世帯は世帯数が少なくなり、小型化=小世帯は世帯数が多くなる。生業が多種にわたる場合は大世帯化し、小世帯化は一世帯あたりの生業種の減少である。

また、炉の数・形も世帯規模の変化を示すと考えられる。道東部網走・元町 2 期の複数炉、道東部釧路・興津期の長細い炉、道東部網走・後北 C<sub>2</sub>・D 期の帯状の炉などである。

気候変動と世帯の変化をまず考慮しないとすると、小世帯化において生業成果を安定させるには世帯数増をおこなわなければならない。労働力(労働時間・労働人口・労働組織)に大きな変化をきたさない方法が一世帯あたりの生業種の増加であり、変化をきたすのが一世帯あたりの生業種の減少、といえる。

この想定がなされたので全道の竪穴住居の規模(Ⅳ章 3 節 1 項)に再び言及する。比較する規模であるが、平面形が様々あることから長軸長によって論を進める。

まず、気候変動と長軸長に相関関係があるかは、図Ⅲ-3 下段の 4 に示した急冷期「波 C・波 D」の前後に長軸長が変化しているかどうかである。C に対応するのは道央部の大型化、C-D 間の温暖期に道南部・道東部釧路の大型化、がみられる。D は対応する現象はない。

続縄文中葉半ばの道南部、続縄文中葉後半の道東釧路では大型化がみられ生業種の増加が、道東網走ではそれが起こらなかったと想定される。いっぽう、道央部では続縄文初頭

が熱量に占める割合は高い。したがって、東北地方以南では B~E 型が殆どで、北海道は A 型であり食物摂取の対象が海産大型動物に偏重する。近年の続縄文期の分析においてもその傾向が追認されている。札幌市 K39 遺跡工学部共用実験棟地点における土器炭化付着物は(南川 2011)

以降に大型化し徐々に小型化しており生業種の増減が想定できる。植物採集・栽培においては縄文以来継続しているので、変化があるとすれば狩猟・漁撈・飼育で生じるはずである。環境変動との関係で推測すると、C-D間の温暖期は温暖性種に対する漁撈・狩猟に対して良好な環境で、Cの急冷期は寒冷性種に対する漁撈・狩猟に対して良好な環境となろう。

道東北部では続縄文初頭以降に漁撈具の変化が道東釧路では生業種の多様化が遅れ起こり、道東網走では起こらなかったとも考えられる。

道南部では漁撈具の変化と大型化が同期するので生業種の多様化が起こったと考えられる。しかし、中葉後葉の漁撈具消滅と住居規模との関係はデータがないので不詳である。

道中部の大型化は漁撈具では変化みられないものの、対雁2遺跡(図V-9参照)・H37丘珠遺跡のH37丘珠期では石鏃の大型化(1~2cm→3~4cm)がみられ(札幌市教育委員会 仙庭伸久氏は海獣猟に対応する変化と考える、とご教示いただいた。凹基石鏃の登場と考えてよい)、再び小型化(1~2cm)することから海獣猟が振るわなくなった=生業種の減少が生じた可能性がある。道中部恵山系においては道南部と同じく漁撈具の変化があるものの、道南部よりは規模が小さいので道南部と同様の生業種の多様化が起こったとは考えられない。なお、中葉後葉の漁撈具消滅と住居規模と関係は規模のデータがないのでその関係については不詳である。

ほとんどの場合において道具・組織単位がそろって変化することはなく、そろう場合も温暖期に限られる。生業再編がないか緩やかであった事は、「中川モデル」のいう柔軟性のもう一つの性質といえる。

## 5 生業の系統、「中川モデル」との関係

植物の採集・栽培は従来の縄文系要素であった。続縄文初頭の道東における海獣猟への傾斜は新規性をおびるものの、従来の縄文系要素によってなされた。道東部の漁撈は「逸脱的森林性新石器文化」の後継で「北海道型(?)続縄紋」ではない。いっぽう、下添山~南川IV群期(弥生前期後葉~中期並行)の道南部・道中部・道北部では本州以南の影響により威信の漁撈の盛行がみられるものの、後北B期(弥生後期並行)以降にはなくなる。道南~道北の漁撈は銚頭・鮑漁に新規性があるものの、この技術は水稻耕作の要素=林の弥生系ではない。くわえてB~E型の東北地方以南から陸獣・C3植物対象の生業技術は入っていない。「北海道型(?)続縄紋」に至るが「変則的森林性新石器文化」にもどる。

道東部の生業は林の「北海道型(?)続縄紋」ではなく、「逸脱的森林性新石器文化」の「epi-」であることから「逸脱継続型」と呼び換える。また、道南~道北の生業は「変則的森林性新石器文化」にもどるので「変則回帰型」と仮称する。これらは北海道の食物摂取が縄文期より一貫してA型であることと整合する。

「中川モデル」は自然環境とその変動に対して狩猟採集が農耕よりも柔軟に応答する生業であることを示している。柔軟性とは生業内容の多様性である。A型の「続縄文」「回帰型続縄文」は少種・大型を対象種とした結果であり、動植物を広く対象としているB~E型比べて多様性に欠ける。しかし、以下に示すようにA型の中においては単相を示していたわけではない。

表VII-6にみられるように全道において温暖期(図III-1参照、<sup>14</sup>C生成率の減=太陽活動の活発化期なので温暖傾向であったと推定される。大洞B期は波頂A-波頂B間、大洞C2期は波頂B-波頂C間、幣舞・緑ヶ岡期は波頂Cの直前、続縄文中葉諸型式期は波頂C-波頂

D 間にあたる)にあっても、ほとんどの場合に暖海性種と寒海性種であるサケ・マス類がともに出土する。このことから「逸脱継続型」「変則回帰型」は自然環境に極性を帯びる時期であっても多様性を維持しており、その背景には柔軟性＝生業内容の多様性があると推定される。加えて、Ⅲ章 3 節 5 項で一地域における陸域環境と海域環境に異なる挙動があることを述べた。そして「逸脱継続型」「変則回帰型」という生業の異なる構造があるとすると、陸域環境∨海域環境×「逸脱継続型」∨「変則回帰型」:4 通りの生業における複相性が見て取れる。これは多様性・柔軟性と呼び換え可能な性質である。「生業の特化」は生業内容の多様性に裏打ちされている。

## 6 生業に関わる行動様式とその空間

生業内容の多様性は自然環境に依拠し、そのうちに「逸脱継続型」「変則回帰型」の利用可能空間があるはずである。そして、それは生業が行われる範囲<行動範囲ともいえる。林はそれを「核領域」<「交渉圏」(林 1993a)という。「核領域」とは商品流通の前段階にあり「必要最低限の資源を確保できる範囲」(林 1992b)、「人間と土地が直に結びついている範囲」で、「交渉圏」とは「ほかの集団を仲立ちとして結びついている土地」である。

繰り返すが空間とは行動空間であり行動様式によって差異が生じる。以前ヒトの行動様式には以下があると考えた(鈴木 2015)。定住は住地の固定を指し、反対語は遊動である。移住は定住地の移動といえる。移動の状態として、時系では周期的移動・不定期的移動、季節的移動・年季や複数年季の滞留・世代に及ぶ滞留、空間においては狭域移動(生業領域内移動)、広域移動(同一文化圏内の移動)、超広域移動(異文化圏移動)であろう。「核領域」は狭域移動に相当し、「交渉圏」は広域移動・超広域移動に相当する。

「季節的狭域移動」とは、サケ・マス漁のようにヒトの生命維持ために行う秋季～初冬季の季節的漁撈、鯨脚海獣猟は冬季の季節的漁撈、クジラ類海獣猟夏季の季節的漁撈、暖流

表Ⅶ-6 暖海性種とサケマス類の共存例

遺跡名	時期	土器型式 表Ⅴ-1参照	産卵水温			漁獲 適水温	生息 水温	漁獲期 最適水温		生存 限界水温		遡上河川 最適水温	
			20~27	23~24	23~24	14~18	18~24	18~22	14~18	7~30	9~28	3~11	
			ハマグリ	ウネナシト マヤガイ	カキ 類	ブリ	スズキ	カジキ 類	マグロ 類	タイ 類	フグ 類	サケ・マス 類	
道南	晩期前葉	大洞B			+							○	
		有珠善光寺2	+		○		+	+	○			○	
		栄磯岩陰					+					○	
	晩期中葉	大洞C2	◎									×	
		有珠モシリ	+	+	+				+			○	
		南有珠6					+	+				×	
	続縄中葉	茂別			+	+					+		○
		恵山貝塚(崖下)							+				×
		尾白内貝塚			+	+	+		+				○
		有珠中野砂丘					+				+		○
恵山貝塚				+	+	+	+	+	+	+		○	
栄磯岩陰						+						○	
小幌洞窟B								+				×	
道央	続縄中葉	(内陸)江別太					○					◎	
		フゴッペ洞窟			+							×	
	(内陸)ウサクマイ	続縄後葉・擦文	北大(円刺群Ⅱ～Ⅷ)					+				◎	
道東北	晩期後葉	幣舞	+		+	+	+	+		+		○	
		緑ヶ岡				+	+	+				×	
		天寧1			+	+	+		+			○	
	続縄前葉	興津							+				○
		オシヨナイ2									+		×
		オシヤマツ川					+						○
		三津浦			+								○
		下田ノ沢			◎								×

系大型回遊魚漁は威信獲得のために行う春夏季の季節的漁撈、を行うための移動である。

例えば、縄文晩期の対雁2遺跡は日本海から約35km遡った道央部内陸にある。サケ・マス漁は遺跡傍の石狩川で行うが、遺跡からは海棲魚類骨や転磨が均等な海岸礫が出土するので川を下って海へ出て漁を行っていたと解される。ところで南北146～153線の「南側1」焼土群の包含層においても獣骨の散在が多々認められる。hand pickによる採取なので獣骨片は大きく、「南側1」包含層の獣骨遺存状態は土器集中に類似する。焼魚獣骨片が包含層中から出土する道央の事例は苫小牧市美沢1遺跡、千歳市美々2遺跡・ママチ遺跡・梅川4遺跡、恵庭市西島松5・2遺跡など縄文晩期後葉にみられる。美々2遺跡・ママチ遺跡・梅川4遺跡・西島松5遺跡は多数の土坑・土壙墓と少数の住居址が検出される遺跡でもある。「白色化した魚獣骨片が包含層中から出土すること」は野営地(=一時的滞留)の状況を示すのではなく住地であると考えられる。ただし、対雁2遺跡の場合には住居址・土坑墓が検出されていないことから頻りに利用される作業場といえる。対雁2遺跡は焼土群=林のいう「作業地」(林1993a)と墓地・住地=林のいう「集落」(林1993a)の分離が認められる。作業地と集落の移動が生じる。また、焼土群は年周回帰的使用がみられるので焼土群と集落の回帰的移動が生じていると考えられる。夏季と秋季の回帰的移動は頻りに移動といえるのでその移動距離は小さいことが予想される。このような形態は「季節的狭域移動」といえる。

対雁2遺跡から1.5km上流側に続縄文中葉アヨロ2ab期の遺跡群がある。この遺跡群からは魚形石器が出土する。この遺跡群から海へ出て暖流系大型回遊魚漁を行っていた。対雁2遺跡から石狩川-千歳川を約35km遡ったところに梅川4遺跡がありアヨロ2ab式が出土する。対雁2遺跡～梅川4遺跡の間ではアヨロ2ab式は出土するものの魚形石器は出土しない。恵山式期の漁撈行動域は川に沿って約35kmの範囲であると推定できる。林によれば欧州・中近東・アフリカなどの狩猟採集民の生業活動の行動範囲は半径10kmであるそう(林1992b)。この2点から恵山式期の行動域は長軸約35km×短軸10kmと仮定する。

「季節的広域移動」とは、熊皮など交易の対価獲得のために行う冬季の季節的移動であり、広域の「交渉圏」である。現生ヒグマは行動圏が広く・単独行動(育児期のメスは親子行動)をする。表Ⅶ-7によればオスが約192 km<sup>2</sup>・メスが約19 km<sup>2</sup>の平均行動圏を持つ。「熊皮七十枚:『日本書紀』斉明四(658)年条」(国立歴史民俗博物館2000)には交易品であれば一年分の熊皮の可能性があり以下の推測が成り立つ。♂:♀=1:1の捕獲比とすると、延べ6720 km<sup>2</sup>+665 km<sup>2</sup>=7385 km<sup>2</sup>から狩り集められたことになり、北海道本島の面積が77984 km<sup>2</sup>なので約9%の範囲からの熊皮と考えられる。また、沙流アイヌの民族例における年間捕獲数は0～5頭(渡辺仁1952)、上川アイヌのそれは2頭(瀬川2005)であり、「熊皮七十枚」は14～35世帯分の熊皮となる。また、上川アイヌの居住範囲を現在の上川地方とすると、その面積は9852 km<sup>2</sup>なので約13%の範囲からの集約と考えられ前述の範囲と略等しい。7385～9852 km<sup>2</sup>を14～35世帯で割り返すと1世帯当たり281～582 km<sup>2</sup>が熊皮域となる。また、仔熊を得る熊皮法は冬季の「穴熊皮」であり「季節的広域移動」といえる。

「季節的超広域移動」とは、漁撈・狩猟を行う範囲を大きく超えるもので、それはⅧ章で

表Ⅶ-7 ヒグマの行動圏 鈴木2015引用

	メス成獣			オス成獣		
	行動面積(km <sup>2</sup> )					
	最小	最大	平均	最小	最大	平均
渡島半島	3.2	39.1	21.15	25.3	83.2	54.25
苫小牧地域			0	277.2	495.8	386.50
浦幌地域(十勝)	31.2	43.1	37.15			0
知床半島	11.5	21.6	16.55	199.2	461.8	330.50
	11.5	26.0	18.71	125.4	260.2	192.81

佐藤喜和「ヒグマの生態」『ヒグマ学入門』北海道大学出版会(2006)

述べる渡海交易にあたる。その範囲は北海道固有の石斧石材、土器型式・技法、墓制の分布から推定される。石斧石材については弥生時代前期後葉～後期初頭の石川県八日市地方遺跡(佐藤ほか 2018)、土器については弥生時代後期前半の富山県高岡市下老子笹川遺跡(石川県埋蔵文化財センター久田正弘氏のご教示による)、弥生時代後期後半の新潟県西部、古墳時代前期前半の新潟県中部、古墳時代前期後半の山形県南部にみられ、北海道系土坑墓は後北 C<sub>2</sub>・D 期以降に東北地方中部にみられる。渡海交易は遅くとも弥生時代後期前半には北陸中部沿岸までを「交渉圏」海域にしたと考えられる(鈴木 2015)。北海道側渡航点の始点を汐首岬とした場合(松岡達郎 1981)、大間岬まで 26 km、佐渡島経由高岡市まで約 700 km である。サケ・マス類の河川漁は秋季、毛皮(罌)猟は冬季なので渡海交易は晩春・晩秋であろうか。春 5・6 月は越冬後の閑休期にあたり、また食料等の資産が 1 年のうちで減少する時期でもあり、冬期猟の獣毛皮は蓄積されている。秋 10・11 月は越冬準備完了後の閑休期にあたり、穀類を交換しやすい時期でもあろう(中村重英 1989、鈴木 2003)。なお、東北地方における北海道系墓制より「世代に及ぶ滞留」も認められる。

IV 章 5 節冒頭において道南・道央・道東釧路・道東網走・道北の各地域は半径約 120 km と略測した。北海道全域は 77984 km<sup>2</sup> であることから半径約 308 km と推算され、各地域は半径約 120 km → 115 km (10381 km<sup>2</sup>) と改められる。

「季節的狭域移動」の領域規模は河川に沿った長軸約 35km × 短軸 10km、「季節的広域移動」の領域は 281 (半径約 45 km) ~ 582 km<sup>2</sup> (半径約 93 km)、「季節的超広域移動」の領域は海岸に沿って最長約 700 km ということになる。

「季節的狭域移動」の領域は各地域の半径約 115 km に 30 個収まることになる。「季節的広域移動」の領域は各地域のうちにはまり「逸脱継続型」「変則回帰型」の範囲を越えない範囲、交易における「季節的超広域移動」の領域は「逸脱継続型」「変則回帰型」の範囲を越えて本州に及ぶ。

単純化したモデルを示すと以下になる。「変則回帰型」は道南・道央・道北の 3 地域であるが道北のかたちは道央に半ば包摂されているので(図 V-1 参照)、それを加味すると、2.5 地域:半径約 115 km + 半径約 115 km + 半径約 56 km (25953 km<sup>2</sup>) の「季節的広域移動」の領域、最低 75 個の「季節的狭域移動」の領域で構成される。「逸脱継続型」は道東釧路・道東網走に当てはまり、2 地域:半径約 115 km + 半径約 115 km (20762 km<sup>2</sup>) の「季節的広域移動」の領域、最低 60 個の「季節的狭域移動」の領域で構成される。縄文前葉～中葉における生業の特化は「季節的広域移動」以上の領域で生じ、後葉における交易を含めた生業の特化は「季節的広域移動」以上の領域で生じている。いっぽう、属性転移は各地域どうしの隣接地域で行われており、離隔地への転移は必ず隣接地を經由していた。つまり、半径約 115 km (=「季節的広域移動」の領域)を単位として転移が起こっていたことになる。

Clarke の「文化」は推定半径 32~322 km、「文化群」の範囲は推定半径 200~750 km、「技術複合体」の範囲は推定半径 750~3000 km である。属性転移は「文化」の中規模で起こる現象で、生業の特化は「文化」の大規模で起こる現象といえる。「季節的超広域移動」の領域=渡海交易の範囲は「文化群」の最大値にあたり、交易=交換は「非現地性物質」(林 1993a)の入手が目的であるため広範となる。漁撈・狩猟は「現地性物質」(林 1993a)の入手であり「季節的狭域移動」~「季節的広域移動」の領域で行われた。交易=交換は「非現地性物質」の入手であり「季節的広域移動」~「季節的超広域移動」の領域で行われた。

# VIII章

## 交換と“文化”変容





## VIII章 交換と“文化”変容

VII章で述べたように、自然環境より抽出したもの・加工したもの(人工物に具現した)には「現地性物質」と「非現地性物質」があり、「非現地性物質」の入手は交換による。

狩猟採集は変動に対する調整力が高いものの、生業にはVII章3節5項で述べたように陸域環境∨海域環境×「逸脱継続型」∨「変則回帰型」:4通りの差異があるので、これらの組み合わせによって交換の必要は変化する。

そして、弥生系文物が搬入品として僅かにある状況がVI章で確認された。これらは象徴的財の移入である。時期が下って、自製できない象徴的財・実用財の金属製品・鉄素材・鉄製品の移入がある。これらは生業変動の調整では入手できない。自然環境により生じる生業成果のうちの「現地性物質」の変動を社会的環境⇌ヒトの関係で調整することが交換のひとつの性格で、必要な財=「非現地性物質」の入手を社会的環境⇌ヒトの関係で調整することがもうひとつの交換の性格である。

また、各属性転移⇌“文化”変容は「季節的広域移動」=半径約 115 kmの領域を単位として起こっていたと策定された。「季節的広域移動」の領域以下では生業成果の調整としての交換と必要な財の入手としての交換が行われている。それよりも広範な「季節的超広域移動」の領域で行われる渡海交易は“文化”変容とどのような関係にあるのだろうか。

私は以前に交換について以下に言表した。交換は生業の一部で、食糧生産と交換が表裏の関係にある。利器の鉄器化が交換と“文化”の大きな変容要因であると述べた(鈴木2003b・2007a・2009a・2009b・2011)。これらは未だに有効であるが領域の視点が加わったので、2019年までの情報に基づいて再検討する。くわえて、違いの修正・説明不足の補足も行う。

### 1 節 考古学における交換とは

#### 1 交換の3方式

交換は互いの背景や意図・主導権が不明な場合には“文化”の交換が含まれることはなく、逆の場合には“文化”の交換が生じる。そして、「交換関係」と「交換物資」において以下の三つの様態をあらわす。

第一は「遭遇型交易⇌沈黙交易」。これは無用の紛争を回避するため“文化”の共有はなく、「もの」の交換に終始する表層的物資交換。

第二は「域内交易」。これは“文化”の共有に基づいた交換で、「かかわり」と「もの」が強く結合する深層的物資交換。域内交易は自製・獲得容易な非現地性物資(域内交換財と呼ぶ)を求める。

第三は「渡海交易」で“文化”は異なるが、「かかわり」と「もの」に弱い結合(互いの背景・意図の秘匿も可能)がみられる交換で、第一・第二の交換に偏らない中層的交換関係。渡海交易は自製・獲得不可能な非現地性物資(広域交換財と呼ぶ)を求める。考古学において、「渡海交易」は文化人類学用語を借用して「長距離交易」と呼ばれる。その用語は南太平洋の民族例に基づくものであり、南太平洋では「ウチ：“文化”を共有」の関係で行われ、ものの価値

が変質しない(儀礼的・贈与的交換)・変質する(取引的・売買的交換)、二面性を持つ。いっぽう、北海道と北日本との交易は「ソト：“文化”を共有しない」の関係または「ソト」の「ウチ」化がおこなわれる場合が典型であり、価値がしばしば変質する。文化人類学が示す事例と考古学における借用の意図は、北海道と北日本の状況と合致しないので、この広域交換を「渡海交易」と呼称する(鈴木 2007a・2009a・2009b・2011)。

表層的物資交換と中層的交換は円刺群 X～XI 期にあたる史料にも現れる。

「斉明四(658)年歳条」『日本書紀』によれば、阿倍比羅夫は肅慎から貢物を得る。貢物「生罽 2 頭・罽皮 70 枚」は罽が生きていること・多量の毛皮であることから、肅慎が自ら調達した交易品(鈴木 2015)を降伏の証として献じた可能性が高い。

「斉明六(660)年三月条」『日本書紀』によれば、阿倍比羅夫は肅慎と沈黙交易を試みる。

「持統十(696)年三月条」『日本書紀』によれば、渡嶋蝦夷と肅慎が賜物を受ける。

斉明六年三月条の交易は表層的物資交換であり「遭遇型交易」にあたる。斉明四年条は降伏の証なので片務的で、持統十年三月条は貢納的交易なので片務的であるが、両件は中層的交換であり、倭王権にとって貢納的交易は継続すべき重要政務であり、続縄文人にとっては交易機会が確約できる相手が出現した。これらは「渡海交易」にあたる(鈴木 2003b)。

## 2 域内交易・渡海交易の構造・機能

漁撈・狩猟・採集の成果には地域・季節によって偏在がある。よって、共同体ごとに資源の多寡があり年間にも増減がある。偏在を埋める方法には以下がある。生業成果の過分・不足分を調整する方法として移住があるが他の共同体との関係(石材・鉄器の需給も含む)が不安定になる。定住の場合は獲得力の増大(=専業化・労働力増・獲得技術改良)・保存技術の革新が考えられるが、定住コストの増大、人口の増大は資源の枯渇に繋がる。そのほか偏在を埋める方法には、戦争・税が考えられるが、続縄文においては考慮する必要はないと考える。移住・定住は集団の安定的存続という点から、偏在を調節する機能としては限界があるので、生業成果の配分を調整する域内交易が必要となる(鈴木 2007a・2009a・2009b)。

また、生業維持の労働は二種類に大別される。ひとつは個人分散型(個人的技術の差で成果が変動する。成果は個人に還元)であり、狩猟と鮎による漁労など仕留める方法の労働である。もうひとつは団体集約型(個人的技術差よりも技術の共有の規模で成果が変動する。成果は集団に帰属し集団内の個人に分配)であり、網による漁撈と採集と栽培がある。個人分散型は射倅性が高く、団体集約型は射倅性が低い。交易の原資(広域交換財)を生む毛皮獲得猟は、「季節的広域移動」・少量獲捕、個人分散型・高射倅性という不安定要因を内包するので、集団の安定が前提となる生業で、原資獲得を下支えする生業(「季節的域狭域移動」・多量獲捕、「射倅性低」という性質で、域内交換財・自家消費財を生む)と表裏の関係にある。地域・季節による生業成果の偏在が域内交易によって調節され、集団の安定が生じ、毛皮獲得猟が維持され、渡海交易は継続された(鈴木 2007a・2009a・2009b・2011)。

## 2 節 域内交易と渡海交易の様相

### 1 遺物に現れた広域交換財

北海道における広域交換財は以下の状況である。琥珀・黒曜石・頁岩の原産地は偏在し、

黒曜石素材は道東部・道央部や道南部の一部に、琥珀素材は道東部・道央部に、頁岩素材は道南部・道東部に、石斧石材は道央部に分布する(図 I-4 の◆印)。いっぽう、幼猪・碧玉管玉・ガラス小玉・鉄製品はそれらより少量でより広く分布する。後述するように道央では黒曜石産地ごとに偏差があることから選択・交換を行っていたことがわかる(表Ⅷ-3 参照)。

琥珀平玉が多い道央以東においても碧玉管玉との共伴例は極めて少なく、ガラス小玉との共伴例はない。琥珀平玉と碧玉管玉の墓坑内共伴例やガラス小玉と碧玉管玉の共伴例は少しある。ただし、ガラス小玉の出現期は碧玉管玉が激減する時期に当たるので排他的関係とまではいえない(鈴木 2009b)。琥珀に対して碧玉管玉・ガラス小玉には分布の違い・共伴状況の違いがある。よって、分布範囲の広狭・出土量の多寡・組み合わせの相違は、価値の上下に相応することが導かれる。

よって、琥珀・黒曜石・頁岩は3地域区分を越えて広がるので域内交換財よりは上位にあるのだろうが、幼猪・碧玉管玉・ガラス小玉・鉄製品より狭域の広域交換財である。また、円刺群 I 期以前では一遺跡における黒曜石原産地は、最近隣の前産地に偏るものの単一産地にならない。これは入手の経緯・経路にある程度の不特定の関係を示しており、下位の広域交換財は比較的緩やかな需給関係において交換された可能性を示唆する。

ところで、石器石材・琥珀の下位にあたる(土器型式の分布に相応する)交換財は遺物として見当たらない。植物遺存体は道南・道央で共通するものが多く、動物遺存体は道南・道央・道東で異なる種類がある。分布の広狭は交換財価値が階層状に布置される根拠の一つでもある。食料は自製・獲得容易な非現地性物資(域内交換財)にあたることから、それが交換される場合は、石器石材・琥珀の下位交換財といえ、その内で上述より植物性食料が上位、動物性食料が下位と想定できる。

## 2 ガラス小玉に関する新見解

上位広域交換財・副葬品としてのガラス小玉に関する消長・材質について2度言及した(鈴木 2009b 2011b)。消長については以下の内容で現在もほぼ同様に考えるが最新類例を加えて再述し、材質については誤記があり訂正したい。

ガラス小玉は全て移入品であり、色調は濃青(藍青)と淡青(水色)がある。副葬品として後北 B 式期・新に出現し、後北 C<sub>2</sub>・D 式期に急増し全道に広がり、円刺器群 V 期までである。ガラス小玉は琥珀平玉との供伴例はなく、碧玉管玉との供伴例は浦幌町十勝太若月遺跡で後北 B 式期 1 例・後北 C<sub>1</sub> 式期 1 例。ただし、前述したように碧玉管玉・琥珀玉とガラス小玉は排他的関係にあるといえない。なお、滑石平玉はガラス小玉に比べて出土例が少なく、同時期の東北地方に比べて北海道ではガラス小玉が好まれた。

化学組成については以下の状況である。森町鷲ノ木 4 遺跡:後北 B~C<sub>1</sub> 式期石器集中 7 の分析結果はカリガラス(森町教育委員会 2008a)。苫小牧市静川 37 遺跡:後北 C<sub>1</sub> 式期包含層・タブコブ遺跡:後北 C<sub>2</sub>・D 式期の 8・14 号墳墓・共和遺跡:円刺群 VI 期包含層、の分析結果は、Na 検出不能であるが、k が多く Ca が極めて少ない静川 37 遺跡とタブコブ遺跡例はカリガラス、k が少なく Ca が多く Al が少ない共和遺跡は低アルミナソーダ石灰ガラスの可能性がある(苫小牧市教育委員会 1992)。なお、タブコブ遺跡例は再分析されカリガラスと分類された(高橋美鈴 2015)。札幌市 K135 遺跡:後北 C<sub>2</sub>・D 式期の包含層出土例は濃青(藍青)1 個と淡青(水色)5 個で分析結果が不詳であるが、k・Ca の検出があり Al の検出がないこと、推定直径 9mm の大径の玉 1 個があることから、カリガラスまたは低アルミソーダ石灰ガラ

スの可能性があり、前者は主に私分類古<sub>1</sub>～中<sub>1</sub>が出土する層、後者は私分類中<sub>1</sub>～新<sub>2</sub>が出土する層から出土した(札幌市教育委員会 1987)。恵庭市西島松 2 遺跡包含層：後北 C<sub>2</sub>・D 式期?からは直径 7mm の大径の低アルミナソーダ石灰ガラス 2 個、カリガラス 1 個が出土している(北埋文 2010b)。

後北 B～C<sub>1</sub> 式期はカリガラス、後北 C<sub>2</sub>・D 式期はカリガラスと低アルミソーダ石灰ガラスがみられ、円刺群 I 期以降にソーダ石灰ガラスがある。このような北海道の状況を本州と比較すると、肥塚・田村(肥塚・田村 2012)によれば、カリガラスについては弥生時代後期～古墳時代前期に流通することと、後北 B～C<sub>2</sub>・D 式期(弥生時代後期～古墳時代前期)に出土することはほぼ整合する。低アルミソーダ石灰ガラス(ナトロンガラス・植物灰ガラス)については弥生時代後期後葉に出現し、古墳時代中期から再流通することと、後北 C<sub>2</sub>・D 式期～円刺器群 I 期以降(弥生後期末～古墳時代後期)に出土することはほぼ整合する。ただし、ナトロンガラスである場合は、弥生後期末の後北 C<sub>2</sub>・D 式期に時期差無く移入された、あるいは本州で廃れたものがやや遅れて移入された、と考えられる。

なお、厚真町朝日遺跡からは円刺器群期 I～V 期(古墳時代前期後半～中期)にあたる墓から高アルミナソーダガラスが 12 個出土している(北埋文 2015)。分析者によれば北海道に類例はないそうである(高橋 2015)。ただし、肥塚・田村(肥塚・田村 2012)によれば弥生時代後期に出現し、古墳時代前期後葉から再流通することとは整合する。

### 3 渡海交易の変容

北海道と東北地方における渡海交易は、東北地方に現れる北海道系土器・墓制と鉄関連遺跡の分布の状況より、交換方式が I～VII 段階に変遷する。そのうち、続縄文の交易は I～IV 段階にあたる(鈴木 2003b・2007a)。

**I 段階**(弥生時代後期前半以前)：道央日高では道東・道央・道南からの異系統土器が出土するものの、表出的属性の一部や内在的属性が異なる固有の土器が存在する(松田 2005・2006)。これは他地域の人が滞留しながら道央日高の人と石材交易をおこなったことを示し、石斧石材が移出財となっている後北 B 式期までこの状況が続く。もうひとつの石斧石材産地(神居古潭溪谷：図 I-4 の上の◆印)は道央北端～道北南西端に位置する。道央北端の深川市では道央固有の土器が存在するものの道東の土器も出土する。これは道央日高と同じ状況であり、同様の交易をおこなっていた可能性を示唆する。

北海道では、後北 B 式と後北系土坑墓が道東・網走、道南に拡がり、人の動きに変化も見られる。いっぽう、東北地方では続縄文土器そのものは見られず、南川 IV・後北 A・後北 B 式の表出的属性が転移した土器が津軽半島北半・陸奥湾周囲・下北半島・小川原湖周辺に極少数出土し(青森県埋蔵文化財調査センター木村 高氏のご教示による)、弥生時代後期前半の富山県高岡市下老子笹川遺跡からは帯縄文が付く天王山式が出土している(図 VIII-14)。北海道系墓制は認められない。いっぽう、北海道にも東北系土器が一定量みられず、恵山式のなかに二枚橋～田舎館 2・3 式の表出的・中間的属性の影響が確認できる(設楽博己 2003、高瀬 1998)。またそのころ、東北地方の日本海側では宇津ノ台式が佐渡島・新潟県沿岸まで西へ分布を拡げる(相沢清利 2002)。

東北・北陸地方において極少数の北海道系土器が沿岸部に出土するものの、北海道系墓制がないので北海道続縄文人の定住は本格化していない。日本海沿岸では後北 A・恵山 ↔ 念仏間 ↔ 宇津ノ台 ↔ 小松式など、太平洋側では恵山 ↔ 田舎館 2・3 ↔ 龍門寺と各型式が連接

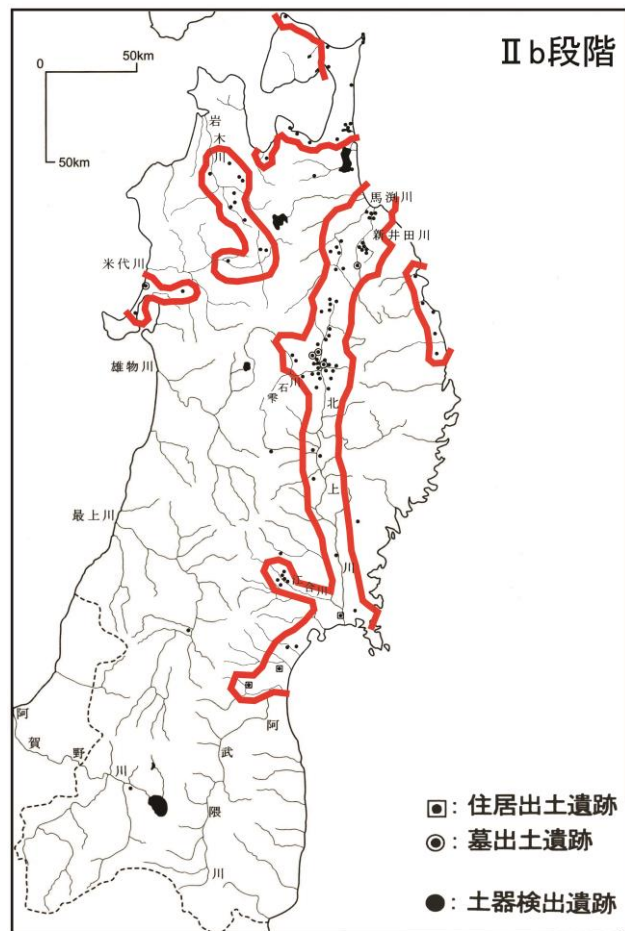
して分布する。以上より、その交易は、原産地(=翡翠・碧玉製管玉などの採掘・加工)から日本海沿岸(島嶼部を含む)を滞留しながら中継ぎ式に運ばれる方法で、中継点は各型式分布の周縁域に散在すると考えられる。I 段階は中継ぎ式の滞留型交易を行なっている時期。

北海道からの移出財は石斧石材で(鈴木 2008)、道央日高の額平川流域に産する(図 I-4 の下の◆印)(合地信夫 2005)。この石材は弥生中期初頭の石川県小松市八日市地方遺跡が最西例で、弥生前～中期に青森県・秋田県北部に多く例がある(佐藤 2016、佐藤ほか 2018)。移入財(翡翠・幼猪、碧玉管玉・南海産貝装飾品)は象徴的財で縄文時代以来の種類である。

**II a 段階**(弥生時代後期後半)：東北地方・新潟県において、少数の北海道系土器が日本海側に偏り分布するものの、北海道系墓制がないので北海道続縄文人の定住が本格化している可能性は低い。道央以西、道南部でやや多く天王山系土器(赤穴式)が認められる。またそのころ、東北北部起源の天王山系土器が福井県東部沿岸～関東北部まで分布を拡げる(相沢 2002)。北海道系土器(聖山 KII・後北 C<sub>1</sub>)と東北系土器(天王山系)が混在して新潟県まで拡散するので、それぞれが直接に北陸弥生土器圏(法仏・月影式)と接触するようになり、II a 段階は滞留型交易から定住型交易への移行期であり中継方式はとられなくなったと推定される。ただし、II a 段階にも I 段階の日本海側経路が踏襲されており、金属器・ガラス小玉は翡翠・碧玉管玉の流通の仕組みに乗って移入されると考えられる。

北海道からの移出財は、弥生後期後半には石器自体が激減するので、石斧石材ではない。考古学上の直接的な証拠はないものの、漁労体系の変化(魚形石器の消滅・銚頭の変化)から陸獣毛皮や海獣毛皮が考えられる。北海道における移入財にはガラス小玉・金属器がある。ただし、金属器の出土量は極めて少なく、石器組成に変化がないので実用財といいがたい。移入財は実用財の機能を有する象徴的財(「第二の道具」)であり、移出財は象徴的財に変わる。この組み合わせは縄文時代～I 段階の傾向と異なり、II b 段階へと引き継がれる。

**II b 段階**(弥生時代後期末～古墳時代前期中葉)：東北地方では後北 C<sub>2</sub>・D 式とその模倣が、日本海側は新潟県まで、新たに太平洋側に経路状分布を示して宮城県にも拡散する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、新井田川上流、雫石川・中津川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部。また、東北地方において II b 段階以降に方割礫・黒曜石製石器が少数出土し始める。それらは製作・使用する人々の移住を



図Ⅷ-1 後北C<sub>2</sub>・D式の分布 鈴木 2003b 引用加筆

示すと考えられる。北海道では後北 C<sub>2</sub>・D 式と後北系墓制が北海道全域にひろがり、極少量の赤穴式が道央以西に分布する。東北地方における北海道系墓制は少数ではあるが、岩手県(4 遺跡)・秋田県(1 遺跡)にみられる。これらを当該期の北海道と比較すると、東北は楕円形である(北海道は円形)、袋状土坑が長軸上である(北海道は長軸右)、袋状土坑の位置は様々(北海道は坑底と壁面の境がやや多い)、柱穴様土坑は「長軸両端 2 本」(北海道も同じ程度ある)である(表 VI-13 参照)。

東北地方において、北海道系土器が経路状に分布し、北海道系墓制が出現する(内在的属性においては若干の変異があるが、表出的属性・中間的属性は共通する)ので少数の北海道続縄文人が物資の結節点(北海道系土器の集中点:約 50 km 間隔)を結んだ経路に移住し、恒常的定住型交換を開始した。この段階は、II a 段階を踏襲しながら直結型の関係が強化された。金属製品は実用財の機能が増し、当該期以降、鋼・金属製品獲得の交易が他の生業活動の基盤となる。II b 段階は定住型交易の開始期。

北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉(全道に分布し、当該期に急増)と刀子・鉈・板状鉄斧(出土例は増えて鉄器・石器組成に変化が見られ、実用財としての用途が増す)がある。

**III 段階**(古墳時代前期後葉～飛鳥時代前半)：東北地方では円形・刺突文土器が日本海側は山形県まで、太平洋側は経路状分布を示して宮城県まで分布する。III b 段階になると分

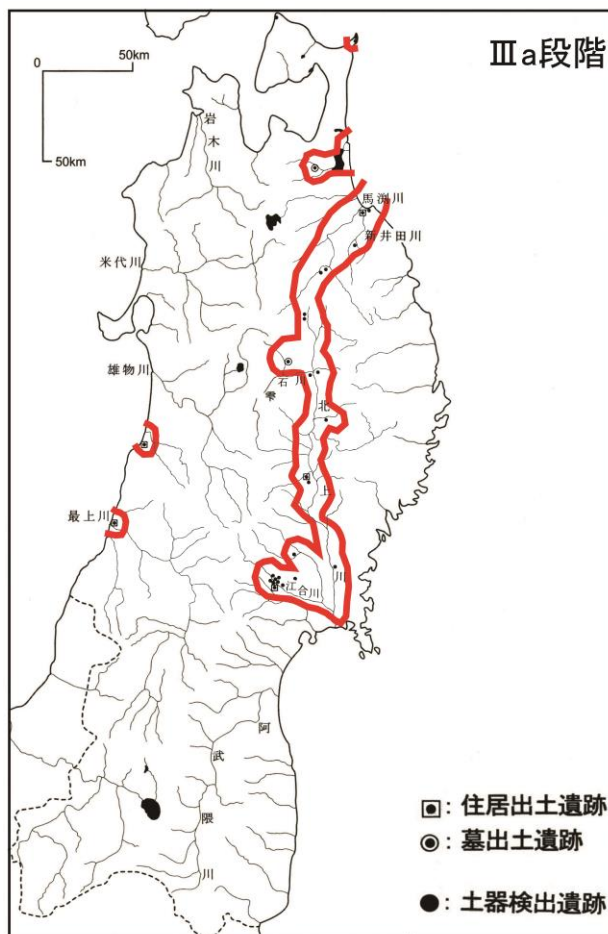


図 VIII-2 I ~ V 期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003b 引用加筆

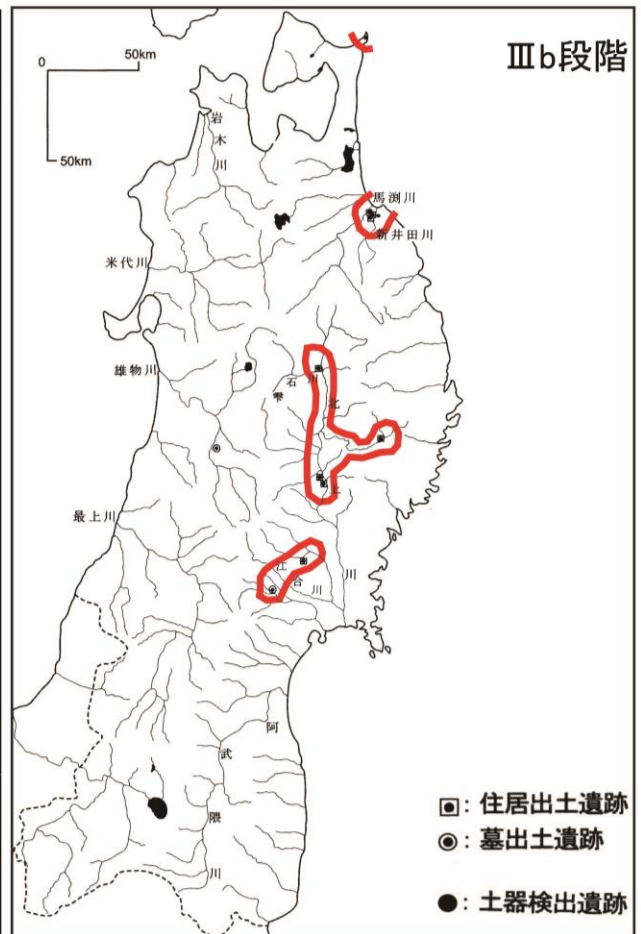


図 VIII-3 VI ~ VII 期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003b 引用加筆

布域が北退する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、馬淵川・安比川の合流点、雫石川・中津川・北上川の合流点、胆沢川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部で前段階よりはやや分散する。

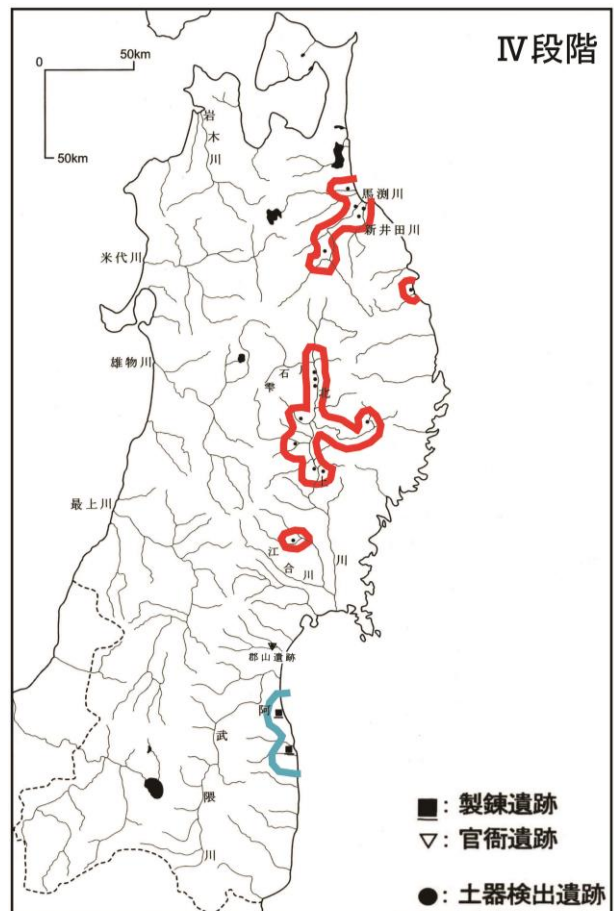
東北地方における北海道系墓制は極少数青森県(2 遺跡)・岩手県(2 遺跡)・秋田県(1 遺跡)・宮城県(1 遺跡)にみられる。円刺群Ⅰ～Ⅴ期について当該期の北海道の墓制と比較すると、東北は楕円形が多い(北海道は円形)、袋状土坑が長軸右である(北海道も同じ)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、柱穴様土坑「長軸両端2本」である(北海道は事例を欠く)(表Ⅵ-13 参照)。円刺群Ⅵ～Ⅷ期について並行期の北海道の墓制と比較すると、東北は隅丸方形が多い(北海道は円形と隅丸方形ほぼ同数)、袋状土坑が長軸右(北海道は長軸上)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、「四隅突出」墓坑がある(北海道も同じ)、長方形木棺に袋状土坑が備わる(北海道にはない)(表Ⅵ-13 参照)。

東北地方では北海道系土器の経路状分布に短縮・寸断があり、北海道系墓制には在地墓制との融合がある。円刺群Ⅰ～Ⅴ期(図Ⅷ-2)では内在的属性・中間的属性においては若干の変異はあるが共通点が多く約50km間隔は維持される。円刺群Ⅵ～Ⅷ期(図Ⅷ-3)では内在的属性においては変異・融合(木棺+袋状土坑)があり約50km間隔は維持されない。北海道内では東北系土器の減少がある。北海道続縄文人と東北古墳時代人の混交が進み、関係は恒常的になり北海道墓制は変容し始める。

北海道では、Ⅲa 段階には定住型交易の安定により金属製品の恒常的確保が可能となる。Ⅲb 段階には金属製品の潤沢な供給により生活用具の鉄器化が進み石器が殆んど廃用された。「かかわり」重視の方法(社会的距離を縮める方法)が「もの」の取引に偏った交換関係に変容し始める。Ⅲ段階は定住型交易の完成期。

北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉(量が多いのは円刺群Ⅲ期まで)と金属器(円刺群Ⅰ期に石器は切る機能が喪失する(高橋 哲 2005)ので、金属器は実用財となり、円刺群Ⅵ～Ⅷ期に出土例が増えるので安定的供給があった)がある。小樽市蘭島D遺跡の円刺群Ⅷ期の土坑墓からはコメが出土する。

**Ⅳ段階**(飛鳥時代後半)：東北地方では北海道系土器の分布はさらに縮小する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、雫石川・中津川・北上川の合流点、胆沢川・北上川の合流点、前段階よりも分散傾向がある(図Ⅷ-4)。



図Ⅷ-4 X～XI期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003b 引用加筆

東北地方では、北海道系土器の経路状分布・北海道系墓制が消失しつつある。前掲の『日本書紀』斉明条・持統条に拠れば倭王権と海路を通じて接し、貢納的交易を始めた。よって、北海道系統縄文人は蝦夷との社会的距離を縮める必要がなくなり、東北在住のかれらは交易仲介者としての役割を失い在地人化した。定期的に海路を通じて滞留して交易する。「もの」の取引に偏った関係へ移行する。Ⅳ段階は定住型交易から滞留型交易への移行期。

北海道からの移出品は斉明4年・是歳条には生罽と罽毛皮があり、律令期の史料から海獣毛皮も含まれる可能性がある。遺物に現れた移入品は、鉄鏃・刀子・鉄斧や鉈・鉄鎌。象徴的財の大刀・横刀・攝子・ガラス玉がある。布類は鉄製品を梱包した痕跡として遺存する。史料に載る移入品は、持統10年3月条では「錦袍袴」・「緋紺繩」・「鉄斧」、斉明6年3月条では「綵帛」・「兵鉄(武器または素材)」がある(鈴木 2003b)。

#### 4 渡海交易と“文化”変容(Ⅵ章5節3項参照)

渡海交易のⅠ段階は中継ぎ式の滞留型渡海交易だが、Ⅱ段階以降と異なり、拡張した域内交易が接続した形態であるから、従来の方式の発展形といえる。したがって、Ⅰ段階の渡海交易によって文化変容は引き起こされなかった。“文化”変容 S1 にあたる。

渡海交易のⅡa 段階には、北海道では移住が付帯する域内交易により文化異化が生じ、新潟県・東北地方でも滞留型渡海交易により微かに文化異化が生じる。これらは生業 ↔ 域内交易 ↔ 渡海交易の関係が成立したことによる文化変容である。北海道内においては“文化”変容 S5 にあたり、北海道と新潟県・東北地方の間は“文化”変容 S3 にあたる。

渡海交易のⅡb 段階には、北海道では文化交代が継続し、東北地方では渡海交易に少数者の移住が付帯し、モノの授受を維持するために文化異化が継続した。この時期の前段にはコト・モノの授受があったことも文化異化の拡大が抑制された一因である。渡海交易のⅢa 段階はⅡb 段階と同様の構造を維持する(約50km間隔の結節点の維持)。北海道内においては“文化”変容 S5 にあたり、北海道と新潟県・東北地方の間では“文化”変容 S4 にあたる。

渡海交易のⅢb 段階～Ⅳ段階には主要な交易相手の交代により、転移する属性量が少なくなり文化異化が停止収束し、東北地方では蝦夷と北海道系統縄文人との間に混交が生じる。また、円刺群Ⅺ期～9世紀前葉における東北地方から北海道への属性転移(擦文文化の成立)は、交易仲介者としての役割を失った東北在住の北海道系統縄文人の後裔が故地に戻ったことによって生じたと考えられる(鈴木 2007a・2016c・2018b)。北海道と新潟県・東北地方の間では“文化”変容 S4 にあたり、東北地方の内では“文化”変容 S1 にあたる。

### 3 節 鉄器化の過程-渡海交易の動機

#### 1 石器から鉄器へ

##### a 鉄器組成・石器組成の変化

<H37 丘珠～後北 B 式期> 確実な墓坑出土例は、紅葉山 33 号遺跡の鉄鏃・不明鉄製品:アヨロ 2a～2b 式期、タブコブ遺跡からは铸铁製板状斧?:アヨロ 2a 式期が出土している(佐藤ほか 2018)。それ以外はアヨロ 3a b 式期に 1 例(不明鉄製品)、江別太 1 式期に 1 例(不明鉄製品)、後北 B 式期に 1 例(刀子)あり、小型の鉄製品が極わずかに出土している。石器組成



は縄文晩期後葉以来変化がなく、石槍・石銛は後北B式期まで存在する。ただし、石槍・石銛の消滅期は地域によって異なる。後志海岸部では南川IV期、石狩北部海岸では江別太2式期、石狩北部～中部内陸ではH37丘珠式期、胆振東部海岸ではアヨロ3ab式期。海岸部で消滅時期が遅くなる。

表Ⅷ-1 金属器出土一覧 鈴木 2003b 引用加筆

遺跡名	遺構名	土器型式	鉄鏃	刀子	鉈	錐・針	板状鉄斧	袋状鉄斧	鎌	大刀・横刀	搦子	その他	鉄片・器種?
前葉	ボン春古丹川北岸 3号趾	興津											●
中葉	植別川 2号墓	宇津内IIa?		●									●
	紅葉山33号 GP-1-52,GP-5	アヨロ2a,アヨロ2b	●										●
	クブコブ 30号墳墓	アヨロ2a					●						●
	大川 GP-179	江別太1											●
	大川 GP-62	アヨロ3ab											●
	町村農場1 T-F160	後北B		●									●
後葉	常呂河口 ビット300	後北C					●						●
	常呂河口 ビット157	後北C		●									●
	フコッペ洞窟	後北C・D?											●
	S153 第205ピット	後北C・D?		●									●
	町村農場1 T-F181,第8号墓	後北C・D											●
	坊主山 XⅦ7号墓	後北C・D		●									●
	柏木B 第67号土坑墓	後北C・D											●
	茂漁6 P-15	後北C・D											●
	茂漁左岸チャシ 4号墳墓	後北C・D		●									●
	常呂河口 ビット988	後北C・D		●									●
	茂漁6 P-23	円刺群I～III		●									●
	カリンバ4 60号土坑	円刺群I～V		●									●
	吉井の沢 P-92,103	円刺群I～V		●				●					●
朝日 P-14,18,20	円刺群I～V		●									●	
大川 GP-96	円刺群IV		●			●					鏡板		
幌内D P-51	円刺群IV・V		●									●	
大川 GP-30,50,102	円刺群VI		●						●		耳環・青銅製垂飾		
ワッカオイC地点 4号土坑墓	円刺群VI・VII		●									●	
ユカンボシE7 P-1,28	円刺群VII		●				●	●				●	
西島松5 P-1,33,73,89,143	円刺群VII・VIII		●				●	●				●	
蘭島D 81-9A-9B-11A,86-11B	円刺群VII		●							●		●	
西島松5 P-15,22,83,128,131	円刺群VII		●				●					●	
ユカンボシE7 P-29	円刺群VII		●									●	
ユオイチャシ III P-1	円刺群VII		●									●	
天内山 7号墳墓	円刺群VII・IX		●									●	
大川 GP-137	円刺群VII・IX		●									●	
西島松5 P-98,99,103,129,146	円刺群VII・IX		●					●				●	
ユカンボシE7 P-26	円刺群VII・IX		●				●					●	
ウサクマイ 墓壇63-4	円刺群VII・IX		●									●	
天内山 3号墳墓	円刺群IX		●									●	
西島松5 P-2,3,5,6,11,23,30,68,130,203	円刺群IX		●				●	●	●	●		鏡,錫鏡	●
ユカンボシE7 P-19	円刺群IX		●			●		●				●	
天内山 4,5,9,10号墳墓	円刺群IX・X		●									●	
大川 GP-41	円刺群IX・X		●									●	
フコッペ洞窟D地点 第1号墳墓	円刺群IX・X		●									●	
蘭島D 84-10B	円刺群IX・X		●									●	
ウサクマイ 墓壇63-2	円刺群IX・X		●									●	
天内山 1号墳墓	円刺群X		●									●	
蘭島D 81-10B	円刺群X		●			●						●	
秋ヶ岡 墓305	円刺群X		●									●	
ウサクマイ 墓壇63-1,64-4	円刺群X		●									●	
蘭島D 84-10A	円刺群X・XI		●									●	
西島松5 P-19,96	円刺群X・XI		●									●	
西島松5 P-125	円刺群XI		●									●	
幌内D P-101	円刺群II～V		●									●	
幌内D P-114	円刺群VI～VIII		●			●						●	
ユカンボシE7 P-18,41	円刺群VI～X		●									●	
西島松5 P-12,14,16,17,20,21,75,84,85,97,102,145	円刺群VII～X		●									●	
西島松5 P-7,9,24,28,121,127,207	円刺群VII～XI		●									●	
蘭島D 81-10C,-10D,82-10A,84-11B,86-11A	円刺群VII～XI		●									●	
西島松5 P-29,94	円刺群VII～XI		●									●	

表Ⅷ-2 石器・金属器の消長 鈴木 2003b 引用加筆

時期(道央の土器型式で代表した)	石槍	石鏃	鉄鏃	魚突き鉤	ナイフ状石器	石錐	挿器など	楔形石器	刀子	鉈	錐・針	石斧	板状鉄斧	袋状鉄斧	鎌	鉄鏃	鍬先	大刀・横刀	搦子	紡錘車	器種不明	
続縄文・前葉	H37丘珠～H37栄町古	▲	▲			▲	▲	▲														●
続縄文・中葉	H37栄町新～後北B式	▲	▲	●		▲	▲	▲	●			▲	●	●								●
	後北C式		▲	●		▲	▲	▲	●			▲	●	●								●
続縄文・後葉	後北C・D式		▲	●		▲	▲	▲	●			▲	●	●								●
	円形刺突文土器群期I～III			●				▲	●				●	●								●
	円形刺突文土器群期IV～VII			●				▲	●				●	●								●
擦文・前期	8世紀代			●				▲	●				●	●								●

●は鉄器、▲は石器。網掛けは存在が予想されることを示す。

〈後北 C<sub>1</sub> 式～円刺群 III 期〉後北 C<sub>1</sub> 式期には板状鉄斧、円刺群 I～III 期には袋状鉄斧が加わり、後北 B 式期以前とは異なる傾向がある。表Ⅷ-2 の円刺群 III 期における鉄鏃の例は厚真町朝日遺跡出土で包含層から出土した特異な出土状況(北埋 2015)で、X 線画像を確認したところ三角形短茎鏃である。

後北 C<sub>2</sub>・D 式期の石器組成は石槍・石銛を除いて狩猟具・加工具が揃っている。縄文晩期後葉以来のナイフ状石器は後北 C<sub>2</sub>・D 式期まで小型化・粗雑な調整となり存在する。石斧は柱状・扁平片刃が後北 C<sub>2</sub>・D 式期まで存在する。円形搔器が後北 C<sub>2</sub>・D 式期に出現する。いっぽうで円刺群 I～III 期にはほとんどの石器は消滅し円形搔器・楔形石器のみとなる。

〈円刺群 IV～XI 期〉円刺群 IV 期以降に鉄鎌が、円刺群 VI 期以降に大刀・横刀・鉄鎌が、円刺群 VIII 期には攝子が出土する。石器は円形搔器・楔形石器が引き続いて多くある。

### b 石器の廃用と石材供給の変化

石材が不要になることは単に器種変化にとどまらず、石材供給に変化をもたらす。旧石器時代～縄文時代においては一貫して四大産地(白滝・置戸・十勝三股・赤井川:図 I-4 の★印)の広域交換が行われているという(杉浦重信 1990、木村英明 1995)。蛍光 X 線石材分析が充実している道央部(高倉 2006・2009)における近年の状況を加えたのが表Ⅷ-3 である。縄文時代以来つづけられて来た道央と他地域との黒曜石供給状況の変化がみて取れる。

〈H37 丘珠～江別太 2 式期〉分析例がなく不明であるが、前後の状況から推測すると、縄文晩期の状況が継続していたと思われ、赤井川産が突出して多くはない可能性がある。

〈後北 A～後北 C<sub>2</sub>・D 式期〉赤井川産が大半となり、白滝産が減少する。十勝三股・置戸産は少量ある。

〈円刺群 I 期～XI 期〉I 期以降は黒曜石製石器の出土量の減少とともに赤井川産が殆んどを占め、十勝三股産があり、白滝・置戸産がまれに出土する。円刺群 I～XI 期の十勝三股例のうち 10 例は長沼町幌内 D 遺跡・千歳市キウス 11 遺跡であり、石狩低地帯東部においてはその他の石狩低地帯とは異なる供給関係・経路があったことを示す(鈴木 2014d)。

後北 A 式期以降における赤井川産と白滝産の数量差は石材の選択を示すことから白滝産

表Ⅷ-3 黒曜石産地の変動

鈴木 2003b 引用加筆

		赤井川					白滝					十勝三股					置戸					その他					
		狩猟具	加工具	石核	合計	剥片	狩猟具	加工具	石核	合計	剥片	狩猟具	加工具	石核	合計	剥片	狩猟具	加工具	石核	合計	剥片	狩猟具	加工具	石核	剥片		
縄文	早期	1	3		4	○	3	1		4	○				○												
	前期	24	26		50	○	34	1		35	○	28	1		29		5			5							
	中期					○					○																
	後期	1	2	2	5	○	8	1	1	10	○	6			6	○	8			8	○						
	晩期	1	1		2	○	5	68	13	86	○	1	1		2	○						○					
続縄文	H37丘珠～江別太2																									○	
	後北A～C <sub>1</sub>	6	13	3	22	○	1	2		3	○																
	後北C <sub>2</sub> ・D	11	68	7	86	○	2	10		12	○	6			6			1	1	2					2	○	
	I～III																										
	IV～V					○																					
	VI～VIII			2	2																						
	IX～XI					○																					
I～XI		36	18	56	○		2	1	3	○		9	3	11			2	1	3				1	2			

\*狩猟具:石鏃・石槍・石銛 加工具:ナイフ・石錐・搔器・削器・楔形石器 石核:石核または原石 剥片は有無  
\*網掛けは類例が少数あるを示す

を直接採取に行っていないと推定される。I期以降に近隣産地である赤井川にまとまる傾向は、狩猟具の廃用により石器の減少に伴う現象であることから、赤井川産が増加して他産地を凌駕するというよりも、黒曜石の利用そのものが低調になった結果、広域交換が廃れてしまい近隣産地である赤井川産に偏ったと考えてよい。

また、道央部における石斧の石材は緑色泥岩・緑色片岩・黒色片岩・青色片岩である。これら石材は道央部東縁の夕張山地・日高山脈の日高変成帯・神居古潭変成帯に産する。石斧が消滅する円刺群I～III期以降には石斧石材の広域交換も廃れてしまったと考えられる。

## 2 石器自体の変化からみた廃用の過程

北海道において、利器が鉄製に置換する状況は剥片石器の石器組成を視点として論及されてきた(木村1967、上野1982、仙庭1998、鈴木2004b・2009b、高倉2006・2009)。その成果によると、置換の開始は後北C<sub>2</sub>・D式期(古墳時代前期)、ほぼ完了するのが円形・刺突文土器群期(古墳時代中期～飛鳥時代)である。それよりも以前は少量の鉄器流入が認められるものの、石器組成に変化がみられない時期である。そして、鉄器の器種が同定できた例は江別太1式期(弥生時代中期中葉)以降にある。以上のように鉄器置換は石器組成の変化に拠って分析すれば画期は示しえても、その過程は不詳である。いっぽう、鉄器の出現期は類例が極少量であるため分析精度に問題が残る。以下では石器自体の変化から検証してみる。

### a 砥石

鉄利器は耐久性と切れ味において石器に勝るが、それを維持するには刃研ぎをおこなわなければならない。北海道においては鉄利器普及の遙か以前から石斧製作・石斧刃部調整用の砥石が出土し、石斧が消する円形・刺突文土器群期以降には鉄利器刃研ぎ専用砥石が出土する。両者の違いは石材と研磨面形態である。石斧製作・石斧刃部調整用砥石は、石材が安山岩・砂岩製など、研磨面は多面で構成されることが多く、その各横断面の曲率は大きく不定である。いっぽう、鉄利器刃研ぎ用砥石は、石材が珪岩・砂岩製など、研磨面は単一面で構成されることが多く、その横断面は曲率がなく平らである。

3節1項で得られた知見により以下に区分する。H37 丘珠～

表Ⅷ-4 砥石副葬墓 鈴木2010引用加筆

番号	遺跡名	遺構名	土器型式名	時期区分
8	旭町1	SP-139・178・190・212	H37丘珠	1
7	大狩部	5・5'・6'・7号ピット	H37丘珠	
31	高砂	P-629	H37丘珠	
62	滝里4	P-5	H317	
1	アヨロ	墓106・115・307	アヨロ1	
2	夕フコブ	GP-17	アヨロ1	
93	幣舞	第80・82・90号墓	フシコタン下層	
94	幣舞	第100号墓	フシコタン下層	
92	池田3	P9	興津	
93	幣舞	第42・89号墓	興津	
93	幣舞	第18・21・74・88	フシコタン下層～興津	
111	常呂川河口	P-328b	元町2	2
111	常呂川河口	P-370a	宇津内IIaI	
86	茂別	X-3・9・24	アヨロ2a	
36	元江別1	墓39	アヨロ2a	
58	紅葉山33	GP-1	アヨロ2a	
58	紅葉山33	GP-59	H37栄町・新	
86	茂別	X-20	アヨロ2b	
36	元江別1	墓53	アヨロ2b	
58	紅葉山33	GP-5・22	アヨロ2b	
66	大川	GP-125・20・348A, P-104・116・182A・187	アヨロ2b	
103	岐阜第三	14号堅穴ピット3	宇津内IIaII	
119	ウトロ	PIT38	宇津内IIaII?	3
119	ウトロ	PIT176	宇津内IIaII	
58	紅葉山33	GP-46	江別太2	
15	オサツ2	GP-6	後北A	
43	旧豊平河畔	墓188	後北A	
89	南川	第1・2・18号墓坑	南川IV	
89	南川	第46・86・91・114号墓坑	南川IV	
66	大川	GP-378・422・457・448	アヨロ3a	
101	栄浦第一	ピット16a	宇津内IIbI	
109	常呂川河口	P-24	宇津内IIbI	
117	尾河台地	15号墓	宇津内IIbI	
78	鷲ノ木	USP1	後北C <sub>1</sub>	4
109	常呂川河口	P-34・157	後北C <sub>1</sub>	
109	常呂川河口	P-46	後北C <sub>1</sub>	
14	トメ川3	I P-46	後北C <sub>1</sub> ・D	
21	西島松2	P-492	後北C <sub>1</sub> ・D	
43	旧豊平河畔	墓137	後北C <sub>1</sub> ・D	
102	栄浦第二	7号堅穴ハ号	後北C <sub>1</sub> ・D	
107	トコロチャシ南尾根	14号堅穴ピット1	後北C <sub>1</sub> ・D	
30	吉井の沢	P-59	円刺群I～II期	
30	吉井の沢	P-105	円刺群I～V期	
14	植木B	第65号土坑墓	円刺群IV期	
45	ノト岬	第59号土坑	円刺群IV期	
36	N162	第40号ピット	円刺群V～VIII期	
30	吉井の沢	P-87	円刺群VII～XI期	
17	西島松5	P-99	円刺群VIII期	
17	西島松5	P-103	円刺群VIII～IX期	
24	萩ヶ岡	墓305	円刺群X期	

H37 栄町・古: 1 期、H37 栄町・新～後北 B: 2 期、後北 C<sub>1</sub>～後北 C<sub>2</sub>・D: 3 期、円刺群期: 4 期。  
対象とする事例の条件は以下とする。鉄斧が確認されない 1 期と鉄斧に置換完了の 4 期を除く 2～3 期であり、2～3 期は副葬例のみが分析に耐えられる要件を満たす。石斧製作・石斧刃部調整用砥石の減少、鉄利器刃研ぎ用砥石の出土例の増加、石斧の副葬例の増減、について解析し、鉄利器置換過程が画期的変化なのか、漸移的变化なのか判別する。

砥石は前述した用途を持つことにより、機能にかかわる以下の属性が導かれる。砥石全体の形状「全形」、砥石の材質「石材」、使用面の構成「面構成」、使用面の横断面形「使用断面」である。**表Ⅷ-5a**「前形」によると、後北 C<sub>2</sub>・D 式期には断面四角形の板状の比率が高まる。**表Ⅷ-5b**「石材」によると、後北 C<sub>2</sub>・D 式期まで一貫して砂岩が多用される。なお、「石材」はアイヌ文化期には砂岩があまりみられないので石材選択が最も遅れて変化していると推定される。**表Ⅷ-5c**「面構成」によると、後北 C<sub>2</sub>・D 式期までは単一面が大多数を占める。**表Ⅷ-5d**「使用断面」によると、後北 C<sub>1</sub> 式期に平面の割合が増加し、後北 C<sub>2</sub>・D 式期には大多数を占める。あらわれた傾向は、3 期前半の後北 C<sub>1</sub> 式期において「使用断面」に変化の兆しがみられ、3 期後半の後北 C<sub>2</sub>・D 式期に「全形」に変化している。

砥石属性の変化は、「石材」「面構成」が 3 期後半以降、「全形」「使用断面」が 3 期前半に、形態変化が素材変化よりも先に始まっており、砥石の用途に関わる「使用断面」の変化が最も早い。以上より、属性の変化からうかがえる砥石の用途転換は、後北 C<sub>1</sub> 式～円形・刺突文土器群期に起きたと推定できる。

**表Ⅷ-5a 形態**

鈴木 2010 引用加筆

上段:点数	形状の合計点数・%										出土点数合計
	塊状			板状			角柱状		その他・不明		
	断面略五角	断面略四角	断面四角	断面三角	断面紡錘	断面四角	断面三角	扁平四角			
2 期	アヨロ2ab H37栄町新～江別太2 宇津内ⅡaⅡ	4	1		3	9	1	1		10	29
		14%	3%		10%	31%	3%	3%		34%	
		5 (17%)			13 (44%)			1 (3%)			
2 期	アヨロ3a 後北A～後北B 宇津内ⅡbⅠ	2	1		5	6	4	2	2	16	38
		5%	3%		13%	16%	11%	5%	5%	42%	
		3 (8%)			15 (40%)			2 (10%)			
3 期	後北C <sub>1</sub>	1			2	1		1		6	11
		9%			18%	9%		9%		55%	
		1 (9%)			3 (27%)			1 (9%)			
3 期	後北C <sub>2</sub> ・D	2	1		1	7		2	1	14	14
		14%	7%		7%	50%		14%	7%		
		3 (21%)			8 (57%)			2 (14%)			

**表Ⅷ-5c 面構成**

鈴木 2010 引用加筆

上段:点数	面構成			出土点数合計	
	単一面	多数面	不明		
2 期	アヨロ2ab H37栄町新～江別太2 宇津内ⅡaⅡ	26	4	1	31
		84%	13%	3%	
2 期	アヨロ3a 後北A～後北B 宇津内ⅡbⅠ	30	5	1	36
		83%	14%	3%	
3 期	後北C <sub>1</sub>	11			11
		100%			
3 期	後北C <sub>2</sub> ・D	12	2		14
		86%	14%		

**表Ⅷ-5b 石材**

鈴木 2010 引用加筆

上段:点数	石材							出土点数合計	
	安山岩	軽石	砂岩	凝灰岩	流紋岩	珪岩	泥岩		その他・不明
2 期	アヨロ2ab H37栄町新～江別太2 宇津内ⅡaⅡ		1	19	5				25
			4%	76%	20%			0%	
2 期	アヨロ3a 後北A～後北B 宇津内ⅡbⅠ		1	9	3	1	1	21	36
			3%	25%	8%	3%	3%	58%	
3 期	後北C <sub>1</sub>	3						5	8
		38%						63%	
3 期	後北C <sub>2</sub> ・D			5				1	6
				83%				17%	

**表Ⅷ-5d 断面形**

鈴木 2010 引用加筆

上段:点数	使用面断面形			出土点数合計	
	平面	凹面	凸面		その他・不明
2 期	アヨロ2ab H37栄町新～江別太2 宇津内ⅡaⅡ	7	18	6	31
		23%	58%	19%	
2 期	アヨロ3a 後北A～後北B 宇津内ⅡbⅠ	7	21	5	36
		19%	58%	14%	8%
3 期	後北C <sub>1</sub>	4	1	6	11
		36%	9%	55%	
3 期	後北C <sub>2</sub> ・D	11	3		14
		79%	21%		

**b 石斧・鉄斧**

当該期の鉄斧の副葬例は、2 期に 1 例 1 個、3 期前半に 2 例 2 個である。4 期のうち類例が急増するのは円刺群Ⅶ期であるが、石斧副葬は既に円刺群Ⅰ期に消滅している(表Ⅷ-6)。

つぎに、表Ⅷ-7 よると石斧副葬をみてみよう。石斧数と副葬された墓数を母数とする比較(個数/

副葬遺構数=a)例においては 1.00~2.51 とばらつきがあり傾向は見えない。1 墓坑に副葬される石斧の数は 1~3 程度である。石斧数と当該型式の墓数を母数とする比較(個数/当該期遺構数=b)例においては道央 3 期=0.07 と著しく低い値があり、道央では後北 C<sub>2</sub>・D 式期に石斧の副葬が著しく少ない。石斧副葬の流行を示す a/b を比較すると、1~3 期において a/b > 4.0 になるのは道央 1 期・道東釧路 1 期、道央 3 期・道東釧路 3 期・道東網走 3 期である。また道南 3 期の後北 C<sub>2</sub>・D 式期に当該期遺構数 41 例あり、この数値は 1・2 期の各地域の事例から石斧の副葬が想定されてよい母数である。このことから 1 期と 3 期には石斧副葬の流行が振るわなかったと言える。1 期は石斧があり鉄斧が無い時期であるから石斧副葬の流行の差異を示している。3 期については鉄斧が副葬例として現れ始める時期であるからそれへの移行を示している可能性がある。そして、道南→道央→道東釧路→道東網走の順に a/b の差が小さくなることから移行状況に地域的傾斜があることを示している。

**c まとめ**

以上より、鉄器への置換は、後北 C<sub>1</sub> 式期に始まり、円刺群Ⅷ期に完了時点する。加えて、鉄製品組成によれば、その画期は円刺群Ⅰ~Ⅵ期である可能性が高い。ところで、変化が漸移的なのか画期的かは、変化の期間が長期なのか短期なのかと同意である。つまり、実

**表Ⅷ-6 鉄斧副葬例** 鈴木 2010 引用加筆

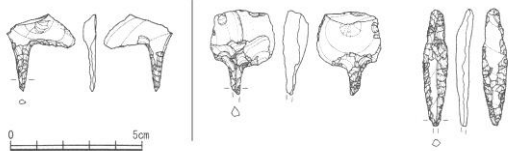
	遺跡名	遺構名	土器型式	板状鉄斧	袋状鉄斧
2期	タブコブ	30号墳墓	アヨロ2a	1?	
3期	常呂河口	ビット300	後北C <sub>1</sub>	1	
	フゴッペ洞窟	—	後北C <sub>2</sub> ・D?	1	
4期	吉井の沢	P-92,103	円刺群Ⅰ~Ⅴ		1・1
	大川	GP-96	円刺群Ⅳ	1	
	ユカンボシE7	P-1,28	円刺群Ⅶ		2・1
	西島松5	P-33,143	円刺群Ⅶ・Ⅷ		1・1
	西島松5	P-128	円刺群Ⅷ		2
	ユカンボシE7	P-26	円刺群Ⅷ・Ⅸ		1
	西島松5	P-2・11・30	円刺群Ⅸ		1・1・2
	ユカンボシE7	P-19	円刺群Ⅸ		1
	天内山	9,10号墳墓	円刺群Ⅸ・Ⅹ		1・1
	西島松5	P16,75	円刺群Ⅶ~Ⅹ		1・1
西島松5	P-121	円刺群Ⅶ~Ⅺ		1	
西島松5	P-29	円刺群Ⅷ~Ⅺ		1	

**表Ⅷ-7 石斧副葬の消長** 鈴木 2010 引用

	道南					道央					道東釧路					道東網走								
	代表型式など	個数	副葬遺構数	一遺構あたりの副葬数	当該期遺構数	代表型式など	個数	副葬遺構数	一遺構あたりの副葬数	当該期遺構数	代表型式など	個数	副葬遺構数	一遺構あたりの副葬数	当該期遺構数	代表型式など	個数	副葬遺構数	一遺構あたりの副葬数	当該期遺構数				
1期	尾白内Ⅱ群	0	0	0	0	H37丘珠	20	7	2.86	33	0.61	アシココタン下層	1	1	1.00	8	0.13	栄浦一・二群	6	4	1.50	9	0.67	
	青苗B古	0	0	0	0	H317	17	9	1.89	52	0.33	興津(南端文群を除く)	14	6	2.33	38	0.37	元町2(中ノ島第3群を除く)	10	8	1.25	24	0.42	
	下添山・アヨロ1	3	3	1.00	8	0.38	H37茶町古	21	14	1.50	43	0.49	下田ノ沢Ⅰ	0	0	0	2	0	宇津内ⅡaⅠ	24	11	2.18	22	1.09
			1.44	0.38				2.12	0.48				1.67	0.25			1.64	0.72						
2期	西桔梗B <sub>2</sub> ・アヨロ2a	8	5	1.60	20	0.40	H37茶町新	55	23	2.39	76	0.72	下田ノ沢Ⅰ	0	0	上段同型式と重複	0	宇津内ⅡaⅡ	6	4	1.50	15	0.40	
	南川Ⅲ・アヨロ2b	8	5	1.60	20	0.40	江別太1・江別太2・アヨロ2b	108	41	2.63	128	0.84												
	南川Ⅳ・アヨロ3ab	59	25	2.36	54	1.09	後北A・後北B・アヨロ3ab	72	34	2.12	85	0.85	下田ノ沢Ⅱ1	1	1	1.00	2	0.50	宇津内Ⅱb(後北Aの1例含む)	24	15	1.60	41	0.59
			2.49	0.63				2.51	0.80			1.00	0.50			1.55	0.50							
3期	後北C <sub>1</sub>	0	0	0	4	0	後北C <sub>1</sub>	0	0	0	4	0	後北C <sub>1</sub>	4	2	2.00	15	0.27	後北C <sub>1</sub>	15	9	1.67	24	0.63
	後北C <sub>2</sub> ・D	0	0	0	41	0	後北C <sub>2</sub> ・D	17	13	1.31	247	0.07	後北C <sub>2</sub> ・D	0	0	0	0	0	後北C <sub>2</sub> ・D	1	1	1.00	49	0.02
								1.31	0.07			2.00	0.27			1.34	0.33							

際には各型式の暦年の長さである。後北 C<sub>1</sub> 式はおおよそ 100 年間と後北 C<sub>2</sub>・D 式はおおよそ 130 年間、円刺群 I～VI 期はおおよそ 160 年間、円刺群 VII 期はおおよそ 30 年間と見積もられる(鈴木 2009b)。これらを各変化期により合計すると、漸移的な始動期が 230 年間、中間的な進行期が 160 年間、画期的な完了期が 30 年間である。初め漸移的变化で、のちに画期的変化へと移行する。

### 3 土器穿孔の変化からみた石器廃用の過程



図VII-5 石錐の形態 北埋文 2017 引用加筆

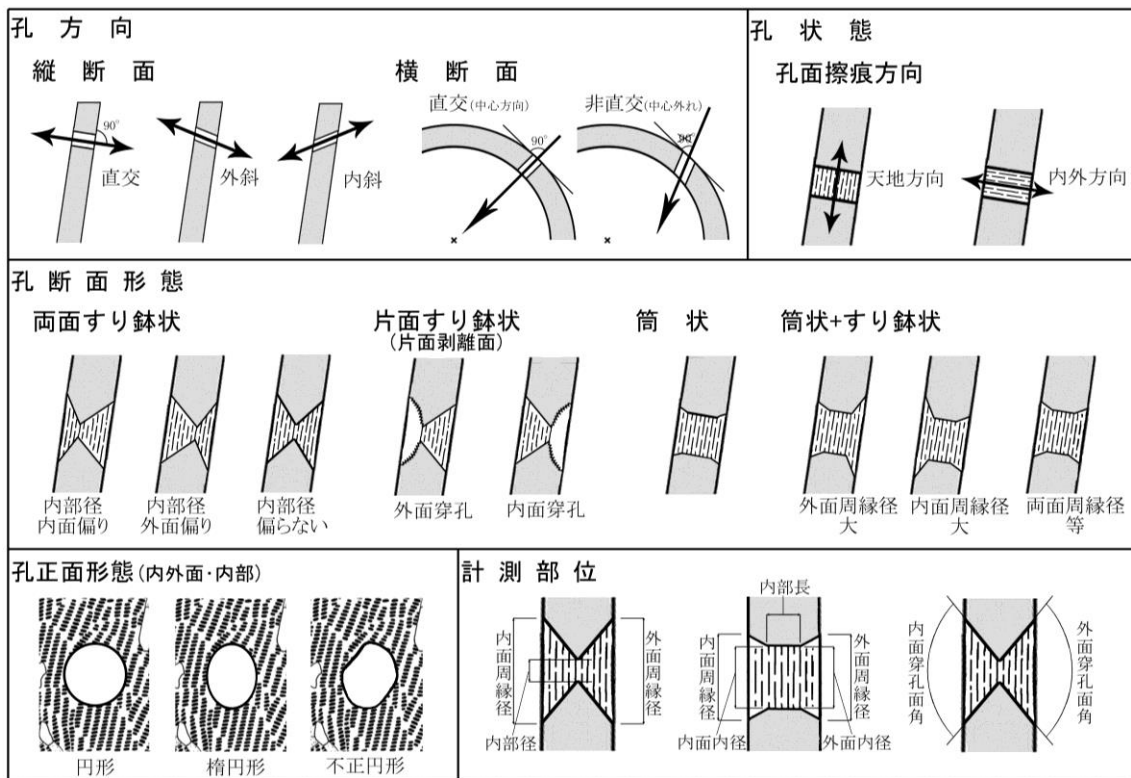
#### a 穿孔研究の前提

土器補修孔の形態変化より鉄錐の出現期を推定した(鈴木 2014e・2016b)。これについて結論はいまだ有効であるが、特に石錐の形態・石材と補修孔断面形態の関係に但し書きが必要となった。北海道において縄文晩期以降に

ある石錐は以下である。石材は黒曜石・頁岩がある。形態は機能部が器体軸からずれる突き錐(図VII-5 左端①)・機能部が器体軸上にある揉み錐(図VII-5 中央②・右端③)があり、着柄が想定される右端は連続した回転に適している。道央低地帯北部では①～③が後北 C<sub>2</sub>・D 式期まで組成し円形・刺突文土器群期にはなく、①③は頁岩、②は黒曜石が多い(高倉 2006)。道央低地帯南部では道央低地帯北部と組成の同様だが、③は頁岩、①②は黒曜石が多い。

以上より、補修孔の形態を通して鉄錐への転換を推定するには③がないという前提があり、以下の条件が最適となる。対象地域は、地域で黒曜石が卓越する道央低地帯南部～道東、時期は後北 C<sub>2</sub>・D 式期以降である。

#### b 穿孔の分類・計測



図VII-6 穿孔分類属性 鈴木 2014e 引用

孔の状態・計測値に関して記述した。孔No.に付されている a(向かって左側孔)-b(向かって右側孔)、c(口縁側孔)-d(底部側孔)は対を表し、立体復元・破片を正置・正対した場合の天地左右である。

「孔方向」は土器に対する穿孔軸の方向を記し、縦断面については「直交:内面-外面に対して直交気味」「外斜:外面に向かって下る」「内斜:内面に向かって下る」、横断面については「(器表接線に対して)直角=器体中心に向かう」「(器表接線に対して)非直角=器体中心からそれる」。

「孔状態」は穿孔による加工痕を記し、孔口には「穿摩・剥離」がみられ、孔内部には擦痕・条痕「断面見通しにおいて天地方向:器体中心軸に直交する軸を持つ回転」「断面見通しにおいて内外方向:器体中心軸に向かう水平方向」がみられる。

「断面形態」は縦断面に関して、「両すり鉢状:内外面における穿孔面が漏斗状になる」「片すり鉢状:片穿孔面が漏斗状で片面が剥離」「筒状:孔口に漏斗状の穿孔面が殆どない」「すり鉢状+筒状:筒状の孔口部が漏斗状で内部が筒状」。「正面形態」は内外面側から見た孔口縁の形であり、目視で「円:円形、楕:楕円形、不:不正円」に分けた。

「計測値」は孔径・内部長・器厚・穿孔面角について計る。「口径」は内外面・内部において「周縁径:孔口上端(すり鉢状の口)を計測」「内径:筒状・筒状+すり鉢状における孔口下端(すり鉢状の底)を計測」「内部径:両すり鉢状・片すり鉢状における孔口下端(すり鉢状の底)を計測」であり、「口縁-底部方向の計測値」、「向かって左右側方向の計測値」、「平均:前述2方向の平均値」である。「内部長」は「筒状」「すり鉢状+筒状」における、すり鉢状の部分を除いた孔の長さである。

「器厚」は孔口付近の計測値である。「穿孔面角」はすり鉢状の傾斜面がなす角度で、「両すり鉢状」「片すり鉢状」「すり鉢状+筒状」において計測可能で、「筒状」は穿孔面が極めて小さく計測不能で、穿孔面が剥離面の場合は計測不能である。

### c 遺跡間比較

H37 丘珠～H317 式期の千歳市梅川 4 遺跡、H37 丘珠～H317 式期と後北 C<sub>2</sub>・D 式期と円形・刺突文土器群期の千歳市キウス 11 遺跡、円形・刺突文土器群期の長沼町幌内 D 遺跡を比較した(表Ⅷ-8 参照)。

キウス 11 と梅川 4 との比較:「孔方向」「孔状態・表面」「断面形態」にほとんど差異はなく、「孔状態・表面、孔面擦痕」においてキウス 11 に「稍顕著」が多くみられる。「正面形態」においてキウス 11 では「内外面側・内部」とも円形が多数であるが梅川 4 では「内面側・内部」に楕円形がおおくみられる。「計測値」の「内外面側・周縁径と内部径」・「穿孔面角」の外側角度>内側角度という傾向にもほとんど差異はない、しかし「穿孔面角」の数値においてキウス 11 が梅川 4 よりわずかに大きい(キウス 11 の-1SD と梅川 4 の 1SD が重複する: SD は標準偏差の略称、Ⅲ章 1 節 p10 参照)。

キウス 11 と幌内 D との比較:「孔方向」「孔状態」にほとんど差異はない。「断面形態」における「筒状+すり鉢の周縁径」外側側の径大が幌内 D に多い。「正面形態」において「楕円・不整円」が幌内 D に多い。「計測値」における「周縁径・内径・内部長」にほとんど差異はない。しかし「穿孔面角」において、キウス 11 は外側角度<内側角度であるが、幌内 D は外側角度>内側角度であり、「穿孔面角」の数値においてキウス 11 が幌内 D よりやや大きい(-1SD～1SD が重複しない)。

後北 C<sub>2</sub>・D 期キウス 11 の傾向は以下である。「孔方向」「孔状態」「断面形態」については H37 丘珠～H317 式期のキウス 11、H37 丘珠～H317 式期の梅川 4 に近似する。「計測値・周縁径」については H37 丘珠～H317 式期のキウス 11・梅川 4、円形・刺突文土器群期のキウス 11・幌内 D との中間の傾向があり、「穿孔面角」は円形・刺突文土器群期のキウス 11 と近似する。ただし、キウス 11 の資料数が少なく推定の根拠は弱い。

円形・刺突文土器群期になって顕著な属性は、孔方向：内斜・非直交、孔状態：平滑、断面形態：筒状+すり鉢で、後北 C<sub>2</sub>・D 期にはこれらの属性はほとんどない。この特徴は表面が平滑な棒状の硬い工具による連続回転によって残された痕跡である。また、後北 C<sub>2</sub>・D 期キウス 11 の傾向は H37 丘珠～H317 式期と円形・刺突文土器群期の中間の傾向がある。以上より、鉄錐副葬例は円刺群Ⅶ期が初出であるが、後北 C<sub>2</sub>・D 期に出現し、円刺群Ⅱ～Ⅴ期のキウス 11・円刺群Ⅰ～Ⅴ期の幌内 D であることから、円刺群Ⅰ～Ⅴ期には鉄錐に移行したと推定できる。

#### 4 石器と鉄利器の関係

<後北 C<sub>2</sub>・D 式期以前>続縄文前葉まで狩猟具・加工具の主要な材質は石であった。続縄文中葉から続縄文後葉の後北 C<sub>2</sub>・D 式期にかけて徐々に器種を減じているが、狩猟・加工の作業には石器が使用されていた。従って、道央と道東との黒曜石の需給関係は健全であった。

しかしその一方で、板状鉄斧が後北 C<sub>1</sub> 式期に存在することは、実用利器である鉄製品が威信財として取り扱われ、生活・生業の心理面に大きな変化があったと考えられる。

表Ⅷ-8 遺跡間比較 鈴木 2016b 引用

土器分類	遺跡名	資料数	孔方向		孔状態						断面形態						正面形態									
			縦断面		横断面		表面		内部				両すり鉢		片すり鉢		筒状	筒状+すり鉢		表面						
			直交	内外斜	直交	非直交	外	内	孔面擦痕方向	孔面擦痕	内面偏り	外面偏り	偏らない	外面穿孔	内面穿孔	周縁径大		周縁径等	外面側	内面側	内部					
VIa	キウス11	12	直交	内外斜	直交	非直交	穿磨	剥離	12	8	11	1	5	7	8		4				円	9	7	10		
	梅川4	15	直交	内外斜	直交	非直交	穿磨	剥離	15	9	15				8		6	1			不整円		3			
VIc	キウス11	12	直交	内外斜	直交	非直交	穿磨	剥離	12	7	12	1	9	2	7	1	4				円	9	8	11		
VIId	キウス11	7	直交	内外斜	直交	非直交	穿磨	剥離	4	6	6			1	3	1	1				円	7	6	7		
	幌内D	40	直交	内外斜	直交	非直交	穿磨	剥離	39	31	40	1	11	28	10	6			(1)	(1)	(2)	不整円		1		
			内斜	2	非直交	3	剥離	7						(5)	(1)				(6)	(7)	(2)	(2)	円	29	23	30
																					不整円	10	7	4		

\*孔面擦痕方向・内側「3」は施文による。\*断面形態下欄括弧数は円形刺突文利用の補修孔の例数で上欄の内数。

	周縁径(mm)				内部径(mm)	穿孔面角(°)				器厚(mm)	周縁径(mm)				内部径(mm)	穿孔面角(°)				器厚(mm)							
	外面側	内面側	両面	両面		外面側	内面側	両面	両面		外面側	内面側	両面	両面		外面側	内面側	両面	両面								
	VIaキウス																										
平均	8.5	6.6	7.6	4.1	57	48	53	6.7	8.5	6.1	7.4	3.7	54	55	55	5.8	7.3	7.8	7.7	3.8	4.2	4.1	3.6	51	58	55	6.4
中央値	8.5	6.7	7.8	4.2	55	46	53	7.0	8.3	6.2	7.4	3.8	52	55	52	5.5	7.3	8.2	7.8	3.8	4.3	4.2	3.6	55	56	55	6.5
標準偏差	0.8	1.5	1.5	0.8	10	8	10	0.9	1.6	1.4	1.9	0.8	6	14	10	0.8	0.3	1.1	1.0	0.4	0.4	0.4		7	11	10	0.5
最小	6.8	4.8	4.8	2.7	41	37	37	5.0	5.1	3.9	3.9	2.1	47	33	33	4.5	7.1	5.9	5.9	3.8	3.57	3.6	3.6	41	47	41	5.5
最大	10.3	10.7	10.7	5.3	77	60	77	8.0	10.7	8.7	10.7	4.8	68	79	79	7.0	7.6	8.9	8.9	3.8	4.6	4.6	3.6	55	77	77	7
	VIa梅川																										
平均	7.7	6.5	7.2	4.4	43	36	41	6.9									7.3	6.9	7.2	4.4	4.0	4.2	4.5	33	30	32	7.2
中央値	8.0	6.4	7.3	4.5	41	35	37	7.0									6.8	6.5	6.6	4.3	3.9	4.0	4.7	30	29	30	7.0
標準偏差	1.6	1.1	1.5	0.8	13	9	12	1.0									2.2	2.1	2.2	1.0	1.1	1.1	0.8	11	5	9	1.5
最小	3.8	4.7	3.8	3.1	29	26	26	5.0									3.8	4.2	3.8	2.8	2.6	2.6	3.4	18	19	18	5.0
最大	11.1	8.5	11.1	5.9	75	47	75	9.0									14.3	13.8	14.3	6.8	6.5	6.8	5.9	68	37	68	11.5
	VIId幌内D																										



〈円刺群Ⅰ～Ⅲ期〉石器は器種を急激に減じているので、生業の場から石器がほぼ消滅したと考えてよい。よって、この時期は道央と道東とが縄文時代以来つづけてきた黒曜石の需給関係が崩壊し始めた時期である。そのいっぽうで鉄製品のみで構成される組成が整った状況がみられず出土量も多くないものの、黒曜石の産地の変動、石器の変化からみると実用利器として取り扱われた。この時期は、石器が消滅する過程と鉄製品が実用利器と威信財に分化してゆく過程が併行している時期と考えられる。

〈円刺群Ⅳ期以降〉鉄製品は組成が整い石器に代わって実用利器と威信財となる。出土量が増えるのもこの頃からである。大刀・横刀の出現は副葬例であり、この時期以降も副葬品としてあるが他の鉄製品に較べて少なく、専ら威信財として評価されたことを示す。

石器組成の変化と鉄製利器の出現は一致しない。原因は鉄製利器に対する二つの価値付けがあることによる。鉄製利器が実利的財である場合、鉄器が潤沢に存在しない、修繕ができない状況下で、狩猟・加工の一連を鉄器化してしまうと消耗・破損した場合に全ての生産が停止することになる。完全に鉄器化＝鉄器組成の成立する前段に、代替用具としての石器・骨角器を保持する必要がある。いっぽう、鉄製利器が象徴的財である場合、実利機能を石器に分担させるので石器組成は変化しない。鉄器組成も不完全である。

2つの価値観は徐々に交替する。後北C<sub>1</sub>式～C<sub>2</sub>・D式期は鉄製利器を象徴的財として考え、石器に利器機能を負わせる時期である。円刺群Ⅰ～Ⅲ期とⅣ～Ⅴ期は鉄製利器が象徴的財でもあり実利的財でもある時期である。円刺群Ⅶ期には実用器としての性格が濃くなる。

石器と鉄製利器の関係は地域によっても異なる。道東部の鉄器化の進行は、縄文時代以来つづけてきた黒曜石の需給関係を基礎に成立しているもので、鉄器化の進行に伴い道央は仲介者として関係することになる。後北C<sub>1</sub>式土器の道東への拡散は鉄製品交換の結果と考えられる。晩期後葉以降、道央～道東の琥珀分布圏もまた黒曜石の需給関係の変化における現象と捉えられる。

道央部と道南部との関係は道東部との関係と異なる。道南部は頁岩を石器の石材として用いる地域(琥珀分布圏からも外れる)なので黒曜石の需給関係を基礎にしていない。考えられることは道東部の鉄器化の進行に伴い、道央はより仲介者の機能を強化するため道南部に拡散し直接本州と関係しようとした。道南における後北A式は散点的ではあるが、後北B式期には徐々に遺跡数を増加させ土坑墓も出現して定住の兆候がある。後北C<sub>1</sub>式土器の道南への拡散は鉄製品交換のもう一つの結果と考えられる。

鉄器化の進行による石材の広域的需給関係の廃絶は、土器の型式変化の原因にもなる。石材の需給関係・圏が土器型式分布圏成立の要件とならない時期を到来させ、北海道に単一の土器型式が広がった。

## 4 節 鉄器の入手手段と道央部の優位性

### 1 交換からみた道央部の優位性とは

「続縄文文化前半から外来系の物資入手力が相対的に高かったと推定され、そのネットワークとサケ科の利用を基軸とした経済が、後半期の道央部の優位性にも関係する可能性がある。」(高瀬 2014)。そして、高瀬が言う現象の要約は以下である。続縄文文化前半で

は管玉が日本海側石狩川水系下流部の集中域と津軽半島に直接的交換関係があること、後半期には有利な物資交換条件をもともと持ち合わせていた道央の集団が太平洋側のルート開拓を先導したこと。「道央の優位性」とは続縄文文化前半には既に成立している物資入手力の相対的高さの要因が何かということが問題である。

表Ⅷ-9 川・海岸線の長さ 鈴木 2015 引用

海岸線		長さ(km)	
日本海側	石狩川河口～白神岬	410.0	492.5
津軽海峡	白神岬～汐首岬	82.5	
太平洋側	勇払川河口～汐首岬	342.5	
低地帯	石狩川河口～勇払川河口	105.0	
	石狩川	268.0	
	空知川	194.5	
	夕張川	136.0	
	千歳川	108.0	

積丹半島西部～寿都湾:75→川白岬～弁慶岬直航:45=30kmの短縮  
内浦湾:155→地球岬～砂岬直航:30=125kmの短縮

\*地名位置は図 I-4参照

\*松岡達郎(1981)によると津軽海峡の北海道側渡航点は汐首岬が想定容易である

私はそれが地勢に起因すると考える。石狩低地帯は、日本海斜面の石狩平野と太平洋斜面の勇払平野により構成され、それらは標高 25 m 前後の低平な台地によ

って隔てられるが、台地最狭部は 0.9 km しかない(鈴木 2014b)。また、石狩平野には長大な河川が流れ、低平な地域で合流するため内水路の選択肢が多く、外洋航海用の準構造船がその大半を利用することが可能である。アイヌ文化期の例ではあるが、河川際の遺跡からは準構造船の舷側板が出土する(鈴木 2013)。くわえて、夕張川上流を経て十勝平野や富良野盆地・厚真地方へ連なる内陸路とも接続する(鈴木 2014 d)。石狩低地帯の日本海側石狩川河口を経路の始点とし、本州への渡航点を汐首岬とすると 492.5 km で短縮すると 462.5 km となる。太平洋側勇払川河口を経路の始点とし、本州への渡航点を汐首岬とすると 342.5 km で短縮すると 217.5 km となる。これらより太平洋廻りが 150～245 km ほど短いので利用価値が高い。続縄文中葉の後北 A～C<sub>1</sub> 式期にかけて内浦湾の短縮を利用したと思われる状況がある。森町鷲ノ木遺跡からは当該期の道南部において突出した量の後北式の土器・石器が出土する。この遺跡から砂岬までは直線で約 15 km である。なお、石狩低地帯内陸のどこを始点とするかによって変動はあるものの最大 105 km の変動幅の増分である。

江戸時代の紀行文『丁巳・戊午 東西蝦夷山川取調日誌』(松浦武四郎 1857・1858)によると石狩川河口～勇払川河口 105 km (石狩川河口→千歳川会所:安政四年の舟行二日間、千歳川会所～勇払川河口:安政五年の徒行一日間)を三日で移動している。

本州へ渡航する場合、潮流・風向き・天候の影響が軽微な低地帯を経由することで旅程の短縮が可能となる。続縄文時代後半期における渡海交易の変化によってこの地勢がより頻りに利用されて、道央は流通の結節地域⇌情報の集中地域となった。なお、管玉は白老アヨロ遺跡に出土例があることから、日本海側石狩川水系下流部に集中域する状況が太平洋廻りの関与を排除するものではない。

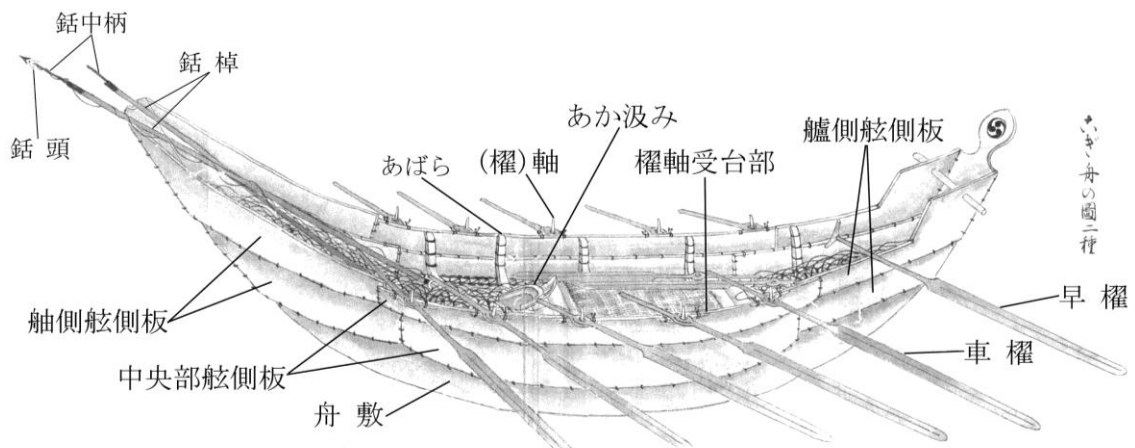
続縄文前葉～中葉にかけて生じた生業変化は「特化」であり、サケマス漁の盛行は毛皮猟の安定に寄与した。中葉に起こった「特化」は威信的行為であったこと、冷涼化に向かったことにより後葉には消滅したことを述べた。この章の 1・2 節においては後葉における鉄器入手の交換が生業・地域関係に変化をもたらしたことを述べた。その結果鉄器入手の交換によって生業領域が複相化し、領域面積の増加や季節・性・年齢に関わる生業種ごとに異なる分業体系の強化がなされ(鈴木 2007a・2009b)、以前よりも定住を必須にした。短縮型の地勢を利用する背景には定住の強化があり、より水上交通の重要性が増したと考えられる。

## 2 交換手段としての準構造船

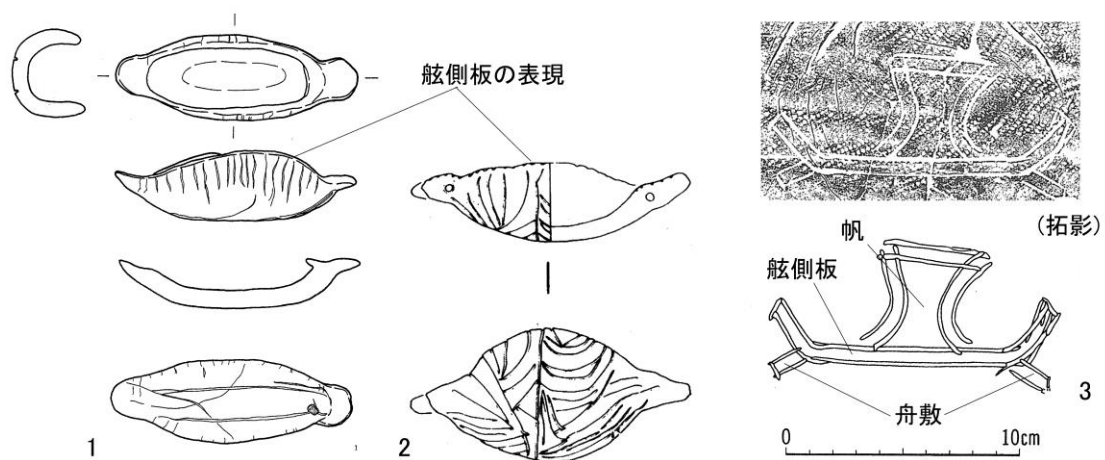
前項で地勢を生かして本州との交換関係を維持することが理解できた。次にはその手段、外洋航海船について検討が必要である。深澤芳樹(2014)によると、北海道における当該資料は、舟出土遺跡が13か所、そのうち12か所は縄文中期以後の例である。また、舟形土製品9件のうち5件は縄文中期以後の例であり、舟形木製品3件・土器絵画例4件・骨角器絵画例4件・洞窟壁画例1件は全て縄文文化期以後の例である。船体(丸木舟の一部・準構造船の一部)・船材・推進具は擦文文化期～アイヌ文化期(古代～中近世)例が多数を占め、近世アイヌ文化期の例が極めて多い。よって、舟の構造に言及する場合はこの時期に関わる考古学用語を使う(図Ⅷ-7 参照)。

### a 出土資料

石狩市紅葉山49号遺跡から縄文中期の河川航行用丸木舟小破片・櫂が出土している。また、両舷が艫軸よりも高く表現されている舟形土製品(函館市戸井貝塚・縄文後期初頭)がある。これは丸木舟の両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現であり外洋航海用の可能性を示す(図Ⅷ-8-1)。それ以外の舟形土製品・石製品は、艫軸と両舷高が等しい、舷高に対して船底幅が広く平底、の表現なので、河川航行用の丸木舟であると考えられる。

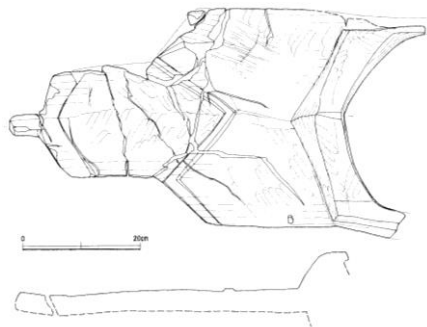


図Ⅷ-7 準構造船と推進具(部材名称は遺跡出土例があるもの) 鈴木 2013 引用



図Ⅷ-8 舟形土製品と土器絵画 鈴木 2013 引用加筆

続縄文期には2種類の外洋航海用準構造船を表している例が苫小牧市タブコブ遺跡の舟形土製品(アヨロ2a期)(**図Ⅶ-8-2**)と恵庭市ユカンボシE7遺跡の土器絵画(円刺群Ⅷ期)にある(**図Ⅶ-8-3**)。タブコブ遺跡例は両舷に舷側板を取り付けた準構造船の表現である。カンボシE7遺跡例は土器の表面に3か所描かれているもので、舷側板端が湾曲して高まる表現より、艫舳両端を閉じる構造(所謂、二股船)となっていることを示している。なお、余市町フゴッペ洞窟岩壁画には舟に人が乗っている表現がある、舷側板の表現はないようであるが構造の詳細は不詳である。



**図Ⅶ-9** K39 遺跡出土船先

鈴木 2013 引用

後代の擦文文化期の出土資料は以下である。船体(丸木舟の一部・準構造船の一部)・船材・推進具・舟形木製品・土器絵画がある。札幌市K39遺跡では、7a層(擦文前期後半:9世紀前葉~中葉)からは船先(**図Ⅶ-9**)が出土した。6g層(擦文前期末~中期中:9世紀前中葉)からは板綴船舟敷の舷側片(準構造船の一部)が出土した。5a層(擦文後期後半:12世紀代)からは板綴船舟敷の舷側片(準構造船の一部)と推進具(早櫂)が出土した。千歳市美々8遺跡では、I B5層(擦文中期:9世紀前葉~後葉)から船材(車櫂受台部)と推進具(早櫂・車櫂)が出土した。I B3・4層(擦文後期:10世紀後葉~12世紀代)から船材(車櫂受部軸)と推進具(早櫂・車櫂)が出土した。千歳市ユカンボシC15遺跡では、I B4層(擦文前期:8世紀代)から船体(丸木舟の一部・板綴船の一部)と推進具(車櫂)が出土した。I B3層(擦文後期:10世紀後葉~12世紀代)から船体(丸木舟の一部・板綴船の一部)と船材(車櫂受部軸)と推進具(早櫂・車櫂)が出土した。また、同遺跡I B3層の舟形木製品は艫舳と両舷高は等しかったり、舷高に対して船底幅が広く平底の表現であったりするので、河川航行用の丸木舟であると考えられる。そして、同遺跡の土器絵画(須恵器壺肩部に線描)は舟に人が乗っている表現があるものの構造は不詳である。

アイヌ文化期の類例には丸木舟・船材・推進具・舟形木製品がある。沼ノ端・ママチ川・根志越3・上野地区・厚岸湖からは丸木舟そのものが、千歳川左岸・K483・美々8・ユカンボシC15では丸木舟の一部が出土している。沼ノ端・オサツ2・オサツ14・厚岸湖・美々8・ユカンボシC15からは準構造船の一部である舟敷・舷側板と車櫂受部が出土している。また、これらのうち沼ノ端・厚岸湖・美々8・ユカンボシC15では丸木舟と準構造船の両方が出土している。千歳市美々8遺跡では、I B2~0B層(中近世)から船材(丸木舟の一部・準構造船の一部)と推進具(早櫂・車櫂・棹)が多量に出土し、舟形木製品も出土した。

千歳市ユカンボシC15遺跡では、I B2~表土層(中近世)からは船材(丸木舟の一部・準構造船の一部)と推進具(早櫂・車櫂)が多量に出土した。

#### **b アイヌ絵に描かれた板綴船**

近世末の史料『入北記』(島義勇 1857)には舷側板二段・漕ぎ手二名並列の板綴船略図があり、谷元旦筆「蝦夷にて渡海船の図」『蝦夷紀行 附図』(谷元旦 製作年不詳)は舷側板二段・漕ぎ手二名並列の板綴船である(**図Ⅶ-9**)。この絵は谷元旦が描いたといわれているが、「クナシリ エトロフ渡船」『蝦夷人之画図』という原画が存在し、谷がこれを模写したとする見解がある(大塚和義 1995、山下真由美 2012)。

表Ⅷ-10 舟出土一覽 鈴木 2013 引用

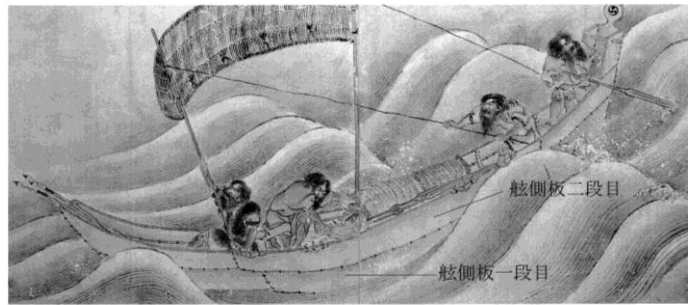
No.	遺跡名	所在地	出土遺構・出土層	時期	丸木船	船体など	板造船	部品	推進具	その他
1	沼ノ端	苫小牧市沼ノ端	Te-b 層直下(1739年降下火山灰)	近世アイヌ期	丸木船3	船載2			早稲1	楳4
2	ママチ川	千歳市朝日町	Te-b 層直下(1739年降下火山灰)	近世アイヌ期	丸木船1					
3	楳志越3	千歳市楳志越	Te-b 層直下(1739年降下火山灰)	近世アイヌ期	丸木船1					
4	千歳川左岸	千歳市楳志越	Te-b 層直下(1739年降下火山灰)	近世アイヌ期	船先破片1					
5	K483	札幌市北区	不明	近世アイヌ期?	軸先or楳破片1					
6	美々々8	千歳市美々々	河川堆積物	近世アイヌ期	軸先or楳破片1					
			包含層(I B5層)	楳文中期				車輻受台部3	楳楳1	
			包含層(I B4層)	楳文後期				車輻受部輪片1	早稲3	
			包含層(I B3層)	楳文後期				車輻受台部6、車輻受部輪片4	楳楳2	
			包含層(I B2層)	中世アイヌ期				車輻受台部16、車輻受部輪片11、船筋板1、楳1	車輻7、早稲27	
			包含層(I B1層)	近世アイヌ期	軸先破片3	楳・尻部2、楳側板13、船部材4				
			包含層(I B層)	近世アイヌ期						
			包含層(OB ~ I B層)	近世アイヌ期						
			包含層(OB層)	近世アイヌ期	軸先破片1			車輻受部4		
			包含層(OB層)	近世アイヌ期	軸先破片1	楳側板24、船かばら1、船部材20		車輻受部輪片48、車輻軸差込部4、車輻受部1、楳楳1	楳楳37、早稲18、楳17	
7	オサツ2	千歳市長都	包含層(OB層・クラム)	近世アイヌ期	軸先破片3	楳側板4、船部材7		車輻受台部23、車輻受部輪片8	楳楳13、早稲4	楳1
			包含層(III層)	楳文～アイヌ期				車輻受台部1		
			包含層(II B層)	近世アイヌ期				車輻受台部4、	早稲1、楳1	
			包含層(OB層)	近世アイヌ期				車輻受台部1	楳楳23	
			包含層(I B層)	近世アイヌ期				車輻受台部1		
8	オサツ14	千歳市長都	楳文後期	楳文後期～中世アイヌ期	軸先破片1			楳楳側板1	楳楳1	
9	ユカンボンシC15	千歳市長都	包含層(I B3層)	楳文後期	軸先破片6	楳楳(楳先)3、楳楳(楳)4、楳楳6、楳楳側板19、船部材5		車輻受台部11、車輻受部輪片14	車輻23、早稲5	
			包含層(I B2層)	楳文後期～中世アイヌ期	軸先破片1			船筋板2	楳楳10、早稲11	
			包含層(I B1層)	中世アイヌ期	軸先破片2、軸先 or 楳破片1	楳楳2、楳楳側板14、船部材2		船筋板2		
			包含層(I B層)	近世アイヌ期	軸先破片4	楳楳2、楳楳側板9		車輻受台部3	楳楳6、早稲3	
			包含層(OB層)	近世アイヌ期					楳楳1	
			包含層(表土層)	近世アイヌ期					早稲2	
10	K39	札幌市北区	包含層(5a層)	楳文後期	軸先破片3	楳楳側板7			楳楳1	
11	紅葉山49号	石狩市花川	包含層(IV3層)	楳文・中期	破片8				楳楳14	
12	上野地区	勇払郡厚真町上野	不明	中世アイヌ期	丸木船1					
13	厚岸湖	厚岸郡厚岸町	不明	アイヌ期	丸木船2、軸先or楳破片1	楳楳3、楳楳側板1			楳楳1、早稲6	

- 苫小牧市教育委員会 1966『苫小牧市沼の端丸木舟発掘調査報告』苫小牧市教育委員会
- 千歳市教育委員会 1979『ママチ川丸木舟遺跡発掘調査報告』千歳市教育委員会
- 4 田村隆之 1984『千歳市楳志越3遺跡調査報告』北海道考古学 20『北海道考古学』
- 札幌市教育委員会 1988『K482遺跡・K483遺跡』札幌市教育委員会
- 『(財)北海道埋蔵文化財センター 1990『美尻川流域の遺跡群XV』(財)北海道埋蔵文化財センター 1992『美尻川流域の遺跡群XVI』(財)北海道埋蔵文化財センター 1994『美尻川流域の遺跡群XVII』(財)北海道埋蔵文化財センター 1996『美尻川流域の遺跡群XVIII』(財)北海道埋蔵文化財センター 1997『美尻川流域の遺跡群XIX』(財)北海道埋蔵文化財センター 1998『千歳市 オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター 1996『千歳市 オサツ2遺跡(2)』(財)北海道埋蔵文化財センター 千歳市教育委員会

また、『蝦夷器具図式』（谷元旦 1799）には舷側板一段の「漁艇」「蓆帆艇」「舟正背全図」「小舟」が、『蝦夷島奇観』（秦憶磨 1799）には舷側板二段の「大船図」と舷側板一段の「舟図」「モチブ(小舟)図」「温納漁部第2図：漕ぎ手が一列並び」(図Ⅶ-10)が、『蝦夷生計図説』（村上貞助 1823）には舷側板二段の「舟製作全備乃図二種」「舟中の具備わりて海上を走る図：漕ぎ手が一列並び」(図Ⅶ-11)「こぎ舟の図二種」(図Ⅶ-7)「ウイマムチブ(和訳で御目見得：松前城下における貢納的交易)乃図」と舷側板一段の「舟図」「モチブ(小舟)図」が図示されている。なお、「大船図」「ウイマムチブ乃図」は交易船である。18



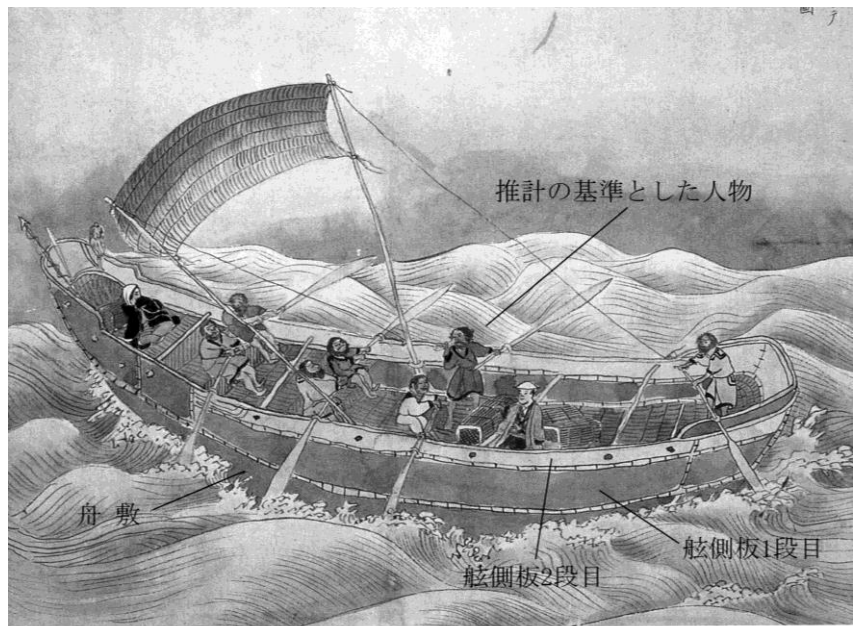
図Ⅶ-10 小型板綴船 鈴木 2013 引用



図Ⅶ-11 中型板綴船 鈴木 2013 引用

世紀末～19世紀中葉には多様な板綴船が使用されていた。

上述よりアイヌ絵に描かれた板綴船は舷側板の段数・漕ぎ手の並び列数により規格区分ができそうである。「舷側板一段・漕ぎ手が一列並び」を「小型板綴船」(図Ⅶ-10)、「舷側板二段・漕ぎ手が二列並び」を「大型板綴船」(図Ⅶ-12)、それらの中間「舷側板二



図Ⅶ-12 大型板綴船 鈴木 2013 引用

段・漕ぎ手が一列並び」を「中型板綴船」(図Ⅶ-7・11)、とする。ところで、「大船図」に「大サ七尋半許なる舟」とあるのが描かれた板綴船の唯一知られる大きさである。近世和船に関する「尋」は1尋=5尺と推定されている(松井哲洋 2007)。七尋半=37.5尺≒37.5×30.3cm=1136.25cmであり、「大型板綴船」は凡そ1136cmの全長があったものと推定される。

### c 近世・近代文献史料にあらわれた板綴船

準構造船は近世アイヌ文化期にイタオマチブ(和訳で板綴船)と呼ばれる。近世初頭の『蝦夷国報告書』(児玉作左衛門 1941)には160～240石積板綴船、『松前蝦夷記』(松前町 1974)には300石積板綴船の記述がある。また、寛政8年(1796)「田名部通諸湊役銭取立方

につき定目」(青森県 2004)によれば、材木を積んだ板綴船(「縄にて綴り候狄船は」と表現され、その前項では「松前嶋より参り候本狄船は」とある)については 100 石に付き砂金 10 匁 5 分を役銭として取り立っていることから、100 石積以上の板綴船が航行していた。以上より、100～300 石積板綴船が 17 世紀前葉～18 世紀末に津軽海峡を航行していた。

そして、開拓使顧問 H.Capron の日誌(ケプロン 1985)には明治 4・5 年の目視による大きさであるが、板綴船 30～40・40～60ft、丸木舟 20～30ft が記されている。1ft≒30.5 cm であるから、板綴船は 30.5 cm×30～40・40～60=915～1220～1830 cm、丸木舟 30.5 cm×20～30=610～915 cm である。博物学者 T.Blakiston の日誌(ブラキストン 1979)にも明治 2 年の観察記録があり、丸木舟約 35ft が記されており、30.5 cm×35=1067.5 cm である。

#### d 船体構造と積載量の復元

板綴船とは単材を刳る船底(和語では瓦・舟敷・敷と呼称)に舷側板を縄で綴り付つける構造であるから、板綴船の積載量は舟敷の規格によって規定され、舷側板の高さ分だけ増容積される。舟敷は丸木舟とほぼ同じ形状であるから、板綴船と丸木舟との比較によって積載量を推定し得る。

明治初頭には石狩川河口から空知太(中流域の中間)まで 100 石積和船は遡行し、大型丸木舟(瀬川の「第 1 地帯(石狩川河口から神居古潭<sup>かむいこたん</sup>まで)の丸木舟」)は石狩川河口から神居古潭(中流域と上流域の境)まで遡行しており、大型丸木舟は米 20 俵を積んで航行可能とある(瀬川 1998)。よって、100 石積板綴船は空知太まで遡行可能であるから石狩川河口から空知太までの間は板綴船と大型丸木舟はともに航行していたであろう。4 斗入り 1 俵では 10 斗が 1 石なので 2.5 俵が 1 石に相当するから、大型丸木舟の積載量は 8 石積と推計される。

当該地域には板綴船舟敷出土例がないので最近隣例を用いるが、丸木舟出土例は計測不能と外れ値を除くと 4 例なので、近現代の例も加えて推定する(由良 勇 1995)。石狩川中下流域の現存・出土丸木舟と最近隣地域出土板綴船舟敷の測定値(表Ⅷ-11)より、同一地域内では両者の全長・深さに違いはなく、幅と両舷角に相違がある。板綴船舟敷は丸木舟に対して全長で 1.00 倍、最大巾で 1.30 倍、深さ 1.04 倍であるから、板綴船舟敷の容積は丸木舟の 1.35 倍にあたる。出土舟敷の平均両舷角度 33° である。石狩川中下流域では全長 7 m 前後の丸木舟が一般的であったと考えられる。

沼ノ端 0 号艇について外れ値としたが、H.Capron が豊平川(=石狩川下流域)において目視した丸木舟や T.Blakiston が石狩川下流域において観察した丸木舟もそれに近い規模があるようで、全長 9m 以上になる大型丸木舟もあると思われる。同様に、大型丸木舟

表Ⅷ-11 板綴船舟敷と丸木舟の法量 鈴木 2013 引用

遺跡名など	名称	船種など	全長 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	両舷角 (°)	備考
沼ノ端	2号艇	板綴舟・舟敷	650	74	30	34.0	両舷角=右舷角×2
沼ノ端	4号艇	板綴舟・舟敷	766	72	27	32.0	両舷角=右舷角×2
			<b>708</b>	<b>73</b>	<b>29</b>	<b>33.0</b>	
沼ノ端	0号艇	丸木舟	903	94	30		外れ値とする
沼ノ端	1号艇	丸木舟	785	74	30		
沼ノ端	3号艇	丸木舟	740	78	35		
上野地区		丸木舟	663	60	25	40.0	
ママチ川		丸木舟	728	58	26	40.5	舟底厚5.4cm
根志越3		丸木舟	—	—	—	43.5	舟底厚3.0cm
石狩川中下流域	由良No.21	丸木舟	725	40	31		現代製作
石狩川中下流域	由良No.22	丸木舟	746	44	25		現代製作
石狩川中下流域	由良No.23	丸木舟	695	61	23		近代遺物
石狩川中下流域	由良No.24	丸木舟	590	36	26		現代製作
			<b>709</b>	<b>56</b>	<b>28</b>	<b>41.3</b>	

板綴船舟敷数値/丸木舟数値： 1.00 1.3 1.04

表Ⅷ-12 出土舷側板の大きさ 鈴木 2013 引用


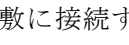
遺跡名	層位	種類	全長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	綴孔～ 板縁 の長さ (cm)
ユカンボシC15	I B3層	艫軸側1段目	156.2	23.2	2.6	3.0
ユカンボシC15	I B2層	艫軸側1段目	189.6	23.6	2.4	3.5
				23.4	2.5	3.3
ユカンボシC15	I B3層	中央1段目	157.5	26.4	2.3	2.3
美々8	OB層	中央1段目	366.3	31.0	1.9	3.5
ユカンボシC15	I B2層	中央2段目	142.0	24.0	3.1	1.5
				27.1	2.4	2.4

\*斜字体は残存長

\*厚さは最大幅における値

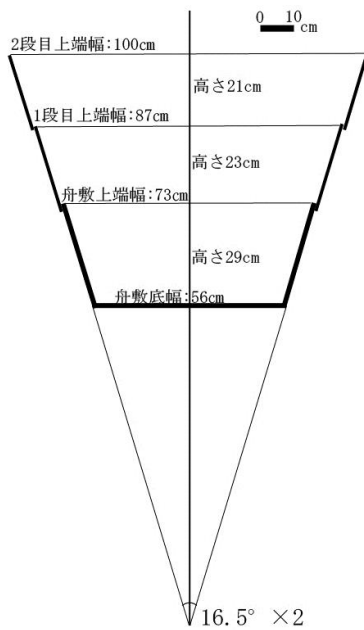
\*綴孔～板縁までの長さ(cm)は最大幅に直近の孔の数値で、

上下がある場合はその平均

側板幅値が積載量を規定する。舷側板の高さが知られる上下辺が残存する出土舷側板の大きさをみてる(表Ⅷ-12)。艫軸側に綴じられる板は不等脚台形(図Ⅷ-7)「」、船体中央部に綴じられる板は長方形(図Ⅷ-7)「」、1段目は舟敷に接続する板で上下辺に綴孔があり、2段目は下の舷側板に接続する板で下辺に綴孔がある。1段目中央部舷側板幅平均値 28.7 cm に比べて2段目のそれは 24.0 cm と狭い。艫軸側舷側板幅は2段目中央部舷側板幅平均値に近い。

中央部舷側板幅の平均値は 27.1 cm である。また、舟敷と舷側板の縫合・舷側板どうしの縫合には綴じ代があることが『入北記』板綴船横断面略図より知られる。1段目の綴孔～板縁辺の長さ平均値が 2.9 cm で、2段目の綴孔～板縁辺の長さが 1.5 cm であり、この数値を綴じ代と考え舷側板の幅から以下の数値を減じた。1段目の幅： $27.1 - 2.9 \text{ cm} = 24.2 \text{ cm}$ 、2段目の幅： $24.0 - 1.5 \text{ cm} = 22.5 \text{ cm}$ 。

舟敷長 7m 前後の規格における板綴船の容積を推定する前段に、舟敷平均両舷角  $33^\circ$  と



図Ⅷ-13 舟敷長 7m 位の板綴船推定横断面

鈴木 2013 引用

を舟敷とする大型板綴船も想定でき、『蝦夷島奇観』「大船図」は全長 11m 位、H.Capron の目視最大値全長 18m 前後になる大型板綴船も存在する可能性が高い。従って、測定値平均(表Ⅷ-11)は大型丸木舟・大型板綴船の数値ではなくそれ以下の規模の値と考えられる。

また、板綴船は舷側板の高さ分だけ増容されるので中央部舷

側板と舟敷深さと中央部舷側板幅より(表Ⅷ-11 上段)、最大幅における舟敷+舷側板の断面積を推定する(図Ⅷ-13)。図より舷側板1段目高は 23.0 cm、舷側板1段目高は 21.0 cm となる。よって、舟敷断面積は  $1870.5 \text{ cm}^2$ 、舷側板1段目断面積は  $1840.0 \text{ cm}^2$ 、舷側板2段目断面積は  $1963.5 \text{ cm}^2$  となり、これらの比は、舟敷断面積：舷側板1段目断面積：舷側板2段目断面積 =  $1 : 0.98 : 1.05$  である。

大型丸木舟の積載量は 8 石積であるから、舟敷長 7m の最大舟敷容積は  $8 \text{ 石} \times 1.35 = 10.8 \text{ 石積}$ 、舷側板1段目容積： $10.8 \text{ 石積} \times 0.98 = 10.6 \text{ 石積}$ 、舷側板2段目容積： $10.8 \text{ 石積} \times 1.05 = 11.3 \text{ 石積}$ となる。

以上より、舷側板一段・漕ぎ手が一列並びの小型板綴船(図Ⅷ-10)は舟敷容積+舷側板一段目容積： $10.8 + 10.6 = 21.4 \text{ 石積}$ 以下、舷側



板二段・漕ぎ手が一列並びの中型板綴船(図Ⅷ-7・11)は舟敷容積+舷側板1段目容積+舷側板2段目容積:  $10.8 + 10.6 + 11.3 = 32.7$  石積以下と推定される。舷側板二段・漕ぎ手が二列並びの大型板綴船(図Ⅷ-12)は、漕ぎ手が二列なので中型板綴船の最大幅の二倍近くあり  $32.7 \times 2 = 65.4$  石積以上となるが、アイヌ絵・文献史料から全長の更に長い例が知られる。仮に舟敷長7m以上の規格が全長  $9\text{m} \cdot 11\text{m} \cdot 12\text{m} \cdot 18\text{m}$  であれば、舟敷長7mの1.29倍・1.57倍・1.71倍・2.57倍になるので、 $65.4 \times 1.29 = 84.4$  石積、 $65.4 \times 1.57 = 102.7$  石積、 $65.4 \times 1.71 = 111.8$  石積、 $65.4 \times 2.57 = 168.1$  石積となる。出土舷側板から復元した推定値は、舷側板の幅により大きな場合が想定できる(図Ⅷ-12の人物の膝くらいの高さに舷側板1段目上端がある)。よってこれら推定値は最低の推定値と考えられる。

つぎに、船体容積の推定には前述した船材出土資料による方法以外にアイヌ絵を用いることも可能であると考え(鈴木2003c)。図Ⅷ-12中、立位人物の身長を1.5mと仮定し計測基準とすると、全長12m・最大幅(船梁の長さを幅とした)1.8mとなる。そして、中世本州の準構造船は舟底が複材である以外は板綴船とほぼ同じ構造(石井謙治1995)なので板綴船の積載量が推定できる。石井によると13世紀代の『北野天神縁起絵巻』所載の250石積準構造船の復元値が全長32.6m・最大幅2.4mである。

仮に全長×最大幅で比較すると図Ⅷ-12板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の27.6%にあたるので  $250 \text{石積} \times 0.276 = 69 \text{石積}$  と推算できる。いっぽう、二者はほぼ同じ構造なので全長で推算可能であり図Ⅷ-12板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船の36.8%にあたるので  $250 \text{石積} \times 0.368 = 92 \text{石積}$  と見積もれる。両数値は中型板綴船の最大幅の二倍以上の容積65.4石積を上回る値なので65.4石積を大型板綴船の積載最低値とした場合は妥当な数値といえる。両者の乖離が大きい理由は、大型板綴船は北野天神縁起絵巻準構造船に比べて幅が狭いことにある。前述した板綴船の全長だけ伸ばした推算値  $12\text{m} \rightarrow 111.8 \text{石積}$  であるから、全長による推算値92石積に近く、同一形態の船における比較を有意とすれば全長による推算値に確からしきがある。大型板綴船の積載量を65.4~300石積と推定する。

続縄文期にはどの規模の板綴船があったか。タブコブ遺跡の舟形土製品は舷側板(アヨロ2a期:弥生中期前葉)があるものの艫舳両端を閉じる構造がない、ユカンボシE7遺跡の土器絵画は舷側板・艫舳両端を閉じる構造で、舷側板が一段の可能性があり、帆走(円刺群Ⅷ期:古墳後期)である。前者は「小型板綴船」より簡単な構造の準構造船、後者は「小型以上の板綴船」であったと考えられる。

表Ⅷ-2によると円刺群Ⅵ~Ⅷ期に鉄製品の組成が後代の擦文期とほぼ同じになるので鉄器の需要が高まった。そして、擦文期の板綴船は大型であったとの推測がなされている(鈴木2003c)。このことから円刺群Ⅷ期に描かれたユカンボシE7遺跡の板綴船は鉄器の需要が高まったころのものであるから、渡海交易が擦文期相当まで拡大していた可能性があり、その需要にこたえるため船が大型化したとの推測も可能である。

造船≒木工を視点とすると、やはり円刺群Ⅶ期以降に鉄斧の副葬例が増すことから、それを木工に利用して板綴船を大型化したのもこの頃との推測も成り立つ。鉄斧と磨製石斧の伐採比較実験においては(工藤2004)、直径約20cmで鉄斧打撃回数×3.4=磨製石斧打撃回数、直径約30cmで鉄斧打撃回数×3.9=磨製石斧打撃回数、が生じていることから、鉄斧の有効性が磨製石斧を3.5~4倍近く上回っていると解釈できる。また、鉄器による精密な細工(艫舳の加工・舷側板の成形・その板綴り孔)も可能になった。鉄斧使用と板綴船を大型

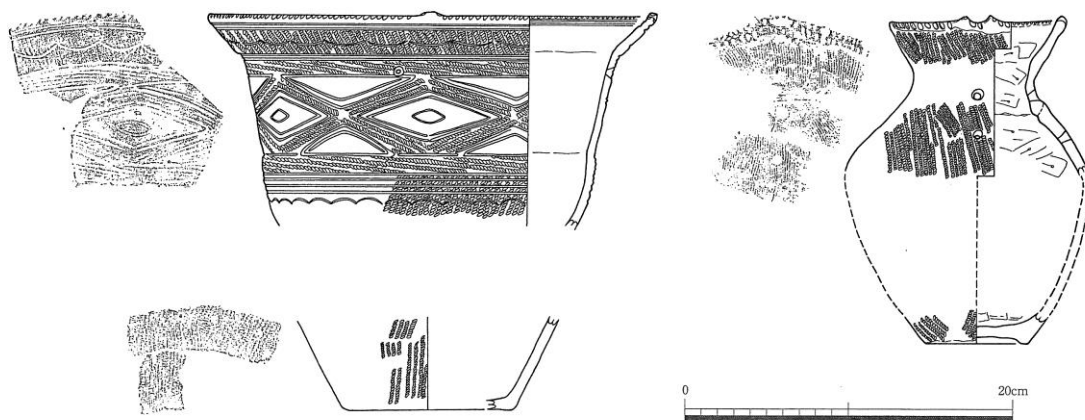
化は関係があり大型の舟敷を伐採・加工するには鉄斧・鉋は不可欠であっただろう。

#### e 海路について

2 節より太平洋側の経路は河川に沿ったものが推定されたが、渡海交易Ⅲ段階後半には経路が寸断状態になることから、太平洋側では海路の利用が高まったと考えられる。一方、日本海側海路の詳細を示す直接の証拠は8世紀以降に散見される。「寶龜十一(780)年五月十一日条」『続日本紀』(国立歴史民俗博物館 2000)と「弘仁元(811)年十月二十七日条」『日本後紀』(国立歴史民俗博物館 2000)と「貞観十七(857)年十一月十六日条」・「元慶三(879)年一月十一日条」・「元慶五(881)年八月十四日条」『日本三代実録』(国立歴史民俗博物館 2000)があり、擦文文化人は日本海側の秋田郡～飽海郡(山形県北部沿岸)に現れていた。それ以前の続縄文期を通じて、陸上の経路を想定させる北海道系土器・墓制の分布がみられないことから、専ら海路が利用されていたと考えられる。

続縄文期の状況は北海道系土器・石斧の分布によって類推するしかない。弥生時代前期後葉～後期初頭の石川県八日市地方遺跡から日高産緑色片岩石斧が出土する。土器は、弥生時代後期前半の富山県高岡市下老子笹川遺跡からは帯縄文が付く天王山式(図Ⅷ-14 参照)が、新潟県上越市下馬場遺跡からは弥生時代後期後半に並行する聖山KⅡ群が、新潟県柏崎市内越遺跡からは後北C<sub>1</sub>式が、鶴岡市山田遺跡からは古墳時代前期後半に並行する北大Ⅰが、少数出土している。これらは帯縄文が付されている土器である。帯縄文の押捺方法は斜位に原体を配置し、押捺点を移動しながら転写してゆく特殊な方法(図Ⅴ-14 参照)であるため、同時期の弥生・古墳時代人は、続縄文文化人の指導・転写の実見がなければ容易に模倣できない。帯縄文は内在的属性であり、続縄文文化人の足跡が天王山式分布圏に及んだ根拠といえる。

以上より、続縄文文化人は弥生時代後期には中継ぎ式の滞留型交易を行いつつも、北陸沿岸までを南方の活動域にしていたと考えられる。



図Ⅷ-14 下老子笹川遺跡出土の天王山系土器 富山県文化振興財団 2006 引用

## IX章

“文化”変容としての墓制



## IX章 “文化” 変容としての墓制

続縄文の墓制研究は「階層」が主要な論題であった。縄文においては後期中葉から晩期初頭の周堤墓を題材として、墓制からみた「階層差」が論じられていた(瀬川 1983)。現在では「階層の有無」ではなく、「どのような階層差」があったのかが議論されている。では、「階層」はどのように定義されるのだろうか。佐々木藤雄に拠れば、階層とは分業(個別的生産諸力)の発達と余剰の蓄積を基盤とした社会的・経済的な不平等に基づく威信的な序列。この序列は量的・漸移的差である(佐々木 2005)。林 謙作に拠れば、階層とは有形・無形の社会的財産の分配が異なるグループ。社会的価値が不平等に分配される(林 1998)。また、分業を階層間分業・生理的分業・地域間分業に細分し、威信経済の出現には階層間分業が支配的に存在する(林 1995)、と述べる。

近年の続縄文における「階層」研究は、生業との関係から言及がある(高瀬 2004a、松木武彦 2007)。松木に拠れば、階層とは社会的に構造化された不平等な個々の群集。不平等とは財・威信・権力といった社会的資源が均等に分配されない状態で、それには経済的位相(階級)と威信の位相(身分・地位)という二相性が備わる。そして、瀬川拓郎は「多副葬墓」という言葉を持ちいて、以下の主旨を表わす。北海道では縄文後期後葉～続縄文期に「首長墓」があるので、階層化が強く顕現している:①。階層化の画期には弥生農耕社会と「商品」流通が関与している:②。近世アイヌ社会との比較から縄文・続縄文社会における階層化の進展段階を論じる:③(瀬川 2009)。

上記の定義は、階層には経済的側面・社会的側面があることでは共通するものの、前者と後者は一体である、前者と後者の二相性がある、という考え方に分かれる。そこには、階層差の発生に関して、経済的側面(分業・貯蔵・分配という仕組み)の介在を重く見るか、それを一側面と見るのかの違いがある。互酬の原則に基づいた再分配機構が機能する時期(古代以降、弥生時代以降という説もある)に階級が発生し、それ以前には階級はなかったとされる。いずれにせよ、階層があって次に階級が生じている。このことは、階級が階層の特殊化が進行して、それが顕在化したことを示す。

私は階層から階級への変化は経済的側面が威信の側面を侵蝕する過程であると考え。ただし、現時点においては、古代より前についての検討材料が不十分であるので、二相性の視点は保留されるべきであろう。2010年に続縄文墓制における階層を瀬川の①～③に沿って検討した(鈴木 2010)。近年資料の増加もみられることから再考する。

### 1 節 墓制の分析

#### 1 分析対象—墓制と交易・生業との関わり

林(前出 1995)は生業と階層の関係を以下のように述べた。「生業成果の季節性多寡と定住とが密接に関係することにより、所謂“階層化狩猟社会”においては分業・貯蔵・分配という仕組み

が必要であって、分業の軸は生理的分業・地域間分業である。よって、縄文社会のエリートは特権を持たない複数の指導層であり、ムラビトの一員である」。

生理的分業とは、年齢別と性別の分担構造であり、同一生業における分担・生業ごとに異なる分担が想定される。性分業については、民族例における道具の“分け”と考古学における被葬者の性別と副葬品の“分け”とがほぼ一致することをアイヌ文化期において確認された(鈴木 2009c)。縄文晩期～擦文文化期の合葬・追葬例において、続縄文後葉以降に性別が埋葬基準として機能している(鈴木 2009b)。これらより少なくとも続縄文後葉以降には、生理的分業のうち性分業が機能していたことが推定される。なお、年齢別についての考古学的検証はこれからの課題である。

地域間分業とは交易のことである。縄文～続縄文中葉の広域交換＝「渡海交易」は威信財(第二の道具)の入手を専らとしていること、続縄文後葉以降は実用財(鉄器化した第一の道具)の入手が増加すること、その他に近隣との交換＝「域内交易」が維持されることが交易の特徴である(Ⅷ章参照)。威信財の入手・鉄器の入手・「域内交易」が階層間分業に基づいて行われていたのか。もしそうだと、「交易するひと」と「交易しないひと」が階層として存在する。

経済的側面が威信側面を凌駕して行く過渡期は、北海道においては続縄文後葉である。同時にそれは生業に変化をもたらした(Ⅷ章参照)。続縄文中葉以前の威信側面>経済的側面が、続縄文後葉以降には威信側面<経済的側面になるので、「生業と分業(生理的分業)と階層差」・「交換と分業(地域間分業)と階層差」の問題も続縄文全期を扱うことによって初めて言及可能となる。そして、経済的側面が威信側面を侵蝕する過程が階層の変容であるから、墓制と交易を並行的にとりあげることは有効である。

## 2 分析手法

どのような考古学的実体のどのような属性を操作すれば、階層という直接不可視な現象が証明可能なのか。主に「貯蔵穴・墓・奢多品・住居」(佐々木 2005)、「墓・奢多品・住居」(松木 2000)、「住居・身なり・墓」(林 1998)があげられる。「貯蔵穴・墓・住居」は遺構に備わる属性により、「奢多品」は遺物に備わる属性により、「身なり」は遺物に備わる属性とその空間的布置に拠って操作可能な考古学的証拠とみなされる。

続縄文においては「貯蔵穴・墓・奢多品・住居」のうち、詳細な分析に耐えられるのは事例数の多寡からみて、「墓・奢多品」である。くわえて、奢多品は墓制と交易の両方に関係している。前述したように、威信財と実用財(≡第二の道具と鉄器化した第一の道具)のほとんどが移入品だからである。ただし、それらは自明に階層差を示すわけではなく、特定の属性・その空間的布置を階層差の指標とみなし、操作的・事後的に論が整合した場合に限り階層差が導ける。したがって、その成果は個別的・相対的に有効である。階層性に言及する研究者のほとんどが、前掲した遺構・遺物を用いており、対象選択の有効性を裏づけられると思われる。

例えば墓について見ると、林はそれ用いる有効性を次のように挙げる。「墓は、死者に対する他人の評価であり、その個人や帰属集団に対して個人的・社会的な評価が現れる」、「墓は、死者の住まいであるから、その構造・配置には住としての評価も反映されている」、「副葬品の装身具

は、死者の身なりであるから、それにも評価が反映されている」(林 1998)。

では、副葬品を含めた墓制においてどの属性が階層を反映しているのだろうか。考古学的属性とはその個物の材質・形状・規格であり、その量的評価・質的评价(遺物組成)によって変化を検証するのである。しかし前述したように、階層は現象であり、遺構・遺物ではない。そこで、両者をつなぐ高次の属性が必要となる。以上より、続縄文期における墓制については以下とした(鈴木 2009b)。

内在的属性：葬送後の状況からは窺い知れず、墓制諸属性の伝達・伝承には時間・場面の共有が必要。内部施設(墓坑底平面形、主体部構造)・埋葬姿勢・遺体処理があたる。ただし、墓制執行に関わる専門集団(専門宗教者)に取り扱われる場合は中間的属性に移行する。

表出的属性：葬送後の状況からでも理解でき、墓制の諸属性の伝達・伝承には時間・場面の共有を必要とせず、事象・伝聞を介して転移可能。外部施設(墳丘・周溝・墓標)があたる。

中間的属性：副葬品があたり、個人の意図を含む場合は転移に時間・場面の共有を必要とし(内在的と判別される)、集団の意図を表す場合は時間・場面の共有を必要としない(表出的と判別される)。

墓制の3属性による定性的分析はすでに、続縄文後葉について(鈴木 2005c)、続縄文前中葉について(鈴木 2009b)において言及済みであり、3属性による墓制研究が有効であることは明らかとなっている。なお、擦文文化期(鈴木 2004c)、アイヌ文化期(鈴木 2009c)についても同様である。定性的分析により、階層は表出 $\geq$ 中間 $\geq$ 内在の順に標示される傾向がみられる。しかし、墓の属性が社会的評価を示すとしても、それが被葬者の身分(尊卑・貧富)・被葬者の役割のどれを、どの程示すのかが問題である。属性に相関(質的相違)・序列(数的差)が連続・広汎的に現れる場合は複数世代間に差異が継続・承認を表し、被葬者に対する一定的评价(尊卑・貧富)、社会的な判断(制度・役割)と読み取れる。ただし、属性の種類差異が役割、数量的差が貧富に由来し、質的差が尊卑に由来する、という1対1対応の関係にあるかどうかは不明である。属性の量的評価・相関をみる必要がある。

### 3 対象資料の条件

**表IX-1**に示すような時期が明らかな墓について、表出的属性は外部施設である積石と上屋の一部である柱穴。内在的属性は内部施設(木槨・袋状土坑)と埋葬姿勢とベンガラ。中間的属性は副葬品の組み合わせで表現される特定の葬法(南川葬法・ウサクマイ葬法)について、時間ごと遺跡ごとに、属性種の変化と量的序列と相関をしてみることにした。

2019年3月までに刊行された報告書のうち、H37丘珠式～円刺群IX期にかけての遺跡の上記項目が判明している墓を対象とした(**表IX-2**:副葬品の後ろの数字は点数、この表には分析対象の副葬品の他にも参考としての副葬品を載せた)。時期判別を土器(まれに鉄器)によっているため、それを副葬しない墓については時期不明となってしまう。今回の分析対象は、土器が副葬されない墓・有機質のみ副葬する墓が欠落する偏りがある。

表区-1 当該墓一覽

道南・初頭～後北式期

番号	遺跡名	遺構名	例数	時期
78	鷺ノ木	UP2/UPI-18～23・30・34・121/UP35・36、USPI	17	後北A/後北B/後北C
79		6～8号土坑		後北B
82	桜町	35P/1・2・10～12・14・19・20・24・27・31・33・34・40・41・44・46～49・54・62・63・67P	26	後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
85	石倉貝塚	P-2・4・15・18・19・21	6	後北C <sub>2</sub> -D
86	茂別	X-13/X-3・8・9・14・15・17・18・24・26、P-61・110・112/X-1・2・5・7・12・16・20・21・28、P-101/X-6	24	下添山/西桔梗B <sub>2</sub> /南川Ⅲ/南川Ⅳ
89	南川	4号墓坑/1～3・5・6・10・12～15・17～20号墓坑	50	南川Ⅲ/南川Ⅳ
90		25・27号墓坑/22～24・40・45・46・57・68・84～91・94～96・106～117・122・134号墓坑		

道央・初頭～後北式期

番号	遺跡名	遺構名	例数	時期
1	アヨロ	墓22・24・26・106・110・115・301・307/墓1・2a・3・15・16・30・109・111・201・204・304/墓4b・5・8・11・18・25・101・103・108・203・205/墓23・32・303、土坑33	34	7301/7302a/7302b/7303a
2	タブコブ	GP-17/GP-27・29・30・36・38/GP-31・39・40 GP-18/GP-7・8・10・11・12・13・14・20・21・24・25・28・33、P-8・13	25	7301/7302a/7302b 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
5	沙見	1号墳墓第1～6墓穴	6	H37柴町
6	トニカ	1～33号pit	34	H317
7	大狩部	1～7号ピット	14	H37丘珠
8	旭町1	8～10・12～14号ピット	6	H37丘珠
9	白泉	SP-139・140・178・189・190・212	6	H37丘珠
17	キウス7	6・12・13号ピット/1～5号ピット	8	H317/H37柴町
18	相木B	UP-3・4・9・13・20・21・23・28・38・47・53	11	後北C <sub>2</sub> -D
21	西島松2	第268号土坑墓/第3・17・35・36・38・39・43・48・52・59・60・67・71・76・78・80・106・115・118・140・141・151・152・158・177・189・190・202・207・208・213・216・218・222・234・239・241・242・247・265・271・280・290・302・309・314・316・327・339・346・385・395・402・416・435号土坑墓	56	後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
23	茂産6	P-129・314・492・1054・1207	6	後北C <sub>2</sub> -D
29	高砂	P-1・9・15・16・22・26	6	後北C <sub>2</sub> -D
30		P-358		H317
31		P-478・482		H37丘珠
32		P-629・693/P-630		H37丘珠/H317
33		P-876・880	12	H317
35		P-914		H37丘珠
37		P-1231		
39	元江別1	墓1・43/墓2・13・16・34・38・39・46・62・66・67・68・73/墓19・21・48・53・56・59・72/墓15 墓47/墓14・18・44・45・51・58・61・64 P-77	32	7301/7302a/7302b/7303a H317/H37柴町 江別太1
40	旧豊平河畔	P-9 P-7		江別太1 後北A
41		墓1・18/墓10・23・24 墓5・6		7302a/7302b 江別太1
42		土坑97/土坑91 土坑126/土坑85・102 土坑36	41	7302b/7303a H37柴町/江別太2 後北A
43		墓135・142・155/墓132・174・186 墓133・156・164・165・166・168・171・175・176・178・179・180・182・183・184・185・187・188		江別太1/江別太2 後北A
44		土坑8-126-7 土坑8-130-1		7302b 江別太1
49	S 153	第68・200・225・380・421・456・457・474・476・490・502・528・539・600・601・616・673・749・781号ピット	19	後北C <sub>2</sub> -D
51	S 354	PT01-27・34・36・47・48・54	7	後北C <sub>2</sub> -D
52	T 361	第19・42・97・100・114号ピット	5	後北C <sub>2</sub> -D
57	紅葉山33	7号堅穴 8号堅穴		H317 江別太1
58		GP-1・51・52・54/GP-3・5・22・26・27・37・38・43・50・53 GP-57/GP-2・42・56・59・63/GP-19	23	7302a/7302b H317/H37柴町/江別太1
60	ワッカオイ-D	第1・2・3・9・11・14・15・16・17・20土坑墓・5号土坑 第21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・32・33土坑墓	23	後北C <sub>2</sub> -D
65	餅屋沢	9-39A・39C・44B・45A・45F・45H・46B・47A、10-36C・37A・38A・38D・39B・40A・44A・44B・45B・47A、11-36C・36F、11-37A・37D・37J・38A・38D・39C・39E・39F・40A・41A・41B・43A・45C・46H・47C・48B・48L・49A、12-37C・37F・38A・38C・38E～G・39C・40F・41F～H・45A・45C、13-39A～D・39F・40A・40D・40E・40F GP-179・518/GP-88・200	60	後北C <sub>2</sub> -D
66	大川	GP-85・195/GP-82・120/GP-27・28・72・75・100・107・109・116・123・125・175・425/GP-21・163・243・359・373・375・378・400・457・489・546・548・590/GP-422 GP-7・110		7301/7302a/7302b/7303a/7303b 江別太1/江別太2 後北C <sub>2</sub> -D
67		GP-676・686・853/GP-620・711・720・729・856・941/GP-623・948 GP-945/GP-916 GP-854・922		7302a/7303a/7303b 江別太1/江別太2 後北A
68		GP-87・91/GP-20・42・78・79・89・105・131・133・348A/GP-118・348B・372・448・454・593		7302a/7302b/7303a
69		17(道道地点)/P-44(迂回路地点)・30・32・53/18・59(迂回路地点) *以下、迂回・道道と表記	142	7301/7302a/7303a
70		P-9(道道) P-126(道道)/P-77(迂回)・83・84・98(道道)/P-89(迂回)・76・91・104・122・128(道道)/P-118(道道) P-95(迂回) P-63(道道) P-94(道道)		江別太1 7301/7302a/7302b/7303a 江別太1 後北A
71		P-135・153・155・166・182B・188・208/P-140・148・154・176・177・201・207(道道)/P-112・116・117・120・129・131・134(迂回)/P-143・144・149・151・157・160・163・165・170・171・175・180・182A・183・184・187・192・196・199・203・204・205・206(道道)/P-118(迂回) P-97・98・103・104・107・138(迂回)		後北C <sub>2</sub> -D 7301/7302a/7302b/7303a 後北C <sub>2</sub> -D

道東・初頭～後北式期

番号	遺跡名	遺構名	例数	遺構の時期
91	十勝太若月	土坑86/土坑23・24・26・29・34～36・59・65・82・84・85・89・98・101	16	後北B/後北C <sub>1</sub>
93	幣舞	第77・79・80・82・87・90号墓/第14・26・28・35・42・49・52・57・65・67・83・89号墓 第97・100号墓	19	フシコタン下層/興津 フシコタン下層
96	興津	第19・22・51・54号ピット		興津
97		第55・58・62・66・81・86号ピット	10	興津
99	古道第6	P2-6～8・13・14・18・21・26・27・29・34	12	興津
108	トロロチャシ	XVI-18ピットa・b・c、XIII-21ピット、XVI-17ピット	5	後北C <sub>2</sub> -D
109	常呂川河口	P-95・121/P-246a・252・260・261・262ab・263a・267・272/P-22a・24・44a・122a・132・133 P-20・22・23・25・31・32・34・37・38・46・117・130・143・157・300/P-105・253 P-306		元町2/宇津内IIa/宇津内IIb 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D 後北B
110		P-328・328ab・329・338a・343/P-329a・370a・409a・470/P-370・371a・372・373・391・404・405・459・482・494 P-389		元町2/宇津内IIa/宇津内IIb 後北C <sub>1</sub>
112		P-646・654b・661a/P-541a・542d・577a・635・641/P-541b・545・634・649/P-601・636 P-610・665/P-590・595・596・598・599・700	142	栄浦1・2群/元町2/宇津内IIa/宇津内IIb 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
113		P-788d/P-705・719・829/P-722・737・766・866 P-890/P-899/P-704・709・738a・772・808		栄浦1・2群/宇津内IIa/宇津内IIb 後北B/後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
114		P-937・1013・1023・1046a/P-941・1006b/P-1012 P-900・901・902・908a・920・930a・934・940c・954・971・975・984a・986・988・988a・990・994・997・1010・1025・1074		元町2/宇津内IIa/宇津内IIb 後北C <sub>2</sub> -D
115		P-1209・1210・1232・1233a・1418/P-1272・1281・1428/P-1332・1405・1431/P-1219・1282a・1408 P-1350・1351・1353/P-1229・1233・1247・1278・1461		栄浦1・2群/元町2/宇津内IIa/宇津内IIb 後北C <sub>1</sub> /後北C <sub>2</sub> -D
117	尾河台地	6・11・12号墓/7・15号墓	5	宇津内IIa/宇津内IIb



表IX-1 の続き

番号	遺跡名	遺構名	例数	時期
2	朝日	P-14・17・18・20・25	5	I～V
11	ユカンボシE7	P-1・28・40/P-29・38・46・47/P-19/P-31/P-21・37・42・48/P-26・27	15	VII/VIII/IX/VI～VII/VIII～IX
12	カナンバ2	第40・70号土坑墓/第33号土坑墓/第55号土坑墓/第54号土坑墓/第41・44号土坑墓/第27・30・37・38・45・47・51・53・58・59・61・66～68号土坑墓	21	VI/VII/VIII/VI～VII/VIII～IX
14	柏木B	第55・212号土坑墓/第65・66・69号土坑墓	5	II/IV
17	西島松5	P-66/P-15・22・55・83・128・131/P-2・3・5・6・8・11・23・27・30・68・130・203/P-1・33・73・89・132・143/P-93・98・99・103・129・146	35	VII/VIII/IX/VII～VIII/VIII～IX
18	橋内D	P-514		VII～VIII
47	橋内D	P-145・163・171/P-53・101/P-144/P-174・194/P-44・148・159/P-100・113・131・140・180/P-19・51・142・181/P-182/P-24・25/P-31・46・92・155・157	28	I/V/I～II/II～III/II～IV/II～V/IV～V/I～III/I～IV/I～V
19	高砂	P-244・245		VI
20		P-360		VI～VII
21		P-605		V
22		P-994	6	VI
23		P-1075		V
29	大麻3	P-378・391・402～404・434/P-345・405・407・415・426/P-354・408/P-438	14	IV/V/III～V/I～V
30	吉井の沢	P-86・109・162・174・178・197/P-238/P-191・211/P-87・160・210・230・237/P-59/P-59/P-80・85/P-184・232/P-228/P-31・57・92・103・105	25	II/III/IV/V/I～II/II～IV/II～V/III～IV/I～V
34	C544	4PT12・14・25/4PT16・34・36	6	VI/VII～VIII
35	K39北大構内	2・3号墓/1・4・5号墓/6・7号墓	7	II/III/II～III
38	圃島D	81-9A・9B, 81-11A, 86-11B/81-10C・10D, 82-10A, 82-11A, 84-11B, 85-11A, 86-11A	11	VII/VIII～IX
45	ト口岬	第35・59/30・40・41号土坑	5	IV/V

表IX-2 出土副葬品一覧(分析対象遺物の抜粋)

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置		
			坑底	坑中	埋土上面/坑口脇
<b>1期: H37丘珠</b>					
7	大野部	6号ピット	石斧1, 琥珀半玉400		石鏡2
7		9号ピット	琥珀半玉57		
8	旭町1	10号ピット	石鏡2		
8		P-139	ナイフ4, 石斧1		石鏡1, 石斧1
8		P-140	石鏡5, ナイフ1		
8		P-189	石斧1		
8		P-190	石鏡3, ナイフ2, 石斧3, 石斧未製品1		ナイフ2, 石斧1
8		P-212	石鏡4, 石斧2, 玉1		石鏡
30	高砂	P-482			石鏡1
31		P-629	石鏡3, ナイフ6, 石斧3, 琥珀半玉300		
31		P-693			石鏡3
33		P-914			石鏡1, ナイフ1
<b>1期: H317</b>					
6	トニカ	1号pit			石鏡1, 石斧1, 琥珀半玉3
6		2号pit			石鏡1, 石斧1
6		3号pit	石鏡1, 石斧4, 琥珀半玉820		
6		4号pit	石斧3, 琥珀半玉1235		
6		5号pit	石鏡2		
6		6号pit	石鏡1		
6		7号pit	琥珀半玉2		
6		8号pit	石鏡1, ナイフ1		
6		10号pit	石鏡2, ナイフ1, 琥珀半玉845		
6		17号pit			琥珀半玉8
6		18号pit			石鏡1
6		22号pit	琥珀半玉28		
6		25号pit	琥珀半玉132		
6		29号pit			石鏡1
6		30号pit			石鏡1
6		33号pit			石鏡1, 石斧1
9	白糸	6号ピット			石鏡, ナイフ
9		12号ピット			石鏡1, ナイフ1
31	高砂	P-630			石鏡14, ナイフ2, 石斧3
32		P-889			石鏡1, 石斧2
36	元江別1	高47	石鏡11, ナイフ4		
58	紅葉山33	高47	石鏡5, ナイフ1, 石斧1, 琥珀半玉2, 1727等		
<b>1期: フシコタン下層</b>					
93	常舞	第79号墓			石鏡2
93		第80号墓	琥珀玉1		石鏡1
93		第82号墓	石鏡1		石鏡2
93		第97号墓	石鏡2		琥珀原石1
94		第100号墓	琥珀玉9		
<b>1期: 栄浦一・二群</b>					
112	常呂川河口	P-654b	石鏡1, ナイフ1, 石斧2, 垂飾1		
113		P-788a	石鏡1, ナイフ2		石鏡1, ナイフ1
115		P-1209	石鏡1, 石斧1		
115		P-1232	ナイフ1, 石斧2		
115		P-1233a	石鏡16		石鏡2, 石斧1
115		P-1418	石鏡5, 琥珀小玉271		
<b>1期: 興津</b>					
96	興津	第51号ピット	ナイフ2, 垂石1		
93	常舞	第14号墓	石鏡2, 石斧1		
93		第26号墓	琥珀玉2		
93		第28号墓	琥珀玉127, 琥珀垂飾1		
93		第35号墓	琥珀玉9, 琥珀原石5		
93		第42号墓	石鏡1		琥珀鏡1
93		第52号墓	石鏡1, 石斧1, 琥珀玉5		
93		第65号墓	琥珀玉1		
93		第67号墓			石鏡2
93		第89号墓	垂牙副葬品, 琥珀半玉27, 貝半玉191, 貝輪19		
99	古道第6	P2	石鏡2		
99		P7	琥珀垂飾11, 琥珀小玉8, 琥珀管玉1, 琥珀小半玉37		
99		P8	琥珀垂飾5, 琥珀小玉19, 琥珀小半玉173, 琥珀玉片20		
99		P14	石斧4		
<b>1期: 元町2</b>					
109	常呂川河口	P-95			石斧1, 琥珀小玉897
109		P-121			琥珀石(質損)
111		P-328	石鏡1, ナイフ1		
111		P-328b	石鏡8, ナイフ21, 石斧9		石鏡11, ナイフ4
111		P-338a	ナイフ2, 石斧1		ナイフ2
111		P-343	石鏡17, ナイフ4, 石斧1		
112		P-542d	ナイフ3, 石斧2		
112		P-577a	ナイフ1, 琥珀玉1		
112		P-641	ナイフ2, 石斧1		石鏡1, ナイフ2, 石斧1
114		P-973			ナイフ2
114		P-1013	石斧1, 琥珀玉106		石鏡1
114		P-1023	石斧1		
114		P-1046a	ナイフ6, 垂飾1, 琥珀玉148(半玉107・質1)		
115		P-1272	琥珀玉14		
115		P-1281	石鏡2, ナイフ3		

表Ⅹ-2 の続き

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置			
			坑底	坑中	埋土上面/坑口脇	
<b>2期:アヨロ1</b>						
86	成別 アヨロ	X-13	石斧未製品1	石鏃34、石斧1	石鏃7、ナイフ等3、石斧1、石製品1、石製品削片等2	
1		墓22				
1		墓24				
1		墓26	石斧1、管玉1、琥珀平玉1376、サメ歯1			
1		墓115	石鏃1、ナフ7、漆塗り石			
1		墓301	石斧1			
1		墓307	石鏃16、ナフ7、石斧1、石段2			
2		アゾフ	GP-17	石斧1	石斧1	
36		元江別1	墓1	石鏃30		
36			墓43	石鏃6		
66		大川	GP-85	石鏃6、石斧1	燧石1	
66			GP-195	石斧1		
69			P-17	石鏃27、ナイフ5、石斧4		
70			P-126	石斧2		
71			P-153	石鏃1		
71			P-155	石鏃3、サメ歯20		
71			P-166	石鏃1		
71	P-182B		石鏃13、ナフ1、サメ歯1			
71	P-188		石鏃11、ナイフ1、石斧3			
71	P-208		石鏃9、ナイフ1			
<b>2期:アヨロ2a</b>						
86	成別	X-3	磨製管玉1	石鏃1、ナイフ1、石斧1		
86		X-8	石鏃1	石鏃1、ナイフ等2、魚形石鏃3、石製品2、石製品削片		
86		X-9	石鏃1	石鏃9、ナイフ等8、石製品1、石製品削片5、土製品等69		
86		X-14	石鏃1	石鏃2、石製品1		
86		X-15	石鏃2、ナイフ2、石斧3、魚形石鏃5、石製品2、土製品等1			
86		X-17	石鏃6	石鏃6、ナイフ1、石斧1、魚形石鏃1、土製品等1		
86		X-18	石鏃11	石鏃3	石鏃5	
86		X-24		石鏃5、石斧1	石鏃2、ナイフ	
86		X-26	石鏃7、ナイフ1	ナイフ等1		
86		P-61	石鏃3、磨玉製管玉6	石鏃5、ナイフ1、魚形石鏃1		
86		P-110	石鏃1			
86		P-112	石鏃1	燧石1、サメ歯1		
1		アヨロ	墓1	石斧1		
1			墓2a	ナフ1、石斧2		
1			墓5			ナフ1、石斧1
1			墓111	石鏃5、ナフ2		
1			墓201	石鏃3、ナフ5、石斧2		
2	アゾフ	GP-30	石鏃22、ナフ5、石斧2	錆鉄銚子?1		
2		GP-36				
36	元江別1	墓2		石鏃1		
36		墓16	石斧3、琥珀平玉28、琥珀玉11、燧石1			
36		墓34	ナイフ6、石斧8、管玉1、琥珀平玉4			
36		墓39	石鏃7、ナイフ3、石斧1			
36		墓46		石斧1		
36	田豊平河畔	墓62	石鏃1			
36		墓68	ナフ1			
40	紅葉山33	墓18	石鏃1、ナイフ1			
40		墓18	石斧1、琥珀平玉1033			
58		GP-1	石鏃11、ナイフ28、石斧8、管玉8、鉄器1			
58		GP-51	ナイフ1			
58		GP-52	石斧3、管玉27			
58		GP-54	石鏃9、ナイフ2、石斧2			
66		大川	GP-82	石斧2、琥珀平玉2000<		
66			GP-120	ナイフ1		
67			GP-676		石鏃5、石斧1	
67			GP-686		石鏃1	
67	GP-853		石鏃2、石斧1	石鏃5、石斧3		
68	GP-87		ナイフ1			
68	GP-91		石斧1			
69	P-30		石鏃1			
69	P-53			石鏃1、ナイフ1		
69	P-77		石斧4	石斧1		
70	P-98		石鏃5			
71	P-154		石鏃4、磨玉管玉12、石製小玉1、燧石2			
71	P-201		石鏃1			
71	P-207		石鏃10、石斧1			
<b>2期:H37栄町</b>						
5	汐見	1号墳墓第2墓穴		石斧1		
5		1号墳墓第4墓穴	石鏃1			
5		1号墳墓第5墓穴	磨製管玉1、磨製岩製平玉1			
9		白泉	1号ピット		石鏃6	
9			3号ピット		石鏃	
9	4号ピット			石鏃2、石斧1		
9	5号ピット		琥珀玉2	石鏃1		
36	元江別1	墓14	管玉8、琥珀玉3			
36		墓18		琥珀玉1		
36		墓44	琥珀玉1146			
36		墓51	石斧1、琥珀平玉1033			
36		墓61	石鏃2、ナイフ2、琥珀平玉1033			
36		墓64	石鏃3、ナイフ1、石斧1、管玉12、琥珀平玉48			
58	紅葉山33	GP-63	石斧2	ナイフ2、石斧1		
<b>2期:宇津内Ⅱa</b>						
109	常古川河口	P-246a		石鏃8、ナイフ8、石斧1		
109		P-252	石斧2			
109		P-260	貝製睡籠1			
109		P-262b		石鏃1		
109		P-263a	石鏃8、琥珀平玉1300	ナイフ1、石斧3、燧石1		
109		P-267	石鏃9、ナイフ9、石斧4、琥珀玉1			
109		P-272	石鏃2、琥珀平玉22			
111		P-329a	ナイフ4、石斧2			
111		P-370a	石鏃23			
111		P-370	石鏃20、ナイフ3、石斧3、土製管玉2、クマ石鏃1、クマ睡籠1、琥珀玉2500			
112		P-634	ナイフ4			
114		P-1006b	石鏃3、ナイフ1、石斧1、磨製2			
115		P-1332	石鏃1	石斧1		
117		尾河台地	6号墓	石鏃3、ナフ7、石斧3		
117			12号墓	ナイフ2、石斧1		
<b>2期:宇津内ⅡaⅡ(古)</b>						
109	常古川河口	P-140a	石鏃1			
115		P-140b	石鏃10、ナイフ1、石斧1			
115		P-1431	石鏃7、琥珀玉8			
<b>3期:江別太1</b>						
40	田豊平河畔	墓5	石鏃3、ナイフ1、石斧1			
40		墓6	石鏃1、ナイフ2、石斧1			
42		墓142	石鏃5、石斧1			
42		墓142	石斧1		ナイフ1	
57	紅葉山33	第3号墓穴	石斧1			
58		GP-19	石鏃2、ナイフ2、石斧1			
66	大川	GP-179	石鏃3、石斧2、魚形石鏃2、鉄塊1	石鏃2、ナイフ1		
66		GP-518	石斧3	石鏃5		
70		P-95	石鏃6、石斧1			
<b>3期:江別太2</b>						
42	田豊平河畔	墓132	石鏃13		石鏃1	
42		墓174	ナイフ2、石斧3			
42		墓186		石鏃3		
66	大川	GP-88	石鏃8	石鏃1		
66		GP-200	石鏃64、石斧4	石斧1、琥珀玉1		
67	GP-916		石鏃1			
<b>3期:後北A</b>						
39	田豊平河畔	P-7	石鏃6、石斧1			
42		墓133	ナイフ1、石斧1	石斧1		
42		墓156	石斧1	石斧1		

表IX-2 の続き

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置	
			坑底	坑中
埋土上面/坑口脇				
<b>3期：後北A</b>				
42		墓164	ナイフ1	
42		墓165	石鏃3	
42		墓168		石鏃1
42		墓180	石鏃15	石鏃1
42		墓183		石鏃1
42		墓187		石鏃1
42		墓188	石鏃3	石鏃3
67	大川	GP-854	石鏃13, 石斧1	
67		GP-922	石鏃53	
70		P-63	石鏃51, ナイフ1, 石斧2	
<b>3期：宇津内IIaII(新)</b>				
112	常呂川河口	P-545	石鏃4, ナイフ2, 石斧2, 礫石1, 琥珀玉800	
112		P-649	石鏃12	
<b>3期：宇津内IIbI</b>				
109	常呂川河口	P-22a		石鏃7, 翡翠管玉1, 琥珀平玉5
109		P-24		石鏃10, ナイフ2, 石斧3, 管玉1
109		P-132		石鏃32, ナイフ2, 琥珀平玉1
109		P-133		石鏃1
111		P-370	ナイフ3	
111		P-371a	ナイフ1, 三日月形石鏃1	
111		P-372	三日月形石鏃2, 石斧1	
111		P-373	石鏃2	
111		P-391	石斧1	
111		P-404	石鏃4	石鏃1
111		P-405	琥珀玉2	
111		P-494	石斧1	
112		P-601	石鏃1, 石斧1	
114		P-1012	石鏃9, 管玉5, 琥珀玉98	石鏃9
115		P-1219	石鏃1, 石斧1	
115		P-1282a	ナイフ2	
115		P-1408	石鏃5, ナイフ1, 石斧1	
117	屋河台地	15号墓	石鏃32, ナイフ4, 石斧2	
<b>3期：アヨロ2b・南川III</b>				
86	茂別	X-1	石鏃1	石鏃2, ナイフ等4
86		X-2		石製品剥片2
86		X-5		石製品剥片1
86		X-7		石鏃15, ナイフ1, 石斧2, 魚形石鏃11, 石製品3, 石製品剥片等6
86		X-12		石鏃1
86		X-16	石鏃21	石鏃1
86		X-20	石鏃7, 石斧2, 石製品1	石鏃2, 石製品剥片等3
86		X-21	石鏃8, 碧玉製管玉1	石鏃2, ナイフ1, 石鏃1
86		X-28	石鏃1, 礫石6	石鏃1, 石斧1
86		P-101	碧玉製管玉7	石鏃1, 石斧1
90	南川	25号墓坑	石鏃1, 石斧2	
90		27号墓坑	石鏃1, 礫石2	石鏃15
1	アヨロ	墓4b		石鏃4, 魚形石鏃1
1		墓5		石鏃3, ナイフ1
1		墓25	石鏃36, ナイフ8, 石斧2	
1		墓103	石斧1	
1		墓108	ナイフ1	
1		墓203	石鏃3, ナイフ2	
2	カマコフ	GP-40	ナイフ1	
36	元江別1	墓19	石鏃19, 管玉38	
36		墓21	石鏃1, 石斧5	
36		墓48	石斧1	石斧5, 管玉2
36		墓53	ナイフ8, 石斧10	
36		墓56	石斧2, 管玉7	
36		墓72	礫石1	
40	旧豊平河畔	墓10		石鏃4, 石製装身具1
58	紅葉山33	GP-5	石鏃7, ナイフ6, 石斧2, 鉄鏃1	
58		GP-22	石鏃93, ナイフ11, 石斧5, 礫石3	礫石1
58		GP-26	石鏃8, ナイフ1, 石斧2, 管玉21, 礫石1	
58		GP-27	石斧1, 礫石1	
58		GP-38	ナイフ2, 石斧1, 礫石3, 琥珀平玉1	
58		GP-43	石斧1	
58		GP-53	石斧1	
66	大川	GP-72	石鏃3, ナイフ3, 石斧2	石斧1
66		GP-75	ナイフ1, 魚形石鏃1	
66		GP-100	石斧1	
66		GP-109	礫石13, 石製装身具1	石鏃1
66		GP-116	礫石5	石鏃1, ナイフ1, 管玉1
66		GP-123	石鏃14, 管玉12	石鏃1, 石斧1
66		GP-125	石鏃26, 石斧7, 熊形土製品	石鏃4
66		GP-175	石鏃7	石鏃3, 琥珀平玉5, 琥珀玉1
66		GP-425	石鏃4, 琥珀平玉7	石鏃1
68		GP-20	石鏃7	
68		GP-42	石鏃8, 丸玉1	
68		GP-78	石鏃21	石鏃1, サメ歯1
68		GP-105		翡翠管玉1
68		GP-133	石鏃1	石鏃1
68		GP-348A	石鏃7, ナイフ1, 石斧3	
70		P-91	石鏃10	
70		P-144	石鏃11, ナイフ1, 石斧5	石鏃1
70		P-145	ナイフ1	
70		P-148	石斧1	
71		P-144	石鏃3, ナイフ1, 石斧4	
71		P-149	石鏃6, ナイフ5	
71		P-151	石鏃2, ナイフ1, 石斧1	
71		P-160	石斧1	
71		P-163	石鏃1	
71		P-165	石鏃34, 石斧1, 礫石10, サメ歯6	
71		P-170	琥珀管玉1, サメ歯1	
71		P-182A	ナイフ4, 石斧8, 礫石6	
71		P-183	石鏃2, ナイフ1	
71		P-184	石鏃6, 石斧2, サメ歯2	
71		P-187	石鏃5, ナイフ4, 石斧7	
71		P-192	石鏃1, ナイフ2	
71		P-196	ナイフ21, 石斧1	
71		P-204	琥珀玉3	
71		P-203	石鏃2, 黒曜石棒状石1	
71		P-205	石斧1	
71		P-206	石鏃19, 石斧1	
71		P-112	ナイフ1, 礫石3	
71		P-116	石鏃16, ナイフ3, 石斧1	
71		P-120	ナイフ1	
71		P-129	石鏃等1, 石斧1	
71		P-131	石鏃69, ナイフ7, 碧玉管玉31, 鉄石管玉4	
71		P-134	石鏃3	
<b>3期：アヨロ3a・南川IV</b>				
89	南川	1号墓坑	石鏃10, ナイフ2, 石斧3	
89		2号墓坑	ナイフ2, 石斧1	
89		3号墓坑		石鏃6
89		5号墓坑	石鏃9, ナイフ1, 石斧1, 翡翠製勾玉1	石斧3
89		6号墓坑	石鏃5	ナイフ2, 石斧1
89		10号墓坑	石鏃11	
89		12号墓坑	石鏃32, ナイフ6, 石斧1	
89		13号墓坑	石鏃15, ナイフ1, 石斧1, 緑色片岩製巻物1	
89		15号墓坑	石鏃12, ナイフ2, 石斧2	石斧2
89		18号墓坑	石鏃36, ナイフ3, 石斧6	石斧1
89		19号墓坑	石斧1	
89		20号墓坑		石斧1
90		22号墓坑	石鏃10, ナイフ5	
90		23号墓坑	石鏃4, ナイフ3	
90		40号墓坑		石鏃11, ナイフ2
90		46号墓坑	ナイフ1, 石斧1	石鏃1

表区-2 の続き

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置		
			坑底	坑中	埋土上面/坑口脇
<b>3期:アヨロ3a・南川IV</b>					
90		87号墓坑		石斧1	
90		88号墓坑		ナイフ1	
90		84号墓坑		ナイフ1	石鏢17, ナイフ1, 石斧1
90		85号墓坑	ナイフ2, 石斧4		
90		86号墓坑	石鏢8, ナイフ4	ナイフ1	
90		87号墓坑	石鏢14, ナイフ10, 石斧3		
90		89号墓坑	石鏢2, ナイフ1, 石斧3		
90		90号墓坑	石鏢2, ナイフ5		
90		91号墓坑	石鏢16		
90		94号墓坑	石鏢17, ナイフ1		
90		95号墓坑	ナイフ11, 石斧3, 魚形石鏢1		
90		96号墓坑	石鏢22, ナイフ8		
90		106号墓坑	石鏢12, ナイフ4		
90		107号墓坑	石鏢1, ナイフ2, 魚形石鏢1		
90		108号墓坑		土製勾玉1	
90		109号墓坑	緑色片岩製垂飾未成品1	石鏢1, ナイフ1	石鏢3, ナイフ2, 石斧2
90		110号墓坑	サケ鱈1	石鏢1, ナイフ1	
90		111号墓坑	石鏢3, ナイフ1		石鏢3, ナイフ5, 石斧1
90		112号墓坑	ナイフ1		
90		113号墓坑	ナイフ2, 緑色片岩垂飾2		
90		114号墓坑	石鏢1, ナイフ2, 石斧1		
90		115号墓坑	石鏢1, ナイフ4, 石斧5		
90		116号墓坑	石鏢29, ナイフ5, 石斧4		
90		122号墓坑	ナイフ2		
90		134号墓坑		ナイフ1, 石斧1	
1	アヨロ	墓23	石鏢3, 7刀1		
1		墓303	刀12, 石斧2		
36	元江別1	墓15	ナイフ2, 石斧2		
66	大川	GP-163	石鏢19, 琥珀玉4	石鏢3	
66		GP-243	石鏢19, 琥珀玉4	石鏢11	
66		GP-359	石鏢54, 石斧4, 魚形石鏢2, 鉄器1	石鏢11	
66		GP-375	石鏢13, 石斧1	土玉1	
66		GP-378	石鏢4, ナイフ6, 石斧2	石鏢1, ナイフ1	
66		GP-400	石鏢7, 石斧1	石鏢9	
66		GP-457	石鏢14, 石斧7	石鏢2, 石斧1	
66		GP-489	石鏢6	石鏢3, ナイフ1	
66		GP-546	石鏢4, 石斧1, 琥珀平玉3	石鏢1	
66		GP-548	石鏢9, ナイフ1, 石斧2	石鏢6	
66		GP-590	石鏢7, ナイフ2	石鏢3	
67		GP-620	石鏢300<, 石斧1, 菅玉8	石斧1	
67		GP-720		石鏢3	
67		GP-729	石斧1	石鏢10	
67		GP-856		石鏢3	
67		GP-941	石鏢17, 石斧2	石斧1	
68		GP-118	石斧1, 平玉15, 石製垂飾1	石鏢11, 平玉6	
68		GP-348B		石鏢1	
68		GP-372	石鏢27, ナイフ2, 石斧3		
68		GP-448	石斧4, 勾玉1	石鏢3, 丸玉5, 石製垂飾1	
68		GP-454	石鏢12, 石斧1, 琥珀平玉1, 琥珀玉1	石鏢1, 琥珀平玉2, 琥珀玉1	
68		GP-593	石鏢68, 石斧1	石鏢19, 石斧1, 丸玉2	
69		P-59		石斧1	
70		P-118	石鏢4		
71		P-118	石斧3		
<b>4期:アヨロ3b</b>					
66	大川	GP-422		石鏢5	
67		GP-623	石鏢150<	石鏢	
67		GP-948	石鏢71, 石斧7	石鏢7, 玉1	
<b>4期:後北B</b>					
78	篠ノ木	UP18	石鏢1		
78		UP34	石鏢2		
78		UP121		石鏢1	
79		P7	石鏢1		
91	十勝若月太	土坑86		碧玉管玉2, ガラス小玉2	
110	常呂川河口	P-306	石鏢20		
113		P-890	石鏢14, ナイフ1, 琥珀平玉2		
<b>4期:後北C</b>					
78	篠ノ木	UP35		石鏢3	
82	桜町	35P	石鏢2	石鏢1	
91	十勝若月太	土坑23	石鏢2		
91		土坑24	石鏢1, ナイフ1, ガラス小玉1		
91		土坑26	石鏢33, ナイフ1, 緑色片岩管玉2, ガラス小玉10		
91		土坑29	石鏢8		
91		土坑34	石鏢109		
91		土坑35	石鏢2		
91		土坑36	石鏢108, ナイフ2		
91		土坑59	石鏢1		
91		土坑65	碧玉管玉4		
91		土坑82	ナイフ8, 石斧2		
91		土坑84	ナイフ8, 石斧2		
91		土坑89	ナイフ1		
91		土坑98		ナイフ3	
109	常呂川河口	P-20		石鏢4, ナイフ1	
109		P-22	石鏢17, 石斧1		
109		P-23		石鏢46(安山岩製4)ナイフ	
109		P-25		石鏢41, ナイフ1, 平玉1	
109		P-31		石鏢2	
109		P-32		石鏢3, ナイフ1	
109		P-34	石鏢63, 石斧1	石鏢4, ナイフ8, 石斧1	
109		P-37	石斧1	石鏢40, ナイフ1	
109		P-38		石鏢36, ナイフ2, 石斧2	
109		P-46	ナイフ1	石鏢7, ナイフ2	
109		P-130		石鏢11, ナイフ1, 石斧3	
109		P-157	刀子1		
109		P-300	刀子1, 板状鉄斧1, ガラス小玉20		
111		P-389	石鏢14, ナイフ1		
112		P-610	石斧1		
112		P-665	石鏢14, ナイフ1		
115		P-1350	石鏢22, ナイフ2, 石斧2		
115		P-1351	石鏢30, ナイフ1, 石斧1	石鏢2, 石斧1	
115		P-1353	石鏢36, ナイフ1		
<b>4期:宇津内IIbII</b>					
109	常呂川河口	P-44a		石鏢23	
109		P-122a	石斧1, 貝錐飾1, 菅玉18, 琥珀玉(管・平)229	石鏢5	
<b>5期:後北C<sub>2</sub>-D</b>					
85	石倉貝塚	P-19		石鏢1	
82	桜町	27P		石鏢1	
82		48P		石鏢1	
82		63P	ベンガラ塊1		石鏢1
82		67P	石鏢1		
2	タフコブ	GP-8		石鏢8, ガラス玉13	
2		GP-14	石鏢1, ガラス玉2, 漆塗り器		
2		GP-21		石鏢2	
17	キウス7	UP-4			石鏢1, ナイフ1, 石斧1
18	栢木B	17号土坑墓		石鏢1, ガラス玉1	
18		35号土坑墓		石鏢1	
18		48号土坑墓		石鏢2	
18		67号土坑墓	鉄片2		
18		71号土坑墓	ガラス玉27		
18		115号土坑墓		粘板岩石鏢7	
18		151号土坑墓	石斧1		
18		216号土坑墓	石斧1		
18		222号土坑墓		石鏢1, 石斧1	
18		247号土坑墓		粘板岩石鏢1	
21	西島松2	P1207	石斧1		

表区-2 の続き

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置		
			坑底	坑中	埋土上面/坑口脇
<b>5期:後北C<sub>2</sub>-D</b>					
23	茂池6	P-15		鉄製品2	
49	S153	第202号ピット	片岩製玉54		
51	S554	P127	石鏝2, 石斧2	石鏝1, 石斧1	
51		P154			石斧1
60	ワタリイ-D	20号土坑墓	琥珀平玉34		
61		22号土坑墓	石製平玉70, 土製7管玉2	石鏝1	
61		23号土坑墓	ガラス小玉2, 石製玉2, 土玉2		
61		25号土坑墓	土玉1		
61		29号土坑墓	土玉1, 琥珀玉5, 蛇紋岩製玉58		
65	餅屋沢	9-39A	土製管玉14		
65		9-39C	土製管玉5, 材不明管玉2, 材不明垂輪2		
65		9-45F		石鏝2	
65		10-37A			石鏝2, ナイフ2
65		11-37D		ナイフ2	
65		11-39F		石斧1	
65		11-40A		蛇紋岩平玉1	
65		11-41B	土製管玉19		
65		12-37C		石鏝1	
65		12-38E	ナイフ2		
65		12-41F	土玉1	石鏝1, ナイフ1	
65		12-41H	土玉1, 土製管玉4		
65		13-39B	琥珀平玉1, 蛇紋岩平玉36, 蛇紋岩垂輪1		
65		13-40E		石斧1	
66		P-94	石鏝1		
70	大川	P-97	ナイフ1, 石斧1		
71		P-97	ガラス小玉7, 琥珀岩小玉93, 土玉29		
71		P-98	ガラス小玉45		
71		P-103	石鏝1, ガラス小玉35		
71		P-107	石鏝2		
109	常呂川河口	P-105	木製釜	石鏝1, ナイフ1	
109		P-253		ナイフ1	
112		P-590	石鏝3, 翡翠小玉1, 琥珀平玉1		
112		P-595	石鏝1		
112		P-598	石鏝4, ナイフ1		
112		P-700	ナイフ1, 石製平玉9, ガラス小玉1		
113		P-709	ガラス小玉5		
114		P-900		ナイフ1	
114		P-901		石鏝1	
114		P-934	蛇紋岩平玉78, 琥珀玉18		
114		P-986		石鏝1	
114		P-988		ガラス小玉1	
114		P-988a	石鏝2, 刀子1		
114		P-990	石鏝3		
114		P-994	ガラス小玉17		
114		P-997	石鏝3		
114		P-1010		石鏝1	
114		P-1025	石鏝18, ガラス小玉3		
114		P-1074	ガラス小玉1	石鏝23	
115		P-1229		石鏝1, ナイフ1	
<b>6期:円刺群 I ~ V 期</b>					
2	朝日	P-14	刀子1, 蛇紋岩製平玉1, 蛇紋岩製小玉1		
2		P-17	琥珀丸玉3		
2		P-18	刀子1, ガラス小玉11, 琥珀垂輪1, 緑色凝灰岩製小玉1, 緑泥石岩?製小玉147		
2		P-20	刀子3		
2		P-25	ガラス小玉17		
29	大麻3	P-391		漆器2	
29		P-402		漆器1	
29		P-434		漆器1	
29		P-405		漆器2	
35	ホブラ並木	2号墓		漆器1	漆器1
35		3号墓	滑石平玉308	滑石平玉418	
35		1号墓	ガラス玉3	漆器1	
35		4号墓		滑石平玉2	
35		5号墓		滑石平玉17	
35		7号墓		漆器1	
47	境内D	P-145		滑石製小玉1	
47		P-163		漆器2	
47		P-53		漆器1	
47		P-101		漆器1, 鉄線索1	
47		P-144		漆器1	
47		P-174		漆器1	
47		P-44		漆器1	
47		P-148		滑石小玉1, 漆器1	
47		P-159		漆器2	
47		P-19		漆器2	
47		P-51		刀子茎1	
47		P-142		漆器1	
47		P-46		漆器1	
47		P-32		漆器1	
45	ノトロ峠	第59号土坑			漆器1
45		第40号土坑			漆器2
<b>7期:円刺群 VI ~ IX 期</b>					
11	ユカンボン	P-1	鏝2, 刀子3, 鉄斧2, 鉄線8		
11		P-28	鏝1, 刀子6, 鉄斧1, 鏝2		
11		P-29	刀子1		
11		P-19	鏝1, 刀子3, 鉄斧1, 鏝2, 3		
11		P-15	鏝1, 刀子3, 鉄斧1, 鏝2, 3		
11		P-26	鉄線1, 鉄斧1		
12	カリンバ2	第41号土坑墓		漆器1	
12		第44号土坑墓		漆器1	
12		第51号土坑墓		漆器1	
12		第59号土坑墓		琥珀製垂輪1	
17	西島松5	P-15	横刀3, 刀子1, 銅耳環2		
17		P-22	刀子1, 鉄線1		
17		P-83	刀子1, 針1	鉄製品1, 錆ついた布1	
17		P-128	横刀2, 刀子1, 鉄斧2		
17		P-131	横刀3, 刀子1		
17		P-2	鉄斧1		
17		P-3	横刀1		
17		P-5	刀子1, 鉄線6		
17		P-6	鏝子1, 鏝1	刀子1	
17		P-11	横刀4(7世紀後半), 刀子2, 鉄斧1, 鉄製品1		
17		P-23	鉄製品1	銅耳環1(7片の総長より)	
17		P-30	横刀2(7世紀後半), 刀子2, 鉄斧2, 鉄製品3		
17		P-68	刀子1		
17		P-130	横刀4, 刀子2, 鏝1		
17		P-203	刀子1		
17		P-1		鉄製品3	刀子1/
17		P-33	鉄斧1		
17		P-73	刀子1	刀子2, 鉄製品5, 鉄環1	
17		P-89	刀子1		
17		P-143	刀子1, 鉄斧1, 鏝1		
17		P-98	大刀1(6世紀末~7世紀前半), 横刀2, 刀子1, 鉄製品1		
17		P-99		鉄製品1	
17		P-103		刀子1	
17		P-129	横刀1, 刀子1		
17		P-146	鏝1, 刀子1	鉄製品1	
34	C-544	4TP34	琥珀1		
38	南高D	S1-9A	刀子1, 鏝子1, 鉄製品1		
38		S1-9B	刀子1		
38		S1-11A	刀子1		
38		S6-11B	刀子1		
38		S1-10C	鏝1		
38		S1-10D	刀子1, 銅環2		
38		S2-10A		鏝1, 銅環1	
38		S4-11B	刀子2		
38		S5-11A	玉輪製耳輪2		青銅製板1/
38		S6-11A	刀子1, 銅環1		

表IX-2 の続き(7期以降、参考)

番号	遺跡名	墓坑名	副葬品の位置		
			坑底	坑中	埋土上面/坑口脇
円刺群X～XI期					
1	カククマイ2	16号土坑	鉄器1		
5	カククマイA	墓坑63-1	刀子1		
5	カククマイA	墓坑64-4	鉄器1(長さ25cm)2		
38	廣島D	S1-10B	刀子1、刀子1、鏃1、銅環1		
43	天内山	1号墳墓	刀子2、鏃1、銅環2、耳環1		刀子1、鉄環2、鉄製品1
38	廣島D	S4-10A	刀子1		
17	西島松5	P-19	刀子1、鏃2		
17	西島松5	P-96	大刀1[7世紀後半]、横刀1、刀子1	鉄器1	
17	西島松5	P-125	横刀1[古くても7世紀後半]、刀子5		

「広汎的に現れる」傾向をみるため、1型式において5基以上の例がある遺跡を対象とし、その連続する系統の前後型式に所属する例も加えた。かつ「広汎的かつ連続的に現れる」について、「連続的に現れる」傾向とは複数世代間継続する傾向であるから、親・子以上の世代が必要で、子が傾向を受容した証は次世代に同様の傾向が見出されなければならない。よって、最低でも祖父母・親・子の世代が単位となる。現代では一世代30年・三世代約90年であるが、近代以前は女性が第1子を出産する年齢の平均は、それよりも低く、縄文期の三世代は90年未満であろうから、三世代90年と見積もれば齟齬はない。下記の「期」は複数型式の合算であり、それらが均等になるようにした。

1期(前5世紀前葉～前3世紀前葉、約160年、略5世代):H37丘珠式・フシココタン下層式・栄浦一・二群とH317式・興津式・元町2式、2期(前3世紀中葉～前2世紀後葉、約140年、略4～5世代):アヨロ1式・H37栄町式(古)・宇津内IIaI式とアヨロ2a式・H37栄町式(新)・宇津内IIaII(古)式、3期(前1世紀前葉～1世紀前葉、約130年、略4世代):アヨロ2b式・江別太1式・江別太2式・宇津内IIaII(新)式とアヨロ3a式・後北A・宇津内IIbI式、4期(1世紀中葉～2世紀後葉、約160年、略5世代):後北B・後北C<sub>1</sub>(古～新)式・宇津内IIbII式、5期(3世紀前葉～4世紀中葉、約160年、略5世代):後北C<sub>2</sub>・D式、6期(4世紀中葉～5世紀後葉、約130年、略4世代):円形刺突文土器群期I～V、7期(6世紀前葉～7世紀前葉、約130年、略4世代):円形刺突文土器群期VI～IX期。

## 2節 分析結果

### 1 遺構について

表IX-3は表VI-10-11をもとに抽出遺跡における型式ごとの平均例数(=総個数:個/墓坑数:基)を示した。これは1遺跡の1型式の遺構における平均的構造・葬法の数を表わす。同一遺跡の連続する型式において平均個数に大幅な増減がなければ一定に認められた遺構の構造・葬法といえる。平均個数の変動幅が最低値である0.1以下で連続する期間(表IX-3網掛け部分)について検討する。

袋状土坑は2遺跡(7期)1期間に0.7以上の高い値がみられる。ベンガラは、5遺跡(1～2期:3遺跡、3～4期:2遺跡)2期間に連続した状況がみられ、うち3遺跡では0.5以上が継続する。積石は、3遺跡(3期)1期間に0.6以上の高い値がみられ、1遺跡(3～4期)2期間に連続した状況がみられるものの0.5以下である。柱穴は、2遺跡(1期と7期)1期間に0.7以上の高率がみら



うにベンガラと積石は2期間(9~10 世代)という長期にわたり、柱穴・袋状土坑もそれに次ぐ。変動幅が小さい場合に顕著に現れることから、一定に認められた遺構の構造・葬法は長い時間に亘って継承される傾向がある。いっぽう、南川葬法は一時期に高率に現れることから後者に比べて強い流行傾向、ウサクマイ葬法は弱い流行傾向といえる。また、遺跡ごとの数値ばらつきは遺構・葬法においては遺跡ごとの選択を示している。

さらに長い期間について見てみる。**表IX-4**は型式等が集合した「期」(全道における約140~160

**表IX-4 遺構・葬法集計**

時期	当該期対象遺跡数:a	推定世代数:b	推定遺跡総数:c=a×b				
			c	c+c	c+c+c	c+c+c+c	c+c+c+c+c
1	9	5	45	90	135	180	225
2	8	4~5	32~40	64~80	96~120	128~160	160~200
3	11	4	44	88	132	176	220
4	6	5	30	60	90	120	150
5	15	4	60	120	180	240	300
6	8	4	32	64	96	128	160
7	6	4	24	48	72	96	120

年間≒4~5 世代)における推定出現遺跡数(=当該遺跡:箇所×推定世代数:世代)を示した。

そして、**表IX-5**は「期」における最低出現数と普及数を示した。

最低出現数(=例数:個/推定遺跡総数:箇所、**表IX-4**各期の最低値=c)は「ひとつの世代」で推定される総遺跡数における構造・葬法例数である。

**表IX-5 最低出現数・普及数**

遺跡番号	時期	例数計	木柳	袋状土坑	埋葬姿勢			ベンガラ	積石	柱穴	特殊な葬法		最低出現数の総計上段	100/左欄の値
					仰臥屈葬	側臥屈葬	座葬				南川	ウサクマイ		
5, 6, 7, 8, 9, 29~35, 36~37, 57~58, 93~94, 99, 109~115	1期	最低出現数	0.02					1.09	0.49	0.73			2.33	42.92
		上の率:上の欄×42.29	0.9					45.9	21.0	31.3				
		普及数	0.01					0.32	0.15	0.22			0.70	142.86
		上の率:上の欄×142.86	1.4					45.7	21.4	31.4				
86, 1, 2, 36~37, 39~43, 57~58, 66~71, 109~115	2期	最低出現数最少	0.06				2.38	0.38	0.38	0.28			3.47	28.82
		上の率:上の欄×28.82	1.7				68.6	11.0	11.0	8.1				
		最低出現数最多	0.05				1.90	0.30	0.30	0.23			3.78	35.97
		上の率:上の欄×35.97	1.8				68.3	10.8	10.8	8.3				
78~79, 86, 89~90, 1, 2, 36~37, 39~43, 57~58, 66~71, 109~115, 117	3期	普及数	0.02				0.59	0.09	0.09	0.07			0.87	114.94
		上の率:上の欄×114.94	2.3				67.8	10.3	10.3	8.0				
		例数計	1	12	4	4	22	122	22	6	48			
		最低出現数	0.02	0.27				2.77	0.50	0.14	1.09			4.80
78~79, 2, 18, 91, 109~115	4期	上の率:上の欄×20.83	1.0	12.0			57.8	10.4	2.8	22.7				
		普及数	0.004	0.04			0.46	0.08	0.02	0.18			0.79	126.58
		上の率:上の欄×126.58	0.5	5.7			57.8	10.4	2.8	22.8				
		例数計			3		2	7	9	3				
82, 85, 2, 17, 18, 21, 23, 49, 51, 52, 60~61, 65, 66~71, 108, 109~115	5期	最低出現数					0.23	0.30	0.10			0.60	166.67	
		上の率:上の欄×166.67					38.9	50.0	16.7					
		普及数					0.13	0.17	0.06			0.36	526.32	
		上の率:上の欄×526.32					69.5	89.4	29.8					
82, 85, 2, 17, 18, 21, 23, 49, 51, 52, 60~61, 65, 66~71, 108, 109~115	5期	例数計		56	2	4	6	20	79	16				
		最低出現数		0.93				0.33	1.32	0.27			2.85	35.09
		上の率:上の欄×35.09		32.7				11.7	46.2	9.4				
		普及数		0.20				0.07	0.28	0.06			0.61	163.93
2, 14, 47, 19~23, 29, 30, 35, 45	6期	上の率:上の欄×163.93		32.6				11.6	45.9	9.3				
		例数計		2			1	12	1					
		最低出現数		0.06				0.03	0.38	0.03			0.50	200.00
		上の率:上の欄×200.00		12.5				6.3	75.0	6.3				
11, 12, 17~18, 19~23, 34, 38	7期	普及数		0.02				0.01	0.13	0.01		0.18	555.56	
		上の率:上の欄×555.56		12.2				6.1	73.3	6.1				
		例数計	27	43	1		5		12	30	14			
		最低出現数	1.13	1.79				0.50	1.25	0.58		5.25	19.05	
11, 12, 17~18, 19~23, 34, 38	7期	上の率:上の欄×19.05	21.4	34.1			9.52	23.8	11.1					
		普及数	0.29	0.47			0.13	0.33	0.15			1.37	72.99	
		上の率:上の欄×72.99	21.4	34.1			9.5	23.8	14.0					
		例数計												

1.0未満は1世代に1個未満、1.0~1.5未満は1世代に1個、1.5~2.5は同一の構造・葬法が1世代に2~3個あるということである。その下欄には各遺構・葬法の百分率を示してある。

普及数(=例数:個/当該期墓坑総数)は「ひとつの時期・複数世代・複数遺跡」にある構造・葬法例数である。その下欄には各遺構・葬法の百分率:普及率を示してある。例えば50%は



全道の当該期にはその半数の墓に構造・葬法が備わること示す。

普及率は31例中に、20%未満は16例、20～30%未満は5例、30～40%未満は3例、40%以上に7例、ある。30～40%未満を境にして、それ未満があまり広く受け入れられず、以上が広汎に普及していたと推定される。最低出現数は31例中に、0.1未満は7例、0.1～0.3未満は7例、0.3～1.0未満は10例、1.0以上は9例、ある。1.0未満は墓構造・葬法の希少性を示し、1.0以上は皆有性を表わすといえる。

普及率は普及度合の高低を、最低出現率は墓の構造・葬法の希少・寡占・皆有性を示す。

普及率と最低出現数の2数値による交差表で表現すると(表IX-6)、a区:0.3個未満×30%未満=低普及×希少性、b区:0.3個以上×30%未満=低普及×皆有性、c区:0.3個以上×30%以上=高普及×皆有性、d区:0.3個未満×30%以上=高普及×希少性、の4区画に大別される。

実際には偏在がみられ、a区では低普及が顕著なa<sub>1,2</sub>区、b区でも低普及が顕著なb<sub>1</sub>区、c区では高普及×皆有性が顕著なc<sub>3</sub>区という細分区が生じる。

構造・葬法が階層を示すのであれば、長期間にわたって「希少・寡占性×低普及」傾向を示すはずである。したがって、階層を示す可能性のある属性は2期の南川葬法である。ただし、南川葬法は道央・道南の一部に限られること、表IX-3の結果から、H37 栄町式・アヨロ 1a～後北A式・アヨロ 3a式期において、遺跡ごとに選択されるので、階層差が生じていたとしても一部地域の遺跡ごとに異なる程度である。

構造・葬法は時間と共に細分区を転移する。積石は普及率の増減繰り返し、柱穴は最低出現数の減少、木槨は最低出現数の増加、袋状土坑は普及率×最低出現数の増減、の傾向であるから、これらは一定的に、低普及・高普及、希少・皆有傾向を備えていたわけではない。特にc区を経由して遷移する構造は「高普及性×皆有性」という性格を帯び“流行”の状況を反映していると考えられる。また、表出的属性は

増減型に多く、内在的属性は増加型に多い。前述したように定性的分析によれば表出≧中間≧内在の順に、階層が標示される傾向にあるが、表出的属性は変動しやすく、流行の性質が大きい属性といえる。

表IX-7は遺構の構造・葬法の組み合わせを集計した。1・2・4期の最多は柱穴×ベンガラ、3期の最多は積石×ベンガラ、5期の最多は積石×袋状土坑、7期の最多は柱穴×袋状土坑である。1～4期はベンガラとの組み合わせが

表IX-6 最低出現数・普及率

		最低出現数			
		0.1未満	0.1～0.3未満	0.3～1.0未満	1.0以上
普及率	20%未満	1・3期:木槨 2・6期:袋状土坑 6期:ベンガラ 6期:柱穴 <b>a<sub>1</sub>区</b>	3期:袋状土坑 3・5期:柱穴 2期:南川葬法 <b>a<sub>2</sub>区</b>	5期:ベンガラ 2・3・7期:積石 2期:柱穴 7期:ウサクマイ葬法 <b>b<sub>1</sub>区</b>	
	20～30%未満		4期:柱穴 3期:南川葬法	1期:積石	7期:木槨 7期:柱穴
	30～40%未満			1期:柱穴 5期:袋状土坑	7期:袋状土坑
	40%以上		4期:ベンガラ	4・6期:積石	1・2・3期:ベンガラ 5期:積石 <b>c<sub>1</sub>区</b>

表IX-7 構造と葬法の組み合わせ

遺跡番号	時期・例数	表出					内在					中間						
		積	柱	木	袋状	ベ	積	柱	木	袋状	ベ	積	柱	木	袋状	ベ		
																	石	穴
5, 6, 7, 8, 9, 29~35, 36-37, 57-58, 93-94, 99, 109~115	1期 154基	配石	6			10												
		柱穴		1		14												
		木柳																
86, 1, 2, 36-37, 39~43, 57-58, 66~71, 109-115	2期 128基	配石				6												
		柱穴				8												
		木柳																
78-79, 86, 89-90, 1, 2, 36-37, 39~43, 57-58, 66~71, 109~115, 117	3期 267基	配石				9												
		柱穴			1	1	3											
		木柳																
78~79, 2, 18, 91, 109~115	4期 53基	配石				1				2								
		柱穴								3								
		木柳																
82, 85, 2, 17, 18, 21, 23, 49, 51, 52, 60-61, 65, 66~71, 108, 109~115	5期 282基	配石				1		12										
		柱穴					1	2	2									
		木柳							1	1								
2, 14, 47, 19~23, 29, 30, 35, 45	6期 91基	配石																
		柱穴																
		木柳																
11, 12, 17-18, 19-23, 34, 38	7期 92基	配石																
		柱穴					5	29									12	
		木柳							2									1

頻出し、5~7期は袋状土坑との組み合わせが頻出する。ただし5期にはベンガラとの組み合わせも多数あり、過渡的な状況を示す。1期にはベンガラと柱穴が共に低普及性×希少性であるにもかかわらず、最頻の組み合わせとしてあるので、極めて強い結び付きをもつことを示す。7期の木柳・袋状土坑・柱穴も最頻の組み合わせとしてあるので、強い結び付きをもつ中程度の普及性×皆有性があったことを示す。

## 2 副葬品について

表IX-8は抽出遺跡における型式ごとに以下の項目を集計した。平均例数(=総例数/副葬例数)/墓坑数:基は遺跡の1型式の1遺構における平均的遺物数を表わす。平均個数(=総個数/墓坑数:基)は遺跡の1型式の1遺構における平均的遺物数を表わす。最多個数は1遺跡の1型式における最多の出土数を表わす。他には集積偏差(=最多個数/平均個数)、副葬量偏在度(平均個数×2以上の例数)を集計した。

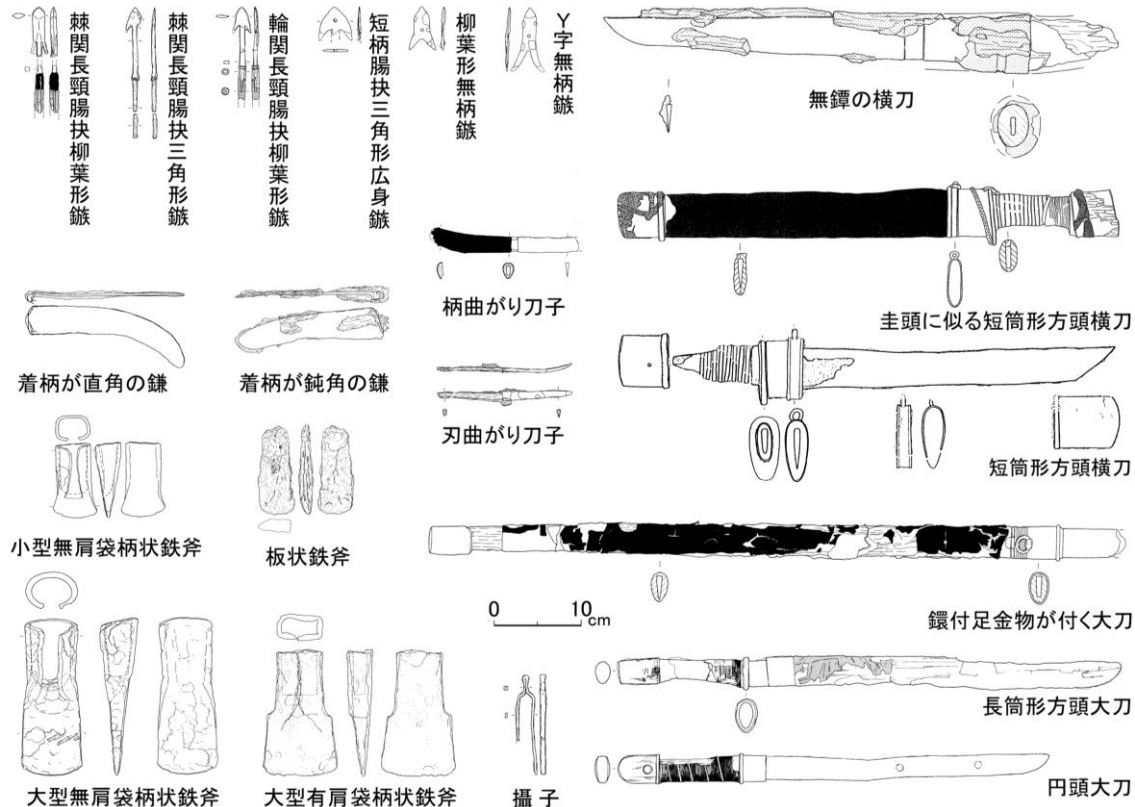
同一遺跡の連続する型式において平均例数に大幅な増減がなければ一定に認められた副葬品といえる。変動幅が0.1以下の期間(連続する型式のこと、表IX-8網掛け部分)について検討する。石鏃は3遺跡(2~3期:3遺跡)2期間と(1~3期:1遺跡)3期間に連続した状況が、ともに0.5以下の低率で見られる。ナイフは5遺跡(2~3期:5遺跡)2期間に連続した状況がみられ、うち1遺跡では0.6以上の高い値がみられる。魚形石器・サメ歯はそれぞれ1遺跡(ともに2~3期)2期間に連続した状況が0.5以下の低い値がみられる。環石は4遺跡(1~2期:1遺跡、2~3期:3遺跡)2期間に連続した状況が0.5以下の低い値がみられる。琥珀玉は1遺跡(2~3期)2期間に連続した状況が0.5以下の低い値がみられる。碧玉製管玉は1遺跡(2~3期)2期間に連続した状況が0.5以下の低い値がみられる。蛇紋岩等玉・ガラス玉・鉄製品はそれぞれ1遺跡(4~5期)2期間に連続した状況が0.5以下の低い値がみられる。

表区-8 副葬品集計

遺跡番号	型式	石鏡・鉄鏡					ナイフ					魚形石器					サメ歯					環石					琥珀玉				
		墓坑数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	集積偏差	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	集積偏差	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	集積偏差	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	集積偏差	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	集積偏差				
78	後北A	1	1	1	1.0	1																									
5	後北B	13	4	0.3	0.4	2	5.2	4																							
79	後北C <sub>1</sub>	1	1	0.3	1.0	3	3.0	1																							
82	後北C <sub>2</sub> -D	19	4	0.2	0.3	1	4.8	4																							
86	後北C <sub>2</sub> -D	6	1	0.2	0.2	1	6.0	1																							
86	アヨロ1	1	1	4.1	1.0	41	1.0	0	1	3	1.0	3.0	3	1.0	0																
	アヨロ2a	12	12	65	1.0	5.4	21	3.9	1	7	16	0.6	1.3	8	6.0	1	4	10	0.3	0.8	5	6.0	2	1	1	0.1	0.1	1	12.0	1	
	アヨロ2b	10	8	77	0.8	7.7	36	4.7	1	6	11	0.6	1.1	4	3.6	1	3	15	0.3	1.5	11	7.3	2	1	6	0.1	0.6	6	10.0	1	
	アヨロ3a	1	1																												
89	南川III	3	2	17	0.7	5.7	15	2.6	1																						
	南川IV	47	28	315	0.6	6.7	36	5.4	9	32	106	0.7	2.3	10	4.4	12	2	2	0.04	0.04	1	23.5	2	1	1	0.02	0.02	1	47.0	1	
1	アヨロ1	8	2	25	0.3	3.1	16	5.1	2	3	15	0.4	1.9	7	3.7	2															
	アヨロ2a	11	3	8	0.7	0.7	5	6.0	2	3	10	0.5	0.9	5	5.5	2															
	アヨロ2b	11	4	45	0.4	4.1	35	8.0	1	4	13	0.4	1.2	8	6.8	2	1	1	0.1	0.1											
	アヨロ3a	4	1	3	0.3	0.8	3	1	2	3	0.5	0.8	2	2.7	1																
2	アヨロ1	1	1																												
	アヨロ2a	5	1	22	0.2	4.4	22	5.0	1	1	5	0.2	1.0	5	5.0	1															
	アヨロ2b	3																													
	後北C <sub>1</sub>	1	1	8	1.0	8.0	8	1.0	1																						
	後北C <sub>2</sub> -D	15	3	11	0.2	0.7	8	10.9	2																						
5	H37栄町	6	1	1	0.2	0.2	1	6.0	1																						
6	H137	34	11	13	0.3	0.4	2	5.2	11	2	2	0.1	0.1	1	17.0	2															
7	H37丘珠	14	1	2	0.1	0.1	2	14.0	1																						
8	H37丘珠	6	4	13	0.7	2.2	5	2.3	2	3	9	0.5	1.3	4	2.7	2															
9	H137	3	1	1	0.3	0.3	1	3.0	1	1	1	0.3	0.3	1	3.0	1															
	H37栄町	5	3	9	0.6	1.8	6	3.3	1																						
17	後北C <sub>2</sub> -D	11	1	1	0.1	0.1	1	11.0	1	1	1	0.1	0.1	1	11.0	1															
18	後北C <sub>1</sub>	1	1																												
	後北C <sub>2</sub> -D	25	6	13	0.1	0.2	7	29.6	6																						
21	後北C <sub>2</sub> -D	6																													
23	後北C <sub>2</sub> -D	6																													
29	H37丘珠	6	4	8	0.7	1.3	3	2.3	2	2	7	1.0	1.2	6	5.1	1															
5	H137	4	2	15	0.5	3.8	14	3.7	1	1	2	1.0	2.0	2	1.0	1															
36	アヨロ1	2	2	36	1.0	18.0	30	1.7	0																						
	アヨロ2a	13	3	9	0.2	0.7	7	10.1	2	3	10	0.2	0.8	6	7.8	2															
	アヨロ2b	6	2	20	0.3	3.3	19	5.7	1	1	8	0.2	1.3	8	6.0	1															
	アヨロ3a	1																													
	H137	1	1	11	1.0	11.0	11	1.0	0	1	4	1.0	4.0	4	1.0	0															
	H37栄町	8	2	25	0.3	3.1	23	7.4	1	2	5	0.5	0.6	3	4.8	2															
	江別太1	1																													
39	アヨロ2a	2	1	1	0.5	0.5	1	2.0	1	1	1	0.5	0.5	8	16.0	1															
43	アヨロ2b	5	1	4	0.2	0.8	4	5.0	1																						
	アヨロ3a	1																													
	H37栄町	1																													
	江別太1	5	3	12	0.6	2.4	8	3.3	1	3	4	0.6	0.8	2	2.5	1															
	江別太2	7	2	17	0.3	2.4	13	5.4	1	1	2	0.1	0.3	2	7.0	1															
	後北A	20	6	34	0.3	1.7	15	8.8	4	2	2	0.1	0.1	1	10.0	2															
49	後北C <sub>2</sub> -D	19																													
57	アヨロ2a	4	2	140	0.5	35.0	81	2.3	1	3	31	0.8	7.8	28	3.6	1															
58	アヨロ2b	10	3	78	0.3	7.8	63	8.1	1	4	20	0.4	2.0	11	5.5	2															
	H137	2	1	5	0.5	2.5	5	2.0	1	1	1	0.5	0.5	1	2.0	1															
	H37栄町	5																													
	江別太1	2	1	2	0.5	1.0	2	2.0	1	1	2	0.5	1.0	2	2.0	1															
51	後北C <sub>2</sub> -D	7	1	3	0.1	0.4	2	4.7	1																						
52	後北C <sub>2</sub> -D	5																													
60	後北C <sub>2</sub> -D	20	1	1	0.1	0.1	1	20.0	1																						
61	後北C <sub>2</sub> -D	60	4	6	0.1	0.1	2	20.0	4	4	7	0.1	0.1	2	17.1	4															
66	アヨロ1	11	8	74	0.7	6.7	27	4.0	1	4	8	0.4	0.7	5	6.9	1															
5	アヨロ2a	22	10	36	0.6	1.6	10	6.1	5	3	3	0.1	0.1	1	7.2	3															
	アヨロ2b	57	20	391	0.6	5.3	40	12.9	8	17	39	0.3																			

表区-8の続き

遺跡番号	型式	石鍬・鎌					ナイフ					魚形石器					サメ歯					環石					琥珀玉				
		基坑数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数	総例数	平均例数	平均個数	最多個数					
93	アソコヤン下層	7	4	0.6	1.1	3	2.6	1																							
94	興津	12	4	0.3	0.5	2	4.0	2																							
96	興津	10						1	2	0.1	0.2	2	10.0	1																	
97	興津	10																													
99	興津	12																				2	270	0.2	22.5	215					
108	後北C <sub>1</sub> -D	5																													
109	栄浦一・二群	17	5	0.3	1.6	10	1.1	1	3	4	0.2	2	8.5	3																	
5	元野2	12	6	0.5	3.4	17	5.0	3	10	56	0.6	4.7	21	4.5	1																
115	宇津内IIa I	17	9	0.5	4.8	23	4.8	5	7	27	0.4	1.6	9	2.7	2																
	宇津内IIa II古	4	2	0.5	4.5	10	2.5	1	1	1	0.3	0.3	10	40.0	1																
	宇津内IIa II新	4	2	0.5	4.0	12	3.0	1	1	2	0.3	0.5	11	22.0	1																
	宇津内IIb I	24	10	0.4	3.5	32	9.5	4	6	10	0.3	0.4	3	7.2	5																
	宇津内IIb II	2	2	1.0	14.0	23	1.6	1																							
	後北A	1																													
	後北B	2	2	1.0	17.0	20	1.2	0	1	1	0.5	0.5	1	2.0	1																
	後北C <sub>1</sub>	16	16	1.0	25.8	63	2.4	1	13	24	0.8	1.5	8	5.3	1																
	後北C <sub>2</sub> -D	39	13	0.3	1.6	23	14.5	4	6	6	0.2	1	6.5	6																	
	138																														
117	宇津内IIa I	3	1	0.3	1.7	5	3.0	1	2	10	0.7	3.3	8	2.4	1																
	宇津内IIb I	2	1	0.5	16.0	32	2.0	1	4	0.5	2.0	4	2.0	1																	
2	四割I~V期	5																													
11	四割VI~VII期	15	2	0.1	0.6	8	13.3	1																							
12	四割VI~VII期	21																													
14	四割II・IV期	5																													
17	四割VII~IX期	35	1	0.0	0.2	0	35.0	1																							
18	四割VII~IX期	35																													
47	四割I~V期	28	1	0.0	0.0	1	28.0	1																							
19	四割V期	2																													
20	四割VI~VII期	4																													
20	四割IV~V期	14																													
30	四割I~V期	25																													
34	四割VI~VII期	6																													
35	四割II・III期	7																													
39	四割VII~IX期	11	1	0.1	0.1	1	11.0	1																							
45	四割IV~V期	5																													



図区-1 副葬された鉄製品、大刀・横刀 鈴木 2009 引用



表IX-8の続き

遺跡番号	型式	遺跡数	猪牙			碧玉管玉			蛇紋岩等玉			ガラス玉			鉄製品			金属製装身具等			大刀・横刀																			
			平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差	平均個数	平均個数	集積偏差																	
109	奈浦一・二期	17																																						
	元町2	12																																						
	宇津内IIa I	17																																						
	宇津内IIa II古	4																																						
	宇津内IIa II新	4																																						
	宇津内IIb I	24				2	6	0.1	0.3	5	20.0	2																												
	宇津内IIb II	2				1	18	0.8	9.0	18	2.0	1																												
	後北A	1																																						
後北B	2																																							
後北C	16								1	1	0.1	0.1	7	16.0	1	1	20	0.1	1.3	20	16.0	1	2	3	0.13	0.2	2	10.7	2											
後北C-D	39								2	87	0.4	2.2	78	35.0	2	6	28	0.2	0.7	17	23.7	3	1	1	0.03	0.03	1	39.0	1											
117	宇津内IIa I	2																																						
	宇津内IIb I	2																																						
		5																																						
2	田割I～V期	5							2	150	0.40	30.0	148	4.9	1	3	28	0.4	5.6	17	3.0	1	3	5	0.6	1.0	3	3.0	1											
11	田割VI～VII期	15																																						
12	田割VI～VII期	21																																						
14	田割II～IV期	5																																						
17	田割VII～IX期	35																		24	56	0.7	1.6	7	4.4	4	3	41	0.1	0.1	2	17.5	3	3	23	0.3	0.7	4	6.1	9
18		35																																						
47	田割I～V期	28							2	2	0.4	0.1	1	14.0	2																									
19	田割V期	2																																						
20	田割VI～VII期	4																																						
29	田割IV～V期	14																																						
30	田割I～V期	25																																						
34	田割VI～VII期	6																																						
36	田割II～III期	7							3	745	0.4	106.4	728	6.8	1	3	3	0.1	0.4	3	7.0	1																		
38	田割VII～IX期	11																		8	10	0.7	0.9	3	3.3	2	5	61	0.5	0.5	2	3.7	1							
45	田割IV～V期	5																																						

表IX-9 最低出現数・普及数

遺跡番号	時期	個数計	最低出現数	上の率:上の欄×	石鏡・鉄鏡	ナイフ	魚形石器	サメ歯	環石	琥珀玉	猪牙	碧玉管玉	蛇紋岩等玉	ガラス玉	鉄製品	金属製装身具等	大刀・横刀	最低出現数の総計		100/左欄の値			
																		普及数の総計	下の欄				
6, 7, 8, 29~35, 36-37, 57, 58, 93-94, 96-97, 99, 109~115	1期	個数計	175	93					2	6359	8	20	3								148.00	0.68	推定出現遺構数
		最低出現数	3.89	2.07					0.04	141.31	0.18	0.44	0.07										
		上の率:上の欄×0.68	2.6	1.4					0.03	95.5	0.1	0.3	0.05										
		例数計	46	27					2	30	1	2	2								0.74	135.14	当該期墓坑総数
86, 1, 2, 5, 9, 36-37, 39~43, 57-58, 66~71, 109, 115, 117	2期	個数計	567	140	10	24	6	10928				58				2						推定出現遺構数	
		最低出現数	17.72	4.38	0.31	0.75	0.19	341.50				1.81				0.06							
		上の率:上の欄×0.27	4.8	1.2	0.1	0.2	0.1	93.1				0.5				0.02							
		例数計	60	41	4	5	5	16				7				2							
78~79, 86, 89-90, 1, 2, 36-37, 39~43, 57-58, 66~71, 109~115, 117	3期	個数計	1968	244	23	11	54	944				129	22		2						推定出現遺構数		
		最低出現数	44.73	5.55	0.52	0.25	1.23	21.45				2.93	0.50			0.05							
		上の率:上の欄×1.30	57.9	7.2	0.7	0.3	1.59	27.8				3.8	0.6			0.1							
		例数計	136	90	9	5	13	18				10	2			2							
78~79, 2, 18, 66~71, 91, 109~115	4期	個数計	987	49						231		24	3	33	3						推定出現遺構数		
		最低出現数	32.90	1.63						7.70		0.80	0.10	1.10	0.10								
		上の率:上の欄×2.26	74.2	3.7						17.4		1.8	0.2	2.5	0.2								
		例数計	37	21						2		3	2	4	2								
82, 85, 2, 17, 18, 21, 23, 49, 51, 52, 60-61, 65, 66~71, 108, 109~115	5期	個数計	105	15						41		442	160	5						推定出現遺構数			
		最低出現数	1.75	0.25						0.68		7.37	2.67	0.08									
		上の率:上の欄×7.81	13.7	2.0						5.3		57.6	20.8	0.7									
		例数計	36	12						4		9	14	14									
2, 14, 47, 19~23, 29, 30, 34, 35, 45	6期	個数計	1							5		897	31	6						推定出現遺構数			
		最低出現数	0.03							0.16		28.03	0.97	0.19									
		上の率:上の欄×3.40	0.1							0.5		95.4	3.3	0.6									
		例数計	1							3		7	3	4									
11, 12, 17, 18, 19~24, 38	7期	個数計	16							4		94	10	23						推定出現遺構数			
		最低出現数	0.67							0.16		3.92	0.42	0.96									
		上の率:上の欄×16.78	11.2							4.4		65.7	7.0	16.1									
		例数計	4							0.01		37	8	9									
	普及数	0.05							0.03		0.07	0.03	0.04										
	上の率:上の欄×149.25	6.9						16.3		38.0	16.3	21.7											
		0.67							0.19		526.32												
		0.67							5.96		16.78												
		0.67							0.67		149.25												
		0.67							86														

全ての副葬品におけるにおける 0.5 以上の高い値である期間数(1 期間:4~5 世代)の総計は、石鏃は 22 期間、ナイフは 15 期間、琥珀玉 5 期間、碧玉管玉 4 期間、ガラス玉 1 期間、鉄製品 3 期間である。前述したようにこれらは 2 期間(9~10 世代)という長期にわたって低い値で現れるので、一部の人々に認められた副葬品は遺構構造・葬法の同じ場合よりも長時間継承される傾向がある。ただし、遺跡ごとに数値の違いがあるので遺跡ごとの選択が生じている可能性を示す。

さらに長い期間について見てみる。表IX-9 は「期」における最低出現数と普及数を示した。最低出現数 1.0 未満は 1 世代に 1 個未満、最低出現率 1.0~1.5 未満は 1 世代に 1 個、最低出現率 1.5~10.0 未満は同一の副葬例が 1 世代に 2~9 個あるということである。その下欄には各遺構・葬法の百分率を示してある。

普及数(=例数:個/当該期墓坑総数)は「ひとつの時期・複数世代・複数遺跡」にある副葬例数であり、その下欄には各遺構・葬法の百分率:普及率を示してある。例えば 50%は、全道の当該期に半数の墓に“ある副葬品”が納められたことを示す。

普及率は 46 例中に、5%未満は 19 例、5~10%未満は 5 例、10~20%未満は 9 例、20~30%未満は 5 例、30~40%未満は 3 例、40~50%未満は 2 例、50%以上は 3 例ある。30%を境にしてそれ未満があまり広く受け入れられず、以上が広汎に普及していたと推定される。最低出現数は 46 例中に、0.1 未満は 6 例、0.1~0.5 未満は 11 例、0.5~1.0 未満は 9 例、1.0~2.0 未満は 5 例、2.0~10.0 未満は 8 例、10.0~100.0 未満は 5 例、100.0 以上は 2 例ある。1.0 未満は副葬品の希少性を示す。

表IX-10 最低出現数×普及率

し、最低出現率 10.0 以上は副葬品の皆有性を表わすといえる。普及率は副葬品の普及度合の高低を、最低出現数は副葬品の希少性・皆有性を、表しているといえる。普及率と最低出現数の 2 数値による交差表で表現すると(表 IX

		最低出現数				
		1.0未満	1.0~2.0未満	2.0~10.0未満	10.0~100.0未満	100.0以上
普及率	10%未満	2・3期:魚形石器 2・3期:サメ歯 1・2期:環石 1期:猪牙 1・4碧玉管玉 1・3・4期:蛇紋岩等玉 5期:琥珀玉 2・3・4期:鉄製品 6・7:鉄鏃 a <sub>1</sub> 区	3期:環石 2期:碧玉管玉 4期:ガラス玉	3期:碧玉管玉 4期:琥珀玉	3期:琥珀玉	
	10~20%未満	5期:ナイフ 6期:琥珀玉 6期:ガラス玉 5期:鉄製品 7期:金属製品 7期:大刀・横刀 a <sub>3</sub> 区		5期:蛇紋岩等玉 5期:ガラス玉		2期:琥珀玉
	20~30%未満	6期:鉄製品	4期:ナイフ	1・2期:ナイフ		1期:琥珀玉
	30~50%未満		5期:石鏃	1期:石鏃 3期:ナイフ	2期:石鏃 6期:蛇紋岩等玉	
	50%以上			7期:鉄製品	3・4期:石鏃	

-10)、a区:0.2個未満×30%未満=低普及×希少性、b区:0.2個以上×30%未満=低普及×皆有性、c区:0.2個以上×30%以上=高普及×皆有性、d区:0.2個未満×30%以上=高普及×希少性、の4区画に大別される。

実際には偏在がみられ、a<sub>1</sub>区:1.0個未満×10%未満、a<sub>2</sub>区:1.0~2.0個未満×10%未満、a<sub>3</sub>区:0.1個未満×10~20%未満、がある。前述より、a<sub>1</sub>・a<sub>3</sub>区は希少性×低普及、a<sub>2</sub>区はやや希少性×低普及を示す。

副葬品が階層を示すのであれば、長期間にわたって「希少・寡占性×低普及」傾向を示すはずである。したがって、階層を示す可能性のある属性はa<sub>1</sub>区にある魚形石器・サメ歯・鉄鏃であり、a<sub>1</sub>区に留まる2~4期の鉄製品、にも可能性がある。

表IX-11 副葬品の組み合わせ

遺跡番号	時期・例数	ナ	魚	サ	環	琥	猪	碧	滑	ガ	金	鉄	鉄	大
		イ	形	メ	石	珀	玉	石	管	ラ	属	製	製	刀
		フ	器	歯	石	玉	牙	玉	石	ス	装	身	具	横
		石	器	石	玉	玉	玉	玉	玉	玉	身	具	具	刀
7期 11,12, 17-18,19 ~24,38	ナイフ													
	魚形石器													
	サメ歯													
	環石													
	琥珀玉													
	猪牙													
	碧玉管玉													
86基	滑石・蛇紋岩玉													
	ガラス玉													
	金属製装身具										2	7	2	
	鉄鏃												1	
	鉄製工具													6
大刀・横刀														

遺跡番号	時期・例数	*碧玉管玉の欄の「・1」は翡翠製品の点数	石	ナ	魚	サ	環	琥	猪	碧	滑	ガ	金	鉄	大
			鏃	イ	形	メ	石	珀	玉	石	管	ラ	属	製	製
			鏃	フ	器	歯	石	玉	牙	玉	石	ス	装	身	具
			石	器	石	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	身	具	具
6,7,8,29 ~35,36, 37,57,58, 93,94,96, 97,99, 109~115	1期 149基	石鏃	19					11							
		ナイフ						1	2						
		魚形石器													
		サメ歯													
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製工具															
大刀・横刀															
86,1,2,5, 9,36,37, 39~43, 57,58,66 ~71,109, 115,117	2期 118基	石鏃	32	4	3	4	8	4	1						2
		ナイフ													
		魚形石器													
		サメ歯							1	1					
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製品															
大刀・横刀															
78~79,2, 18,66~ 71,91, 109~115	4期 57基	石鏃	18					2	2	1	2				1
		ナイフ										1	1		
		魚形石器													
		サメ歯													
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製工具															
大刀・横刀															
82,85,2, 17,18,21, 23,49,51, 52,60,61, 65,66~ 71,108, 109~115	5期 282基	石鏃	6					1	1	6	1				1
		ナイフ													
		魚形石器													
		サメ歯													
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製工具															
大刀・横刀															
78~79, 86,89-90, 1,2,36- 37,39~ 43,57,58, 66~71, 109~115, 117	3期 226基	石鏃	65	7	3	7	13	8	2	2					3
		ナイフ													
		魚形石器													
		サメ歯													
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製品															
大刀・横刀															
2,14,47, 19~23, 29,30, 34,35,45	6期 97基	鉄鏃													
		ナイフ													
		魚形石器													
		サメ歯													
		環石													
		琥珀玉													
		猪牙													
		碧玉管玉													
		滑石・蛇紋岩玉													
		ガラス玉													
金属製装身具															
鉄製工具															
大刀・横刀															



金属製装身具・大刀を除いた副葬品は時間と共に各区を転移する。ナイフ・蛇紋岩等玉・鉄製品は普及率と最低出現数の2数値変動で、ナイフは減衰型、蛇紋岩等玉・鉄製品は増加型である。ガラス玉は2数値増の変動ついで最低出現数減衰が変動する。石鏃は最低出現数の増加ついで2数値減の変動である。琥珀玉は普及率の減衰ついで最低出現数の減少が起こる。環石・碧玉管玉は最低出現数が増変動する。これらは一定的に、低普及・高普及、希少性・皆有性を備えていたわけではない。特にc区を経由して遷移する副葬品は「皆有性×高普及」という性格を帯び“流行”の状況を反映していると考えられる。

**表IX-11** 副葬品の組み合わせを集計した。1~4期の最多は石鏃×ナイフ、5期の最多は石鏃×ナイフまたはガラス玉、6期は琥珀玉×蛇紋岩等玉、7期の最多は金属製装身具×鉄製品である。5期以前は石鏃・ナイフがかかわる組合せが多い。5期にはそれが少なくなるので、鉄製品が最多組み合わせに加わり出すのは6期に遡る可能性がある。

1~4期の石鏃×ナイフは高い最頻の組み合わせとしてあるので、極めて強い結び付きをもった皆有性を示す。また、1~3期にかけては石鏃×琥珀玉の組み合わせも多く、石鏃×ナイフについて強い結び付きをもった皆有性を示す。金属製装身具と鉄製品は7期になると最頻の組み合わせとなるので、この時期に強い結び付きをもち寡占~弱い皆有性を示し始める。

### 3 交換財としての副葬品

交換財としての副葬品の受容を各期通じてみる。**表IX-12**は副葬品ごとに副葬量偏差の例数・集積偏差の最大最小・平均を示した。平均値と最大値は相応する傾向にあるので、差異をみるには最大値-最小値の差が最適である。

副葬量偏差例数の低数値は独占の高さを示し、高数値は独占の低さを示す。集積偏差の低数値は集積の低さを示し、高数値は集積の高さを示す。

副葬量偏差例数は、1以下の魚形石器・サメ歯・猪牙・碧玉製管玉・蛇紋岩等製玉・鉄鏃・金属装身具・大刀横刀、2~10未満の環石・魚形石器・ガラス玉、10以上の石鏃・ナイフ、の3群に分かれる。集積偏差は、10.0未満の猪牙・大刀横刀、10.0~30.0未満の石鏃・環石・金属装身具、30~50未満のナイフ・サメ歯・碧玉製管玉・鉄鏃、50.0以上の魚形石器・琥珀玉・蛇紋岩等製玉・ガ

**表IX-12 集積偏差・副葬量の偏差例数**

	石鏃		ナイフ		魚形石器		サメ歯		環石		琥珀玉		猪牙	
	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数
平均値	5.8	2.0	7.0	2.1	19.8	1.4	22.3	1.2	11.2	1.3	11.8	1.4	12.0	1.0
最大値	29.6	11	40.0	13	57.0	2	47.0	2	22.0	4	60.0	4	12.0	1
最小値	1.0	0	1.0	0	5.0	1	8.0	1	3.0	1	2.0	1	12.0	1
最大値・最小値の差	28.6	11	39.0	13	52.0	1	39.0	1	19.0	3	58.0	3	0.0	0
	碧玉管玉		蛇紋岩等玉		ガラス玉		鉄鏃		鉄製品		金属製装身具等		大刀・横刀	
	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数	集積偏差	副葬量偏差例数
平均値	146.8	1.5	277.2	1.4	155.0	1.5	21.8	1.0	267.7	1.7	21.1	2.0	6.1	9.0
最大値	42.4	2	57.0	2	53.0	3	35.0	1	65.0	4	17.5	3	6.1	9
最小値	1.0	1	0.1	1	1.0	1	0.0	0	3.0	1	3.7	1	6.1	9
最大値・最小値の差	41.4	1	56.9	1	52.0	2	35.0	1	62.0	3	13.8	2	0.0	0

表IX-13 集積偏差×副葬量偏差例数

		集積偏差			
		10.0未満	10.0～30.0未満	30.0～50.0未満	50.0以上
副葬量偏差例数	1未満	猪牙 大刀・横刀 <b>a区</b>		サメ歯 碧玉管玉 鉄鏃 <b>b区</b>	魚形石器 蛇紋岩等玉 <b>c区</b>
	1～10未満		環石	金属製装身具	琥珀玉 ガラス玉 鉄製品 <b>d区</b>
	10以上		石鏃	ナイフ	

ラス玉・鉄製品がある。

副葬量偏差例数と集積偏差を交差集計すると(表IX-13)、a区:1未満×10.0未満、b区:1未満×30.0～50.0未満、c区:1未満×50.0以上、d区:1～10未満×50.0以上、のまとまりがあり、a区は高独占×低集積、b区は高独占×やや高集積、c区は高独占×高集積、d区は中程度の独占×高集積を示す。

ところで、副葬品は分布・出土量・組み合わせの相違によって価値の差異に上下を生じる(鈴木2009a)。琥珀玉・黒曜石は下位広域交換財であり、より広域・少量に分布する碧玉管玉・ガラス玉・鉄製品は上位広域交換財である。下位の琥珀玉、上位の猪牙・碧玉製管玉・ガラス玉は象徴財であり、黒曜石は実用財である。鉄製品は以下に示す副葬率より当初は象徴財で後に実用財となる。金属器の副葬率の算出方法は金属器あり墓坑数/詳細時期が明らかな全墓坑数で、対象は土器型式による詳細時期が明らかな墓坑が10基以上ある遺跡に限った。後北C<sub>2</sub>・D式期:七飯町桜町(0/30基)・小樽市蘭島餅屋沢(0/40基)・北見市常呂川河口(1/30基)、円形・刺突文土器群期:恵庭市ユカンボシE7(5/14基)・恵庭市西島松5(18/30基)・江別市大麻3(0/14基)・江別市吉井の沢(2/25基)。後北C<sub>2</sub>・D式期では2%、円刺群I～V期までは5%、円刺群VI～VIII期では50%、円刺群IX～XI期では78%である。後北C<sub>2</sub>・D式期～円刺群V期は鉄器の副葬が稀な時期であり、円刺群VI期以降は鉄器の使用・修繕・再生の循環を上回る量の所有が可能になったと推定される。

a～c区には移入威信財かつ上位広域交換財がある。d区には移入実用財かつ上位広域交換財と自製威信財かつ下位広域交換財が混じる。d区より低独占の領域(表IX-13の薄い黄色の範囲)には自製実用財・下位広域交換財の剥片石器がある。

### 3節 階層諸説の再検討

#### 1「多副葬墓」について

遺構・葬法、副葬品が北海道全域において、あるいは細分された3地域において、普遍的に明確な階層差を表現する性質を有していなかった。いっぽうで、遺跡ごとに異なる階層差が一部において見受けられた。この章の冒頭で続縄文の階層研究の基底に瀬川の論考があることを示した。

現在においてもこの基調に変化はない。前節までの検証を経て2010年の私論に誤りは確認できなかった。重複となるが再び瀬川の論考について述べなければならない。その際に難点となるのが階層は現象でありそれ自体は不可視であるということである。遺物に備わる属性(遺物自体の特徴)とその空間的布置(出土状態)を階層差の指標とみなし、操作的・事後的に整合した論が導かれた場合に限り考古学的証明がなされた=階層差が導けた、となる。前節においてもこの方法をとって論を進めた。遺物自体の特徴が出土状態の階層性に優越するのか、出土状態が遺物自体の特徴の階層性に優越するのか、両者を併用するのであればその比率の重みづけの根拠は何か、なるべくこの視点を入れてゆきたい。

第一の問題点。「続縄文型多副葬墓」の時期が曖昧である。この墓の要件である碧玉製管玉の副葬は続縄文前葉後半に始まり、そして文中では「古代の擦文時代」とあるので、続縄文前葉後半～古墳時代並行期の6世紀代まで「続縄文型多副葬墓」があるのか。そうすると続縄文前葉後半～続縄文中葉の前葉(弥生前期～中期前半)には「縄文型多副葬墓」と「続縄文型多副葬墓」という異なる階層化が並存するのだろうか。くわえて、石器類が多量に副葬されなくなる4世紀後葉、続縄文後葉後半(所謂北大式期=古墳時代前期末～飛鳥時代)以降は続縄文期であっても「続縄文型多副葬墓」とは呼べないのではないのか。

第二の問題点。周堤墓は遺構・遺物について検討されるが、「多副葬墓」は遺構についての検討がない。IX章2節1項の結果、南川葬法を除いた構造は変容し続け、表出的属性は変容しやすいことが確認できた。そして、c区を経由する構造は流行を示すと考えられる。また、すでに以下の状況が述べられている。続縄文中葉には内部構造・遺体安置の変容、擦文文化期には外部構造・内部構造・埋葬姿勢の変容がある。これらは近世アイヌ文化期まで続く(鈴木2004c、2005c、2009b、2009c)。

「多副葬墓」の「多」である遺物は黒曜石製剥片石器と琥珀玉・蛇紋岩等玉・ガラス玉である。**表IX-10**によるとこれらはb・c区にありほかの副葬品に比べて最低出現数が高い(2.0以上)皆有性を有する期間が長く、特に石鏃・琥珀玉は4期間、ナイフは3期間、蛇紋岩等玉は2期間に及ぶ。これらの量的豊かさのうち、普及率が希少性(普及率20%未満)を示すのは琥珀玉・蛇紋岩等玉である。黒曜石製剥片石器の多量副葬は階層とは別な意図を示している。例えば被葬者の狩猟の労働価値の高さを示しているかもしれない。いっぽう、碧玉製管玉・ガラス玉は、これらと異なりb区にあり普及率20%未満で希少性も高いものの、1期間だけの流行性がある。

最低出現数と普及率によって階層の根拠につながる「多」が評価できた。「多副葬墓」はあいまいな時期設定と墓制の一部を取り上げた定義であるから、続縄文期以降の墓制研究においては「多副葬墓」を棄却し、汎用的な「厚葬・薄葬」を使うべきである。

## 2 財と「商品」について

「続縄文初頭」とは具体的にいつの土器型式に属するのか、瀬川のいう「弥生文化の成立」期との併行が不明である。また、どこの地域の「弥生文化の成立」なのかも不明である。琥珀玉は縄文晩期後葉～続縄文後葉の前半(道央の土器型式では後北C<sub>2</sub>・D式=東北北部の赤穴式期)、猪牙は縄文後期後葉～続縄文中葉の初め(道央の土器型式ではH37 栄町式新=東北北部の宇鉄Ⅱ式期)

の北海道東半に分布する。いっぽう、碧玉製管玉は続縄文前葉の後半(道央の土器型式ではH317式新=東北北部の二枚橋式期)~続縄文中葉の後半(道央の土器型式ではアヨロ3a式=東北北部の念仏間式期)、南海産貝製品のうちオオツタノハ製品は縄文晩期後葉(東北北部の大洞A式期)に例があり、イモガイ製品は続縄文中葉の中(道央の土器型式ではアヨロ2b式=東北北部の田舎館2・3式期)である。加えて列島内東半における鉄製品の本格的流通は弥生後期である。こうしたことから「商品」は必ずしも弥生文化とかわらないし、弥生文化の成立が「商品」の成立であるといえない。

瀬川のいう「商品」とは商品の一面(交換価値)に過ぎない。商品の希少性のみが価値であれば、内部による創造によっても希少性が生じるし、単なる「外部差異」は縄文時代にも存在する。威信財は外部の社会性・イデオロギー(例えば、鉄農具による生産の変化は、その使用価値と労働価値による社会の変革である)を必要とし、それらに関わって威信は増大する。そして、これらは商品価値以外の所謂「商品の外部性」による価値付けにより流通量が左右される。商品は使用価値(有用性)と労働価値(製作コスト)と交換価値(幾ら)を内包する。広域交換財は交換価値のほか、労働価値として運搬コストが上乗せされるであろう。例えば鉄器には大きな使用価値(でなければ道具の鉄器化は起こらない)と労働価値(日本列島内で自製できない希少性)があり、後北期~擦文期に出現・汎布する。

「商品」は交換財の一部であり、さらにそのうちから副葬品が選択される。交換財は、実用財(生存財)・象徴財(威信財)、自製品・移入品という性質を兼ね備える。実用財は自製品が多く象徴財には移入品が多い。IX章2節3項の結果、交換財としての副葬品は、移入品の威信財、自製と移入品とが混じる威信財、自製の実用財・威信財の群に分かれる。これらは広域交換財に上下・域内交易との関係から価値の序列に基づいて配列すると、価値多:移入威信財 $\geq$ 自製威信財 $\geq$ 自製実用財:価値少が導かれる。もし当時のヒトが労働価値説的な思考をもって副葬品を選択していたならば、自製品は生産性による価値創造で、移入品は移動かすことによる価値創造であるから、前者の選択枝に重きを置かれるはずであるが、そうはなっていない。当時のヒトは副葬品に対してこのふたつの評価のうち後者に重きを置いていたとも考えられる。

③の問題点。後北期~擦文期の副葬品が検討されていないにもかかわらず、続縄文~アイヌ文化期の「商品」を一括に扱い、蓄財と階層について結論することには無理がある。続縄文中葉を境に副葬品の種類・量つまり「商品」種類・量が変化する大きな画期を迎えるからである(鈴木2009a)。

### 3 階層差と富について

「首長」の定義は部族社会における「リーダー」とのみ書かれ、瀬川の「首長」・「首長墓」の根拠と定義は副葬品の量・種に拠っている。

IX章2節2項の結果、剥片石器・琥珀玉は富の象徴ではなく、金属装身具・蛇紋岩等製玉・ガラス玉は富の象徴の可能性があり、環石・サメ歯・魚形石器と鉄製品・碧玉製管玉には富の象徴とそれ以外の性質が備わる可能性がある。瀬川は剥片石器・琥珀玉と碧玉製管玉・ガラス玉・鉄製品を一括して富の指標とするが、そうではなく、大部分の副葬品は一時期の流行を示しており、富=

階層の指標という性格を一定に備えない。構造・葬法の場合にも同じことが言える。

続縄文後葉にみられる第一の道具の鉄器化と階層差の内容については、金属器の所有・伝世を検討することで一部結論が得られている(鈴木 2005b・2008・2009b)。伝世(単葬墓において、土器と大刀・横刀の時期に差がない場合)をみると、横刀と土器の供伴 4 例において「時期差ナシ」が小樽市蘭島 D 遺跡 84-11A 土坑、「土器がやや古い」が恵庭市西島松 5 遺跡 P11・P30、「土器が古い」が西島松 5 遺跡 P128 である。大刀と土器の供伴例は西島松 5 遺跡 P98(2 回追葬)があり、大刀:7 世紀第 2 四半期、土器:6 世紀中～後葉、横刀:時期不明である。少なくとも円刺群 IX～X 期には大刀・横刀の伝世はないと考えられるので、大刀・横刀は個人財と考えられる。そして、副葬大刀には墓坑底に突き立てられ佩用を再現した可能性もある例(恵庭市西島松 5 遺跡 P96:円刺群 X～XI 期、P98:円刺群 X 期)もあるので、その用途が理解された象徴材の個人財である。象徴財的金属製品の多寡に相関して土坑墓の型式に差はみられない。

7 期後半には大刀・横刀の伝世はないと考えられるので、大刀・横刀は象徴材の個人財である。象徴財的金属製品の多寡は個人財の蓄積差と考えられる。それら蓄積差は「富者と貧者」以上の関係を示さない。

「リーダー」とは集団内の意思決定を指導する者であり、秀でた職能(狩猟・祭祀の技術)・交換における交渉能力・弁舌能力・血統などが求められる。そして「リーダー」とそれに従う人々との相互関係に拠って、階層の内容とその変容が規定される。遺構・遺物・葬法の分析結果からは瀬川主張①は認められない。ただし、財の集積＝富という側面を副葬品から評価することにより、「リーダー」とそれが属する社会の階層化を検証することは一部確認できた。

なお、瀬川は被葬者が首長であり、成年男子であるという論拠を、周堤墓については形質人類学的所見から、多副葬墓については近世アイヌ文化期の民族例から導き出している。続縄文～アイヌ文化期における被葬者の性別については形質人類学の所見・副葬品などから直接論証済みである(鈴木 1999・2005b・2009a・2009b)。

#### 4 多頭的階層は存在するか

文化人類学における階層化理論の展開は、「バンド→部族→首長制社会→未開国家」を基礎として、階層化モデルの全体についての細分や、一部「部族→首長制社会」間の細分が行われている(高橋龍三郎 2001)。したがって、階層化モデルは唯物的発達史観の枠組内にあり、加えて、これらの論拠はあくまでも海外の民族例である。海外の近現代民族例を抜き取って比較することは可能である。しかし、考古学が求める成果は当時の階層化である。文化人類学から借用したモデル導入の妥当性を証明することがまず必要である。考古学の成果をただ借用したモデルにあてはめるのは結論を導いたことにならない。独自の説明・言葉を創造することが考古学における階層研究の端緒であるとする。瀬川の場合は続縄文後葉～中世アイヌ文化期についての論を省いているので、北海道においても縄文～近世アイヌ文化期まで階層が単線形的に連続することを認めることになり、民族例との詳細な擦り合わせはなく、階層化モデルが結論になっている。

続縄文については、松木が、生業(生産)には英雄的狩猟・漁労者、交易には外界との交渉者、呪術には宗教的資質者がおり、職能ごとに階層分化が起こっていることを想定し、このような社

会を「ヘテラルキー(多頭的階層)」と呼ぶ(松木 2007)。

IX章 2 節 2 項の結果、副葬品は多機能な組み合わせを持っている。続縄文期の生業再編は、豊かな動物資源を背景に、労働力に大きな変化をきたさない、生業種の増加＝広範囲生業の徹底をおこなういっぽうで、交易はVIII章 2 節 3 項のII a 期まで域内交易の構造と変わらない縄文時代以来の中継ぎ方式をとっている(鈴木 2009a)。自製威信財・域内交換財である環石・サメ歯・魚形石器は縄文時代以来の交換方式によって交易されていることから、「縄文時代には多頭的階層社会である」が導かれてしまうが、そうではないだろう。

以上より前出II a 期までは、多生業を兼業し、階層間分業が想定されにくい中継ぎ方式の広域交換をおこなうので、専業による分業に基づく多頭的階層があった可能性は低い。また、英雄的狩猟・漁労は「勝ち組と負け組みとを振り分けていくゲーム、不平等な社会関係を演出するための芝居のような働き」があると述べる(松木 2007)。魚形石器の出土量は実用材にしては極めて少なく、分析結果では魚形石器は階層を示す可能性はある。よって、続縄文期の墓制にそのような働きをみるとすれば、II a 期における魚形石器・サメ歯などの一部の副葬品に限られる。

第一の道具の鉄器化とその集積にみられる「富者と貧者」の差、性差に基づく系譜継承が発生する。次の段階として9世紀代擦文文化期に、渡海交易の隆盛により多機能をこなす「長」が出現する(鈴木 2007a)。これらの変容を経て階層化が明瞭になってゆくものと考えられる。なお、「副葬品を蔵しない者」=「貧者」と仮定すると、専業による分業に基づく多頭的階層ではなく、「富者と貧者」による多頭的階層が想定されるが、「副葬品を蔵しない墓」についての分析が必要である。

## 5 合葬・追葬・改葬からみた階層の持続性

階層の内容については以下の結論に達した。前節 2～3 期の一時期には多頭的階層が存在する可能性があった。その時期には階層が威信的存在を示している可能性が「厚葬」に表れた。しかし、前節 4 期が生業において経済的側面が威信的存在を侵蝕する過程であり、同時に階層の変容期である。これ以降は「厚葬」が「富者と貧者」という経済的階層性の結果であることが導かれ、この経済差は交換に帰結する生業成果の差であった。次に、階層の強度はどうであろう。それはその継続性に表れるであろう、以下ではそれについて検討する。

### a 合葬・追葬・改葬とは

合葬は、平面形は単葬墓と同じで規模が大きく(後北C<sub>1</sub>期には合葬・追葬専用の舟形土坑が登場する)、複数遺体が坑底に整然と安置される、付属施設が遺体数に相応しない、が要素としてあげられる。追葬は、平面形・規模は単葬墓と同じ、一部の人骨が生体的位置を保持しない、付属施設が遺体数に相応する、が要素としてあげられる。一部の人骨が生体的位置を保っていないことに関しては墓坑を共有したことがうかがえ、柱穴様土坑に関しては墓坑を共有して外部付属施設のみを変更する。改葬は、生体的位置を保っていない・部位が足りない人骨埋葬状況である。再葬のための改葬と前事葬を片付けるための改葬がある。

**表IX-14** は、2019 年までのうち時期が判明している合葬・追葬・改葬の事例であり、合葬例には遺体・遺体痕跡・付属施設の重複などがなくとも、墓坑規模が大きく合葬が想定される事例を加えている(下述参照)。そして、**表VI-10-11** の要素と同じ項目を合わせて示した。

表区-14 合葬・追葬・改葬例一覧

番号	遺跡名	遺構名	主体部				遺体・その痕跡	埋葬姿勢	年齢	性別	外部付属施設				内部付属施設				備考	
			下端規模		下端平面形状	構造					木柵痕跡分類	積石	柱穴様土坑		袋状土坑		遺体に対する平面位置	掘削方向		ベンガラ
			長軸長 cm	短軸長 cm									個数	高さ位置	個数	垂直位置				
<b>合葬</b>																				
<b>道南</b>																				
アヨロ3ab・南川IV																				
73	稲新	A地区pit2	-	-	円	土坑	○	埋葬	成年	マ?	○						成年2体合葬			
		A地区pit5	-	-	円	土坑	○	埋葬	マ?	マ?	○						2体合葬			
<b>道央</b>																				
H317																				
21	西島松2	P-46	105	102	円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
H37米町																				
58	紅葉山33	GP-63	123	100	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
江別1																				
70	上川(江別新橋点)	P-95	149	145	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
後北A																				
1	ヒヨロマ3	ⅢGP-01	151	139	円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
後北B																				
25	笹ヶ岡	墓112	155	152	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
70	大川(道南橋点)	P-88	130	120	円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
アヨロ2b																				
41	紅葉山33	GP-22	111	102	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
70	大川(道南橋点)	P-104	141	130	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
71	大川(江別新橋点)	P-121	147	139	円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
アヨロ3a																				
66	大川	GP-243	135	120	円	土坑	○	埋葬	マ?成人	マ?女	○						2体合葬(人骨位置より)			
67	大川	GP-620	252	239	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
後北C・D																				
2	クアブ	GP-33	212	154	隅丸方	土坑	○	?	マ?以上	マ?以上	○						2体合葬(40歳以上人骨)			
18	橋本3	30号土坑墓	222	183	楕円	土坑	○	?	?	?	○						合葬(長軸長より)			
60	クアブ	11号土坑墓	110	96	楕円	土坑	○	?	30才代	?	○						2体合葬(人骨位置より)、袋状土坑(1体の頭上)			
60		17号土坑墓	143	117	円	土坑	○	?	20~30才代+40~50才代	?	○						2体合葬(人骨位置より)、袋状土坑(2体の頭上)			
60		20号土坑墓	400	131	長楕円(舟形)	土坑	○	?	20+20~30×2+30+40+50才代	?	○						2体合葬(追葬も含まれている可能性が高い)			
61		29号土坑墓	-	-	長楕円?	土坑	○	?	?	?	○						2体以上合葬(人骨位置より)			
61		22号土坑墓	416	124	長楕円(舟形)	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)、袋状土坑(1体の頭上)			
61		23号土坑墓	-	-	楕円?	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
61		24号土坑墓	104	66	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体以上合葬(人骨位置より)			
61		26号土坑墓	181	124	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
61		29号土坑墓	136	113	長楕円(舟形)	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(袋状土坑より)			
65		10~40A	132	114	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
65		11~41B	136	124	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬(人骨位置のずれより)			
66	大川	GP-7	139	128	楕円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
66		GP-110	148	100	楕円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬(人骨位置より)			
71	大川(江別新橋点)	P-97	101	79	楕円	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬			
円刻V期																				
23	風砂	P-1075	95	79	隅丸長方(舟形)	土坑	○	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
円刻Ⅷ期																				
17	西島松5	P-15	125	108	方	木柵	b突出	○	?	?	○						2体合葬(袋状土坑2個より)			
17	西島松5	P-131	116	84	隅丸方	土坑		?	?	?	○						2体合葬(袋状土坑2個より)			
道東																				
元町2																				
119	アヨロ	PI1174	262	150	楕円												合葬墓?(長軸長より)			
宇津内Ⅱa																				
109	常呂川河口	P-262a	118	101	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体あり			
115		P-1431	117	115	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体あり			
宇津内Ⅱb																				
109	常呂川河口	P-24	141	117	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり			
後北C <sub>1</sub>																				
91	千勝春月太	土坑23	325	160	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑24	210	138	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑26	320	183	長楕円(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑29	290	158	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑34	492	144	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑35	504	136	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
91		土坑98	469	112	小判(舟形)	土坑	?	?	?	?	○						合葬墓?(長軸長より)			
109	常呂川河口	P-23	170	169	円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体あり			
111		P-389	146	101	小判	土坑	○	埋葬	?	?	○						2体合葬・遺体あり			
115		P-1351	146	111	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり、紅銅			
115		P-1253	119	83	楕円	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり			
後北C <sub>2</sub> -D																				
105	常呂川河口	P-934	110	87	小判	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり			
105		P-951	124	81	小判	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり			
105		P-986	142	109	隅丸方	土坑	○	?	?	?	○						2体合葬・遺体・歯あり			
<b>追葬</b>																				
<b>道央</b>																				
後北A																				
42	旧豊平河群	墓178	140	124	楕円	土坑		?	?	?	○						追葬?(柱穴様土坑8個より)			
アヨロ1																				
71	大川(道南橋点)	P-182B	119	-	円	土坑	○	埋葬	?	?	○						11	遺体層P-182Aに追葬される		
アヨロ2b																				
68	大川	GP-131	185	179	円	土坑	○	?	?	?	○						○	追葬?(人骨が46cm深く)		
71		P-182A	112	-	円	土坑	○	?	?	?	○						7	遺体層P-182Bの上に追葬		
後北C <sub>2</sub> -D																				
2	クアブ	GP-8	178	166	円	土坑	○	?	?	?	○							追葬?(人骨が15cm深まっている)		
61	クアブ	28号土坑墓	-	-	長楕円(舟形)?	土坑	○	?	?	?	○							追葬(遺物の平面的位置が下層の26号と一致する)		
61		32号土坑墓	110	90	円	土坑	○	?	?	?	○							追葬(遺物の平面的位置が下層の21号と一致する)		
61		33号土坑墓	-	-	楕円?	土坑	○	?	?	?	○							追葬(人骨位置は2体合葬であるが、遺物の平面的位置が下層の23号と一致する)		
65	藤屋沢	9-39B-C	-	-	隅丸方?	土坑	掘跡確認	○	埋葬	?	○							○	追葬(人骨位置のずれより)	
円刻Ⅷ期																				
40	大川	GP-50	163	137	円	土坑	○	?	?	?	○							13	追葬(調査書が記載されていない)	
41	大川	GP-102	144	141	(円)	土坑	○	?	?	?	○								2体以上同時に追葬(人骨が20cm深まっている)	
円刻Ⅷ~Ⅸ期																				
11	ニカソ部26	P-37	106	76	隅丸方	土坑		?	?	?	○								柱穴の本は袋状土坑を避ける	
17	西島松5	P-73	140	73	楕円	木柵	彎曲	?	?	?	○								追葬(底面が一枚より)、現地小溝彎曲	
17	西島松5	P-98	115	63	小判	木柵?		?	?	?	○								8回追葬(柱穴様土坑10個より)	
<b>改葬</b>																				
<b>道南</b>																				
アヨロ1a																				
75	南有珠7	GP021	140	103	楕円	土坑	○	?	成人(若・老)?	マ?女	○							改葬		
アヨロ2b・南川Ⅲ																				
76	有珠モシリ	4号墓	-	-	楕円?	土坑	○	?	成人	男	○							改葬		
アヨロ3ab・南川Ⅳ																				
76	有珠モシリ	7号墓	-	-	楕円?	土坑	○	?	成人	男女	○							改葬墓で追葬		
		10号墓	-	-	楕円?	土坑	○	?	成人	女	○							改葬		

## b 合葬例の検討

合葬 50 例のうち 2 体合葬例が 25 例で 5 割を占め、3 体合葬(6 例)と合わせると 6 割となることから、親子や兄弟姉妹・夫婦が想定されるが、後北 C<sub>2</sub>・D 式期の例では年齢差があるので親子など

の世代に亘る埋葬例があることから 2 世代の造墓期間である可能性が高くなる。分布する地域は道南・道央・道東に及ぶことから北海道全域に広がる葬法である。ただし、時期が判明している墓坑 1085 例の 4.6%に過ぎないため各地において稀に行われたといえる。

なお、合葬が想定される墓壙規模であるが、2 体合葬が複数合葬の最小値となることから、2 体合葬の墓壙規模について集計すると、最小値 cm:長軸長/短軸長=101/79、最大値 cm:長軸長/短軸長=170/152、平均値 cm:長軸長/短軸長=107/90、であることから、長軸長/短軸長=101/79 cm 以上がある場合は合葬墓の可能性はある。

## c 追葬の検討

遺体・遺体痕跡・付属施設の重複が 1 回であるから 1 回の追葬と考えられ、二世代の父息子・母娘や兄弟・姉妹が想定される。ユカンボシ E7 遺跡 P-37 では柱穴様土坑のずらしがみられることから上屋の建て替えが行われていたと推定される。いっぽうで坑底面の重複であることから前代からの上屋を利用したと考えられる例もある。また、坑底面が二段の構造は追葬の可能性も考えられる。該当 14 例は 1085 例の 1.3%に過ぎないため道央において極めて稀に行われたといえる。

## d 改葬の検討

事例は道南の恵山系で伊達市有珠のみに極少数 4 例みられた。ただし、これらののうち 2 例は追葬に伴う「かたづけ」行為であり、東日本～東北南部にみられる再葬とは異なる。南有珠 7 遺跡 GP021 では世代差のある改葬がみられるので、親子などの追葬とも推定される。改葬は合葬・追葬よりも極めて特異な葬法といえる。

## e 階層の持続性と墓制における“文化”変容の速度

遺構・葬法・副葬品の分析からはそれらの変容の一部は一時的に階層と係わることが明らかになったが、ほとんどが流行・流通などを表していた。続縄文の墓制が表す考古学的内容は階層よりも広範な文化”変容を示すことが理解できる。その上で以下の推察が可能である。

「階層が威信・富・権力の系譜がヒトの血統により維持される」を前提とすれば、前項で述べてきた合葬・追葬・改葬が 2 世代の内に行われていたことから、合葬・追葬・改葬を 2 代 1 単位の血統による階層の維持は約 60 年間と考えることも可能である。ただし、墓坑を共有するという仕組みを 2 代 1 単位と考えたのであって、1 単位を二つ以上繰り返すことも想定できる。そして 4.6%に過ぎない例数から別な維持方法も在りうると考えられる。墓制に関わる“文化”変容の単位は 1 期(約 140~160 年間⇨4~5 世代、期は複数の土器型式を包含した単位)が殆どであった。また、各属性は最低出現数と普及率で示した領域を 1 期ごとに転移している。1 期は、2 世代の血統に基づく階層を 2~3 単位にあたる期間で、別な方法はやや長期であり、4~5 世代以内で生じている可能性がある。階層の維持が、血統によるのか、例えば「富者と貧者」によるのかは 1 期を細分して再検証する必要がある。



# X 章

## 終章



# X章 終章

## 1 節 本論の総括

本論文では、続縄文期の物質文化について、新来の方法論・その実践を提示し、対象資料を2019年までとし、自分なりの定性・定量的分析を試みてきた。その目的は、広い視野に基づく続縄文の総合的研究を確立することにあつた。以下では各章の総括を行い、結論を述べる。

### 1 各章の総括

**【第I章の要約】** 合成語である「続縄文」の語根の「縄文」と「森林性新石器文化」の概念・位置付けを再確認した。続縄文はこれらの後継であるのか、全く新たな用語に置き換えが必要か、問いかけた。

**【第II章の要約】** 研究史を検討し、第3章以降における論考の方向性を「抽出された課題」・「加えられるべき課題」として以下のようにあげた。続縄文の文化区分上の位置付けが縄文・弥生と同位か。続縄文の文化要素に新規性はあるのか否かその系統はどこに連なるのか。続縄文が「変則的/逸脱的森林性新石器文化」の後継である場合、変則的の後継が「続縄紋」、逸脱的の後継が「北海道型(?)続縄紋」となるのか。続縄文の「基本的要素」である「変則的/逸脱的部分」と「弥生における新資源」の関わりはなにか。生業要素の新規性は、それが「特化した経済」であるか「資源構造の拡張的開発」にあたるのか。「道央の優位性」が「資源構造の拡張的開発」によって生じたのか。これらの背景には気候変動による環境変化があり、それへの対応(=生業変化・交易、社会変化)は「変則的-」「逸脱的-」ごとに異なり「続縄紋」「北海道型(?)続縄紋」へどのように後継しているのか。

**【第III章の要約】** 気候変動による環境変化に伴う動植物の変化を検証した。そして、「中川モデル」は狩猟採集が環境に柔軟に応答する生業であることを示していた。海域環境と陸域環境の変化は「異なる挙動」が想定され、それに伴い動植物の変化には複相性がみられる。そして、これらより環境変動と続縄文の生業と“文化”変容とが複相的關係にあることが導かれた。

**【第IV章の要約】** 考古学的現象について記述・分析する基礎的作業の基底にある考古学的実体をD. Clarkeにもとづいて定義した。また、本論における属性について、属性操作に論理的背景(操作性の前提)を表す必要を説いた Clarke の言説によりつつ、「属性:分解不可能な独立した最少単位」には「内在的属性」「表出的属性」「中間的属性」があるとした。

型式は属性(形質)が不均等で不均質である不完全な複相組成により構成されている。いっぽうで、型式の成立要件は、遺物個々において共有属性(共有形質)=単性部分が十分条件としてある、である。各属性が等値な場合には、共有属性の数が多いほど遺物は群を構成しやすく、各属性が不等値な場合は「状態差」が顕著な属性や他属性と高い相関を持つ属性によって遺物は群を構成しやすくなる。

型式分類と型式同定は、共有属性(共有形質)=単相部分により、前者は個物群を作り、

後者は個物群を探索する、逆の観点からなされた同類の作業であるから、相互にその確からしさを担保する。型式分類の確からしさは検証的根拠:「関連する状況:in a context」と論理的根拠:「型式論的同一」から立証される。そして、分類・同定と系統探索はともに「似ている」について論じるが、分類・同定は「似ている」群の形成・編入、系統論は「似ている」群の連なりの推定、という全く異なる行為である。考古学的実体の系統は網状系統樹であり山内の「型式網」とは異なる。人工物は自律的変容の仕組みを内蔵せず、時空に束縛された個別性を持つ多様で多数の属性からなる。融合・収束を人工物の変質変形と考えれば頻繁に起こる人工物の変質変形における系統復元には人工物の使用・改変・製作に関わる情報伝達についての「内在的属性」「表出的属性」「中間的属性」を用いる有効性を説いた。

なお、様式と形式については以下の考えを示した。文様・文様帯は器形を超越して施されることが多く、「論理的証拠」による斉一性を有する。いっぽう、「検証的証拠」である器形の消長によって示されることを要点に加える様式論の斉一性とは根本的に異なる。様式における形式は異なる系統(相同)として存在する前提があり、形式には本質性(祖先-子孫関係において変化しない属性)が備わることが必然となる。しかし、その実体は不断に変化する複数の連続量的属性の違いに拠っているので形式に本質性は後付される。そして、器種・細別器種(型式組列)を通じて形式の実在が想定されるが、型式組列は分枝・消長するので、その都度、器種・細別器種≡形式の本質性に揺らぎが生じている。

**【第V章の要約】** 考古学的時間軸の設定を行い、その際には内在的・中間的・表出的属性に分けて記述した。縄文時代晩期～続縄文後葉の北海道中央部(「道央」)における深鉢の型式編年である。記述の開始時期を縄文時代晩期としたのは、前葉の土器群が晩期後葉からの系統をつないでいることからである。「道央」を範囲としたのは、前葉～中葉にかけて「道央」・北海道南部(「道南」)・北海道東部(「道東」)に固有の型式があり、道央では「道南」「道東」の型式が出土するからである。深鉢としたのは出土例が多いことや文様の省略がないことからである。2・3節では江別市対雁2遺跡の年縞的堆積による遺跡形成に基づき、大洞A<sub>1</sub>式～大洞A<sub>1</sub>式に並行する道央の晩期後葉の土器について「対雁1」式、「タンネトーL」式、「対雁2」式の序列を設定した。4節では続縄文前葉の多様な縄文原体の使用と押捺方法や成形に着目し、型式論的整理を行い、前節の成果と合わせて以下の型式を設定した。砂沢式～宇鉄Ⅱ式に並行する「H37 丘珠」式、「H317」式、「H37 栄町」式を設定した。5節では道東起源の擬縄貼付文とその割り付け方法の道央における定着過程を江別太遺跡とK39遺跡を中心に検討し、その結果をもとに続縄文中葉前半の既存の型式:江別太1～後北A式を再配列した。後続する後北B・C<sub>1</sub>式については擬縄貼付文による縦分割と横分割の組み合わせの変遷による型式論的方法により細分した。くわえて、大坂により設定された「鷲ノ木式」は後北B・C<sub>1</sub>式との分別は困難であり、4章において言及した型式分類・型式同定の原則を逸脱しているので「聖山KⅡ群」とした。6節では、後北C<sub>2</sub>・D式と所謂北大式(円形刺突文土器群期)の区分について、微隆起線の多条化をもって所謂北大式の成立と考えるのが妥当であることを示し、続く所謂北大式について榊田の手法・編年案に問題のあることを指摘した。また、所謂北大式とオホーツク式との間に属性交換が行われていることをしめし、所謂北大式にある帯縄文の消滅と光沢のあるナデの盛行はオホーツク式からの影響を想定した。これらの結果をもとに続縄文後葉の既存の型式:後北C<sub>2</sub>・D式～所謂北大式を改定した。

**【第Ⅵ章の要約】** 第Ⅴ章で設定された時間軸に従い基本的実体の変質・変形について 3 属性を視点として記述し、考古学的文化の系統についても言及した。1 節では属性の変化に着目する、3 属性を用いる、理由を述べた。基本的実体は属性→型式→型式組成群属性の階層構造があるので属性変容を分析が基底となる。情報再生の精度は、再生する状況によって異なるので、再生における場の共有関係の濃淡を表す 3 属性を用いることは有効である。2～3 節では遺物の属性変化・遺構の属性変化について述べた。

それらを検討した結果、遺構・遺物の内在的属性は「変異性が弱く、現地性が強く、転移は容易でなく、伝達する際に欠落しやすい」「遺構の内在的属性 $\geq$ 遺物の内在的属性 $>$ 遺構の表出的属性 $>$ 遺物の表出的属性」が導かれた。土器の属性転移は、型式を構成する属性の一員として型式拡散に伴い転移する場合、単独で転移する場合がある。土器以外の遺物・遺構については土器型式の拡散に対して、随伴・同期型の転移、単独・非同期型の転移があった。属性合成にも、土器が随伴型の合成、土器・墓制が単独・非同期型の合成があった。

基本的実体における変容の原因は、情報再生の仕組みが「3 属性」の性質と「2 関係(同一人・授け手-受け手、授け手-受け手には祖先 - 子孫関係:時系と同世代の他者:空間系がある)」の伝習系統の組み合わせの差異により再生精度が異なることによる。

属性変異の内容には 5 つの型がありその内容によって“文化”変容も異なる。属性転移・合成①(内在的属性の混在)は、一部に“文化”異化が生じる。属性転移②(3 属性揃っての転移)は、転移先では“文化”交代が生じた。属性転移・合成③(表出・中間的属性の混在)は、一部に“文化”異化が生じた。属性転移④(表出的属性の一部の混在)は、部分的に“文化”異化が生じた。属性転移⑤(3 属性揃って少量・継続的に混在)は、ある程度全的に“文化”異化が生じた。そして、転移する属性数の多寡・持続期間が“文化”変容に関わることから「“文化”同化 $<$ “文化”異化 $<$ “文化”交代」が導かれた。

「2 関係」が「授け手-受け手かつ転移元-転移先」である場合、“文化”変容は転移先の空間・時間において以下の様態を示す。空間においては、変容 S1: “文化”変容が起こらない。変容 S2: 深層に“文化”異化を含む。変容 S3: 表層に“文化”異化が生じる。S4: 一部に“文化”異化が生じる。変容 S5: “文化”交代が生じる。時間においては、変容 T1: 3 属性全ての授受を行わない「祖先 $\neq$ 子孫」において“文化”交代が生じる。変容 T2: 内在的属性のみを授受する「祖先 $\ni$ 子孫」において子孫の深層に“文化”異化が生じる。変容 T3: 表出・中間的属性のみを授受する「祖先 $\ni$ 子孫」において子孫の表層に“文化”異化が生じる。変容 T4: 少量の 3 属性が揃って継続的に転移する「祖先 $\ni$ 子孫」において子孫の一部に“文化”異化が生じる。変容 T5: 多量の 3 属性が揃って継続的に転移する「祖先 $=$ 子孫」において“文化”変容が生じない。

“文化”の系統については、地域・時期において変遷があった。道南・道央は H37 丘珠～H317 式期の文化は「変則的森林性新石器文化」の後継でかつ「縄紋晩期」の階梯にあたる、次に H317～H37 栄町式期になると弥生系要素が搬入品として僅かにある状況＝「北海道型(?)続縄紋」へ移行した。道東北については、フシココタン下層/栄浦一・二群～下田ノ沢 I /宇津内 II a II 式期の文化は「逸脱的森林性新石器文化」の後継でかつ林の「縄紋晩期」である。下田ノ沢 II 1/宇津内 II b II 式期になると「北海道型(?)続縄紋」へ移行した。以上より、「北海道型(?)続縄紋」はほとんど「変則的/逸脱的森林性新石器文化」といえることが確認できた。

そして、その僅かにある弥生系要素は弥生的(水田稲作)社会基盤を持たない下北地方を経由してもたらされていた。

**【第七章の要約】** 続縄文の自然環境と生業について言及した。なぜなら “文化” 変容の背景には、情報再生の場としての社会的環境がまずあり、情報を具現させるために自然環境が必要となるからである。2 節では高瀬の言説①:「サケ科資源利用が縄文文化との連絡性が乏しく続縄文期に一気に確立する」、高瀬の言説②「資源構造の拡張的開発」を検証するために道央の対雁2遺跡における縄文晩期後葉～H37 栄町式(新)期におけるサケ・マス漁について述べた。サケ・マス漁は続縄文前期を待たずに隆盛しており、少なくとも縄文晩期以来の伝統的生業といえ、それは気候の冷涼化により進行した可能性がある。

いっぽう、道南部・道央部において温暖傾向により威信獲得漁である暖流系大型回游魚漁が盛行するが交易の対価とならないため、交易の対価獲得漁である海獣猟の盛行・冷涼化により衰退した。道東部では続縄文初頭以降も海獣猟が主体のためそのようなことが起こらず、海獣猟は晩期以前から継続している。ただし道南部の温暖期に限れば道具・組織単位の拡大がみられ生業種の多様化があった可能性があるものの、これらは威信獲得漁であることから、「資源構造の拡張的開発」による新出的経済とは言えず「特化した経済」である。

道東部の生業は林の「北海道型(?)続縄紋」ではなく、「逸脱的森林性新石器文化」の「epi-」であることから「逸脱継続型」。道南～道北の生業は一時的「北海道型(?)続縄紋」に至るが「変則的森林性新石器文化」にもどるので、「変則的森林性新石器文化」の「epi-」であり「変則回帰型」。「逸脱継続型」「変則回帰型」は自然環境に極性を帯びる時期であっても多様性を維持しており、その背景には柔軟性＝生業内容の多様性があり、「生業の特化」は生業内容の多様性に支持されている。

生業に関わる行動様式と行動領域は、行動領域の大きさは行動様式の違いによって広狭が生じる。行動様式には時空による2要素があり、「時」間には周期的移動・不定期的移動、季節的移動・年季や複数年季の滞留・世代に及ぶ滞留がある。「空」間には狭域移動狭域移動(生業領域内移動)、広域移動(同一文化圏内の移動)、超広域移動(異文化圏移動)があり、「季節的狭域移動」の領域規模は河川に沿った長軸約35km×短軸10km、「季節的広域移動」の領域は281 km<sup>2</sup>(半径約45 km)～582 km<sup>2</sup>(半径約93 km)、「季節的超広域移動」の領域は海岸に沿って最長約700 kmが策定された。そして、Clarkeの考古学的文化レベルの推定半径に当てはめると、属性転移はClarkeの「文化」の中規模で起こる現象で、生業の特化はClarkeの「文化」の大規模で起こる現象といえる。「季節的超広域移動」の領域＝渡海交易の範囲はClarkeの「文化群」の最大値にあたり、交易における「季節的超広域移動」の領域は「続縄文回帰型」「続縄文継続型」の範囲を越えて本州に及ぶ。また、漁撈・狩猟は「現地性物質」の入手であり「季節的狭域移動」～「季節的広域移動」の領域で行われた。交易＝交換は「非現地性物質」の入手であり「季節的広域移動」～「季節的超広域移動」の領域で行われた。

**【第八章の要約】** 考古学における交換について述べた。交換には2つの機能があり、一つは生業成果の変動を社会的環境⇌ヒトの関係で調整する機能である。もう一つは、自製できない必要な財の入手を社会的環境⇌ヒトの関係で調整する機能である。そして、交換には「交換関係」と「交換物資」において、物質の交換に終始する「遭遇型交易⇌沈黙交易」、生業成果の配分を調整する「域内交易」、自製・獲得不可能な非現地性物資(上位の広域交換

財)を求める「渡海交易」がある。広域交換財には分布域から区分された上位・下位の財があり、琥珀・黒曜石・頁岩は下位の、幼猪・碧玉管玉・ガラス小玉・鉄製品は上位の交換財にあたる。下位の交換財は入手の経緯・経路にある程度の不特定性＝多様性を示しており、下位の広域交換財は比較的緩やかな需給関係において交換された可能性を示唆する。

上位の広域交換財は専ら「渡海交易」により、その交換方式はⅠ～Ⅶ段階に変遷し、Ⅰ～Ⅳ段階が続縄文期にあたる。Ⅰ段階：翡翠・碧玉製管玉などの採掘・加工地点から日本海沿岸を滞留しながら中継ぎ式に運ばれ、中継点は各型式分布の周縁域に散在する。Ⅱa段階：滞留型交易から定住型交易への移行期。Ⅱb段階：恒常的定住型交換を開始、少数の北海道続縄文人が物資の結節点(北海道系土器の集中点：約50km間隔)を結んだ経路に移住した。Ⅲ段階：定住型交易の完成期、東北地方において北海道系土器の経路状分布に短縮・寸断があり、北海道系墓制には在地墓制との融合がみられる。Ⅳ段階：定住型交易から滞留型交易への移行期、東北地方では、北海道系土器の経路状分布・北海道系墓制が消失しつつある。また、渡海交易はⅡ段階以降に“文化”変容を起こす。Ⅱa～Ⅱb段階は新潟県・東北地方では“文化”変容S3。Ⅲa段階は新潟県・東北地方では“文化”変容S4。Ⅲb段階～Ⅳ段階は新潟県・東北地方では“文化”変容S4、東北地方の内では“文化”変容S1が起こった。

鉄製品組成・石器の利用からみると、その画期は円刺群Ⅰ～Ⅵ期である可能性が高く、土器穿孔の変化からみると円刺群Ⅰ～Ⅴ期には鉄錐に移行した。後北C<sub>1</sub>式～C<sub>2</sub>・D式期は鉄製利器を象徴的財として考え、石器に利器機能を負わせる時期である。円刺群Ⅰ～Ⅲ期と円刺群Ⅳ～Ⅴ期は鉄製利器が象徴的財でもあり実利的財でもある時期である。円刺群Ⅶ期にはいと実用器としての性格が濃くなる。利器の石器から鉄器への置換過程により渡海交易の画期をみることができる。それは、後北C<sub>1</sub>式期に始まり、円刺群Ⅷ期に完了時点とする。

高瀬は日本海側石狩川水系下流部と津軽半島のネットワークとサケ科の利用を基軸とした経済が「道央部の優位性」を確立させたと考えた。後者は当てはまらないことが生業の検討によって明らかであることから、ネットワークの在り方が要因となりそれは石狩低地帯の地勢に起因する。地勢を生かして本州との交換関係を維持するには外洋航海船が必要である。続縄文期の舟形土製品や土器絵画を擦文～アイヌ文化期の船材出土例、アイヌ文化期の絵画、明治期の記録、から復元すると、舷側板一段・漕ぎ手が一列並びの小型板綴船(準構造船)は21.4石積以下、舷側板二段・漕ぎ手が一列並びの中型板綴船は32.7石積以下、舷側板二段・漕ぎ手が二列並びの大型板綴船は65.4石～300石積と推定され、舟形土製品(アヨロ2a式期：弥生中期前葉)は「小型板綴船」より簡単な構造の準構造船、土器絵画(円刺群Ⅷ期：古墳後期)は「小型以上の板綴船」であったと考えられる。海路については、続縄文文化人は弥生時代後期には富山県～石川県の北陸中部沿岸までを、南方の活動海域にしていたと考えられる。

**【第Ⅸ章の要約】** 続縄文墓制について、その構造・副葬品を通じて階層差に言及した。階層から階級への変化は経済的側面(分業・貯蔵・分配という仕組み)が威信的側面を侵蝕する過程であるから、階層差の発生は経済的側面の評価による。よって墓制を分析する際には交易・生業からの視点が必要であると考えた。1～2節では、墓の構造・葬法・副葬品に

ついて、普及率は普及度合の高低を示す普及率(=普及数:例数/当該期墓坑総数の百分率)、希少・寡占・皆有性を示す最低出現数(=例数/推定遺跡総数)によって評価した。その結果、階層を示す可能性がある構造・葬法はアヨロ 1~2a 式期の南川葬法で、階層を示す可能性のある副葬品は魚形石器・サメ歯・鉄鏃・アヨロ 1~後北 C<sub>1</sub> 式期の鉄製品である。他の属性は、遺跡ごとに選択されるので、階層差が生じていたとしても一部地域の遺跡ごとに異なる程度である。続縄文の墓制は階層より広範な“文化”変容を示していた。そして、副葬品ごとの集積度合いを示す集積偏差(=最多個数/平均個数)と副葬品ごとの副葬量の偏りを示す副葬量偏在度(平均個数×2 以上の例数)によって、交換財としての副葬品を評価した。その結果、高独占×低集積~高集積される副葬品には移入威信財かつ上位広域交換財があり、中程度の独占×高集積される副葬品には移入実用財かつ上位広域交換財と自製威信財かつ下位広域交換財がある。

3 節では瀬川の提唱した「多副葬墓」について検討した。瀬川は剥片石器・琥珀玉と碧玉製管玉・ガラス玉・鉄製品を一括して富の指標とするが、そうではなく、大部分の副葬品は一時期の流行を示しており、富=階層の指標という性格を一定に備えない。「多」の副葬品が必ずしも階層を示していないことから「厚葬・薄葬」を使うべきだとした。多頭的階層社会の有無については続縄文前中葉のアヨロ 1~3a 式期の 4 型式間においてはその可能性がある。以上より続縄文における階層差は一部地域の遺跡ごとに異なる程度で、続縄文前中葉の一時期においては多頭的階層社会が道南部・道央部にあった可能性が結論された。合葬・追葬・改葬からみると血統による階層は 2 世代(約 60 年間)持続されたと想定されるが、墓制に関わる“文化”変容の単位は血統よりやや長い 4~5 世代であることから、これを階層の継続期間と考える余地もある。

## 2 総括

1) 考古学的実体にそなわる属性の変容について分析するには、情報再生における場の共有関係の濃淡を表す 3 属性を用いることが有効である。

2) 属性変容の原因は、「3 属性」と「2 関係」の組み合わせの差異により再生精度に相違が生じることによる。

3) 属性変異の内容には 5 つの型があり、さらに「2 関係」が「授け手-受け手かつ転移元-転移先」である場合には変容 S1~S5 と変容 T1~T5 が生じる

4) 「変則的/逸脱的森林性新石器文化」から「続縄文」「北海道型(?) 続縄文」への移行は地域ごとに異なりかつ後戻りできる階梯であるので、道東は「逸脱継続型」、道南・道央は「変則回帰型」である。そして、「逸脱継続型」「変則回帰型」はほとんど「森林性新石器文化 technocomplex」的状况といえることから、縄文・弥生と同位ではあるが別系統の文化区分としてよい。

5) 「逸脱継続型」「変則回帰型」の生業は自然環境が極性を帯びる時期であっても多様性を維持する。その背景には「中川モデル」にいう狩猟採集の柔軟性があり、「生業の特化」はその多様性に裏打ちされていた。生業のうちには生業成果の配分を調整する「域内交易」、自製・獲得不可能な非現地性物資(上位の広域交換財)を求める「渡海交易」が含まれている。

6) 利器の鉄器化の進行と準構造船の大型化により「渡海交易」が盛んになって文化変容をおこす。北海道では道南・道央・道東という伝統的領域が解消され、東北北部においては



北海道続縄文人の定住が起こる。

7) 続縄文における行動様式と行動領域は以下である。属性転移は Clarke の「文化」の中規模で起こる現象で、生業の特化は Clarke の「文化」の大規模で起こる現象といえる。「季節的超広域移動」の領域=渡海交易の範囲は Clarke の「文化群」の最大値にあたり、「季節的超広域移動」の領域は「逸脱継続型」「変則回帰型」の範囲を越えて本州に及ぶ。

8) 続縄文の階層差は一部地域・遺跡ごとに異なり、血統で維持された場合は2世代、別の仕組みによって維持された場合は、それを墓制に関わる“文化”変容とみなすと4~5世代との想定ができる。

## 2 節 今後の展開

### 1 生じた課題

以上の分析方法が妥当である場合においても以下の課題があげられる。

時間区分の単位が大きすぎる場合があることが第一の問題である。端的に現れているのが墓制における「期」の設定である。また、型式一つ一つの時間量が異なるために「期」時間幅が等しく設定できなかった。V章で行った型式論的細分に時間を与えて、それらを調整する作業が必要となる。

道南・道央・道東という地域区分は概略を把握するのには問題がないものの、異なる区分あるいはより細かい区分によってより詳細な領域間交渉が見いだせる可能性がある。

後北 C<sub>2</sub>・D 式期以降に伝統的領域が解消され単一的な文化領域が形成されたと見受けられるが、オホーツク文化が現れたことにより再び複数領域が発生した。「逸脱継続型」「変則回帰型」に変化はないのか。所謂北大式とオホーツク式との間に属性交換が行われていることがほかの遺物・遺構にはどのようにあらわれているのか。

### 2 続縄文以降に係わる課題

続縄文は次期の擦文文化～アイヌ文化にも大きな影響を及ぼすものである。本論の最後に2つの展開方向を提示したい。ひとつは擦文文化の系統、もう一つは「仔熊飼育型熊送り」の系統、である。

#### a 擦文文化の系統

擦文文化はおおよそ3つの要素群から成り立っていて、①:続縄文化から引き継ぐ要素、②:東北北部から新たに受け入れた要素、③:オホーツク文化からの要素(続縄文並行期から少しずつ始まった)、で構成される(2007a)。

①:擦文文化はその当初において続縄文化から引き継ぐ要素がある。擦文土器には小形化した注口・片口が組成にあり、続縄文以来の使用方法が擦文期初期に変容して擦文末期まで継続していた(鈴木 2018b)、墓制に関しては墓坑の上屋を支持する柱穴様土坑(表出的属性)が8世紀中葉まで、袋状土坑・置き礫(内在的属性)が8世紀中葉～9世紀前葉まで、側臥屈葬(内在的属性)が9世紀前葉まで続く。

②:擦文文化の特徴は雑穀農耕の本格的な開始である。表 X-1 は炭化種子・花粉の検出された8世紀代初期集落の事例で、内陸・海岸の両例があり、表のような組み合わせが新出

表 X-1 8 世紀代の炭化雑穀・花粉

	遺跡名	遺構名	付属遺構名	オオムギ	コムギ	アワ	キビ	ヒエ属	ソバ
8世紀前半	丸子山	I H5	竈				○		
	三角山D	1号住居	竈付近						花粉
	K435	HP11	竈				○		
8世紀後半	K435	HP12	竈		○	○	○		
	K435	HP13	竈			○	○		
	K518	HP04	竈			○	○		
	K518	HP05	竈			○	○		
	C504	HP01	竈			○	○	○	
	C507	HP03	竈			○			
	柏木川4	KH-2	竈				○		
	柏木川4	KH-3	竈			○	○		
	オサツ2	SH4	焼土(上層)			○	○		
	へロカルウスE	HP-2	床面	○			○		
	へロカルウスE	HP-3	竈			○			
	へロカルウスE	HP-4	床面	○					
	鶴野2	住居址	床面上						花粉

\*8世紀代の集落25か所のうち、11 か所でフローテーションを行う。

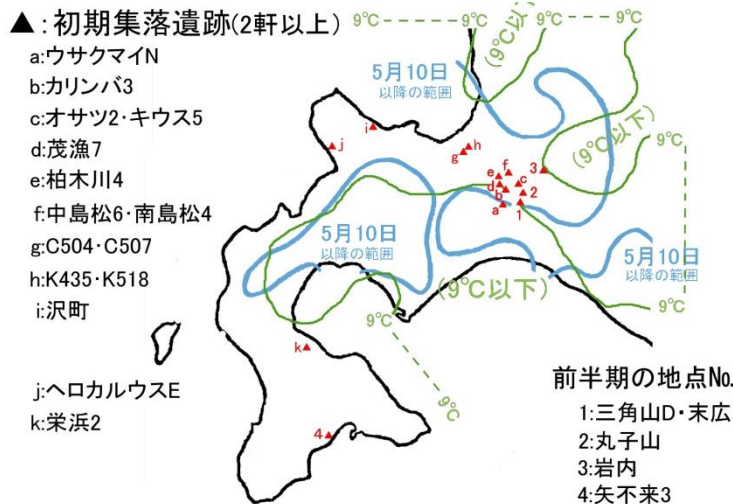


図 X-1 8 世紀代の集落分布 鈴木 2016 引用

雑穀農耕の導入は、続縄文期に東北部に移住した北海道続縄文人の後裔が農耕文化複合(雑穀、紡績、竈など住居様式、袖珍・小型の片口を使用)を携えて馬淵川流域・三陸沿岸から少数北海道に帰還したことによる(鈴木 2007a・2009b・2011c・2016c・2018b)。また、擦文の開始:8世紀初頭は波頂 F からの温暖回復期の始まりにあたり、8世紀半ばは擦文期の最高温期である(図 III-3-1~4、図 III-10 参照)。貝化石・出土魚骨・樹木花粉にその傾向が表れていた(III章 3 節参照)。雑穀農耕の導入の最適期である。なお、初期集落前半期:8世紀前半が千歳川水系に偏っていることは、VIII章 4 節で述べたように石狩低地帯の地勢に一因があると考えられる。

③: いっぽうで、オホーツク文化刻文期からある裸性オオムギ短粒タイプは、11世紀以降には道央の擦文文化の遺跡から出土するようになる(吉崎・椿坂 2004)。雑穀栽培におい

する。これらには、最低発芽気温が低いオオムギ・コムギ(0~4℃、秋播き)と最低発芽気温がやや高いアワ・キビ(4~7℃、春播き)があり、両者が組合わさる例と後者のみ例がある。

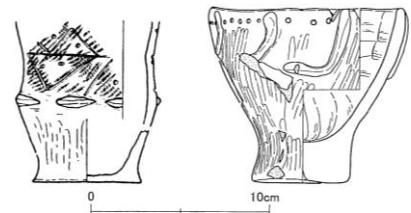
オオムギ・コムギは耐寒性が後者よりあり、越冬するので、アワ・キビの栽培にあう状況が十分条件となる。具体的には等温線であり、播種に係する霜終日の等日線が初期集落の分布と相関する(図 X-1)。1979~1987年の5月上旬平均気温における9℃の等温線や平年の霜終日5月10日の等日線とほぼ一致する。この気象に近似する地域は馬淵川流域~三陸中部であり、8世紀代の馬淵川流域ではコメがあること(既に砂沢式期の八戸市八幡遺跡には表 X-1のソバを除く種類とコメがある)を除いては同じ組成である。冷涼な気候における栽培技術が確立しているこの地域からの技術移転であったと考えるのが最も整合的である。

てオホーツク文化からの要素を擦文文化が受容したことを示し、この裸性オオムギは厚真町厚幌<sup>あっぱろ</sup>1 遺跡に13世紀前葉の例があることから(吉崎・椿坂 2004)、アイヌ文化期に及ぶ時期まで道央においては裸性オオムギ短粒タイプの栽培方法が伝承されたことを示している。

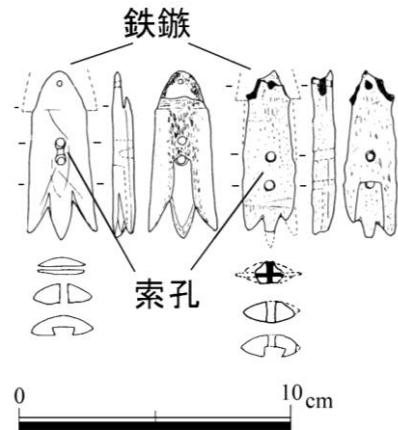
5章6節3項より、鈴木の後北C<sub>2</sub>・D式・新<sub>2</sub>(所謂モヨログループ)はオホーツク式群の十和田式と一定的に属性交換をしている。また、オホーツク式の分布域から外れる道央部においてもオホーツク式の十和田～刻文からの文様属性を受容した融合型の円形刺突文土器が円刺群IV～VI期群期にあり、札幌市C544遺跡からは円刺群VI～VIII期とホーツク式刻文・型押文・爪形文・指圧式浮文や摩擦式浮文の破片が出土している。そして、円刺群土器の帯縄文の消滅と並行する光沢のあるナデの盛行はオホーツク式からの影響と考えられる。**図X-2**の左は江別市町村農場1遺跡出土の北大IIc深鉢:円刺群VIII期、右は札幌市C544遺跡出土の円形刺突文c～eの高坏:円刺群VI～VIII期に同定される。これらの外面には断続する貼付文がある。この貼付文は熊木の貼細系文様の「貼短」に類似し、「貼短」は熊木の刻文後半期～沈線文前半期に付される文様である(熊木 2018)。札幌市C544遺跡からは住社式後半～栗圀式前葉の高坏や住社式坏が出土していることから、**表I-1**で表した円刺群VI～VIII期=住社式→6世紀前葉～後葉、円刺群IX～X期=栗圀式前半→7世紀前葉～中葉は妥当であり、刻文期=円刺群VI～VIII期、沈線文期前半=円刺群IX～X期も同様である。6世紀前葉～7世紀前葉にかけてオホーツク式と円刺群土器は一定的に属性交換をしている。ただし、類例が少ないこと、表出的属性の交換であることから融合型式は生じなかった。

その後擦文文化期に入ると道北では「元地式」、道東では「トビニタイ式」が擦文+オホーツクの融合型式として発生する。両者は擦文式と分布域を交えながら存在するのだが、トビニタイ文化の土器製作をみると、擦文的作技術への同化は施文・調整には及ばない程度の表面的なものである(大西秀之 1996)。トビニタイ文化は表面的に同化を受け入れることで、擦文文化と融合し道東西半の内陸へと広がる。

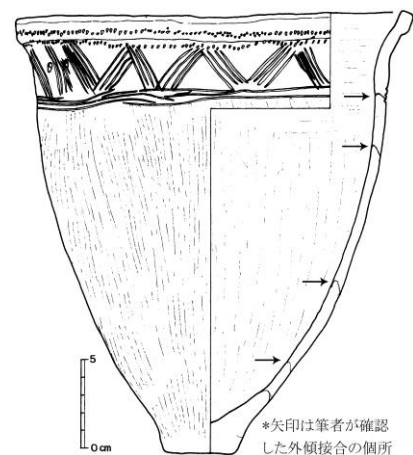
いっぽうで、トビニタイ文化の所産である「オタフク岩タイプIII(開窩式・縦位索孔・三尾・鉄鏃着装):**図X-3**」の銚先の尾部・索孔が道央以西の擦文文化でも導入される(石川直章 1998)。トビニタイ文化圏と擦文文化圏が重なる根室海峡・野付水道沿岸の晩期前半(11世



**図X-2 オホーツク式の属性を受容した所謂北大式** 左:江別市教委 1996 右:札幌市教委 2012引用



**図X-3 オタフク岩 typeIII**  
石川 1998 引用



**図X-4 外傾接合の擦文式**  
北埋文 2002b 引用

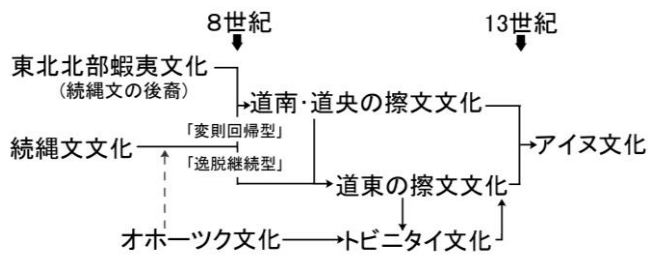


図 X-5 文化の系統

市穂香遺跡では外傾接合がほとんどで中立少し、がある(鈴木 2004c・2007a)。表面的には擦文化しているが、内在的屬性である粘土紐の接合面の傾きがオホーツク文化由来の外傾接合であることから、この地域の擦文土器の作り手はオホーツク文化を内在させていた可能性が高い。道東の一部においては擦文文化の終焉までオホーツク-トビニタイ文化が沈潜して残っていたと考えることができる。

このように続縄文文化とオホーツク文化と擦文文化は分枝・融合を繰り返す網状進化のかたちをとって変容している。

**b 「仔熊飼育型熊送り」の系統**

「仔熊飼育型熊送り」については、アイヌ文化の「仔熊飼育型熊送り」はオホーツク文化とつながるが、縄文時代のクマ信仰は円形・刺突文土器群期に断絶していること、「動物形」の変形がクマ信仰の変質を示していること、を言表し(鈴木 2007b)、これに対する誤解(瀬川 2009b)にも答えた(鈴木 2011)。研究史上の問題点①:「擦文文化に仔熊飼育型熊送りの痕跡が確認されていないのに、擦文文化→アイヌ文化という系譜は成立するか」、②:「続縄文文化人の動物に対する信仰変化は起こったか」をより正確に言表する

表 X-2 考古学的に確認されたクマ信仰 鈴木 2007b

	東北北部	北海道			樺太	アムール河口
		渡島半島	石狩低地帯	道東北		
近世/近世アイヌ文化	●	●■	●■	●■	▲●■	●■
中世/中世アイヌ文化	—	—	—	—	—	—
古代/擦文文化/オホーツク・トビニタイ	—	●	●	●■	—	—
古墳時代/続縄文・後葉/オホーツク	—	★(●)	★(●)	(●)■	—	—
弥生時代/続縄文・前中葉	▲★(●)	▲★(●)	▲★(●)	▲★(●)	( )	( )
縄文時代	▲★(●)	▲★(●)	▲★(●)	▲★(●)	( )	( )

▲:熊意匠、★:イノシシ飼い、●:狩熊送り、■:仔熊飼送り、続縄文後葉:後北C<sub>2</sub>・D~所謂北大式期

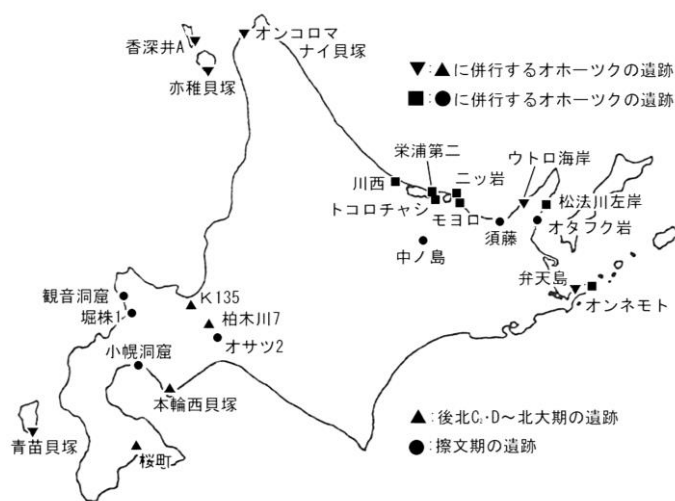


図 X-6 後北 C<sub>2</sub>・D~擦文期のヒグマ出土遺跡 鈴木 2007b

紀中葉~12世紀後葉)の擦文式にはトビニタイ文化の成形技法が多々見られる。粘土紐の接合面の傾きが、常呂川流域の遺跡群(栄浦第二・岐阜第二・ワッカ)では内傾接合がほとんどで外傾接合が少し、標津町伊茶仁チシネ第2遺跡では外傾接合、根室

跡が確認されていないのに、擦文文化→アイヌ文化という系譜は成立するか」、②:「続縄文文化人の動物に対する信仰変化は起こったか」をより正確に言表する

べきであった。

まず、①「擦文文化→アイヌ文化という系譜は成立するか」。擦文文化成立に影響を与えた東北北部の古代蝦夷には仔熊飼育型熊送りがみられない。くわえて、東北北端の近世(津軽・南部藩領内の「えぞ」)にも仔熊飼育型熊送りがみられない。アイヌ文化成立時における東北北端からの系譜は考えられない。擦文文化において「狩熊送り」は少数例(トビニタイ文化圏で

は羅臼町オタフク岩遺跡、トビニタイ文化圏以外では泊村堀株1遺跡<sup>ほりかぶ</sup>：表X-2、図X-6)があるが、仔熊飼育型熊送りは未だ確認されていない。オホーツク文化には「仔熊を飼育して送ること・屋内に頭骨を安置すること」があり、後継のトビニタイ文化では「屋内祭祀から屋外祭祀へ」の変化があった(鈴木 2007b)。

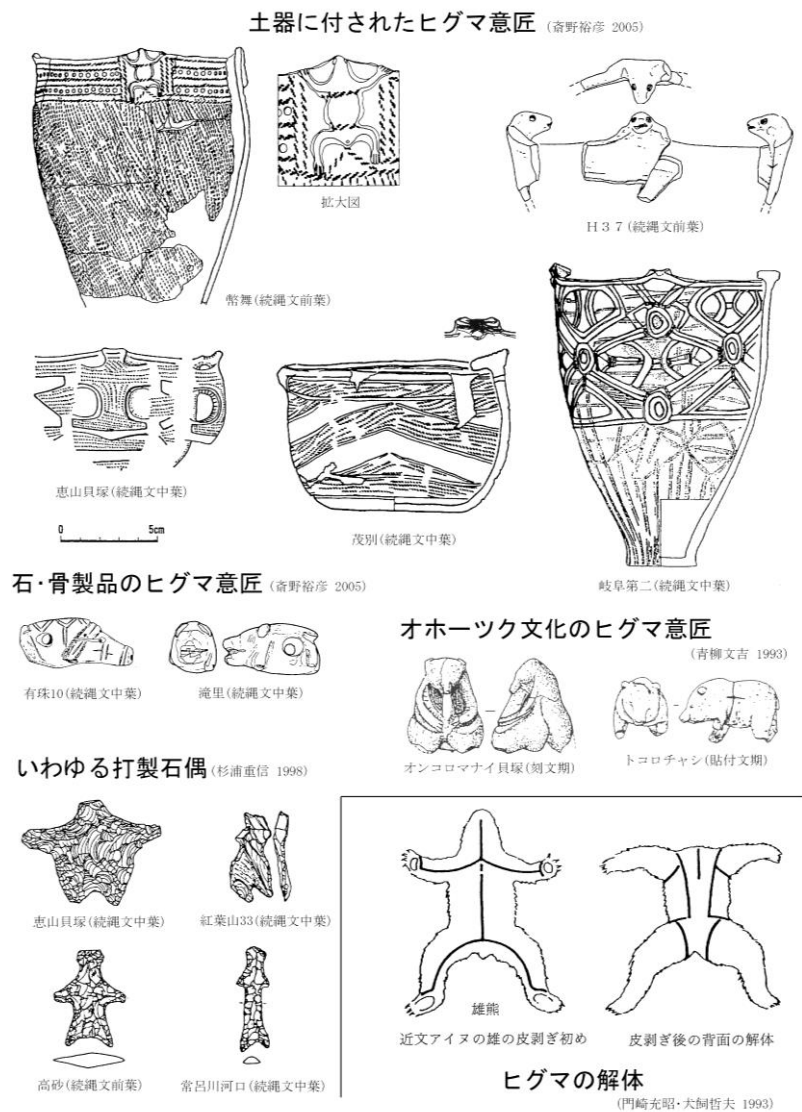
いっぽうで、礼文島香深井A遺跡出土のヒグマ骨の死亡年齢・DNAと現棲ヒグマから、オホーツク文化人と円刺群VI～XI期の続縄文文化人とのあいだに仔熊飼育型熊送りのための仔熊交易があったとの推定がある(天野 2003)。これらより、「仔熊飼育型熊送り」はオホーツク文化→トビニタイ文化へはつながる。

以上より、アイヌ文化の「仔熊飼育型熊送り」の祖形は、オホーツク文化→その後のトビニタイ文化に求められること、根室海峡・野付水道沿岸の擦文文化には沈潜したオホーツク文化がそなわること、先に述べたようにトビニタイ文化圏から全道への文化拡散が確認できることより、少なくとも「オホーツク文化→道東擦文文化へ」は成立する。そして、仔熊交易の関係があるとすれば、擦文文化の直前の続縄文文化人は儀礼維持に協力したことになり、道南・道央の擦文文化人についても仲介交易を行うためにオホーツク文化の儀礼の維持に協力していた可能性がある。

続縄文文化人・擦文文化人はオホーツク文化・トビニタイ文化の「仔熊飼育型熊送り」を理解して、受容可能な状態であった。

つぎに、②「続縄文文化人の動物に対する信仰変化は起こったか」について、イノシシとクマの関係を以下に再述する。

イノシシは縄文後期以降に北海道では食料確保・狩猟対象・狩猟儀礼以外の目的で移入し短期間飼育したと考えられる(図I-1右、表VII-4参照)。ヒグマ焼骨は幼獣例・頭骨例は少ないが晩期末葉以降は頭骨例が多くなり、後期中葉～続縄文中葉に



図X-7 ヒグマ意匠・ヒグマの解体 鈴木 2007b

においてはヒグマ焼骨とイノシシ焼骨の供伴は半ばありふれた事象(24/45 例、表Ⅶ-4 参照)となる。ヒグマの飼育は齢不詳の事例が多いため確証はないが、幼獣例・焼骨供伴例があるので仔猪飼育と関係した仔熊飼育の可能性は残される。そして、イノシシとクマはともに、焼骨・意匠遺物(図Ⅹ-2)・牙製装飾品(表Ⅹ-8)があるので続縄文中葉までは生き物(=全的存在、動物霊)としてとして信仰されていた。

ただし、イノシシは交易の移入品で鉄器が富の象徴となるとイノシシは象徴の役割を終える。続縄文後葉のクマ皮は移出品であり、クマ焼骨には幼獣例が少ないことから親クマは狩猟によって、仔クマは付随的に遺跡に持ち込まれていた可能性が高い。両者を「飼育する獣」の霊と「主に狩猟する獣」の霊とに扱い分ける認識がある。

北海道では旧常呂町岐阜第二遺跡ピット 28 出土の後北 C<sub>1</sub> 式深鉢を最後にヒグマ具象が消滅するので、後北 C<sub>2</sub>・D 式期にはヒグマを全的存在として信仰しなくなり、円形・刺突文土器群期にはヒグマ焼骨 - イノシシ焼骨の供伴例がなくなるので、ヒグマ - イノシシ信仰の結合が解けてヒグマ信仰が残った。トビニタイ文化にも具象が見られないことから後北 C<sub>2</sub>・D 式期以降の続縄文文化や擦文文化と同様の状況であったと推定される。後北 C<sub>2</sub>・D 式期以降の続縄文文化においてはそれ以前と異なり、オホーツク文化の「仔熊飼育型熊送り」を理解していて、受容可能な状態であった。

全的存在ではないとは死物ということである。黒曜石製石偶が「動物形」とあるという見方がある(斎野 2005)。筆者も獣皮 = 開き = 平面化 = 解体の表現と考える(図Ⅹ-7 右下)。また、死物は毛皮と肉の分離が常態となることでもある。そのことにより、生き物としてのヒグマを具象化する信仰(「全的存在動物霊」の信仰)を不振にさせた。より深刻なのは、分離した信仰対象の一部(毛皮・胆)が異人(オホーツク・トビニタイ文化人にとっては続縄文・擦文文化人、続縄文・擦文文化人にとっては蝦夷・倭人)に渡ることへの葛藤であった。ただし、前述した他の文化現象から推し量るとトビニタイ文化人は擦文文化人をまったくの異人と見なしていない様である。

最後に信仰の仕組みについて仮説を提示し、その背景を述べることで立説の根拠とする。信仰の維持には、信仰対象が分裂することで神格を失わない構造、信仰対象の一部が信仰を異にする異人にわたることへの合理的説明、が必要となる。つまり、「ヒグマの精神(神格)と肉体の分離(毛皮・胆の分離)、神格のみの循環 = 富根源の循環、神から人への肉・毛皮の贈与」という信仰体系化(宗教的合理化)確立である。くわえて、富と富の根源を分けることで、神と人の間に循環する仕組み、異人へつながる非循環の仕組み、がそろう。

また、宗教的合理化の必要は以下の要因による。毛皮と鉄器の交易は、個人財の差につながり集団内・集団間の不安定要因でもある。個人財の分配と友好のために祝祭が必要であり、祝祭のテーマは個人財の偏在の原因 = ヒグマでなければならない。そして仔熊飼育型熊送りでなければならない理由は、ヒグマを飼育・入手する過程そのものが富(威信)を象徴するからである。それは、仔熊交易に現れている。

# 引用文献





## 【あ】

- 相沢清利 2002「東北地方における弥生後期の土器様相」『古代文化』54-10 古代学協会  
47-62 頁
- 青木繁信 2018『おしゃべりな部屋』//aoki2.si.gunma-u.ac.jp /exact/fisher.cgi  
(最終閲覧日 2018年6月13日)
- 青野友哉 2005「小牧野遺跡出土の縄文土器」『葛西勳先生還暦記念論文集』  
葛西勳先生還暦記念論刊行会 455-462 頁
- 青野友哉 2011「縄文文化と弥生文化」『講座日本の考古学』5 青木書店 522-545 頁
- 青野友哉、大島直行 2003「恵山文化と交易」『北海道の古代』2 北海道新聞 10-29 頁
- 青森県 1999『隠川(11)遺跡Ⅰ 隠川(12)遺跡Ⅱ』同教育委員会
- 青森県 2005『青森県史 資料編考古』3 青森県 1-315 頁
- 青森県 2003「海運の発達と流通」『青森県史 資料編近世』4 青森県 229-287 頁
- 青森市 2006『小牧野遺跡』同教育委員会
- 赤石慎三 2001「縄文時代晩期後葉から縄文時代初頭の突瘤土器について」  
『所報』3 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 19-30 頁
- 明石茂生 2005「気候変動と文明の崩壊」『経済研究』196 成城大学 37-87 頁
- 市立旭川郷土博物館 1976『市立旭川郷土博物館所蔵目録』同博物館 1-51 頁
- 天野哲也 1981「土器群の型式学的変化」『香深井遺跡』下 東京大学 317-323・326 頁
- 天野哲也 2003『クマ祭りの起源』雄山閣 1-174 頁。
- 天野哲也、小野裕子 2011「オホーツク集団と縄文集団の交流」『海峡と古代蝦夷』  
高志書院 27-34 頁
- 厚真町教育委員会 2011『オニキシベ2遺跡』同教育委員会
- 阿部芳郎 1999「精製土器と粗製土器」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』9  
帝京大学山梨文化財研究所 265-284 頁
- 雨宮瑞生 2009「定住化とその要因」『縄文時代の考古学』8 同成社 36-45 頁

## 【い】

- 五十嵐八枝子、高橋伸幸 1985「北海道中央高地、大雪山における高地湿原の起源とその植生  
変遷(Ⅰ)」『第四紀研究』24-2 第四紀研究会 99-109 頁
- 石井謙治 1995「古代船の復元」『和船Ⅱ』法政大学出版局 237-243 頁
- 石井 淳 2005「札幌市内の遺跡分布からみた縄文時代の土地利用法」『海と考古学』  
六一書房 141-16 頁
- 石狩町教育委員会 1976・1977『ワッカオイⅡ・Ⅲ』同教育委員会
- 石狩町教育委員会 1979『SHIBISHIUSⅡ』同教育委員会
- 石狩町教育委員会 1984『紅葉山33号遺跡』同教育委員会
- 石川 朗 2004「石器 石製品 - 道東・道北」『考古資料大観』11 小学館 277-334 頁
- 石川日出志ほか 2005『関東・東北弥生土器と北海道縄文土器の広域編年』石川日出志
- 石川日出志 2006「下老子笹川遺跡出土の天王山遺跡がもつ意義」  
『下老子笹川遺跡発掘調査報告』同財団 322-326 頁
- 石川直章 1998「回転式銚先考」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行会 293-313
- 石附喜三男 1973「江別式土器の終末年代と所謂北大式土器(一)」『札幌大学紀要』5

札幌大学 33-44 頁

石巻市教育委員会 2003『新金沼遺跡』同市教育委員会

石本省三 1984「北海道南部の縄文文化」『北海道の研究』1 清文堂 319-354 頁

伊東信雄 1950「東北地方の弥生式文化」『文化』2-4 東北大学文学会 40-64 頁

伊東信雄 1955「東北地方の弥生式文化」『日本考古学講座』4 河出書房 112-118 頁

今村啓爾 1983「文様の割り付けと文様帯」『縄文文化の研究』5 雄山閣 124-150 頁

今村啓爾 1999『縄文の実像を求めて』吉川弘文館 1-216 頁

今村啓爾 2014「世界史における縄文文化の位置づけ」『日本の考古学』4 青木書店  
652-669 頁

今村峯雄、藤尾慎一郎 2009「炭素 14 の記録から見た自然環境変動」『弥生時代の考古学』2  
同成社 47-58 頁

乾芳 宏 1987「北海道日高における縄文晩期土器群について」私家版 1-17 頁

乾芳 宏 2002「天内山遺跡出土の縄文土器について」『余市水産博物館報告』5 15-22 頁

## 【う】

上野秀一 1974「6-3 土器群について」『札幌市文化財報告 V-N162 遺跡』札幌市教育委員会  
91-99 頁

上野秀一 1982「石器」『縄文文化の研究』6 雄山閣 115-127 頁

上野秀一 1987「3 章 1 節 VII 群」「まとめ」『K135 遺跡』札幌市教育委員会 176-190・311-314 頁

上野秀一 1992「北海道における天王山式系土器について」

『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会 763-808 頁

上野秀一 1994「北海道縄文文化の諸問題」『北日本縄文文化の実像』縄文文化検討会  
12-22 頁

臼杵 勲ほか 2007 『北海道における古代から近世の遺跡の暦年代』  
研究代表者 臼杵 勲 48-54 頁

宇田川洋 1982「道東の縄文土器」『縄文土器大成』5 講談社 124-126 頁

内山真澄 1998「縄文期における石鏃の変化」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会  
167-179 頁

宇部則保 2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』  
市川金丸先生古希を祝う会 247-256 頁

宇部則保 2007「青森県南部～岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流  
の研究』研究代表者 辻 秀人 260～284 頁

浦幌町教育委員会 1975『十勝太若月遺跡』同教育委員会

## 【え】

江坂輝弥 1950「縄文式文化について」『歴史評論』4-5 歴史科学協議会 84-95 頁

江坂輝弥 1957「奥羽地方北部の縄文文化の問題」『貝塚』63 東京考古学会 1-2 頁

恵庭市教育委員会 1981『柏木 B 遺跡』同教育委員会

恵庭市教育委員会 1995『ユカンボシ E7 遺跡』同教育委員会

江別市教育委員会 1979『江別太遺跡』同教育委員会

江別市教育委員会 1996『町村農場 1 遺跡(6)』同教育委員会

江別市教育委員会 1981『元江別 1 遺跡』同教育委員会

江別市教育委員会 1981・1983ab・1984・1985・1986『旧豊平河畔』同教育委員会

江別市教育委員会 1994『大麻 22 遺跡』同教育委員会

江別市教育委員会 2000『大麻 3 遺跡』同教育委員

えりも町教育委員会 2000『油駒遺跡』同教育委員

## 【お】

大井晴男 2004『アイヌ前史の研究』吉川弘文館 35-211 頁

大坂 拓 2007「恵山式土器の編年」『駿台史学』130 明治大学 53～82 頁

大坂 拓 2010「続縄文時代前半期土器群と本州島北部弥生土器の並行関係」

『北海道考古学』46 北海道考古学会 89～104 頁

大坂 拓 2011「後北式土器拡散開始期における集団移動の様相」『考古学集刊』7

明治大学 39～60 頁

大坂 拓 2013「後北式土器再論」『北海道考古学』49 北海道考古学会 51～68 頁

大坂 拓 2015「北海道(南部・中央部)」『弥生土器』ニューサイエンス社 447～473 頁

大島直行 2004「装身具」『考古資料大観』11 小学館 328-334 頁

大谷清隆 1981「噴火湾の物理環境」『沿岸海洋研究ノート』19-1

日本海洋学会沿岸海洋研究部会 68-80 頁

大塚和義 1995『アイヌ 海浜と水辺の民』新宿書房 124 頁

大塚達朗 2017「山内清男の縄文文化モデルの難点」『アルケイア』11 南山大学 85-116 頁

大場利夫 1959「北辺の先史文化、縄文文化以後の問題、続縄文文化」『世界考古学体系』1

平凡社 136-138 頁

大場利夫 1961「北海道、縄文文化」『日本考古学講座』3 河出書房 80-90 頁

大西秀之 1996「トビニタイ文化圏における擦文式土器の製作者」『古代文化』48-5

古代学協会 87-99 頁

大沼忠春 1968「北海道東部の北大式土器」『若木考古』92 国学院大学 1-5 頁

大沼忠春 1977「北海道考古学講座 6」『北海道史研究』12 北海道史研究会 68-80 頁

大沼忠春 1980「続縄文文化」『北海道考古学講座』みやま書房 127-150 頁

大沼忠春 1982「後北式土器」『縄文土器大成』5 講談社 127-129 頁

大沼忠春 1985「魚骨文の新例について」『北海道考古学』21 北海道考古学会 127-129 頁

大沼忠春 1986「北海道における縄文晩期から続縄文文化への変遷」

『昭和 61 年度大会発表要旨』日本考古学協会 10-16 頁

大沼忠春 1989a「続縄文式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館 240・357-360 頁

大沼忠春 1989b「北海道の文化」『古代史復元』9 講談社 174-184 頁

大沼忠春 2008「幣舞式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション 700-707 頁

大場利夫、千代肇 1966「周辺地域の情勢、北海道」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房新社

378-391 頁

小樽市教育委員会 1990『蘭島餅屋沢遺跡』同教育委員会

小樽市教育委員会 1991『蘭島 D 遺跡』同教育委員会

小野裕子 2011「続縄文後半期の道央地域の位置について」『海峡と古代蝦夷』高志書院

77-121 頁

小野裕子 2017「続縄文後半期の東北地方と北海道の関係について」『古代国家と北方世界』

同成社 140-165 頁

小野有五、五十嵐八枝子 1991『北海道の自然史』北海道大学図書刊行会 1-219 頁

小畑弘己 2016『タネをまく縄文人』吉川弘文館 1-217 頁

音更町教育委員会 1986『相生』同教育委員会

音別町教育委員会 1986『ノトロ岬』同教育委員会

### 【か】

科学技術庁資源調査会 1996『四訂 食料成分表』柴田書店 46 頁

川幡穂高 2016「日本人と日本社会が経験した気候・環境」『科学』87-2 岩波書店  
149-152 頁

川幡穂高 2018「日本人と日本社会が経験した気候変動」『北海道の縄文人の登場』  
北海道考古学会 5-11 頁

### 【き】

菊池徹夫 1982「恵山式土器」『縄文土器大成』5 講談社 119-123 頁

北川浩之 1995「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」『文明と環境』6 朝倉書店  
47-55 頁

紀藤典夫ほか 1998「対馬海流の脈動と北海道における完新世の温暖化化石群集の変遷」  
『第四紀研究』37-1 第四紀研究会 25-32 頁

木村 高 2018「大洞 A 式と砂沢式土器」『亀ヶ岡文化論の再構築』雄山閣 120-124 頁

木村英明 1975『続縄文時代の墓壙群の研究』石狩町教育委員会 1-78 頁

木村英明 1976 年「続縄文時代の生産用具」『どるめん』10 JICC 出版 17-32 頁

木村英明 1985『いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的研究』木村英明 1-26 頁

木村英明 1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31 北海道考古学会 3-63 頁

木村龍治 2017「対流圏の気温減率はなぜ 6.5K/km なのか」『天気』64-3  
日本気象学会 147-156 頁

ギャンブル・クライブ/田村 隆 訳 2004『入門現代考古学』同成社 1-356 頁

### 【く】

工藤研治 2004「土器 土製品」『考古資料大観』11 小学館 153-164 頁

工藤研治 2004「石器 石製品-道南・道央」『考古資料大観』11 小学館 277-228 頁

工藤竹久 1987「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72-4  
日本考古学協会 39-68 頁

工藤雄一郎 2004「縄文時代の木材利用に関する実験考古学的研究」『植生史研究』12-1  
15-28 頁

工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社 1-373 頁

熊木俊朗 2001「後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学  
176-203 頁

熊木俊朗 2003「道東北部の続縄文文化」『北海道の古代』2 北海道新聞 50-69 頁

熊木俊朗 2007「道東と道央部以南との比較」『科学研究費補助金基盤研究(B)(2)北海道に  
おける古代から近世の遺跡の暦年代』研究代表者 白杵勲 52 頁

熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター 1-321 頁

熊野純男、五十嵐八枝子 1990「北海道日高地方海岸段丘地帯における斜面崩壊の発達史と

その古環境』『第四紀研究』29-4 第四紀研究会 319-336 頁  
国木田大 2015a「湧別市川遺跡の放射性炭素年代測定と炭素・窒素同位体測定、C/N 比分析」  
『日本列島北辺域における新石器』湧別市川遺跡調査チーム 78-84・143-146 頁  
国木田大 2015b「14C 年代測定、炭素・窒素同位体」『東京大学考古学研究室紀要』29  
東京大学考古学研究 121-146 頁  
クラーク・グラハム/小淵忠秋 訳 1989『中石器時代』雄山閣 1-153 頁

## 【け】

ケブロン・ホーレス/西島照男 訳 1985『蝦夷と江戸』北海道新聞社 1-405 頁

## 【こ】

肥塚隆保・田村朋子 2012「古墳時代のガラス」『古墳時代の考古学』8 同成社  
132-141 頁  
ゴードン・チャイルド/ねず まさし 訳 1951『文明の起源(上)』岩波書店 1-171 頁  
河野広道 1933「北海道式薄手縄文土器群」『北海道原始文化聚英』犀川会 16-18 頁  
河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』岡書院 524-532 頁  
河野広道 1955「7-1 土器」『斜里町史』斜里町 315-330 頁  
河野広道 1958「4 章 1 節 土器」『網走市史』上巻 網走市 106-110 頁  
河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』23 北海道地学教育連絡会 27-42 頁  
河野広道、名取武光 1938「北海道の先史時代」『人類学先史学講座 6』雄山閣 p1-41  
河野広道 1952「北海道史の時代的区分(1)」『北方研究』北海道郷土研究会 35-41 頁  
合地信夫ほか 2005「縄文～続縄文時代における北海道中央部から東北地方への緑色・青色  
片岩製磨製石斧の流通」『日本考古学協会第 72 回総会 研究発表要旨』  
日本考古学協会 53-56 頁  
小泉 格 1987「完新世における対馬暖流の脈動」『第四紀研究』26-1 第四紀研究会 13-25 頁  
小泉 格 1995「日本列島周辺の海流と日本文化」『文明と環境』10 朝倉書店 12-22 頁  
国立歴史民俗博物館 2000「古代における北方交流史の研究 資料編」  
『国立歴史民俗博物館報告』84 同博物館 163-470 頁  
児玉作左衛門 1941「デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て」『北方文化研究報告』4  
205-235 頁  
小林達雄 1983「タイポロジー」『日本の旧石器文化』1 雄山閣 48-63 頁  
小林達雄 1985「縄文文化の終焉」『日本史の黎明』六興出版 231-253 頁  
近藤邦男ほか 2009「絶滅危惧種ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum* の汽水湖尾駱沼  
における空間分布と成長過程」『陸水学雑誌』69 日本陸水学会 237-245 頁  
近藤純正 2008「k41. 都市の温暖化量、全国 91 都市」// [www.asahi-net.or.jp/~rk7j-KNDU](http://www.asahi-net.or.jp/~rk7j-KNDU)  
(最終閲覧日 2018 年 8 月 2 日)

## 【さ】

斎藤邦雄 1993「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古』5  
岩手考古学会 1-26 頁  
斎藤 傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』19-5 古代学協会 77-84 頁  
斎藤瑞穂 2004「東北北部における弥生時代中期土器編年の再検討」『古代文化』56-8  
古代学協会 1-18 頁

- 斎野裕彦 2002「農具-石包丁・大型直縁石器刃・石鎌」『考古資料大観』9 小学館 184-189 頁
- 斎野裕彦 2005「東北における動物形度製品」『北奥の考古学』  
葛西勵先生還暦記念論文集刊行会 330-336 頁
- 榊田朋広 2009「北大式の型式編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』23 同研究室  
39-92 頁
- 榊田朋広 2016「北大式土器の編年と系統」『擦文土器の研究』北海道出版企画センター  
37-82 頁
- 阪口 豊 1995「過去 1 万 3000 年間の気候変化と人間の歴史」『文明と環境』6 朝倉書店  
1-12 頁
- 佐々木明 1994「内陸気候と水稲耕作北限」『内陸地域文化の人文科学的研究』I  
信州大学文学部 71-81 頁
- 佐々木藤雄 2005 「縄文と弥生、階層と階級」『異貌』23 共同体研究会 105-121 頁
- 佐藤達夫 1972「7-4 擦文土器の変遷について」『常呂』東京大学 462-488 頁
- 佐藤 剛 1998「北海道出土の「いわゆる赤穴式土器」について」『北方の考古学』  
野村崇先生還暦記念論集刊行会 277-286 頁
- 佐藤 剛 2011「北海道島道央部における続縄文時代初頭の土器群の時期区分について」  
『北方島研究』9 1-14 頁
- 佐藤 剛、石本省三、直江康雄、大泰司統 2000「北海道」『東日本弥生時代後期の土器編年』  
第2分冊 1052-1206 頁
- 佐藤由紀男 2006 「紀元前、灌漑方水稲農耕はなぜ津軽平野までしか波及しなかったのか」  
『考古学の諸相II』坂詰秀一先生古希記念会 999-1018 頁
- 佐藤由紀男 2016「磨製石斧の流通からみた紀元前千年期の北海道・東北部」  
『北方島文化研究』北方島文化研究会 1-18 頁
- 佐藤由紀男、宮田 明 2018 「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩性片刃石斧と三面  
石斧をめぐって」『考古学研究』259 考古学研究会 102-111 頁
- 佐原 真 1984「山内清男論」『縄文文化の研究』10 雄山閣 232-240 頁
- 札幌市教育委員会 1987 『K135 遺跡』同委員会
- 札幌市教育委員会 1987 『N295 遺跡』同委員会
- 札幌市教育委員会 1996 『H37 遺跡 丘珠空港内』同委員会
- 札幌市教育委員会 1998 『H37 遺跡 栄町地点』同委員会
- 札幌市教育委員会 1999 『N156 遺跡』同委員会
- 札幌市教育委員会 2004 『N30 遺跡』同委員会
- 札幌市教育委員会 2012 『C544 遺跡』同委員会
- 札幌市教育委員会 2016 『H508 遺跡』同委員会
- 澤 四郎 1963「I-V 考察」『阿寒町の文化財』2 阿寒町教育委員会 36-40 頁
- 澤 四郎 1982「北海道の続縄文土器」『縄文土器大成』5 講談社 114-118 頁
- 澤田寿子ほか 1999「サロマ湖東部ウルリントウ低地における完新世の環境変遷」  
『知床博物館研究報告』20 知床博物館 41-50 頁

## 【し】

- 設楽博己 2003「続縄文文化と弥生文化の相互交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』108

- 国立歴史民俗博物館 17-42 頁
- 設楽博己 2005 「側面索孔燕形銛頭考」『海と考古学』六一書房 299-330 頁
- 重野聖之ほか 2013 「北海道東部厚岸沿岸低地の完新世バリアーシステムと海水準変動の復元」『地質学雑誌』119-3 日本地質学会 171-189 頁
- 島義勇 1857 『入北記』複写 北海道立図書館蔵 1-4 頁
- 島田卓也、斉藤隆 2002 「野ネズミにとってドングリは本当に良いか」  
『平成 14 年度研究成果選集』森林総合研究所  
// www.ffpri.affrc.go.jp(最終閲覧日 2019 年 10 月 27 日)
- 嶋田智恵子ほか 2000 「珪藻分析に基づく南西オホーツク海の完新世古海洋環境復元」  
『第四紀研究』39-5 第四紀研究会 439-449 頁
- 白老町教育委員会 1980 『アヨロ』同教育委員会
- 市立旭川郷土博物館 1976 『市立旭川郷土博物館所蔵目録』V 同博物館 29・33 頁
- 【す】
- 末吉正成、末吉美喜 2014 『EXCEL ビジネス統計分析』翔泳社 229-235 頁
- 菅原祥夫 2007 「福島県中通地方中部」『東北・北海道におけるモノ・人・文化交流の研究』  
研究代表者 辻秀人 44-72 頁
- 杉浦重信 1990 「北海道における黒曜石の交易について」『古代文化』古代学協会 42-10  
3-13 頁
- 鈴木公雄 1964 「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21 塚田光  
1-3 頁
- 鈴木公雄 1979 「縄文時代論」『日本考古学を学ぶ』3 有斐閣 179-202 頁
- 鈴木 信 1994 「威信経済としてのメカジキ漁」『考古学と信仰』同志社大学考古学研究室  
333~348 頁
- 鈴木 信 1998 「後北 C<sub>2</sub>・D 式の分類案」『ユカンボシ C15 遺跡(1)』  
北海道埋蔵文化財センター 332-335 頁
- 鈴木 信 1999 「北大式期以降の墓制について」『海峡と北の考古学』日本考古学協会  
255-286 頁
- 鈴木 信 2003a 「道央部における続縄文土器の編年」『ユカンボシ C15 遺跡(6)』  
北海道埋蔵文化財センター 410-452 頁
- 鈴木 信 2003b 「続縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39  
北海道考古学会 29-47 頁
- 鈴木 信 2003c 「擦文～アイヌ文化期の準構造船と渡海交易」『考古学に学ぶ(II)』  
同志社大学考古学研究室 709-720 頁
- 鈴木 信 2004a 「I-A 北大式土器の型式論的处理に関する問題」『蝦夷からアイヌへ』  
北海道大学総合博物館 18-21 頁
- 鈴木 信 2004b 「古代北日本の交易システム」『アイヌ文化の成立』  
宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会 65-97 頁
- 鈴木 信 2004c 「II-E アイヌ文化の開始と東北北部」『蝦夷からアイヌへ』  
北海道大学総合博物館 73 頁
- 鈴木 信 2005a 「北・東日本の出土刀にみる湾刀の起源」『考古学ジャーナル』532

- ニューサイエンス社 10-14 頁
- 鈴木 信 2005b「古墳時代並行期の北海道系墓制」『北方の境界接触世界』  
七世紀研究会 47-62 頁
- 鈴木 信 2007a「アイヌ文化の成立過程」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館  
352-390 頁
- 鈴木 信 2007b「仔熊飼育型熊送りの成立とその背景」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』  
同志社大学考古学研究室 651-661 頁
- 鈴木 信 2008「続縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『続縄文文化とは何か』  
北海道考古学会 11-19 頁
- 鈴木 信 2009a「続縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学』1 同成社 129-147 頁
- 鈴木 信 2009b「続縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』  
185 国立歴史民俗博物館 401-440 頁
- 鈴木 信 2010「続縄文期における階層差とは」『北海道考古学』46 北海道考古学会  
23-42 頁
- 鈴木 信 2011a「恵山式の終末と後北式のその後」『北海道考古学』47 北海道考古学会  
51-69 頁
- 鈴木 信 2011b「古墳時代併行期の北方文化、北海道」『講座日本の考古学』7 青木書店  
726-758 頁
- 鈴木 信 2011c「擦文文化と交易」『古代中世の蝦夷世界』高志書院 91-120 頁
- 鈴木 信 2011d「アイヌ文化形成の背景」『アイヌ史を問いなおす』勉誠出版 31-43 頁
- 鈴木 信 2013「北海道における事例」『舟と水上交通』石川県埋蔵文化財センター  
101-108 頁
- 鈴木 信 2014a「VI群 ab 類土器について」『千歳市 梅川 4 遺跡(3)』  
北海道埋蔵文化財センター 280-281 頁
- 鈴木 信 2014b「遺跡の環境」『千歳市 梅川 4 遺跡(3)』  
北海道埋蔵文化財センター 9-12 頁
- 鈴木 信 2014c「幌内 D 遺跡におけるVI群 cd 類の施文順序について」『長沼町 幌内 A 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 74-76 頁
- 鈴木 信 2014d「成果と問題点 遺物について」『長沼町 幌内 A 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 73-74 頁
- 鈴木 信 2014e「土器穿孔について」『長沼町 幌内 D 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 309-315 頁
- 鈴木 信 2015「続縄文文化における生業と行動様式」『森浩一先生に学ぶ』  
同志社大学考古学研究室 271-280 頁
- 鈴木 信 2016a「円形・刺突文土器の沈線文 4~8 について」  
『千歳市キウス 3 遺跡・キウス 11 遺跡』北海道埋蔵文化財センター 213-214 頁
- 鈴木 信 2016b「補修孔について」  
『千歳市キウス 3 遺跡・キウス 11 遺跡』北海道埋蔵文化財センター 113-117 頁
- 鈴木 信 2016c「8 世紀、蝦夷時代併行期の北海道」『考古学ジャーナル』688  
ニューサイエンス社 20-24 頁



- 鈴木 信 2018a「VI群 d 類土器について」『千歳市トブシナイ 2 遺跡・イカベツ 2 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 406-407 頁
- 鈴木 信 2018b「擦文文化にある片口・注口」『実証の考古学』同志社大学考古学研究室  
731-743 頁
- 鈴木 信 2018c「江別太式・後北 A 式の編年」『北海道考古学』54 北海道考古学会  
55-74 頁
- 鈴木 信 2019「帯縄文の発生と拡散」『北海道考古学』55 北海道考古学会 39-58 頁
- 鈴木 信、仙庭伸久、豊田宏良 2007「北海道」『東北・北海道におけるモノ・人・文化交流の研究』  
研究代表者 辻秀人 304-339 頁
- 鈴木三男 2016『クリと縄文人』同成社 1-155 頁
- 鈴木隆介 1998『建設技術者のための地形図読図入門』2 古今書院 p201-554
- スニース、ソーカル/西田英郎、佐藤嗣二 訳 1994『数理分類学』内田老鶴圃 1-689 頁
- 関 幸 2011「分子レベル安定炭素・水素同位体比の古気候研究への適応」  
『Researches in Organic Geochemistry』27 日本有機地球科学会 13-21 頁

### 【せ】

- 瀬川拓郎 1983「縄文後期～続縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』19 北海道考古学会  
37-49 頁
- 瀬川拓郎 1998「干鮭と丸木舟」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会 501-552 頁
- 瀬川拓郎 2002「テシ・ウライとは何か」『貝塚』58 物質文化研究会 1-10 頁
- 瀬川拓郎 2005「上川アイヌの集落と生業の概要」『アイヌ・エコシステムの考古学』  
北海道出版企画センター113-123 頁
- 瀬川拓郎 2009a「続縄文文化ー2 墓と階層」『弥生時代の考古学』6 同成社 189-203 頁
- 瀬川拓郎 2009b「縄文の祭りを継ぐ」『東北学』19 東北芸術工科大学東北文化研究センター  
35-49 頁
- 瀬棚町教育委員会 1983『瀬棚町南川』同教育委員会
- 全国豊かな海づくり推進協会 2006『主要対象生物の発育段階の生態的知見の収集整理』  
1-184 頁
- 仙庭伸久 1998「石狩低地帯における石器製作の下限とその形態」『考古学ジャーナル』433  
ニューサイエンス社 2-8 頁
- 仙庭伸久 1995「5 章総括 2-2 土器群について」『H317 遺跡』札幌市教育委員会

### 【た】

- 大丸裕武 1989「完新世における豊平扇状地とその下流氾濫原の形成過程」  
『地理学評論 62-8』日本地理学会 589-603 頁
- ダイヤモンド・ジャレド/倉骨彰 訳 2000『銃・病原菌・鉄』上 草思社 133-261 頁
- 高倉 純 2005「K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点から出土した竪穴住居の検討」  
『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ』  
北海道大学, 108~115
- 高倉 純 2006「石狩低地帯北部の続縄文時代石器群」『ムラと地域の考古学』  
同成社, 147-171 頁
- 高倉 純 2009「北海道東部の続縄文時代石器群」『北方人文研』2 北海道大学 23-41 頁

- 高瀬克範 1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古』34  
北海道考古学会 21-41 頁
- 高瀬克範 2004a『本州島北部の弥生社会誌』六一書房 1-404 頁
- 高瀬克範 2004b「非文明」の作法」『日本考古学』18 日本考古学協会 149-157 頁
- 高瀬克範 2006「東北日本先史時代における栽培作物利用の変遷と特質」  
『平成 15～17 年度科学研究費補助金研究成果報告書』1-122 頁
- 高瀬克範 2010「続縄文文化と縄文文化」『縄文時代の考古学』1 同成社 167-177 頁
- 高瀬克範 2014「続縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』185  
国立歴史民俗博物館 15-59 頁
- 高瀬克範、福田正宏 2001「入舟遺跡出土の土器について」『余市水産博物館研究報告』4  
余市水産博物館 15-59 頁
- 高橋 理 1991「続縄文時代の貝塚」『考古学ジャーナル』336 ニューサイエンス社 2-8 頁
- 高橋誠明 1999「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5  
東国土器研究会 1-20 頁
- 高橋正勝 1984「北海道中央部の続縄文時代」『北海道の研究』1 清文堂 355-384 頁
- 高橋正勝 2003「江別文化の成立と発展」『北海道の古代』2 北海道新聞 30-49 頁
- 高橋美鈴 2015「続縄文時代におけるガラス小玉の材質的特徴と変遷」『北海道考古』51  
北海道考古学会 37-56 頁
- 高橋龍三郎 2001「村落と社会の考古学」『現代の考古学』6 朝倉書店 1-114 頁
- 滝沢規朗 2014「続縄文土器と在土器の併行関係」『古墳と続縄文文化』高志書院 79-98 頁
- 滝沢規朗、野田豊文 2005「椋 C 遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』  
新潟県考古学会高志書院 456-457 頁
- 滝谷美香、萩原法子 1997「南西北海道横津岳における最終氷期以降の植生変遷」  
『第四紀究』36-4 第四紀研究会 217-234 頁
- 竹田輝雄 1963「V 総括」『発足岩陰遺跡』小樽市博物館 18-22 頁
- 竹田輝雄 1970「V-1-(1)土器」『天内山』余市町教育委員会 29-37 頁
- 田才雅彦 1983「北大式土器」『北奥古代文化』14 北奥古代文化研究会 20-29 頁
- 伊達市教育委員会 2003『図録 有珠モシリ遺跡』同教育委員会 1-68 頁
- 田辺 晋、石原与四郎 2013「東京低地と中川低地における沖積層最上部陸成層の発達様式」  
『地質学雑誌』119-5 日本地質学会 350-367 頁
- 田辺 晋ほか 2016「利根川低地における〈弥生の小海退〉の検証」『地質学雑誌』122-4  
日本地質学会 135-153 頁
- ダニエル・グリーン、レンフリーユ・コリン/富井 眞 訳 2001『先史の概念』京都大学  
1-304 頁
- 谷 元旦 1799『蝦夷風俗図式 蝦夷器具図式』足立美術復刻 (1991)
- 谷 元旦 製作年不詳「蝦夷にて渡海船の図」『蝦夷紀行 附図』  
函館市中央図書館デジタル資料館で閲覧可能:資料番号 1810669737  
// archives.c.fun.ac.jp/fronts/index/cultural Properties  
(最終閲覧日 2019 年 11 月 19 日)
- 谷村好洋 1981「日本海の後期第四紀珪藻と古海況」『第四紀究』20-3 第四紀研究会

231-242 頁

谷村好洋 2014「海洋環境の指標としての珪藻化石」『Diatom』30 日本珪藻学会 41-56 頁  
種市幸生 2004「骨角器」『考古資料大観』11 小学館 317-327 頁

### 【ち】

千葉英一 1990「北海道木古内町新道遺跡出土の「石包丁」形石器」『考古学古代史論攷』  
伊東信雄先生追悼論文集刊行会 195-203 頁

千歳市教育委員会 1979「C 地区」『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』  
同教育委員会

千歳市教育委員会 2004『トメト3遺跡における考古学的調査』同教育委員会

知里真志保 1976「分類アイヌ語辞典—植物・動物編」『知里真志保著作集 別巻 I』平凡社  
1-322 頁

千代 肇 1956「渡島半島の晩期縄文文化ならびに以降の問題点」『先史時代』4  
先史学同好会 12-21 頁

千代 肇 1984『続縄文文化』ニューサイエンス社 1-94 頁

千代 肇 1984『続縄文時代の生活様式』ニューサイエンス社 1-123 頁

千代 肇 1988「続縄文文化の石器」『考古学ジャーナル』287 ニューサイエンス社 21-28 頁

千代 肇ほか 1954「北海道茅部郡森町尾白内貝塚について」市立函館博物館 24 頁

### 【つ】

塚本浩司 2007「石狩低地帯における擦文文化の成立過程について」『古代蝦夷からアイヌへ』  
吉川弘文館 167-189 頁

辻誠一郎 2009「弥生成立期の植生と人工改変」『弥生時代の考古学』2 同成社 34-46 頁

辻 秀人 1994「東北南部にける古墳出現期の土器編年 その1」『東北学院大学論集』26  
同大学 105-140 頁

辻 秀人 1995「東北南部にける古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集』27  
同大学 39-88 頁

椿坂恭代 2004「K514 遺跡から出土した炭化種子」『K514 遺跡』札幌市教育委員会  
172-182 頁

椿坂恭代 2012「C544 遺跡から出土した炭化種子について」『C544 遺跡』札幌市教育委員会  
228-238 頁

椿坂恭代 2013「フローテーション作業を通してわかってきたこと」  
『先史時代の植物利用戦略』北海道考古学会 9-16 頁

角田文衛 1974「ヨーロッパ考古学界の新動向」『古代文化』26-11 古代学協会 52-59 頁

### 【て】

デネル・ロビン/先史談話会 訳 1995『経済考古学』同成社 189-137 頁

### 【と】

東京大学 1981『香深井遺跡（下）』同大学

常呂町教育委員会 1996、2002・2004・2005、2007『常呂河口遺跡(1) (3~5) (7)』同教育委員会

苫小牧市教育委員会 1992『静川 37 遺跡』同教育委員会

苫小牧市教育委員会 1984『タブコブ』同教育委員会

苫小牧市教育委員会 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IX-静川 22 遺跡』同教育委員会

土肥研晶 2018「聖山式とタンネトウシ式」『亀ヶ岡文化論の再構築』雄山閣 65-70 頁  
富山県文化振興財団 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』同財団  
鳥畑壽夫 1957「続縄文文化の研究史とその意義」『若木考古』43 国学院考古学会 1-3 頁

### 【な】

中川 毅 2017『人類と気候の 10 万年史』講談社 1-218 頁  
中込 淳 1958「太平洋北西部におけるメカジキの漁況と体長の周年変化及び分布と回遊について」『日本水産学会誌』24-5 日本水産学会 322-325 頁  
中条町教育委員会 1998『兵衛遺跡・四ッ持遺跡』同教育委員会  
中塚 武 2015「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62-2 考古学研究会 17-29 頁  
中塚 武 2017「セルロース酸素同位体比がもたらす気候変動と年輪年代の新しい研究展開」『日本第四紀学会講演要旨集 2017 年大会』日本第四紀学会 27-28 頁  
中村唯史 2006「山陰中部における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』45-5 日本第四紀学会 407-420 頁  
中村重英 1989「渡島蝦夷の朝貢と交易」『古代の東北』高科書店 83-101 頁  
中山誠二 2017「日本列島における縄文時代の栽培植物」『農耕の起源と拡散』高志書院 27-46 頁  
中山二男 1979『日本の森林植生』築地書館 1-219 頁  
中尾 央 2012「過去の文化を復元すること」『文化系統学への招待』草勁書房 2-16 頁  
長澤和也 1991『北のさかなたち』北日本海洋センター 1-415 頁  
長沼 孝 2000「続縄文文化」『季刊 考古学』70 雄山閣 24-28 頁  
名取武光 1939「北海道の土器」『人類学・先史学講座』10 雄山閣 1-41 頁  
名取武光 1962「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17 北海道大学 107-145 頁  
七飯町教育委員会 1979『聖山』同教育委員会  
七飯町教育委員会 2000『上藤城 3 遺跡』同教育委員会  
七飯町教育委員会 2000『桜町遺跡』同教育委員会

### 【に】

新冠町教育委員会 1975『氷川遺跡』同教育委員会  
西田正規 1986『定住革命』新曜社 1-253 頁  
西田正規 1989『縄文の生態史観』東京大学出版会 1-104 頁  
西田泰民 1984「精製土器と粗製土器」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3 同大学 1-23 頁  
西目町教育委員会・秋田市遺跡保存会 1987『宮崎遺跡』同教育委員会・同保存会  
西本豊弘 1984「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟・漁労」『国立歴史民俗博物館研究報告』4 国立歴史民俗博物館 1-15 頁  
西脇対名夫 1995「文様帯系統論ノート」『北海道考古学』31 北海道考古学会 65-83 頁  
西脇対名夫 2001「魚形石器ノート」『渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会 116-125 頁  
西脇対名夫 2008「文様帯系統論」『総覧縄文土器』アムプロモーション 1156-1161 頁  
西脇対名夫 2010「北海道の考古学・時代区分」『よくわかる考古学』ミネルヴァ書房

新田忠雄、板沢靖男 1980『水産生物適水温図』日本水産資源保護協会 1-63 頁

【ね】

根岸 洋 2003「砂沢式再考」『研究紀要』18 埼玉県埋蔵文化財事業団 1-20 頁

【の】

野村 崇、愛下淳 1962『長沼町の歴史 下』長沼町 52-59 頁

【は】

秦 憶麿 1799 年『蝦夷島奇観』雄峰社復刻(1982)

浜頓別町教委 2018『ブタウス遺跡(Ⅲ)』同教育委員会

羽生淳子 2009「季節的定住と通年定住」『縄文時代の考古学』8 同成社 25-35 頁

波部忠重 1977『二枚貝綱/掘足綱』北隆館 1-372 頁

林 謙作 1981「北海道」『縄文土器大成 4』講談社 137-139 頁

林 謙作 1987「続縄文のひろがり」『季刊考古』19 雄山閣 55-57 頁

林 謙作 1988「1. 土器」『北大構内の遺跡』6 北海道大学 26-35 頁

林 謙作 1990a「縄紋人の生業 (1)」『季刊考古学』35 雄山閣 93-98 頁

林 謙作 1990b「縄紋土器の型式(1)」『季刊考古学』32 雄山閣 85-92 頁

林 謙作 1990c「素山上層式の再検討」『考古学古代史論攷』

伊東信雄先生追悼論文集刊行会 105-162 頁

林 謙作 1992a「縄文人の生業 (3)」『季刊 考古学』38 雄山閣 97-104 頁

林 謙作 1992b「縄文人の領域 (1)」『季刊 考古学』41 雄山閣 89-96 頁

林 謙作 1993a「縄文人の領域 (3)」『季刊 考古学』42 雄山閣 89-96 頁

林 謙作 1993b「I クニのない世界」『みちのく弥生文化』大阪府弥生博物館 66-76 頁

林 謙作 1995「階層とは何だろうか」『展望 考古学』考古学研究会 56-66 頁

林 謙作 1998「縄文社会は階層社会か」『古代史の論点』4 小学館 88-110 頁

【ひ】

平井幸弘 1987「サロマ湖の湖岸・湖底地形と完新世後半のオホーツク海の海水準変動」  
『東北地理』39 東北地理学会 1-15 頁

【ふ】

V.G. チャイルド/近藤義郎 訳 1981『考古学の方法』河出書房新社 1-214 頁

深川市教育委員会 1994・2003『北広里 3 遺跡』同教育委員会

深澤芳樹 2014『日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧』

神奈川大学国際常民文化研究機構 185-233 頁

福井淳一 2003「続縄文時代の釣針」『北方島文化研究』1 北方島文化研究会 15-30 頁

福井淳一 2010「石倉 1 遺跡の動物遺存体」『森町 石倉 1 遺跡(2)』

北海道埋蔵文化財センター 250-251 頁

福澤仁之 1996「稲作の拡大と気候変動」『季刊 考古学』56 雄山閣 49-53 頁

福田正宏 2004「サハリン南部から北海道」

『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』石川日出志 43-48 頁

福田正宏 2007a「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」

『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター 25-71 頁

- 福田正宏 2007b「続縄文期における土器型式の変容と接触の構図」  
『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センター 96-121 頁
- フゴッペ洞窟調査団 1970『フゴッペ洞窟』ニューサイエンス社
- 藤井昭二 1992「海底林と海水準変動」『アーバンクボタ』31 (株)クボタ 60-65 頁
- 藤井理行 1998「最終氷期における気温変動」『第四紀研究』37-3 日本第四紀学会  
181-188 頁
- 藤尾慎一郎 2013『弥生文化像の新構築』吉川弘文館 1-275 頁
- 藤本 強 1966「オホーツク式土器について」『考古学雑誌』51-4 日本考古学協会 28-44 頁
- 藤本 強 1982「続縄文文化概論」『縄文文化の研究』6 雄山閣 10-20 頁
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会 1-129 頁
- 藤本 強 2009『日本列島三つの文化』同成社 1-185 頁
- ブラキストン・W・トーマス/近藤唯一 訳 1979『蝦夷地の中の日本』八木書店 1-633 頁
- 古川竜太、中川光弘、古堅千絵 2006「樽前火山先史時代の噴火活動」『月刊 地球』28-5  
302-307 頁

## 【へ】

- ベルウッド・ピーター/長田俊樹・佐藤洋一郎 監訳 2008『農耕起源の人類史』  
京都大学学術出版会 67-152 頁

## 【ほ】

- 星野 昇 2017「北海道におけるブリの来遊状況」『北水試だより』94  
北海道立総合研究機構水産研究本部図書出版委員会 1-3 頁
- 北海道大学 2004『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ』同大学
- 北海道大学 2005『K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ』同大学
- 北海道大学 2011『K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』同大学
- 北埋文 1982『江別市吉井の沢遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 1983・1987『千歳市 ママチ遺跡・(Ⅲ)』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 1999『恵庭市 ユカンボシ E7 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2000～2006、2007a・2008・2013『江別市 対雁 2 遺跡(1)～(8)、(9)・(10)・(11)』  
北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2001『千歳市ウサクマイ N 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2002a『恵庭市 西島松 5 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2002b『根室市穂香堅穴群』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2006a『森町 森川 3 遺跡(2)』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2006b『森町 三次郎川右岸遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2006c『早来町 大町遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2007b『白糠町 上茶路遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2010a『恵庭市 柏木川 4 遺跡(4)』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2010b『恵庭市 西島松 2 遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2011『釧路町 天寧 1 遺跡(2)』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2014a『千歳市 祝梅川小野遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター
- 北埋文 2014b『長沼町 幌内 D 遺跡』北海道埋蔵文化財センター

- 北埋文 2014c 『千歳市 梅川 4 遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2015 『厚真町 朝日遺跡』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2016a 『木古内町 大平遺跡(4)』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2016b 『千歳市キウス 3 遺跡・キウス 11 遺跡』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2017 『木古内町 大平遺跡(3)』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2018a 『千歳市 根志越 5 遺跡』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2018b 『千歳市 トプシナイ 2 遺跡・イカベツ 2 遺跡』北海道埋蔵文化財センター  
 北埋文 2019 『根室市 温根沼 2 遺跡』北海道埋蔵文化財センター  
 道埋文 2002 『奥尻町 青苗砂丘遺跡』北海道立埋蔵文化財センター

### 【ま】

- 松井哲洋 2007 「尋は 5 尺か 6 尺か」『計量史研究』29-1 日本計量史学会 87-96 頁  
 松浦武四郎 1857 『丁巳 東西蝦夷山川取調日誌』下 高倉新一郎校訂、秋葉 實解説  
     北海道図書企画センター1982 復刻 167-276 頁  
 松浦武四郎 1858 『戊午 東西蝦夷山川取調日誌』中 高倉新一郎校訂、秋葉 實解説  
     北海道図書企画センター1985 復刻 415-452 頁  
 松木武彦 2000 「階層」『現代考古学の方法と理論』Ⅱ 同成社 25-30 頁  
 松木武彦 2007 「北の弥生社会」『列島創世記』1 小学館 190-197 頁  
 松下 亘 1963 「いわゆる北大式についての一考察」『北海道地方史研究』46  
     北海道地方史研究 6-12 頁  
 松下 亘 1965 「北海道の土器にみられる突瘤文について」『物質文化』5 物質文化研究会  
     14-28 頁  
 松岡達郎 1981 「先史時代における津軽海峡の渡航について」『物質文化』37  
     物質文化研究会 15-28 頁  
 松島義章 1984 「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集」『神奈川県立博物館研究報告 15  
     神奈川県立博物館 37-109 頁  
 松島義章 1984 「完新世における温暖種が示す対馬海流の脈動」『第四紀研究』49-1  
     日本第四紀学会 1-10 頁  
 松田宏介 2005 「日高地方東部における続縄文期の土器様相」『北海道考古学』41  
     北海道考古学会 1-20 頁  
 松田宏介 2006 「続縄文期における日高地方在地土器群の系譜」『北海道考古学』42  
     北海道考古学会 61-74 頁  
 松田宏介 2007a 「粗製石鏃小考」『北海道考古学』43 北海道考古学会 81-95 頁  
 松田宏介 2007b 「北辺における古墳時代土師器系譜の資料」『宮城考古学』9  
     宮城県考古学会 57-72 頁  
 松田宏介 2008 「古墳時代成立期における日本列島北部の集団様相解明に向けて」『史葉』2  
     加藤建設 35-44 頁  
 松田宏介 2014 「続縄文～擦文期における貝塚・墓・住居の偏在について」  
     『日本考古学協会 2014 年研究発表資料集』伊達市噴火湾文化研究所 28-159 頁  
 松前町 1974 「松前蝦夷日記」『松前町史 資料編第一巻』松前町 389 頁

### 【み】

- 三浦正人 2004「木・繊維製品」『考古資料大観』11 小学館 243-345 頁  
三浦正人 2004「金属製品」『考古資料大観』11 小学館 335-345 頁  
水野清一、小林行雄 1959「続縄文式文化」『図解 考古学辞典』東京創元社 597 頁  
南川遺跡調査団 1976『瀬棚南川遺跡』同調査団  
南川雅男 2001「炭素・窒素同位体により復原した先史日本人の食生態の復原」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』86 国立歴史民俗博物館 333-357 頁  
南川雅男 2011「安定同位体分析による出土土器付着物の食資源解析」  
『K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告』北海道大学 268-271 頁  
三中信宏 1997『生物系統学』東京大学出版会 1-458 頁  
三中信宏 2006『系統樹思考の世界』講談社 1-294 頁  
三中信宏 2009『分類思考の世界』講談社 1-328 頁  
三中信宏 2012「文化系統学と系統樹思」『文化系統学への招待』草勁書房 172-199 頁  
峰山 巖 1970「IV-1 土器」『フゴッペ洞窟』ニューサイエンス社 31-76 頁

### 【む】

- 棟居洋介、高橋 潔 2000「地球温暖化が世界の自然植生に及ぼす影響及びその経済的評価」  
『環境科学会誌』13-3 環境科学会 329-337 頁  
村上貞助 1823『蝦夷生計図説』北海道図書企画センター復刻(1990)

### 【も】

- 森田知忠 1967「北海道の続縄文文化」『古代文化』19-2 古代学協会 39-50 頁  
森田知忠 1987「続縄文文化」『日本考古学論集』9 吉川弘文館 106-125 頁

- 森町教育委員会 2008a『鷲ノ木遺跡』同委員会  
森町教育委員会 2008b『鷲ノ木遺跡』同委員会

### 【や】

- 八雲町教育委員 2004『オクツナイ 2 遺跡』同委員会  
柳沢幸夫 1993「珪藻温度指数 Td 値の特性について」『化石』55 日本古生物学会 1-8 頁  
山崎博信 1967「4 本幸遺跡発掘報告」『上富良野町史』上富良野町 28-65 頁  
山田悟郎、柴内佐知子 1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類」  
『北海道開拓記念館研究紀要』25 北海道開拓記念館 17-30 頁  
山田悟郎、椿坂恭代 2006「北海道から出土したヒエ・アワ・キビ」『極東先史時代の穀物』2  
熊本大学 15-26 頁  
山田悟郎 2013「栽培植物研究の現状」  
『先史時代の植物利用戦略』北海道考古学会 1-8 頁  
山田晃弘 2008「東北地方における古墳時代の黒曜石製石製品」『考古・民俗・歴史学論叢』  
芹沢長介先生追悼論文集刊行会 433-448 頁  
山内清男 1932a「縄紋土器の起源-日本遠古之文化」『ドルメン』1-5 岡書院 85-90 頁  
山内清男 1932b「縄紋式以後-日本遠古之文化」『ドルメン』1-8 岡書院 60-63 頁  
山内清男 1934「新石器時代序説」『世界歴史大系』I 平凡社 359-367 頁  
山内清男 1936a「考古学の正道」『ミネルヴァ』1-6 ミネルヴァ書房 157 頁  
山内清男ほか 1936b「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」『ミネルヴァ』1-7



ミネルヴァ書房 33 頁

- 山内清男 1937「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』6-1 雄山閣 266-278 頁  
山内清男 1964a「縄紋式以後の文化 1. 弥生式文化」『日本原始美術』1 講談社 121-122 頁  
山内清男 1964b「縄紋式以後の文化 2. 北方文化圏」『日本原始美術』1 講談社 123-127 頁  
山内清男 1964c「縄文式土器・総論」『日本原始美術』1 講談社 148-158 頁  
山内清男 1969「新石器時代序説」『先史考古学論文集』11 先史考古学会 228-293 頁  
山内清男 1969「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史』1 学習研究社 86-97 頁  
山下真由美 2012「蝦夷地への派遣」『鳥取県立博物館研究報告』49 鳥取県立博物館  
97-125 頁  
矢野牧夫 1989「忍路土場遺跡から出土した植物遺体」『忍路土場・忍路 5 遺跡』  
北海道埋蔵文化財センター 193-215 頁

【ゆ】

- 由良 勇 1995『北海道の丸木舟』マルヨン印刷 1-308 頁

【よ】

- 余市教育委員会 1971『天内山遺跡』同教育委員会  
余市町教育委員会 2000a『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ』同教育委員会  
余市町教育委員会 2000b『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』同教育委員会  
余市町教育委員会 2000c『大川遺跡における考古学的調査Ⅲ』同教育委員会  
余市町教育委員会 2001『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』同教育委員会  
余市町教育委員会 2001「迂回路地点・服部地点・道道地点」『大川遺跡』同教育委員会  
余市町教育委員会 2002「迂回路地点・道道地点」『大川遺跡』同教育委員会  
余市町教育委員会 2004「迂回路地点・道道地点」『大川遺跡』同教育委員会  
吉崎昌一 1965「縄文文化の発展と地域性 北海道」『日本の考古学』Ⅱ河出書房 30-63 頁  
吉崎昌一 1979「北辺」『考古学ゼミナール』山川出版 178-181 頁  
吉崎昌一 1984「北海道における地域性」『岩波講座日本考古学』5 岩波書店 309-331 頁  
吉崎昌一 1997「縄文時代の栽培植物」『第四紀研究』36-5 日本第四紀学会 343-346 頁  
吉崎昌一、椿坂恭代 2004「北海道勇払郡厚幌 1 遺跡の植物種子」『厚幌 1 遺跡』  
厚真町教育委員会 241-256 頁  
米田穰ほか 2011「同位体から見た日本列島の食生態の変遷」『環境史をとらえる技法』6  
文一総合出版 85-103 頁

【り】

- 利尻町教育委員会 1987『亦稚貝塚』同教育委員会

【れ】

- 礼文町教育委員会 1997『香深井 5 遺跡発掘調査報告書』同教育委員会  
レンフリーユ・コリン/大貫良夫 訳 1979『文明の誕生』岩波書店 1-345 頁  
レンフリーユ・コリン/橋本楨矩 訳 1993『ことばの考古学』青土社 1-419 頁  
レンフリーユ・コリン、バーン・ポール/池田 裕ほか 訳 2007『考古学』東洋書林 1-666 頁

【わ】

- 渡辺 仁 1952「沙流アイヌにおける天然資源の利用」『民族学研究』16 民族学協会  
255-266 頁

渡辺 仁 1990 『縄文式階層社会』 六興出版 1-264 頁  
渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』 雄山閣 1-248 頁  
稚内市教育委員会 1992 『声聞大曲遺跡』 同教育委員会

### 【外国語原典】

Childe, V.G. 1936 *Man makes Himself*. London: Watts  
Childe, V.G. 1925 *The Dawn of European Civilisation*. London: Kegan, Trench, Trubner  
Childe, V.G. 1956 *Piecing Together the Past* London: Routledge & Kegan Paul PLC  
Clarke, D 1978 *Analytical Archaeology* second edition. London: Methuen  
Hahn Eduard. 1909 *Die Entstehung der Pflug Kultur*.  
Heidelberg: Carl Winter Universitätsbuchhandlung  
Kevin, Gibbs et al. 2017 Exploring the emergence of an 'Aquatic' Neolithic in Russian Far East.  
*Antiquity* 91 :1484-1500  
Lewis Binford 1964 A consideration of archeological research design,  
*American antiquity* 29:425-441  
Lubbock John 1865 *Pre-historic Times*. London: Williams and Norgate  
Minze Stuiver et al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 2400-0 calBP.  
*Radiocarbon* 40:1041-1083  
Minze Stuiver and Paul Quay 1981 A 1600 year long record of solar change derived from  
atmospheric <sup>14</sup>C levels. *Solar Physics* 74:479-481  
P.J. Reimer et al. 2009 INTCAL09 and Marine09 Radiocarbon age calibration curves,  
0 -50,000 calBP. *Radiocarbon* 51:1111-1150  
Sokal, R.R. and Sneath, P.H.A. 1963 *Principles numerical taxonomy*. San Francisco: W.H. Freeman  
Sneath, P.H.A. and Sokal, R.R. 1973 *Numerical taxonomy*. San Francisco: W.H. Freeman

訂正表

章	頁	行	誤	正																			
I	5	表 I-1	<table border="1"> <tr> <td>田舎館2・3</td> <td rowspan="5">縄文中葉</td> <td>南川Ⅲ</td> </tr> <tr> <td>念仏間式</td> <td>南川Ⅳ</td> </tr> <tr> <td>家/前式/(九艘泊)</td> <td rowspan="3">聖山KⅡ群</td> </tr> <tr> <td>(小牧野・鳥間)</td> </tr> <tr> <td>赤穴式</td> </tr> </table>	田舎館2・3	縄文中葉	南川Ⅲ	念仏間式	南川Ⅳ	家/前式/(九艘泊)	聖山KⅡ群	(小牧野・鳥間)	赤穴式	<table border="1"> <tr> <td>田舎館2・3</td> <td rowspan="5">縄文中葉</td> <td>南川Ⅲ</td> </tr> <tr> <td>念仏間式</td> <td>南川Ⅳ</td> </tr> <tr> <td>家/前式/(千歳13)</td> <td>南川Ⅳ/聖山KⅡ群</td> </tr> <tr> <td>(鳥間)</td> <td rowspan="2">聖山KⅡ群</td> </tr> <tr> <td>赤穴式</td> </tr> </table>	田舎館2・3	縄文中葉	南川Ⅲ	念仏間式	南川Ⅳ	家/前式/(千歳13)	南川Ⅳ/聖山KⅡ群	(鳥間)	聖山KⅡ群	赤穴式
田舎館2・3	縄文中葉	南川Ⅲ																					
念仏間式		南川Ⅳ																					
家/前式/(九艘泊)		聖山KⅡ群																					
(小牧野・鳥間)																							
赤穴式																							
田舎館2・3	縄文中葉	南川Ⅲ																					
念仏間式		南川Ⅳ																					
家/前式/(千歳13)		南川Ⅳ/聖山KⅡ群																					
(鳥間)		聖山KⅡ群																					
赤穴式																							
III	18, 20, 21, 22, 25, 25, 29, 29, 29, 29, 29, 29, 30, 34	40, 28, 9, 18, 3, 16, 13, 16, 18, 20, 24, 28, 35, 21	<p>期間幅を移して、 表層混合層の直下にある季節躍層(表層混合層の厚さ=水深10~20m) 狭い範囲での確立 波形 平安の合計値 平安の合計値 3500年以降 3000年付近 2000年付近 1000年付近 1500年付近 1000年付近 起因すると 長期(=一定傾向の継続)である場合</p>	<p>期間幅を示して、 表層混合層(水深10~21m、厚さ=11m)の直下にある季節躍層 狭い範囲であること 波 平安時代の長さの合計値 平安時代の長さの合計値 3500年前以降 2500年前付近 2000年前付近 1000年前付近 1500年前付近 1000年前付近 起因すると 一定傾向で長期に継続した場合</p>																			
IV	40, 40, 40, 44, 44	下から33, 下から30, 下から5, 下から3, 16, 39	<p>(6項参照) (6項参照) 遺物の属性には、ひとつの系統内において、 内在されている 単相部分 留保すべき仮説</p>	<p>(5項参照) (5項参照) ひとつの系統内において、遺物の属性は、 共存する 単相部分 但し書き付の仮説</p>																			
V	51, 52, 53, 53, 54, 54, 54, 55, 56, 56, 58, 58, 69, 76, 82, 87, 88, 89, 94, 95, 95	6, 11, 1・10, 下から2・3, 5, 13, 15, 10, 4, 15, 2, 8, 7, 3, 9, 31, 1, 17, 下から5, 1	<p>(石狩川堆積物には含まれる: 東北東→西南西 TK2-76 TK2-76 遺物の時期 遺物の時期 走行の区間 走行の区間 土器型式の分布により (5節参照)、(5節参照) 江別太2式 縦走・横走 区画文沈線DまたはC形刺突 2節2項 後北C<sub>2</sub>式後個体 神田2016 脱後北C<sub>2</sub>・D式 北大Ⅲ・古<sub>2</sub> 北大Ⅲ・古(円刺群V期) (1例のみV期)</p>	<p>(石炭は石狩川堆積物には含まれる: 東南東→西北西 TK2-72 TK2-74 遺物の型式 遺物の型式 走行帯 走行帯 走行を基線とする土器型式の分布により (4節参照)、(4節参照) 江別太1新~2式 縦走または横走 区画文沈線やDまたはC形刺突 IV章2節8項 後北C<sub>2</sub>式個体 神田2016 後北C<sub>2</sub>・D式的 北大Ⅲ・中<sub>1</sub> 北大Ⅲ・古(円刺群IV~V期) (1例のみIV~V期)</p>																			
VI	110, 116, 116, 116, 122, 147, 147, 149	8, 31, 3, 9, 16, 8, 10, 下から17, 下から23, 26	<p>上記 所謂北大)3系統。 (表V-3、図V-16参照) 「帯縄文・横走RL+縦走RL」 (表V-3) 突起すべき特徴 III章4節 他律的な属性転移 「文化」同化&lt;「文化」異化&lt;「文化」交代」</p>	<p>再生程度の背景について 所謂北大)の4系統。 (表V-2の続き、図V-14参照) 「帯縄文横走RL+帯縄文縦走RL」 (表V-2の続き) <b>削除する</b> II章3節 属性転移 属性の变量・持続期間「文化」同化&lt;「文化」異化&lt;「文化」交代」</p>																			
VII	151, 155, 155, 155, 160, 162, 163, 164, 164, 165, 165	下から23, 5, 6, 12, 14, 15, 6, 10, 8, 8, 15, 18, 3, 13, 25, 40, 26, 11	<p>条件となる 設置個数の関係、 という大きさは C字状の焼土平面形、 「煮る」は 遺存体 近世・松前地 高瀬は狩猟に 左図のサケ・マス類の領域 Dは対応する現象はない Cの急冷期は 「変則回帰型」と仮称する。</p>	<p>介入する関係 設置個数の関係は、 は <b>削除する</b> 土器容積と火力から「煮る」は エゾクロアワビの遺存体 ササ属は近世・松前地 高瀬は、人口増加に際して狩猟に 左図のA型に隣接するサケ・マス類の領域 Dには道央で極僅かに大型化がみられる C・Dの急冷期は 「変則回帰型」と呼び換える。</p>																			
VIII	169, 177, 178, 179, 179, 179, 180, 182, 182, 185, 185, 186, 186, 191, 194	9, 3, 25, 11, 33, 38, 8, 15, 18, 3, 13, 25, 40, 26, 11	<p>品の移入がある。 アヨロ3ab式期 石材の選択を示すことから (古墳時代前期) 曲率は大きく 曲率がなく 「前形」 右端 推定するには 鉄製品のみで構成される 生産 増分である。 より水上交通 1.35倍 専ら海路</p>	<p>品の移入が始まる。 アヨロ3ab式期で、 選択結果を示すので道央 (弥生後期末~古墳前期) 曲率が大きくかつ個々に <b>削除する</b> 「全形」 ③ 推定するには「鉄錐と類似した機能部の断面と回転(=③)」がない 鉄製品は、 生業 増分で、太平洋廻りが下回る。 機動性の高い水上交通 約1.35倍 日本海側では専ら海路</p>																			
IX	208	下から12	副葬量偏在度	副葬量偏差例数																			
X	224, 224, 228, 228, 231	15, 23, 1, 8, 7	<p>形式に 深鉢 普及率は 副葬量偏在度 5章6節3項</p>	<p><b>削除する</b> 小型以上の深鉢 <b>削除する</b> 副葬量偏差例数 V章6節3項</p>																			